

東方masquerade

リョウタロス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダーの能力を手に入れ幻想入りした青年。彼は幻想郷で何を思いどう過ごすのか。

※東方のオリキャラを入れたオリジナルストーリーです

二次設定が含まれています

キャラ崩壊やネタが嫌いな人はバックしてください

感想や訂正は書いていただければ嬉しいです。

※この作品はエブリスタで書いていた作品です

※この作品は完結しました、ただいま外伝を連載中なのでよろしければそちらもどうぞ

目次

第一章 新しい始まり

第一幕 プロローグ | 1

第二幕 博麗神社 | 5

第三幕 初弾幕ごっこ | 13

キャラ紹介 | 20

第二章 幻想郷に忍び寄る影

第四幕 人里 | 28

第五幕 香霖堂 | 40

第六幕 永遠亭 | 46

第七幕 紅魔館 | 59

第八幕 初仕事 | 78

第⑨幕 紅魔館 Part 2 | 100

第十幕 宴 | 112

第十一幕 ダンス大会 | 126

第十二幕 ダンスバトル | 145

第十三幕 勧誘 | 155

第十四幕 新人 | 172

新キャラ紹介 | 200

第十五幕 覚悟 | 207

第十六幕 突然の訪問 | 229

第十七幕 悪夢 | 251

第十八幕 休日 | 260

第三章 破壊と救出

第十九幕 狂気 | 272

第二十幕 最悪の再開 | 282

第二十一幕	大戦	—	290	番外幕	初めてのクロス	—	485
第二十二幕	逆転	—	312	第三十二幕	分かれ道	くその1	く
第二十三幕	アンダーワールド	—	322	第三十三幕	分かれ道	くその2	く
第二十四幕	ボス	—	340	第三十四幕	分かれ道	くその3	く
第二十五幕	黒いカブト	—	349	第三十五幕	分かれ道	くその4	く
第二十六幕	思わぬ事故	—	366	582	第三十六幕	装甲列車	—
第二十七幕	巨大な敵	—	391	第三十七幕	Z支部突入	—	630
第二十八幕	発見	—	410	第三十八幕	V S イブシロン	—	638
最終章	最終決戦	—	438	番外幕 P a r t 2	誤解と異世界と闘	—	612
第二十九幕	止まらない狂気	—	455				
第三十幕	多元宇宙迷宮	—	474				
第三十一幕	Mとの決着	—	485				

第三十九幕	V S G	676	最終幕	エピローグ	832
第四十幕	助っ人	701	番外幕	その後の日常	837
第四十一幕	助っ人活躍	722	番外幕その2	その後の日常	
第四十二幕	助っ人活躍くその二		722	番外幕その3	く博麗神社
第四十三幕	神喰狼の食事	757	番外幕その4	く妖怪の山	861
第四十四幕	魔術師の仮面ライダー	766	番外幕その5	く迷いの竹林	867
第四十五幕	無限の希望		781	番外幕	
第四十六幕	勝利の宴	796	交差幕	運命の切り札な半人半霊	892
第四十七幕	結婚式	817			

第一章 新しい始まり

第一幕 プロローグ

俺の名前は「海堂 紀斗」(かいどう のりと) マッサージ師を目指している平凡な大学生だ。

何でマッサージ師かというは何故か昔から見ただけで相手のツボの場所と効力がかかるからだ。

だからこれをいかしてマッサージ師を目指してるんだが筆記は駄目ダメで中々上手く進めない。

そこら辺のストレスは大体パソコンで東方の動画や他にもアニメ、仮面ライダーなどでつぶしているがハッキリ言って仮面ライダー以外はオタクになりきれないエセオタである。

仮面ライダーだけはこちらも何故か昔から観ただけで怪人やアイテム、バイクのことまでずっと覚えている。

まあ、仮面ライダーは元から好きなので別に問題は無いが。

一人暮りで友人関係はただの友達程度が数人いるだけ。

高校時代はアメフトをやっていたおかげで筋力は人並み以上にはある。

「あーあ、またレポート提出しなきゃなんねーよ。面倒くせー」

その時、俺は大学から帰って来て部屋でゴロゴロしていた。

ピンポーン

「ん？誰だこんな時間に」

不審に思いながら玄関にいくと…

「あら、こんばんは」

「ゆー！ゆゆゆゆかりん?!」

え？本物？偽物？WHY?どうして？

アバババババ…フリーズ中……

しばらくお待ちください

「早く起きなさい」

バシッ

「ブッ!」

扇子で殴られた

「えーと、でゆかりんは本物で、俺を幻想郷に連れて行くこうとしてるってことですか？」

「ええ、そうよ♪」

今ゆかりんはスキマに座りながら話している

流石にこれを見せられたら否定のしようがない

絶対今の科学じゃ再現不可能な代物だからドツキリの可能性もないだろうし

「しかし何で俺のところ？」

「それは、あなたが能力に目覚めかけているからよ」

「マジで？」

「マジよ」

ええええええええええ!? やつぱり!? やつぱりあるの!? 嬉しいけど！嬉しいけど信じられない!?

「じゃあそういう訳だからさっさと準備しなさい」

「でもいきなり言われても」

「いいからさっさとしなさい！」

「はいい！」

まず銀行から自分の講座にあつた約200万を出して来た。

「えーと、あと家の貯金5万に着替え、食糧、ノートパソコン、ガンバライドと…こんなもんか」

「準備は出来たかしら？」

「ああ、ダチや家族の俺に関しての記憶や情報は全部消してくれるんだよな？」

「ええ、そうよ」

「よし！じゃあよろしくお願いします。」

ヒュッ

俺は足下の床の感覚が無くなったと思っただら俺の足元にスキマが現れており

俺はそのままスキマに落ちていった

「ウソダ、ドンドコドーン!!」

そして落ちていく中で一言だけ聞こえた

「ようこそ、幻想郷へ。」

第二幕 博麗神社

クパア

「ZZZZZZ」

ドシヤツ

「ツゝ腰が…」

目の前を見ると長い階段があり、その少し上に鳥居が見えた

「目の前に長い階段そのうえに鳥居ってことはここは博麗神社の前ってことか」
「さて、筋トレ代りに走っていくか！」

10分後

「や、やつと着いた。ハア、ハア」

この荷物でこの距離を走るんじゃないかった！

3分後

「ふう、よしお参りするか」

そう言つて俺は賽銭箱の前に立った

そして紀斗がだしたのは何と万札!!

「東方ファンとして、俺はこれを使う！」

そう言いながら紀斗は万札を入れた。

バンツ

するといきなり神社の扉が開き、紅と白の特徴的な巫女服を着た紅白脇巫女こと霊夢が現れた

「今お賽銭を入れた音がしたんだけど、つてうそつ！一万円!？」

「(こ)こ(こ)、これあなたが入れてくれたの？」

「あ、ああそうだけど」

「よかつたら上がってく？お茶もだすわよ♪」

「は、はい」

博麗神社内

「あ、ゆかりん」

「あら、紫来てたのね」

博麗神社の居間的なところに来たら紫さんがすでにくつろいでいた

「はい♪あなたは昨日の夜ぶりね、結構スキマの中に入れてたけど大丈夫だった？」

「ああ、スキマの中で途中で寝てましたから別に何の問題もありませんよ」

「「ええ？」」

「よくあんたあんな中で寝れたわね」

「紀斗…恐ろしい子！」

「それより霊夢、俺の能力を調べてくれないか？」

「え、ええ少し待ってて」

「わかったわあんた能力は【ツボを操る程度の能力】と【仮面ライダー？を司る程度の能力】よ」

「マジで？」

「マジよ」

「で、ツボは分かるけどこの仮面ライダーって一体何なの？」

「ああ、仮面ライダーっていうのは…」

青年説明中…

「ふうん、まあ結局その仮面ライダーを司るってことは変身出来るんでしょ？やってみなさいよ」

「でもベルトをどうやって出せばいいんだ？」

「頭の中でイメージしてみたら？」

そして俺はデイクイドライバーを思い浮かべた

すると次の瞬間俺の手にはデイクイドライバーもう片方の手にはデイクイドの変身

用カードが握られていた

「本当にイメージだけで出せた」

「それが変身ベルトなの？」

空気がだった紫さんが聞いてきた

「ああ、これは世界の破壊者とも言われたデイケイドって仮面ライダーのベルトだ。

まあ、だからといってこの世界を破壊する気も破壊の仕方もわからないがな」

「当たり前よ。破壊する気だったらこの一瞬で殺してるわ」

「それじゃ、やってみますか」

俺はデイケイドライバーを腰に巻きカードを突き出してからベルトに挿入した

「変身!!」

『KAMEN RIDE DECADE』

俺はバーコードを模したマゼンタ色の仮面ライダー

仮面ライダーデイケイドになった

「ふーん、そういう風になるのね」

「ほ、本当に変身出来た!」

「でも装備はどうなっているのかしら?」

そう言われライドブツカーの中のカードを見ると、デイケイド以外のカードはま

だシルエットの状態だった

「まだ能力を使いこなせてない証拠ね」

「修行あるのみか。ハア」

そして俺は一度変身をといた

「そういえばまだ弾幕のやり方を教えてなかったわね」

「ああ、そうだ「霊夢」邪魔するぜ」。ん、誰だお前？」

そこへ現れたのは箒を片手にもった白黒の魔女っ子、霧雨 魔理沙だった

「あら、魔理沙いらっしやい

そいつは外来人の紀斗よ。」

「あたしは霧雨 魔理沙、ただの魔法使いだけ。」

「ああ、はじめまして。俺は海堂 紀斗、ただの外来人だ。能力は「ツボを操る程度の能

力」と「仮面ライダーを司る程度の能力」の二つだ」

「仮面ライダー？」

「ああ、仮面ライダーってのは…」

青年説明中…

博麗神社前

「それじゃあまず弾幕をだしてみらんだぜ。感覚的にはグツと出してヒュンツと放つ感

じだぜ」

：まあその感じでやってみるか

イメージ的には光弾をイメージしてと、グツと出す！

ポンッ

「で、出た」

俺の手のひらの上には赤い光弾がフワフワ浮いていた

「お、早いな。じゃあ次はそれを放ってみるんだぜ」

こうヒュンツッて感じだよな

ヒュッ

ドガンッ

「あ」

やべえ！石畳み数枚破壊しちゃった！

恐る恐る霊夢の方を見ると

「後で直しとけ」

顔でそうものかだっていた

「それじゃあ次は数を多くしてみるんだぜ」

「あ、ああ」

そう言われて出してみたら20個くらいの光弾が俺の周りに浮いていた

「お、初めてにしちゃ出来だぜ。それじゃその弾幕を放ってみな」

「ふんっ!」

そう言われ放ってみた弾幕は神社の横の林へ

「あべしっ!?!」

「ん?」

誰かに当たった?

不思議に思いながら林の近くに行つてみるとパラッチで有名な烏天狗がカメラを
持つて口から煙を出しながら歩いてきた

「いや、ネタの気配がしたので博麗神社に来てみたら新しい外来人がいたので、つい写
真を撮るのに夢中で弾幕が来たのに気がつかなかったんですよ。あ、申し遅れました。

私は清く正しくがモットーの射命丸 文と申します。以後、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく。俺の名前は海堂 紀斗今日幻想郷に来たばかりの外来人だ」

「何だ、当たったのは文屋だったのか。だったら別に問題無いな」

「ひどいですね。ま、そんなことより取材をさしてもらつてよろしいでしょうか? 紀

斗さん」

「いや、今弾幕の練習中だから」

「まあ別に出来なくても捏造するだけですけど」

「質悪いな、おい」

「わかった、わかった、取材を受けるよ」

「ではでは…」

少女取材中…

「そういえば、まだこれを渡してなかったわね」

　　そう言いながら霊夢は5枚ほどの白いおふだの様な紙を出してきた

「それってもしかしてスペルカードの素か？」

「ええ、そうよ。これに触れながらイメージして自分だけのスペカを作るの」

　　と言われさっそく試してみることに

（うーん、一体どういふのにしようか……よし！決めた！）

　　スペカを見てみると、全主役ライダーのバイクに乗っている姿がシルエットでうつつていた

「出来た。爆走符『ライダーズラン』」

「一体どういう効果何だ？」

「ま、それは後のお楽しみだ。あと4枚も早く作ろつと」

第三幕 初弾幕ごっこ

俺は今、魔理沙と弾幕ごっこすることになった

何でそうなるのか聞いてみたところ

「実戦するのが一番手っ取り早い」

とのことだった

「ハア、何でこうなるのやら」

「ルール説明といくぜ。使っていいスペカはあたしが3枚、あんたは5枚、先に3回あたしが被弾させたらあたしの勝ち、あたしに一回でも被弾させたらあんたの勝ちだ」

「OKだ」

「じゃあ先手は譲ってやるぜ」

「ほえ面かかせてやるよ。だがその前に変身はさしてもらうぜ」

俺はさつきやったようにデイケイドライバーを出しカードを挿入した

「変身!!」

「おー、それが仮面ライダーってやつか」

「別に仮面ライダーはこれだけじゃねえぜ」

「あやー、あれがそうですか。いい記事が書けますねー、これは♪」カシヤツカシヤツカシヤツカシヤツ

「それじゃあいくぜ!!」

俺は練習でやったようにまず20個程の弾幕を出し、5個ずつ時間差で放つてみた

「よっ、ほっ、はっと！どうしたこんなもんか？」

「んなわけねーだろ!!」

『ATTACK RIDE BLAST』

ダダダッ

俺はライドブツカーをガンモードにしてブラストで銃身を分身させながら撃つが軽く除けられてしまう

「そんな攻撃じゃああたしには当たらないぜ。おらっ、星符【メテオニツクシャワー】!!」
星型の弾幕が俺に向けて発射されそれを俺は横に飛んで避けた

「うおっ、危ねえな」

「だったら俺も使つてやる！爆走符【ライダーズラン】！」

「何も起きないぜ？」

「これの使い方はこうだ！一号！二号！V3！ライダーマン！」

すると名前を言った仮面ライダーがそのライダーの専用バイクに乗った姿のシルエットで俺の影から出て来て来て魔理沙に向かつていった

「な、なんだぜこいつら！これでもくらうんだぜ！」

そう言つて魔理沙はシルエット姿のライダー達に弾幕を放つがライダー達は弾幕を無効果しながら突き進んで行く

「クソツ！」

魔理沙は上に逃げ、ライダー達はそのまますすんで行き林の木に当たると木を破壊せずに消えた

「これが俺のスペルカード【ライダーズラン】の効果だ」

「こいつは自分が名前を言ったライダーを専用バイクに乗った姿のシルエットで相手に突進させることができる。しかもそのライダー達に弾幕は効かないが目の前の敵が避けて障害物か味方に当たると霧散するって仕組みだぜ。さーらーに！このスペルカードが解けるのはライダーを言い尽くした時か、自分が別のスペルカードを使った時だけだ!!」

「ま、欠点があるとすれば出したライダーは直進しか出来ないところだな」

「うわあ、卑怯だぜ、そんなの」

「ま、再開しようぜ！X！アマゾン！ストロンガー！スカイライダー！スーパー！」
 「クソツ！なら範囲が広ければ問題無いんだぜ！魔符「スターダストレヴアリエ」！」

ライダー達で消せない分の星の弾幕が俺に降り注いで来た

（クロックアップは出来ない！なら…）

『ATTACK RIDE INVISIBLE』

「き、消えた!？」

（今のうちに…）

この時紀斗は弾幕を避け魔理沙の死角に移動しそこでデイケイドライバーにカードを挿入した

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DECADE』

その音と共に紀斗の正面から魔理沙までエネルギー状のカードが10枚並び紀斗が発射した光弾が巨大化しながら突き進んでいった

「なっ!?!やっつけてくれるぜ恋符「マスタースパーク」!!」

デイメンションブラストとマスタースパークはぶつかり合い拮抗した

そして数秒後

ドオオオン!!

「グツ!？」

「うわっ!？」

ぶつかり合った所が爆発し二人とも吹き飛ばされ紀斗は変身が解けてしまった

「いてて、あー変身は解けちまったし、体も動かねー俺はここでギブアップだ。魔理沙は？」

「あたしはまだまだ出来るけどルールの3枚は使い終わっちゃったから別にいいぜ」

「えーと、あつた回復【メデイカル オン】」

すると紀斗の左手には薄黄緑色の箱が装備された。その中から注射器の様なものを出し自分の胸に刺した

「くっっ！効くな、こりゃ」

そして胸から抜いたらすぐに立ち上がった

「あら、もう大丈夫なの?」

振り向くと霊夢達が既にすぐ近くに立っていた

「ああ、この回復【メデイカル オン】はその名の通り回復用のスペルカードでこうやって使えばある程度、体力は回復するんだ」

「ふーん、そういうええあんた泊まるとこ無いんでしょ?今日は家に泊まる?」

「うおっ!霊夢がアリスみたいなこと言い出したんだぜ!？」

「うるさいわね。別に賽銭箱に1万円入れてくれたからってだけよ」

「1万円?! 紀斗お前賽銭に1万円も出したのか!？」

「あ、ああ」

「よくそんな大金入れたな。正気の沙汰とは思えねーぜ」

「ははは、まあ東方ファンとしてはそのくらい入れてあげたくなるもんだよ。」

「東方?」

「ああ、東方っていうのは（ry

「なるほど、外界ではあたし達のことかそういう手段で伝わっているんだな。」

「あ、私は新聞を作るので帰らしていただきます。それでは!」ビュンツ!!

「で泊まるんでしょ?」

「ああ、よろしく頼むよ」

「それじゃ、あたしもそろそろ帰るぜ。じゃあな」

「私も帰ることにするわ、じゃあね、霊夢に紀斗」

「じゃあ中に入りますよ。そろそろ冷えてきたし」

「ああ、そうだな」

その後、紀斗は飯を手伝い、それを食べ風呂の後先に風呂に入った霊夢のマッサージ

をやらされ布団に入った

「明日は人里に行ってみるか。ふあゝあ、寝よ」

キヤラ紹介

海堂 紀斗（かいどう のりと）

年齢 21 歳

身長 175 cm

能力

『仮面ライダーを司る程度の能力』

『ツボを操る程度の能力』

髪型

黒髪のショート

顔

大人しそうな顔の微イケメン

キレた時は一気に凶暴そうな顔になる

体系

細マツチヨ

今使える仮面ライダーのフォームと装備

※バイクは全て出せる

一号、二号、V3

初期装備のみ

ライダーマン

パワーアーム、ロープアーム、ドリルアームのみ

X、アマゾン、ストロンガー

初期装備のみ

スカイライダー

初期装備のみ

スーパー

スーパーハンド、エレキハンド、レーダーハンドのみ

ZX

十字手裏剣、電磁ナイフ、マイクロチェーンのみ

BLACK

初期装備のみ

B L A C K R X

初期フォームのみ

装備 リボルゲインのみ

シャドームーン

サタンサーベルのみ

シン、Z O、J

初期装備のみ（Jは巨大化も無理）

平成仮面ライダー

クウガ

マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタンの4フォームのみ

アギト

グランド、フレイム、ストームの3フォームのみ

ギルス、G 3、アナザーアギト、G 4、G 3マイルド

初期装備のみ

龍騎系のライダー（オーデインにはまだ変身不可）

初期のカードのみ

ファイズ系のライダー

初期装備のみ

ブレイド系のライダー

J, Q, K以外のカードは使えない

響鬼系のライダー

初期装備のみ

カブト系のライダー

初期装備のみ

電王

ソード、ロッド、アックス、ガンの4フォームのみ

ゼロノス

アルタイル、ベガの2フォームのみ

NEW電王、ガオウ、ネガ電王、G電王、幽鬼（ハイジャック、スカル）

初期装備のみ

キバ

キバ、ガルル、バツシャー、ドツガの4フォームのみ

イクサ

セーブモード、バーストモードのみ

ダークキバ、アーク、レイ、サガ

初期装備のみ

デイクイド

デイクイドだけで使えるカードのみ (K A M E N R I D E系は全滅)

デイエンド

デイクイドとほぼ同じ状態

キバラー

女性ライダーはベルトは出せるが変身出来ない

ダブル

初期の6つのメモリーのみ (しかしまだ相棒と呼べる者がいないので変身不可)

ジョーカー、サイクロン、アクセル、スカル、エターナル

初期装備のみ

(コアは変身不可)

オーズ

5色のメダルが一枚ずつ (タカ、トラ、バツタ、ゴリラ、シャチ)

バース

プロトタイプのみ

アクア、ポセイドン

初期装備のみ

フォーゼ

ベースステイツ、エレキステイツ、ファイヤーステイツのみ（スイッチはステイツを
マグネット、コズミック以外は全て使える）

メテオ、なでしこ

初期装備のみ

ウイザード

フレイム、ハリケーン、ランド、ウォーターの4フォームのみ

（指輪はスペシャル以外は使える）

ビースト、メイジ

初期装備のみ

白い魔法使い、ソーサラー

まだ変身出来ない

カンドロイドやディスクアニマルなどのサポート系のアイテムは大体使える（デンラ
イナーやキャツスルドランなど大き過ぎる物はまだ出せない）（あくまで人より小さい

物のみ）一応セルメダルは何十枚か出せる

持っているスペルカード

爆走符【ライダーズラン】

自分の影から名前を呼んだライダーが専用バイクに乗った姿のシルエツトで出てきて、敵に突進していく。出したライダーは弾幕は効かないが直進しか出来ないので1度避けられたらそのまま障害物か人に当たって霧散してしまう、だが相手の場所が分からなくても呼べば敵のいる方向に向かって進む（多人数の時はロックオンした一人にだけ進んでいく）

回復【メディカル オン】

フォーゼのメディカル スイッチをイメージして作ったスペカ 使い方は大体原作と一緒に 効果は体力の回復、解毒、自然回復力の底上げ

大集合【オールライダーズ】

相手を取り囲むように全てのライダーの分身が現れる（サブライダーも含めて）そして相手に襲いかかるといってしまえばリンチである、しかし分身の1体、1体はパワーは本物と同程度だが耐久力は常人のパンチ一発で消えてしまうほどである、分身達はそれぞれの技は使えず殴る、蹴るや元から持っている装備で攻撃するのみ（ディエンの銃やブレイドの剣など）

進化【ライダーエボリューション】

自分のなっている姿のライダーを5分間だけ最強フォームにすることが出来る【オルライダーズ】と組み合わせると分身達も最強フォームになり耐久力も妖怪のパンチ10発程度なら耐えられるようになる（勇儀などのパンチなら1発で消えてしまう）

神速【クロックアツプ】

魔理沙との弾幕ごっこの後で作ったスペカ、カブト系以外のライダーでもクロックアツプが使えるようになる、制限時間は1分

第二章 幻想郷に忍び寄る影

第四幕 人里

人里から少し離れた林の中

ここに一人の町民と複数の白衣の男達がいた

「こ、これで妖怪共を殺せるんだな？」

「ええ、それを使えば妖怪など雑魚も当然です」

「高い金を払ったんだそれなりの効果がなけりやただじゃおかねーぞ」

「ええ、分かっていますとも。」

「よしっ！やっつてやるぜ！」

『VIOLENCE』

そして町民の男は左手の生体コネクタにメモリーを差し込んだ

「うおおおお！」

男は屈強な筋肉を持ちと左手が鉄球のようになっていたバイオレンス・ドーパントに変身した

「力が、力がみなぎるぜ……。この力であの妖怪共をぶっ殺してやる!!」

その光景を見て白衣の男達はほくそ笑んでいた

(実験は成功、この計画が成功すれば家の支部の株も上がる)

そして男達はその場から去って行った

博麗神社

「それじゃあ、行くよ。一日泊めてくれてありがとうな」

俺は霊夢から人里への行き方を聞き出発しようとしていた

「ええ、またお賽銭入れにいらっしやい」

「今度は一緒にお酒飲もうね」

萃香とは今朝知り合い少し話したら仲良くなった

「じゃあな」

そう言いながら俺は手を振り博麗神社を後にした

その後、博麗神社の階段下でカイザのバイクであるサイドバツシャーを出し、荷物をサイドカーに乗せヘルメット(土がOPでかぶっているやつ)をかぶりサイドバツシャーで走り出した

博麗神社から人里までの林道

サイドバツシャーで走っていたらいきなり近くの林から二足歩行の狼が出てきて道を塞ぐように立ちふさがった

「おい！貴様、ここを通りたければ○「邪魔」ギャフン!？」

邪魔だったのではねたら結構飛んだ後、天然でギャフンって言った奴初めて見た
「ん?」

狼を吹っ飛ばした方向をバイクを止めて見ていると林からルーミアが走って出てきた

「どうやら追いかけているみたいで何故か俺のサイドバッシャーのサイドカーに隠れた」

「おい、いったいどうしたんだ?」

「今弾幕が効かない変な奴に追われているの」

「弾幕が効かない変な奴?」

「うおおお!!何処行きやがった!クソ妖怪がー!」

そんな声が聞こえその方向を向くと

「!？」

バイオレンス・ドーパントが暴れながら林から出てきた

(なんでドーパントが幻想郷に!?!いやまずはルーミアを逃がするのが先か)

「ルーミア、しっかり座席につかまっとけよ」

「? うん、分かった」

「そこにいたか、死ね！妖怪がー！」

バイオレンス・ドーパントが拳の鉄球を振り上げた

「行くぜ！アクセル全開!!」

ブオオオオオ!!

ドゴオン!!

「逃がさん！」

俺はアクセルをかけ全速力でバイオレンス・ドーパントの一撃を避けそのまま距離を開ける

だがバイオレンス・ドーパントはバイオレンス・ボールとなって追いかけて来た

「よしっ！開けた場所に出た！」

俺はそこで横にそれバイオレンス・ドーパントはそこから少し進んでボール状態を解いた

こちらもサイドバツシャーを止め降りると電王ベルトとライダーパスを出した

「さーて、お前がなんでメモリーを持っているのか。とつとと倒して聞かなきゃな」

「ふん、やれるものならやってみろ。このガキが」

「何だ！お前は!?!」

「あ？」

「ん？」

声が出た方を向くとおそらく自警団であろう人が5人くらいいた

どうやら人里のすぐ近くだったらしい、ここから肉眼で普通に見える所に人里があった

「おい、あんたらここは危ないから下がとけ。」

「な、何を言ってるんだ。君一人残して逃げれるか！」

「いいから、いいから」

「ええいゴチャゴチャうるさい！貴様から潰してやる！」

「ヒツ!？」

「まったく、変身」

俺は電王ベルトを巻きライダーパスをセタッチした

『S word form』

「俺 参上!!」

この場合原作ならイマジンがついているのだがイマジンはこの世界にいないので、紀斗本人の人格である。何故プラットフォーム以外になれたかは本人曰く「ノリと気合いでいけた」だそうだ

「それがどうしたあ！」

紀斗はデンガツシヤーをソードモードにし切りかかった

「行くぜ！行くぜ！行くぜえ!!」

紀斗は何度もバイオレンス・ドーパントを斬りつけるがあまり効いていない

「オラオラ、そんなもんかあ！」

「チツ、ならこれだ」

『A x f o r m』

赤かった外装が外れ黄色と斧をイメージした外装が付き電王アックスフォームになった

「俺の強さは泣けるで！」

「いきなり姿が変わりやがった!?!」

そして紀斗はデンガツシヤーをアックスモードに組換え斬りつけていく

「ふんっ！ふんっ！おりやあ!!」

「ぐっ、うあっ、ぐあああ!!」

さっきのソードよりも威力がこもった攻撃をくらいバイオレンス・ドーパントは目に見えてダメージを受けている

「これで決めたる」

そう言い紀斗はパスをセタッチした

『Full Charge』

デンガツシャーを真上になげ自分も飛び上がり空中でデンガツシャーをキャッチしそのまま急降下しながら、バイオレンス・ドーパントを斬った

「ダイナミック チョップ」

ドオオオオン！

ドーパントは爆発し使用者と割れたメモリーが出てきた

「こいつは……」

「ん？知ってるのか、おっさん。」

「ああ、この前妖怪に友人をやられた奴だ。かなり思いつめてたから精神的に危ないとは思ってたが……」

「なるほどね。あ、そういえば」

「ルーミア、大丈夫か？」

俺はサイドバツシャーに駆け寄りまだサイドカーに乗ったままのルーミアに尋ねた

「うん、助けてくれてありがとう！」

「どういたしまして。あ、そうだ」

俺はサイドカーの荷物の中からジャーキーを取り出しルーミアに差し出した

「食うか？」

「食べる!!」

ルーミアは嬉しそうにジャーキーを持って林に帰っていった

「おい、あんた」

「ん？」

「あんた、外人かい？ここら辺じゃ見慣れない顔だし」

「ああ、そうだが」

「人里に用なら慧音さんの所に案内してやろうか？」

「いいのか？」

「ああ、助けてもらったしなんとなくだが悪そうな奴には見えないからな」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

俺はサイドカーから荷物を出し、サイドバツシャーを消した

「あれはお前の能力で出したのか？」

おっさんが驚きながら聞いてくる

質問に答える前におっさんの隣にいた青年が思い出したように声を出した

「あ！そういえば君どつかで見たと思ったら今朝の新聞の！」

「もしかして文々。新聞？」

「ああ、そうだよ」

「何か変なこととか書かれて無いよなあ」

「ハハハ、まあ後で見せるよ」

「よし、着いたな。ようこそ人里へ」

その後、ドーパントに変身していた男を詰所まで一緒に連れていくと今朝の新聞を見してもらえた

「新たな外来人現る！謎の能力、仮面ライダーとは!？」と堂々と一面を飾っていた

「まあ、仮面ライダーについての説明もしてあるから、いちいち説明しなくてよくなったのはいいけど」

ハアと俺はため息をついた

「ハハハ、それじゃあ慧音さんの寺子屋まで案内するよ。着いて来てくれ」

案内されている間も視線がすごかった

（ま、こんなでかい荷物持っててさらに今朝の新聞の一面を飾ったんだから当たり前か）
「着いたぞここが寺子屋だ。この時間なら今は中で授業中だろうから少し外で暇を潰す
といい。それじゃ、私はこれで」

「ああ、ありがとう。また会ったら今度は酒でも飲もうぜ」

「ハハハ、そうだな。楽しみにしてるよ」

そう言って自警団のおっさんは去っていった

3 時間後

俺は外で立ち寝をしながら待っていた

「ん、ふあくあ、いかん暇過ぎて寝ていた」

寺子屋の出入り口を見てみるともう帰る時間なのか子ども達が出てきていた

すると1人の子どもが俺に気付いた

「あー今朝の新聞のにーちゃんだー！」

「本当だー！」変身して！変身して！

あつという間に男の子達が群がってきた

「しようがねえなあ。よし、俺様のかっこいい変身見せてやるからよく見とけ」

そう言って俺は電王ベルトを出し勢いよく腰に巻きつけ、パスをセタッチした

『Sword form』

そして俺は本日2度目の電王ソードフォームに変身した

「俺 参上!!」

ワー！ワー！

「すげー！」「かっこいい！」

やはり男の子達には仮面ライダーは大人気だった

しかし女の子達は盛り上がっているのは一部だけだった
「!そうだ」

俺は自分の能力でカンドロイド、フードロイド、プラモンスター達を出してあげた
「なにこれー」「かわいいー」

どうやら女の子達にもうけているようだ よかった

「悪いな、子ども達と遊んでもらって」

声のした方を向くと青い髪に特徴的な帽子を頭に乘せた上白沢 慧音がいた

「ああ、別に俺は子どもも大好きですから」

「私の名前は上白沢 慧音、君は？」

俺は変身を解きながら言った

「今朝の新聞で一面飾った海堂 紀斗です。よろしく」

「ああ、君が噂の仮面ライダーという奴か。それで私に何か用があるのか？」

「いやー、今 持っている金が外界の金なんですけどこつちのお金と換金したいんですよ。それでその換金出来る場所と行き方を教えてほしいんです」

「なるほど、なら香霖堂に行くといい。今 地図を持ってくる。少し待っていてくれ」

5分後

「待たせたな、これが幻想郷の地図だ。持っていくといい」

「え！いいんですか？」

「ああ、まだ家には何枚かあるからな」

「ありがとうございます。それじゃ皆またな」

「バイバーイ」「また遊んでね」

「気を付けていけよ」

俺は荷物と地図を持って人里を後にした

第五幕 香霖堂

移動はまたもやサイドバツシャーを使ったが特に何も起こらなかったなので省略

「ここが香霖堂か。お邪魔しまーす」

俺が特に何も考えないでドアを開けると

「あーどくんだぜ！紀斗！」

「へ？」

ボン！

「ひでぶっ!?!」

いきなり魔理沙の弾幕を食らい倒れそうになる

「いつてえな！何で室内で弾幕放つてんだよ！」

「いやー、悪い悪いちよつとイライラしてたから香霖堂のドアでも吹き飛ばそうかと思つてたんだが「ちようど俺が入ってきて当たってしまったと」

魔理沙が少しだけ申し訳なきように 謝罪をしてきたので

「わかった、別に良いよ。もう済んだことだし」

「だけどこーりんはナズエ ミティルンデイス！」

何故かこーりんは俺が魔理沙と話してる間じゆうずっと部屋の奥からこちらをずっと見ているのだ

「あはは、何故隠れているかは僕が魔理沙を怒らしてしまったし、君からも怒られそうだからって理由かな」

「まったく何やって魔理沙を怒らせたんだ？」

「実は…さつき魔理沙が来るまで僕は普通に店番をしていたんだ。そしたら魔理沙は来たとなんいきなりこのキノコを食えて明らかに怪しいキノコを差し出してきてきっぱり断ったんだけどしつこくついていキノコを払いのけたらあぁなってしまったんだよ」

「あー、ようするにこういうことか」

←

こーりんいらなくて払いのける

←

魔理沙怒る

「まあ、どっちもどっちだがそのキノコてのはどれだ？」

「これだぜ」

俺は絶句した

何故なら魔理沙の出したキノコは明らかに以前「ト〇コ」に出てきた人面茸だったのだから

(いやいやいや、明らかにおかしいだろ！何でこんな物が実在してるんだ！しかもなんか少し笑ってるし!?怖すぎるわ！)

「いや、確かにこれはやめた方がいいと思うぞ」

「そうかー、しようがねえこいつは霊夢にでもくれてくるぜ」

(霊夢、あれを食べるのか?)

「それじゃな！」

そう言つて魔理沙は去つていった：キノコと共に

「そういえば、まだ自己紹介してなかったね。僕の名前は森近 霖之助。この香霖堂の店主さ」

「俺は海堂 紀斗、今朝の新聞を読んでれば大体わかるぜ」

「ああ、確か仮面ライダー?だったかい」

「ああ、それと今日は外界の金と換金してもらいに来たんだが」

「いいよ、幾らぐらいだい?」

「200万」

「ふー!!」

「コーりんが飲んでいたお茶を勢いよく吹き出した

「あつっ!? 熱いじゃねーか! コーりん! コーりん?」

霖之助は金魚の様に口をパクパクさせ呆然としていた

「おーい。大丈夫かー?」

「ハッ!」

「そ、そそその金額本当かい? だとしたら結構時間はかかるけど」

「あ、ああ別に構わないが」

「じゃあ暇潰しに店の商品でも見ててくれ。今準備してくる」

香霖堂の商品は結構適当に並べられているものが多かった

そしてその中にはピンク玉のエイリアンが乗っていた星だとか食べれば能力を得るがカナヅチになる実だとか色々な物が無造作に置かれていた

「へー、色んなもんがあるなー」

(そういえば200万って結局どの位に換金出来んだろ? 確かこの通貨は昔の日本の
錢や貫のはず)

少年計算中…

(につ、2百かん!?! やべえこれかなりの額だぞ、苦勞してバイトや親に大学費懇願した

甲斐があつた。」

「用意出来たよー」

「ああ、はい200万」

「うん、確かに。はいじゃあこれ2百貫。袋も付けとくよ」

「お、ありがとな。あ、あとこーりん今度こんなカードがあつたら俺に売つてくれないか？」

そう言いながら俺はガンバライドカードを見せた

「うん、これは確か何度か無縁塚で見かけたし今度仕入れたら売つてあげるよ」

「ありがとう。それじゃ、またな」

「ああ、また」

そして俺は香霖堂を後にし、人里で宿をとつてその日を終えた

某県某市とあるビル

「ドーパントの実験はうまくいったか？」

「はい、実験は成功でした」

「ならばはこの2つだな」

そういう男が見た先にはスイッチとメダルが大切に保管されていた。

「この計画が成功し、幻想郷が私の物となったら私はこの財団Xの幹部いや、それ以上になれる！そう考えただけで笑いが止まらないよ！」

そんな言葉を言いながら男は狂った様に笑い続けていた

第六幕 永遠亭

人里とある宿

「今日は永遠亭に行ってみるかな」

そう言い俺は宿を出た

「おーい！海堂！」

「ん？昨日の自警団のおっさん。何か用か？」

「ああ、昨日捕まえたあいつがようやく口を割ったんだ」

「マジか！じゃあメモリーの入手した方法も」

「わかったにはわかったんだが、白衣の連中に声をかけられて金を渡して受け取った程度しかわからないんだ」

「白衣の連中？」

（そんな奴ら財団Xくらいしか思いつかないが…、しかしどうやって幻想郷に…）

「おい、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。教えてくれてありがとうな。また何かあったら教えてくれ」

「おう。後俺の名前は山田 管二郎だ。覚えとけよ」

「はいはいよ」

そして俺は人里を出て迷いの竹林へサイドバツシャーで走りだした

迷いの竹林前

「ここが迷いの竹林か」

「妹紅はいねえみたいだし、空を飛ぶフォームは扱いが難しくてまだ無理だし、どうするか。……あ、こいつら使お」

俺は能力でタカカン数十個とガルーダ、グリフォンを出した

「永遠亭を見つけたら、俺に教えて道案内してくれ」

タカカン達は頷くと竹林の中へ入っていった

「さて俺はあいつらが来るまで能力の練習でもするか」

2時間後…

一羽のタカカンが戻ってきた

「お、見つけたのか」

タカカンは頷き竹林の方へ向かった、俺はそれに従い竹林の中に入っていった

（向きと歩数を書いて地図っぽくしてるし迷う心配は無いと思うがなんかいやな予感がするんだよな）

しばらく歩きながら記録しているとこちらを見つけたタカカンやグリフォン達が近

づいてきて周りを飛んでいた

「23…24…2のわっ!」ドシヤアッ

「ツゝ落とし穴ってことはてるか」

「さーて、引つかかったのは誰かな〜♪」

落とし穴の上からこちらを見てきたのはピンク色のワンピースを着たうさ耳の少女、

因幡 てゐだった

「あ、昨日の新聞の外来人だウサ。ププッ!ウケる」

イラッ

「タカカン達、やれ」

俺の言葉と共に空中にいたタカカン達が一斉にてゐをつつき始めた

「あたっ!あたたっ!痛い痛いウサ!わかったから引き上げてあげるから!」

てゐに引き上げてもらった俺はてゐに案内を頼んだ

「しょうがないな、着いてくるウサ」

着いていきながらあまり多いと邪魔なのでそばにいたタカカンを1羽だけ残し他の

タカカンやグリフォン達を消した

3分後…

てゐと雑談しながら歩いていると純和風の屋敷「永遠亭」に着いた

「ここが永遠亭ウサ」

そういうとてゐはこちらに向き何か欲しそうな顔で見てきた

「ああ、案内料つてこと？」

俺がそう聞くとてゐはドヤ顔で頷く

「じゃあ金と人參どつちがいい？」

そう言うのと俺はバッグの中から金の入った巾着と来る前に人里で買った人參を出した

「え、え、え、う〜」

凄いい悩んでいた はつきり言つて小動物を見ているようである

可愛かつたので人參と一貫あげた

その時の嬉しそうな顔は凄かつた

(俺がロリコンだつたらやばかつた…)

その間にタカカンは缶の状態にしてポケットに入れておいた

そんなてゐるを微笑ましく見てから俺は門から入り永遠亭の玄関を開けた

「すいませ〜ん。永琳さん、いますか〜？」ガラガラ

「は〜い。今いきますよ」

永遠亭の奥から紺と赤のツートンカラーの服に長い銀髪を三つ編みにした女性、八意

永琳が出てきて俺は彼女の姿を見た瞬間体に稲妻が走ったような感覚を覚えた

「あ、あの!」

「?はい。」

「ふー、人参うまかった。ん?」

「一目惚れしました!!付き合ってください!!」

「え?」

「ええええええ!!」

「あ、あの今さつき会ったばかりの人といきなり付き合うっていうのはちよつと／／／
／

「は、まさかお師匠様にいきなり告白するとはね。面白くなりそうだ♪」

「答えはいつでもいいです。あとーっお願いがあるんですが」

「何かしら?」

「俺をマツサージ師としてここで雇ってくださいませんか?」

「うーん、雇うっていうなら私だけじゃなく姫様にも聞いてみないと」

「輝夜ですか」

「ええ、こつちよ。着いてきて」

輝夜の部屋

「で、こいつがここで雇ってほしいって物好きな奴？」

「お願いします」

「別にいいけどこつちに何かメリットはあるのかしら？」

「俺の今持つてる約2百貫をそちらに譲ります」

「2百貫!?!」

ヒソヒソ

「姫様、ここは雇った方が。ただでさえ最近赤字なんですから」

ヒソヒソ

「う、だけどこれだけで動いたらなんかこつちの負けみたいな感じがするし」

「さらに外界の最新ゲーム機と人気ソフトも複数譲ります。もちろん充電器付きで」

「もちろんいいわよ!!今すぐ雇ってあげるわ!」

「よしっ!」

(しゃっ!住処確保&就職試験クリア!)

(ああ、やっと赤字から脱出出来る!)

俺はバッグから金の入った巾着袋と○SPと3D○を数台、モンハ○3rdなどのソ

フト数個を輝夜と永琳に渡した

「それじゃ、部屋を案内するわね。てゐ、頼んだわよ」

「りようかゝい。じゃあ着いてくるウサ」

「失礼しました」

そう言つて俺は残りの荷物を持つて部屋から出ていった

「ここがあんたの部屋だよ。後で中は案内してあげるからそれまで好きにしていいいウサ」

「ああ、ありがとう。あ、てゐーつ頼みがあるんだが」

「ん？何？」

「迷いの竹林の詳しい地図を描いてくれないか？もちろんただでは言わない。これを付けるから」

そう言いながら俺はバッグから人參の袋詰を出した

ゴクリ

「しよ、しようがないね。やつてあげるウサ」

「ありがとう。ただしこれは描いてくれた後で渡すからな」

「チツ」

「舌打ち聞こえてるぞ、この野郎」

「そういや、さつきマツサージ師としてと言つてたけど、どうゆう風にやるんだい？永遠亭にマツサージだけでくるって輩もあんまりいないよ」

「ああ、だから俺の方からマツサージに行くんだよ」

「一軒、一軒聞いていく気かい？」

「まさか。宣伝や注文は鈴仙に手伝ってもらうよ」

「鈴仙に？」

「ただいま、戻りましたー」

「お、噂をすれば」

俺は鈴仙に自分のことと明日から頼みたいことを言いに行つた

「どうも、今日から永遠亭でマツサージ師として雇われた海堂 紀斗だ。よろしく」

「え？あ、はいよろしくお願いします。ってあなた昨日の新聞の人じゃないですか!？」

「あ、知つてたの。じゃ説明いいやめんどくさいし」

「それより明日から鈴仙にはやつてほしいことがあるんだが」

「何ですか？」

「明日から薬の販売と一緒に永遠亭のマツサージ屋として俺のことを宣伝してくれないか？それで頼みたい人がきたらこの紙に名前、住所、やつてほしい日にちを書かせてく

れ」

「まあ、その程度ならいいですけど」

「ありがとう！恩にきるよ！」

紀斗が部屋に戻ってから

「鈴仙、鈴仙」

「ん、なに？てゐ」

「紀斗さつきお師匠様に告白したよ」

「へ？」

鈴仙フリーズ中

「ええええええ!!」

「し、し、師匠に告白!?!?!」

「一目惚れだつてさゝ」

「そ、そそそれで答えは？」

「もう少し知り合つてからだつてウサ」

「ほつ、よかつた」

「そのよかつたはお師匠様を取られなくてかな？それとも紀斗に恋をしてかな？」

「ば、馬鹿!?!?!別にそんなじゃないわよ!?!?!」

「ふーん」ニヤニヤ

台所

「今日の晩御飯は大金も入ったことだし、ちよつと豪勢にしましよ」

「永琳さん、飯作るんなら手伝いませうか？」

俺はちようど部屋に戻ろうとしていたら永琳が晩飯を作ろうとしていたので聞いてみた

「あら、悪いわね。じゃあそつちのキャベツを千切りにしてもらえるかしら。あとさんはつけなくていいわよ」

「了解だ、永琳」

トントントン

「……………」

(会話が思いつかねえ！好きな人が隣にいるのにまったく何言えばいいのか分からねえ！俺は思春期の中学生かつ！)

「ねえ」

「ひやいつ!？」

(やつべ、びっくりして変な返事しちゃった)

「さつきの告白、本気なの？」

そんな問いに俺はテンパっていた頭を冷静にし永琳に向かい合うようにして答えた
「もちろんです」

「私は蓬莱人で不老不死で見た目よりずっと年をとっているのよ」

「そんなこと会う前から知ってます」

「え…」

「俺はそれを知っていてそのうえであなたに恋をしたんですよ」

「だから誓いましょう。俺はあなたと死んで別れてしまいうくらいなら蓬莱の薬を飲んで不老不死になった方がましです!!」

それを言った直後の永琳は顔が真っ赤になりうつむいていた

「じゃ、じゃあふつつか者ですが、よろしくお願いします」カシヤリ

「カシヤリ?」

台所のふすまの所をみると輝夜、鈴仙、てゐ、文がこちらをみて鈴仙以外がニヤニヤしていた

「さて明日の記事は決まりましたね。それでは私はここで…」

「逃がすか!!」

俺はその瞬間カブトゼクターとベルトを出し変身した

「変身!」

『HENRISIN』

そして俺は銀色のサナギのようなフォームをした仮面ライダーカブト マスクド
フォームになりさらに

「キャストオフ！」

『CAST OFF』 『CHANGE BEATLE』

赤いカブト虫を模した仮面ライダーカブト ライダーフォームになった

「一気に行くぜ！クロックアップ！」

『CLOCK UP』

作『説明しよう！クロックアップを使ったライダーフォームは常人を遥かに超えるス
ピードで活動出来るのだ！』

何か今変なのが入ってきてたがまあいい 今はあの鴉天狗を捕まえるのが先だ！

俺は飛んで逃げようとしている文を見つけると何故かちようどあったロープを使い
文をミノムシ状態にした

『CLOCK OVER』

「あやや!?!いつの間にこんなグルグル巻きに？ 咲夜さんを思いだす芸当ですね」

「カメラは没収させてもらおうぞ」

「そ、そんな〜」

「紀斗、後は私に任せてもらえないかしら？」

永琳の方を向くと凄いいい笑顔だったが明らかにその裏には純度100%の殺気が含まれていた

「あ、ああ。好きにしてくれていいぞ」

そして文は永琳に引きずられて実験室という部屋に連れていかれた

俺は心のなかで祈るしか出来なかった

(アーメン)

「ぎやああああああああ!!」

そんな叫びが永琳が帰って来るまで迷いの竹林じゆうに響きわたった

永琳が帰って来る前に俺は鈴仙と共に晩飯を作りあげ机の上に並べた

その後、俺の歓迎会ということもあり他の兎達も呼んで永遠亭だけの宴会を開いた

あの量の兎には正直ひびつたがてゐるように擬人化出来るのもいて皆で騒いだ

何故か途中で見覚えのある鬼がいたが

そして俺は幻想郷に来て本当ちよかつたと思えた

第七幕 紅魔館

翌日

永遠亭は死屍累々だった

無事なのは永琳、輝夜、てゐの3人だけ他は全員いつの間にか紛れ混んでいた萃香に酒を飲まされ酔い潰れた

「まったく鬼にも困ったもんね」

「ほら、二日酔いの薬よ」

「あ、ありがとう」

俺は永琳から白い錠剤と水をもらい飲む

さすが月の頭脳が作った薬、少ししたら二日酔いの頭痛や気持ち悪さが完全に消えた
「紀斗、今日はまだ仕事は始めないんでしょう？」

「ああ、マツサージ屋は明日から始めるつもりだけど」

「ならお使いを頼まれてくれないかしら？」

「お使いってどこまで？」

「紅魔館よ」

俺は永琳にお使いを頼まれ紅魔館に薬を届けに行くことになった

幸い昨日のうちにてゐるが地図を描いておいてくれたので竹林は難なく抜けられた

「ここからはこれで行くか」

俺はカブトのカブトエクステンダーをだし薬を荷物入れに入れて紅魔館に向けて走りだした。

霧の湖

「ここが霧の湖か」

俺は目をこらしながらバイクを走らせていると

「やっと思つけたぞ。貴様！いいm「はい、邪魔」ヴァッ!」

何か変な二足歩行の狼がいたので轢いてみたが今度はあまりスピードも出してなかつたせいで少ししか吹っ飛ばなかつた

「貴様！絶対にy「お、なんだあれ！カッケー！」

「お前、話しn「駄目だよ、チルノちゃん。勝手にいじくつちや。」

「被せてk「そーなのかー。」

狼、涙目ww

さつきから声のしている方向を見ると水色の髪に背中に3対の小さな氷の羽根をはやしたチルノ、緑色の髪をサイドポニーにして背中に2対の薄い羽根をはやした大妖

精、ルーミアが俺のバイクを見ていた

「よう、ルーミア元気にしてたか？」

「うん！」

「ルーミアちゃんの知り合い？」

「うん、この前助けてもらった」

「へー。でもあたいがさいきよーだからあたいのほうが助けられるけどね」

「くっツ貴様ら！俺を無視するんじゃない!!」

「あ、いたの」

「馬鹿にしやがって！さつき手に入れたこのスイッチで全員殺してやる!!」

『ラスト ワン』

「!?!」

狼はスイッチを取り出した瞬間スイッチは禍々しい声をだし形を変えた

カチツ

そして狼はハウンド・ゾディアーツになり狼本体は繭のようなものに包まれて地面に倒れた

「まずは妖精から殺してやる!!」

ハウンド・ゾディアーツはチルノに向かって鉤爪が付いた鎖を飛ばした

ガキンツ

俺はそれをエンジンブレードで防ぎ振り払う

「イライラするよ、お前」

俺はエンジンブレードを消し代わりにベルトと紫色のカードデッキを出した

「変身」

俺はカードデッキをベルトに挿入しコブラを模した仮面ライダー、仮面ライダー王蛇に変身した

「何先に俺じゃなくて女を狙ってんだよ」

俺はカードデッキからカードを取り出すと王蛇専用の召喚機ベノバイザーに装填した

『SWORD VENT』

俺は王蛇の契約モンスターであるベノスネーカーの尾を模した刺突剣ベノサーベルを装備した

「お前らはどっか行つてろ」

「やだ！あたいも戦う！」

「チルノちゃん、あの人の言う通り逃げようよ」

「それにあいつ弾幕も効かないし齧つても硬くて無理だったから居ても邪魔になるだけ

だよ」

(なるほど、ルーミアがあの時逃げまわっていたのは弾幕が効かなかったからか)

「むー!」

「しようがねえな」

俺はチルノの首根っこを掴むとハウンド・ゾディアーツとは逆方向に振りかぶって：
投げた!

「わああああああ!!」

「チルノちゃん!」

「投げられたのか」

「お前ら、あの⑨には悪かったと伝えといてくれ」

「わ、わかりました!」

「気を付けてねー!」

ルーミアと大妖精はチルノの飛んでいった方向に飛んでいき俺はハウンドゾディアーツに向き直る

「さてやるか、犬っころ」

俺は殺気を出しながら言う

「ひっ!」

ハウンド・ゾディアーツはその殺気に怯え少し後ずさりした
「逃げんじゃねーぞ！犬っころ!!」

俺はそう言いながらハウンド・ゾディアーツに斬りかかった
ゴッ！ガッ！バキッ！

「グッ！ウオッ！ガハッ！」

俺は何度もベノサーベルでハウンド・ゾディアーツを殴った

「おいおい、こんなもんか？もっと楽しませろよ」

「クソッ！くらいやがれ！」

ハウンド・ゾディアーツは鎖を何本も投げつけてきたが俺は簡単に弾いてしまった
「つまらねーな、終わりにしてやる」

俺はカードデツキからまたカードをベノバイザーに装填した

『FINAL VENT』

その声と共に王蛇の契約モンスター、ベノスネーカーが現れ、俺は飛び上がりベノス
ネーカーの毒液の勢いに乗り連続蹴りを放つ『ベノクラッシュ』を繰り出した
「ぐああああああ!!」

ドオオオオン！

ハウンド・ゾディアーツは爆発し、ゾディアーツスイッチが地面に落ちた

俺はスイッチを押すとスイッチは消滅し、繭に包まれた狼が目を覚ました

「うっ」

「おい」

「ひいっ!」

俺はまだ倒れている狼の目の前でしゃがみ込み狼に話しかけた

「お前、あのスイッチ一体どこで手に入れた?」

「も、森でお前を探している時に変な白服の集団から「更なる力が欲しくないか?」って
言われてそのスイッチをもらったんだ」

(メモリーやスイッチを持つていた白衣の集団、まず間違いなく財団Xだろうな。ゆかりんはこのことに気づいてるのか?)

「お、おいもう話したんだから行っていいだろう?」

「ああ、もう行っていいぞ」

俺は狼が去ったのを確認すると変身を解いた

「さて最初の課題をやりますか」

俺は放置していたカプトエクステンダーに乗り紅魔館に向かった、狼の言っていた白衣の男達に見られていたとも知らずに

? 「行くぞ、被検体Bを回収する」

「ハッ」

その日、1匹の妖怪が幻想郷から姿を消した

「ここが紅魔館か。本当に目が痛くなりそうな建物だな」

俺は外装が全て赤い西洋風の館、紅魔館に着いた

俺はカプトエクステンダーから降りると荷物入れから薬を取り出し、カプトエクステンダーを消した

「さて、まずは門を開けてもらわないとな」

そう言つて紅魔館の門番紅 美鈴を見てみると

「zzz」

やはり寝ていた

俺は仕方ないのでソフトーニヤを出しソフトーニヤの冷風を美鈴に浴びせた

「わっ!!冷たい!なんですか!?!⑨の襲撃!?!」

「お、起きた起きた」

「今のをやったのはあなたですか!いきなり何をするんです」

「いやー、門を開けてもらおうと思つただけど気持ち良さそうに眠つてたからさ。つ

ごう」

「あ、そうだったんですか。珍しいですね。ちゃんとしてわりを入れてくれる人は。で、要件とお名前はなんですか？要件は聞かないとお通し出来ないのよ」

「俺は永遠亭の使いで薬を届けに来た海堂 紀斗だ。よろしく。紅 美鈴」

「！わ、私の本名！やっと呼んでくれる人がいた。」（； ω ；）
「え」

なんか本名を言ってやったら美鈴が泣いてしまった、そんな長い期間本名呼ばれてなかったのか

「グスツ、えーと薬を届けに来てくれたんですね。だったら私が渡しておくので大丈夫ですよ」

「マジか。なら頼むよ」

？「その必要はないわ」

「あ、咲夜さん」

「そのあなた、確か海堂だったわね。お嬢様にあなたを連れてこいと言われているの。薬は私が持つていくから着いてきなさい」

「は、はい」

「それと中国あんたは後でお仕置き部屋よ」

「そんなく」 or z

俺は咲夜さんに着いていき紅魔館の中に入った

「やっぱり内装も赤いのか」

周りを見ると床も壁も天井も全て赤かった

少し歩くと大きいドアの前に着いた

「この中にお嬢様はいるわ。くれぐれも粗相のないようにしなさい」

「分かりました」

コン、コン、コン

「お嬢様、海堂 紀斗をお連れいたしました」

「入りなさい」

「失礼します」

入った瞬間凄まじい殺気を放たれた

「ツッ！」

意識が飛びそうになるが俺は自分からも殺気を出しなんとか1歩前に進んだ

その瞬間で殺気は収まり俺は前を見るとそこには紅い玉座のような椅子に座った10歳くらいの背に背中には蝙蝠のような羽をはやしたレミリア・スカーレットが座っていた

「へー、この殺気に耐えるだけじゃなく進んでくるなんてね。いいわ、合格よ」

「合格？何の話だ」

「あなた、うちの執事になりなさい」

「は？おいおい、いきなり何の冗談だよ」

「冗談じゃないわ。理由はそうね……。あなたを新聞を読んで気になったからかしら」

「悪いが、俺は永遠亭を離れるつもりは無いし、執事なんてのは柄じゃないからな」

「そう、なら力づくで執事にしてあげるわ！」

そう言うレミリアは俺に無数の弾幕を放ってきた

「くっ！しょうがねえ、爆走符【ライダーズラン】！一号！二号！V3！ライダーマン！

X！」

スペカを発動させると5人のライダーが影からバイクに乗ったシルエットで飛び出し迫っていた弾幕を消し去った

「あら、このスペカ、避けるのは楽ね。」

「そうゆう仕様だ！変身！」

俺はベルトとラウズカードを出しトランプのスペードとカブト虫を模した仮面ライダー、仮面ライダー剣に変身した

『TURN UP』

「お嬢様！助太刀します！」

そう叫びながら咲夜さんは俺にナイフを何本も投げてきた

「アマゾン！ストロンガー！スカイライダー！スーパー！ZX！」

俺はこちらからも弾幕を出しながら新たに5人のライダーを出し咲夜さんに突っ込ませた

ライダー達はナイフを弾きながら進んだ

「はっ！」

咲夜さんは上に跳ぶと目の前には俺の弾幕があった

「二段仕掛けだぜ！」

「甘いわね」

そう言うのと咲夜さん以外の全てが止まった

そして咲夜さんは地面に降りるとナイフを数十本も投げてきた

「そして時は動きだす」

「!?能力か！BLACK！BLACK RX！シン！ZOO！J！」

俺はとっさにライダー達を出すとライダー達の後ろで体制を低くしながらナイフを避けて走った

「私がいるのを忘れては困るわよ！紅符【不夜城レッド】！」

後ろからレミリアの十字型の弾幕が放たれた

「忘れちゃいねーよ！行くぜ！」

俺はラウズカードを一枚引きブレイラウザーに読み込ませる

『M A C H』

「！」

スピードの9、マツハを使った俺はまず【不夜城レッド】を避け、レミリアに殴りかかった

「はあああああ!!」ドツ！ゴツ！ガツ！

俺はレミリアの腹を何度も殴り気絶させようとした

「グハツ!?」ザシュツ

しかし気づいたら後ろに咲夜さんがいて俺はナイフで背中を斬られていた

(また能力か!?くそ！先に咲夜さんを倒さないと駄目か！)

ドゴオン!!

マツハが解けた瞬間レミリアは吹っ飛び壁を破壊した、そして俺は二枚のスペカを取り出した

「やれやれ、使ったことがないからあまり使いたくなかったんだがな。いくぞ！大集合【オールライダーズ】アンド進化【ライダーエボリューション】！」

そして俺たちが今いる部屋とレミリアが吹っ飛ばされた部屋に主役・サブを含めた全てのライダーの最強フォームが現れさらに俺は13枚のラウズカードと融合したブレイドキングフォームになっていた

「なんて数の分身体!?!」

咲夜さんはナイフでライダー達を倒し始めた

「咲夜さん、あなたでももう俺には追いつけない」

（何かする気!?!でもその前に能力を使って倒す!!）

俺はラウズカードをキングラウザーに読み込ませる

『TIME』

「時よ、止まれ!」

そして俺と咲夜さん以外全てが止まった

「な!?!何故あなたがこの中で動けるの!!」

「俺もあまり長くは止められない、さっさとけりをつける!」

「舐められたものね!喰らいなさい!幻符【殺人ドール】!」

俺はキングラウザーにスペードの2, 3, 4, 5, 6のカードを読み込ませ、持っていたブレイラウザーとキングラウザーを構える

『STRAIGHT FLUSH』

「喰らえー！」

ブレイラウザーとキングラウザーに五枚のカードのエネルギーが集まり咲夜さんにむかって二刀をクロスして斬りかかる、咲夜さんはナイフを投げってくるがナイフは全て弾き飛ばされ咲夜さんにストレートフラッシュが当たる

そしてラウズカードの効果が切れ他の全てが動き出した

「咲夜!？」

レミリアが戻ってきたどうやら向こうの部屋のライダー達はやられてしまったらしい

「早いな、さすがは吸血鬼というところか」

「まさか咲夜がやられるなんてね。それにこのスペカ、私はあなたをみくびっていたわ」
「だからここからは本気でいこうと言いたいところだけど、これ以上、屋敷を荒らしたくないし一発で決めさせてもらおうよ」

「そりやあこちらとしてもありがたいよ。俺も早く帰りたいんでね」

「いくわよ。神槍【スピア・ザ・グングニル】」

『SPADE 10』

『SPADE JACK』

『SPADE QUEEN』

『SPADE KING』

『SPADE ACE』

『ROYAL STRAIGHT FLUSH』

「俺は運命と戦う！そして勝ってみせる！」

レミリアは紅い槍を投合し、俺はキングラウザーからエネルギー波を放ち目の前に現れた五枚のカードを突き抜けレミリアの槍と拮抗する

「はああああああああ!!」

「うおおおおおお!!」

(このままじゃ押し負ける！なら一か八かで！)

俺は自分の周りに弾幕を出し、ロイヤルストレートフラッシュの周りに沿わせ弾幕をロイヤルストレートフラッシュに融合させた

「いけえええええ!!」

弾幕で赤くなったロイヤルストレートフラッシュが「スピア・ザ・グングニル」を呑み込んでいき、そのままレミリアも呑み込んでいった

「ああああああああ!!」

ドドドドオオオン！

「やばい!?!」

ロイヤルストレートフラッシュが紅魔館の壁を破壊し続け外に出てしまいレミリアも勢いのまま外に吹き飛びそうになっていた

俺はスピードの9、MACHの能力を引き出し高速移動できるようにする

「持ってくれよ！」

『MACH』

俺だけがかなりのスピードで動けるようになり俺は自分の体に鞭打って走ってレミリアのもとにつき紅魔館の元の部屋に戻った

「はあ、はあ、良かった間に合った」

その瞬間キングフォームが解け元のフォームになってしまった

「5分たっちまったか。回復【メディカル オン】」

俺は【オールライダーズ】を消し【メディカル オン】を発動させ自分と咲夜さん、レミリアに使った

「ふう」

？「終わったようね」

「なんだ、ただのパチュリーか」

そこへドアを開けて現れたのは紫色の髪と服を着た女性、パチュリー・ノーレッジ「失礼な言い方ね。せっかくあなた達に回復魔法をかけるにきてあげたのに」

「ははは、ありがとう。だけど俺は大体回復してるからいいよ。そろそろ帰らないと永琳が心配するしな」

「ならほんの少しだけかけてあげるわ。あまり時間もかからないし、それならいいでしょ?」パアアア

「言ってる間にかけてる癖に」

数十分後

「いやー、おかげで体のだるさが消えたよ。ありがとうな」

「別にいいわよ。私が勝手にやったことだし」

「派手にやられてしまったわね」

「レミリア、起きて大丈夫なのか?」

「ええ、あなたのおかげで日光にも当たってないしね。あと私も負けてしまったから執事の件は諦めるわ。でも永遠亭をクビになったら何時でもきなさい。その時は、執事で雇ってあげるわ」

「そりゃ、どーも。じゃ今度俺が休みの日にはここ直すの手伝いに来ますよ」

「そしたら、ビシビシこき使ってあげるわ」

「起きてたの? 咲夜さん」

「ええ、あなたが刺してくれた注射のおかげで体力も戻ってきてるしね」

「そりゃよかった。それじゃ、俺はこの辺で」

（おつかいだけのつもりがゾディアーツやレミアアや咲夜さんとの勝負になるとはな
…。まったくとんだ日だ）

俺はそんなことを考えながら疲れた体でバイクを走らせ紅魔館を後にした

第八幕 初仕事

保存日時：2014年09月02日（火） 19：52

紅魔館から帰った後俺は…

「なんだから。ちよつと、聞いているの！」ガミガミ

永琳に正座で説教されています

かれこれ2時間位は続いている

長時間の説教と正座のせいでオデの体はボドボドダ！

しかし急に説教の声が止み顔を上げると永琳は瞳に涙を滲ませて俺を見ていた

「だけど本当に無事で良かった」ギョッ

その言葉と同時に永琳は俺に抱きついていた

「永琳…」

「あなたが中々帰って来ないからずっと心配だった。やつぱり行かせるんじや無かった
と思っただ」

「ごめんな、心配かけて。後俺は案外しぶといから大丈夫だよ」ギョッ

俺はそう言いながら永琳を抱き返した

そして俺達は見つめ合い軽く口付けをした

「永琳俺、今すごい幸せだよ／＼／」

「私もよ、紀斗／＼／」

ジー

（あたし達の視線にも気づかないなんてお熱いね〜）

（まさかあの永琳にこんなお熱い春がくるなんてね〜）

（いいなー、お師匠様は好きな人がいてキ、キスまで出来て／＼／）

「今度からは心配かけないようにこいつを渡しておくよ」

俺はそう言いながらスタッグフォンを出した

『STAGG』

「これは？」

「こいつはスタッグフォン。まあ、簡単に言えば動く携帯電話だ。ところでそっちの覗いてる三人もいるかい？」

ギクツ×3

「え、もしかして3人ともさっきのを見てたの？」

「ばっちり！」ニヤニヤ

「赤面してるあなたも可愛かったわよ」ニヤニヤ

「お師匠様、すいませんでした！」

3人のうちでると輝夜は悪びれもなくからかい、鈴仙は一人土下座をしていた
「そう、ならその記憶を消さなきゃね」ジャキンッ

永琳は何処からか取り出したでかい注射器を持って逃げた3人を追っていった
「やれやれ、鈴仙にはまだ用があつたのに」

俺は鈴仙を追いかけさせておいたスタッグフォンと連絡をとるためビートルフォン
を出した

『BEE T L E』

永遠亭内廊下

「ハア、ハア、なんとかまけた」

ツンツン

「ん？これはさつき紀斗さんが持ってたスタッグフォン？だったっけ」

カシヤカシヤン

スタッグフォンは携帯電話モードになり鈴仙の手におさまった

ピピピピピ　ピピピピ

するといきなりスタッグフォンから着信音が鳴った

「わわわ!?えーと、このボタンを押せばいいのかな？」

ピッ

『もしもし、鈴仙か?』

「あ、はいそうです」

『出来れば後で俺の部屋まで来てくれ。あと昨日渡した紙も一緒に持ってきてくれ』
「わかりました。師匠から完全に逃げ切れたらそちらに行きます」

1時間後 紀斗の部屋

「これが今日注文をいれてくれた方の表なんですが」

表を見てみると書かれていた名前は東風谷 早苗、洩矢 諏訪子、八坂 神奈子だけだった

「幻想郷では今まであまりマツサージ師がいなかったので注文してくれたのは外の世界から来た早苗さんたちだけだったんです」

「ま、最初はこんなもんだろ。むしろ最初の客が守矢の三柱だっていうのが驚きだよ。まあ、これからもこんな感じで頼むよ」

「はい、わかりました!」

そう言つて鈴仙は俺の部屋を後にした

「えーと、明日午前中のうちにスタックフォンを飛ばして料金はこんなもんでいいか。」

他には…」

そして俺は明日の準備をして寝た

次の日 守矢神社

ここでは霊夢とはまた違ったタイプの巫女服を着た緑髪の少女、東風谷 早苗が境内を掃除していた

「今日はマツサージを注文した日だから楽しみですね〜♪」

ブーン

「あれは…クワガタ?」

カシヤカシヤン

スタツグフォンは携帯電話モードになり早苗の手におさまった

「携帯になった!?!」

ピピピピピ

「!?!通話ボタンはこれかな?」ピッ

『もしもし、注文を承った永遠亭のマツサージ師ですが、そちらは守矢神社でよろしいでしょうか?』

「はい、そうですが」

『では本日訪問してよろしい時間をお訪ねしてよろしいでしょうか?』

「じゃあ午後の2時頃でお願いしていいですか？」

『わかりました。ではその時間に伺います』

『では失礼しました』ブツッ

ツー、ツー

「切れちゃった」

カシヤカシヤン

早苗がスタックフォンを耳から離すとスタックフォンはライブモードになり早苗の周りを飛んでいる

「早苗ー、誰と話してたのー？ってうわ!?何それ!?新種のクワガタ？」

そこへ2つの目がついたカエルのようなZUN帽をかぶった10歳くらいの姿の女の子、洩矢 諏訪子が現れ早速スタックフォンに興味をしめす

「いや、今日来るマツサージ師の道具みたいなんですけど携帯電話にもなるんですよ、これ!」

早苗は諏訪子にキラキラした目で説明し始め

「お、何だいそれ?面白そうじゃないか」

「あ、神奈子様すごいですよこれ!」

そこに青髪のセミロングで背中に輪にした注連縄を装着した女性、八坂 神奈子も加

わり早苗はさらにヒートアップして説明していた

永遠亭前

「さて、今回はこいつで行くか」

俺はサイガフォンを出しベルトを巻き315と押してからENTERを押した

『STANDING BY』

「変身」

『COMPLÉTÉ』

俺は仮面ライダーサイガに変身し、背中に着いたフライングアタッカーからジェットが吹き出し飛行しながら守矢神社を目指した

妖怪の山上空 PM13:40

シュゴオオオオ

紀斗はフライングアタッカーを使い飛んでいると目の前から白い髪と犬科の耳を持った白狼天狗が飛んできた

「ん？あれは白狼天狗か。」

「生まれ！この妖怪の山に何しに来た！」

「俺は守矢神社の三柱に仕事でマッサージをしに来ただけだよ」

「本当か？証拠を見せろ」

「それなら一度降りて見せよう」

俺は白狼天狗と一緒に下に降りると変身を解き持っていた荷物の中から三人の名前が入った紙を取り出して見せた

「ん、確かに。通つていいぞ」

「あいよ。そんじやお勤め頑張れよー」

『STANDING BY』

『COMPLETE』

俺はもう一度サイガに変身し荷物を持って飛びたつた

守矢神社PM1:50

シユゴオオオオ トツ

「ふう、やつと着いた」

俺は守矢神社上空に着くと降下して守矢神社の目の前に着陸した

すると早苗がこちらに気づきなんかキラキラした目で掴みかかってきた

「あなたがマツサージ師の紀斗さんですよね！私東風谷 早苗と言うんですけど、紀斗さんの能力つて新聞で見ましたけど羨ましいですね！私以前少し仮面ライダー観てたんですけど確かその姿も仮面ライダーサイガですよね！あとあのクワガタっぽいのも仮面ライダーのツールなんですか！」

「ちよ、ちよつと落ち着いて。顔も近いから少し離れて」

俺は変身を解くと早苗に聞いた

「今回マツサージを注文してくれたのはあんたと神奈子と諏訪子でいいんだよな？」

「はい、そういえばこの子が飛んできて携帯になったと同時に電話してきましたけどこの子の機能ですか？」

早苗はスタックフォンを出して聞いてきた

「ああ、それはそいつの機能じゃなくてこいつらも一緒に向かわせたからだよ」

俺はそう言いながらポケットから缶状態のタカカンとバツタカンを出した

「なんですか、それ？」

「あー、早苗は仮面ライダーのシリーズを何処まで知ってるんだ？」

「えーと、確かカブト辺りまでですね」

「じゃあ知らないか。こいつらは平成ライダー12作目の仮面ライダーオーズに出てたカンドロイドって奴なんだが…」

青年説明中…

「そういえばDVDデッキってある？」

「あ、確か外界から持ってきましたけどまだDVDは幻想入りしてないので倉庫に入れ

てあります。だけど急になんですか？DVDデツキなんて」

「ああ、知っての通り俺の能力は「仮面ライダーを司る程度の能力」。つまり仮面ライダー関係なら何でも出せるってことは」

俺はそう言いながら何本かの仮面ライダーのDVDケースを出した

「全部説明すると長いから暇な時にでも観てくれよ」

「わかりました！ありがとうございます！」パアアア

早苗は嬉しそうな表情でDVDを受け取った

「あ、忘れてましたけどマッサージは中でやるんですよ。案内します」

「ああ、よろしく頼むよ」

守矢神社内

神社の中の居間に案内されるとそこには諏訪子と神奈子がいた

「待ってたよー」

「案内に少し時間をかけすぎじゃないかい？」

「すいません、ちよつと夢中になっちゃって」

「それじゃあ布団を敷けて香りを充満させやすいような部屋はあるか？」

「ハッ、まさかそこで私たち一人ずつにあんなことやこんなことをする気ですか！ エロ同人みたいに！」

「……………」

俺は早苗を冷たい目で見てから諏訪子達に聞いた

「こんな巫女で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

とりあえず条件の合った部屋に案内されると俺は準備を始めた

3分後

「準備は出来たが誰からやる？」

「私はDVDデッキを持つてくるので後でいいです」

「私も後でいーよー」

「じゃあたしから頼むよ」

「わかった。あ、でも注連縄は外してくれよ。それがあつたらマッサージが出来ない」

「わかってるよ」

「諏訪子は暇ならこいつらとでも遊んでてくれ」

俺はそう言うと言つてフロッグポットやフードロイド達を出した

「おー、カエル型のやつか！」 キラキラ

「ケロケロ」

『ケロケロ』（諏訪子の声）

俺はそれを見てから神奈子と一緒に準備がしてある部屋に向かった

俺は部屋に入ると神奈子を布団にうつ伏せに寝かせた

「何の匂いだいこれは？」

「ああ、アロマキャンドルの香りだよ。相手をリラックスさせるのにちょうどいいから使ってるんだ」

「確か人の気分を和らげる香りを出すろうそくだったね」

「ああ、以前自作で作ったやつを持ってきたんだよ」

「それじゃ始めるぜ」

俺はまず背中辺りから始め腕や足の筋肉もほぐしていった

「気持ち良くて寝ちまいそうだね〜」

「別に寝ててもいいぜ、マッサージュが終わったら起こしてやるからよ」

「それじゃ頼むよ……zzzz」

40分後

大体の筋肉を揉みほぐし終えた俺は次の段階へと移った

「さて仕上げのツボ押しだ」

「やっぱ神様だと普通の人とは違うツボがあるな」

20分後

ツボも押し終えた俺は神奈子の頬を軽く叩き目を覚まさせる

「おーい、終わったぞー」

「ん、もう終わっちゃまったのかい」

神奈子は起き上がると伸びをし自分の身体の具合を確認する

「んー、すごいね体が軽くなっただみたいだよ」

「色々ツボも押したからな。さ、二人のところに戻ろう」

俺は神奈子と一緒に居間に戻ると早苗はさつき渡したDVDを観ていて諏訪子はフログポット達をそばにいさせて一緒に観ていた

「おーい、終わったぞー」

「なかなか気持ち良かったよ」

「あ、私はまだDVD観て諏訪子様が先でいいですよ」

「はいはい、それじゃよろしく頼むよ」

会話をやったこととは神奈子の時とほぼ同じなので割愛「あー、気持ち良かったよ」

「さすがにロリ相手はマッサージしずらかったぜ」

「じゃ、次は私をお願いしますね」

最後に俺は早苗のマツサージをしてキャンドルや使った物を片付け神奈子と諏訪子が待っている部屋へ移動する

「いやー、なんだか身体が軽くなっているですねー。マツサージって」

「まあ俺のマツサージは色々ツボも押すからその効果もあるけどな」

「ツボなんて分かるんですか？」

「ああ、新聞には出てなかったけど俺のもう一つの能力は「ツボを操る程度の能力」だからな」

「へー、じゃあ今回は私達のどんなツボを押したんですか？」

「えーと、確か疲れをとるツボ、力が出てくるツボ、血行を良くするツボ、あ、あと確かな信仰が集めやすくなるツボっていうのも押したな」

「マジですか!?!ありがとうございます!?!ついでに守矢神社を崇拝しませんか?」

「い、いや遠慮しとくよ。俺は無崇拝者だから」

そんな会話をして居間に戻ると神奈子と諏訪子が早苗が見終わったDVDを覗き待っていた

「あ、終わった?」

「ああ、それじゃあ料金なんだが1人あたり2貫、三人合わせて6貫だ」

「以外と安いですね」

「こつちじゃまだマツサージはやる奴がいなせいではほとんど普及してないからな。外界の平均の値段じゃ高すぎると思ったからこの値段だ」

※マツサージ1時間平均は大体4500〜6000円です

「それじゃちようど6貫です」

「まいど」チャリン

俺は金を受け取ると荷物の中の財布に入れた

「しかし、マツサージがこんなふうなうまくて性格もいい、顔も悪くない、どうだい？うちの早苗の婿にならないかい？」

「ちよ、ちよつと神奈子様!?!?!」

「い、いや俺には生涯嫁にすると決めた人がいるので!?!?!」

「あー、やっぱりあの記事本当だったんだ」

ピクリ

俺は諏訪子の一言が気になり聞いてみる

「あの記事って、どの記事です？」

「えーとね、あ、これだよ昨日の新聞」

俺は渡された新聞を見るとそこには

『衝撃!!永遠亭の医師と仮面ライダーの青年との熱愛発覚!!』

とデカデカと一面になってしかも写真は俺と永琳が抱き合っている写真だった

「こいつは…」ゴゴゴゴゴ

「もしかして、その記事って本当なんですか？」

「ちよつと誰かあのパラッチのとこまで案内してくれない？」

「あ、それならあそこの処に隠れてますよ。」

俺が笑顔で早苗に尋ねると早苗は境内の茂みの一つを指差すとそこにはつい先日見たばかりの天狗の帽子が見えていた

「ヤバッ！」バツ

「逃がさん！」

俺は文が逃げる前にドレイクグリップとドレイクゼクターを出しドレイクグリップをかざすとドレイクゼクターが結合した

「変身」

『HENNISEIN』

「キャストオフ」

『CAST OFF』

『CHANGE DRAGONFLY』

俺は仮面ライダードレイクに変身しさらにヤゴを模したマスクドフォームからトン

ボを模したライダーフォームになった

「キヤー！本物ですよ！神奈子様！諏訪子様！本物の仮面ライダードレイクですよ!!」

「ほう、あれがねえ」

「なかなかかつこいいね」

「クロックアップがないと捕まえられないからな、文は」

「クロックアップ」

『CLOCK UP』

俺はベルトの横にあるスイッチをスライドさせるとその瞬間音声が流れると共に俺以外の全てのもがスローモーションのようになる

俺はそのままあまり離れていないところにいる文の後ろに回りこみドレイクゼクターを構えドレイクゼクターの後ろのヒッチスロットルを引いた

「ライダーシューティング」

『RIDER SHOOTING』

ドレイクゼクターからタキオン粒子を収束した光弾が放たれ低スピードで文に近づいていく

『CLOCK OVER』

その電子音と共に全てのスピード元に戻ったそして光弾は…

「え、アヤアアア!」ピチューン

文に命中し見事にピチュラせた

「今のがクロックアツプなんですね!すごいですね!本当に気付いたら終わりましたよ!

「紀斗の奴、なかなかやるねえ」

「このカエルだけでも貸してもらえるかな」

俺は変身を解除し文を早苗からもらった縄で縛っていると文のいた茂みから一人の白狼天狗が出てきた

「まったく、だから辞めといた方がいいって言ったのに…。あ、申し遅れました。私は文様の助手をしている犬走 椛といひます。以後お見知り置きを」

「俺は海堂 紀斗、能力は…もう知ってるな」

「すいません、うちの上司がご迷惑をおかけしたみたいで。」

「いや、椛は別に謝らなくてもいいよ。悪いのはこのパラッチだから」

俺は事情徴収をするために文を起こすことにした

「おい、起きろ」

頬をはたいても反応が無い

青年説明中…

…というわけだから永琳にはてゐのO☆S I☆O☆K Iを頼む」

『わかったわ、ちょうど新しい薬を開発したところだったのよ、その実験台になつてもらうわ』

「頼んだ、こつちは文をやつておくから」

『わかったわ、じゃ切るわね。』

「ああ、また後で」ブツツツツツ

俺はビートルフォンをポケットにしまふと文の方に向いた、我ながらこの時はファイズの草加のようないい笑顔をしていたと思う

「さて俺も一つ試してみたいことがあつたんだ」

「た、試してみたいことですか」

「そう、俺の二つの能力で唯一一致するものだ。いくぞ」

「秘技 笑いのツボ!!」ドスッ

俺に首のあたりのツボを押された文は突然笑いだし笑いが止められなくなった

「!? あははあはっ! はははははははは!」

5分後

やっと笑いが収まりだした文は笑い過ぎて酸欠状態になり地面に手をつき俺はその

隣にしゃがみこみ提案を言う

「ひー、ひー、ごめふふつなさふふつい」

「さて文、お前にはやってもらいたいことがある。俺のマツサージを新聞で記事にして幻想郷に広めてくれ」

「そ、そんなことでいいんですか？」

「ああ、だがまた俺の恋愛関係をネタにしたら…」

「したら？」

「笑いのツボ＋永琳の実験だ」

「ハイハイ！」

「さてと、じゃあ俺は帰るよ。」

俺は荷物を持って帰ろうとすると諏訪子がフロググポットをかかえながら聞いてきた

「この子はこのまま借りていい？」

「ああ、別にいいよ。あとそのスタックフォンも置いてくから用があつたらかけてくれ」

「それじゃまたな」

「またお願いしますねー！」

「早苗、ばかにあいつを愛おしそうに見てるじゃないか」

「べ、別にそうゆう風に見てませんよ！／＼／＼」

俺はそんな会話を聞きながら守矢神社を後にした

その頃 永遠亭では

「す、すいませんお師匠様もうしません、もうしませんからそれだけは勘弁してください
ウサ」

「あら、だめよ。大丈夫、痛みは一瞬だけだから」

「お願いしますから…その禍々しい色の薬剤はやめてください！」

「だーめ♪」ブスッ

「アアアアアアアア!？」

その後俺が帰ったら顔が青を通り越して緑になったてゐが倒れていた

第⑨幕 紅魔館Part 2

初仕事から5日後、新聞の効果で人里でも注文してくれる人が増えてきたそして今日は仕事を始めてから初の休日だ

「約束してた紅魔館の修理に行かなきゃな」

俺は永琳に場所と用事を伝えると工具箱を持って永遠亭を出た

「やっと出せるようになったこれを使うか」

俺はオーズドライバーを腰に装着し三枚の赤いメダルを出してオーズドライバーにセットしオースキャナーでスキャンした

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タージャードルー！』

俺はコアメダルで変身するライダー、仮面ライダーオーズの鳥系コンボ、仮面ライダーオーズタジャドルコンボになると俺は翼を広げ飛び紅魔館に向かった

紅魔館上空に来ると美鈴が俺の開けた穴を1割程直したところだったので俺は開けた穴から入ることにした

「よう、美鈴」

「ああ、紀斗さんですか。その姿は新しい装備ですか？」

「おう、仮面ライダーオーズタジャドルコンボだ。ところで修理で何か手伝えることはあるか？」

「中の方はある程度直して後はここだけなんですけど、直す材料の中に妖精メイド達だけじゃ運べない物もあってそれを外の倉庫から持ってきてくれませんか？運ぶ物は倉庫にいる妖精メイドに聞けばわかりますよ」

「わかった、行ってくるぜ」

俺は穴から飛びたつと敷地内の少し小さな小屋を見つけその前に降り変身を解いた
「……だな」

中には数人の妖精メイドがいて何かを運ぼうとしていた

「おい、美鈴から材料を運ぶのを手伝うよう言われたんだが」

「あ、ならこの木材と石膏を持っていってくれませんか？私達だけじゃ重くて」

妖精メイドの1人が指さした先には大量の木材や石膏などがあった

「わかった、任せとけ」

俺はそう言うのとバーストドライバーを腰に付けセルメダルを投入しハンドルレバーを
回転させた

「変身」

『カポーン』

俺はガシヤを彷彿とさせる仮面ライダーバースに変身した

「さーて、いっちょやりますか」

俺は材料を全て外に出すとセルメダルを2枚投入しハンドルレバーを回した

『カポーン カッターウイング』

『カポーン クレーンアーム』

その音声と共に右腕には先がフックになっているクレーンアームが装着され背中にはジェット機の翼のようなカッターウイングが装着された

「よっー！」

右腕を振るとクレーンアームからフックとワイヤーが伸び木材に巻きついた

俺はそのままカッターウイングで美鈴のところまで飛び穴にゆっくりと木材を入れた

「はー、そんなことも出来るんですね」

「石膏とかもすぐ持つてくるよ」

俺は同じことを繰り返し（石膏はさすがに手で持ったが）全ての材料を運び終えた

「じゃあ壁を直しましょうか！」

美鈴がそう言いさつき倉庫にいた妖精メイド達と一緒に俺は壁の修復作業に取りか

かった

数時間後

「やつと終わったな」

「やっぱり力が強い人がいるとスピードが違いますね」

「ははは、ツ!?危ねえ!」

俺は美鈴にタツクルすると美鈴のいた場所に弾幕が一発撃ち込まれた

そして弾幕が飛んできた方を向くとそこには虚ろな目をし顔に包帯のようなのが数カ所張り付いていたフランだった

「妹様!? 一体どうしたんですか!」

俺は美鈴がフランに近づこうとしたので慌てて止めた

「待て! 今フランはおそらくヤミーに寄生されている状態だ! うかつに近づくとやばい!」

「ヤミーってなんですか! 早く妹様を助けないと!」

「ヤミーってのは本来この世界にはいないはずのメダルの化け物だ、あと救出方法はあ
るから焦るな!」

俺が美鈴と話しているとフランの後ろから白衣を着た強面の男が出てきた

「お前だな、仮面ライダーの能力を持っている奴つつうのは」

「てめえ、何者だ。財団Xの輩か？」

「その通り、俺は財団Xのある支部の幹部、コードネームはGだ」

「まさか!?!:ゴキの怪人か？」

「んなわけあるかっ!Gの意味はなあ、グリードのGだよ!」

そのセリフと共にGの姿はオーズの敵であるグリードの一体、猫系のグリード、カザリの姿になった

「!?なんでカザリの姿に!?!」

「他にもなれるぜ」

Gはそう言うとかザリの姿からウヴァ、ガメル、メズールへと姿を変えてまたカザリの姿に変化した

「俺達財団Xはグリードのコピーを作ることに成功した。その技術で4種類のコアメダルのコピーを作りそれを俺自身に入れ俺はグリード化したんだよ」

「それよりもなんでてめえら財団Xが幻想郷にいやがる、俺はそこが不思議でしょうがねえんだがな」

「それは教えるとスキマ妖怪に駄目にされちまうから言うことは無理だな」

「それよりこいつは遊びたがっているから相手をしてやった方がいいんじゃないのか？」

「アそぶ、あそぶ、あそびタイ」ヒュッ

フランはつぶやきながら俺たちに弾幕を撃ってきた

「くそっ！ならこれだ！」

俺はセルメダルを一枚投入しハンドルレバーを回した

『カポーン クレインアーム』

紀「おらっ！」

俺はクレインアームを装着しクレインアームのフックとワイヤーでフランをぐるぐる巻きに縛った

「どうだ！」

「邪魔……」

「ギョツとして……ドカーン。」

ボンッ！

そのセリフを言ったと同時に俺の右腕のクレインアームが内側から爆ぜ使い物にならなくなる

「くっ！」

俺は一旦後ろに下がって体制を立て直した

「アソブウウウ!!」

フランが叫ぶと共にメダルがフランを覆い虎の姿を模し両腕に鋭い鉤爪を持ったトラヤミーになった

「ウウウウ!!」

「妹様!!はあっ!」

美鈴が弾幕を撃つとトラヤミーに当たったがまったくダメージは無いようだ

「弾幕は…効かないようですね」

「ここは俺に任せとけ。いくぞー!」

俺は二枚セルメダルを投入しハンドルレバーを回した

『カポーン キヤタピラレツグ』

『カポーン ドリルアーム』

すると俺の右腕にはドリルが足にはキヤタピラが装備された

「さらに神速【クロックアップ】!」

するとカプトでクロックアップを使ったように周りが全てスローになり俺はそのままたトラヤミーに近づき左腕でトラヤミーの肩を掴みドリルアームで突いた

ドリルは回転しどんどんセルメダルを奪っていき次第に中身が見えてくる

そしてフランが見えてきたらフランの腕を掴み一気に引きずり出した

そこでクロックアップがとけ周りが普通のスピードで動きだし俺以外の全員が一瞬でここまでされたことに驚く

「グアアアア!？」

「な!?!いつの間に!？」

「美鈴! フランを頼む!」

俺はフランを美鈴の方に投げ美鈴はうまくキャッチした

「紀斗さん!？」

「俺はこいつらとケリをつける」

「ふっ、まあいい。俺は実験結果を見れたことだし帰るとするか」

Gはそう言うのと壁に穴を開けそこから外に行ってしまった

「待て!」

「ウウウウ」

俺が追おうとするとトラヤミーが俺の前に立ち塞がり邪魔をしてくる

「くっそ!俺のドリルは!!天を突くドリルだ!!」

俺はそう叫びながらトラヤミーをドリルアームで突き外に吹っ飛ばした

「グガアア!!?グウ…」

トラヤミーは地面に激突しうめいていた

「あの野郎はっ！」

俺は外を見回すがGの姿はなかった

「ちよつと! どういう状況よ、これは!」

「ああ、咲夜さんか。俺はあれを始末するんで状況は美鈴から聞いて下さい」

俺はそう言うのと外に飛び降りた

「さーて、覚悟しろよ、ネコやろう。」

「アソブウウ!!」

トラヤミーはそう叫ぶと飛びかかってきた

「ふんっ!」

俺はその攻撃をトラヤミーの顔面をキヤタピラレグの片足で受け止めることで防

ぎそのままキヤタピラを回転させた

「グギヤアアア!?!」

「オラツ!」

俺はキヤタピラを回転させたままトラヤミーを踏みつけセルメダルを投入しハンド
ルレバーを回した

『カポーン ブレストキヤノン』

俺の胸にキヤノン砲が装着され俺はさらに二枚セルメダルを投入しハンドルレバー

を回した

『カポーン カポーン セルバースト』

「ブレストキャノン…発射!!」

俺は足をどけダメージで動けないトラヤミーにセルバーストを発射した

「グアアアアアア!!」

トラヤミーは盛大に爆発し周りには大量のセルメダルが飛び散った

「おゝ、大量♪大量♪」

「さて、後片付けはお願いね」

後ろを向くと咲夜さんが有無を言わせないオーラを出しながら笑顔で立っていた

「…はい」

俺は新しく出したバーストライバーで再変身しクレーンアームで敷地じゆうに散らばったセルメダルを集め壊された壁を直していた

「つたく、あの野郎無駄に直すところ増やしやがって」

作業を続けていると後ろからフランがうつむきながら近づいてきて俺の背中を突つ

いてきた

「ん? どうした、フラン?」

俺は変身を解いてしやがみフランと同じ高さで話しかけた

「えと…その…あの、わたしのせいで迷惑かけてごめんなさい！」

フランは少しもじもじとしてから覚悟を決めたように頭を下げて謝った

「いいんだよ、今回はお前のせいじゃねえ。Gのゴキ野郎のせいだ。だから今回のことはあんま気にすんな」ナデナデ

「うん！」ニコッ

俺はフランの頭をなでながら言うと言うとフランはとてもまぶしい笑顔で勢いよく返事をした

「妹様、ご自分から謝られるなんて」ダラダラ

「ちよつ咲夜さん！鼻血！鼻血！」

廊下の角から鼻血をすごい勢いで出しながら見ている咲夜さんを冷めた目で見てからフランに向きなかつた

「俺はまだここを直さなくちやいけないけど今度暇な時があったら遊ぼうな」

「うん！」

俺はその後フランに連絡用としてビートルフォンをあげ壁を直しフラン達に別れを言つて永遠亭に戻つた

「うゝ、咲夜ー、プリン食べてたら出るタイミング無くしちゃつたゝ」

「お嬢様、大丈夫ですよ。またチャンスはありますよ。ハアハア」ダラダラ

「えへへ、これ壊さないようにしなくちや♪」
「♪」

第十幕 宴

紅魔館に行った日から数日、そろそろ桜が咲いてくる時期の中俺は仕事のために荷物を持ってマシンドンバードで人里に向かっていた

「ん？ありやありリーホワイトか」

俺は上を見上げると春告精で有名なリーホワイトが飛んでいた

「春ですよー」

そしてそのセリフと同時に周りに桜色の弾幕を大量に無差別で放ってきた

「んなつ!?!やべえっ!」

俺はなんとか弾幕を避けるとリーホワイトは満足そうに何処かへ飛び去って行った

「危ねえ、危ねえ毎年あんなのやってんのか」

ピチューン ピチューピチューン

「……」

どうやら他の場所でも被害があるようだ

俺はどこかの誰かのピチュー音をBGMに人里に向かった

俺は何軒か仕事を終え最後の慧音さんのところに行くときまだ授業中なようで寺子屋の前で待つてることにした

数十分後

「zzzz…はっ！寝てた」

俺は寺子屋の中を見るとちようど授業が終わったようすで子供達が出てくるどころだった

「あー！仮面ライダーの兄ちゃんだ！」「ほんとだー！」「遊ぼー！」

「ははは、慧音さんどうした方がいいですかね」

「他の仕事が無いなら私より子供達の相手をしてくれないか？子供達も君と遊べるのを楽しみにしていたからな」

「わかりました。ほら、今遊んでやるからちよつと離れてくれ」

俺は以前のようにカンドロイドやディスクアニマル、フードロイド、プラモンスター達を出して遊ばしている

そして俺はウィザードのコネクトやエクステンドを使って子供達を喜ばせていた

20分後

「はい、今日はここまで。みんなおうちに帰りな」

「えー。」「もつと遊びたい！」「もうちよつとくらいいいじゃんかー」

紀「はいはい、聞き分けない子には笑いの止まらなくなるツボを押すぞー」

俺はそう言つてねだつてくる子供達に向かつて言うが

「何それー」「やつてみるよー」「慧音先生の頭突きの方がこえーよ」

わんぱくな子供達は信じず挑戦的に言つてくる

「よーし、ならやつてやろう」

俺は1番生意気なことを言つてきた子を捕まえて後ろを向かせ首のあたりのツボを弱めに押す

「いくぞ、笑いのツボ手加減ver!!」

「あははははは！ははは！はははっ！」

2分後

「はははっはごめんははっなさい」

「これを他に受けたい奴はいるか？」

子供達は皆すごい勢いで首を横に振つた

「じゃ、みんな帰りな。お前はもう立てるか？」

「う、うん」

子供達は皆帰り俺と慧音さんだけになった

「待たせて悪いな。それじゃ仕事といきますか」

「ああ、よろしく頼む」

side 妹紅

あたしは藤原 妹紅

なんか作者が思いつきでside changeしてきやがったがまあいい

あたしは竹林でタケノコが採れたので慧音におすそ分けに行くと中から慧音とこの前から永遠亭に住んでる紀斗とかいう男の声が聞こえてきた

あたしは静かに慧音の家の中に入り2人がいるらしい居間の障子の辺りで聞き耳をたてた

「気持ちいいですか？」

「ああ、なかなかうまいな、アツ」

「途中で痛かったら言ってくださいね」

「大丈夫だ。ンツ、むしろとてもいいよ」

「けーーーーーねーーーーー!!」

「なっ!!?ぶべらっ!!」

「えっ!!?妹紅!!」

あたしはもう我慢出来なくなつて障子を蹴破りながら飛びこんでしまったがこの時

のあたしの行動を誰が責められようか

side 紀斗

俺は今いきなり妹紅に顔面を蹴られすぎい勢いで揺さぶられている

「おい！テメー慧音に性的に手え出したろ！絶対出したろ！」

「いやいやいや！出してない！出してない！仕事でマツサージしてただけだ！」

「アア、だったらさっきの声はなんだよ？明らかにそういう感じの声だったろーが！」

「落ち着け、妹紅！紀斗の言っていることは本当だ！」

「慧音、本当だな？本当に貞操は無事なんだな？洗脳とか脅迫とかされてないんだな？」

「俺がそんなこと出来るか!!」

「紀斗の言うとおりで。私はそんなことされる筈が無い。で妹紅、お前は今日は何で来たんだ？」

「ああ、タケノコが採れたからおすそ分けにきたんだ。それで家の前まで来たら慧音と紀斗の声が聞こえてきたもんでつい。」

「まったく。ん？それは今日の新聞か？」

「さっきここに来る途中に文屋が落としてったから拾ったんだ。記事はまだ見てないけどな」

「ほお、今度の日曜に春祭りを博麗神社でやるそうさ。妹紅、一緒に行くか」

「ああ、わかった！酒も持ってこーぜ！」

「なあ。」

「ん？」

「俺は仕事を再開していいか？」

「あ。」

俺はその後マツサージの続きをやり妹紅からお詫びにとタケノコを少しわけてもらい永遠亭に戻った

春祭り当日

俺は今永遠亭組と荷物ををBRACK RXのライドロンに乗せて移動している

「紀斗、あんたこんなまで出せたのね。これなら飛ぶより楽でいいわ」

「本当はもつと楽なものもあるんですけど今の俺の実力じゃこの人数を運べるのはこれしか出せないんでね」

俺がそう言うのとライドロンは少し怒ったような音を鳴らした

「悪い、悪いお前も充分すごい奴だからそんな機嫌損ねんなって。」

ライドロンはしようがないなといったような音を鳴らした

「まさか意思を持つ乗り物があるなんてね。」

「付喪神だつて元は道具なんだ乗り物が意思を持つても不思議じゃないさ。ま、こいつ

は付喪神じゃないがな。」

そんな会話をしているうちにライドロンは博麗神社の階段前に着いた

俺はライドロンを消しトレーニングをかねて弁当以外の荷物を全て背負うと階段を登り始めた

(ま、重さとしては20キロぐらいだな。)

「あら、飛んでいかないの？」

「ええ、トレーニングは日頃からおかないとすぐなまっちゃいますからね」

「一応飛んでいこうと提案はしたんですけどね」

「聞かないんだよねー」

「ま、弁当は優曇華が持つていくしやりたいようにやればいいわよ」

「じゃあ私も一緒に走っていいこうかし。」

「師匠もですか!？」

「ええ、最近こういう運動もしてなかったしね」

「太ったからダイエットしようとしてるね」ボソッ

「てゐ、聞こえてるわよ。」ゴッ!!

「ッッッ!」

「さ、行きましょ。」

「俺と永琳は階段を登り始め輝夜と鈴仙は飛んで博麗神社に向かいてゐは遅れて階段を登っていった

博麗神社に着くと見知ったメンバーやまだ会っていなかったメンバーも準備をしているところだった

「来たわね、今回はイベントもあるけど参加する？」

「どんなイベントだ？」

「ダンス大会よ。まあ優勝候補は衣玖あたりね」

「ダンスの曲は決められるのか？」

「ええ、その曲はCDで流せるなら何でもいいわ」

「わかった、参加するぜ」

「あら、意外ね。あんた踊れたの？」

「能力を使えばな、バックダンサーをつけるのはありか？」

「そいつらの了承がとればOKよ」

「わかった、じゃあまた後でな」

俺は永琳達と料理をある程度食べ永琳と少しイチャついてからまだ会っていない人達と顔合わせをするためにそこらをぶらつくことにした

「あ、紀斗さーん！」

少し歩いていると早苗に声をかけられ声の方向を向くと守矢神社の三人が料理を食べていた

「よう、あれから調子の方はどうだい？」

「はい！あのマッサージをやってもらってから信仰も少しですけど増えましたし、体の調子もすごくよくなりました！」

「そりゃよかった。新しいDVDはあるかい？」

「あ、よろしくお願いします」

「そちらが噂のマッサージ師さんですか？」

初めて聞く声だったので振り向くとそこには聖　白蓮率いる命蓮寺のメンバーがいた

「初めまして、私は聖　白蓮。命蓮寺の住職をしています。後ろにいるのは我が命蓮寺の門徒達です」

「俺は海堂　紀斗。永遠亭に住んでるしがないマッサージ師だ。よろしく」

俺は聖と握手すると聖は不意に質問してきた

「ところで紀斗さん、あなたは今どこかの宗教に属していますか?」

俺は嫌な予感があったので手を離そうとしたが聖は魔法を使っているようでまったく外すことが出来ない。しかも周りには逃げられないように命蓮寺のメンバーが俺を取り囲むようにしている

(あ、これ詰んだ)

聖「どうしました?すごい汗ですよ」

聖はにつこりと微笑んでくるが今の俺にはそれが悪魔の笑みにしか見えない

仕方が無いので俺は意を決して答える

「…無宗教です」

「そうですか、ならば是非我が命蓮寺に入門しませんか?共に差別の無い平等な世の中にしましょう」

「いや、俺は宗教に属する気は「さ、ではこの入門証にサインを」

「いや、だからおr「サインを」

「i「サインを」

「駄目ですー!!」

「紀斗さんは守屋神社を信仰するんです!勝手に勧誘しないでください!」

「あら、信仰するのは個人の自由ですよ。勧誘するのも同じです。あなたこそ勝手に紀

斗さんが信仰すると決めつけているんじゃないですか？」

「いや、だから俺はどっちにも入る気は、「紀斗さんは黙っててください！」「ええー…」

「わかりました。そこまでいうならこの後のダンス大会で勝負です！」

「いいでしょう。勝った方に紀斗さんが信仰するという形で行きましょう」

（俺自身の決定権がねえ）

俺はあの後俺自身が勝ったら俺は自由という条件をつけなんとかあの場を逃げのびた

そして少し歩くとレミリア達紅魔館のメンバーがいた

「あー！お兄ちゃん！」

「お兄ちゃん？」

「何故かこの前から妹様はあなたのことをそう呼びたがるんですよ。ボソツ…妬ましい」

「お兄ちゃん！あの時もらったこの子！大事にしてるよ！えらい？」

フランはビートルフォンを肩に乗せて首を少し傾け上目遣いで聞いてきた

ブバーー

俺の後ろで鼻血の花が咲いたがフランやレミリアには絶対にかからないようにしているからすごいものだ

「おう、えらいぞうフラン。ご褒美だ」

俺はフランの頭を撫でてから能力でデネブキャンディーを出して包み紙を外しフランに渡した

「これなに？」

「デネブキャンディーだ。甘くてうまいぞ」

フランはデネブキャンディーを口に入れると途端に満面の笑みになった

「おいひ〜」

「ははは、だろ」

「我が一生に一片の…悔い…なし…ガクッ」

「咲夜さん！しっかりしてください！」

「じゃ、また俺が紅魔館に来たら遊ぼうな」

「うん！」

「♪」

俺は少しそこから離れるとレミリアが話しかけてきた

「この間ありがとうね。フランが世話になったわ」

「ああ、いいんだよ、別に。ただ俺がやりたいことをやっただけだし」

「それでもよ。このくらいの礼儀は紅魔館の主として持つておかなくちゃならないし

ね」

レミリアはデネブキャンディーを舐めながら美鈴達と談笑しているフランを見た
「あの子もちゃんとした笑顔を浮かべることが多くなってきたしね」

その時のレミリアの表情は紅魔館の主としての顔では無くただの妹思いの姉の顔
だった

「…お前もデネブキャンディー食うか？」

「もらっておくわ」

ペロッ

「ほんと、甘いわね」

「その方が良くもいっばいあるぜ」

「それもそうね。」

「そんじや、俺は別のところに行くよ」

「ええ、また会いましょう。」

俺はそう言いその場所を離れた

「ハッ！お嬢様がキャンディーをペロペロしている！いいっ！実がいいっ！！」

「咲夜さん、いいかげんに鼻血止めましょうよ」

俺はその後宴内のいろいろなところを歩いていろんな人？達と話した

白玉楼の幽々子と妖夢からは今度会った時でいいからとマツサージや勝負をして欲しいと頼まれた

神靈廟の豊聡耳巫女や布都、屠自古達からも勧誘されはしたがこちらは今度マツサージをただでしてあげるといふ条件で断ることが出来た

青娥や芳香にも会い芳香から食べ物ねだられ鴻上さんのケーキを何個が出すと喜びながら頭からケーキに突っ込んで食べていた

妖怪の山の住人達とも会いにとりには一つ依頼をして対価にアंकが使っていたPadを出すと言いで引き受けてくれた

映姫様と小町には挨拶と菓子を差し入れとしてあげ少し会話をしているといつのまにか小町への説教になってしまったのでその場を後にした

他にも魔理沙やアリス、八雲家、バカルテツト十大妖精、衣玖さん、天子、阿求、香霖、萃香、勇儀、霊夢といろんな場所で会話をして楽しんだ

そして永琳達のところに戻ると何故か輝夜が妹紅とケンカを始める一步手前だった

第十一幕 ダンス大会

『ダンス大会が始まるわよー！出場者は会場の舞台裏にすぐ来なさい！』

マイクを使った霊夢の声が響き渡り俺も舞台裏に行くことにした

「それじゃ、行ってくるよ」

「頑張つて、期待してるわ」

「ああ、優勝出来るよう頑張るよ。」

俺は永琳を軽く抱きしめてから舞台裏に向かった

「早いねえ、もう人目もはばからず抱きついていくとは」

「／／／」

「まだこっちは慣れてないみたいだけど」

「ふふふ、このイベントも楽しめそうね」

「師匠く、しっかりしてくださいーい！」

舞台裏

舞台裏では文の助手である権が受付を行っておりそこには何人もの出場者が集まっていた

「出場者はこちらに名前とBGMの曲名を書いてください。」

「順番はどうなるんだ？」

「順番はランダムに決まります。たとえ自分の前ですごく盛り上がりつつも自信がないという理由で逃げないでくださいいね」

「誰がするか、そんなことやるくらいなら出場しないよ。」

「ははは、ですよー」

「おや、あなたも参加するんですか」

「ああ、衣玖さん、さつきぶりですね。負けませんよ」

「ええ、こちらこそ」

俺は衣玖さんと握手するとその場を後にした

(絶対勝って紀斗さんを守矢神社の信者に)

(信仰を増やすために、絶対勝ちます)

「なんか悪寒が…」

「えー霊夢さんは選手として出場するためここからの司会は私、射命丸 文が務めさせていただきます」

「司会補佐の権です。よろしくお願いします」

「ではルール説明から参りましょう。勝負形式は点数制！出場者の中から高得点を取っ

た2人が決勝戦でダンスバトルをします！注意すべき点は五つ！その一、弾幕は無し、その二、能力の使用はあり、その三、スペルカードも無し、その四、バックダンサーはバックダンサーの了承がとればOK、その五、審査員がダンスと認めなければ失格、ルールを破った場合きつゝいお仕置きが待っていますのであしからず」

「それでは審査員の紹介をします」

「白黒つけるといったらやつぱりこの人！四季 映姫・ヤマザナドゥさん！」

「よろしくお願ひします」

「幻想郷一のバブ「スキマに落とすわよ、このバカラス」失礼しました！幻想郷一の賢者

！スキマ妖怪、八雲 紫さん！」ガタガタ

「はーい、よろしくね」

「外界でいろいろなダンスを見てきた現人神！東風谷 早苗さん！」

「どうも」

「あれ、早苗出ないんだ。じゃあ出るのは諏訪子か神奈子のどっちかか」

「幻想郷のインデックス！一度見たものは忘れない稗田 阿求さん！」

「よろしくお願ひします」

「そこらへんにいたので捕まえてきました！森近 霖之助さん！」

「やれやれ、なんで僕が」

「以上！5名の審査員によるジャッジで高得点を出した上位2名が決勝戦に進めます！」

「お次は選手の紹介です。」

「エントリーN.O. 1！幻想郷で一番フィーバーしている人！空気の読める龍宮の使い手！永江 衣玖さん！」

「頑張らせていただきます」

／キヤークサーソン／

「エントリーN.O. 2！幻想郷一のナイフの使い手！紅魔館のメイド長！十六夜 咲夜さん！」

「この大会への参加はお嬢様の命令で仕方なくよ」

「冷めてますねー。それでは次の方」

「エントリーN.O. 3！最近来た外来人！仮面ライダーはダンスも出来るのか！海堂 紀斗さん！」

「勝つけどいいよね、答えは聞いてない！」

「自信满满ですね。それでは次の方」

「エントリーN.O. 4 外界から引越してきた神の一人！冬眠から目覚めたばかりで大丈夫か!? 洩矢 諏訪子さん！」

「冬眠はしてないよー！」

「エントリーN o. 5！命蓮寺の住職！ガンガンいく僧侶！聖　白蓮さん！」

「信仰のためにも頑張ります」

「エントリーN o. 6！辻斬りはなるべくひかえてください！半人半霊の白玉楼の庭師
！魂魄　妖夢さん！」

「辻斬りの件は…善処します」

「その間はなんですか!? それでは次の方」

「エントリーN o. 7！ただいま厄はひかえております！妖怪の山の厄神様！鍵山　雛
さん！」

「にとりの発明のおかげでこの大会に出られました」クルクル

「にとりさんの発明ですか？」

「はいこの厄を出させないシュシュのおかげです。以前もここじゃないところで使いましたけど」クルクル

「すごいですね。それでは次の方」

「エントリーN o. 8！魔法の森の人形使い！アリス　マーガトロイドさん！」

「私の説明適当じゃない？」

「これぐらいしか思いつきませんでした。それでは次の方」

「エントリー N o. 9! 星を撒き散らす最速の魔法使い! 借りた物は死ぬまで返さない! 霧雨 魔理沙さん!」

「死んだら多分返すぜ」

「死ぬ前に返してほしいものです。それではラストの方」

「エントリー N o. 10! 皆さんご存知博麗神社の貧乏脇巫女! 博麗 霊夢さん!」

「優勝賞品はわからないけど金になるなら絶対渡さないわ!」

「賞品はあと少しで言うので待っててください。…さて、これで今回の出場選手は全員揃いました! この中で誰が勝ち残るのか! 賭けは向こうでうちのほたて「はたてだ!」がやっていますので、倍率はその上のモニターに表示されています」

「さてさて、それでは! 皆さんお待ちかねの優勝賞品を紹介しましょう! これは知らせると絶対に参加希望者が大量に出してしまうので秘密にしています! そしてその優勝賞品とは………これです!」

文が懐から出したのはアルバムで表紙には『幻想郷の美男美女隠し撮り集』と書いてあった

『な、なんだって……!?!』

参加者も観客もその賞品を見た者全員が驚きの声をあげ文はドヤ顔をしながら説明をする

「これは私が幻想郷中を飛び回り集めた写真集です。古参の人から最近来た人までありとあらゆる人の隠し撮り写真が詰まっています」

「くそっ！あたしも出とけば！出とけば慧音の写真を手に入れることが出来たかもしれないのにー！」

「橙の写真がああああああ！」

「いやー観客席は血涙の洪水ですねー。それに対して出場者達は……燃えていますね。ガチで」

「お嬢様の写真妹様の写真お嬢様の写真妹様の写真お嬢様の写真妹様の（ry）」

「魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙（ry）」

「それを手に入れて高値で売れば……ふふふふ」

「諏訪子様！絶対勝ってください！」

「任せなさい！」

「妖夢く、負けちゃ駄目よ。」

「が、頑張ります。」

「うおおお!!永琳の写真は誰にも渡さん!!」

「あやや……大変なことになってますね。ちなみに副賞は食材の一ヶ月分詰め合わせです」

「それでは20分後に開始しますので選手の皆さんは舞台裏に戻ってください」

18分後

「そういえばまだ順番を決めていませんでしたね。では、モニター come on!」

文が無駄にいい発音で言うとうと舞台の床が開きそこからでかいモニターが出てきた、そしてモニターの電源がつくと参加者全員の名前が映されていた

「この参加者達の名前がシャツフルされ上から順にやっていく形となります。このスイッチを押したらシャツフル開始です」

文はモニターの裏からスイッチを取り出しながら言った

「では、いきますよーポチツとな」

文がスイッチを押すと名前がシャツフルされ一気に順番が決まった

1 魂魄 妖夢

2 洩矢 諏訪子

3 アリス マーガトロイド

4 十六夜 咲夜

5 霧雨 魔理沙

6 聖 白蓮

7 鍵山 雛

8 海堂 紀斗

9 博麗 霊夢

10 永江 衣玖

「決まりました！それではこの順番でいきますのでもう少しお待ちください」

2分後

妖夢がステージに出てきて全ての準備が整った

「準備が出来ました！さあ、それでは参りましょう！魂魄 妖夢さん。BGMは東方妖
妖夢です。」

※歌詞は割愛させていただきます

妖夢は周りの桜の花びらを振った剣の風で舞わせそれと同時に自分も舞いまさに花
びらの舞を上演したダンスをした

「お見事でした！妖夢さんの剣と桜の花びらが見事にマッチしてましたねえ」

「まさに妖夢さん自身を表すような素晴らしい舞いでしたね」

「ちなみに得点は全員終わった後に出ますのであしからず。では次の人、行ってみよー

！」

「次は洩矢 諏訪子さん曲はケロ⑨destinyです。…あれ？諏訪子さん？」
「いっくよー！」

諏訪子の声が舞台裏から聞こえると同時に舞台裏から巨大な何かは舞台の壁を飛び越えステージに着地した

ドスン！

「やれやれ、この老体で跳ぶのはちと疲れるわい。」

巨大な何かはガマだった、諏訪子はそのガマに乗って舞台裏から飛び出してきたらしい

「あ！大ガマだ！」

「大ガマさんお久しぶりでーす」

「おお、お前達か「話は踊った後でねー」だそうじゃから、また後でな」

（あれは文花帖に出てきた大ガマか。よく出てきたな）

「それじゃ、ミュージックスタート♪」

諏訪子は大ガマの上で踊り大ガマの周りには普通のカエル達が跳ねたりしながら踊り楽しいダンスとなった

「ありがとうございました。いやーまさか大ガマさん連れてくるとは」

「予想外でしたがその分面白いダンスになりましたね」

「お次はアリスさん！BGMは魔理沙は大変なものを盗んでいきました。です！」

アリスは自分と一緒に人形も踊らせながら途中で別の種類の人形も出して踊らせ最後は綺麗なお辞儀をして終わった

「さすが人形使い、見事な人形さばきでしたね」

「自分自身のダンスもよかったですですがそれをやりながら人形達に別の動きのダンスをさせるのもすごいですね」

「さて次は、紅魔館のメイド長、咲夜さん！BGMはさつきゆんライトです！」

咲夜さんは能力を連続で使い次の瞬間には全く違う動きをするという他の人には真似出来ないようなダンスをした

「潇洒と言うたびに全く違うポーズをとってるんですからすごいですよね」

「賞品が賞品だけにいつもより本気なんでしょうね」

「さあ！お次は魔理沙さん！箒に乗って登場だー！BGMは恋色マスターパーク！」
「張り切っていくぜ！」

魔理沙は箒で飛びながらアクロバティックなダンスをし最後は箒から飛び降り着地して箒をキャッチし一礼して終わった

「箒で飛びながらダンスという離れ技をした魔理沙さん。やはりすごいですね」

「まあ、途中何度か落ちかけましたけどね」

「それを言っちゃ駄目なんだぜ！」

「さあ、出場者も半分を切りました！次はこの人！聖さん！バックダンサーには星さんと村紗さん、一輪さん、雲山さんでBGMはwhite outsです！」

「皆、いきますよ」

「はいっ！」

「(・・ω・)b」

聖はエア巻物を広げながらいろいろな武道系の動きをしそれに合わせて後ろの4人も踊っていた

「聖さんの流れるような動きもよかったです！雲山さんのダイナミックな動きもすごかったですね」

「皆さん本当に息が合っていましたね」

「お次のダンサーは雛さん！バックダンサーにはにとりさんです！BGMはヤクプリ！それではどうぞ！」

雛はステージ中を移動しながらにとりと回転を主にしたダンスを踊り途中でにとりの発明なのか、にとりの背中のリュックからいろいろな花の花びらを噴き出しながら回っていた

「いやー、回ってましたね」

「やはり雛さんといえばこの回転ですよ」

舞台裏で俺はバックダンサー役を頼んだチルノがいつも一緒に遊んでいるメンバー達、通称⑨インテットと待っているとようやく俺の番までまわって来たようだ、俺は舞台に出る前に能力を使う

「スキルコピー『リュウタロスのダンスと洗脳能力』」

すると俺の髪に紫色のメッシュが入り瞳が紫色になりR良太郎が付けていた帽子とヘッドホンを付けていた

これは最近少し使えるようになった能力で仮面ライダーの登場人物の特技や能力を使えるようになるというものだ、これに気づいたきっかけは俺が料理当番の時に（天道みたいに料理がもつとうまくなればいいのに）と思いながら料理をするといつもよりうまく作れたので、もしかしたらと思いい他の登場人物とその特技を思い浮かべながらやるとその人物の特技が出来ることがわかった、ただし欠点があるとすればこれを使っている最中はその人物の性格になってしまふということだが、あとこの格好は気分だ「すげー！なんか少し変わった！」

「それも能力ですか？」

「うん♪仮面ライダーの登場人物の特技をコピー出来るんだ♪」

「なんか雰囲気変わったね」

「変わったのかー」

「それより本当にバックダンサーは私達でいいの？私達全然踊れないよ」

「大丈夫、ちよつと催眠をかけて踊れるようにするから♪」

「さ、催眠ですか？」

「何も心配ないよ♪後遺症とかはないから♪」

パチン！

俺が指を鳴らすと5人は一瞬うつむき顔を上げたらその瞳は一瞬紫色に光った

「さあ！お次は今回の大会の白一点！仮面ライダーこと海堂 紀斗さんです！バックダ

ンサーは：⑨インテットことチルノ、ミステリア、リグル、ルーミア、大妖精ですがちゃ

んと踊れるのでしょうか？BGMはCLIMAX JUMP HIPHOP ver

すー！

俺は一人でステージに登場しステージの真ん中まで来ると観客席に指を指し言った

「始めるけどいいよね、答えは聞いてない」

俺は腕を上に向けると指を鳴らした

パチン

その音と共に舞台裏からチルノ達が飛び出してきた

「ミュージック、スタート」

俺はリュウタロスのスキルのブレイクダンスを踊りさらに暗示で五人にはそれに合わせるように踊らせた

「意外や意外！紀斗さんのダンスもすごいですがああ五人がここまで踊れるとは！」（少し妙な感じはしますがね）

「ブレイクダンスはここでは出来る人はほぼいませんからこちらとしては目新しい感じがしますね」

俺は拍手をもらいながらステージを後にして一緒に降りてきた五人の催眠を解いた

「『はっ。』」

「お疲れ様♪楽しかったよ♪はい、ご褒美」

俺はデネブキャンディーを五人に渡してスキルやメッシュも解いた

「ふう、まだこれも少ししんどいな」

「さあ、お次は我らが博麗神社の脇巫女！博麗 霊夢さん！BGMはねこ巫女れいむですー！」

「優勝の為なら手段は選ばないわ」スチャ

I 霊夢は猫耳と猫しっぽを装備した！

霊夢はお祓い棒を振りながら踊りウイंकなどを審査員達のほうへやっていた、そのせいか途中で紫さんが鼻血を出していたが

「さすがにこの曲は踊り慣れていきますね」

「審査員の方達のほうへばかり意識はむいていましたかね」

「さあ、お次で最後です！ トリを飾るのは永江 衣玖さん！ BGMは *get alone* *g in life* です！」

あ…ありのまま 今起こったことを話すぜ

俺はステージ近くで 衣玖さんが踊っているのを見ていたんだ、だが気がつくとな俺は
フィーバーのあのポーズをとっていた、いや俺だけじゃなく観客や審査員、司会、解説
その場にいた全員が無意識のうちにそのポーズをとっていたんだ

何を言ってるかわからねーと思うが気づいた時には皆この体制だったんだ

超スピードだとか催眠術だとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえもつと恐ろしい
ものの片鱗を味わったぜ

「はっ！ 無意識のうちにポーズを…。なんとというダンス。私、弟子入りしたくなつてしまします」

「まさかここにいる全員が同じポーズをとってしまっただけとは」

「さあ！これで全選手のダンスが終わりました。これからモニターに全選手の点数が下から順に出てきます」

モニターが出てきて電源は付いたがまだ今は1〜10までの数字が書かれているだけだ

「まず第10位は……霧雨 魔理沙さん！378点黒です！」

「マジかよ〜」

「やはり落ちそうになったところが痛いですね」

「続いて第9位！「あたい？」んなわきやないです。第9位は……洩矢 諏訪子さん！

380点黒です！」

「あーうー、ごめんね早苗勝てなかったよ。」

「気にしないでください。紀斗さんは向こうに持ってかれても絶対改宗させますから！」

「俺の自由は……」

「さあ、どんどん行きますよ！第8位は……鍵山 雛さん！384点白です！」

「負けちゃったかー」くるくる

「次があるよ、雛」

「お次の第7位は………聖 白蓮さん！385点黒です！」

「今日のところは紀斗さんを諦めるしかありませんね。まあ、チャンスはいくらでもあるからいいんですけどね」

「ゾクツ な、なんだ今の寒気は」

「お次の第6位は………魂魄 妖夢さん！389点白です！」

「…負けた」

「妖夢く、後で罰ゲームね。」

「…はい」ズズーンorz

「続きまして第5位は………博麗 霊夢さん！390点黒です！」

「ちよつと！なんであたしがそんな点数なのよ！」

「それはあなたがこちらに対してばかり気にして観客に対しておろそかになっているからです」

「あなたは白黒つけてるだけでしょーが！他の奴らは！」

「あたしは100点つけたんだけどねく」

「映姫様と同じ考えです」95点

「右に同じです」97点

「同じく」98点

「うー、悔しー！」

霊夢は泣きながらどこかに走りさってしまった

「さて気を取り直して第4位！第4位は……アリス マーガトロイドさん395点白ですー！」

「魔理沙の写真が……」 or z

「さあ、ここからベスト3です！第3位は……十六夜 咲夜さん398点黒です！」

「お、お嬢様の写真が……妹様の写真が……遠のいて……い……く」 バタリ

美 「咲夜さーん!?!」

「はい、救急隊の方よろしくお願いしますねー。続いて第2位は……海堂 紀斗さん399点白ですー！」

「まだだ！まだ決勝戦がある！」

「そして待望の第1位は……永江 衣玖さん400点白！満点です！」

「ありがとうございます。決勝戦も頑張ります！」

「さー順位は出しましたがまだこの大会終わっちゃあいけません。むしろここからがメイン！決勝戦ダンスバトルだー！」

／ワアアアアアアアアアアアアアア／

第十二幕 ダンスバトル

「ルール説明といきましようか。ルールは簡単、踊りながら戦う！これだけです。注意点は一回戦とほぼ同じそれにプラス飛ぶのが禁止になっています。そしてステージ外に出るのも禁止。これらのルールを破った場合即反則負けです」

「ちなみに制限時間が決められ5分間で決着がつかなかった場合そこから1分だけスペルカードの使用が認められます。ま、それでも決着がつかなかったら引き分けで賞品は副賞を半分にするだけですけどね」

「絶対負けねえ」

「こちらも手加減はしません」

「スキルコピー『リュウタロスのダンス』」

俺は能力でまたリュウタロスのダンスをコピーし電王ベルトとパスを出し腰に巻いた

「変身」

『Gun Form』

俺は電王ベルトの紫のボタンを押しパスをセタッチし紫色の竜を模した仮面ライ

ダー電王ガンフォームに変身した

「お前、倒すけどいいよね？ 答えは聞いてない」

「倒される気はありませんし人の答えは聞きましよう」

「準備はいいですね？ では曲が流れたら試合開始です。ちなみに曲は途中で変わることもあります。それではミュージックスタート！」

最初のBGMはグル○レースだった

「くくよ」

曲が始まった瞬間俺は回りながら衣玖さんのいる方向にデンガツシャー ガンモードの銃口を向け連射する

しかし衣玖さんはそれを跳んでかわし俺の真上から羽衣のドリルで突き刺そうと自分自身も回転しながらかなりの勢いで降りてきた

それを俺はバク転で後ろに避け俺がいた場所に銃を撃った

けれど銃弾は全てドリルに弾かれそこから衣玖さんの回し蹴りがとんできた

俺はそれをサマーソルトで上に蹴り上げBGMのリズムに合わせてデンガツシャーを何発も撃った

それを受けた衣玖さんは後ろに吹き飛びながらも空中で一回転し体制を立て直した

※銃の方は本来の威力ではなく当たったらあざ程度になるよう調節されています

BGMは変わりどうやら衣玖さんのテーマ曲である『黒い海に紅く
ary Fish』になったようだ

「この曲なら完全な本気が出せます」

衣玖さんはそう言い舞いながらこちらに近づいてきた

俺はバックステップを踏みながら銃を撃つが羽衣で弾かれたり避けられたりして
まったく当たらない

「くっ！」

俺は衣玖さんに目の前まで迫られ回し蹴りを放つが衣玖さんはそれを体を仰け反ら
して避け無防備になった俺の背中に体を回転させながら放たれた蹴りが炸裂した

「うあっ!？」

「まだまだいきまます！」

さらにそこから羽衣のドリルを俺の背中に当ててから上に放り投げた

「ファイバー！」

「グアアアアアア!？」ビリビリ

そして上空で俺は衣玖さんの雷を喰らいそのままステージに落ちた

「ふっ、決まりましたね」

「まだ…だよ」

衣玖さんが完全に終わったと思いで顔していたが俺は痺れる身体に鞭打ちなんとか立ち上がった

「まだ出来るんですか？」

「もちろん。それにそろそろBGMもチェンジだ」

ちようどBGMは変わり『Double Action uniform』が流れ始めた

「ここから僕本気出すけどいいよね？ 答えは聞いてない！」

「だから人の答えは聞きなさい！」

衣玖さんはそう言いながらステップを踏んで近づいてきたが俺はデンカメンが邪魔にならない体制でヘッドスピンをしながら何度も蹴りを放ち衣玖さんを怯ませる

「ッ!？」

そして衣玖さんがひるんだところで俺はデンガッシャーを撃ち吹っ飛ばした

「最後、いくけどいいよね？ 答えは聞いてない」

『Full Charge』

俺はベルトにセタツチしデンガッシャーにパワーを貯めそれを両手で真上にかざしてから胸の前まで下ろし両肩のドラゴンジエムとデンガッシャーの銃口にパワーが集まり出来た球体を発射した

その球体は衣玖さんが即座にドリルにした羽衣とぶつかり拮抗する

「ハアアアアアアアア!!」

そしてワイルドショットの球体は爆発しその爆発は衣玖さんを呑み込んだ

「はあ、はあ、くっ!」

しかし衣玖さんはボロボロながらも立ち上がってきた

『ブーーーー!!』

「ここで5分を過ぎました!ここから1分間!スペルカードの使用が許されます!」

BGMは変わりスマブラDXの終点のBGMになった

「衣玖さん、一つ提案があるんだが?」

「口調が元に戻りましたね。提案とは何ですか?」

「どうせ時間も残り少ない、なら今出せる自分の最強の一撃で決めませんか?」

「そうですね、わかりました。その提案のみましましょう」

「それじゃいきますよ!進化【ライダーエボリューション】!」

『モモ ウラ キン リユウ』

『Climax Form』

俺の姿は電王ガンフォームから両肩と胸に電王のロッド、アックス、ガンフォームのデンカメンをつけ顔はソードフォームから一皮向けた電王クライマックスフォームに

なったそしてそこから

「手羽野郎も来やがれ！」

金色と水色で装飾された翼の形のウイングフォームのデンカメンを背中に翼のように装着し仮面ライダー電王超クライマックスフォームになった

「準備はすみましたね。いきますよ魚符【龍魚ドリル】！」

衣玖さんは羽衣をドリルにしさらに放電しながらそれに電気を纏わせ巨大なドリルとなった

『Charge And Up』

俺はケータロスを装着したベルトにパスをセタッチし上に跳ぶと背中 of ウイングフォームのデンカメンが大きな翼となりそこから一気に超ボイスターズキックを放つ

衣玖さんのドリルと俺のキックが衝突し衝撃拮抗する

「ウオオオオオオオ!!」

「ハアアアアアア!!」

そして爆発し俺と衣玖さんは爆煙に包まれる

煙が晴れそこに立っていたのは

俺だった

「衣玖さん、俺の勝ちだ」

「試合しゅーりよー！激戦を勝ち抜いたのは海堂 紀斗さんです！」

俺は変身を解きスペルカードを発動した

「回復【メデイカル オン】」

俺はメデイカルの注射器を衣玖さんに使いメデイカルを消した

「ありがとうございます。あなた自身は使わなくていいんですか？」

「ああ、そんなん使ったら永琳の治療が受けられないだろ」

俺は笑いながら言う

「ははは、そうですね」

衣玖さんは少し笑いながらそう言った

俺はその後賞品の写真集をもらい永琳達のところまで戻った

戻るまでに少し襲われたが主にナイフと人形で

「ただいま」

「お疲れ様、何か欲しいものはある？」

「永琳の膝まくらがほしい」

俺はそのまま永琳の膝座っていた永琳の膝に頭を乗せた

「えっ、ちよつと紀斗／＼／」

「やってあげなさいよ。膝まくらぐらい。さてその間に写真集を見せてもらいましょう

か

「どうぞ？」

俺は永琳の膝まくらをたんのうしながら写真集を輝夜に渡した

「へく、なかなかいいのが揃ってるわね。…あら？紀斗、あなたまさかもう永琳の写真を抜き取ったの？」

「当たり前です。ナイフやら人形をよけながらやるのは大変でしたけど」

「ま、いいわ。それよりこれは死守しておかないと、交渉材料としてこれほど良いものは無いからね」

俺はその後名残惜しいが永琳の膝まくらから離れ紫さんにあることを聞きに言った

「ゆかりん、ちよつといいかい？」

「あら、浮気かしら？」

「んなもんやるくらいなら舌噛み切るよ、それより聞きたいことがあるんだが、場所を変えないか？」

「いいわよ、じゃ、この中に入りなさい。」

紫はスキマを開き中へ入るよう勧める

「お邪魔しまーす」

博麗神社境内のはずれ

俺はスキマから出ると紫さんはスキマから顔だけ出して出てきた

「で、聞きたいことって何かしら？ 若さの秘訣？」

「いや、それはどうでもいいが。：財団X、あの白衣の集団には気づいているだろ」

「ええ、最近何度か来たあいつらね」

「あいつらについてどこまでわかる？」

「そうね、まず幻想郷の住民に怪物に変身するものを売ったり、配ったりしている。向こうにもかなりの実力者がいる。どこからか幻想郷に出入りしている。怪物に変身すると弾幕がほぼ効かなくなるってところね。ちなみにあの怪物、弾幕は効かなくても能力による攻撃や物理攻撃は効いたわよ」

「そのくらいか」

「あなたは他にも知っているんでしょ、あの怪物のこととか」

「ああ、多分あいつらが配ったりしているのはゾディアーツスイッチとガイアメモリあとメダルを人に入れてヤミーも作っている」

俺はドーパント、ヤミー、ゾディアーツについて教えた

「なるほどね、どれも人の欲望が暴走してなるものばかりね」

「あいつらがどこから出入りしているのか探知出来ないのか？」

「駄目ね、どうやっているのかわからないけどうまく隠されているわ」
「そうか」

俺はその後少し紫さんと情報交換して永琳達のところまで戻り宴は次の日の朝近くまで続いた

第十三幕 勧誘

あの宴から一週間後

俺は今妖怪の山のにとりの工房に來ている。理由は頼んでいたものが出來たからだ

「よう、にとり。頼んでた物、取りに來たぜ」

「あ、待つてたよ。頼んだのは外部からの電氣をそのまま取り込める貯電機でいいよね？」

「ああ、助かるぜ。」

「それじゃ、報酬を早く！早く！」

「分かつてるよ、ほら」

俺はにとりにアングの使っていたiPadと玄太郎の携帯を出して渡した

「ありがとう！でもなんでこんなの頼んできたの？」

「節約だよ、電氣代はうちは姫様のせいでかなり圧迫されてるから。少しでも電氣代を減らそうとね」

「なるほどね。それじゃ、私はこれの研究するから。また作つて欲しいものがあつたら來てねー」

「ああ、またな」

俺は貯電機をサイドバツシャーに乗せ永遠亭に戻った

香霖堂

永遠亭に貯電機を持っていった後俺は暇になったので香霖堂に良いものが入ってないか見にきていた

「そういえばこーりん新しいガンバライド入ったか？」

「ああ、50枚くらいは見つけたよ」

霖之助はそう言うときから束にしたガンバライドカードを出した

「いくらだ？」

「んー、5枚くらいかな」

「ほらよ」

俺は懐の中着から5枚を出し霖之助に渡した

「まいど、助かるよ。君は数少ないちゃん料金を払ってくれる客だからさ」

(金を払わなかったら客とは思わないと思うが)

俺はそのまま霖之助と話していると扉が開き誰かが入ってきた

「よう、こーりん！遊びに来たぜ！」

その後魔理沙も入れて一緒に談笑していると外からこちらを呼ぶ声がしてきた

「仮面ライダーの能力を持つ青年よ！君がここに居るのはわかって居る！おとなしく出てきたまえ！」

「なんだ、あいつ？」

「お前を呼んでるみたいだぜ、紀斗」

俺は魔理沙と霖之助と外に出るとそこにはかなりの数のクズヤミーとダスタードと白衣を着た根暗そうな理科系の男とその後ろに部下らしき奴が何人かいた

「財団Xか、こいつらを出してることとは戦うってことでいいんだよね？」

俺はそう言いベルトを出そうとすると向こうのライダーらしき理科系の男から声をかけてきた

「いや、まずは話しをしようじゃないか。我々はそのために来たんだ」

「じゃあこのクズヤミーやダスタード達はなんだよ？」

「ちよつとした保険だよ。ああ、申し遅れたね。私は財団X 乙支部幹部の乙だ。君が以前出会ったGは私の同僚だよ」

「海堂 紀斗だ。で話したのはなんだ？」

「何、簡単な話しだよ。紀斗君、我々の仲間にならないか？」

「何？」

「もちろんタダでは言わない。それ相応の待遇を用意しよう」

「……………」

「紀斗！こんな奴の話しなんか聞く必要無いぜ！」

「部外者は黙っていたまえ！今紀斗君と話をしているのは私なのだから」

「さあ、紀斗君もう一度聞く。我々の仲間にならないか？」

「確かに魅力的な話ではある」

「紀斗!!」

「それに今の生活に完全に不満が無いと言えば嘘になってしまう」

「なら！」

乙は嬉しそうな反応を示すが俺は乙の前に手を突き出し話させないようにする

「そんな俺からお前の問いに対する答えはただ一つ」

「

だ が こ と わ る

→これが言いたかっただけ

「なっ!？」

「この海堂 紀斗が最も好きなことのひとつは、自分達が圧倒的に有利だと思ってる奴にN〇と言ってやることだ！第一俺は永琳を置いてどっかに行く気はねーし、お前らについていってもどうせ洗脳とか実験されるのがオチだからな」

「ついて行くなんて言ったらマスパをぶち込んでやるところだったぜ」

「うん、それは多分僕も止めなかつたと思う」

「それによ、いまだきその程度の言葉でのつてくるのは⑨以下だけだぜ」

「くっ！馬鹿にしやがって！お前達！やってしまえ！」

Zがそう言うのと後ろの部下達はスイッチを押しそれぞれオリオン、ユニコーン、リンクス、キグナスゾディアーツになった

「私はゾディアーツ専門の研究者兼幹部！私のZはゾディアーツのZだ！こいつらは私の改造したスイッチでラストワン状態でも人間に戻れるようにした！海堂 紀斗！貴様はここで死んでいけ！」

「悪いが、俺はそう簡単には死なないぜ。変身！」

俺はオーズドライバーを出し腰に巻き3枚のメダルを入れオースキヤナーでスキヤンした

『タカ！ トラ！ バッタ！』

『タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

俺はメダルに描かれた動物の特徴をとらえた三色の仮面ライダー、仮面ライダーオーズに変身した

「こーりん！魔理沙！ちよつと雑魚共を倒すのを手伝ってくれ！」

「わかつたぜ！」

「僕も!?!」

「普通に戦えなきやこいつを使え！」

俺は自分の後ろにパワーダイザーを出した

「何これ!？」

「いいから、乗り込め！」

俺は霖之助を無理矢理パワーダイザーに乗せメダジャリバーを出し戦闘体制を整えた

「俺達にケンカ売ったこと、後悔させてやるぜ！」

「先手必勝だぜ！恋符【マスタースパーク】！」

魔理沙の八卦炉からマスタースパークが放たれゾディアーツ達やクズヤミー達を呑み込み辺りが土煙で覆われる

乙はかなり後ろに下がっておりマスタースパークを受けていないようだ

「やったかな？」

「ばかっ！それはフラグだ！」

土煙の中からおそらくオリオンゾディアーツのものと思われる青い光弾が飛んできた

俺はそれを跳んで避けタカアイで土煙の中を見ると周りの雑魚は消えたようだがゾディアーツ達は全く効いていないようどこちらに向かってくるのが見えた

「やっぱりスペカも効かねえか。魔理沙！お前は周りの雑魚だけを頼む！」

「なんでたぜ？」

「ゾディアーツにも弾幕やスペカは効果が無いみたいだ。だからお前には弾幕が効く雑魚共の相手だけをしてほしいんだ」

「納得いかねえがわかったぜ。」

「！　来るぞ！」

土煙から飛び出してきたのはオリオン以外の3体でそれぞれ別方向から俺に飛びかかってきた

「くっ！」

俺は左からきたキグナスをメダジャリバーで斬りつけその勢いのまま右に振り抜きリンクスも斬りつけたがユニコーンには角の剣で防がれてしまった

俺は一旦後ろに下がりセルメダル3枚をメダジャリバーに装填、オースキャナーでスキャンした

『トリプルスキャンニングチャージ！』

「オラアアア!!」

俺はメダジャリバーを横に振り抜きオースバツシユを繰り出したがユニコーンとリンクス、オリオンは上に跳んで避け斬れたのはキグナス1体だけだった

「ぐああああ!!」

キグナスゾディアーツは爆発しキグナスゾディアーツだった男が倒れスイッチもその近くに落ちた

「チツ、もうやられやがって。」

ユニコーンゾディアーツはそう言うところらに向き直り剣を構え他の2体も構える

俺はタカとバッタのメダルを抜きライオンとチーターのメダルを入れオースキヤナーでスキャンした

『ライオン！ トラ！ チーター！』

『ラタラター！ラトラター！』

俺は黄色の猫系のメダルを使った仮面ライダーオーズラトラタータコンボになった

「ふっ！」

「ぐっ!?」「がっ!?」「ぐはっ!?」

俺はチーターレッグをいかした高速移動でオリオン、ユニコーンを斬りつけたがこのスピードに少しいてこれるリンクスにはメダジャリバーは爪で弾かれたがそのまま蹴りとばした

「魔理沙！コーりん！目え閉じとけよ！はあああああ!!」

俺はちょうど3体の中心になる場所に移動しライオンヘッドによる太陽のように眩しい熱線、ライオディアスを使った

「うわああああ!!」

「ぐうううう!!」

「目が!?目があああ!!」

(そのセリフはムスカ・ゾディアーツに言って欲しかったな)

俺はそんなことを考えながらリンクスに向かって走りだした

『スキヤニングチャージ!』

「おらあああああ!!」

「ぎやあああああ!!」

俺は出現した黄色のリングを突き抜けトラクロード切り裂くガツシユクロスをリンクスに使いリンクスゾディアーツを倒した

俺はオリオンとユニコーンがまだ怯んでいる隙にメダルを抜き銀色のメダルに変えスキヤンした

『サイ!ゴリラ!ゾウ!』

『サゴーズ!……サゴーズ!!』

俺は銀色の重量系の動物のメダルを使った仮面ライダーオーズサゴーズコンボになっ

「くつ、リンクスの奴やられたのか」

「ぬう、まだ見えん」

「まだ見えてないところ悪いが、いくぜ、オラアアア!!」

俺はドラミングをしながら重力操作でユニコーンとオリオンにかかる重力を強くする

「ぐおお、これは…」

「がああ、この…程度」

『スキヤニングチャージ!』

「どっせえええい!!」

「ふっ!」

「ぐああああああ!?!」

俺はそのまま重力を操作し2体をこちらに引き寄せ両腕とサイヘッドのグラビドホーンで相手を粉碎するサゴーズインパクトを繰り出したがユニコーンはオリオンを盾にしこの技から逃げた

「チツ、逃げたか」

「あ、危なかった」

「ま、いいや。次は外さねえ」

俺はさらにメダルを変えスキャンした

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ〜ジャ〜ドル〜！』

俺は赤の鳥系のメダルを使った仮面ライダーオーズタジャドルコンボになった

「くらいな！」

そして俺は左手に装備した赤い円状の武器、タジャスピナーから炎弾を何発もユニコーンに向かって発射する

「くっ、はっ、ぐあ!？」

ユニコーンは角の剣で何発かは消したが1、2発は喰らい熱さで怯む

『タカ！クジャク！コンドル！タカギン！クジャクギン！コンドルギン！ギガスキャン

!!』

俺はタジャスピナーに4枚のセルメダルと変身に使ったタジャドルのメダルをセツトしオースキヤナーで読み取りギガスキャンを発動する

「はあああああ!!」

タジャスピナーから不死鳥を模した炎と銀のエネルギー弾、マグナブレイズを放った
「う、うわあああああ!？」

マグナブレイズが命中しユニコーンゾディアーツは爆発した

「紀斗！こつちも終わったんだぜ！」

「これ結構疲れるんだけど」

「さて残りはてめーだけだぜ。Z！」

Zは何かしきりに木陰でメモを取っていたがそれをやめこちらを見た

「ふむ、なかなかいいデータが取れたよ。では私はそろそろおいとまするとしよう」

「逃がすと思つてんのか？」

俺はタジヤスピナーを構えたがZは何も動じず懐からスイッチを出した

「余裕で逃げられると思つているんだよ」

Zがスイッチを押すとZは蛇の仮面をかぶり体中に蛇が巻きついたようなゾディ

アーツになった

「私は蛇つかい座のゾディアーツ、オピワークスゾディアーツだ。来い、ダスタード共」

するとダスタード達が現れZの部下達とスイッチを回収した

「あ！？てめえら！」

「ではさらばだ。幻想郷の仮面ライダー君」

Zがそう言うのとZとダスタード達を紫色の煙が包みそれが晴れるとそこには誰もい

なかつた

『ゲンデン』

俺は確認のためデンデンセンサーを出し周りを見せたがどこに逃げたのかすらわからなかった

「駄目だ、完全に逃げられた」

「そうか、ドサツ　　ん？あつ!?こーりん大丈夫か!？」

魔理沙と俺が音のした方を見ると霖之助がパワーダイザーの前で倒れていた
俺と魔理沙が霖之助に近づき起き上がらせると霖之助はなんとか声を出した

「つ、疲れて体が動かない…」

その返事に俺と魔理沙はギャグ漫画のようにずっこけた

「なんだよ、ただの疲労かよ」

「心配して損したぜ」

「そういつてもまったく体が動かないんだよ」

「いつも店の中で座ってばかりいるからだぜ」

「ま、俺が戦わせたみたいだから少しは回復させてやろう」

俺は変身を解いて霖之助をうつ伏せにすると勢いよく背中の中3箇所をツボを押す

「ふんっ!」

「ぐえっ!？」

「これで少しは動けるようになっただろ」

「本当だ、立てるようになった。」

「でもまだ産まれたての子鹿みたいだぜ。」

「さっき俺が押したツボは疲労回復のツボ、力を出させるツボ、そして…疲労回復増進のツボだ」

「そんな訳だから…逝くぞ」

「ちよつと待ってくれ。なんだい？そのでかい注射器は？」

「俺のスペカの一つだ。安心しろ、痛みは一瞬だ」

「いや、何も安心出来ないんだけど」

「いやー特大サイズが出せたのはいいんだけどなかなか使うタイミングが無くてな。自分にするのは怖いし女性にやるのはあれだし」

「だからって僕にやること無いだろ」

「しのごの言わずにやるぞ！」

「え、ちよつと、まっアツーーー!!」ブスツ※別に尻には刺していません

「会話だけ聞くとなんかあれだぜ。」

「そういや紀斗、お前さつき不満が無いと言えは嘘になるって言ってたけどお前の不満ってなんなんだ？」

俺が気絶した霖之助を指で突ついているとふいに魔理沙が質問をしてきた

「ああ、それか。ま、実際はほぼ無いに等しいんだが強いて言うならうちの姫様の電気代とてゐのいたずらの頻度、後あの野郎共が来ることだな」

「なくんだ、普通過ぎてつまらないぜ。」

「普通で結構、俺はこいつを運んでくが魔理沙、こいつの看病頼めるかい？」

「な!?!なんであたしがやるんだぜ!?!」

「いやー、お前がなんかたまにこーりんの方を熱っぽい視線で見てる時があるからな。で、気はあるのか？」

「……………／／／コクリ」

「ま、こいつも結構鈍感な所があるからな。今回もいかしてもっとストレートにいつてみたらどうだ？」

「わ、わかってるぜ!そのくらい!／／／」

俺は霖之助を香霖堂の奥の部屋に布団を敷いてそこに霖之助を寝かせて刺さっていた「メデイカル オン」を消した

「じゃーゆっくり〜」

「絶対誰にも言わないでくれよ!／／／」

「わかつてるよ〜」

俺は香霖堂から出ると誰もいない筈のところの話しかけた

「ゆかりん、場所はつかめたか？」

くぱあ

すると俺のとなりの空間が割れそこから紫さんが半身だけ出してきた

「駄目ね。完全に逃げられたわ」

「駄目か。わかった、ゆかりんまたあいづらが出たらすぐ教えてくれ」

「ええ、わかつてるわ。じゃ、私は行くわね」

「ああ、またな」

空間は閉じ紫さんの気配も消えた完全に行ったようだ

「チツ、後手後手に回るのは気に食わねえな、やつぱり」

俺はその後永遠亭に戻りストレス発散に永淋といちやつについてからその日を終えた

そして余談だがその日から香霖堂には毎日人形と魔法による襲撃があるとか無いとか

第十四幕 新人

乙の襲撃から一週間後、俺は今ライドベンダーで全速力で旧地獄に向かっている
「まったくなんで俺がこんなことしなきゃならないんだあああ！」

何故俺がこんな最近の若者なみにキレかかりながら走っているかというところ（実際若者だが）時間は30分くらい前にさかのぼる

俺は仕事が進みだからのんびりと縁側で永琳とお茶を飲んでいた

するといきなり目の前にスキマが現れ紫さんが出てきた

「何の用だ？暇つぶし程度だったらなるべく帰ってほしいんだが」

「そんなつれないこと言っちゃ駄目よ。それより頼みたいことがあるんだけど」

「なんだ？」

「実は…」

要約するところだった以前の俺のように能力を発現しかけている奴がいたので今度は問答無用でスキマに落としたり地霊殿のある旧地獄に落とすので俺に回収を頼みたい

「なんで俺がわざわざ行かなきゃならないんだよ。ゆかりんが自分でやればすぐだろ」

「えー、それじゃ面白くないじゃない。もし行かなかつたら…ボソツあなたが隠している永琳の写真を幻想郷中にばらまくわよ」

「なっ!?! たつくしようがねえな。永琳悪いちよつと行つて来るわ」

「いつてらつしやい。気をつけるのよ」

「ああ、わかつてるよ」 チュ

「ん」 チュ

「早く行きなさいよ」 ゴゴゴゴゴ

「はいはいよつと」

「1時間以内につかなきゃあれを実行するわ」

「げっ!?! やべえ!」

そんなわけで今にいたる

永遠亭出発から45分後 妖怪の山の麓 地獄谷

「よかつた、まだ1時間経つてねえ。よし、さっさと行こう」

俺は腰にオーズドライバーを巻きコアメダルを三枚入れて変身した

『タカ! クジャク! コンドル!』

『タ〜ジャ〜ドル〜!!』

俺はタジャドルコンボになり旧地獄の入り口へと飛び込んだ

「よつと」

「ちよつとそこの怪しい格好をしたお兄さん、少しいいかな?」

「無視するのはNGでお願いね。」

俺は声をかけられた方を向くと金髪に茶色の大きなリボンをした少女、ヤマメとどこからかぶら下がっている桶に入っている緑髪の少女、キスメがぶら下がりながらこちらを見ていた

「キスメにヤマメか。何の用だ、今は急いでるんだが」

「何であたし達の名前知ってるか知らないけどさつきも変なメダルで出来た奴も見たしちよつと理由を言ってもらわないと困るんだよね」

「メダルの奴には今はてめえらに用は無いつて言われてしらんぷりされちゃったんだけどね」

「おい、今メダルの奴って言ったか?」

「言っただけぞそれが?」

「やばいな、今俺はこつちに送られてきた外来人の回収に来たんだが知らないか?」

「ああ、それなら勇儀さんが地霊殿に連れていったよ」

「そういえばあのメダルの奴も同じこと聞いてきてたね」

「!?本格的にやばいな、ヤマメ!キスメ!どっちでもいいから地霊殿まで案内してくれ!そいつはかなりやばい奴だから!」

「う、うんじゃあキスメ、ここよろしく!」

「りようかい」

俺はその後ヤマメを背負いながら飛び地霊殿へたどり着いた

紀斗が移動中の時地霊殿では

「よう、外来人を届けにきたよ」

気絶した灰色のツナギを着た20代後半くらいの外来人を額に一本の赤い角を生やした元鬼の四天王の1人、星熊 勇儀が引きずってきた

「あつ、ごくろうさままで…それ生きてます?」

「ん?さつき1度起きたんだがね。あたしの顔の角を見たらまた気絶しちまったんだよ」

出迎えたのは黒い猫耳と二本の尻尾を生やした赤毛の少女、火焰描 燐でゆ

「なんだ、死体だったら運んでつたのに」

「おいお「その欲望面白いな」!?!」

「ちよつと解放してみろ」ひゅつ

「え」チャリン

お燐の中にGの投げたセルメダルが入りお燐の中から全身に包帯を巻いたような姿のヤミー、白ヤミーが出てきた

「ニヤニヤニヤニヤに、これー!？」

「死体……運ぶ……」

「なんなんだい、こいつは。敵って言うならちようどいい、久しぶりに暴れてやるよ」
「お前の欲望もなかなかだ」

「うっ」チャリン

勇儀さんの中からも同じように白ヤミーが出てきた

「暴れ……たい」

「さて、あとはこいつだ」

Gが外来人に手をかけようとするのと上から声が聞こえた

「ちよつと待ったー!!」

「勇儀さん！お燐！大丈夫!？」

「ヤマメ!?!さつさと逃げな！こいつはかなりやばい！」

「よう、また会ったな。確か海堂 紀斗、だったか？」

「ああ、そうだよさっさとその外来人から手を離しやがれ」

「やだね。俺の今回の任務はこいつの回収だからな。大変だったんだぜ。わざわざここまで見つからないようメダルの状態で移動するのは」

「知るか、んなこと。俺の仕事もそいつの回収だ、しくつたら何されるかわからんからな。絶対返してもらおうぜ」

「ふん、なら攻撃してみやがれ。俺にダメージは与えられるだろうがこいつは高確率で死ぬだろうな」

「ちつ、人質かよ。卑怯くせえ」

「そのまま変身を解いてベルトも捨てな」

俺は言われた通りに変身を解きオーズドライバーをGのほうに投げた

「やけに素直だな」

「うるせえよ」

（どうやら俺の能力を詳しくはまだ知らねえみたいだな）

「ヤミー共そいつら頼むぞ。俺はこいつですこし遊ぶ」

「ウヴおオオオ。」ジャラアア

2体のヤミーはそれぞれカブト虫と蜂を模したカブトヤミーとハチヤミーに変化し勇儀とお燐に襲いかかる

「虫風情が舐めるんじゃないよ！」

「燃えちまいな！」

「暴れてやらあ！」

「死体にしてどこか遠いところに運んでやる」

「さて、じゃあ壊れない程度に痛めつけてやるかな」

「痛めつけられて喜ぶ趣味は無いんだがな」

「黙ってる！」

「がはっ!？」

俺はGに殴られながら準備を始めていた

奴にばれないように奴の死角の場所から小さな助っ人達を出して待機させている

「やれやれ、こんだけやれば充分かな」

Gはしゃがんで俺の頭をつかもうとした

(今だ!)

「やれ!お前ら!」

するとGの後ろからプラモンスター、フードロイド、カンドロイド、メモリーガジエツト達が一気に襲いかかった

「ぐおっ!？」

Gは後ろから突き飛ばされ地面と熱いkissをしさらにその上にプラモンスターやカンドロイド達が襲いかかり俺はその隙に外来人を回収する

「はあ、はあ、よし、外来人は取り返させてもらったぜ」

「ぐあああああ!？」

「あちちちち!？」

勇儀さん達の方を見ると勇儀さんはカブトヤミーを殴り飛ばし、お燐はハチヤミーを燃やしていた

「形成逆転だな、G」

「調子に乗ってんじゃねーぞ!!」

Gは自分の体にまとわりついていたカンドロイド達を振り払いカザリの姿になった
「へ、悪いがお前らにはもう人質もねえぞんぶんにやらせてもらうぜ」

「人質が無い?はたして本当にそうかな」

「何?てめえそりやどいう意味ぐほっ!？」

俺は俺を殴った奴を見るとそれはさっきまで気絶していた外来人だった、さらにその目は一瞬緑色に輝いた

「てめえ、まさか…」

「そのまさかよ。そいつには俺の意思が入ったコアメダルの一枚を貼り付けてある」

「つまり、俺はこいつを自由に操ることが出来る」

外来人はGの声で身体の調子を確かめながらにやりと笑う

「ならなんで本体のてめえは自由に動けてんだ。その体はメダルに戻るはずだろ」

「俺の意思が入ったコアメダルは全部で4枚あるんだよ。格一色ごとにな」

「今はまだ4種を4枚ずつしか入れられないがいつかは全部のコアメダルを俺の中に入れてやる」

「そのためにも貴様には支部に来てもらうぞ、海堂 紀斗！」

カザリの姿のGと外来人を乗っ取っているGは交互に喋りながら近づいてきて俺に襲いかかってきた

「そう簡単に連れてかれてたまるかよ」

俺は外来人を蹴り飛ばしファイズドライバーを腰に巻きファイズフォンに『5・5・5』と入力しENTERキーを押す

『STANDING BY』

そしてファイズフォンを閉じファイズドライバーのバックル空白部にセットした

『COMPLETE』

そして俺はギリシア文字のΦを模したライダー、仮面ライダーファイズに変身した
「な!? オーズやバースだけじゃなかったのか!？」

「俺がいつ、変身出来るのはそれだけだと言った？」

「クソが！だがさつき痛めつけたせいであらう。体はかなりガタがきてるはずだ！ヤミー共！一気にそのライダーを潰せ！」

「うおおお！」

「どーん♪」

「ぐああああ!!？」

ヤミー共が俺に襲いかかろうとしてきたらいきなり何かがある。ヤミー共にぶつかりヤミー共は吹き飛ばされた。

「うにゅ、頭痛い。」

「お空!? あんたなんで来たの!？」

何かの正体は背中に黒い大きな翼を生やし片腕には制御棒を装備した霊鳥路 空だった。

「そんなのもちろん!……何だっけ？」

その答えにここにいる全員がずっこけてしまった。どうやらお空が鳥頭だというのは本当だったらしい。

「ふざけやがって」

「ぶちのめしてやる」

「隙あり」

「ぐおおおお!?」

俺はファイズフォンをフォンプラスターにし『106』と入力しBURST MOD
Eで撃つたせいでヤミー共はさらに怯んだ

「俺を忘れてんじゃねーよ、虫野郎共」

「ぐう」「うう…」

「一気に引導を渡してやる」

俺はファイズポインターにファイズフォンのミツシヨンメモリーを差し込み右足に
装着、ファイズフォンを開きEnterを押す

『EXCEED CHARGE』

ファイズポインターにエネルギーが充填される、俺はジャンプして空中前転をしてか
らヤミー共に向かってキックの体制に入る、するとファイズポインターから円錐状の赤
い光を放ちヤミー共にまとめてクリムゾンスマッシュを食らわせた

「ぎゃあああ!?!」

ヤミー共は体にΦのマークが現れ燃えながら2体のヤミーは倒れ爆発し周りにはセ
ルメダルをばらまかれた

「後はてめえらだけだぜ。さあ、どうする?G」

「ふん、普通だったら逃げてるが今回はまだまだやれるぜ」

「何?」

「集まれ!メダルよ!」

すると倒したヤミーのセルメダルが外来人に集まりセルメダルに覆われウヴァの姿になった

「この体でもまあまあやれそうだな」

「なっ!?めんどくせえ状態になりやがって」

「何だ!?外来人が虫みたいなのになっちまった!」

「あれ?さとり様に守れて言われたのは外来人で、外来人が敵で……プシユー」

「わあああ!?!お空がオーバーヒートした!?!」

「……なあにこれえ?」

いろいろとカオスになってしまった状況でこの空気を壊す救世主が現れてくれた

「みんなしつかりしなさい!お隣とお空は落ち着いて!ヤマメは現実逃避しない!まだ敵は目の前にいるのよ!」

「さとり様!」

それは薄紫の髪をしピンク色のサードアイを持った少女、古明地 さとり

「はっ!あたしは一体何を」

「さすが地霊殿の主、それなりのカリスマはあるか」

「あれがさとりか。ん？なんか頭に違和感が」

「わー、でつかい虫」

「な!?!こいついつの間俺の頭の上に!?!」

更にいつのまにかウヴァの姿のGの頭には閉じたサードアイを持ち黒い帽子をかぶった灰色の髪の少女、古明地 こいしがいた

「こらー!こいし離れなさい!虫は家では飼えないのよ!」

「えー、いいじゃんかー」

「離れろ!このガキ!」

ウヴァGはこいしを頭から離そうとするがなかなか離れない。そして

「ぶー、お姉ちゃんのかちー」

何故か持つていたチャツカマンでウヴァGの頭の角?を焼き始めた

ウヴァ「あちちちち!?!やめろ!?!」

G「おら、いい加減しやがれ!」ブンツ

カザリGがこいしを殴ろうとしたがこいしはそれを避けこちら側に来た、ウヴァGの火はカザリからメズールの姿になったGが水を出して消した

「火をつける奴があるか！この野郎！」

「いやー、つい無意識で」

『無意識なら仕方ない』

「「んなわけあるか!？」」

「ま、そいつの体は返してもらおうぜ」

「ハア、ハア、やれるものならやってみる。このカス共があ!!」

「実際どうやってあの外来人を助けだすの？完全に取り込まれているようだけど」

さとりが俺に話しかけてきて俺は対策や簡単な作戦を言う

「別にウヴァ、あの虫みたいなものだけなら簡単だがカザリがいるからな。さとり達はカザリの方を足止めしていてくれないか？ウヴァは俺の方でやる」

「わかったわ。紫から聞いたけどあれらは弾幕は効かないのよね？」

「ああ、だが能力や純粹な力は効くからそっちで戦ってくれ」

「ええ、わかったわ。奴の特徴もあなたが考えてくれたからすぐに分かったしそれなりに時間は稼げそうよ」

「OK、じゃあやるか！」

「ええ、いくわよ皆！私達はあの猫みたいな方と戦うわよ！」

『おう（はい）（うん）！』

俺は腕時計型のアタッチメントファイズアクセルを出し腕に装備しアクセルメモリーを抜きファイズフォンのミッションメモリーと入れ替える

すると胸の装甲が展開し目の色が金から赤になり仮面ライダーファイズ アクセルフォームになった

「さあ、10秒間だけショウタイムだ」

俺はファイズアクセルのタイマーのスイッチを押す

『START UP』

そしてタイマーが音声と共に始まり俺はウヴァに向かって走り出す

このアクセルフォームなら通常の1000倍の速度で動けるためウヴァGはこちらにまったく気づかない、気づいたとしてもガードが間に合わないだろうが

ちなみに俺がスペカのクロックアップを今使わない理由はまだカザリGがいるのとこれを使ったから、これだけだ！

そして俺はウヴァGの背後に回り込みひたすら殴る！殴る！殴る！たまに蹴る

そしてウヴァの体が削れメダルが取れていき外来人の体が出てきた

俺はそこから首筋についていたクワガタのコアメダルを殴って取り横に放りそこに連続のクリムゾンスマッシュを繰り返す強化クリムゾンスマッシュを繰り返した

『グ!?くそー!!』

案の定メダルは割れウヴァの姿になっていた外来人の体からメダルが全て落ち外来人は倒れた

『TIME OUT』

『REFORMATION』

アクセルフォームも10秒経ったせいで効果は切れてしまい元の姿に戻ったが充分だった

一方さとり達の方は

「ヤマメ! 周りに糸を張って奴の動きを制限して! お隣とお空、勇儀は近接で戦って!」

「了解!」

ヤマメの手から糸が大量に吐き出されカザリGの周りは糸だらけになった

「いくぜ! オラッ!」

「やあっ!」

「えいっ!」

「遅え、遅え、あくびが出ちまうぜ」

勇儀達はカザリGに殴りかかるが全て容易にかわされてしまう

「ふふふ、ぐっ!?!がああああ!?!」

だが突然カザリGが頭を抱えて苦しみだした

この時ちょうど紀斗がコアメダルを壊した瞬間だった

「なんかよくわからないがチャンスだ！ヤマメ！」

「あいよ！」プシュー

カザリGは地に伏したままヤマメの糸で絡め取られうめき声をあげる

「うろう」

「しつかしいきなりどうしたんだ、こいつ？」

「心の方も今は駄目ね。痛みや苦しみで考えていることがぐちゃぐちゃで読めやしないわ」

「それはこいつを割ったからさ」

「それは…メダル？」

俺は気絶したままの外来人を肩に担ぎながら砕けたクワガタメダルをさとり達に見せる

「ああ、こいつの意識が入ったコアメダルだ。本来なら意識の入ったコアメダルを壊されたグリードはただのメダルに戻っちゃうんだがこいつの場合は全部で4枚あった。だから苦しむだけになってんだろうが、かなりの激痛だろうな」

「へへへ、まさかここのままでやられるとはな。しかしこのまま壊されるわけにはいかなく

てな。逃げさしてもらうぜ」

そう言うとうとGの体はメダルにかわり糸にはセルメダルだけが付いていた

「逃がすか！勇儀！」

「おう！」

『EXCEED CHARGE』

俺はGに向かってグランインパクトを放ち勇儀もかなりの勢いで拳を振り下ろした
が割れたのはセルメダルだけで肝心の本体には逃げられGは去り際にセルメダルを砕
き大量のクズヤミーを生み出す

「お前らはこいつらと遊んでな」

「ウウオオオ」

「くそ！邪魔だ！皆！こいつらには弾幕が効く！一気に吹き飛ばすぞ！」

「わかったわ！想起【テリブルスーブニール】！」

「鬼符【怪力乱神】！」

「蜘蛛【石窟の蜘蛛の巣】！」

「猫符【怨霊猫乱歩】！」

「核熱【ニュークリアフュージョン】！」

「♪」 外来人の顔に落書き中

大量の弾幕の嵐にクズヤミーは全て吹き飛んだがそこにはもうGの姿はなかった
「逃げられたか」

「そうみたいね。もう近くにはいないわ」

「さて、こいつは…ぶっ!？」

俺は気絶している外来人の方を見ると吹き出してしまった

「くくっ…これは」

「悲惨だな、…ププ」

「あはははは！何あれー！あははははは！」

「ちよっ、お空…プププそんなに笑っちゃ駄目ですよ。…くくく」

「そ…そうだよ、ププ」

「自信作だよー」

気絶している外来人の顔は白粉を塗られた上にこいしの落書きで髭や目などが描かれ悲惨なことになっていた

「ちよっと撮っておこう、くくくく」

俺はフェイスショットでその格好を撮りまくった、いつか交渉に使えそうだからな

そして俺はいつまでも寝かしておくわけにもいかなないので変身を解いてその格好のまま起こすことにした

「おーい、起きろ〜」

「……………」反応無し

「返事がない、ただの屍のようだ」

「え、持ってつていいですか？」ウズウズ

「いや、生きてるから」

「ならこれだ。」

俺はソフトローニヤを出し外来人の顔に冷気を吹きかけた

「ぶわっ!？」

「お、起きた、起きた」

「ここ、ここは？そしてあんたらは？」

「あー、そこからか。まあいいや、説明してやる」

青年説明中…

「えーと、よーするにここは幻想郷って場所で俺は能力が若干で始めたからその紫さんって人に連れて来られたと」

「そういうことだ。俺は海堂 紀斗、永遠亭でマッサージ師をやってる外来人だ」

「俺は金井 甲（かねい こう）、甲と呼んでくれ。職業はエンジニアで年は24の独身だ。よろしく」

俺は金井と握手をし、地霊殿のメンバーとはほぼ初対面が多かったため自分のことを含めて金井のことを紹介した。

「そういや甲、お前は仮面ライダーは観てたか？」

「ん？ああ、観ていたがそれがどうしたんだ？」

「じゃあ説明はいいな」

俺は白い魔法使いドライバーをドライバーオンの状態で出し一つのリングを出した

「じゃあ行くぞ」

「え!?え!?紀斗！お前それって「細かいことはいいから」

「じゃあな！お前ら！マッサージを頼みたい時はこいつを使ってくれ！」

俺はスタッグフォンを出しさとりに投げた

そして俺はリングを白い魔法使いドライバーにかざした

『テレポート ナーウ』

そして俺と甲は旧地獄からテレポートした

「さ、皆治療は紀斗がやってくれたし中に入ってご飯の準備をしましよ」

「はーい。」

「あたしはパルスイのところにでも行くかな」

「あ、キスメあそこに置いてきたままだけど大丈夫かな？」

「あ、甲のメイク落とすの忘れてた」

「[[[[[あ]]]]」

俺と甲はテレポートで博麗神社に来たがいきなりすることに甲は少し興奮状態になっている

「お前今のとってウイザードの白い魔法使いのベルトとリングだろ！なんでその本物なんて持つてるんだ!？」

「俺のはそういう能力なんだよ。『仮面ライダーを司る程度の能力』ってな。だから俺は仮面ライダーに出たものならある程度まで出せたり使えたりするんだ」

「じゃ、じゃあ俺の能力ってどんなのだろうな」

「それを今からこの博麗神社の協巫女、博麗 霊夢に調べてもらうんだよ。しかし中が騒がしいな。ちとお邪魔するか」

「いいのか？勝手に入って?」

「まあ、大丈夫だろ。邪魔するぜー」

「あ！おい、置いてくくな！」

そして俺と甲は博麗神社内の居間に行くと霊夢と魔理沙、萃香、咲夜、レミリア、フランがミニ宴会を開いていた

「あら、紀斗じゃないそっちは…その落書きされまくったのはだれ?」

「は？落書き？」

甲はちようど近くにあつた鏡を見ると今の自分の顔の状態にようやく気づいた

「なんじやこりやあああああ!？」

「あ、お前気づいてなかったのか？てつきり俺はもうお前が気づいててそのままにしてるんだと思つてたんだが。」

「んなの気づいてたらすぐ取つてるわ！なんだよこれ!?くそ!?洗面所どこだ!？」

「洗面所ならその角を左よ。」

10分後

俺は待つてる間にフランの相手をしながら今回のいきさつを霊夢達に説明した

あと今回のミニ宴会の理由は輝針城で咲夜さんが自機入りして嬉しすぎて開いてもらつたものらしい

「あー、やっと取れた」

「おお、今お前のことも話したからちよつと霊夢に能力を調べてもらえよ」

「じゃあちよつと手を出してもらえるかしら?」

「あ、ああ」

「…ゆかりん、見てるなら出てこいよ。」

俺がそう言うのと俺の隣の空間が割れ紫さんが上半身だけ出して現れた

「あら、ばれてたのね」

「ゆかりんはこういうことを見逃すようなタイプじゃないからな」

「よく分かってるじゃない。いつそのこと私と浮気してみる？」

「お誘いは嬉しいが以前言っただように俺は浮気するくらいなら自殺するよ」
「つれないわね」

「俺は女性は1人だけしか愛さない主義なんだ」

「いいわね、永淋はこんないい男が見つかって」

「あんたの能力がわかったわ！」

「向こうもわかったみたいだしこの話はここで終いだ」

「あんたの能力は…『機械を改造・修理する程度の能力』よ！」

「機械か…」

「これはもう…」

「居候先は決まったな」

「え？え？」

甲の能力を聞いた面々は甲の居候先は1人しか思い浮かばなかった

「甲、お前居候先は…」

『にとりの家で決定！』

クパア

「あだっ!？」

俺達がそう言った瞬間スキマが現れにとりが落ちてきた

「あいたたた、ん?ここは博麗神社?」

「にとり、早速で悪いがこいつをお前の家に居候させてやってくれねえか?」

「え?なんで?」

「実はな…」

青年説明中…

「そういう能力ならオツケー!ほら、甲だっけ?さつきと行くよ!」

「え?え?え?ちよつと誰か説明を「スキマツアーへご案なくい」おおおお!」ヒュー

「じゃこいつも」

俺はスキマと一緒にNSマグフォンを入れるとスキマは閉じた

そして俺はファイズフォンでさつき一緒に落としたNSマグフォンに電話をかける

side甲

俺はいきなりにとりつて奴に連れて行かれそうになつたら何も無いところに変な空間が開いて落ちたと思つたら俺にとりは少しメカっぽい家の前に落ちた

「さすがスキマ妖怪、一瞬であたしらをスキマに落とすなんて伊達に年くつて無いね」

にとりがそういうとにとりの後ろにさつき空間が小さくだが開きさつき紀斗と話していた人の腕が出てきてハリセンでにとりの頭をぶっ叩いた

「ひゅい!？」

そして叩いてからその人が顔だけ出して俺に話しかけてきた

「私の名前は八雲 紫、スキマ妖怪よ。あ、スキマっていうのはこの裂け目のことね。まあ、詳しいことは紀斗に聞いて。そこら辺に携帯みたいなのが落ちてるはずだから。じゃ、私はこれで」

紫さんはそう言う顔と顔を引つ込めそのままスキマだったつけ？それも閉じていった
「いたた、やつぱりあの人が見てないわけなかったか」

「NSマグフォンか、なるほど」

「お！何それ何それ、面白そうだね。ちょっといじらせてくれないか？」ハアハア

「いや、駄目だから。おい、何故じりじりと近づいてくる。やめろよ、絶対やめろよ」
「フリだね。わかったよ」

「フリじゃねーよ！」

♪

そんなことをしているといきなりNSマグフォンからおそらく電話の着信だろう音が流れてきた

「通話ボタンは…これだな」

『よう、無事ににとりの家の前に着いたか?』

「無事には着いたがいきなりやられるとかかなり心臓に悪いぞ、あれは」

『それは本人に言ってくれ。それより今の内に今の幻想郷で起きている異変について説明しておくぞ。にとりにも一緒に聞かせてやってくれ』

「ああ、わかった。にとり、お前も一緒に聞けつて」

「はいはい、わかったよ」

青年説明中…

「なるほど、財団Xか。まさか実在するとは」

『ま、おそらく俺やお前のいた世界から来た奴じゃないな』

「そいつらを倒すためのツールを造るんだね!腕がなるよ!」

『その前に甲に弾幕教えておいてくれないか? そいつにも色々自衛の手段は必要だからな』

「しようがないな。まあ、OKだよ」

「よろしくお願います」

甲はきつちり45度の角度でお辞儀をする

「改めてそうやられるとなんか照れるね。まあ、そんなにかたくならなくてもいいから

気楽に今後ともよろしく」

プツーツーツー

「ま、あいつの方はこんなもんか。じゃあ俺は永遠亭に帰るわ」

「あら、もう少し居てもいいのに」

「永淋を待たせっぱなしなんだよ」

「一応一時間内には着いていたからあの刑は無しにしておいてあげるわ」

「ホツ、よかった」(若干忘れてた)

「今度はまた紅魔館にも来てね」

「ああ、そんときやまた一緒に遊ぼうな」

「それじゃ、またな！」

俺は再びテレポートを使い永遠亭に帰りそこから行く前と同じようなほのぼのとした休日^を過ごした

新キヤラ紹介

金井 甲（かねい こう）

年齢 29歳

身長 177cm

能力

『機械を改造，修理する程度の能力』

髪型

茶髪のショート

顔

キョウリュウジャーののっさんを上記の髪型にして凛々しくした感じ

体系

細マッチョ

使用武器

大体は無縁塚で回収，修理，改造した銃火器

それらが全て駄目になった場合もしくは何も用意していない場合は紀斗にディエン
ドライバーや龍騎系のライダーのデッキなどの使用者に負担が少なく誰でも変身出来
るタイプのツールを出してもらおう

おまけ今の紀斗の使える仮面ライダーの装備&フォーム

一号、二号、V3

初期装備のみ

ライダーマン

パワーアーム、ロープアーム、ドリルアーム、ネットアーム、マシンガンアーム

X、アマゾン、ストロングァー

初期装備のみ

スカイライダー

初期装備のみ

スーパード

スーパードハンド、エレキハンド、レーダーハンド、パワーハンド、冷熱ハンド

ZX

十字手裏剣、電磁ナイフ、マイクロチェーン、衝撃集中爆弾、虚像投影装置

B L A C K

初期装備のみ

B L A C K R X

初期フォームのみ

装備 リボルゲインのみ

シャドームーン

サタンサーベルのみ

シン、Z O、J

初期装備のみ（Jは巨大化も無理）

平成仮面ライダー

クウガ

マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタン

ライジングマイティ、ライジングドラゴン

アギト

グランド、フレイム、ストーム、トリニティの4フォーム

ギルス、G 3、アナザーアギト、G 4、G 3マイルド

初期装備のみ

G31X

龍騎系のライダー（オーデインにはまだ変身不可）

初期のカードのみ

ファイズ系のライダー

初期装備＋ファイズアクセル

ブレイド系のライダー

J, Q, K以外のカードは使える

響鬼系のライダー

初期装備＋響鬼紅

カブト系のライダー

初期装備＋ゼクトマイザー

電王

ソード、ロッド、アックス、ガンの4フォームのみ

ゼロノス

アルタイル、ベガの2フォームのみ

NEW電王、ガオウ、ネガ電王、G電王、幽鬼（ハイジャック、スカル）

初期装備のみ

キバ

キバ、ガルル、バツシヤ、ドツガ、ドカバキ

イクサ

セーブモード、バーストモードのみ

ダークキバ、アーク、レイ、サガ

初期装備のみ

デイケイド

クウガ、キバ、龍騎、ブレイド、響鬼、電王、アギト、カブト系のカード

デイエンド

デイケイドとほぼ同じ状態

キバラー

女性ライダーはベルトは出せるが変身出来ない

ダブル

初期の六つのメモリとファンクメモリ（しかしまだ相棒と呼べる者がいないので変身不可）

ジョーカー、サイクロン、アクセル、スカル、エターナル

初期装備のみ

(コアは変身不可)

オーズ

タカ、トラ、バツタ、ゴリラ、シャチ、カマキリ、サイ、ライオン、クジャク、コンドル、ゾウ、タコ、チーターのメダル

バース

バースCLAW☒s全て

アキラ、ポセイドン

初期装備のみ

フォーゼ

ベースステイツ、エレキステイツ、ファイヤーステイツ、マグネットステイツ(スイツチはステイツをコズミック以外は全て使える)

メテオ、なでしこ

初期装備のみ

パワーダイザー、クイーンダイザー、JKダイザー

ウィザード

フレイルム、ハリケーン、ランド、ウォーターの4フォームのみ

(指輪はスペシャル以外は使える)

ビースト，メイジ

初期装備のみ

白い魔法使い，ソーサラー

まだ変身出来ない

第十五幕 覚悟

甲が幻想郷に来てから3週間後、俺は日課にしている修行の為に修行場所である輝夜と妹紅の決闘場所に来ていた

あの2人に以前修行場所として使っていたかと思われ、聞いたところ決闘する日以外なら別にいいと言われれば毎晩 戦闘があった日と決闘の日以外は使わせてもらっている

「さて、今日はどいつでやるかな」

俺が準備を始めようとすると声が聞こえた

『ギャアアアアア!?!』

「! 今の悲鳴は…こっちか!」

俺は悲鳴のした方向に走り出した

そして悲鳴のした方向に進むとそこにはもはや原型が無くミンチになっている妖怪数体とその死体を刀でまだ刻んでいる1人の男がいた

男の服装は銀○の真選組のような服装だがおそらく返り血であろう血で真っ赤に染まり元の色がわからなかった

「おいあんた、やりすぎだ。そいつもう死んでるだろ」

俺が話しかけるとそいつは荒い息をしながらこちらに気付いた

「ハアア、ハアア、え？ああ、もう死んでたのか。熱くなつて気づかなかつた」

（おいおい、どんだけ妖怪に恨み持つてんだよこいつ。）

「ああ、僕の名前は神中 竜次（かんなか りゆうじ）ここへ来たらちようど妖怪にあつてね。」

「それで襲われたのか？」

「いや、僕から襲つたけど？」

俺はその答えに呆れこの男を訝しむ

「はあ？」

（こいつ一体何考えてんだ自分から妖怪に襲いかかる奴なんざ戦闘狂かよほどの馬鹿だ
けだぞ）

「なんでそんなことしたんだ？」

「え？なんでつて僕には妖怪を殺す力があるんだ。なら妖怪を殺すのは普通じゃないか

．．．．．

妖怪は皆悪なんだから」

「!?お前自分が何言つてるか分かつて「待ちなさい！この妖怪がー！」んだよ、今度は

！」

暗い竹やぶから出てきたのは少し血を流している最近知り合った狼女、今泉 影狼そして白衣を着た4人の女だった

「おい、大丈夫か！影狼！」

「ああ、あんたか。実際かなりやばい。あいつら弾幕効かないのもいるし肉弾戦に持ち込もうとしても硬いうえに飛び道具まで使ってくるから反撃できないんだ」

「な n 「君！今すぐそいつから離れるんだ！」うるせえよ！こいつは俺のダチだ！」

「そんなことあるわけない！はっ！まさか洗脳されているのか!？」

「はあ!？」

一体こいつは何を考えているんだ

どうゆう思考回路したらそんな風な考えに行きつくんだ

俺がそんなことを考えているとさつききの白衣の女達の1人が何かに気づいたように声をあげた

「竜次様！あいつですわ！海堂 紀斗！今回のターゲットですわ！」

「彼が!?! ってなんで僕の腕に抱きついてるのタリア？」

「こうしたいからですわ！」

「あいつがターゲット。言われてみればそうだねい。あと抜けがけは許さないよ〜タリ

ア

「ナミアまで!？」

「…ずるい。」

「わ、私も。別にあんたのことが好きでやってるんじゃないんだからね!」

「わつ?!ちよつと?!みんな!？」

…敵の目の前で何をやってるんだろうか、こいつらは

「影狼、今のうちに永遠亭にいけ。こいつらは俺が引き受ける」

「だけど…」

「大丈夫だ。俺にはライダーの力があるから心配いらねえよ」

「わかった。まったく人間てのはつくづく怖いと思うわ。その勇気とかそういうのが特に」

そう言い残し影狼は永遠亭の方に駆けていった

「妖怪を逃がしたのか。やっぱり情報通り洗脳されているんだね。紀斗君」

「情報?どういう情報だよ。あと勝手に名前を呼ぶな。悪寒がはしるわ」

俺は途中からどうもこいつの言動や態度が何かに似てると思ったが今はもう完全にわかった。こいつは携帯小説の転生物によく出てくる召喚される勇者みたいなタイプ

だ。しかも勇者（笑）の方

「ははっ、ひどいね。でも大丈夫、すぐにその洗脳を解いてあげるよ。悪の科学者の八意永琳を倒して！」

「ああ？永琳が悪の科学者だ？ふさけたことぬかしてんじやねーぞ」

「あの人が言ってたんだ。君は洗脳されて妖怪からこの世界を守る僕らの邪魔をしてるって！そしてその洗脳をしたのが八意永琳だつて！」

「そうですね、それにあんなBBA、直ぐに竜次が倒してくれますわ！」

「そうそう、早くあのおばさんを倒しに行くんだからそこどいてよく。」

「僕は八意永琳を倒して君を救いたいんだ！だからそこをどいてくれ。」

プツン

イマコイツハナンテイツタ？

オレノヨメヲオス？

エイリンニキガイヲクワエルモノハ…

ツブス

ツブスツブスツブスツブスツブスツブスツブスツブスツブス

ハカイシテヤル

「テメエラ、ゼンインハカイシテヤル」

「戦わないと駄目なのかい？」

「ダメレ、ソノクチヲヒラクナ」

「聞く耳持たずか」

俺はデイクイドライバーを腰に巻きカードを取り出す

「ヘンシン」

『KAMEN RIDE DECADE』

俺はデイクイドに変身したが以前のデイクイドの姿と違い目は禍々しくなり額のシグナルポインターは黄色ではなく紫になっているデイクイド 激情態に変身した

これはデイクイドが世界の破壊者という役割りを受け入れた姿だが今は俺の殺意によつてこの姿になった

「キサマヲノスベテヲ、ハカイスル」

「仕方が無いか。皆、行くよ！」

『はい！』

竜次は剣をかまえ女たちに呼びかけると女たちは2人がメモリとスイッチを出してもう2人はエピラクナワームとバタフライオルフェノクになった

『SWEETS』

そしてメモリを持っていた女はスイートドーナツにスイッチを持っていた女はア

ルターゾディアーツに変身した

俺は二つの不可解な点に気づき少し怒りが冷め口調が荒いだけになる

「おい、なんで財団Xにワームやオルフェノクがいやがる」

「彼女達はある病気のせいであんな姿になってしまったんだ。あの人はそんな病気を治す複数の組織に投資しているんだ。たしかスマートブレイン社やZECTとBOARDだったかな」

「!？」

(なるほど、投資と研究成果の交換でワームやオルフェノクを創り出しやがったのか。それなら恐らく人工アンデットも創っただろうな。)

「そして僕もすごい力をもらった。」

竜次は自分の懐からメモリを取り出す

『ORPHENOC H』

竜次はメモリを自分の左胸に刺すとライオンオルフェノクの姿となる

「そしてこれもね」

「!?!何故てめえがカイザギアを持っていやがる!」

「これも財団Xが創ったんだ。さっき言った組織の一つの研究成果を元にね。変身」

竜次はカイザフォンを開くと9, 1, 3と押しカイザドライバーの空いた部分にはめ

る

『STANDING BY』

『COMPLETE』

竜次はギリシア文字のをXを模したライダー、仮面ライダーカイザに変身した

「君を倒して君を救ってみせる！」

「てめえごときがカイザを、仮面ライダーを使うんじやねえええええ！」

俺は一枚のカードをディケイドライバーに挿入する

『ATTACK RIDE CLOCK UP』

俺はディケイド 激情態の効果でカブトにカメンライドしないでアタックライド

クロックアップを使い超高速で移動する

しかしそのスピードに着いてくる者が一体、エピラクナワームもクロックアップをし

てこちらに殴りかかってきた

俺は突進してきたエピラクナワームの拳を右腕で下からかち上げ左腕で腹を殴り怯

んだところをさらに膝蹴りをかますとエピラクナワームは後ろに倒れる

そこでクロックアップが切れ元のスピードに戻る

俺はエピラクナワームが立ち上がる前にカードを挿入する

『FINAL ATTACK RIDE DE, DE, DE, DECADE』

俺がジャンプするエピラクナワームまでカード状のエネルギー10枚以上現れる

俺はそれをキツクの体制で通過していきエピラクナワームにディメンションキツクを当てるとエピラクナワームは爆発する

「クカーー!?!」

「サラ!?!紀斗!君はまさかサラを殺したのか!?!なんで!?!」

「殺したからどうした?俺は今かなり機嫌が悪いんだ。てめえのくだらねえ自論に付き合う気はねえんだよ」

「何も殺すことはなかっただろう!」

「ドーパントやゾディアーツならまだしも、ワームやオルフェノクは倒したら死ぬ。当たり前だろう」

「彼女は望んであんな姿になったんじゃないんだぞ!」

「うるせえ。もうてめえの声は聞きたくねえんだよ」

「竜次様になんて暴言を!」

「許さない!」

「殺してやる!」

「へやあ!」

「ふんっ！」

「はああああ！」

スイーツドーパントとアルターゾディーツが粘着クリームと火球を俺に放ちバタフライオルフェノクが空から俺を襲ってくる

それに対して俺は新たにカードを挿入する

『ATTACK RIDE REFLECT』

俺はカリスのリフレクトのカードで俺の周囲にバリアを貼る

「なっ!?へぶ!？」

「ぐあっ!?うわベトベトする！」

「ツ~~~~！」

「み、みんな!？」

バリアに当たったクリームと火球は跳ね返され放った本人達に当たり空から襲いかかってきたバタフライオルフェノクは顔面を強打し怯んでいる

俺はさらにカードを挿入しバタフライオルフェノクに攻撃する

『ATTACK RIDE DOGGA HAMMER』

「ぶつとべー！」

「がはっ!？」

俺はドツガハンマーでバタフライオルフェノクを粘着クリームでくつついて動けないスイーツドーパント達とそれを取ろうとしてアタフタしている竜次の方へ殴り飛ばすとバタフライオルフェノクは他の2人と同じようにクリームにくつつく

「ちよつと何やってんのよ!」

「うるさいよ、てあれ!? あたしもくつついた!」

「ばかつ! あんたまでくつついてどうすんのよ!」

「みんな! とりあえずこれを外さない!」

俺はギャーギャー騒いでいるクズ共の方を向きカードを挿入する

『ATTACK RIDE GIGANT』

「オマケだ、もらつとけ」

俺はギガントを構えクズ共に全弾発射した

『え?』

「かはっ…」

「くっ…」

「ぐう…」

「うう、みんな大丈夫?」

クズ共は全員生き残っていたが竜次だけ三人と離れた場所に飛ばされた
「まだ生きてるか、とつととトドメをさしてやろう」

俺はもう一度ファイナルアタックライドのカードを挿入する

『FINAL ATTACK RIDE DE, DE, DE, DECADE』

俺はライドブツカー ガンモードを構えると三人との間にさっきのカード状のエネルギーが現れ俺が引き金を引くとエネルギー弾が放たれそれがカード状のエネルギーを通過するたびでかくなり三人を飲み込んだ

『ぐああああ!?!』

三人が居た場所には壊れたメモリとスイッチそして倒れた2人だけが残った

「2人だけ? カナ、カナは!」

「死んだよ」

「そ、そんな、そんなうわあああああ!」

「ゆかりん、その2人確保頼む」

「わかったわ」クパア

俺は最初からスキマで傍観していた紫に気絶した2人の捕獲を頼むと紫はスキマを開き倒れた2人を中心に落とす

「2人共! 紀斗! タリアとナミアをどこへやった!」

「さあ、どこだろうな。俺は知らん。それよりお前は他人の心配より自分の心配をした方がいいんじゃないか？」

「僕は絶対君を許さない！海堂 紀斗！」

竜次は1, 0, 6と押しカイザフォンをフォンブラスターに変えバーストモードにする

『BURST MODE』

「うおおおおお！」

竜次は俺に向かって走りながらでたらめに撃ってくるがはつきり言つて射撃精度はかなり低い。

「当たるかよ、そんな弾」

俺は弾には当たらず竜次に向かって歩いていき思いつき右拳を振り上げ殴った

「ごぼっ!？」

「お前は所詮そのあの人とやらの操り人形なんだよ。嘘をすりこまされそれを簡単に信じ与えられた力でいい気になり自分を英雄か何かと思いきんだただの愚者だ」

「う、嘘だ！あの人は僕が英雄になれるかもしれないって！危険な場所にいる人達を守るって！だから僕はここに来たんだ！」

「お前じゃ誰も守れない。困ってる奴を助けたいならそこら辺でボランテアでもやっ

てりやいいんだよ。あと一ついいことを教えてやる。英雄つてのはさ、英雄になろうとした瞬間に失格なのよ。お前、いきなりアウトってわけ」

「嘘だ…嘘だ嘘だ嘘だああああ！」

「これ以上話しても時間の無駄だな。トドメを刺してやるよ」

俺は本編には出てこなかったカメンライド系のカードを挿入する

『KAMEN RIDE ETERNAL』

俺はディケイドエターナルに変身しさらにカードを挿入する

『FINAL ATTACK RIDE E, E, E, ETERNAL』

Dエターナルの足先にエネルギーが溜まると同時にカイザに変身している竜次の胸から機能を停止したオルフェノクメモリが出てくる

それと同時にカイザの変身は解除され元の人間に戻る

「な、なんで、メモリが!？」

「このエターナルの必殺技はT2メモリ以前のメモリ全ての機能を停止させるんだよ。せいぜい地獄を楽しんでこい。英雄に憧れた愚者よ」

俺は足先に溜まったエネルギーを回し蹴りで竜次に叩き込んだ

生身の身体で仮面ライダーの必殺技に耐えられる筈もなく竜次は吹っ飛び近くの岩にめり込み息絶えた

「…人を殺しちまったか。脆いもんだな、命つてのは」

パチパチパチパチ

俺はそんなことをつぶやくとどこからか拍手と人をおちよくるような声が聞こえて来て竹林の影から一人の奇抜な帽子を被り白衣を着た男が現れた

「いや、初の人殺しおめでとう♪僕もこいつは内心イラツとしてたから胸が爽快だよ
！ふふふつ」

「てめえ、なにもんだ」

「僕はM、あ、性癖じゃないよ、コードネーム。別名マッドハッター、イカレ帽子屋さ。不思議の国のアリスに出てくるね。僕は財団X Z支部の幹部の一人だね。ガイアメモリの研究をしているんだ。さっきのこいつが使ったメモリも僕の造ったメモリさ。試作品だけどね♪こいつはただの実験体。でもまだまだ試したいメモリはあるからね。これは持ち帰って色々試すんだ♪」

「逃げんじゃねえ。撃つぞ」

俺はライドブツカーを構えて脅す

「ふふふ、ごめんね♪また今度遊んであげるから」

Mはエターナルエッジを取り出しメモリを差し込んだ

『ZONE』

俺はライドブツカーで撃ったが一瞬速くMは竜次の死体を持って逃げた
「チツ、ゆかりん今の奴ら追跡は？」

クパア

空中でスキマが開きそこから紫が出てくる

「駄目ね、全く感知出来ない」

「それならさつき捕獲した2人を尋問するか」

「そうね、着いてきて。今マヨヒガの地下室に繋いであるから」

俺と紫はスキマを通りマヨヒガの地下室に行くときさつき捕獲した2人の女が鎖に縛られながらこちらを睨んでいた

「竜次様をどうしたの！竜次様と会わせなさい！」

「とつととこれほどきなさいよ！ババア妖怪！」

ピキッ

「ゆかりん抑えろ、ここで殺したら無駄になるぞ」

「ええ、わかってる、わかってるわ。でも一発ぐらいいいでしょ。一発殴るくらい」

「今のゆかりんの力み具合で殴ったら首が飛んじまうからやめとけ」

「チツ、しょうがないわね。さとり、来てちょうだい」

俺たちの後ろのドアが開き地霊殿の主、古明地 さとりが現れた

「この人達の心を読めばいいんですね。その前に紀斗さんも紫さんも怒りを抑えるか部屋から出るかしてください。お二人の怒りが強すぎて集中できません」

「悪い」

「仕方ないわね」

俺と紫は一旦部屋の外に出たが数十秒後にさとの驚いた声が聞こえすぐさま部屋の中に入った

「どうした？ つ!？」

「これは!? 2人共死んでる!？」

俺たちが部屋に入るとそこにはうろたえているさとりと目や口から血を流し死んだ2人の死体があった

「心を読んで表層心理から幻想郷にどうやって来たかを見ようとした瞬間、2人共目や口から血が出てきて死んだんです」

「そこまで徹底してやるってことね。まさか記憶を覗くだけで死ぬよう細工されてるなんて」

「腐ってんな、部下を捨て駒みてえに使うとは」

「で、こいつらの処理はどうする？俺がやってもいいか？」

「別にいいけれど、どうするの?」

「まあ見てろ。変身」

俺はディケイドの変身を解いてから王蛇のデッキにサイとエイのマークが追加されたデッキを取り出しベルトに装填する

俺は仮面ライダー王蛇になりカードを二枚召喚機であるペノバイザーに挿入する

『ADVENT』

『UNITE VENT』

俺の後ろに鏡が現れそこから王蛇の契約モンスター、ベノスネーカーとガイとライアの契約モンスター、メタルゲラスとエビルダイバーを融合させたミラーモンスター、獣帝ジェノサイダーを召喚した

「ジェノサイダー、その死体を喰え」

ジェノサイダーは2人の死体に近づき丸ごと2人を飲み込んだ

「なかなかエグいわね」

「生きながら喰わせるよりマシだ。俺はもう戻っていいか?」

俺は変身を解き紫に尋ねる

「ええ、ご苦労様。さとりも戻っていいわよ」

クパア

「では私はこれで」

さとりはそう言いスキマを通り帰っていった

「じゃあな、ゆかりん。他の皆にも今日の情報を伝えといてくれ」

「わかったわ。紀斗も無理しないようにね」

クパア

俺はスキマを通って永遠亭に戻ると永琳が駆けてきた

「心配したわよ紀斗！影狼から事情は聞いたけど大丈夫なの!？」

俺は永琳に返事をする前に抱きついてしまった

「!?ちよっ、紀斗!?!／／」

「ごめん、今はこうさせてくれ」

「…わかったわ。落ち着いたら話してね」

「ああ…わかった」

俺は少し落ち着いてから永琳と一緒に永琳の部屋に来た

「俺は今日、初めて人を殺しちまった。それも怒りに任せてだ。自分の一時の感情で人の命を奪っちまった」

「…理由を…聞かせてもらえるかしら」

「俺は財団Xの奴らが永琳を倒すって、そう奴らが言った瞬間キレてそのまま奴らの怪

人2体と一人を…殺しちまった。他にいた2人も財団Xの仕掛けで死んじまつて俺はその2人をミラーモンスターに喰わせちまった。俺は…はつきり言つて今の自分が怖い。簡単に人を殺しちまつた自分が怖いんだ」

今まで倒してきたのはゾディアーツやドーパントのような倒しても中の人間が排出されるものやヤミーのような人間ではないものばかりだった、だが今日俺が命を奪つたのは俺と同じ人間。それを自覚した途端俺の中に罪悪感が生まれ同時に今まで仲良くしていた者達や永琳から人殺しとして忌避されるかもしれない、また同じように人殺しを繰り返してしまうかもしれないという怯えが俺を支配していた

「なるほどね。紀斗…確かに人を殺すのは悪いこと。それは私もそう思うわ。でもね、私も昔同族を殺したわ。姫様を守る為に。貴方が何かを守る為に闘つたのなら私は何も咎めない。だけどね、快楽の為や利用する為だけに殺すなら私は私自身の手であなたを殺す。それが私の、恋人としてのケジメよ」

その答えに怯えが消え代わりに俺の中に何か強い気持ちが生まれてくる
「俺は、守りたいなんて大層な理由じゃない。お前を…永琳を貶した。俺の自慢の恋人を貶した。それがたまらなく許せなかつたんだ」

「紀斗…」

「俺は…絶対に守る。この幻想郷を…皆を…そして永琳、お前を。たとえ死ぬような目

にあつてもだ。俺は仮面ライダーを司る者。仮面ライダー達は正義にも悪にも覚悟があつた。俺はその覚悟を受け継いでやる…絶対に守るつて覚悟を！」

「ふふつ、そのいきよ。紀斗、うじうじしてるのはあなたらしく無いわ」

「ああ、ありがとうな、永琳」

「んっ」

俺達はキスをすると部屋の入り口の襖から視線を感じそちらを見るとまた輝夜、てる、鈴仙、さらに影狼そして大量の兎達がこちらを覗きこんでいた

「やっぱいいわね、人の恋路を見るのは。本当飽きないわ」

「写真GET、文屋に高値で売ろうかね♪」

「恋愛してる人つて皆あんな感じのことはするのかな？／＼／＼」

「影狼さん、顔すごい赤いですよ」（この2人が付き合い始めた頃の私みたい）

『ニヤニヤニヤニヤ』

「コラ！お前から見せもんじゃねーんだからどっか行け！」

『それ逃げろー』

俺が襖の方へ向かうと全員特に兎達と鈴仙、てるはその名の通り脱兎のごとく逃げ出した

そして部屋は俺と永琳だけになった

「なあ、永琳」

「何かしら？紀斗」

「今日…その…一緒に寝ても…いいか？／／／／」

「クスツ、ええ、いいわよ／／／」

その日は永琳と一緒に布団で寝てその日を終えた

布団の中でお互いの体温を感じながら

第十六幕 突然の訪問

あの愚者を殺した日から2週間と3日たったある日

俺は日曜日で休みなのでその日は永遠亭メンバーでスマブ○Xを勝ち抜き戦でやっていた

因みにルールはストック3のバトロワでアイテムはスマツシ○ボールだけ今抜けているのは永琳だ

「さあ、ランチャタイムだ！」↑ピンク玉（ポケモ○ではない）でスマツシ○ボール発動

「ああ、回避遅れたー。」↑蛇のおっさんが鍋にログインしました

「まだまだだねー♪」↑トウーンな剣士で緊急回避

「さあ、吹っ飛びなさい！鈴仙！」↑桃姫で緊急回避してから鍋からログアウトされた蛇をフライパンで吹っ飛ばした

ドーン！

鈴仙「ああ、もうストックーしかない、私だけ」

「私としては前作のドクマリは使いやすかったけど今はピ○トね」

→黒verの天使で一位を取って休憩中

／＼ピンポン／

「あら、お客さんかしら」

「永琳、悪いけど出てくれないかしら。今ちよつといいところだから。あつ!?それは私のスマ○シユボールよ!」

「速い者勝ちですよ」

／＼ピンポン／

「はい、今出ますよ!」

「こんな昼間から誰ですかね?あつ!?また最下位…」

「さあ?まあさっきのチャイムの鳴らし方からして急患ではないみたいだね。ほらっ眠りなさい!」

「食らうかよ!」

「ここに海堂 紀斗はおりますか!」

俺にとつては初めて聞く声が永遠亭内に響きわたった

「誰だ?」

「この声は…」

「あの方ですね」

「まくた、めんどくさいことになりそうだね」

俺達はスマブ〇を止め玄関に行くところには本来月にいるはずの綿月姉妹がいた

「綿月姉妹と月の玉兔のレイセン!？」

(すつげえ嫌な予感…)

「あら、私たちとあなたは初対面の筈なのに、なんで名前を知ってるのかしら？」

「しかも私の名前まで。」

「まあ、それは東方プロジェクトっていう「そんなことは今はどうでもいい！」え？」

「私たちは先日スキマ妖怪から届いた手紙を読んだ時は目を疑いましたよ。八意様に彼氏が出来たなんて」

「ゆかりんめ、まためんどくさいことを…」

「私たちは八意様を取り戻ゲフンゲフン貴様が八意様にふさわしい相手かどうか見極めに来たというわけだ」

「ろくでもない奴だった場合はこの世から消すつもりでいるしね」

「私はただの護衛兼付き添いです」

「ということとで弾幕ごっこをやるぞ」

「話に脈絡をつけてくれ。でないとなんか」

「ふん、理解度の低い奴め。八意様の彼氏なら八意様を守れるような強さが必要だ。つ

「まり私に勝てば彼氏ということを確認してやる」

「豊姫さんの方は参加しないのか？」

「ええ、だって依姫ったら絶対相手をぶった切ってやる！って張り切ってたもの。私も少しは参加したいけど今回は依姫に任せろわ」

（その張り切りようは怖すぎるぜ。俺、これ終わって生きてるかな？）

俺達は妹紅と輝夜の決闘場に行きそこで俺は依姫と対峙する

※永淋達はバツタカンで観戦中

「それじゃあルール説明といくぞ。スペカ枚数は制限無し。能力の使用はあり。時間制限は無し。どちらかが倒れたら負けだ」

「OKだ。じゃあ少し能力を使わせてもらっていいか？」

「ああ、私に危害を加えるものでなければ構わない」

「それじゃあ遠慮無く」

俺はフォーゼドライブバーを出し腰に巻きトランススイッチを押すとカウントダウンが始まる

キンキンッ キンキンッ

『THREE

TWO

ONE

「変身！」

俺はハンドルレバーを前にして戻す

するとコスミックエナジーの最終安全回路が解放され俺はロケットを模した仮面ライダー、仮面ライダーフォーゼに変身した

「宇宙キターー!!仮面ライダーフォーゼ!タイマンはらせてもらうぜ!」

「変な頭ですね。すぐ終わらせてあげます。」

「変な頭って言うな!そんな簡単に負けねえぞ!」

俺は弾幕を50個以上出し依姫に飛ばしていくが全て避けるか切られるかでまったく意味がない

俺は新たに作ったスペカを一枚取り出す

「喰らいな!初お披露目のスペカ!透明符【インビジブル】!」

依姫の周りにデタラメな配置で弾幕が張られる依姫に向かい進んでいく

「これのどこが透明だ!こんなもの!」

依姫が近づいてきた弾幕の一つを切ろうとすると弾幕は一斉に消えた

「なっ!?!」(切った感触も無い、透明になったわけでは無くどこかに瞬間移動したのか!)

そして一瞬依姫の動きが止まった次の瞬間、今度は規則正しく弾幕が依姫を囲むよう

に現れた、しかも弾幕の弾一つ一つがバラバラのタイミングで点滅するように透明になつたりしている

「いけい！」

「(っ)のー！」

弾幕は一齐に点滅しながら襲いかかるが依姫は簡単に全ての弾幕を切り裂いた

「チツ、やっぱ小手先じゃ駄目か」

「当たり前です、今度はこちらの番ですよー！」

依姫は200以上の弾幕を一気に俺に降り注がせた

「おいおい、洒落にならねえよ、これは。」

俺は左足のスイッチを変え押す

『WHEEL ON!』

俺は左足にホイールモジュールを出現させ弾幕からホイールモジュールで走って逃げ
げる

さらに俺はホイールで走りながら右手のスイッチをエレキスイッチに変え、押す

『ELEK ON!』

俺は全体的に金色になりビリーザロッドを持った仮面ライダーフォーゼ エレキステイツになつた

俺はホイールで走りながら依姫に近づきホイールをスピードをそのままの状態解除し背中のブースターから推進剤を出しさらにスピードアップして電撃を付与させたビリーザロッドで依姫に斬りかかる

「行くぜ！」

「ふっ！ぐっ!?!」

俺のビリーザロッドと依姫の刀がぶつかり合いつばぜり合いになるが俺のビリーザロッドに付与させた電撃で依姫は少し感電し麻痺した

俺は麻痺した依姫をそのまま押し切り依姫は地面に膝をつく

俺はそれに追い打ちをかけるようにエレキスイッチをビリーザロッドの柄に挿しリミットブレーイクを仕掛けようとする

依姫は膝をついた状態でいきなり刀を地面に突き刺した

「まさか!?!」

俺の周囲の地面から無数の刃が突き出てきて俺を取り囲む

「はあ、はあ、これは祇園様の力、下手に動く祇園様の怒りに触れますよ」

「だからどうした?」

「へ?」

「下手に動けば祇園様の怒りに触れる。その程度で俺の動きを止めたつもりか?」

「動けばどうなるかわからないんだぞ!？」

「知るかんももん。神が怖くて、仮面ライダーやってられっか!」

『ヴー! ヴー! L I M I T B R A K E!』

「ライダー100億Vバースト!」

俺はリミットブレイクしたビリーザロッドを地面に突き刺し電撃で周りの刃をはじき飛ばす

するとはじき飛ばされた刃と地面の中から新たに出てくる刃が俺に襲いかかってくる

「チツ! 神速「クロックアップ」!」

その瞬間俺は高速移動で迫ってくる刃を避けたりビリーザロッドで払いのけながら依姫の前まできて腹を殴って刺さっていた刀も無理やり抜いた

瞬間クロックアップは切れ刃も全て消えた

「馬鹿な! 今のスピードは一体!?! しかも祇園様の力を解かせるとは…想像異常ですよ。出し惜しみはしてられませんね。【愛宕様の火】!」

すると依姫の両肩から先の腕までが燃え火そのものとかした

「地上にはこれほど熱い火はほとんどありませんよ」

「そつちが火ならこつちも火だ!」

俺はエレキスイッチを抜きベースステイツに戻ると今度はファイヤースイッチを挿してレバーを引いた

『FAIR ON!』

俺は全体的に赤くなりヒーハックガンを装備した仮面ライダーフォーゼ ファイヤーステイツになった

「消化してやる!」

『LIMIT BREAK!』

俺はヒーハックガンから消化剤をリミットブレイクで射出する

「その程度ではこの火は消せません!」

依姫はそれを両腕でガードするが火は消化剤をくらってもまったく勢いを衰えさせず燃えている

「効かねえか。なら近接でやってやるよ!」

俺はヒーハックガンのモードを変えヒーハックガンで殴りかかる

「遠距離武器で殴りかかってくるとは。燃やしつくしてあげますよ!」

俺のヒーハックガンと依姫の燃える拳がぶつかり合うがヒーハックガンは溶けず愛宕様の火の炎熱や愛宕様の火そのものをどんどん吸収している

「これは!?!愛宕様の火が吸収されている!?!」

「その通り、どんどんいくぞー！」

俺は依姫に解除させるスキを与えないよう連続でヒーハックガンで殴りかかる
「くっ！はあっ！」

依姫は俺のヒーハックガンを殴って後ろに下がり愛宕様の火を解除する

「パワーも溜まったし、行くぜー！」

俺はヒーハックガンにファイヤースイッチを挿し込む

『ヴー、ヴー、L I M I T B R A K E ！』

「ライダー爆熱シユート！」

ヒーハックガンから火炎放射が放たれ依姫に向かっていく

「甘いですよ。【石凝姥命】！」

依姫の目の前に八咫の鏡を持った石凝姥命が現れ俺のライダー爆熱シユートを反射させた

「おいおい、マジかよ」

俺は反射された火炎放射をまたヒーハックガンで吸収し新しいスペカを出す

「行くぜ、おい！増符【イリユージュオン】！」

俺の後ろに70個くらいの弾幕が現れ依姫に飛んでいく

しかも弾幕は一つ一つが6個に分身し400個以上の弾幕となる

「これは!?!ならば【天宇受売命】!」

依姫は光を帯び躍るような動作で弾幕を避けていく

「駄目押しだ!もういつちよ!」

俺はもう一度ファイヤースイッチをヒーハックガンに挿し込む

『ヴー、ヴー、LIMIT BRAKE!』

「ライダー爆熱シュート第二弾!」

弾幕と一緒に火炎放射が放たれるが依姫にはまったく当たるとは思えない

「ある人の名言でこんなセリフを聞きました。攻撃?当たらなければどうということはない。」

「赤くてステータス3倍になってから言えやあああ!」

『GATLING ON! LAUNCHER ON!』

俺は両足のスイッチを変えガトリングモジュール、ランチャーモジュールを出す

「全弾発射!」

俺はフォーゼドライブのレバーを押しリミットブレイクを発動させる

『FAIR, GATLING, LAUNCHER LIMIT BRAKE!』

ヒーハックガン、ガトリングモジュール、ランチャーモジュールから火球、ガトリング弾、ミサイルが放たれさらに弾幕の密度は濃くなるが依姫には一発も当たらない

「くそつ、駄目か」

俺は弾を撃つのをやめると依姫は悠然と立っていた

「流石に今のを全て避けるのは骨が折れましたよ」

「まったく、自信なくすぜ」

「あらあら、ずいぶんと盛り上がってるじゃない。」

いきなり竹林の陰から寒気がする声が聞こえ俺と依姫はそちらを向きそしてそれを視界に入れたことを後悔した

「あらやだ、なかなかいい体じゃない♪嫌いじゃないわ♪」

そこにはオネエ言葉を使うムキムキのおっさんがいた

もう一度言うオネエ言葉を使う ムキムキのおっさんがいた

「うぎやあああああ!?!キモい変なおっさんが出たあああああ!?!」

「これはなんという破壊力!?!目が腐りそうです。」

「そう、変なおっさん、変なおっさん!?!あんた今レディーに向かって最悪な侮辱をしたわよー!」

「おい、ここにお前以外にレディーっているか?」

「いえ、ここには私とあなたと変なおっさんしかいませんが」

「また言ったわね!? ムツキー!？」

「ここにレンゲルはいないぞ、変なおっさん。」

「もう許さないわ! そっちの女は始末してそっちの仮面ライダーの子はじっくりと可愛がってあげ・る♡」

「ヒイヒイヒイ!？」

映像を観ていた永遠亭では

「紀斗おおお! 今助けにいくわよおお!!」

「お師匠様落ち着いてえええ!」

「あんな生物が存在してたのね。穢れの塊だわ」

「私もあそこまで気持ち悪いのは生まれて初めて見たわ」

「ちよつとトイレ行ってきます。ウプ」

場所は戻って決闘場

「さてこのままじゃ分が悪いから、出てきなさいお前達!」

「「はっ!」」

竹林の陰からさらに4人、白衣のイケメンが出てきた

「私は財団X幹部オルフェノク専門家のO様の1の部下のナアマよ! この子達は私の部

下。忠実な僕よ」

「「「我らの魂はナアマ様の為に！」」」

（おいおい、こいつらどんな神経してんだ？ん？こいつら全員目が虚だ。ということとは洗脳の類か。絶対捕まりたくない！）

「依姫、こいつら」

「ええ、洗脳されていますね。可哀想に」

「あら、人聞きの悪い。私は照れ屋な彼らを素直にさせてあげただけよ」

「嘘だっ!!」

「ま、いいわ。あなたも私の虜にしてあげるわ、このジェリーフィッシュオルフェノクとナアマ様がね！」

するとナアマの姿はクラゲのようなオルフェノク、ジェリーフィッシュオルフェノクに変態ゲフンゲフン変身した

そしてそれに触発されるように後ろの男達も右からドルフィンオルフェノク、フロツグオルフェノク、ピジョンオルフェノク、カクタスオルフェノクに変身した

「不思議だ。怪人態になった方が精神的ダメージが少ないなんて」

「まあ、少しだけですけどね」

「依姫、あのクラゲは俺がやるから後ろの四体の相手をしていてくれないか？あとあい

つらに弾幕は効かないぞ」

「分かりました。ようは四体ともぶった切ればいいんですね」

紀斗「頼んだ」

「さあ、かかってくるなさい！かかってくるなさい！かかってくるなさい！」

「行くぞ！クラゲ野郎！」

「私は野郎じゃないわよ！」

俺はファイヤースイッチと左手のスイッチを外しベースステイツにもどってからN
Sマグフォンを出す

「割って！挿す！」

俺はNSマグフォンをNマグネットスイッチ、Sマグネットスイッチにして右手と左
手のスイッチのところに挿す

『N！S！MAGNET ON！』

俺はでかい磁石を装備したような仮面ライダーフォーゼ、マグネットステイツに変身
した

「一気に決めてやる！」

俺はガトリングモジュールとランチャーモジュールを出したままりミットブレイク
させる

「ライダー超電磁ボンバー一斉掃射！」

肩の磁石が離れ空中で組み合わさり電磁砲を放ちさらにさつきと同じようにガトリングとランチャーからガトリング弾とミサイルを放つ

「あら、危ないわね」

全ての弾を撃ち爆煙が立ち込めるがすぐに風に飛んでいき爆煙が晴れるとそこにはジェリーフィッシュオルフェノクの前にポロポロになったピジョンオルフェノクが立っていた

「なっ?!お前仲間を?!」

「あら、この子は私のために体を張ってくれただけよ。この子達は私を命がけで守ってくれるの」

「自分の命を優先させる用の洗脳かよ。京水さんの方が何倍もマシだな」

ピジョンオルフェノクは倒れ灰になったが少しだけ安らかな顔して逝った

「ふんっ!あんな昔に死んだゾンビ兵より私の方が腐ってるですって!?!失礼しちゃうわ!」

「てめえにあの人達を笑う資格はねえよ。すぐに消してやる公害野郎!進化符【ライダーエボリューション】!」

俺はフォーゼの最強フォーム仮面ライダーフォーゼ コズミックステイツになった

「皆の絆で宇宙を掴む！大道や京水さん達には覚悟があった！道は間違えていたが！彼らは少なくともてめえほどのクズじゃなかった！」

「言ってくれるわね！私の触手で抱きしめて！あなたも私の虜にしてあげる！」

ナアマはそう言い両肩から数十本もの長細い触手を伸ばしてくる

「俺に！触んじやねえ!!」

『FIRE FIRE ON!』

俺はバリズンソードをスラツシユモードにしてからファイヤースイッチを挿しこみそれを一蹴する

「くっ熱いわね！そういうの苦手なのよ！」

「海堂 紀斗！こっちは全員倒しました！あとはそいつだけです！」

「OKだ！デカイの一発くれてやる！」

俺はバリズンソードのレバーを上に戻しブーストモードに戻しコズミックスイッチをバリズンソードに挿す

するとナアマの後ろにワープゲートが現れ俺はナアマにバリズンソードを突きたて宇宙空間にワープする

「てめえは今ここで倒す！抜いて…挿す！」

俺はバリズンソードをスラツシユモードにしてから挿してあるコズミックスイッチ

を抜いてからまたバリズンソードに挿す

『ファー！ファー！LIMIT BREAK！』

「トドメだ！ライダー超銀河フィニッシュ！！」

「これは夢！悪い夢よー!?!」

俺はバリズンソードの刀身にエネルギーを溜めそれを回転斬りでジェリーフィッシュオルフェノクに喰らわせジェリーフィッシュオルフェノクは灰になって消えた

「ふー、終わった終わった」

「お疲れ様です」

「そーいやお前が相手してた他三体は最後までどんな感じだった？こっちに来させられたピジョンオルフェノクは妙に安らかな顔してたんだが」

「ああ、確かに三体共斬った後に安らかな顔して私に向かって最後に君のような女性に倒されて本望だつて言つて灰になりましたけど」

「…よっぽど酷い目にあつてたんだな」

「そうですね。安らかに眠つてほしいものです」

「紀斗ー！無事ー!?!」

「お師匠様、ちよつと待つてくださいいよ。」

「依姫様、ご無事ですかー!?!」

俺たちが話していると永遠亭にいるはずの永淋が弓と矢を持ち鈴仙は手ぶらレイセ
ンが銃を持って走ってきた、俺は変身を解いて永淋達と向かい合う

「ああ、永淋。大丈夫、もう終わったよ」

「よかった、紀斗の貞操の危機かと思って全速力で来たのよ」

「ははは、まあ、確かに悪寒はかなりはしったけどこの程度で負けるわけにはいかないか
らな」

「そういえばお二人の決着はどうなるんですか?」

「そういやそうだな。どうする? 回復してからまたやり直すか?」

「いえ、この勝負はあなたを見極める為の戦い、あなたなら八意様を任せられます」

「そうね、彼なら私も大丈夫だと思うわ。依姫ともあれだけやれるなら実力も申し分無
いし」

「豊姫様!?! いつの間に!?!」

「今さっきよ。能力で飛んできたの。」

豊姫と依姫は突然地面に正座し俺に頭を下げる

「八意様をよろしくお願いします。」

俺は同じように地面に正座し頭を下げて言った

「俺はこの命にかえても永淋を守ります! そして絶対に永淋は幸せにしてみせます!」

2人は薄い笑みを浮かべ立ち上がるとレイセンが2人の近くに行つて服の土ぼこりを払おうとする

「あ、そうだ。これ渡しとくよ」

俺は立ち上がつてスタッグフォンとビートルフォンを渡す

「これは？」

「こいつはビートルフォンとスタッグフォン。まあ、分かりやすく言うならそのメモリを挿すと自立移動が出来る携帯電話だ」

「なるほど、面白いですね。月の開発部にでも見せてみますか」

「バラしたりはしないでくれよ」

「それは保証出来ないわね♪あそこの子たち皆好奇心旺盛だから♪」

「それでは私たちはそろそろ帰ります」

「えー、もうちよつとこつちにいない？」

「あまりこちらに長くいすぎると部下達も心配しますしなによりちゃんと言っているかが心配です」

「しようがないわね。じゃ八意様、皆さんもまた会いましょう」

「海堂 紀斗、八意様を悲しませたら即刻打ち首ですからね」

「あ、ああ、わかつてる」

「さよならー!!」

豊姫達は能力で帰り俺たちも永遠亭に戻った

「そういえばまだスマ○ラの決着は着いてないけどどうする?」

「そんなやる体力残ってないよ。リアルスマブ○みたいなのがやったんだから」

「それじゃ帰ってご飯の支度でもしましょ」

「月のあの2人にも認められたことだし赤飯にでもするかい?」

「てゐ…からかうならまたあの薬を注射しましょうか?」

「ビクツ!す…すいません」

俺たちはそんな他愛ない話をしながら晩飯を食べその日を終えた

今日の戦いを他にも観ていた者がいたとも知らず

一人の白衣の男がいくつものモニターがついた暗い部屋でスナック菓子を食べながら一つのモニターを覗いている

「ふむ、やっぱりコンソメは至高、いや違った今回はフォーゼに変身、しかもかなりス

イッチも使ってるから恐らくアストロスイッチは全て持っていると考えていいな。しかしうちの支部が確認しただけでも王蛇、オーズ、バース、ファイズ、フォーゼ。能力で変身しているようだがこいつはほぼ全ての仮面ライダーになれると考えていいな。しかし今回はこいつの戦い方の一つと要注意人物の確認あと部下の中で一番気持ち悪かったあのオカマも消えたし一石三鳥だな。あのイケメン共もあのオカマがそこら辺から連れてきてオルフェノクにした奴だし、支障は無いからな。さてベルトの制作にとりかかるとしよう。帝王のベルトを超えるベルトの制作を……」

男、〇はそんなことをいいながら部屋を後にした

第十七幕 悪夢

夢をみていた

夢の中で俺はなにかよく分からない怪人と闘っていた

しかし結果は惨敗、俺は変身も解け地にふしていた

仲間達は全員倒れ怪人は片手に永淋の首を掴み持ち上げていた

(おい、やめろよ)

怪人の握る力がどんどん強くなっているのが遠目でもわかるいや、分からせられた

(やめろ！やめてくれ！)

声は出したくても出せず体も動かせずただその光景を見ることしか出来ない

そして永淋の首からゴキリと嫌な音がした

「うわあああああああああ!?!」

俺は悲鳴をあげながら飛び起き息を荒げる、布団と身体は嫌な汗でぐっしよりと濡れ

隣で永琳が心配そうにこちらを見ていた

「紀斗！紀斗しっかりして！」

「はあ、はあ、夢…だったのか。」

「大丈夫？かなりうなされてたみたいだったけど」

「ああ、嫌な夢を、悪夢をみてた」

数日後

（頭が痛え、寝不足でフラフラするぜくそつ）

俺はここ数日同じような夢を見ていた

仲間も愛しい人も守れず自分の目の前で殺される夢

そんな悪夢を毎日のように見て寝不足になっていた

流石におかしいと思いデンデンセンサーやバガミールなどを永遠亭付近に放ち調べ

させてあるがまったく成果は出ず仕事も休んでいる

眠気は今ほひとまず電王の良太郎の姉である愛理さんの特製のかくなくりまずいド

リンクでなんとか防いでいるがそろそろ限界かもしれない

二日前に甲に頼んだ物が届かないと打つ手無しだ

そう考えてるうちにまた眠…け……が……zzzz

「おい！起きろ！紀斗！」

俺が寝そうになると襖を開けて甲が入ってきて俺が寝そうになっているのに気づき

すぐ起こしてくれた

「ハッ！悪い、甲、助かった。それで頼んでたもんは出来たのか？」

「ああ、お前に頼まれた通りガジェット達を強化改造してきたぞ。ほらこれだ」

甲はそういうと持ってきたアタツシユケースの中からメモリガジェット達を取り出す

「外見はあんま変わってないが性能の方はどうなったんだ？」

「ああ、まず頼まれたデンデンセンサーは感知出来る距離を半径10kmまで伸ばした。バットシヨットは超音波での探索機能、スパイダーシヨックは小型スパイダーをばらまけるようにした。因みにこの小型スパイダーも発信器の取り付けなどは出来るぞ」
「なるほど、ありがとよ。絶対に犯人を見つけてぶちのめす！」

夜23:00

俺は永遠亭の周りにいつものデンデンセンサーやバガミール達を見張りに、そして改造ガジェット達を迷いの竹林に放った（デンデンセンサーはタカカンが運んでいます）

そして俺は…

「紀斗、本当にいいのね？」

「ああ、俺が寝そうになったら頼む」

永淋達に俺が寝そうになった時、かなり強くハリセンで叩くように頼んでいた

AM1:00

ガジェット達を探索に出してから2時間経った

あれから俺は既にかんりの回数ハリセンで殴られ20発から数えるのをやめた
早く知らせが来ないかと待っている

ピ、ピ、ピ
ピ、ピ、ピ

「ギターー!!」

おとつとい深夜テンションぶっ続けのせいで玄太郎みたいな声を出しちまった
「場所は…迷いの竹林の外!?通りで見つからない筈だ!」

俺はすぐに外に出てライドロンを出し発見した場所に最速スピードで向かった
「たつく、まだ眠ってねえみてえだな。いい加減眠っちゃえよ!」

デンデンセンサーが発見した場所には一体の怪人がいた

全体的に白く笑う仮面が一つずつついた顔が二つ、そしてその二つの顔の横に鳥の頭
が一つずつそして胸には苦しそうな表情の仮面が一つついた怪人、そいつは紀斗が眠る
のを今か今かと待っていた

ブオオオオオオオオオ

「ん?なんだこの音?」

突然聞こえたエンジン音に怪人は周りをキョロキョロと見回し音の正体を探す

ブオオオオオオオオオ!!

「イイイイイイイヤツホオオオオオウ!!」

竹林の中から猛スピードで出てきたライドロンに怪人は対応できずに轢かれ吹っ飛ばされる

「ぐべが!」

俺はライドロンに乗ってマツハの勢いで竹林を進み竹林を飛び出しそこにいたこの悪夢の元凶であろう怪人をテンションフォルテ・フォルティッシモで轢いた※フォルテ・フォルティッシモはフォルティッシモよりさらに強くという意味である

「さて覚悟しろよ、ん? お前ナイトメアドーパントっぽいが違うな。何の怪人だ?」

「くっ、まあ、ナイトメアドーパントつてのは半分正解だ。俺は「ああ、ナイトメアのメモリに強化アダプターを付けたのか」勝手に結論づけるなよ! あつてるけど!」

「まあ、いい。そう、俺はM様の指令でお前に悪夢を見せ眠らせないよ『Accel』
「変っ身!」『ブルルン!ブルルン! Accel!』台詞の途中で変身すんなよ!?! ちゃんと最後まで聞けよ!」

「うるせえ!! 寝不足でイライラしてんだ! とつとと終わらせてとつとと寝る!」

俺はとつとと終わらせたいので台詞の途中でバイクを模した真っ赤な仮面ライダー、仮面ライダーアクセルに変身した

そして俺はトライアルメモリを出してセットする

「速すぎだろおおお!？」

ナイトメアドーパントは爆発しそこには壊れたナイトメアのメモリと強化アダプター、そして白衣を着たチャラそうな男だけが残った

「あくあ、やられちゃったか」

M、マッドハッターの声が聞こえ後ろを振り向くとそこにはこの前とは違う帽子をかぶったマッドハッターが人をくつたような笑みを浮かべながら立っていた

「てめえ、よくもこんな作戦指示してくれやがったな」

「はははっ、あんまりキレないでよ。カルシウムちゃんと取ってる?」

「風呂上りにいつも牛乳飲んでるよ、バカヤロー」

「そっか♪じゃあもつと飲むことをオススメするよ。後今日の僕はそこに転がってるぞ
いつと強化アダプターは回収しに来たんだ。だから」

マッドハッターはそういうと帽子の中から小さい爆弾のような物を取り出しメモリを挿した

『Smoke』

そしてそれを俺の方へ投げるとその爆弾（仮）から物凄い量の煙が吹き出し辺りを覆った

「それじゃ、今度会ったら遊ぼうよ。バイバイ♪」

「待ちやがれ！」

そして煙が晴れるとそこには壊れたナイトメアのメモリだけが残った

「…やつと寝れる。今はそれだけでいいや」

俺は変身を解きライドロンで突き進んで来た道を歩いていき永遠亭の玄関に着いた

「ただいま」

「おかえりなさい！大丈夫だった？」

「やつと…寝れるよ…」

俺は永淋の目の前で意識を失いそのまま永淋に受けとめられた

「ふふっ、今はゆっくり休みなさい。おやすみ、紀斗」

「すう、すう」

俺はその日、久しぶりにとても気持ちのいい夢をみれた

翌日の夜

「ねえ、紀斗。最近あなた他の女の子にテレテレしていない？紀斗も男の子だし綺麗な女の子と話せて嬉しい気持ちはわかるけどあなたの一歩は私でしょ？私だけを見て、私以外を見ないで、ずーっと私だけの紀斗でいて、永遠に」

とゆう夢を俺はみていた

同時刻の現実

「あら？紀斗ったら頬を染めながらうなされるなんて。変な夢でも見てるのかしら？」

そして俺はそんな夢をみながらヤンデレでも永淋なら受け入れよう、という一種の新境地に達していた

第十八幕 休日

季節は夏真っ盛り俺たち永遠亭組は妖怪の山に流れている川の付近にあるにとりの家に来ていた

俺はそこに居候している甲にある物が出来たと呼ばれたが他の皆は頼まれてた薬のお届け、面白そうだから、たまには輝夜を外に出させないと、無理矢理連れて来られたという理由だ

確かに輝夜が最後に外に出たのって一ヶ月前の妹紅との決闘なんだよな、それからはずっと永遠亭の外に出てないからさすがにそろそろ外に出させた方がいいというのは賛成だ

「で一体何が出来たんだ？」

「はいっだ」

甲が机の上に置いたのはG3—Xを赤くしたような装甲服だった

「こいつはお前にこの前貸してもらったG3—XとG4を参考にして作ったG6だ」

「お前……よくこんなもん作れたな。まだこっちに来てから二ヶ月くらいしか経ってないだろ。普通何年もかかるぜこっちいうもんは」

「しよつちゆう無縁塚でにとりと一緒に武器やら鉱石やら使えそうな物をくすねてきたからな。あそこは以外と武器や乗り物とかの類が多いからよ」

「で、こいつの実戦テストとしていつちよ俺と戦つてくんねえか?」

「まあ、別にいいぜ。で、どこでや「紀斗、紀斗」ん?どうした、てる?」

俺が甲と話しているとてゐるが俺の服を引つ張り話しかけてきた

「今姫様達が暑いから河童達と川で遊ぶつて。水着で」

「なに?」

俺と甲はまったく同じタイミングでその話に食いついた、若干てるに引かれたが

「!」ということは永琳／＼にとりもか!」

「あ、ああ、そうだよ。河童も姫様達の水着姿を見て久しぶりに私も着てみるかな、なんて言つてたから」

「よつしや!甲!俺たちもすぐ水着に着替えて行くぞ!」

「おうよ!こんな美味しいイベント逃す手はねえ!」

俺は響鬼で明日夢の履いていた淡い水色にヤシのプリントがされたトランクスタイルの水着を出してから履いて甲は水着が無かったのでフォーゼに出てた水泳部員の水着(黒の男性用競泳水着)を渡した

そして俺たちが川に着くと他の皆は川に入ってビーチボールで遊んでいた

「あ、甲達も着替えてきたんだ！早く遊ぼー！」

にとりは少しフリフリの付いた水色をベースにした白の水玉模様のビキニタイプの水着だ、横で甲が鼻を押さえながら「やべえ、お値段以上で買い取りてえ」とか言ってるが知らん、あ、にとりが投げたスパナが甲の顔面を直撃した

「やれやれだね。まったく」

てゐはピンクのフリフリの付いたワンピースタイプの水着で気絶した甲を見て呆れている

「薬箱取ってきまーす」

鈴仙は赤いビキニタイプの水着で川から上がり薬箱を取りに行った

「ほら永琳、紀斗も来たからその水着見せつけちゃいなさいよ」

輝夜は黒のビキニで永琳を促している

「えっと、紀斗、この水着似合ってるかしら？／＼／＼」

タラク、おつと鼻から鼻dゲフンゲフン忠誠心が

「ああ、似合ってるよ永琳。似合いますぎて鼻から忠誠心が止まらないよ」ダラダラ

「ちよつ、ちよつと紀斗、大丈夫なの!!」

「ふつ、最後に永琳の水着姿を見れた、悔いはない」

「鈴仙速く止血剤をー!!」

「あつ、小町さんお久しぶりでーす。」

「その人の舟に乗っちゃ駄目よ!? 鈴仙速くー!!」

永琳は右が紺、左が赤のビキニで忠誠心が止まらない俺を見てあたふたしている

無事三途の川から戻ってきた俺は皆とビーチボールで遊んだり魚取りをして午前中を終えた

午後

俺たちは取った魚を昼飯にして食べ終わった後俺はG6の実戦テストにつきあうことになった

「よし、装着完了。装備も問題なし」

「本当に大丈夫か? 初期のG3-Xみたいな問題は無いよな」

「そこら辺は大丈夫だ。AIはG3-Xを元にしてるがちゃんと制御チップも組み込んでいる。AIの暴走は起きねーよ」

「なら大丈夫か。手加減はしねーぞ」

「上等だ。メカニックなめんなよ」

俺は腰にウイザードライバーを出現させ両手に指輪をつけ右手の指輪をウイザードライバーにかざす

『ドライバードライバー プリーズ』

レバーを操作し手の形のバツクルを左に回転させる

『シャバドウビタッチヘンシーン、シャバドウビタッチヘンシーン』

「変身」

俺は左手の赤い指輪をバツクルにかざす

『フレイム プリーズ』

『ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー』

俺の真横に魔法陣が現れ俺を通過すると俺は宝石を模した仮面ライダー、仮面ライ

ダーウィザードに変身した

「ウィザードか。相手にとつて不足無し！」

甲は両足に装備していたスコوپオンを両手に持ち連射してきた

「危ねえな」

俺は右手の指輪を付け替えかざす

『ディフェンド プリーズ』

俺の目の前に炎の円が出てきて銃弾を全て防いだ

さらにもう一度指輪を付け替えかざす

『コネクト プリーズ』

俺の横に魔法陣が現れ俺はそこに手を入れるとそこからウィザードの武器、ウィザー

ソードガンを取り出す

「お返しだ」

俺はウィザーソードガンをガンモードにしお返しとばかりに連射する

「くらうか!」

甲は背中から細長い盾のような物を出すと盾の両側面から新たな面がスライドして出てきて幅が広い盾になりこちらの銃弾も防がれた

「新装備か。なかなか頑丈そうだな」

「おうよ。GS-07ゴーレムだ。新装備はまだまだあるぜ。にとり!あれ頼む!」

「オツケー!受け取りな!」

甲はゴーレムを背中にしまつてからにとりに何かを頼むとにとりは甲にケルベロスのアタッシュモードの似ている物を二つ投げた

甲はそれをキャッチすると底の方の一部を開くと両肩にセットした

「GX-08オルトロスセット!展開!」

『声紋認証完了 解除シマス』

するとアタッシュモードだったオルトロスは展開しG6はガンタン○ガトリングVer. e rのような姿になった(足は二足歩行だが)

「おいおい、まさか…」

「そのまさかだ。全弾発射！」

甲の両手のスコープピオンと両肩のオルトロスが一斉に火を吹き俺を蜂の巣にしようと襲いかかる

「やべっ!?!」

俺は後ろにジャンプしながらすかさず両手の指輪を変えかざす

『ランド プリーズ』

『ドツドツ、ド・ド・ド・ドントツドントツ、ドツドツドントン!』

『ディフェンド プリーズ』

俺は顔が四角くなり赤だったところが黄色になったウイザード ランドスタイルになった

そしてディフェンドリングを発動させランドの属性である土の壁が出てくるがすぐに削られ壊されていく

「くそっ!」

『ディフェンド、ディフェンド、ディフェンド、ディフェンド プリーズ』

さらに三回発動させ土の壁を出すと二枚目の壁が壊されたところで銃撃音が止んだ

「弾切れか?なら一気につ!」

俺が壁から飛び出すと目の前にBOMBと書かれた野球ボールくらいの玉が飛んできていた

「プレゼントだ。もらっときな」

俺の目の前で爆弾が爆発し俺は地面に転がった

「GB-09グレムリンだ。そして追加だ、くらいな！」

スコープオンもオルトロスもまだ弾切れでは無かったらしく追い打ちをかけるように再び俺に向かって発砲してきた

「くらってたまるか！」

『ドリル プリーズ』

俺は自分自身を回転させ地中に潜りなんとか銃弾は回避した

「くそっ！地中に逃げたか！」

甲は片方のスコープオンを足に付け直しオルトロスの少し下辺りからGK-06ユニコーンを取り出し辺りを警戒する

俺は地中から飛び出しウィザードガンのソードモードで斬りかかる

「甘えぜ紀斗！」

甲は振り返りながらユニコーンを俺に突き刺そうとしてきた

(この得物の長さなら先に俺の刃の方が届く)

そう俺は思っていたがいきなり甲がユニコーンの柄の先端からレーザーが飛び出てそれが刃の形になり俺の肩を斬り裂いた

「ぐああっ!？」

「惜しかったな、こいつはユニコーン改。レーザーブレードの出る素敵武器さ」

「くっ、やってくれるぜ。つたく、これを使わせられるとはな」

俺はフレイムリングにさらに装飾がついたフレイムドラゴンリングを取り出しかぎ
身した

『フレイム ドラゴン ボウー!ボウー!ボウーボウーボオー!!』

俺はフレイムスタイルがドラゴンの力で強化されたフレイムドラゴンスタイルに変
身した

「さあ、こっからが本当のショータイムだ」

「負けてらんねえな!行くぜ!」

俺はウィザースードガンの手を開かせ右手で握る

『コピー プリーズ』

するともう一本ウィザースードガンが出てきて俺はそれを両手で片方ずつ握る

俺は二本のウィザースードガンをガンモードにし両方の手を開かせ左手で握る

『キャモナ シューティンシエイクハンズ フレイム ドラゴン ボウーボウー

ボウー ボウーボウーボウー』

「燃えな！ダブルシューティングストライク！」

二本のウィザードガンからかなりでかい火炎弾が発射される

「チツ、耐えきれるか!？」

甲は後ろにジャンプしながらゴーレムを取り出し火炎弾を受けた

「ぬおあつ!？」

甲は後方に、転がり倒れた、ゴーレムは少し溶けているから今は使えないだろう

「ぐうつ、派手なのをかましてくれるな。おかげでゴーレムが使いもんになんなくなっちゃまったじゃないか」

「へっ、こつちもかなりくらったからな、お相子だ。それに切り札だしてないだろ、お前」
「当たり前よ。そんな簡単に切り札は出すもんじゃないからな。だが他の装備は全部お披露目したし最後の一発としてやってやるよ」

甲はオルトロスの先にGX弾の色違いの弾を一つずつ装填する

「この弾はGX弾の改良版、GZ弾だ。威力はアギトのグランドフォームのキックを軽く上回るぜ」

「そりゃあ楽しみだ。じゃあ俺もやりますかね」

俺は新たな指輪をバツクルにかざす

『チヨーイイネキックストライク サイコー!』

俺はキックストライクウイザードリングをかざしそこから足元に発生した魔法陣から炎のエレメントを右足に纏わせ、ロンダート（側方倒立回転跳び1/4ひねり）をしてから空中から甲に向かってストライクウイザードを放った

「はああああああ!!」

「GZ弾!発射!」

俺のストライクウイザードと甲の二発のGZ弾がぶつかり爆発が起きる

「ぐあっ!」

爆発の中から俺が変身が解けた状態で落ちてきた、この勝負は甲の勝ちで終わった

「大丈夫か?紀斗」

「ああ、なんとかな。まさかストライクウイザードが負けるとは。まあ、とにかくすごい

なG6、想像以上だ」

「へっ、なにせ俺とにとりの最高傑作だからな」

「まったく!こんな傷だらけになって!」

「いででで!?!ごめん!ごめんってだからそんなに勢いよくやらないであだ!?!」

（イチャラブしてんな、妬ましいわ!）

10分後

「それじゃ、またなんか欲しかったら言ってくれ。持っていくからよ」
「おう、修理や改造の方もいつでも言ってくれよな」

にとり「また遊ぼーねー!」

そして俺たちは甲とにとりに見送られて永遠亭に帰った

第三章 破壊と救出

第十九幕 狂気

「ありがとね、またお願いするわ。」

「まいど、またいつでも注文してください。それじゃ」

俺はその日の仕事を終え永遠亭に帰ろうとブレイドのバイクであるブルースペイダーを走らせていた

そして竹林が見えてきた辺りで人影がポツンと立っていた

最初は妹紅かとも思ったが違う、奇抜なシルクハット、少し汚れている白衣、そしていかにも隙も人を馬鹿にしたような笑みを浮かべている顔

財団X幹部 マッドハッターことMがそこには立っていた

「あは♪遅かったね、待ちくたびれちゃったよ。君ってこんな時間まで仕事するなんて働き者だね」

「こんな時間って言うてもまだ7時だろ、残業して夜遅くまで働いてる世界中のお父さん達に謝れや。それで今度はなんだ？また変なメモリでも部下に使わせて俺を倒す気か？」

「ん、少し違うね、今回僕は一人でここに来た。つまり僕は一人で君を倒す気なんだよ」

そう言った瞬間Mから殺気が放たれる

「見せてあげよう。僕専用のガイアメモリを」

Mはロストドライバーを装着しポケットから一本のガイアメモリを取り出した

『Crazy』

「変身」

Mは一度自分の帽子を取ってからロストドライバーにクレイジーメモリを挿した

『Crazy』

Mはボディカラーは紫、目は赤、姿は仮面ライダージオーカーによく似て額にはダブルファイラー(ダブルのW↑これ)ではなく一本の角が生えている仮面ライダー、仮面ライダークレイジーに変身した。クレイジーは片手には黒いステッキを持ち一度取った帽子をかぶり直す

「おいおい、オリジナル仮面ライダーってやつかよ。勘弁してほしいぜ」

「君を僕の世界に招待しよう、[Crazy World]」

Mがステッキで地面を突くとそこから半球状にどす黒い色のエネルギーが広がり俺を含む辺り一帯おそらく半径1km辺りまでがそのエネルギーいや奴の世界に取り込

まれた

「一体なんなんだよ、この気味悪い空間は」

「すぐにわかるさ。この世界がどんな物かは」

「すぐに決着つけてやる！」

俺はその時早めに決着をつけるためにBRACK RXのベルトを出そうとした筈だ、しかし出てきたベルトは龍騎系のベルトとシザースのデツキだった

「な!?なんでRXのベルトを出そうとしたのにシザースのデツキが!？」

「ふふふ、お目当てのベルトが出なかったみたいだね。なんでだろうねふふふ」

「てめえ。くそっ!しようがない、変身！」

俺はシザースのデツキをベルトに装填して蟹を模した仮面ライダー、仮面ライダーシザースに変身した

「予言しよう、君は僕に一撃も与えられず負ける」

「そう簡単に負けるかよ。あと、予言は外れることが多いのが相場だぜ」

「ハアア！」

俺はまずシザースの召喚機であるシザースバイザーで斬りかかるが簡単に避けられる

「ほらほら、そんな攻撃じゃ僕には当たらないよ。【Crazy Bomb】」

Mがステッキを振るとそこから紫色の光弾が出てきて俺に向かって飛んでくる

俺はそれを避けようとするがいきなり足が動かなくなり膝をついてしまった

「なんでだ!?ダメージはくらってない筈なのに!動けないなら耐えるしかないか!」

俺はガードベントを取り出しシザースバイザーに入れた筈だった

『STRIKE VENT』

俺が装備したのはガードベントのシエルディフェンスではなくストライクベントのシザースピンチだった

当然左腕で防御しようとしていた俺にいくら右腕が強化されても意味がない

俺はそのまま光弾に当たり俺は吹き飛ばされた

「が…あつ…くつ、なんでガードベントじゃなくてストライクベントに」

「種明かしをしてあげよう。君が出そうとしたベルトとは違う物が出たのも、君の足がいきなり動かなくなったのも、入れたカードが違う物だったのも全部、僕が

狂わせたのさ」

「ベルトの件は君の能力を狂わせ、足の件は君の足の筋肉を狂わせ、カードの件はデッキの出させるカードを狂わせた。これがこの世界の能力。僕の世界の中のものを好きにだけ好きなどを狂わせることが出来る」

「そんなチートありかよ……」

「ありなのさ！この僕の世界ならね！ま、この空間から出ちゃえば元に戻るんだけど。それでもこの空間内でのダメージはそのまま残る。だから君を殺さない程度に痛ぶって支部に持ち帰るとするよ」

「そう簡単に……やられねえつつてんだろ！」

俺は何も考えず勘でデッキからカードを取り出しシザースバイザーに入れた

『ADVENT』

「うっし！当たりだ！」

俺の隣に鏡が現れそこから蟹を模したシザースの契約モンスター、ボルキャンサーが現れる

「いけ！ボルキャンサー！」

「ハア”アアア！」

ボルキャンサーはハサミを振り上げクレイジーに襲いかかる…筈だった

ボルキャンサーは何もないところに突っ込みそこでめちやくちやにハサミを振り回している、まるでそこで触れない幻覚の敵と戦っているように

「てめえまさか!?!」

「その通り、あの蟹さんの視覚を狂わせたのさ。ついでに聴覚もね。つまり今あの蟹さ

んは見える筈の無い幻覚が見えて聞こえない筈の幻聴が聞こえる、そんな状態さ。さ、君もペットだけにあんな思いさせないで飼い主も同じようになりなよ」

Mはそう言うのとMの角が一瞬帯電したようにビリつとほんの少し放電したようになってから俺の額をステッキで突ついた

「あ!? ああ…なんだよ、これ。」

俺の周りには何人ものクレイジーがいる、いやそう見えている

『君に見えている僕らの中のどれが本物か、わかるかい?』

『そーれ!』

クレイジー達は一齐にクレイジーボムを出し俺に放つ

「一発でも切り裂けば!」

俺は右手のシザースピンチを振るいクレイジーボムを切り裂こうとしたが

『残念はずれ〜』

シザースピンチは空を切り本当に放たれたクレイジーボムが俺に直撃しさらに俺はボロボロになる

(クロックアップを使ってこの空間から抜け出せば…)

「神速【クロックアップ】!」

しかし発動させようとして手に持っていたのはいきなり現れて不規則に透明になる

透明「インビジブル」だった、発動させようとしたスペカが違うのではそのカードは反応しない

「違うスペカだったか…ぐうっ!？」

「何してるんだい？今の君は！何も！出来ないのにさ！」

「ぐっ!?!がっ!?!ぐあっ!?!」

Mは俺を踏みつけセリフに一呼吸いれるたびに俺を踏みつける

「もう飽きちゃった。そろそろ終わりにしようか」

Mはクレイジーメモリをベルトの右のマキシマムスロットに挿しそのボタンを叩

く

『Crazy Maximam Drive』

クレイジーのステッキの先に紫色のエネルギーが溜まり俺にそれを叩きつける

「トドメだ【Crazy Wave（狂気の波動）】」

「があああああああああ!？」

俺の体を紫の波動が蹂躪し俺の変身は解け波動の余波でボルキヤンサーも吹き飛ば

され消えてしまった

「あ……………」

「まだ意識があるのかい？しぶといねえ。でもこれならもうこの世界もいいかな」

Mはそう言うとかレイジーワールドを解いた

「フロッグ…ポット…」

俺は最後の力でフロッグポットを出しギジメモリに俺の声を録音する

「永琳達に伝えてくれ…」

「最後の伝言は終わったかい？」

「ああ、終わったよ、クソ野郎」

「じゃそのうるさい口を閉じようか」

「がはっ!?」ガクッ

俺は殴られ気絶しそのままMに抱えられ連れていかれた

永遠亭

「紀斗は見つかった？」

「駄目です、どこにも見当たりません。」

「お師匠様！竹林内でこれが！」

てゐるが持つてきたのは連れてかれる前に紀斗が永遠亭に向かわせたフロッグポットだった

「メモも一緒についてた。多分財団Xの幹部の能力と『俺の言葉が録音してあるからき

いてくれ』って」

永琳達は搜索を手伝ってくれていた皆を集めフロッグポットをその中心においた

「じゃ、再生するよ。」

『聞こえ……るか？紀斗だ。……簡潔に言う……俺は敵に負けた。おそらく……このまま連れてかれて……洗脳か……実験されるだろう。もし……俺が洗脳されてお前らを殺そうとしたら……迷わず……俺を殺してくれ。俺はお前らを死なせたくないし……幻想郷を……奴らのいいようにさせたく無い。だから……その時は……任せた』

甲が床を殴り怒りで体を震わせている

「ふざけんよ……。あの馬鹿！自分を殺せだ！勝手に妄想で被害広げてんじゃねえよ！洗脳されて戻ってきたら絶対元に戻してやる！」

「しっ！まだ続きが」

『あと、俺の部屋の床に……隠し金庫がある。その中にある物があるから……ピンチになつたら使え。最後に……永琳……ごめん。綿月姉妹に……お前を幸せにしてみせる……言つたのにな。もし……ちゃんと正気で……また会えたら……お前に伝えたいことが……ある。愛してるよ、永琳……』

「……までらしいですね」

「永琳以外は一度紀斗の部屋に行つてきてもらえるかしら。隠し金庫の中身も知りたい

し」

「わかったわ。皆、行きましょ」

部屋には輝夜と永琳だけが残る

「今なら私たちだけだから泣いてもいいわよ。」

「う……ううう……うああああん！うああああ！紀斗の！紀斗の馬鹿あああ！」

永琳は数十分輝夜の膝で泣き続けると寝てしまった

「……帰ったらおしおきね。永琳を泣かせた罪は重いわよ、だから早く帰ってきなさい、

紀斗」

第二十幕 最悪の再開

時は少し遡り永遠亭 紀斗の部屋

「よつと、これだな隠し金庫つてのは」

魔理沙が畳を外すとそこにはプッシュボタン式の金庫が扉を上にして埋め込まれて
いた

「金庫の横にメッセージが書かれてるわね。『ヒント 草加の最後』。わかんないわ
ね、まず草加つてだれよ？」

「あ、なるほど！わかりましたよ、私！」

「分かったなら早く教えてちょうだい」

「はい！草加はファイズに出てきたカイザに変身する人物ですからね。つまりカイザの
913が最初の三文字、そして彼は本編でも劇場版でも死んでいます。つまり死Ⅱ4こ
の暗号の答えは9134です！」

「じゃあそれで押すわよ」ピ、ピ、ピ、ピ、ピ

『解除シマス』

「G3—Xのケルベロスの解除音声…！芸が細かい。」

金庫の中から出てきたのはワイザードドライバーとインフィニティーとホープ以外のワイザードリング、ビーストドライバー（劇場版タイプ）とハイパー以外のビーストリング、白い魔法使いドライバーG3-Xとその装備、龍騎系のオーデインを除くライダーのデツキ、イクサのツール一式、デイエンドドライバーとカード、バーストドライバーとセルメダルのため入りつたりリユクとメモが一枚入っていた

「え〜と、『この金庫を開けたということは俺が敵に捕まったか瀕死の重症になつてらしいな。この中にあるのは魔力があれば誰でも使えるタイプと誰でも変身出来るタイプの変身ツールだ。弾幕が効かない相手にはこいつを使ってくれ』じゃあ誰がどれを持ってる？」

数分相談した結果

霊夢 バーストドライバー

魔理沙 ビーストドライバー

にとり G3-X装備一式

アリス 白い魔法使いドライバー

鈴仙 ゾルダのデツキ

てゐ インペラーのデツキ

早苗 イクサのツール一式

美鈴 龍騎のデツキ

パチユリー ウィザードライバー

咲夜 オルタナティブ・ゼロのデツキ

レミリア ナイトのデツキ

文 オルタナティブのデツキ

チルノ タイガのデツキ

藍 デイエンドライバー

妖夢 リュウガのデツキ

妹紅 ファムのデツキ

慧音 シザースのデツキ

衣玖 ライアのデツキ

天子 アビスのデツキ

影狼 ベルデのデツキ

萃香 ガイのデツキ

「じゃあこの装備で弾幕が効かない相手が来たら変身するのよ」
「私は敵が来たら皆に伝えるのとそこに運ぶのをやるわね」

その日はそのまま解散しその日を終えた

3日後

紀斗が連れさられてから3日経ち敵の襲撃はまだ無い、今の雰囲気は嵐の前の静けさという表現が1番合っているだろう

人里

「鈴仙、あれから永琳の様子はどうか？」

「あまり良くないですね。ずっとふさぎこんでて。食事もありとりません」

「そうか…。いきなりあんなメッセージを送られたんだ。精神的ショックも大きいだろうからな。心が壊れなければいいが」

そして…嵐は突然やってくる

「怪物だあー!? 化け物の大群が現れたー!?」

「!?」

「門の方角か! 行くぞ、鈴仙!」

「はい!」

人里 門の前

「おいおい、なんだよこの数は…」

門の前にはおびただしい数のグルル、屑ヤミー、ダスタードがいた
そこへ慧音、鈴仙、藍とちょうど人里にいたメンバーが駆けつける

「妹紅!…これはまたすごい数だな」

「これを全部相手にするんですか。骨がおれますね」

「ちようど人里に用があつて来てみたら大変なことになつてるわね」

「やれやれ、紫様と橙の夕飯をかう途中だったのに。紫様、荷物お願いしますね」

「任せなさい。他のメンバーもすぐ連れてくるわ」

「それじゃあいつちよ始めるとするか!」

博麗神社

ここでは霊夢、魔理沙、早苗、妖夢が装備の点検と使い方の復習をしていた

「このバースの燃費の悪さどうにかならないかしらね。セルメダルが最初に比べてかなり減っちゃったわ」

「仕方ありませんよ。そういう仕様なんですから」

「私は何故か妙にしつくりきてるぜ」

「私はまだ微妙ですね。ソードベント以外使いこなせてません」

クパア

そこへいきなりスキマが現れ紫が出てきた

「緊急事態よ。人里前に敵の大群が現れたわ」

「わかったわ。皆、行くわよ!」

「「はい！（おう！）」」

人里前

人里前いや正確には人里があつた場所の前では慧音達がザコ敵の大群を相手に応戦していた

「始符【エフエメラリテイ137】！」

「不死【火の鳥——鳳翼天翔——】！」

「式輝【狐狸妖怪レーザー】！」

「蒼符【博愛のオルレアン人形】！」

「惑視【離円花冠（カローラヴィジョン）】！」

「チツ、ぜんぜん減らねえな」

「人里は能力で見えなくしたがこうも多いとな」

「倒しても倒してもどんどん出てきてるわね。どこかに供給源があるはずだけど」

「だが増援が来なければこのまま供給源を潰しにも行けないぞ」

「その増援が来てあげたわよ」

「霊夢さん、魔理沙、妖夢、早苗さん！加勢に来てくれたんですね！」

「ようやく思いつきりやれるぜ！」

「斬られたい奴から前に出なさい！」

「荒れますよー、止めてみなさい！」

霊夢たちが雑魚敵を吹っ飛ばしていると雑魚敵達の間からホースファンガイアが現れ、霊夢に斬りかかる

「へへへ、若い女のライフエナジー、たっぷり吸ってやるぜ」

「ファンガイア?! こいつらまでいるんですか?!」

「ファンガイア? なんだそりゃ?」

「人間のライフエナジーを吸いとる怪物、まあ、わかりやすく言えば吸血鬼の特徴を持った怪人ですね。」

早苗がそう説明すると後ろの方から声が聞こえそこにはレミリアを筆頭にした紅魔館のメンバー達がいた

「吸血鬼の特徴を持った怪人? 聞き捨てならないわね」

「あら、レミリア達紅魔館組も来たのね」

「俺たち妖怪の山メンバーも来たぜ!」

「この吸血鬼もどきもすぐにあの世に送ってあげるわ」

こちらの戦力は萃香、てゐ、チルノ、天子、衣玖、影狼以外は揃った、この6人はそれぞれ手薄になっている紅魔館などの場所の護衛に行っている

しかし敵もファンガイアの他にアンノウン、ヤミー、オルフェノクと怪人たちがぞく

ぞくと出てくるそして怪人たちを引き連れ1人の男が現れた

「お前らか。俺の倒すべき相手ってのは」

「!?…永琳ほつといてなにふざけたこと言ってるのかしら、紀斗!」

第二十一幕 大戦

怪人たちを引き連れた紀斗が霊夢達を見てつぶやく

「なんでだろうな。あんたらを見てると頭が痛い。だがなにも思い出せない。あの人達の指令だとあんたらを倒さないと俺も始末されるらしいからな。あんたらには悪いが倒させてもらう」

紀斗は能力は使えるらしくガオウベルトを出し腰に巻く

「変身」

『GAOH FORM』

紀斗はワニを模した電仮面をつけたライダー、仮面ライダー牙王に変身した

「1人残らず喰ってやろう」

「こつちの話を聞く気は無いようね」

「なら無理矢理目を覚まさればいい話だぜ」

「さっさと元の紀斗さんに戻しましょう！」

『変身！』

『カポーン』『セット、オープン！L・I・O・N ライオン！』

『チェンジ ナウ』『フレイム プリーズ ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー!』

『K A M E N R I D E D I E N D』『レ・デ・イ フィ・ス・ト・オ・ン』

「龍騎系ライダー多数にイクサ、バース、ビースト、ウィザード、白い魔法使い、G3-X、ディエンドとG3-Xの進化版みたいな奴か。ま、どうでもいいか。どうせ全部喰っちまうんだ」

「言つてくれるわね。私達はそう簡単に倒されないわよ」

「怪人共その命、神に返しなさいそして紀斗さんを私達に返しなさい!」

「まずはお前達が行け。グルル共は邪魔だから消しとくぞ」

『ウオオオオオオ!!』

紀斗の命令で怪人達が雄叫びをあげ霊夢達に襲いかかり皆それに応戦する

「いきますよ!ハアアアア!」

「グゲツ!」

龍騎に変身した美鈴（以下R美鈴）がモスファンガイアを気を纏わせた拳で掌底をく
らわせウィザードに変身したパチュリー（以下Wパチュリー）の方へ吹き飛ばす

「とつととかかかって来なさい」

「言われなくてもいつてやるよ!」

Wパチュリーはシースターファンガイアを余裕そうに待ち構えてリングをバツクル

にかざす

『ビツク プリーズ』

「ふんっ！」

「ウボアッ!？」

Wパチュリーの前に魔法陣が現れそこに腕を通すとWパチュリーの腕は巨大化しそのまま驚いて動きがたまったシースターファンガイアを張り手でR美鈴の方へ吹き飛ばす

「ぐおっ!？」

「うげっ!？」

モスファンガイアとシースターファンガイアが空中でぶつかりその場に倒れこむ

「パチュリー様！やりますよ！」

『FINAL VENT』

「外さないようにね！」

『ルパッチマジックタツチゴー！』

チョーイイネ、キックストライク

サイコー!』

R美鈴の後ろから鏡が現れそこから龍騎の契約モンスター、ドラグレッターが出てくる

R美鈴はドラグレッターと共に飛び上がりドラグレッターが放射した炎を纏いドラ

ゴンライダーキックを放つ

Wパチュリーは足元に発生した魔法陣から炎のエレメントを右足に纏わせ、ロンドン（側方倒立回転跳び1/4ひねり）をしてから空中からストライクウィザードを放つ

「ハアアアア！」

「ひ、ひいいいい!?!」

倒れこんだ体制で避けられるはずも無く2人の炎のライダーキックをくらい二体のファンガイアは倒された

Wパチュリー達が戦っているとところより少し離れたところではレミリアと咲夜がホースファンガイア、スパイダーファンガイアと戦っていた

『SWORD VENT』

「ふっー！」

「いのー！」

ナイトに変身したレミリア（以下Nレミリア）とホースファンガイアが剣でつばぜり合いをし

「くそっ！なんで糸が当たらない！瞬間移動なんか使いやがって！」

「あくびが出るような遅さだけどきつきと決めたいから使ってるのよ！」

オルタナティブ・ゼロに変身した咲夜（以下O咲夜）が時止めを使用してスパイダー

ファンガイアを翻弄する

『SWORD VENT』

「ふっ!」

「が?! ああああ?!」

○咲夜は時止めでスパイダーファンガイアの背後にまわりオルタナティブ・ゼロのソードベント、スラッシュダガーを突き刺した

「お嬢様!」

「わかったわ!」

「ぐおっ!」

○咲夜はスラッシュダガーに突き刺したスパイダーファンガイアを投げNレミリアはつばぜり合いから急に後ろに跳びホースファンガイアは体制を崩す

「グゲア!」

「ぬあっ!」

投げられたスパイダーファンガイアはホースファンガイアとぶつかり二体は地面に倒れこむ

『FINAL VENT』

Nレミリアの後ろからナイトの契約モンスター、ダークウイングが現れNレミリアの

背中にマント状のウイングウォールとなって合体しNレミアは空中に飛び上がる

Nレミアはグングニルとウイングランサーを両手で重ねて持ちそれを軸にウイングウォールがドリル状に変形しファンガイア達に突っ込む

「飛翔斬！グングニルプラスver！」

「う、うわああああ!?!」

「ぐそお、こんなところで…」

グングニルで紅く光り威力の増した飛翔斬を受けファンガイア二体は爆散した

シザースに変身した慧音（以下S慧音）とファムに変身した妹紅（以下F妹紅）はジャガーロードパンテラス・トリステイスとクロウロードコルウス・クロッキオと戦っていた

『GUARD VENT』

『SWORD VENT』

S慧音は左手にシエルディフェンスをF妹紅は薙刀型のウイングスラッシャーを炎を纏わせ装備する

「うらあー！」

「うううー！」

F妹紅はウイングスラッシャーでジャガーロードは貪欲の槍で打ち合いそこにクロウロードが頭突きをしようと突進してくる

「させるか！」

「!？」

しかしS慧音がシエルディフェンスでその頭突きを防ぎ少し後退するが耐えた

「お返しだ！」

「グガッ!？」

S慧音は動きの止まったクロウロードに渾身の力を込めた頭突きを上からくわらせ
クロウロードは地面に頭が減り込んだ

「そろそろ決めてやる！」

『FINAL VENT』

F妹紅は槍をはじめ召喚機であるブランバイザーにカードを入れる

地面から頭を抜いたクロウロードとジャガーロードの後ろからファムの契約モンスター、ブランウイングが現れ羽ばたいて突風を起こす

「う…うああ!？」

「ぐろう」

ジャガーロードは吹き飛ばされたがクロウロードは突風から逃げようと多少後退しながら上へ飛ぶ

「おっと、逃がしはしないぞ」

『FINAL VENT』

S 慧音の後ろからボルキョキャンサーが現れS 慧音を両腕に乗せトスのように打ち上げる、S 慧音は体を高速回転させクロウロードにシザーズアタック（体当り）をくらわせた

「がっ!?!」

飛行出来なくなったクロウロードはジャガーロードと同じように吹き飛ばされる

「はあああああーりゃあー!」

ジャガーロード、クロウロードは2体ともウイングスラッシュャーで斬られF 妹紅の後ろで爆発した

G3-Xを装着したにとり（以下Gにとり）とG6を装着した甲はトータスロードテ ストゥード・テレストリスとゼブラロードエクウス・デイエスと戦っていた

「くらいやがれー!」

「おりやりやりやりや!」

「ふん!」

甲とGにとりは2人でスコープオンを撃つがトータスロードは頑丈な甲羅でそれを防ぎその後ろでゼブラロードもトータスロードの後ろで待機し銃弾をくらわれないようにしている

「チツ、なら…にとりお前は撃ちつづけとけ」

「え？ああ、なるほど了解したよ」

甲は脇腹の辺りからグレムリンを数個取り出しトータスロード達の目の前にいくよ
うに少し上に投げる

「!?!」

「威力はこの前より1.5倍増しだぜ。さてにとり、ラスト決めるぞ！」

「おうともさー！」

『解除シマス』『声紋認証確認 解除シマス』

甲はオルトロスをGにとりはケルベロスを装備し更にケルベロスをスコープオンと
合体させGXランチャーにしGX弾をとりつけ甲もGX弾（GZ弾は弾数が少ないので
節約）をとりつける

「フアイヤー！」

「ぐ…!?!」

「ツ!?!」

ヨロヨロと立ち上がった二体は3発のGX弾全てが当たり爆発した

「しゃあー！」

「大勝利！次は紀斗の馬鹿だ！」

イクサに変身した早苗（以下I早苗）とオルタナティブに変身した文（以下O文）はイヤールウィッグファンガイア、シープファンガイアと戦っていた

I早苗はバーストモードにモードチェンジしイクサカリバーをカリバーモードにしイヤールウィッグファンガイアのシザーアームと斬り合う

そこへシープファンガイアが得意の駿足で突進しようとするが

『SWORD VENT』

「あやや、そう簡単にはやらせませんよ」

妖怪の山最速がそれを簡単にやらせる筈が無い

「邪魔すんなあ！」

「だが断る」キリッ

「私は紀斗さんに用があるんです！とつとと決めさせてもらいます！」

「そう簡単にやられてたまるか！」

I早苗は斬り合うのをイヤールウィッグファンガイアのシザーアームを上にかちあげるという方法で一度やめイクサベルトにカリバーフェッスルを読み込ませる

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アツ・プ』

「イクサ！ジャツジメント！」

イクサカリバーが光を纏いI早苗は逆袈裟斬りでイヤールウィッグファンガイアを斬

りさいた

「ぐはっ、ちく…：しよう」

イヤールウィッグファンガイアは倒れガラスのように砕け散った

「くそっ！あの野郎やられちまったのか！」

「あなたもすぐ後を追ってもらいますよ。」

『FINAL VENT』

○文のすぐ近くからオルタナティブの契約モンスター、サイコログが現れそれがバイク形態のサイコロダーになり走り出す

「ほっ、と」

○文はサイコロダーに搭乗し高速回転しながらシープファンガイアに突っ込んでいく

「いつもより回つてますよー！」

さらに文自身の能力『風を操る程度の能力』によりシープファンガイアは暴風をくらい身動きがとれない

「くうう…：くそがあああー！」

そのままシープファンガイアはオルタナティブのファイナルベント、デッドエンドをくらったシープファンガイアは爆発した

「さて、さっさと紀斗さんの方へ急ぎましょう。」

「そうですね！待っててください、紀斗さん！」

ゾルダに変身した鈴仙（以下Z鈴仙）とリュウガに変身した妖夢（以下R妖夢）はオツクスオルフェノク、スカラベオルフェノクと戦っていた

「はあ！」

「その程度の威力じゃ効かねえな！」

Z鈴仙は召喚機兼銃のマグナバイザーで攻撃するがスカラベオルフェノクの硬い皮膚には効果がない

『SWORD VENT』

「たああああ！」

「オラア！」

R妖夢はリュウガのソードベントであるドラグセイバーでオツクスオルフェノクの拳に装備されたグローブ鉄球と打ち合っていた

「いいね！いいね！やっぱ闘いはこうでなくっちゃ！」

「戦闘狂ですか。なんにしる倒させてもらいます！」

『SHOOT VENT』

「これで効かないならもつと高火力のものを使うだけ！」

乙 鈴仙はゾルダのシユートベントの一つ、ギガランチャーを装備しスカラベオルフェノクに向けて放つ

「ぐおっ!?!」

スカラベオルフェノクはすかさず肩についている盾で防御するが衝撃で少し後ろに飛ばされる

「おいおい、スカラベどうした? もう負けそうか?」

「んなわけあるか! あ? あの野郎どこ行きやがった?」

「そういや俺の相手もいなくなつてやがる」

闘う相手を見失つた二体は辺りを見回しているといきなり後ろから砲撃される

「ぐあっ!?!」

「ぬおっ!?!」

「くそっ! あの野郎か!」

スカラベオルフェノクは砲撃された方向を向くがそこには誰もいない

「いねえ…姿を透明にでもしてんのか?」

「めんどくせえ真似しやがる。出てきやがれ!」

「! そこか!」

小石を蹴る音がしてスカラベオルフェノクは肩の盾を投げるが空振りに終わり

「残念、はずれ」

「ぐおあ!？」

「スカラベー！」

全く違う方向からR妖夢に斬られ倒れオックスオルフェノクはスカラベオルフェノクに駆け寄る

「これで終わりにしてあげます」

『FINAL VENT』

何も無いところからZ鈴仙とR妖夢が現れR妖夢はブラックドラグバイザーにファイナルベントのカードを挿入する

R妖夢の後ろからドラグブラッカーが現れ紫炎を放つ

「!？」

紫炎に当たった二体は動けなくなる

そしてR妖夢は宙に浮きドラグブラッカーの放つ黒炎と共に放つライダーキック、ドラゴンライダーキックを放つ

「ツー!？」

二体は悲鳴もあげられぬままドラゴンライダーキックをくらい爆発した

「あのままじゃジリ貧でしたから助かりました。便利ですね、その能力」

「ええ、なかなか使いやすくて重宝してるわ。この【物の波長を操る程度の能力】は」
 「それより早く霊夢さんたちの援護に行きましよう」

バースに変身した霊夢（以下B霊夢）、ピーストに変身した魔理沙（以下B魔理沙）、王蛇に変身したフラン（以下Oフラン）、デイエンドに変身した藍（以下D藍）、白い魔法使いに変身したアリス（以下Sアリス）は牙王に変身した紀斗と戦っていた

『カポーン ドリルアーム』『SWORD VENT』『KAMEN RIDE SASWORD』『KAMEN RIDE BRADE』

B霊夢はドリルアームを装着しB魔理沙はダイスサーベルを構えOフランは王蛇のソードベント、ベノサーベルを装備しSアリスはハーメルケインを構えD藍はカプト系のライダーの1人であるサソードとブレイドを召喚する

紀斗はガオウガツシャを構えB霊夢達に向かって突っ込む

「オラオラオラア！」

「なめてもらっちゃこまるぜ！」

紀斗のガオウガツシャとB魔理沙のダイスサーベルがぶつかり合いOフラン、B霊夢、Sアリス、サソード、ブレイドがそれぞれの得物で攻撃してくる

「今私のテンションは地下室に閉じ込められていた時代に戻っている！ダカラアソボ

ウ

「ヴェーイ！」

「魔理沙に手え出してんじやないわよ！」

「とつとと正気に戻んなさいよ！この馬鹿！」

「はあ！」

「邪魔だあああ！」

『FULL CHARGE』

紀斗はガオウベルトにマスターパスをかざしガオウガツシャーにエネルギーを溜め
6人を一気に斬った

「くっ!？」

「ぬあっ!？」

「うっ!？」

「やってくれるわね…」

「ヴェツ!？」

「!？」

B 霊夢、B 魔理沙、O フラン、S アリスの4人は斬られる瞬間にガードしたが召喚さ
れた2人は消滅してしまった

「アハハ、モットアソボウヨ、禁忌【レーヴァテイン】」

「このお、負けてられるか！」

『バツファア！GO！バババ バツファア！』

「出し惜しみしてる余裕はないわね、陰陽玉！」

「上海！蓬莱！いくわよ！」

「シャンハイ！」「ホウライ！」

「私も負けてられないな！」

『KAMEN RIDE DRAKE』『KAMEN RIDE DELTA』

Oフランはベノサーベルとレーヴァテインの二刀流にB魔理沙はバツファリングを使い右肩にバツファアローの頭と赤いマントを装備しB霊夢は陰陽玉を自分の周りに浮かせSアリスは槍を持った上海人形と蓬莱人形を出現させD藍は新たにドレイクとデルタを召喚した

「行くぜ！」

「アソボ、アソボ」

「援護する！」

B魔理沙が右肩のバツファアローの頭を紀斗に向けながら突進し続くようにOフランが二刀流で斬りかかりにいきD藍とデルタ、ドレイクが援護射撃をする

「めんどくせえな。スキルコピー」「パイロキネシス」

紀斗が右手を前に出し開いていた手を握ると急に8人の体が燃え上がった

「え!?くううう!」

「ああああああああ!」

「くっ!」

「!」

「きゃあああああ!」

「うわあああ!くっこれで!」

体を燃やされながらB魔理沙はリングをセットする

『ドルフィン!GO!ドットドットドット、ドルフィン!』

魔力で出来た水と共に右肩のバッファローの頭がイルカになりマントも紫色になつた

「超人【飛翔役小角】!」

「ぐおお!」

D藍が高速回転しながら紀斗に突進をくらわせた

高速回転の勢いと突進の威力で火は消え紀斗もこの反撃は予想外だったのでまともにくらってしまった

さらにそこへ

『ウォーター プリーズ スイー、スイー、スイー、スイー、スイー』

魔力で出来た水がB霊夢、Oフラン、Sアリスの火を消しいち早く敵を倒したWパチュリーとR美鈴が助つ人に来た

「大丈夫ですか！ 妹様！」

「うう、お兄ちゃんのあの能力反則だよ……」

「流水じゃなく一箇所にとどめた水で消化したからそつちのダメージはないけど火傷がひどくて少し無理そうね。美鈴はここでフランの護衛をお願い」

「わかりました！」

「さて、大丈夫そう？ 魔理沙」

「結構キツイぜ、いきなり体が燃やされるなんて初めてだからな。霊夢はどうだ？」

「まだいけるけどドリルアームがやられたわ。藍は？」

「ダメージはそれなりにあるがまだいけるぞ」

「敵の目の前でおしやべりとは余裕だな」

紀斗はB霊夢たちがいたところにガオウガツシャを叩きつけた

B霊夢達はそこから避け装備やフォームを変える

『カポーン ショベルアーム』

『カメレオン！GO！カカツ、カツカカツ、カメレオー！』

『ウオータードラゴン ジャバジャババシャーン、ザブンザブーン！』

「まだやれんのか、しぶといな。」

そう言つて紀斗がガオウガツシャーを構え斬りかかりにいかうとするといきなりB
霊夢たちが地面に倒れた

「!？」

「な、何よこれ」

「体が動かない…」

「やれやれ、物事はもつと効率的にやるものですよ、海堂君」

「Z、てめえか」

そこにはオピウクスゾディアーツに変身したZが身体から無数の蛇を伸ばし佇んでいた

「ええ、私の蛇の毒で痺れてもらいました。しばらくは動けません。さ、トドメを」

「…わかった」

『FULL CHARGE』

ガオウガツシャーの刃にエネルギーが溜まり柄と離れ宙に浮く

「オラア！」

そこから紀斗はB魔理沙に向かってタイラントクラッシュをくらわせようとする瞬間

「がっ!？」

強烈な頭痛が紀斗を襲い狙いがずれた

しかしガオウガツシャアが振り下ろされたところはB魔理沙がいたところと距離はあまり変わらずそしてそこにB魔理沙の姿はなかった

「やりましたね。では他の連中も…「させるか!」『ATTACK RIDE INVIS

IBLE』『テレポート ナウ』

「…逃げられましたか。それも全員」

D藍とSアリスがインビジュアルとテレポートを使いその場所には誰もおらずそして他のメンバーも紫がスキマに落とし別の場所に避難させたようだ

「ま、1人でも消せませたからいいとしましょう。さ、次のターゲットのいる永遠亭へと向かいましょう。海堂君」

「…ああ」

Zは人間に戻り紀斗に話しかけたがこの時のZはとても醜悪な気味の悪い笑みを浮かべていた

しかし彼は気づいていなかった、アリスがテレポートを使った場所が魔理沙の倒れて

いた場所のすぐ近くだったということ

第二十二幕 逆転

紀斗は永遠亭を探すため羅針盤座のゾディアーツであるピクシスゾディアーツに変身し迷いの竹林内を乙と歩いていた

「本当に便利な能力ですね。まさかゾディアーツやドーパントにまでなれるとは」

「道具を使った奴だけだ。元が怪人のやつにはなれない」

「それでも十分ですよ。ドーパントとゾディアーツだけでも好きな個体になれるんですから」

「見つけた、ここが永遠亭か。くっ!？」

「どうしました?」

「いや、なんでもない」

(ここについた途端また頭痛がひどくなつてきやがった。どうなつてやがる)

紀斗は変身を解き乙と永遠亭に入ろうとした

「おいおい、紀斗。帰ってくるのはいいが後ろのお客さんと大事な物を忘れるのは勘弁してもらいたいね」

紀斗たちが声のした方を向くとそこには腕を組んで壁によりかかるとるがいた

「うさ耳の幼女？うっ、頭が!？」

「邪魔をしないでもらいたい。私達は八意さんに用があるんですよ」

「それではい、そうですかと通す馬鹿がどこにいるのさ。通りたきやあたし達を倒してみな」

「そういうこと!」

竹林の影からいきなり影狼が飛び出してきてZに爪で襲いかかるがかわされてしま
う

「危ないですね。いいでしょう、海堂君出番ですよ」

「…ああ」

紀斗は腕にライダーブレスを装着しそこにコーカサスオオカブトを模したカブ
ティックゼクターを装着する

「変身」

『Change Beetle』

紀斗は金色のコーカサスオオカブトを模した仮面ライダー、仮面ライダーコーカサス
に変身した

「やるしかないか」

「そうみたいだね」

「変身！」

てゐるはインパラを模した仮面ライダーインペラーに影狼はカメレオンを模した仮面ライダーベルデに変身した（以下Iてゐ、V影狼）

「インペラーとベルデか。関係ないな、すぐに終わらせてやる」

「勝手に決めつけないでちょうだい！」

「まったくだよ！」

『HOLD VENT』 『SPIN VENT』

V影狼はヨーヨー型の武器のバイドワインダーを、Iてゐるは二股の槍型のガゼルスタップを装備し紀斗に攻撃しようとしたが

「クロックアップ！」

『CLOCK UP』

しかし紀斗は腰のスイッチを押しクロックアップを使った

「ふっ！ふっ！はっ！」

紀斗はIてゐるとV影狼を殴り一箇所にとめ腕のカブティックゼクターを180度回転させる

『RIDER BEAT』

音声 が 鳴り 紀斗 の 右腕 が タキオン 粒子 により 強化 される

「ライダービート」

紀斗は2人をまとめて殴り吹き飛ばした

『CLOCK OVER』

「ぐあっ!?!」

「うわあ!?!」

クロックアップは切れ元の速さにもどる

「…早く行こう」

「ええ、そうですね。早く行きましょう、早く…ね」

紀斗は変身を解き永遠亭内に入り今回の1番のターゲットだと言われた永琳を探す

そしてそれはすぐに見つかった

永琳は輝夜と共に縁側座っていた、しかしその目は少し虚ろで目には泣き腫らした後もあつた

「おお、見つけましたか。仕事が速いのは高ポイントですよ、海堂君」

乙はオピワークスゾディアーツの姿で庭の方から現れた

「!?!紀斗…あんた達がこの部屋に来たってことはてゐ達はやられたのね。」

「ええ、そういうことです」

乙が答えた瞬間輝夜から尋常ではないレベルの殺気が溢れ出る

「私もね仲間がやられて黙っていられるほど人間出来ちゃいないのよ!」

輝夜が拳を振りかぶって紀斗を殴ろうとする

「紀斗お! 齒あ食いしばりなさい!!」

「させませんよ」

しかし乙がその拳を受け止め輝夜を庭の方へ投げ飛ばした

「あなたには少し大人しくしてもらいますよ。」

乙の体から何十体もの蛇が伸び輝夜の体を縛る

「くっ! 離しなさい!」

「いやですよ。海堂君! 八意さんは不死者です! 彼女の心を壊しなさい!」

「…スキルコピー【レギオンのアンダーワールド侵入能力】」

紀斗の手にレギオンの持っていた薙刀が握られ紀斗を見て呆然としている永琳に近

づいていく

「紀…斗? 紀斗なの?」

「永琳! 逃げなさい! 紀斗! 永琳に手を出したら絶対に! 絶対に許さないわよ!」

「無駄ですよ、八意さんはともかく今の海堂君は何を言っても何ひとつ思い出しません

」

「なんでそんなことがわかるのよ!」

「何故なら、今彼の人格、記憶は我々が元の人格と記憶をアンダーワールド、彼の心の奥に簡易版ですがムネモシユネを使い閉じ込めその代わりとしてうえこませた物ですからね。つまり今の彼は記憶も人格も偽物、彼の心の奥にいる本当の彼が解放されない限りは治りませんよ」

「ムネモシユネ!? そんな物まで使っていたなんて!」

「エキサイティング:今から、あなたの心を壊させてもらう」

紀斗は薙刀を持ったまま永琳に近づいていくが永琳は涙を流しながら両手を広げ紀斗に笑顔を見せる

「紀斗:早く戻ってきなさい。私はちゃんと待つてるから」

紀斗が薙刀を振り上げ永琳を斬りさこうとしたその時

(やめろおおおお!!)

「ぐがっ!? あ、頭が!? ぐあああああ!?」

いきなり紀斗を凄まじい頭痛が襲い紀斗はその場で頭痛に悶え苦しむ

「!? いきなり何が!?!」

『ピーー!ピーー!』

いきなりZの耳についている通信機が鳴る

『ピー!』

「なんですか、今こちらは忙しいんで『Z様!緊急事態です!海堂 紀斗の人格を捕縛しているムネモシユネの記縛の鎖が壊されそうです!』何!?!馬鹿な、あれは我ら幹部の全力でもひびが入る程度の強度があるんだぞ!」

『しかし現状では今にも鎖は千切れそうです!』

「怪人達を出して取り押さえさせろ!海堂の人格を復活させるな!」

「あらあら、口調まで取り乱して随分焦ってるのね」

「うるさい!このままじわじわ絞めつけてやろうか!」

『FINAL VENT』

「!?ぐあっ!?!」

Zはいきなり多様のレイヨウ型のミラーモンスターに襲われ輝夜の拘束が緩む

「うちの姫様を〜」

そしてさらにそこにIてゐるが走ってきて

「離しなあー!」

「ぐうつ!?!」

強烈な飛び膝蹴りをZの顔面にお見舞いしZはその衝撃で宙を舞う

「まだ終わらないよ!」

『FINAL VENT』

そして輝夜の拘束が解け蹴られて空中に浮いてしまったZを後ろからV影狼が掴みバイオグリーザが舌を放しそこから空中回転して筋肉ドライbゲブンゲブン デスバニツシユを決めた

「がっ!?!」

さらに永遠亭の他の部屋からB霊夢達とやられた筈のB魔理沙が出て来て倒れているZの首に自分達の得物を押し付け取り囲む

「スキマやテレポートの行き先はここだったのか。しかし何故貴様が生きている!霧雨魔理沙!」

「へっ、あの時の私の装備を忘れたのか?」

「いくらカメレオンマントだといっても当たれば意味がないだろう!確かに当たっていた筈だ!」

「あの時紀斗のやつ、一瞬動きがブレてそれで狙いが外れたんだ。それで上がった砂煙が晴れる前にあたしは姿を消したってわけき!運よくアリスにはその消える瞬間が見えてたしな」

「まったく、あの時私が気付いてなかったらバれて死んでたわよ」

「そういう小言は聞き飽きたぜ」

「とにかく今ここで殺られるのと質問に答えて帰されるの、どっちがいいかしら?」
（この状況では海堂の奪還は無理。仕方が無いか）

「ならば何も答えず帰るといふ選択肢をとらせてもらおう」

Zを黒いモヤは包みB霊夢達はそれぞれ斬ろうとしたがそこにはもうZの姿はなかった

「逃げたわね。紫、追跡出来てる?」

「駄目ね、この前紀斗を探した時と同じ感じよ。無理矢理変な方向にやられているような感じよ」

「で、この紀斗はどうやったら元に戻るんだ?」

「あいつはアンダーワールドにムネモシユネ、紀斗がこうなった原因の物があるって言うってたわ。その中に閉じ込められた紀斗の本当の人格を助けてムネモシユネを破壊すれば紀斗は助かる筈よ」

「でもアンダーワールドに行けるのは」

「私とパチュリーだけだな」

「私もエンゲージのリングは持ってないから」

「ま、とりあえずやることは決まったしきつさきとやりましょ」

「魔理沙、パチュリー」

「ん？」

紀斗にエンゲージリングを付けようとしたB魔理沙とWパチュリーに永琳が声をかける

「絶対、絶対紀斗を救ってきて」

「へっ、当たり前だぜ！あいつのマツサージはまだ私は受けてないからな。戻ってきたらタダでやつてもらうぜ！」

「いいわね、それ。私も最近肩がこることが多いから頼もうかしら。永琳、任せておいで。今は私達が最後の希望だから」

「それじゃいくぜ、パチュリー」

「ええ、とつとつすませちゃいましょ」

B魔理沙とWパチュリーはそれぞれ紀斗の手にエンゲージのリングをはめる

『エンゲージ プリーズ』『エンゲージ GO!』

倒れている紀斗の上に2種類の魔法陣が重なるように現れB魔理沙とWパチュリーはそれに飛び込み紀斗のアンダーワールドへと入っていった

第二十三幕 アンダーワールド

紀斗 side

俺は元の世界があまり好きではなかった

あの世界に俺の居場所などなかったから

俺が幼稚園児の頃あたりだったかそのあたりから俺の両親は俺の世話をやめた

俺の両親は父親が大会社の御曹司、母親がその子会社の社長だった

2人共ほとんど仕事一筋で結婚したのは政略結婚で無理矢理だそうだ

それで親類や家族からの希望で俺が生まれた

2人共家政婦などのお手伝いさんは信用できないので絶対雇わない主義だった

俺が赤ん坊の時はイヤイヤながらも世間体を気にして世話をしていたが俺が1人で

行動できるようになるとそこで育児をやめた

自分のことは自分でやらねばならず最初のうちは失敗ばかりだったがそのうち大体

のことは出来るようになった

考え方も次第に自分でやるのが当たり前という感じになりそのせいか俺は妙に精

神が大人びてしまい他の子の保護者たちからは少し気味悪がられた

だがどうせ家に帰ってもやることは特に無いためその頃から既に見えていたツボを使つて遊び代わりに先生達のマツサーズをしたりして先生達からのイメージは割と好評だった

そしてそんな生活をしていた俺が唯一普通の子供に戻っていた時が仮面ライダーを観ていた時だった、俺はそれにハマりその年から既に仮面ライダーオタクになっていたそのせいか俺は幼稚園や小学校でもあまり仲のいい友達は作れなかった、同じように仮面ライダーを好きな子はいても俺が仮面ライダーを好き過ぎたせいで他の子供はついていけなかったからだ

中学や高校では部活に入り少しは熱くなれたが不完全燃焼だったことが多かった
両親も世間体の為に俺を大学まで行かせてくれたが金を出して残りは勝手にすればいいという感じだった。まあ、金を出してくれるだけまだいいんだろが俺は両親を家族とはみていなかった

そんな人生を歩んできた俺にとって世界は灰色だった

本当に心を許せる友もなく両親からの愛も受けられず現実が嫌になっていた
だから俺はよく2次元や特撮に逃げた

そんな中で俺は紫に呼ばれ幻想郷に来た

幻想郷に来て灰色だった俺の世界に色が戻ってきた

本当に心を許せる仲間や友ができ、そして愛する人ができた

今まで無かったものが一気に得られた、俺の中で温かいものが満たされていく感じだった

しかし俺は財団Xに捕まり俺のアンダーワールドにムネモシユネを入れられ俺自身の人格は封じこめられてしまった

代わりの人格が俺の体を動かし仲間たちを傷つけていく

俺は柱に鎖で縛られその光景を見ていた

必死に鎖をちぎろうとするが能力も使えないのでなかなか鎖にダメージはいかない

魔理沙がやられそうになった時、俺は渾身の力で鎖を引きちぎろうとし鎖にヒビが入った

その効果が俺の体に頭痛としてあらわれ狙いが少しずれ魔理沙には当たらなかった

だがその後、永遠亭で俺の体が永琳を見つけレギオンの能力をコピーし永琳のアンダーワールドへ入ろうとした

(それだけは絶対にさせねえ！)

「やめろおおおお!!」

俺は自分の体の限界を超える力で俺の身体を縛る何本もの鎖を引きちぎっていく

しかし

「させませんよ」

「ぐっ!？」

突然現れたウエザード・パントに俺は柱に押しさえつけられた

「まったく、この記縛の鎖を何本も引きちぎるとは……。一体どんな精神力をしているんですか」

「うるせえ! 離しやがれ、このイカレ野郎が!」

「それは出来ませんねえ。マスカレイド達、海堂君を柱に押しさえつけておきなさい」
ずっと映っていた俺の体が見ている景色が消えた、おそらく気絶したのだろう

「やれやれ、困ったものですねえ」

「離せ! この雑魚敵共が!」

「あなたには籠の鳥でいてもらいますよ。財団Xのためにね」

「くそが! 俺は絶対にここから出てみせるぞ!」

「諦めが悪いですねえ。あなたは一生ここから出ることは叶いませんよ」

「そんなことはないぜ!」

そのセリフと共に暗かったムネモシユネの中に光が飛び込んできた

紀斗sideend

3人称side

「ここが紀斗のアンダーワールドか。」

「この前の宴の時のようね。そしてこれがムネモシユネのようよ、魔理沙」

紀斗のアンダーワールドのちょうど中心近くに黒い正八方体が浮いていた

B 「こいつがムネモシユネか。意外と小さうお!」

B 魔理沙が触るとB 魔理沙の手がムネモシユネの中に水の中に入るように入っている

「どうやらその中には普通に入れるみたいね。さ、行きましょう」

「ああ!とつとと紀斗を解放して永琳を安心させてやろうぜ!」

2人は飛び込むと最初は暗闇だったが次第に視界が開けてくると共に会話が聞こえてきた

「あなたには籠の鳥でいてもらいますよ。財団Xのためにね」

「くそが!俺は絶対にここから出てみせるぞ!」

「諦めが悪いですねえ。あなたは一生ここから出ることは叶いませんよ」

「そんなことはないぜ!」

「!?誰です!」

「魔理沙とパチュリー、来てくれたのか。助かるぜ」

「チツ、魔法使いの2人ですか。仕方ありませんね、ここで2人共始末してあげましょ

う」

ウエザードーパントの周りにマスカレイドドーパント、ダスタード、屑ヤミー、グル達が現れる

「奴らを始末しなさい！」

『ウウオオオ！』

「めんどくさいな、一気に決めてやるぜ！」

『GO ファアルコ！ファッフアッフアッフアルコ！』

「ダイスロール！」

B 魔理沙がダイスサーベルのビーストダイスを回し出た目は6！

「よしっ！六とはついてるぜ！」

『シックス ファアルコ セイバーストライク！』

「雑魚に用はないのよ！」

『フレイム シューティングストライク ヒーヒーヒー』

B 魔理沙がダイスサーベルを振るとそこに魔法陣が現れそこから魔力で出来たでかい隼が6羽飛びだしマスカレイド達に突撃しWパチュリーはウィザーソードガンをガンモードにしシューティングストライクを放つ

それをくらったマスカレイド達は9割方消滅しウエザードーパントが若干イラつい

た口調になる

「これでもくらいなさい！」

ウエザードーパントは竜巻と雷雲を発生させB 魔理沙とW パチュリーを竜巻と雷が襲う

「雷ならこれね」

『ランド ドラゴン ダン・デン・ドン・ズ・ド・ゴーン！ダン・デン・ド・ゴーン！』

『ディフェーン ド プリーズ』

W パチュリーはランドドラゴンになりさらにディフェンドを使い雷と竜巻を一時的に防ぐ

「魔理沙！こいつは私がなんとかするから紀斗を！」

「わかったぜ！すぐ戻るからな！」

「そう簡単に行かせると思えますか？」

「あら、デートの誘いを断るのはレディに失礼よ」

「邪魔ですねえ。ならあなたから潰してあげましょう」

B 魔理沙は紀斗の方へ走っていきそれを邪魔しようとするウエザードーパントの前にW パチュリーが立ちはだかる

「邪魔だぜ！」

「ぐあつ!？」

「魔理沙!」

「よっ、紀斗、今外してやるぜ。オラ!」

B 魔理沙は紀斗を柱に押さえつけていたマスカレイド達を倒し紀斗を縛りつけていた記縛の鎖も断ち切った

「どうだい? 私に助けられた気分は?」

「ああ、悪くねえ。それよりパチュリーの加勢に「その必要はありませんよ!」!」

W パチュリー「くっ! 油断したわ。」

ウエザー「それなら早く本気を出してください。それとも仮面ライダーとやらの実力はこんなものですか?」

W パチュリーが紀斗達のところまで吹き飛ばされウエザードーパントが皮肉まじりのセリフを吐きながらこちらに近づいてくる

「パチュリー、大丈夫か?」

「大丈夫、まだいけるわ。それより紀斗、あなた能力は使えるの?」

「いや、駄目だ。能力は何一つ使えない。だが思いついたことは一つある。パチュリー、ウイザーソードガン借してくれ」

「いいけど、それで勝てる見込みはあるの?」

「俺の予想が正しければ絶対に勝つ。何をごちゃごちゃ喋っているんですか？」うおっ!?
危ねえ!とにかく足止めを頼む!」

紀斗はWパチュリーにウイザードソードガンを受け取りウエザードパントの雷を避けながら縛られていた柱の裏側の方へ走っていった

「そう簡単にいかせると思えますか？」

「おっと、お前の相手は私達だけ」

「紀斗のところへは行かせないわよ」

紀斗を追おうとするウエザードパントの前にB魔理沙とWパチュリーが立ちはだかる

「やっぱりあった!ムネモシユネの本体!」

紀斗が向かったのは縛られていた柱の裏側、そこには黒い正八方面体、ムネモシユネの本体があった

(ここまでは俺の予想通り、あとはこの中にあれがあれば)

「ぶっ壊れやがれ!ムネモシユネ!」

「これでもくらいなさい！」

『グラビティ プリーズ』

「ぬう!？」

Wパチュリーがグラビティを使いウエザードーパントへの重力を増加させ動きを止めめる

「ぶちかますぜ！」

『スリー ファルコ セイバーストライク!』

「甘いですよ。ハアア！」

3羽のさつきより小さい隼がB魔理沙から放たれウエザードーパントに向かっていくがウエザードーパントの周りにバリケードのように竜巻と吹雪が発生しセイバーストライクもかき消されてしまった

「いくら私の動きを制限しようとしてしまえば何の問題もありません。さらに」

「なんだこれ？雨か？」

「まさか!？」

「そのまさかですよ」

ウエザードーパントは雨を降らせB魔理沙とWパチュリーは濡れになってしまったさらにウエザードーパントは雨雲を雷雲に変える

「簡単な理科の実験です。水で濡らした生き物に電気を流すとどうなるのかというね」
 「こりややばいな、パチュリー!」

(デیفエンドやドリルじゃ逃れきれないし)

「なに? 魔理沙、いい案でも思いつい カチャリ え?」

『ドルフィン プリーズ』

「魔理沙!」

「実験開始!」

「うあああああ!」

B 魔理沙はWパチュリーの手にドルフィンのリングをつけさせ地中に潜らせたが自分はそのまま全方位からの雷を受けてしまった

とところどころ焼け焦げがついたB魔理沙は倒れWパチュリーは駆け寄ってからウエザードパーパントを覗む

「魔理沙大丈夫!?! よくも魔理沙を!」

「おお、怖い怖い。次はどんな魔法を見せてくれるんですか?」

紀斗side

「ビンゴ、やっぱりあったか、メモリータンク」

俺はずっとムネモシユネを攻撃し続け外殻の一部を破壊した

そしてその中には赤く光るカプセルのような物があった

「オラー！」

俺はウィザードソードガンで少し割るとそこからエネルギーのようなものが外に出ていく

そして俺はそのエネルギーの中に手を突っ込みある物をイメージする

(これがメモリータンクの中の記憶やイメージを実体化させる物なら！俺のイメージも実体化されるはず！)

瞬間俺の手の中に二つの物が現れた

俺はエネルギーから手を抜きそれを確認する

「よし…これがあれば！あと念のためあれも実体化させとくか！」

紀斗 side end

3人称 side

Wパチュリィはボロボロで状況は最悪だった

ウエザードパントにダメージは与えているものの明らかに自分達のダメージの方が大きい

B 魔理沙も雷のダメージでまだ動けない

(まだなの、紀斗！)

「さて、そろそろトドメといきますか。」

ウエザードーパントがWパチュリーに向かって手を向けた

「ちよつと待ったあ！」

「ん？ぐあつ!?」

紀斗が柱の影から現れウイザーソードガンでウエザードーパントを撃ちウエザードーパントは不意打ちで全ての銃弾が当たり怯む

「パチュリー！魔理沙！まずこれで回復しろ！」

「何よ、この青い球。大丈夫なの？」

「問題はねえよ。ほら、魔理沙も」

2人に青い球を渡すと青い球は2人の身体に吸い込まれ2人の傷が癒えB魔理沙も問題無さそうに身体を動かす

「すごい…。さつきまで体が動かなかったのに…」

「よっしゃ！これでまだまだやれるぜ！」

「あと、これも使え」

紀斗は2人にさつき手に入れたリングを渡す

「やってくれましたねえ。あなたは傷つけずに捕まえるつもりでしたが、やめです。半

殺しにして逃げられないように手足をもいであげますよ」

「2人とも！頼む！」

「仕方ないわね」

「任せな！」

『インフィニティー プリーズ』

『ヒースイフドー ボーザバビュードゴーン』

『GO！ハイハイ、ハイ、ハイパー！！』

Wパチュリィはダイヤのような輝きのウイザード インフィニティースタイルに、
魔理沙は青と金をベースに胸にキマイラの顔があるビーストハイパーに変身した

「今までやられたぶん倍返しよ！」

「覚悟は出来たか？変態野郎」

「ふん、またすぐに倒してあげますよ」

「また感電させてあげましょう！」

「どこに向かって攻撃しているのかしら？」

「ぐおっ!？」

「追い打ちだぜ！」

「ぬああっ!？」

ウエザードーパントはWパチュリーに向かって雷を放つが高速移動で避けられアツクスカリバーのカリバーモードで背中を斬られさらにB魔理沙のミラージュマグナムで撃たれる

「さつきは倍返しって言ったけど流石に疲れたから次で決めてあげるわ。魔理沙！」

『ターンオン！』

「おう！ん？これ、反応しないぞ」

「そのリングの口を開け！」

「口を？ カシヤ あ、開いた。よし！準備OKだぜ！」

WパチュリーはアツクスカリバーをアツクスモードにしB魔理沙はハイパーのリングの口を開かせる

『ハイターツチ！ シヤイニングストライク キ・ラ・キ・ラ！』

『ハイパー！ マグナムストライク！』

Wパチュリーはアツクスカリバーのハンドオーサーを軽く叩きB魔理沙はミラージュマグナムにハイパーリングをセットする

そしてアツクスカリバーは巨大化しミラージュマグナムの鏡にらビーストキマイラの顔が映る

「くらえー！！！」

「うわああ!?!」

巨大化したアックスカリバーによるシャイニングストライクとミラージユマガナムから放たれたキマイラの形のエネルギー弾がウエザードーパントを直撃し爆発した

「これで全部終わったのか?」

「いや、最後にムネモシユネの本体をぶつ壊す必要がある。柱の裏側にあるぜ」

3人は柱の裏側に行きムネモシユネの前行く

「これを壊せばいいのね。悪いけど魔理沙、私もう疲れちゃったからやってくれない?」
「しようがないな、わかつたぜ」

B 魔理沙はダイスサーベルを構えダイスを回す

「よっしや、6か。今日はついてるぜ」

「それじゃ魔理沙、頼んだ」

「おう! 跡形もなくぶつ壊してやるぜ!」

『シックス ハイパー セイバーストライク!』

B 魔理沙がダイスサーベルを振ると魔法陣から魔力で出来た隼、カメレオン、イルカ、バッファローが6体ずつ現れムネモシユネに突進していく

その攻撃でムネモシユネは破壊され暗かった空間が光に包まれていく

「ありがとよ、2人ともし」

「私達だけじゃないぜ」

「他の皆も一緒に頑張ったんだから」

「そうだったな、皆にもお礼しなきゃな」

「そのお礼を楽しみにしてるぜ」

「これで意識を取り戻さなかったら承知しないわよ」

そして空間が完全に光に包まれた

永遠亭

紀斗の体から魔法陣が現れそこからB魔理沙とWパチュリーが出てくる

「どうだったの？」

「ちよつときつかつたがなんとか成功したぜ」

「動きまくったから明日は筋肉痛かしらね」

「う…」

「紀斗！」

紀斗の口から声が出てうっすらと目蓋が開かれる

「よお、永琳、ただいま」

「紀斗…お帰りなさい。」

紀斗は自分の顔を心配そうに覗き込む。永琳に本当の自分が帰ってきたという証の返事をし、永琳はそのことが嬉しくて、紀斗に抱きつき、歓喜の涙を流した。

そして紀斗は本当に自分を愛してくれる人と信頼できる仲間達の大切さを再び噛み締めた。

第二十四幕　ボス

ムネモシユネから解放されて1時間後

俺は布団から起き上がれずその状態のまま永琳から診察を受けていた

「かなりひどいわね。内臓や筋繊維もボロボロだわ」

「まだ扱いきれてない能力や物まで無理矢理使わされたり出させられたりしたからな。その反動さ」

「それで、どのくらいで紀斗さんの身体は治るんですか？」

「良くて1ヶ月、悪くて1年でとこね。どちらにしろしばらくは安静にしていなきゃ」

「そうか、ならこれも試しとくか。ツツ」

紀斗は自分の身体の一点を親指で強く押した

「ちよつと紀斗何やってるの!？」

「回復増進のツボだ。これで回復するスピードはほんの少したが早まる。さらに回復

【メディカル　オン】

紀斗はメディカルの注射器を自分の腕に刺す

「こいつにも同じような効果があるからな。これで少なくとも回復スピードは通常の

1. 5倍くらいにはなる」

「あとおこの薬も朝昼晩で飲んでもらうわよ。これも回復スピードを早める薬だけどこれは主に内臓の方よ。筋繊維と違って内臓は治るスピードもそれなりにかかるから」

そう言うって永琳は俺に青い錠剤を渡す

「また奇抜な色合いだことで…」

「その分効果は保証するから我慢しなさい」

俺はその錠剤を飲んだが口に入れた瞬間なんともいえない渋みが口の中に広がって
いた

「ところでさつき扱いきれてない物まで出させられたりしたって言うってだけど一体何を
出させられたの?」

「ああ、まずコアメダル全種、メモリーメモリ、ホロスコープス全員のスイッチ、ディエ
ンドライバーとカメンライド、怪人ライドのカード、ラウズカード全種、オーガドライ
バーとサイガドライバー、龍騎のデッキにグロンギ、アンノウン、魔化魍、ワーム、イ
マジン、ファンガイア、フロントムを幹部級、ボス級を数種とかなり持つてかれた」
「それってかなりやばいんですよね…」

その報告に仮面ライダーをよく知っている早苗は一人冷や汗を垂らす

「かなりやばいで済めばいいがな。奴らの軍備はこれでかなり強化されちゃった。だが

逆にこっちにもいい情報は持つてかえってきたぜ」

「ちゃんといい情報なんでしようね」

「もちろんだ。奴らの幻想郷への侵入経路がわかった」

『!?』

霊夢が怪しそうな視線で紀斗を見るが紀斗の答えにそれを聞いた全員が驚く

紀斗は懐から以前Mがスモークのメモリを挿して使った爆弾のような球体を出す

「こいつはメモリを挿せばそのメモリの特性の効果が出るらしくてな。奴らはこれに量産したクレイジーメモリを挿し入り口で作動させて能力で場所をわからないようにさせてある。しかも外界の方からキードーパントが結界の穴に鍵をかけてあるから見つけても穴には入れない」

「なるほどね、でもそれだとその球体が作動していない時はどうなってるの？普通なら結界の穴は私や藍がすぐに察知出来る筈よ」

「普段は何体もいるキードーパントが交代制でロックをかけているからそれが結界の一部として認識されてるんだらう。だけど奴らが侵入してくる時にキードーパントのロックは解けるんだがその間そこは虹色の膜に覆われる。あれも結界の一部だと認識されてるらしいがな」

「めんどくさいわね。その対処法は考えてあるの？」

「ああ、考えてはあるが今の状態じゃ使えないし場所がすぐに瞬間移動させられたせいでわからないんだ」

「なんだ場所がわからないんじやあんまり役に立たないわね」

「ぐ…おっしやる通りで」

紀斗は知っている情報を話したが霊夢に痛いところを突かれ少し苦い顔になる

『安心したぜ。まだ入り口の場所が割れてないとはな。』

『!?!』

その時いきなりここにいるメンバー以外の声が生紀斗と数人がその声の主が誰か気づく

「この声は!?!」

「その声Gだな!どこにいやがる!」

『ここだよ。』

庭から黒いバツタカンが現れ縁側に乗り映像が映される

『Zの野郎をつけといて正解だったぜ。元の人格のお前とは久しぶりだなあ、海堂』

映像にはGのにやついた顔が映し出される

「G、てめえ何の用だ」

『なあに、俺自身はたいした用は無いんだがな。しいて言うならお礼かねえ』

「礼だと?」

『お前の出してくれたコアメダルのおかげで俺はさらに完全体に近づけたからなあ。それにOの野郎も帝王のベルトが入って研究が進むって喜んでたしなあ』

「てめえ」

紀斗は怒りで震えるが体が動かさずそんな様子をGは嘲笑うような表情で見ている

『ま、んなことはどうでもいいや。今回はうちのボスが元の人格のお前に挨拶がした
いって言うから通信をいれたんだよ。ボス! 準備出来てるぜ!』

『ああ、わかった』

そしてGは画面から消え代わりに中年の落ち着いた雰囲気の方が映された

『やあ、海堂 紀斗君、そして幻想郷の住人達。私の名は暗道 戒地 (あんどろ かいじ)。この財団X Z支部のトップを務めている』

「お前がこのふざけた侵略を繰り返す首謀者か」

『その通りだよ。私は自分で言うのもなんだがかなりの野心家だね。私は支部のトップ程度で終わる気は無い。さらに上に財団Xのトップいや世界のトップに立ちたい! そう思っているのだよ』

「グリードみてえな奴だな。そのためにこの幻想郷を支配しようとしてるってか」

『グリードか…あながち間違いではないな。しかし私はグリードではなく別種、ファン

トムだがな』

暗道がそう言った瞬間暗道の姿は変わり暗い銀色の狼を模した怪人、フェンリルファントムに変身した

「おいおい、まさか財団Xの支部長がファントムとはな。財団Xはそんなのもありなのか？」

『なにこの男が元から財団Xの一員で、私はこいつの体でここまでにしたのし上がったに過ぎない。だが今の私の力ではこれ以上にいくのは難しい』

暗道は自嘲するような笑みを見せそして次はこちらを嘲笑うかのような笑みに変える

『つい最近、我が同胞ドレイクが世界を作り変える魔法を使いそこで大量のファントムを生み出そうとした。しかし私にはそこまでの魔力も無くドレイクのようにライダーに変身も出来なかつた』

「何が言いてえ」

『気づいたんだよ。魔力が少ないなら魔力は他のファントムやゲートからそのままライダーに変身出来ないならなれる奴からベルトと指輪を盗めばいいとね。そしてその片方は君のおかげで叶った。だがまだ魔力はまったく足りない。そして最初に考えついていた計画をそこで実行しようと思ってるんだよ』

(魔力が必要…他のゲートやファントムから奪う…大量のファントムを生み出す…!?)
「お前まさか!？」

『お察しの通り…。私は幻想郷でサバトを開こうと思っている。幸い君のおかげでエク
リプスのリングも手に入っているしね。幻想郷には何人も魔力を持つ人間が確認さ
れているから一体どれくらいのファントムが生まれるか、早く試したいものだよ』

「そんなこと絶対させねえぞ!てめえの計画なんぞ全部ぶち壊してやる!」

『そんな格好でよく吠えるものだ。まあ、私もそんなに早くサバトは開かんよ。まだま
だその箱庭には利用価値がたくさんあるからな』

『それじゃあ、私はこれで失礼するよ。さようなら、いずれ会うかもしれない幻想郷の住
人達』

そこで映像は消えバツタカンは捕まえようとする前にどこかへ跳んで消えていった

「好き勝手言われまくったわね」

「くそつ!悪い皆、俺が捕まったせいで…」

「過ぎたことをくよくよ言っても仕方ないわよ。それよりこれからのことを考えま
しよ」

紀斗は悔しそうに唇を噛み締め紫がそれを宥めると同時に何をすべきかという議
題を出す

「紀斗、その結界の穴のところの景色に見覚えはないのか？」

「辺りは確か草原でほぼ何もなかったな遠くまで見ようとしてその瞬間、瞬間移動させられてわからなかったが。」

「草原だけじゃ探し用がないわね。範囲も広すぎるし」

「そういえば紀斗、その球体の効果範囲はどのくらいなの？」

「え、確か半径500mくらいだと思っただが」

「なら次奴らが現れてそれを使った時それで探せない範囲を大体で索敵するわ。そうすれば探すのはそこだけでよくなるし」

「じゃあ奴らが現れたらその方法を使って、それまでは各自で結界の穴を探すっていう形でいいわね」

霊夢の案に全員が頷き了解の意を示す

そして今日は紀斗の安静のためにもとこれからのことだけを決めて解散し各々が自分の家へと帰っていった

「そういえば紀斗、あのボイスメッセージにあった伝えたいことって？」

「え、い、いやそれは／＼／＼」

「元の人格で会えたら伝えるんじゃないの？」

「わ、悪い！それはまた今度で！／＼／＼」

永琳の問いに俺は顔が真っ赤になりながら布団をかぶり答るのを先延ばしにする

「もう、しょうがないわね。ちゃんと今度こたえてよね」

「ああ…絶対に答えるよ／＼／＼」

永琳は今答えさせるのを諦め紀斗は布団の中で真っ赤になりながらも静かにしつかりした声で返事を返した

(この事件が終わったら絶対に…)

第二十五幕 黒いカブト

紀斗が戻ってきて2週間後、あれから何度も各地で襲撃はあったがそれは全て紀斗が戻ってきた日の敵の大部の残党だった

残党達はかなり残っていたらしく2、3体の隊長格と20体近くの雑魚敵で構成したグループを作り複数の場所に潜んでいたらしくそれが色々な場所で別々のタイミングで暴れそれを霊夢達がチームで穴の探索途中で見つけ鎮圧しているらしい

紀斗の容態は永琳の愛のこもった看病（ノロケ）と異世界の友人から送られてきた薬の効果もあってほぼ完治という状態になり今日から結界の穴の探索に参加することになった

そして今回紀斗のチームは紀斗、天子、衣玖さんの3人となった

行き先は四季のフラワーマスター、風見 幽香のいる太陽の畑

紀斗 side

「やれやれ、まさか俺の復活からの初任務の場所が幽香さんのいる太陽の畑とはな」

「別に会わなければ花を傷つけない限りは安全ですし今回は幽香さんに用があるわけではなく穴の探索に来ているんですから大丈夫だと思えますけどね」

トライチエイサー2000に走らせながらぼやく俺を衣玖さんがなだめる

「あら、別に私は会ってもいいけどね」

「お前（あなた）はただ痛めつけられたただけだろ（でしょう）」

「ギクツ?! い、いや私はただ単に昔痛めつけられた借りを返そうと…」

「以前もそう言つて幽香さんのなすがままに飛ばされてたじゃないですか。しかも恍惚とした表情で」

「う…」

天子は言い返すことが出来ず言葉に詰まる

そして俺たちがそんなたわいな会話をしていると辺り一面ヒマワリが咲く太陽の畑に着いた

「それじゃここからは別々に行動するか」

「そうですね、幽香さんに見つかからないうちに行きましようか」

「私は別にあんな奴怖くもなんともないけどね！」

「あら、誰の話をしているのかしら？」

「「え」」

3人は油の切れたロボットののような動きで後ろを振り向くとそこにはとてもいい笑顔の幽香さんがいつもの傘をさして立っていた

「頭が!? 頭が割れるううう?! / / /」

「あはは、お久しぶりですね。幽香さん」

「そうね。あの春祭り以来ね。それで、一体今日は何の用で来たの?」

「ん?」

幽香さんは天子の頭をアイアンクローで掴みさらに力強く握りかわいた笑いしか出て来ない俺に今回の用件を聞いてくる

その瞬間俺の体の中で何かが出たがっているようなそんなむず痒い感覚と共に頭の中に機械の黒いカブト虫の姿が浮かびあがる

(ダークカブトのカブトゼクター! : : ?)

「ちよつと、聞いているのかしら? あなたもこれをくらいたいの?」

「ああ、こわれりゆく / / /」

「あつ! す、すいません! 実は…」

青年説明中…

俺は今の現状、この前の出来事、今やっていることなどを幽香さんに説明し幽香さんは飽きたのか、天子をそこらへんに放り投げて俺の説明を聞いていた

「なるほどね、それで今回の探索場所であるここへ来た。ところであなた達時間はまだ残ってるかしら?」

「え、ま、まあ残ってますけど」

「なら私と弾幕ごっこしなさい。最近退屈だったのよ」

「そのお誘いは受けなきやどうなりますかね?」

「全員今すぐピチュラせる♪」

「はあ、しようがないですね。わかりました受けますよ。あ、その前に」

俺は自分の手のひらの上にダークカブトのカブトゼクターを出す

するとさつきまでのむず痒さは消えカブトゼクターは幽香さんの目の前まで飛んでいく

「なにかしら、このカブト虫は」

「そいつはカブトゼクターって言うって意思を持った変身ツールの一つなんですけど。なんか幽香さんのこと気に入っちゃったみたいですね」

「(*。▽。*)」

カブトゼクターはキラキラとした憧れを持つような感じで幽香さんを見上げ幽香さんは疑問を持った顔でカブトゼクターを見る

「うっとおしいわよ。私は今から弾幕ごっこをやるんだからどっか行ってなさい」

「Σ (。D。 ー ー ー)」

「(, ; ω ; ;)」

「よしよし」

カブトゼクターは幽香さんに冷たくあしらわれそこらへんでイジけそれを衣玖さんが慰める

「さ、始めましょ」

「そうですね、じゃちよつと待ってください」

俺はクウガのベルトであるアークルを腰に出現させ変身ポーズをとり左腰に力を集中させる

「変身！」

俺はクワガタを模した平成ライダー第1号、仮面ライダーダークウガに変身した

「さて、久しぶりの弾幕ごっこ！張り切っていきますか！」

「あまり私を退屈させないでね、仮面ライダーさん」

「さあ、まずは小手調べよ。」

そう言うのと幽香さんはかなりの量の花型の弾幕を放つ

「これで小手調べかよ。よつと！」

俺は右へ左へと避けるがバランスタイプのマイティフォームでは全て避けるには無理があり俺はそれを知るとかしようとフォームチェンジする

「超変身！」

俺は青いカラーリングのクウガ ドラゴンフォームにフォームチェンジしさらに出現させた鉄パイプを握ると鉄パイプの姿が変わりドラゴンフォームの専用武器 ドラゴンロッドになる

俺はドラゴンフォームでスピードが上がり当たりそうだった弾幕を避けさらに他の弾幕もドラゴンロッドと自分の出した弾幕で撃ち落とす

「さ、準備体操は終わりにして本番に入りましょうか。花符【幻想郷の開花】」

幽香さんがスペカを発動させると俺の近くにいくつもの花が咲きそれがこちらに飛んでくる

紀斗「まったく、あれで準備体操だなんて本当勘弁してほしいぜ。」

俺はドラゴンロッドと弾幕で花と幽香さんの弾幕を避けたり撃ち落としたりを繰り返す

「でも、ま、俺もやられっぱなしは趣味じゃねえからやりますか。透明符【インビジブル】！」

幽香さんの周りにデタラメに弾幕が現れ幽香さんに向かっていく

「この程度の弾幕じゃ足止めにもならないわよ」

そうやって幽香さんは弾幕を傘で叩き潰したり避けたりしてこちらに向かってくる

「潰れなさい!」

「嫌ですよ!」

幽香さんの傘と俺のドラゴンロッドがぶつかり合い一瞬だけ拮抗するがすぐに俺の方がパワー負けし押しされる

(やつぱりドラゴンフォームでパワー勝負は無理があるか。けど今の状況じゃフォームチェンジしても不利になるのばかり。このままいくしかないか!)

「ハアッ!」

「チツ、逃がさないわよ!」

俺はドラゴンロッドへの力の加え方を変え幽香さんの傘を受け流しひとまずつばぜり合いの状態から抜け出す

力をかける相手がいなくなった傘は地面に振り下ろされその地面がかなり陥没し俺も改めて恐怖を覚える

「おいおい、力入れ過ぎじゃないですか?」

「あら、これくらい普通よ。さ、もっと私を楽しませなさい!」

俺はドラゴンフォームの持ち味であるスピードで幽香さんを色々な方向から攻撃するがなかなか決定打が決められない

「うっとおしいわね!いいわ、一気に吹き飛ばしてあげる」

幽香さんは上空に飛びこちらに向かって傘をむける。それはまるで魔理沙がミニ八卦炉でマスパを撃つ時のような構えだったが俺の第六感が絶対にあのマスパ以上のものがくると警鐘を鳴らす

「本物のマスタースパークを見せてあげるわ。消し飛びなさい！」元祖マスタースパーク！」

幽香さんの傘からマスパ以上の極太のレーザーが放たれこちらに向かってくる

「こりゃ出し惜しみなんざしてる場合じゃないな。いくぜ！爆走符「ライダーズラン」！」

「二号！二号！V3！ライダーマン！X！アマゾン！ストロンガー！スカイライダー！スパーク！ZX！ZO！J！シン！BLACK！BLACK RX！」

俺は昭和ライダー達全員の名前を叫び俺の影から昭和ライダー達のバイクに乗ったシルエットが現れレーザーを押し戻しながら幽香さんに向かって突き進んでいく

「なっ!?!私のマスタースパークが押し返されてる!?!くっ！」

幽香さんはマスパを撃つのをやめライダー達の範囲外に逃げる

「待つてましたよ！こっちにくるのを！」

「!?!」

俺は幽香さんが避ける方向に先回りして跳びドラゴンロッドを振りかぶっていた

「ハアアアアア！」

「くっ！」

俺はドラゴンロッドを幽香さんにあと少しで当てられ幽香さんも避けきれないと
思ったその時

「がはっ!?!」

「!?!」

いきなり下から何かが飛んできて俺に当たると爆発し俺は下に落ちる

「私の楽しみを取ったのは誰?とつとと出てきなさい」

「キへへ、当たった当たった」

「次はあの女か」

そこにいたのは多数の屑ヤミー、ダスタードを連れたサメヤミー、バッタヤミーだつ
た

「最近噂の怪人共ね、まったたく、あの天人と竜宮の使いは何やってるのかしら」

その頃の天子と衣玖さん

天子達はアビスとライアに変身して屑ヤミー、ダスタード達とそれを指揮するライオ
ンクラゲヤミー、カマキリヤミーと戦っていた

『SWORD VENT』

「もうっ！なんなのよこいつら邪魔くさいわね！」

『SWING VENT』

「速く紀斗さん達と合流しなければならぬのに！」

「ガアッ！」

「お前達はここで始末させてもらおうぞ」

幽香 side

私は今紀斗に水爆弾を当てたサメの怪人と戦っている

バツタの方はさつき紀斗が戻ってきた瞬間に棒で吹き飛ばして向こうで戦ってる

それにしてもさつきからサメのくせに地面に潜り私を地面に沈ませようとしたりして非常にうっとおしい、例えるなら夏場の夜の蚊のようにうざったい

しかもこっちの攻撃は弾幕は当たっても意味は無いし物理攻撃は地面に潜って避けるしイライラする

「まったく、めんどくさいわね」

「キヘッ！死ねえ！」

私がつぶやいた瞬間私の後ろからサメが現れる

私はそれを殴ろうとした瞬間私が向いていた方向から何かが飛んできた

「キベツ!？」

「(#、^、)」

それは弾幕ごっこの前に幽香にうっとおしいと言われ落ち込んでいたカブトゼクターだった

カブトゼクターはものすごい勢いでサメヤミーに突進をかましサメヤミーは仰向けに倒れる

「あなたまだいたのね。私に何か用があるの？」

カブトゼクターは頷くと紀斗の方へ行きすぐ戻ってきて角にベルトをひっかけている、それをカブトゼクターは幽香に差し出す

「巻けってこと?ま、今は決め手も無いし仕方ないから付き合っただけあげるわ。」

「(≡▽≡)」

幽香は腰にベルトを巻くとカブトゼクターが自分からバックルにはまり幽香の姿が変わる

『HEN—SHIN』

(!これの使い方が頭の中に流れ込んでくる!)

幽香はカブトのマスクドフォームの複眼と造形の色が違うダークカブトマスクドフォームに変身した

「変身しただど!?!情報にねえぞくそつたれ!」

サメヤミーは予想外の出来事で苛立ちながらダークカブトに変身した幽香（以下D幽香）を殴るがまったく効いた様子は無い

「あら、予想以上に硬いのねこれ。でもちよつと動きにくいわ」

そう言うとD幽香はカブトゼクターの角を少し立てる

するとマスクドフォームの装甲が開いてゆく

「くそおお!」

「キャストオフ」

『CAST OFF』

『CHANGE BEETLE』

サメヤミーはD幽香に殴りかかろうとするがD幽香はカブトゼクターの角を反対側に倒す

その瞬間開いていた装甲は弾け飛びサメヤミーも同時に吹き飛ばされる

そしてD幽香はマスクドフォームから黒い体と胸に赤い紋様があるダークカブトライダーフォームになった

「ぐはっ!?!」

「さ、イライラさせられた分10倍返しにしてあげるわ」

「ぐっ、調子にのるな！」

「そんな攻撃じゃいつまでたっても当たらないわよ」

サメヤミーは水弾を何発も放つが弾幕ごっこをよくやる幽香にとつてはeasy以上簡単にかわせる

「それじゃいくわよ。クロックアップ」

『CLOCK UP』

D幽香が腰のスイッチを叩くと瞬間幽香以外の全てが止まっているように感じる

クロックアップで高速移動が可能になったD幽香はサメヤミーの顔にアッパーを決めさらに浮き上がったサメヤミーに空中コンボを決めていく

そして最後にサメヤミーの後頭部を殴り地面に叩きつけるところでクロックアップが切れる

『CLOCK OVER』

「がっ!?!うう…」

「何が起きたかわからないって顔ね。でもまだまだ私のお返しは終わってないわよ」

「ヒッ、ヒイイイイイイイイ!?!」

その後20分ほどD幽香の気がすむまで見せられないよ!な攻撃(拷問)が繰り返されサメヤミーは爆発するころにはもう真っ白に燃え尽きていた

紀斗 side

俺は下に落ちた後幽香さんのところに一回戻るとバツタヤミーと雑魚達を任せられ雑魚達を全滅させたらちようどカブトゼクターにベルトを渡してくれとせがまれ渡すとベルトを持って幽香さんの方に飛んでいった

(幽香さんにクロックアップが追加されるとかなんだそのチート)

「よそ見するとは余裕だな！」

「おつと危ない。」

俺はバツタヤミーの蹴りを避け一旦距離をとるとフォームチェンジする

「超変身！」

俺は紫色のカラーリングのクウガ タイタンフォームにフォームチェンジしナイフを出すそれがタイタンフォーム専用の大剣 タイタンソードに変化する

「姿が変わったらなんだ！オラ！」

バツタヤミーは俺の体にパンチや蹴りをくらわせるが俺は悠然とそのまま前に進む

「く、このおおお！」

バツタヤミーは電撃を浴びせてくるが俺はそのままバツタヤミーに向かって歩く

「くそつ！こつちに來るんじゃねえええ！」

バツタヤミーは少しパニックになりながら俺に飛び蹴りをくらわす

俺はそれを腹にうけ少しくの字になる

バ「へ、へへ、どうだこれなら「そんなもんか」へ？」

「この程度の威力しかないとはな。正直がっかりだ。すぐ終わらしてやる」

「だ、黙りやがれ！」

バツタヤミーは俺に殴りかかってくる、俺はタイタンソードを構えこっちに向かつてくるバツタヤミーの腹に思いつき突き刺す

「フーン！」

「が!? ああああ!？」

バツタヤミーは腹を突き刺されその突き刺されたところにクウガのマークが浮かび上がる

「ちくしよおおおおお！」

封印エネルギーを送られたバツタヤミーは爆発しセルメダルになりあたりに散らばる

「削除完了つと」

「紀斗さん! 無事ですか!」

「ああ、問題なく終わったよ。そっちの方にもいたようだけどそっちは大丈夫だったか?」

「ええ、こちらも問題なく倒しました。あとあの黒いカブト虫みたいなのはやつぱり…」

「ああ、幽香さんだよ。やれやれ、またチートが増えたな」

「ああ、あのサメあんな風に痛ぶられて羨ましい」

「そう思うのはお前だけだよまったく」

20分後

「ふう、久々にスッキリしたわ」

「幽香さん、そのカブトゼクター、どうします？ いらないうって言うなら別にいいですけど」

俺は変身を解き妙にツヤツヤした顔の幽香さんに聞く

「そうね、この子餌とかは必要なの？」

「え、別にいりませんけど」

「なら引きとってあげるわ、なかなか面白かったし」

「○(≡▽≡)○」

「よかったですね。カブトゼクター」

カブトゼクターは嬉しそうに辺りを飛び回り幽香さんもそれを優しそうな目でそれを見ている

「そういえばあなたたち結界の穴を探しにきたんだっただのよね？ 私はもう満足したから

行つていいわよ」

「わかりました。それじゃ俺たちはこれで」

「それではまた」

「次会つた時は覚えときなさいね！」

「うるさいわよ天人」

「あふん／＼／＼」

俺たちはそれぞれ別れを言うと（約1名石を投げられたが）その場を後にし結界の穴を探しに行つた

しかしその周りに穴は見つからず結局その日の成果は残党の1グループの討伐だけとなつた

財団X Zの研究室

「ふう、やつぱあの程度の奴らじや病み上がりとはいえ海堂を潰すのは無理か。しかも敵にダークカブトまで増えちまつたし。さて次はどのグループを動かすかな」

Gは一人そんなことをつぶやきながらモニターを見ていた

第二十六幕 思わぬ事故

俺が異世界にフランと遊びに行った次の日

永遠亭 紀斗の部屋前

「よしっそろそろ出かけるとするか」

「あ、紀斗さん今日も探索ですか？」

俺は今日も結果の穴の探索に出かけようとしてしているとトレイに何種類かの液体の入ったフラスコを乗せた鈴仙に話しかけられる

「ああ、今日は無縁塚辺りを咲夜さんと早苗と俺で探索するんだよ」

「この調子じゃあ本業に戻るのはまだかかりそうですね。この前も里の人にまだマツサージ屋は休みなのか？って言われちゃいましたよ」

「ははは、ま、少なくともこの事件を解決しないかぎりは本業に復活出来そうにないな。マツサージしている間は何の情報も入ってこないしその間に襲われたら他の人を守りきれぬ自信が無いし」

「ところでさっきから気になってたけどその液体は？」

「ああ、これは薬の材料ですよ。この前紀斗さんがもらった異世界の薬、あれの効果です

「ごかったから師匠の薬師のプライドに火がついたのと次は自分の薬だけで紀斗さんを全快させてみせるってずっと研究してるんですよ」

「嬉しいこと言ってくれるよ、まったく。体壊さないよう伝えといてくれよ／＼」

「ふふっわかりました。それじゃ探索頑張ってきて下さい」

「おう、行ってくる」

「さて、私も師匠にこれを持ってかないと」

「てゐー！」

「おっと」

鈴仙はてゐが張った縄を直前で避ける

「そんないつも引つかかる私じゃないのよ」

だが鈴仙が着地した瞬間その場所で足を滑らせる

「へ?」

「こんなこともあるのかと着地するであろう場所をツルツルにしておきました(笑)」

鈴仙は着地点で滑りそのせいで薬の材料は紀斗の方へ飛んでいく

紀斗「ん?大丈夫か?れいせ…」

俺はいきなり飛んできた薬の材料を避けれず全てかかってしまった

「あらら、びしょびしょだよ。！ か、身体が、身体が熱い！ぐ、うう」

俺は身体が異常に熱くなり床に倒れ身体を抑え悶える

「の、紀斗さん！大丈夫ですか！」

「やば！お師匠様連れてくる！」

「お願い！私は紀斗さんを見てるから！」

永琳の研究室

「鈴仙、戸はもう少し静かになって、てゐじゃない。どうしたの？」

「お師匠様！紀斗がやばい！」

「！ なんですって!?! てゐ、案内して！」

てゐは走りながら事情を説明し2人は紀斗と鈴仙のところに着いた

「し、ししょお〜」

「ポカーン

「なんでこんなことに」

同時刻 迷いの竹林前

「遅いですねえ、紀斗さん。今日借りてたDVD返そうと思ってたんですが」

「何かあったのかしらね」

早苗と咲夜は集合時間になっても現れない紀斗を心配していた

『ピピピ ピピピ』

「あ！紀斗さんから ピツ もしもし！大丈夫ですか紀斗さん！」
『すいません、私です。鈴仙です』

「鈴仙さん？紀斗さんはどうしたんですか？」

『実は思いがけない事態になっちゃって…』

「わかりました！すぐそつちに行きます！」

『えつちよつとまつ』プツツーツー

「さあ、咲夜さん行きますよ！紀斗さんのとこまで！」

「え？ちよつと説明しなさいよ」

「待っててください！紀斗さん、今行きますよおおお！」

「速っ!?待ちなさいよ！早苗！」

早苗はものすごい勢いで竹林内を走りまわる

「早苗！あなた永遠亭にどう行けばいいかわかっているの？」

「そんな私の奇跡でどうとでもなります！うおおおおお！」

3分後

「本当に着いちちゃった…」

「お邪魔します！」

紀斗の部屋前

早苗と咲夜は紀斗の部屋の前に着くと早苗が襖が壊れる勢いで襖を開ける

「紀斗さん！大丈夫ですか！」

「ふえ？」

早苗が襖を開け部屋を見ると何故か永琳の膝の上に座る5歳くらいの男の子がいた

早苗と5歳くらいの男の子の目が合う、その瞬間咲夜さんは能力を使っていないのに『世界』が発動されたかのような空間が出来上がった

「すいません、部屋間違えましたー」

早苗は静かに襖を閉めると頭を抱えてうなる

「あれ、ここ紀斗さんの部屋ですよね、なんで子供が？もしや隠し子いやいやそれは流石にないでしょ。だって永琳さんや永遠亭メンバーのお腹おつきくなつてないしまず年齢的に合わないし……」

「なんか頭痛くなってきたわ」

「あなた達何やってるの？入るなら入りなさいよ」

2人が頭を抱えているとちようどそこに何かのリストを持った輝夜が現れる

「入らないなら先に入るわよ」

「あつ説明をまだ」

「永琳、さっきの材料のリスト持ってきたわよ」

「あ、ありがとうございます姫様」

「廊下のお姉ちゃん達誰？」

「あのお姉さん達は私達の友達だよ」

「じゃあ僕もあのお姉ちゃん達と友達になれる？」

「ええ、きつとなれるわ」

永琳は膝の上に乗せている子に暖かい笑みで答えている

「あの、その子は一体？」

「その子は紀斗さんですよ」

「鈴仙とてゐ、あなた達そこにいたのとゆうかどういふ状況か説明してもらえらる？」

咲夜が声のした方を向くと鈴仙とてゐが正座をしながらそれぞれ首に『ドジってすいません』『イタズラしません』と書かれたプラカードを下げていた

「そうです！説明してください！一体誰の隠し子なんですか！それともつい魔がさしてどこかから連れてきた子なんですか！」

早苗が若干パニックになりながら鈴仙達に詰め寄る

「別に誰も産んでないし攫つてもないよ。さっきも鈴仙が言った通りあの子は紀斗さ」

「そのプラカードから察するにまたてゐがイタズラを鈴仙に仕掛けて鈴仙はそれを回避

するも転んだか何かしてその拍子に紀斗に薬が何かがかかったってとこかしら」「すごいですね。ほとんど正解ですよ」

「ねえ、お姉ちゃん達僕とダチになって！」

いつのまにか紀斗は永琳の膝からおり早苗達の目の前に来て咲夜と早苗に話しかけていた

「確かに紀斗さんの面影は残ってますし、友達をダチって言うのはあの人らしいですけど」

「あう」

(シヨタも中々いいわね)

早苗は紀斗の頬をつつきながらつぶやき咲夜はまた一つ新しい扉が開きかけている

「永琳、紀斗は記憶を完全に失ってるの？」

「ええ、仮面ライダーの情報は全部持つてるみたいだけど他の記憶は全部その当時の記憶まで戻ってるわね」

(なら今の紀斗はちゃんとした無垢な心を持ったシヨタ！ジュール！)

「どうしたんですか？」

「なんか変な感じがした」

いきなり悪寒を感じ周りをキョロキョロする紀斗に早苗は不思議がる

「それで、ダチになつてくれるの?」

「もちろんです! 私と紀斗さんはもう友達ですよ! …出来れば友達以上の関係になりたいですが」

「? 後の方なんて言つたの?」

「な、なんでもないですよ。ははは」

「じゃあお姉ちゃんの名前教えて! あとダチの証やろう!」

そう言つて紀斗は早苗に手を差し出す

「ダチの証? ああ! 弦太朗さんのあれですね! 私の名前は東風谷 早苗です。よろしく

お願いしますね、紀斗さん♪」

「うん!」

ビシッ、バシッ、グッ、グッ

紀斗と早苗は友情のシルシをやり紀斗は満面の笑みを浮かべる

「時よ止まれ」

カチ

瞬間咲夜は能力を使い時を止めかなりのスピードでデジカメを取り出し連射モードにする、まったくもって能力の無駄使いである

「そして時は動き出す」

紀斗「ひゃあ!」

能力が解除された瞬間連続シャッター音が鳴り紀斗はかなり驚く

「お、お姉さんなに? いきなり僕の写真撮って」

「ハアハア、泣き顔も中々」

(驚かせてごめんなさいね。あなたが可愛かったからつい♪)

「ひい!」

紀斗は生まれて初めて感じる得体の知れない恐怖で永琳の後ろに隠れ震える

「えーりん、あのお姉さん怖い」

「ほら、咲夜! 紀斗が怖がつてるじゃない! しかもあなた多分言ってることと思ってる

ことが逆よ!」

「くっ、シヨタに興奮して心の声をさらけ出してしまっなんて。まだまだ修行が足りない

いわね。でもその怯えた顔もまた ゴツ! あう」

「いい加減にしなさい、まったく」

また暴走しそうになる咲夜を輝夜が後ろから殴り気絶させる

「優曇華、てゐ、咲夜を縛つときなさい。いつ紀斗を襲うかわかったもんじゃないわ」

「了解しました、でも…足が痺れて動けません」

「だらしのないねえ、鈴仙。あたしは普通に立てるよ」

「てゐ、足、震えてるけど」

「こ、これは別に足が痺れてるのを我慢してる訳じゃ」

ツン

てゐ「ツ〜!?!」

鈴仙はプルプルしていたてゐの足をつつくとしてゐる声にならない悲鳴をあげ悶える
「しようがないわね、私が縛っておいてあげるわ」

輝夜は袖から取り出した鎖で咲夜をミノムシ状態にし部屋の隅に転がしておく
「姫様、なんでそんな物を袖から…」

「仕込み武器よ。こういうのは不意打ちにちようどいいからね」

笑いながら言う鎖の理由に若干鈴仙は若干引いてしまう

「うわあ、姫様の思考がいつの間にかかなりバイオレンスに…」

「紀斗さん！一緒に仮面ライダー見ましょ！」

「早苗姉ちゃんはお姉さんみたいに怖いことしない？」

紀斗は涙目上目遣いで早苗に聞いてくる

（くっ、これは確かに破壊力抜群ですね！ですが今は我慢！我慢です！）

「だ、大丈夫ですよ、私はあんなことしません」

早苗は必死に自分の欲望を抑え平静を保ち精一杯の笑顔を見せる、紀斗は若干悩むような仕草をしてからパツと顔をあげ笑顔で返事をした

「わかった！早苗姉ちゃんはダチだし信じる！」

そして早苗はそんな輝いた笑顔を見て少し興奮していた数十秒前の自分を殴りたくなつた

ー少女DVDセット中ー

咲夜を紀斗の部屋に放置し輝夜の部屋で早苗はちょうど紀斗に借りていたスーパーヒーロー大戦ZのDVDをセットし永琳の膝の上に乗っている紀斗の隣に座りリモコンの再生ボタンを押す

ー映画上映中ー

「よかつたわ、紀斗が普通にあなた達にも接してくれて」

永琳は紀斗を膝に乗せたままつぶやく

「どういうことですか？」

「紀斗ね、さっきこの状態になつたばかりの時は記憶が当時のものに戻つてたからここがどこかわからなくて私達のことも誰かわからなくてひどく怯えてたのよ。なんとか私達は紀斗の味方だつてことを伝えても最初は本当に5歳かつてくらい警戒されてたしね」

「それがどうやってこの短時間でここまで心を開いたんですか？」

「さつきこの部屋に来る前にてゐがツルツルにした床があるのよ。そこで紀斗、転んじやって泣きそうになったの。それを頭を撫でながらあやしたら心を開いてくれたのよ。この歳の紀斗は人からの愛情に飢えてたのよ」

「そういえば私達、まだ紀斗さんが幻想郷に来る前のこと全然知りませんよね」

「じゃあこの状態が治ったら直接教えてもらいましょう♪かかった材料の量からしても多分明日には戻る筈だしね」

「本当ですか！じゃあ今日こっちに泊まっていいですかね？明日紀斗さんが戻った時に一緒に聞きましょう！」

「いいわよ、ちゃんと逃げられないようにしなきゃね♪」

永琳と早苗は笑いいい女子トークに花を咲かせる

ついでにこの会話を紀斗は映画に夢中で聞いていない

ー映画鑑賞終了ー

「紀斗さん、面白かったですか？」

「ん、個人的には前作のスーパーヒーロー大戦の方がよかったですかな。まず戦隊側も持ち上げられるべきキョウリユウジャーより前作のゴースターズが完全に主役になっているしどうやって他のライダー、戦隊が来たのかっていう設定もわかんない。キョーダ

インもあんな簡単に退場させちゃったらみんなで宇宙キターの時の弦太朗達が倒した強敵って感じが薄れてる。そして一番はオーズや電王の声が違いすぎるよ！もう誰って感じじゃないよ！」

「……」ポカーン

永琳はここまで的確に感想や意見を述べる5歳児の紀斗に驚き言葉を無くしてしまふ、確かにこんな5歳児なら少なくとも同年代に友達は出来る確率はかなり低いだろう。そしてそんな紀斗に対して早苗は…

「まったくもってそうですね！イナズマンも出てくるのは5年後のヒーローの筈なのに何故か出てきますしキョーダインもあんな終わり方じゃ浮かばれませんよ！でもメテオの声は結構似てましたね。声やったのってゴーカイシルバーなのに違和感あまりなかったですよ」

「確かにこのパンフさつき出して見たけど見るまでわかんなかったもんね」

かなり同調していた、しかもいつの間にか紀斗は能力でパンフまで出している。しかしいきなりそこに外から何本もの鋭い針が飛んできて畳に刺さる

『!?!』

「ひっ!?!」

「誰！出てきなさい！」

庭の茂みから出てきたのはGが放っていたあの黒いバツタカンだった

「バツタカン？」

『まさか本当にガキになつてるとはな。俺のことも覚えてねえみてえだし、部下に聞いた時は耳を疑つたぜ？海堂』

『おら、お前らも出てきな！』

外からの扉を飛び越え3人の人影が現れる

1人は既に怪人態、カクタスオルフェノクに変身しており他2人は女性の姿をしている

「あら、意外と可愛いじゃない、もつと生意気そうかと思つてた」

「ハアハア、ああ、あの子に私のことをお姉ちゃんと呼ばせたい、ぎゅーってしたいわ」

「…鼻血拭きなさいよ」

「おつと失礼」

どうやら相手にも変態はいるらしい、外見が美人のため非常に残念な相手である

「だから言つたら！あの海堂がガキの姿になつてゐるってよ！」

『そんなもん自分の目で確かめなきや信じられるか。ともかく今は再確保のチャンスだしつかりやれよてめーら』

「「了解」」

瞬間女性Aはクレインオルフェノクに女性Bはジラフオルフェノクに変身する

「仕方ないわね、鈴仙あの鶴お願いできる？てゐは咲夜の鎖をほどいてから紀斗と姫様の護衛をお願い！」

「わかりました！」

「ラジャー！」

「早苗も一緒に、早苗？」

永琳は顔に影がさし俯いている早苗を不思議がる

「フッフ、紀斗さんを連れていく？また？フザけナいでホシいですネエ」

顔を上げた早苗は目からハイライトが消えておりまるで狂気に取り憑かれた時のフランのような顔をしていた

「さ、早苗？」

「生まれてきたことを後悔させてあげますよ。変身」

『レ・デ・イ フィ・ス・ト・オ・ン』

「その命神にカエしなさい。」

早苗はイクサ バーストモードに変身するとオルフェノク達に向かって走り出す

「わ、私も！変身！」

鈴仙も早苗の雰囲気驚くがすぐに我に返るとゾルダに変身しクレインオルフェノ

クに銃口を向ける

「さ、紀斗、あっちの方に逃げるのよ」

「やだ」

「紀斗、あれは本物の怪人なのよ。中にスタントマンが入ってるような偽物じゃないの。私はまたあなたをどこかに連れ去られるのは嫌なの！」

「えーりん、僕ね。今まで誰にもあんなに優しくしてもらったことないんだ。お父さんもお母さんも構ってくれないし幼稚園にも友達はいない。今日えーりんたちと一緒に映画観れてほんとに嬉しかった！だから、僕はここを守りたい！来て！モモタロス！」

紀斗が叫ぶと銀色のオーロラが現れそこから一つの光球が飛び出てくる、そしてそこに白い砂が噴き出てそれが光球の体となり桃太郎の赤鬼を模したイマジン、モモタロスが現れた

「あ？俺は紀斗に呼ばれたと思ったんだがよ。どこにもいねーじゃねーか」

「紀斗は僕だよ！」

「はあ!? 確かにお前から紀斗の匂いはするが。おい、あんたこれ本当に紀斗なのか？」

モモタロスは紀斗を疑うような目で見ながら永琳に尋ねる

「ええ、確かにこの子は紀斗よ」

「おいおい、マジかよ。時間軸でも乱れてんのか？良太郎が小太郎だった時より小せえ

じゃねえか」

「モモタロス！いいから僕に憑依して戦って！」

「いいのか？その体じゃちよいと無理するぜ？」

「いいの！終わったらプリンもあげるからお願い！」

「つたく、しようがねえな。その約束忘れんなよ。」

「紀斗……」

「やめないよ、僕は」

「わかってるわ、だから……がんばってきなさい」

「うん！」

瞬間紀斗の中にモモタロスが入り紀斗は髪が少し赤メツシユが入ったオールバックになり瞳も赤のM紀斗になる

そしてM紀斗は電王ベルトを腰に巻き赤のボタンを押してパスをセタツチする
「変身！」

『Sword Form』

M紀斗はそのままの身長にまで縮んだ電王、ミニ電王ソードフォームに変身した
「いくぜー！いくぜー！いくぜー！」

M紀斗はカクタスオルフェノクに向かってデンガツシャーを構え突撃していく

「行かせてよかったの？」

「ええ、どうせ言つても聞きませんしそれに、紀斗の大切なものを守りたいっていう信念の根本を少し見れましたから」

そう言つて永琳は愛おしそうに微笑む

「そう。それにしてもてゐるは遅いわね。鎖ほどくのかかりすぎでしょ」

その頃にてゐ

「あーもう！ 姫様鎖を固く結びすぎだよ！ 全然取れやしない！」

「早く外しなさい！ ショタが連れていかれる前に！」

てゐは固く結ばれた鎖に悪戦苦闘していた、変身して引きちぎればいいのに

早苗 side

「あのシヨタを私に寄こしなさい！」

「黙りなさい、さっさとその変態的なことしか言えない口聞けないようにしてあげますよ」

ジラフオルフェノクは槍でI早苗を貫こうとしながらも変態的なことを言うのをやめずI早苗はイクサカリバーでその槍を受け止めながらいつもとは違う静かな口調でジラフオルフェノクを睨む

「ふんっー！」

「くっ!?!」

「はあっ!」

「があっ!?!」

I 早苗はイクサカリバーで槍をかち上げがら空きになった腹を斬りつける

さらにI 早苗は仰向けに倒れたジラフオルフェノクの上にまたがりイクサカリバーをジラフオルフェノクの顔の上に持っていき

「紀斗さんをいやラシい目で見テイたのはコノ目でスね?」

「ぎやあああああ!?!」

ジラフオルフェノクの左目に思いっきり刺した

「私もね、紀斗さんを、連れてかれた時、本当に、悲しかったんですよ」

「がっ!?!やめっぎっ!?!いだぐっ!?!あぎっ!?!ぐうっ!?!」

I 早苗は言葉をくぎる度にイクサカリバーをジラフオルフェノクに突き刺しジラフオルフェノクは苦痛に呻く

「その時! 必死に! 明るく! ふるまってた! 私の! 気持ちが! あなたに!」

「うっ!?!もっ!?!やめっ!?!おねっ!?!がっ!?!しまっ!?!す!?!」

I 早苗は声が大きくなり突き刺す強さも増し急に立ち上がり

「わかりますかああああ!!」

「ぎゃあああああ!?!」

I 叫びと共にジラフオルフェノクを肩から胴までを斬りさいた、ジラフオルフェノクは青い炎に包まれI早苗はジラフオルフェノクから離れていく

「他の奴もさっさと倒しましょうか」

鈴仙 side

『SHOOT VENT』

「当たりなさい!」

「嫌ですよ!」

乙 鈴仙はギガランチャーを装備しクレインオルフェノクに撃つがクレインオルフェノクは腰から翼状のエネルギーを放出し砲弾を撃ち落とす

「さあ、あなたは私をとらえきれるかしら?」

そう言うところクレインオルフェノクはいきなり4体に分身する

「なっ!?!この!」

『残念、ハズレ』

乙 鈴仙は4体のうちの1体を撃つが簡単にかわされる

『今度はこっちの番ですよ!』

「ぐあっ!?!」

クレインオルフェノクの口から超音波が放たれ乙鈴仙はそれをもろに受けてしまう
「くっ、これ範囲が広すぎるからあんまり使いたくなかったけど仕方ないか」

『FINAL VENT』

乙鈴仙の前に鏡が現れそこからゾルダの契約モンスター、マグナギガが現れる、乙鈴仙はマグナバイザーをマグナギガの背中に装着させるとマグナギガは全身の砲身をクレインオルフェノク達に向ける

『まさか…』

「下手な鉄砲数撃ちや当たるとやっつですよ」

乙鈴仙がマグナバイザーのトリガーを引くとマグナギガの全ての砲身からミサイルやレーザーが飛び出しクレインオルフェノク達を容赦無く飲み込む

『うわあああああ!』

クレインオルフェノクは跡形もなく消し飛びそこには乙鈴仙と壊れた扉だけが残った

「あーあ、やっぱり扉も壊れちゃったか。また仕事が増えた。ハア」

M紀斗side

「どりゃあー!」

「なんだ、お前?身長そのままかよ、ダサイな」

M紀斗はデンガツシャーで斬りつけようとするがカクタスオルフェノクはそれを簡単に避ける

「るせー！んなこといいからとつとと倒されやがれ！こちとらプリンがかかってんだ！」

「ぶはっ！プリンで買取とかガキかよ！まあいいや、お前がとつとと倒されな！」

「そんなもん当たるかよ！」

カクタスオルフェノクは自分の体の針を放ちM紀斗を倒そうとするがM紀斗はその小さい体と身軽さをいかし次々と避けていきカクタスオルフェノクの真後ろに潜り込む

「これでもくらいやがれ！」

「ハウア!？」

カクタスオルフェノクは男の急所をM紀斗にサマーソルトで蹴られ地面に崩れ落ちる

「お、お前それは卑怯だろ」

「知らねえな。こつちにも事情があるからすぐ決めさせてもらうぜ！」

『FULL CHARGE』

M紀斗はパスをセタツチしデンガツシャーの刃にオーラエネルギーを溜める

「俺の必殺技Part2ダツシユ！」

「ちよつお前今はタンマ、マジでお願いだから！」

「知るかあー！」

「ぐあああああ!?!」

M紀斗は内股でプルプルしているカクタスオルフェノクをダツシユで横一文字に斬りさく

カクタスオルフェノクは悲鳴と共に青い炎に包まれ死んだ

『チツ全員やられちゃったか。仕方ねえ一度撤退「させると思う?」あー、そういやいたなあんた』

黒バツタカンは逃げようとする目の中には咲夜さんがナイフ片手にたたずんでいた

「これ以上相手を増やされるのも面倒だからここで散りなさい」

『あらら、こいつにもそれなりに手間かけたんだけどなあ』

咲夜はナイフを黒バツタカんに刺し黒バツタカンは小さな爆発を起こし機能を停止させた

紀斗はモモタロスが離れると同時に電王ベルトを外すとその場に座りこむ

「おいおい、大丈夫か？紀斗」

「うん、ありがとうモモタロス。おかげで僕逃げずに済んだよ」

「へっ、俺はただためにプリンのためによっただけだからな！そこ忘れんなよ！」

「うん、分かってるよ。はい、これがお礼のプリン」

紀斗は能力で皿に乗ったプリンとスプーンをモモタロスに渡す

「つたく、うめえじゃねえか」

「能力で出したやつだけどそう言ってもらえると嬉しいよ」

「紀斗さーん！大丈夫ですかー！って生モモタロスー!？」

「ああ、疲れたって赤鬼!？」

「微笑んでる姿もまたいいわね。ジュール」

そこに早苗達も合流し約一名以外はモモタロスの存在に驚いていた

「そんじゃ紀斗、またなんかあったら呼べよ！良太郎の次くらいには心配しといてやるよー!」

「うん！ありがとうモモタロス！またね！」

「モモタロスの生サイン、これは宝物に出来る！」

モモタロスは元の世界に帰り永遠亭にまた少しだけ平和が戻る

「鈴仙、てゐこの扉直しときなさいね」

「ハア、わかりました、やってきます」

「鈴仙が壊した扉じゃん、なんで私まで」

「あんたが咲夜の鎖解くのに時間かかりすぎたからよ」

「ちえー。ボソツ自分で縛ったくせに」

「聞こえてるし鎖は変身して引きちぎればよかつてでしょうが。まったく」

鈴仙、てゐるは扉の修理に行き輝夜はちゃんとやるかそれを見に行く

咲夜は危険なのでとつとと帰らせ残ったのは永遠亭メンバーと早苗だけになった

その夜

紀斗、早苗、永琳は紀斗を真ん中にして川の字で寝ていた

紀斗と早苗は既に眠ってしまい今起きているのは永琳だけ

そして永琳は眠っている紀斗の寝顔を愛おしそうに見ている

「むにや、ぼく…しよーらいえーりんのお嬢さんになる、むにや」

紀斗は寝言でそんなことを言つて永琳は少し顔が赤くなる

「もう…。おやすみなさい、私の未来の旦那さん」

永琳は紀斗の頬に軽くキスをしてその日を終えた

ちなみに紀斗が元に戻ったのは次の日の昼後だった

第二十七幕 巨大な敵

紀斗が元に戻った次の日

紀斗 side

俺は一昨日のメンバーで無縁塚に向かっていた

どうもあの葉の材料を浴びてからの記憶が無いが俺がそれでダウンしたらしくまたこのメンバーで向かっているというわけだ

「なあ、早苗お前やつぱり俺に何か隠し事してないか？昨日も急に永琳と一緒に俺の幻想郷に来る前の話を聞きたがるし」

「べ、別に何も隠してませんよ。ただ紀斗さんが倒れてる間に永琳さんと紀斗さんはどんな人生を歩んできたのか気になって聞いただけですし」

(嘘は言ってます、嘘は)

早苗はそんな風に言って誤魔化そうとするが目が泳いでるので隠し事しているのがバレバレである

「まあいいけどさ。なんか悩んでるなら言えよ、仲間なんだから」

「は、はい」

（言えない！紀斗さんが元に戻った時服が破れて咲夜さん以外全員が紀斗さんのあそこを見ちゃったから恥ずかしいって理由なんて。紀斗さんはお昼寝してたからまだよかったけど）

「ほら2人共もうそろそろ着くんだからそんなこと話してないで今回のプランを決めましょうよ」

「そうだな、だがその前にやることが出来たみたいだ」

俺はハードボイルダーを止め2人も地上に降り俺たちの前方に立っている白衣の3人組と向き合う

「お前ら、財団Xのメンバーだろ。戦闘員共はそこらへんに隠れてんのか？」

「戦闘員なんていないよ。ここに居るのは俺らだけ」

「俺たちや所詮捨て駒なんだよ。M様の部署からは成果が悪い奴からこんな風に実験役か戦闘員として駆り出される」

「俺たち、研究ほっぽり出して合コンとかしてたからな。そんな俺たちに戦闘員なんか勿体無いって他のチームに取られちゃったよ」

俺の質問になんか妙に落ち込んでる三人のうちの一人が答え続けるように他の二人も口を開く

「つまり自業自得ってことね。同情の余地もないわ」

「うるさい！僕らはお前らを倒すんだ！そうすれば僕らの株も給料も上がる！」

白衣の男達はメモリを取り出しそれぞれの生体コネクタに挿す

『T-R-E-X』

『T-R-I-C-E-R-A-T-O-P-S』

『P-T-E-R-A-N-O-D-O-N』

三人はそれぞれ恐竜系のメモリで変身する

「仕方ねえな、その3 on 3受けてたとう」

俺は変身音叉 音角を出し折りたたまれた音角の本体を展開させハードボイルダーに打ち付ける

「変身」

音角の音が鳴り響き俺は音角をそのまま自分の額にかざす

すると俺の体は紫色の炎に包まれる

「はああああああ、はあっ！」

俺は濃い紫色の体に赤い隈取のような装飾、音撃戦士と呼ばれる仮面ライダーの一人、仮面ライダー響鬼に変身した

「私たちも！」

「いきますよー！」

「変身!」

『レ・デ・イ　フイ・ス・ト・オ・ン』

早苗達もそれぞれイクサとオルタナティブ・ゼロに変身し紀斗はプテラノドンドーパントと、I早苗はティーレックスドローパントと、O咲夜はトライセラトップスドローパントと対峙する

「さてお前だけは見えたことが無いメモリだからな。俺が相手してやるよ」

「もう俺たちには後かねえんだよお!」

プテラノドンドローパントは上空に飛び口から超音波を発してくる

「後がないからヤケクソってやつか。よつと、そんな奴らに負けるほど俺たちは甘くないぜ。オラア!」

俺は超音波をよけ音撃棒　烈火を取り出し先端の鬼石に炎を灯しそれを連続でプテラノドンドローパントに向かって放つ

「オラオラオラオラオラア!」

「のわっ!?!ちよっ!?!熱っ!?!」

プテラノドンドローパントは烈火弾をくらい地面に落ち体についた火を消そうとして
いる

俺はその隙に音撃鼓　火炎鼓をベルトから外しプテラノドンドローパントに取り付け

ようとするが直前で上空に逃げられる

「チツ、また空に逃げたか」

「はあ、はあ、言つたろ。俺たちはなあお前らを倒さないともうお終いなんだよお！」

プテラノドンドーパントはそう言うと言うと体が大きくなり巨大なプテラノドンの上半身だけが浮いているようなビッグプテラノドンになった

「グワアアアアアア!!」

「おいおい、もう暴走すんのかよ。そうとうヤケになつてんな」

早苗 side

「可愛がつてやるよ！緑の脇巫女ちゃんよお！」

「黙つてその命、神に返しなさい、この顔面凶器」

「言つてくれるぜ！くらいな！」

「ガアアアア!!」

「くっ！いきなり咆哮ですか！こっちは耳栓ないんですから自重してほしいですよ！」

ティーレックスドローパントは咆哮による衝撃波を発し、早苗はそれを耐えイクサカリバーを取り出す

「これでもくらいなさい！」

「ぐあっ!?!」

I早苗はイクサカリバー ガンモードでティーレックスドーパントを撃つ、ティーレックスドーパントは銃弾をモロに受けのけぞる

「このっ！くそつたれがあああ！」

「うわ!?!危ないですね!そんな口で噛みつかないでくださいよ!」

ティーレックスドーパントはI早苗に突進しおおきく開かれた口で噛みつこうとしてくる

「ウガアアア!」

「がつつく男は嫌われますよ!」

「のわっ!?!」

ティーレックスドーパントはもう一度突進してくるがI早苗はティーレックスの右脚に足払いをかけ転ばせる

「ぐっ、くそ、あれ?やべえ!?!顔がでかすぎて立てねえ!?!」

ティーレックスドーパントはうつ伏せに倒れてしまい自分のでかい顔のせいで手が地面に届かず起き上がれなくなる

「あら、立てなくなっちゃったんですか」

そんな格好のティーレックスドーパントをI早苗は仮面の下で清々しいほどの笑みで見つめイクサカリバーをカリバーモードにし歩いてティーレックスドーパントに歩

み寄り

「えい♪」

可愛らしい声で戸惑いなど微塵も感じさせず思いつきりティーレックスドーパントの後頭部をイクサカリバーで斬りつける

「あぎやああああ!?!」

「ほらまだ終わりませんよ!」

そう言つてI早苗は連続でティーレックスドーパントの背中を斬りつける

「くそが! いい加減にしやがれええええ!」

「なっ!?!」

ティーレックスドーパントは叫ぶとティーレックスドーパントの体からティラノサウルスの体のような骨格が現れそこに無縁塚の機械や金属が吸いつけられ巨大な金属で出来たティラノサウルス、ビッグティーレックスになった

「こいつは扱いが難しいからあんまやりたくなかったが仕方ねえ。やられた分倍返し以上をやつてやるよ!」

「勘弁してくださいよ、こんなの聞いてないんですから。(忘れてただけ)」

咲夜 side

『SWORD VENT』

「はあっ!」

「ふんっ!」

○咲夜のスラッシュダガーとトライセラトップスドーパントのダイノソアクラブがぶつかり合いつばぜり合いとなる

「自分達が仕事サボってそれで捨て駒にされてヤケになって私達を倒そうとするなんてとんだ笑い話ね」

「うるせえ! 自業自得だっってことぐらいわかってるがよお、成果あげずに帰ったら今度こそ実験動物だ! そんなもんになるくらいなら玉碎覚悟でやってやらあ!」

「なら最初からその覚悟で仕事に取り組みなさいよ!」

『ACCEL VENT』

○咲夜がスラッシュバイザーにカードをスラッシュユさせると音声と共に○咲夜は高速で動きトライセラトップスドーパントを連続で斬りつける

「こんなもんかしらね」

「ぐ、うあああ!?!」

トライセラトップスはまだメモリブレイクはされないが斬られたダメージで地面に倒れる

「俺は…まだ…負けてねえええええ!」

トライセラトトップスドールパントの体がどんどん大きくなり二本足の巨大な角竜のような姿のビッグトライセラトトップスになった

「ゴアアアアア！」

「ちよつと、こんなデカイ奴への対処法私知らないのよ」

紀斗 side

「グワアアアア！」

「くそつ、烈火弾も効かねえし地面に近づいてこねえと音撃鼓はつけられねえし、厄介だな。ん？」

紀斗が他の2人の方も見ると2人の相手も両方巨大化していて2人共かなり苦戦しているようだ

（まだ俺はパワードイクサーみたいなのはサイドバツシャーくらいしか出せねえしこのままバラバラにやってちゃ戦況は悪くなる一方だな、一回合流するか。）

「早苗！ 咲夜さん！ 一旦合流しましょう！」

俺は大声で2人を呼び一箇所に集まりそれを追いかける形でビッグテイレックス達も集まってくる

「まさかこんな状態になるとは思ってたか？ 海棠」

「ゴアアアアア！」

「グワアアアア！」

「紀斗、何か手はあるの？」

「あるにはある、ただどこの状況的に少しの間だけ引きつけてもらう必要があるな」

「その少しの時間を稼げるかってことですね」

「何ココソコソ喋ってんだ＼ドゴン！　!? あれは：M様に渡されたメモリ？」

ビッググテイヤノの首あたりから一本のUの描かれたメモリが飛び出し3体の目の前まで飛ぶ

『UNION』

その音声がなると同時にメモリから3本の光の鎖のようなものが伸び3体に絡みつく

「なんだこりやあ!?　こんなの聞いてねえぞ！　放せ放しやがれえええ！」

「グワア！　グワアアアア！」

「ゴアアアアアア!？」

3体はどんどん鎖に引つ張られそしてユニオンメモリに触れた。その瞬間メモリから眩い光が放たれ紀斗達の視界が戻るとそこには3体の姿は無く代わりに1体の巨大な異形がいた

大きさはさつきの3体の倍はあり姿はビッググテイヤノの頭と翼、ビッググトライセ

ラトツプスの足以外が胴体となり右手はビッグティール렉クスの頭左手は尾、足もビッグティール렉クスの足という3体が合体したような異形が3人を睨んでいた

「おいおい、合体ってマジかよ。プトティラドーパントとでも呼びやあいなのかこれは」
「はわわわ、紀斗さん早くでかいやつ出してください。でかいやつにはでかいやつです！」

「わかつてるよつと！」

俺はサイドバツシャーとジェットスライガーを出し2人を乗せる

「紀斗さんは乗らないんですか!？」

「響鬼はこういう相手でもやれるしバイクに乗ると音撃鼓がつけにくいからな」

「グキヤアアアアアアア！」

プトティラドーパントは吠えながらこつちに向かつて歩き出してくる

「敵さんも待つちやあくれねえようだし早く行け！」

「グキヤアアアア!!」

プトティラドーパントは口からの超音波、胴体の角からエネルギー弾、両手足から瓦礫を飛ばし攻撃してくる

I 早苗とO 咲夜はそれぞれサイドバツシャーとジェットスライガーを走らせながら避けるが紀斗はその場から動かない

「紀斗さん!?なんで動かないんですか!」

「大丈夫だつて。さていつちよやるか。響鬼 紅」

瞬間紀斗の体から赤い煙が出たかと思うと今度は赤い炎に包まれ

「はああああああ、ハア!」

炎が消えるとそこには炎の気を全力まで高め全身を真紅に染めた響鬼紅になった紀斗がいた

「なめんなよ、プトティイラもどき」

紀斗は烈火に炎を灯し炎を剣のようにする

「うおおおおお!」

紀斗は烈火剣で飛んでくる瓦礫を切り裂きながら突っ込んでいく、超音波やエネルギー弾は避けたり響鬼の通常態の時よりも威力が増した烈火弾で相殺したりしていく

「こつちもいるわよ!」

「覚悟しなさい!」

I 早苗とO 咲夜はそれぞれサイドバッシュャー バトルモードとジエツトスライガーからミサイルを発射しプトティラドーパントを怯ませる

俺はその隙にプトティラドーパントの目の前にたどり着き脚に登り胴体に爆裂火炎鼓を取りつけ炎を消した烈火を振りかぶる

「音撃打 爆裂真紅の型あ!!」

「グキヤアアアア!?!グキヤアアアア!?!」

俺は爆裂火炎鼓を烈火で連打し清めの音をプトテイラドーパントに叩き込んでいく、しかし

「ガアアアアア!」

「ぐお!!」

型の途中でプトテイラドーパントは右手のティーレックスの頭で紀斗をくわえこみ噛みくだこうとする

「紀斗さん!」

「チツ、油断したな。安心しろ早苗!奥の手を使う!いくぜ、進化「ライダーエボリューション」!」

スペカを発動させると俺とI早苗の体が光り俺はディスクアニマルの鎧を纏った響鬼の最強フォーム、装甲響鬼へフォームチェンジしI早苗は青と金色を基本にしたライジングイクサにフォームチェンジする

「ふん、ぬりゃあ!!」

「グ、グギヤ…」

紀斗は無理矢理ティーレックスの口を開き拘束から逃れるとプトテイラドーパント

の目の前に降り装甲声刃（アームドセイバー）を自分の顔の前に構え鉤状の鏢を折りたたむ

「一撃で決める」

「鬼神 覚醒！」

紀斗のその声が装甲声刃により増幅され装甲声刃の刃に音撃波の刃が纏う

「タアアアアア！」

斬！

「グギャツアツ!？」

紀斗が装甲声刃を振るうと音撃波の刃が巨大になりプトテイラドーパントを袈裟斬りに裂いた

二つに裂かれたプトテイラドーパントは爆発し爆炎が晴れると割れた4本のメモリと元の3人が倒れていた

「さて縛っておくか」

紀斗は能力で鎖を出し3人を縛る

「悪い、2人共俺はこいつらを処理してくるから調査は2人でやってくれないか？」

「わかったわ、任せなさい」

「えっと、事情聴取はしますよね？」

「いや、どうせ答えようとしたらこいつら死ぬからな。俺個人でやらせてくれ」
「…わかりました」

紀斗はそのまま3人を引きずって無縁塚を後にする、その姿をI早苗は少し悲しそうに見ていた

(変身してもわかる。今の紀斗さんとても怖い目をしてた。まるでダークライダーのような怒りや憎しみを感じる目)

(紀斗さんのあんな目初めて見たな。あんまり無理しないといいけど)

「早苗、さっさと行くわよ」

「あ、すいません、今行きます」

紀斗は無縁塚から離れたところで変身を解き鏡とデイケイドライバーを出していた

『K A M E N R I D E D E C A D E』

デイケイドに変身した紀斗は3人を引きずりながらミラーワールドへ入る

ミラーワールドへ入り少し歩くとゾルダのミラーモンスター、マグナギガがおりその近くで俺は止まりライドブツカーをガンモードにして上に向けブラストのカードを挿入する

『A T A C K R I D E B R A S T』

「餌の時間だぞためーらあ！」

紀斗は上に向かってブラストを放つと近くの林や空、洞窟など様々なところからミラーモンスター達が集まってくる

このミラーモンスター達は外のレミアアや萃香達のデッキのミラーモンスターで放し飼いにしており2日に一回の頻度で俺が餌であるミラーモンスターのエネルギー球を与えている

「お前ら、今日は先着三体でご馳走があるぞ。」

俺はそう言うミラーモンスター達に鎖で縛った3人を見せる

『オオオオオオオオ!!』

モンスター達は歓喜の雄叫びをあげる

ここのモンスター達はほとんどが人間の味を知らない、それこそ知っているのはジェノサイダーの時に竜次のハーレムを喰ったベノスネーカー達3体だけである

モンスター達も最初は人間を襲おうとしたが全員紀斗に調k y : 教育させられ人間は襲わせないようにさせているからだ

「う……んは、ひっ!?!」

すると白衣の1人が起き眼前のミラーモンスター達を見て恐怖する

「ミ、ミラーモンスター!?!お前まさか俺達を食わせる気か!?!」

「当たり前だろ。だがお前らに一つ聞きたいことがある。お前ら幻想郷に来る前に何か

メモリでも使われたか？」

「だ、誰が言うか！」

「そうか、ならお前から早速「わかった！言う！言うから助けてくれ！」言ってみろ」

「俺たちは全員ここに来る前にSのメモリを使われるんだ。何の記憶かは知らないがそれを使われた奴は決められたことを絶対に喋ることが出来なくなつて頭を覗いても瞬間メモリの効果でお陀仏だ。さあ言つただろう！解放してくれ！」

「やだね」

「なっ!?ハメやがったのか！」

「俺は別に言えば助けてやるなんて一言も言つてない。お前が勝手に喋つてくれただけだ。それにこいつらもそろそろ我慢できなさそうだしな」

紀斗は3人を縛つた鎖ごとミラーモンスター達へ投げた

「助けっ!？」

『ギヤアアアア!』『オオオオオオ!』『シャー——!!』

「ぎやああああああああ!？」

「俺は…俺達の愛するこの世界を、俺の家族や仲間達を傷つけようとするお前達に情をよせてやるほど人間は出来てねえし、何より俺はお前達を絶対に許さない。」

紀斗はミラーモンスター達が3人を貪り食う様を見ながらそうつぶやく

『キシヤアアアア!』『グルルルル』『ガアアアア』

「なんだお前らもう食っちゃまったのか。ほれ食えなかつた奴らの分の餌だ」

紀斗はて手のひらからエネルギー球をミラーモンスター達の数だけ出しそれを食べたミラーモンスター達はそれぞれ自分が気にいったところへ帰っていく

紀斗はミラーワールドから出て変身を解くとスタッグフォンで早苗に電話をかける

『プルルルル プルルルルル ガチャ』

『はい、もしもし早苗です。』

「紀斗だ、こっちの処理は終わった。そっちはまだかかりそうか?」

『今のところは問題なく進んでますからこっちはもう少して終わりそうです。あの…紀斗さん、あまり無理しないでくださいね』

紀斗は早苗の言葉に少し笑みを浮かべ答える

「無理しないのは善処するよ、俺もそっちに行くから今日の探索が終わったら聞きたがってた俺の昔の話をしてやるよ」

『はい!待ってますよ♪』

「それじゃまた後でな」

早苗は電話越しにでもわかるくらい上機嫌になり紀斗はそれを聞くと電話を切りマシンディケイダーを出しまた無縁塚に戻っていく

そしてその日の探索は無事終わり紀斗は永遠亭で永琳や早苗達に自分の過去を話した

そして最後にこの世界に来て本当によかったということも話し皆はそのことを嬉しそうに聞いてくれた

俺は自分を受け入れてくれる人たちがいるということを改めて実感し俺達はその日を終えた

第二十八幕 発見

無縁塚の探索を終えた数日後

紀斗は朝、紫達と今日の探索場所をどこにするか相談しようと考えていた時突然思いついたことを口に出した

「そっぴやまだ占いを試してなかったな、やってみるか」

紀斗はそう言う占いと占いの準備を始める

「スキルコピー『手塚の占い』」

紫side

ハッイ、こちらの時間としてはおはようね。永遠の17歳八雲 紫よ♪

…何よその目は、スキマに落とすわよ！

まあそんなことは今はいいわ、今日はいつもなら紀斗がバツタカンやスタッグフォンで今日の探索の場所とメンバーを相談にくるのにまだそれが来ない

私は気になって紀斗の部屋にスキマでお邪魔する

「紀斗、いつもの時間に連絡がこなかったけど…何してるの？」

紀斗は畳の上に幻想郷の地図を広げその上に外の世界の50円玉を紐にぶら下げそ

れをじっと見ていた

「占いだ、今回の探索場所のな」

「へへ、あなた占いなんて出来たのね、意外だわ」

「これはライダーの1人のスキルをコピーしただけだ。後静かにしてくれ、気が散る」

「…なんかムカつくわね、その言い方」

「このスキルの持ち主の喋り方なんだ、許せ」

しばらくすると50円玉が揺れ反応を見せた

「！ 出た、場所は…中有の道だ」

「中有の道…確かにまだ調べてはなかったわね」

「紫、今回のここへの探索はいつものメンバー数だと必ず後悔することになる。いつも
の倍くらいで行った方がいい」

「あなたに呼び捨てされるのはなんか新鮮ね。わかったわ、今回は6, 7人でその探索
に行かせましょう」

「じゃあ悪いが他のメンバーを決めるのと連絡を任せていいか？ 集合場所は妖怪の山の
麓で」

「任せてちょうだい。集合時間は1時間後でいいわね？」

「ああ、頼む」

1 時間後 妖怪の山麓

3 人称 side

集まったメンバーは紀斗、霊夢、鈴仙、萃香、レミリア、フラン、美鈴の7人だった
「紀斗、あんた占いでここって出たそうだけどほんとに信用出来るのそれ？」

霊夢は疑うような目で紀斗を見る

「安心しろ、あのスキルの時の俺の占いは当たる」

「なんか霊夢さんのいつもの勘に似てますね」

「そういう霊夢の勘はどうしたんだい？」

「最近は全然ね、まったくこないわ」

俺たちはそんな雑談をしながら中有の道への移動し始めた

中有の道

中有の道は普段通り罪人達が屋台を開きほんの少しの賑わいを見せていた

「なんだ、いつも通りの光景じゃない。こんなところに流石にあいつらも隠れられないでしょ」

「…少し調べてみる。あと今日はここの屋台の食べ物を食べない方がいいぞ」

紀斗はそう言うのと近くの屋台のオヤジに話しかける

「なあ、おっさんここら辺で怪しい奴見なかった？」

「怪しい奴？見てねえな。それよかにいちゃん、たこ焼き買ってかねえか？」

「いや、今はいいわ。ありがとな」

紀斗は同じことを他の何軒かの屋台や少ない客に聞きその近くで立ち止まる

『スキルコピー』『モモタロスの嗅覚』

紀斗はモモタロスの嗅覚をコピーし辺りの匂いを嗅ぐ

（やつぱりな、ここの奴ら全員偽物か）

紀斗は一旦調べた結果を話すために霊夢達の元に戻る

「紀斗、何かわかった？」

「ああ、ここの奴ら全員人間じゃねえ」

「いやそれは大体予想出来ますよ。ここの屋台は全部死人が開いてるんですし」

「そういう意味じゃない。俺が言ってるのはここの奴らは全員敵つてことだ。」

『!?!』

「ここの奴らからは人間の匂いじゃなく虫みてえな匂いばかりしやがる。つまりここ

の奴らは全員ワームだ」

「ばれちまったか、にいちゃんやるねえ」

『!?!』

いつのまにか紀斗の後ろに最初の屋台のオヤジがおり全員はその場から飛び退く

「俺たちは人間より優れた五感を持つてるの知らねえのかい？」

オヤジはそう言うとうデムシの特徴を持ったワーム、ベルターワームに変身した

それを皮切りに周りの屋台の死人達や客全員が大量のワームサナギ態や数種の成虫態に変身する

『フーン！フーン！』

さらに屋台の影に隠れていたのかかなりの数のダスタード達も出てきて中有の道はかなりの数の敵で埋められた

「やっぱり占いは当たってたか！来い！カプトゼクターー！」

以前能力で出したカプトゼクターがジョウントを通って現れ紀斗の手に収まり他の皆もそれぞれのデツキやベルトを取り出す

『変身！』

『HEN—SHIN』『カポーン』

紀斗達はそれぞれカプト、バース、ガイ、ゾルダ、ナイト、王蛇、龍騎に変身する
「それじゃ先手は打たせてもらおうよ〜！」

『STRIKE VENT』

ガイ萃香（以下G萃香）は左肩のメタルバイザーにストライクベントのカードを投げ入れると契約モンスターのメタルガラスの頭部を模したメタルホーンを右手に装備す

る

そしてG萃香は能力の『密と疎を操る程度の能力』でメタルホーンと右手をビル程の大きさに変え屋台ごと敵を叩きつぶす

「そりゃー!」

『ぎゃあああああああ!?!』

G萃香はメタルホーンを叩きつけた体制のままメタルホーンを押しながら突進し敵を轢いてゆく

「萃香、もういいぜ。次はこいつだ」

「あいよ」

紀斗がG萃香を呼び止めるとG萃香はメタルホーンを手放しメタルホーンが消えると同時に何かを手渡される

「はあ、はあ、とんでもねえ攻撃してくれやがる。だがなんで突進を止…め…」

ベルターワームは絶句してしまった何故なら紀斗達が全員こちらに高火力系武器の銃口を向けているのだから

『FINAL VENET』『カポーン ブレストキャノン カポーン カポーン セルバースト』

紀斗達は全員一列に並んでZ鈴仙はファイナルベントでマグナギガを召喚し既に撃

てる状態になっておりその横でB霊夢はプレストキャノンでチャージ完了、紀斗はサイドバツシャーのバトルモードに乗ってNレミアアはジェットスライガーに乗りOフラインはギガントをR美鈴はGXランチャーをG萃香はギガランチャーをそれぞれ構え

『発射あー!』

全弾発射した

ビーム、砲弾、ミサイル、それらが敵たちを蹂躪し倒していく

気づけば敵は数体のワーム成虫態しかおらずサナギ態やダスタード達は全滅、中有の道はかなりボロボロになった

「くっ!こうなったら癩だがあいつを呼ぶしかないか。おい、あの被験体Bを連れてこい」

「わかった」

ビエラワームが中有の道の奥の方へと走っていくと同時に紀斗たちの前にベルターワームを含む4体のワームが立ちはだかる

「悪いが時間稼ぎくらいはさせてもらうぜ、にいちやん達」

「くそがつ!いきなり無茶苦茶な攻撃しやがつて!」

「俺達もワームじゃなかったら死んでたぜ」

「この戦力差だと1人でも倒せたら上々ってところですかね」

紀斗以外の6人は2人組になりそれぞれ一体ずつ対峙する

レミリア、フランペアVSセクテイオワーム

『SWORD VENT』

『TRICK VENT』

OフランとNレミリアはそれぞれソードベントでベノサーベルとウイングランサーを装備しさらにNレミリアはトリックベントで6人に分身しOフランを含む7人でセクテイオワームを取り囲む

「いくわよ!」

「さっさと倒してあげる!」

「そう簡単にやられるかよ!」

瞬間セクテイオワームはクロックアップで全てのNレミリア達とOフランを吹き飛ばす

「くっ!」

「うわっ!?!」

自分がOフランとNレミリア達を吹き飛ばしたのを見たセクテイオワームはクロック

クアッブを解除し自分の警戒を馬鹿らしく思い慢心し始めた

(そうだよ、こいつらはクロックアップのスピードにはついてこれやしない。何ビビってただ俺は。俺達はワーム、こいつらより優れた種族なんだ！)

その慢心が自身の敗北のきっかけになるとも知らず

『NASTY VENT』

「キイイイイ!!」

機械的な音声が届くと同時に上空に鏡が出現しそこからナイトの契約モンスター、ダークウイングが現れセクティオワームに超音波攻撃、ソニックブレイカーをあびせる

「がっ!?なんだこの耳障りな音は!？」

Nレミアアは吹き飛ばされた倒れた瞬間既にカードを入れていたのだ

セクティオワームがもし警戒を続けていたならNレミアアにカードを入れさせることを阻止出来ただろう、しかしセクティオワームは慢心し気づかなかった

「なっ?!離せ!離しやがれ!」

さらにNレミアアの分身2人がセクティオワームの両腕を封じセクティオワームはソニックブレイカーをあび続けているのでクロックアップも使えない

「決めなさいフラン!」

「オツケーお姉様！」

『FINAL VENT』

○フランの後ろに鏡が出現しそこから王蛇の契約モンスター、ベノスネーカーが現れる

○フランは飛び上がりベノスネーカーが噴き出した毒液の勢いに乗り身動きのとれないセクテイオワームに連続蹴り、ベノクラッシュを放つ

「はああああ!!」

「ち、ちくしよおおお!?」

セクテイオワームは爆発しNレミアの分身も消える

「おーわりっ」と♪

「相手が慢心してくれる馬鹿で助かったわね」

美鈴、鈴仙ペアVSランピリスワーム

「くそっ! 見えないうえにうっとおしい! イライラすんな、もう!」

Z鈴仙とR美鈴は最初から鈴仙の能力、『物の波長を操る程度の能力』で姿を見えないようにし拳による打撃やマグナバイザーによる銃撃を与えていた

鈴仙は以前紀斗がカブトに変身した時のクロックアップを見たことがある、そのスピードは幻想郷1のスピードを誇る文を簡単に捕縛出来るほどのスピードだ、

それをやられたら鈴仙達にはなすすべが無い、それをさせないために鈴仙は能力で自分達の姿を見えないようにし狙いを定めさせなくした

『STRIKE VENT』

ランピリスワームは音声のした方を探ろうとしたが鈴仙の能力で音がどこから聞こえたかも曖昧になる

ドラグクローを装備したR美鈴とギガホーンを装備したZ鈴仙はランピリスワームを挟む形で一直線状に向かい合いそれぞれのストライクベントからR美鈴は火炎弾をZ鈴仙は砲弾を撃ちだす

「なっ?!ぐわああ?!」

「もう一発!」

「ぐっ!」

2人の攻撃が当たりランピリスワームは怯みさらにそこにZ鈴仙のギガホーンで後頭部を殴られランピリスワームは意識が朦朧とし始める

「今です!美鈴さん!」

「わかりました!」

『FINAL VENT』

R美鈴の後ろから鏡が現れそこから龍騎の契約モンスター、ドラグレッターが出てく

る

R美鈴はドラグレッターと共に飛び上がりドラグレッターが放射した炎を纏いドラゴンライダーキックを放つ

「はあああああ！」

「がっ!?!」

ドラゴンライダーキックがランピリスワームを蹴り抜きランピリスワームは爆発した

「ふう、クロックアップを使われずに済んで助かりましたね」

「はい、私もさつきファイナルベントは使っちゃいましたから使われたら抵抗出来ませんでしたからね」

霊夢， 萃香ペアVSミユスカワーム

『カポーン ドリルアーム』

「くらいなさい！」

「おりゃー！」

「そう簡単にいくと思わないことですね！」

B 霊夢はドリルアームを装備しG萃香は拳で殴りかかるがミユスカワームは短く飛んだりしてその攻撃を避ける

「今度はこちらからいきますよ」

「くっ!?!」

「ぬわっ!?!」

ミユスカワームはクロックアップを使い2人を殴り飛ばす

(あゝ、確かにこりや反応は無理だね、なら紀斗に渡されたあのカード使うしかないか)
G 萃香は何度も殴られるが元々の鬼の頑丈さに加え恐らく龍騎系のライダーが一番打たれ強いガイの耐久力もあることで余裕そうに思考する

「ちよつと萃香、何か手は無いの? 流石にこんなずつと痛ぶられるのは私もイラつくんだけど」

「わかったよ、じゃさつそく」

『FREEZE VENT』

「かっ!?!」

G 萃香がメタルバイザーにカードを入れ音声で鳴った瞬間ミユスカワームは突然凍ったように身動きが取れなくなった

『カポーン クレーンアーム』

「そりゃ!」

さらにB 霊夢がドリルアームが先についたクレーンアームでミユスカワームを捕ま

え身動きできないようにする

「萃香！こいつのトドメ任せたわよ！」

「任せな！」

『FINAL VENT』

G 萃香の後ろに出現した鏡からガイの契約モンスター、メタルガラスが現れ同時にG 萃香の右手にメタルホーンが装備される

G 萃香はメタルガラスの肩に乗りそのままメタルガラスは猛スピードでミユスカワームに突進し突き出していたG 萃香のメタルホーンがミユスカワームを貫く

「ぎゃあああああ!？」

ヘビープレッシャーを受けたミユスカワームは爆散しメタルガラスはミラーモンスターを倒した時にでるエネルギー球が出ると思っていたがまず種族が違うワームから出るはずも無く少しがっかりする

「ふいー、助かったよ。お疲れさん。」

「グウオオ♪」

しかし主人である萃香にいたわられたのが嬉しかったのか嬉しそうに鳴くと上機嫌でミラーワールドに帰っていった

「…私もあんた達みたい पार्टナーがいるやつがよかったわね」

「ま、それは戦いが終わったら紀斗に相談した方がいいね」

「それもそうね。はあ、私も癒してくれるようなペットが欲しいわ。食費がかからない子オンリーだけど」

ちよつと龍騎系ライダー達が羨ましい霊夢であった

紀斗VSベルターワーム

『CAST OFF』『CHANGE BEETLE』

『CLOCK UP』

その音声が響いた瞬間紀斗とベルターワームは加速した世界で殴りあう

「ふっー」

「らあっー」

紀斗が右のストレートを繰り出すとベルターワームはそれを顔をずらして避け左足で蹴りを放ってくる

その蹴りを紀斗は左手で殴りその勢いのまま左足で回し蹴りを放つ

「ぐおっ!？」

「まだまだいくぞー!」

蹴られて地面に転がったベルターワームに俺は右足のかかと落としをくらわせさらに右足に力をこめベルターワームの背中を圧迫する

「ぐっうお!？」

『CLOCK OVER』

その音と共に俺とベルターワームのスピードは元に戻り普通の人間にも視認できるようになる

「すぐに終わらしてやるよ」

紀斗はベルターワームを蹴り上げるとカブトゼクターのボタンを押す

『1, 2, 3』

そしてゼクターホーンを元に戻し

「ライダーキック」

また傾ける

『RIDER KICK』

「があっ!？」

空中に蹴り上げられていたベルターワームはそのままエネルギーの充填された右足の蹴りをまともにくらい爆破した

「さて、俺は一足先に奥へ行った奴を追うか」

ビエラワーム side

俺は助っ人に連れてきた被験体Bを隠してあったゲートの洞穴から出て被験体Bを

連れて元の場所に戻ると言葉を失った

俺がこいつを連れてくるための時間稼ぎとしてそこに残った同僚4人が既に全員倒されていたらから

(馬鹿な!?!カブトはともかく他の奴らはクロックアップには反応出来ないはずだろ!?!なんでそれが数分もしないうちに全滅させられてんだよ!?)

俺はしようがなく被験体B専用のメモリを取り出す

「お、てめえ戻ってきてたのかってそいつは!?!」

紀斗 side

俺はビエラワームが連れてきた奴を見て驚いた

「おいおい、あの紅魔館の時以来まったく見ないと思っただら捕まっていたのかよ、犬っころ」

「……………」

被験体Bは以前紅魔館に薬を届けに行くさいにハウンドゾテイアーツに変身したあの二足歩行の狼だった、しかも体の右半分はほとんど機械に覆われていてかなり改造か何かされたのがわかる

「こいつは捕獲した妖怪を強化改造してサイボーグにした奴だ!そしてこいつのこの体だからこそ耐えられるメモリがこれだ」

『CHIMERA』

「ビエラワームはキメラメモリを狼の右肩の機械のコネクタに挿す
グツウルアアア!!」

狼の体は5mくらいの大さきになりその姿は様々なドーパントの特徴を無理矢理繋ぎ合わせたようなかなりチグハグな姿だった

「こいつは初期のT2メモリAからZまで全てのメモリの記憶が入っている!強さは一級品だぜ!」

狼、キメラドーパントはフアングの頭、バードの翼、右半分の胴体はメタル左半分の胴体はバイオレンス、右腕はジョーカー、左腕はスカル、足はアクセル、腰にナスカの刀、トリガーの片手銃を装備しているというツギハギだらけの姿だ

「グオアアアアアアア!!」

「さあやってしまえ!キメラドーパント!」

「グオオオオオオオオ!」

キメラドーパントは吼えビエラワームは俺たちを倒すよう指示し俺たちが身構える
とキメラドーパントは片手を振り上げビエラワームを潰した

『!?!』

「え?」

ビエラワームはキメラドーパントに叩き潰されそのままわけがわからないという顔で爆発し死んだ

「グオオオオオオオオ!!」

「なるほど、敵も味方もない、ほんとに暴走状態ってわけだ」

「全員でかからないと無理そうね」

「そのようね、しかしカオスな体ね。統一性がまったく無いわ」

「そういうメモリだからしようがないと思いますけどね」

「とにかくこのお祭りを楽しもうよ、このゾクゾクするお祭りを」

「なんかフランちゃん浅倉さんにどんどん似ていつてませんか？」

「元々そんな感じだった感はあるけどね」

全員それぞれ得物を話しながら構える

「さて荒れていくか！」

「グギヤアアアア！」

「ぬおっ?!手が伸びやがった!ルナか!」

キメラドーパントは右腕を伸ばしこちらに殴りかかる

「任せな!おりゃあ!」

G 萃香は伸びてきた腕をメタルホーンで真っ向から向かいうち拮抗する

「ぬううううりやあああああ！」

「グガッ!?グウウ！」

G 萃香はキメラドーパントの右腕を殴り飛ばしキメラドーパントは右腕を戻すと同時に左手で腰の片手銃で撃ってくる

『SHOOT VENT』

『SHOOT VENT』

「やらせませんよ！」

Z 鈴仙はギガキャノンとギガランチャーを装備し連続で撃ちキメラドーパントの弾丸を全て撃ち落とす

『カポーン カッターウイング』『GUARD VENT』

「はあっ！」

「ふっ！」

B 霊夢とNレミアアがカッターウイングとウイングウォールで飛びドリルアームとウイングランサーで斬りつけるがメタルとバイオレンスの体にはかすり傷程度の傷しかできない

「グルルル、ガアッ！」

「ぐっ！寒いじゃないの！」

「ウザい攻撃をしてくるわね！」

キメラドローパントは背中の翼で上空に飛び口からアイスエイジの氷点下の息吹とウエザーの吹雪を繰り出す

その攻撃で2人は地面まで押し戻され乙鈴仙の砲弾も届かない

「グオオオオ！」

キメラドローパントは吹雪と息吹を止め今度は左腕を伸ばし殴ろうとしてくるしかもその腕はヒートの炎でかなりの熱量を持っているといういらぬオマケ付きだ

『SWING VENT』

「やあっ！」

○フランはエビルウィップをキメラドローパントの左腕に電気を流しながら叩きつける

「グウウウウ!?!」

キメラドローパントは予想していなかった電撃の痛みを怯み一瞬体が硬直する

「本日二度目の活躍だ!でかいもんにはでかいもんだ!ぶちこむぜ!」

そこにギガントを担ぎながらサイドバッシャー バトルモードに乗る紀斗が全弾発射する

「ガアッ!」

全てのミサイルがキメラドーパントに当たり爆煙でキメラドーパントの姿が見えなくなる

「これなら少しは、なっ!?!」

しかしキメラドーパントに当たったかのように見えたミサイルは全てキメラドーパントが張ったバリアによつて防がれていた

「くそつ、クイーンのパリアか! 厄介だな」

「ガアツ!」

「消えた!?!」

「一体どこに…!」

キメラドーパントはゾーンでその場から消え全員見失つてしまう

「! 紀斗後ろだ!」

「グウオウ!」

「ぬおっ!?! クロックアップ!」

『CLOCK UP』

キメラドーパントは紀斗の後ろにいきなり現れ紀斗をサイドバツシャーごと叩き潰そうとするが紀斗はクロックアップを使いキメラドーパントの上に駆け上がり頭の真横まで登る

「これならバリアも張れないな。」

『1, 2, 3』

「ライダーキック」

『RIDER KICK』

『CLOCK OVER』

紀斗がライダーキックを放ちキメラドーパントに当たったと同時にクロックアップは切れキメラドーパントはまるで殴られたかのように横に吹っ飛ぶ

「少しは効いたか？ 犬っころ」

「グウウウウ!!」

しかしキメラドーパントは今の攻撃でもあまりめだった外傷はなくむしろ怒らせてしまったようだ

「グオオオオオオオオオ!!」

「おいおいなんて吠え声だよ、モンハンの轟竜かあいつは」

「紀斗、今のままでとジリ貧よ。何か手はないの?」

キメラドーパントの吠え声に俺たちは全員怯んでしまう

「一応あるぜ。俺のライダーエボリユーションを使えば原作に最強フォームがあるやつはそれになれるからな。ただし制限時間は5分、そこで効果は切れる」

「あんたが私と初めて戦った時のあれね。わかったわ」

「全員今の会話聞いたか？」

『コクリ』

「そんじゃいくぞ！進化【ライダーエボリューション】！」

紀斗、レミリア、霊夢、フラン、美鈴の身体が光りその光が収まると紀斗はカブトハイパーフォーム、霊夢はバースデイ、レミリア、フラン、美鈴はナイト、王蛇、龍騎のサバイブになる

「さて最終ラウンドといこうか、犬っころ」

「なんかごちやごちやしてて動きづらいわねこれ」

「やっぱり何度なつてもいいねこれは。力が溢れてくる」

「私ちゃんと使えますかねこれ？」

「ま、そこは頑張って使いこなすしかないわね」

キメラドーパントを最早無視して自分たちの強化フォームを見て感想を言っている
霊夢達、流石幻想郷の住人常識にとらわれない

「グオオオオオオ!!」

そんな隙を見逃す筈もなくキメラドーパントは手や口からロケットのミサイル、オー

シヤンの水弾、ヒートの火球を放ってくる

「負けないわよ！」

『セルバースト』

『SHOOT VENT』

「こつちもね！」

「射撃はあまり得意じゃありませんが！」

「強化フォームばかりにいいカツコはさせません！」

B 霊夢は胸のブレストキャノンからNレミアSとR美鈴SはダークバイザーツバイとドラグバイザーツバイからZ鈴仙はギガキャノンとギガランチャーからそれぞれ砲弾やビーム、光弾を放ちキメラドーパントの攻撃を撃ち落としていく

そしてその時俺はパーフェクトゼクターを取り出し4体のゼクターを装着させていた

『KABUTO POWER THEBEE POWER DRAKE POWER

SASWORD POWER』

『ALL ZECTOR COMBAINE』

「準備は整った。皆、俺はいけるが皆はどうだ？」

「いつでもいけるわ」

「私も大丈夫です！」

「問題ないわ」

「祭りもクライマックスだね！」

「トドメの方は任せましたよ！」

「あたし達は決め手が無いままだからね、頼んだよ」

「そんじやあいつちよいくか！」

俺はカブテクターを展開したキオン粒子の翅でキメラドーパントに向かって飛び、
B
霊夢もカッターウイングで同じように飛ぶ

『『FINAL VENT』』』

サバイブ形態の3人はそれぞれの強化された契約モンスターが変形したバイクに乗
り走る

さらにNレミアSの乗るダークレイダーの機首からビームが出てキメラドーパ
ントの動きを封じる

「がっあつ!？」

しかしキメラドーパントはまたクイーンのバリアを張り攻撃を防ごうとする

『セルバースト』

「ブレストキャノン、シューート!!」

「たあああああああ！」

「くらえー！ー！！」

キメラ「グガッ!?」

だがそのバリアにB霊夢のセルバースト、R美鈴Sの乗るドラグランザーの火球、OフランSの乗るベノヴァイパーの毒液の竜巻を受け無惨にも砕け散った

『MAXIMUM HYPER TYPHOON』

「いくぜ！マキシマムハイパータイフーン!!」

「かっ!？」

『はあああああああ!!』

キメラドーパントは胴体を横一文字に斬られさらに腹に正面からNレミアS、右斜めにR美鈴S、左斜めにOフランSにバイクで突っ込まれ貫通された

「ガッガッアアアアアアアア!？」

キメラドーパントは爆発しその場には倒れた狼と壊れずに落ちたキメラメモリだけが残った

「…狼、お前はまだ生きていたいか？」

紀斗は倒れた狼に向かって聞く

「……」

その質問に対して狼はゆっくりと弱々しく首を横に振る

「なら、今楽にしてやる」

『DRAKE POWER』

『RIDER SHOOTING』

紀斗はパーフェクトゼクター ガンモードのドレイクパワーのライダーシューティングで狼の体を破壊した、塵も残さず

するとちょうど狼が倒れていた場所から透けた最初の機械がついていない状態の狼が現れ奥の方に歩きだしこちらを向くと着いてこいという風に手招きする

俺たちがそれに着いていくと狼は途中で急に止まり横の壁を指差す

「……この壁映像だわ、中は洞穴よ。」

「ホログラムということはそこがゲートつつうことか。ありがとよ、狼、礼を言うぜ」

狼はニツと笑うとそこから更に奥へ死者のいく三途の川へと歩いていった

最終章 最終決戦

第二十九章 止まらない狂気

博麗神社

紀斗 side

俺たちが奴らの出入り口を見つけた後俺はゆかりんに電話をしそのことを伝えた

ゆかりんは博麗神社で一度戦力を集めると言うと言博麗神社に繋がるスキマを開きひとまず俺たちはスキマに入り変身を解く

他の皆が博麗神社に入っていく中俺だけは入らずワイザードライバーを出しテレポートルングをはめる

「?お兄ちゃん入らないの?」

「ああ、俺は少し行くところがあるからな。大丈夫、少ししたら戻ってくるから」

『テレポート プリーズ』

それに気づき不思議に思ったフランが話しかけてくるが俺は少ししたら戻ると言いテレポートを使ってその場からいなくなった

「行っちゃった…、まあお兄ちゃん少ししたら戻って言ってたしだいじよぶだよね!」

永遠亭

俺はテレポートで永遠亭に着き永琳の部屋に行く

「永琳、いるか？」

俺は永琳の部屋の襖をノックして永琳がいるか聞く

「ええ、入っていいわよ」

返事があつたので俺は襖を開け部屋に入る

「紫から聞いたわ、財団Xのアジトにのりこむんですってね」

「…ああ」

「本当は行かせたくないけど、止めても無駄よね」

「悪いな、こんな自分勝手な男だよ」

「いいのよ、その自分勝手に私たちを、私たちの世界を守ろうとしてくれてるんだから」

「永琳…」

俺は永琳を強く抱きしめ永琳も俺の背中に手をまわし抱きしめあう

「絶対…絶対帰ってくるからな！」

「ええ、待ってるわ。またあんな思いはさせないでね」

「ああ、俺ももうお前の悲しい顔は見たくないからな。守ってみせる、俺を受け入れてくれこの世界を」

俺は永琳と見つめ合ってから軽くキスをする

「じゃあ行ってくるよ。他にも行くところがあるから」

「ええ、行つてらっしゃい。私の愛しい人」

俺は名残惜しいが永琳を離し永遠亭を出て次の場所へと向かった

10分後 博麗神社

博麗神社の境内には最初にライダーの変身ツールをもらったメンバーと紫、幽香、大妖精、雛が揃っていた、

ちなみに大妖精はチルノが1人突っ走らないようなストッパーで雛はにとりが自分でデツキを開発したせいで余ったG3-Xの装着者になったからこの場にいる

「遅いわね、何やってるのよ紀斗は」

「本当に紀斗は少ししたら戻るっていったの？フラン」

「うん、確かにそう言ったよ」

「流石に1人で乗り込むほど馬鹿じゃないと思うけど」

全員まだ来ていない紀斗に少しながら不満を言う

「悪い皆待たせた。」

「紀斗、その後ろのメンバーは何？」

そこへ紀斗が戻って来たが後ろにはリグル、ミステリア、ルーミア、パルスィ、勇儀、

聖、豊聡耳神子、布都、屠自古がいた

「少しでも人員は必要だと思つてな。俺と俺が放つたゼクター達が選んだメンバーだ、全員使い方は教えてあるから心配ない」

「チルノちゃん達だけに無理はさせないよ！」

「私たちも戦えるつてとこ見してあげるよ！」

「助っ人なのかー」

「まつたく、こんな状況でもポジティブでいけるその精神が妬ましいわ」

「まあまあ、暗くなつてちや勝てるもんも勝てなくなつちまうよ」

「そうですよ、明るい方がいいことも多いですしね」

「ふははは、全て我にお任せあれ！」

「ま、とりあえずやれるだけやってやんよ」

「ふふふ、久しぶりに腕がなります」

「いきなり人員追加つて……とんだドツキリね。まあいいわ。このスキマに入つてちようだい」

クパア

紫は中有の道へのスキマを開き全員そこに入つていく

中有の道 出入り口の洞穴前

「ここにその出入り口があるのね」

「ああ、ホログラムか何かで入口を隠してるが」

紀斗が目の前の壁に触れようとするがその壁はそこに何も無いことの証明のように紀斗の手がすり抜ける

「見ての通りだ。多分これもメモリか何かの能力だろうな」

俺はそう言ってそのまま洞穴に入り他の皆もそれに続く

洞穴はほぼ一本道だが急に開けた場所に出る、しかしその景色は何も無い草原が広がっていた

「紀斗、これがあんたの言ってた景色ね」

「ああそうだ。そしてこれも多分メモリの力だな。近くにメモリを発動させてる装置があるはずだ」

「しっかしすげえ再現力だな、てつきり外に出たのかと思っちゃったぜ」

紀斗達はその装置を探すが見当たらない、どうやら装置自体もこの景色に隠されているようだ

しかも結界の穴まで隠されているせいであるのはわかるがどこにあるかわからないという状況だ

「仕方ねえ、こいつを使うか」

『ETERNAL』

紀斗はエターナルのT1メモリを出しあの爆弾のようなかたちの球体を出しエターナルメモリを挿す

『ETERNAL』

瞬間その球体を持った紀斗を中心にエターナルの効果を持った膜が半円状に広がっていき半径300mくらいで周りの景色が小さめの野球場くらいはある薄暗い洞窟に変わる

「景色が変わった!?!なんで!?!」

「チルノちゃん、多分というかどうかどう考えても紀斗さんの使った装置のせいだと思うんだけど」

「なるほど、わからん!」

「ええ〜」

「自信満々に言うことじゃないよね…」

景色が急に変わったことに皆が驚くがチルノだけはよく仕組みを理解していないようだ

「おい俺たちの入ってきた道の隣にその機械が埋め込まれてたぞ!」

甲の言った場所を見ると確かに紀斗の使ったのと同じ球体が絵や写真で出来たSの

描かれたメモリが挿さった状態で壁に半分埋まっていた

「S、か。だがこいつは財団の奴らが言ってたメモリじゃなさそうだな」

「そうだろうな。ま、抜いといた方がいいだろ」

甲がSのメモリを抜くと俺も球体からエターナルメモリを抜く、これでまたメモリの使用は出来るようになったが景色が元に戻らないとこを見るとやはりさっきのメモリがああの景色を出していたようだ

「とりあえず鳴らしてみるか」

『SCENE』

「シーン、場面や風景の記憶みたいね。まあ今は先にあの穴のロックをこじ開ける方が先だけれど」

甲がメモリを鳴らすとシーンという音声で鳴り紫が解説をしてから虹色の膜にロックされている穴を見る

「任せろ、目には目を、キーメモリにはキーメモリをとてな。だけど全員俺がこじ開けた瞬間戦闘になると思うから変身しとけ」

俺がそう言うのと全員が自分の変身ツールを出し変身する準備をする

俺もロストドライバーを腰に装着し今度はT2メモリのエターナルメモリを出す

『変身（っ！）』

キイイイイン『HENS HIN』×9『カポーン』『フレイム プリーズ』『L・i・O・N ライオン！』『チェンジ ナウ』『レ・デ・イ フ・イ・ス・ト・オン』『KAM EN RIDE DIEND』『ETERNAL』

全員が変身を終えそれぞれの得物を手にする

大妖精は紫と一緒にスキマに入り心配そうにこちらを見ている

「それじゃいくぜ」

俺はキーメモリを出し武器のエターナルエッジのマキシマムスロットにキーメモリを挿す

『KEY MAXIMUM DRIVE』

「はあー！」

俺はエターナルエッジを膜に突き刺し横に捻る

「ロック、解除」

穴を塞いでいた膜は消え膜の目の前にいたキードーパントは驚いた動作をしていて他には何人かの白衣の研究者がいて今の部屋は小学校の教室くらいの大きさだ

「な、なんでここがばれ…。」

『VIOLENCE MAXIMUM DRIVE』

「ぐああっ?!

」開戦のゴングだ」

紀斗はバイオレンスのマキシマムドライブでキードーパントを殴り飛ばしエターナルエッジを構える

「俺たちに喧嘩売ったこと後悔させてやるよ!財団X!」

紀斗たちはまず最初の部屋にいた連中を全員倒すと(全員変身したのはキードーパントだったから楽勝だった)一本だけあった広い通路を突き進んでいく

結界は紫が既に塞ぎ奴らが幻想郷に入りこむ心配は無くなった、これで防衛も気にせず思いっきり暴れられるというものだ

紀斗達が通路を進んでいくと体育館くらいの広さの壁も床も白い何もない部屋に出た、そしてそこには1人悪魔の飾りが付いた奇抜なシルクハットをかぶった1人の男が胡座をかいて座っていた

「よお、M。あの時の借り返しに来たぜ」

「ハハッ♪意外と来るのは早かったねえ、僕的にはもう少しかかると思ってたんだけど」

「悪いがてめえの予想通りになるなんてのは二度とごめんだからな」

「そうかい、そんなこと言うならまた痛い目を見てあげよう。変身」

『CRAZY』

Mはかぶっていたシルクハットを一度取り仮面ライダーダークレイジーに変身するとまたシルクハットをかぶる

「全員狂っちゃいなよ！クレイジーワー「今だ！」へ？」

『ACCEL MAXIMUM DRIVE』『CLOCK UP』×9 『ACCEL VENT』

「ふっ！」

瞬間紀斗はアクセルのマキシマムドライブでカブト系ライダー達（ダークカブト幽香、ザビー聖、ガタツクリグル、ドレイクミステリア、サソードルーミア、キックホップ、パーパルスイ、コーカサス豊聡耳神子、ヘラクス布都、ケタロス屠自古）はクロックアップでO咲夜とO文はアクセルベントでD藍はデイエンド自体の加速能力で高速移動でMに接近し

「ライダーステイング！」『RIDER STING』「ライダーキック！」『RIDER KICK』「ライダーシューティング！」『RIDER SOOTING』「ライダースラッシュ！」『RIDER SRASH』「ライダービート！」『RIDER BEAT』

『CLOCK OVER』×9

まず高速移動が1番速いクロックアップを使うカブト系ライダーの9人はそれぞれ

の必殺技をクレイジーに放つ、クレイジーは吹っ飛んでいきこれだけでもかなりの大ダメージだがまだ終わらない

「がっあ!?!」

「ふんっ!」「とりやあ!」

吹き飛ばされたクレイジーにO咲夜とO文のスラッシュユダガーによる剣撃が叩きこまれ

「たあ!」

「かっ!?!」

D藍のアッパーがクレイジーを打ち上げる

「どりやああああ!!」

「かっあああああ!!」

トドメに紀斗が右足に集められた赤いエネルギーを飛び回し蹴りでクレイジーに叩き込む

クレイジーは壁に激突し壁はかなり陥没する、クレイジーの変身は解け元のMに戻っていた

「クレイジーの弱点はクレイジーワールドを発動する前と視認できない程のスピード、そして範囲外からの攻撃。今回は超スピードでやらせてもらったぜ、後俺は別に1人で

てめえを倒すとは言つてねえからな」

「ぐふっ、ふふっなかなか汚いね、君も充分悪の組織でやってけるよ」

「死んでも入るかよ。命までは取らねえ。俺たちは先に進むぞ」

「ふふっそう簡単には行かせないよ。出ておいでマスカレイド達」

紀斗が奥の通路に進もうとするとするとMの声を合図に奥の方からマスカレイドの大群が出てくる

「面倒だな、いいぜまとめぶっ飛ばしてやる」

「へっ、さつき暴れられなかつた分思いつきりやつてやるよ!」

マスカレイド達が出てきたことで紀斗はため息を吐きながら再び戦闘態勢に入り響鬼勇儀（以下H勇儀）を筆頭に今の戦闘に参加しなかつたメンバー達も戦闘態勢に

紀斗達がマスカレイド達との戦闘に入ろうとした時Mは懐から別のメモリを出し自分の右腕に挿した

『SCAPEGOAT』

その音声が鳴った瞬間マスカレイド達の何人かがいきなり吹っ飛んだ

『ぐああっ!?!』

1体は刺されたように1体はエネルギー弾をくらったように8体は打撃をくらったように3体は斬られたように吹っ飛ぶ

13体それはちょうどクレイジーに与えた攻撃回数とまったく同じ数、しかも同じような攻撃によるダメージを受けている

「まさかっ!?!」

紀斗はさつきまでMが倒れていた場所を見る、そして自分の目を疑った

「ハハッ♪やつぱり便利だねえ、このメモリ」

さつきまでのボロボロだった姿が嘘だったかのように無傷の状態でこちらを見て笑っているMがいたから

「てめえなんでっ!?!」

「あのマスカレイド達を見る限りじゃマスカレイド達にさつきまでのあなたのダメージを肩代わりさせたと考えられるけど」

「ご名答、その通りさ妖怪の賢者さん♪このスケープゴートメモリの記憶は身代わり。自分の受けた傷を他人になすりつけることが出来る。ま、味方にしかなすりつけられないけどね」

「まさかそんなふざけた能力のメモリまで持つてるとわね」

「ま、つまりは先にこいつらを全滅させる必要があるってわけか」

「ふふふ、でもさつきのはさすがに僕でも頭にきちゃったなく、なにせ僕の十八番を発動させる前に僕をズタバロにしちゃうんだもの。だから…君達には僕のとっておきを見

せてあげるよ」

そう言うとうMは懐から金色のメモリを取り出す

「僕はね、まだこの世界の全てを知らないんだよ。全てを知りその全てをメモリという形に表すことで僕はやっと一つ上の段階へ進めるんだ。僕はまだ人間止まり、だからこそこのメモリが僕の今の最高だ」

『EMPEROR』

「まだ僕は2本以上を一人の体で使えるメモリを作れてないからねだからこそその直挿しだ！」

Mはロストドライバーから抜いたクレイジーメモリとエンペラーメモリを自分の身体に挿す

「うおおおっ！」

Mは紫色のファンングのように刺々しい身体に二つの黄色い目、さらに赤いアリエスゾディアーツのようなマントと頭には金色の豪華な冠、その中心にはさっきまでのシルクハットが乗っている、手にはクレイジーの時とは違いメモリスロットの穴がかなりの数付いている豪華な杖を持っている

クレイジーエンペラードープアントに変身した（以下CED）

「これが狂気の皇帝、クレイジーエンペラードープアントさ」

そしてMがCEDに変身した瞬間部屋全体がどす黒い色の空間、クレイジーワールドに塗り替えられ俺の変身が解ける

『!?!』

「なんで変身が解けてっ?!」

「エンペラーはメモリを使う相手にならほぼ最強の能力を持っているのさ、自分より格下のメモリならそのメモリの機能を全て停止させる。そして自分が認めたメモリなら通常の倍の効果を発揮させる。それがこのエンペラーメモリの能力」

「くそー変身ツールが何も出せねえー!」

「ふふふ、言つたろ、倍の効果を発揮できるつてさ。あの時以上に君の能力を狂わせもはや君の能力は今何も機能しないのさ!」

「くっ、皆!一斉に攻撃よ!」

『はい(おおっ)(ええ)!!』

「無駄無駄、無駄だよ全部」

遠距離攻撃ができる者はクレイジーエンペラードーパントに弾丸や光弾を撃ち素手や剣で戦おうとする者もいるが弾は全て弾道を狂わせられ一発も当たらない

接近戦に持ち込もうとした者は全員視力や聴力を狂わせられまったく違う方向に攻撃をしてしまう

「もう君達全員潰れなよ」

クレイジーエンペラードーパントがそう言った瞬間紀斗達全員が糸が切れたようにその場に倒れる

『!?!』

「今、君達の身体の筋肉を狂わせた、もう指一本、唇一つ動かせないだろう?」

紀斗達は何も言えない、身体中の筋肉が狂わせられ口も動かせないから

紀斗は悔しくてさっきの行動を後悔した

(ちくしょう! さっき俺がMにトドメをさしておけば! あいつの命を取っていたら! こんなことには! 仲間達にこんな無様な真似をさせずに済んだのに! くそっ! くそっ! くそおおおお!!)

しかし現実は無情にも紀斗達を絶望させる

「このままずっと僕がクレイジーワールドを展開させてるのも疲れるし、君達の人格はその身体からおさらばしてもらおうかな。」

『!?!』

クレイジーエンペラードーパントは一本のメモリを取り出す

『LABYRINTH』

「このメモリは普通なら迷路とかを作るだけのシヨボイメモリさ。だけどね今このメモ

りの能力は倍になっていてさらに」

クレイジーエンペラードーパントはガイアメモリ強化アダプタを取り出しラビリンスメモリに取り付ける

『LABYRINTH UPGRADE』

「この状態になってさらに3倍！6倍の効果だ！これでようやくあれが使えるようになる」

そしてクレイジーエンペラードーパントは持っている杖の1番上のスロットの穴にアップグレードラビリンスメモリを挿す

『LABYRINTH UPGRADE MAXIMUM DRIVE』

「いつてらっしゃい、多元宇宙迷宮へ」

瞬間紀斗達全員の意識はそこで途絶えそこにはマスカレイド達とクレイジーエンペラードーパントそして意識だけが多元宇宙迷宮へと飛ばされた紀斗達の身体だけが残った

第三十幕 多元宇宙迷宮

紀斗side

分厚い雲に覆われた灰色の空の下、紀斗は幻想郷の実力者達と対峙していた

「あなたを幻想郷に招き入れたのは私の間違いだったわ。海棠 紀斗、あなたはここで私達が排除する」

紫を先頭に霊夢や魔理沙、紅魔館、白玉楼、永遠亭、妖怪の山、地霊殿、命蓮寺、天界、様々な場所のメンバーも勢ぞろいし各々の武器や拳を構える

「やつぱりこの世界でも俺の居場所はないんだな。いいぜ、お前らが俺を殺そうとするなら俺はそれに全力で抗ってやる。殺そうとしてるんだ殺されても文句言うなよ。変身」

『KAMEN RIDE DECADE』

俺はデイクライドに変身するがその姿は今の俺の荒んだ心を表したように禍々しいフォルムのデイクライド激情態だった

「さあ来やがれ！全て…破壊してやる！」

紀斗side end

甲 side

俺は今日産まれて初めて出来た彼女との初デートのために家で精一杯のオシャレをした服装を確認していた

「つと、こ、こんなんでいいかな？ ってそろそろ時間もヤバイ！」

俺は急いで家を出るとバイクに乗って集合場所の駅前まで走る

「よしっ、集合時間10分前、なんとか間に合った」

「甲さん、少し遅いですよ」

「うわっ!? み、三奈さんびっくりした。もしかして俺より早くここにいました?」

俺が驚いて振り向くとそこには水色のポニーテールで緑色のポシエツトを肩にかけ

た俺の彼女の河白 三奈（かしろ みな）がいた（姿はまんまにとり）

「もちろん、10分くらい待ったよ。駄目だよ、男性が女の子待たせちゃ」

「う、すいません」

「いいよ、許したげる♪ きてじゃあ遊園地行こうか」

「そうだな、じゃ後ろに乗ってくれ」

俺はバイクの後ろに三奈を乗せると自分もヘルメットをかぶり遊園地に走り出した

甲 side end

紀斗 side

俺は変身を解きボロボロの状態で血だまりの中に立っていた

俺の周りには俺が殺した実力者達の死体と心を破壊された不死者の身体が転がり俺はそれを虚ろな目で一瞥し灰色の空を見る

(俺は…殺しちまったのか、自分が死にたくない一心でこんな大勢を)

空からポツポツと雨粒が落ちてきてその数は徐々に多くなり土砂降りの雨となる

俺は濡れるのも気にせずその場で雨にうたれながら俯く

(俺は死んだってどうせ誰も悲しまないのに、何で俺は生きようと必死になっちゃったんだろうな…こいつらの方が死んで悲しむ奴は多いはずなのに)

「俺は邪魔者でこいつらは自分達の世界を守ろうとしただけなのにな…ははは、これじゃ俺が怪人みたいじゃないか」

俺はライドブッカー ソードモードを出し自分の首にその刃を添える

「どうせ俺がいても邪魔になるだけなんだ。なら、もう死んじまうか…」

俺がライドブッカーで自分の首をはねようとした瞬間

ヴォンという音がして俺の懐に紫色の光が発光する

俺はライドブッカーを置き懐から光っている物を取り出す

それはガイアメモリとさつき自分が殺した霊夢と魔理沙でGと描かれたメモリ

「このメモリは…手に入れた覚えはないのに、懐かしい感じがする。なんでだ?」

俺は自分自身の記憶とこの感じが合わないことに不思議に感じていると突然メモリが紀斗の手から離れ紀斗の目の前で浮かぶ

『GENOKUHEN』

その音声と共に紫色の強い光が放たれ俺は一瞬目をつむってしまふ、そしてもう一度目を開けてメモリの方を向くとそこにはさつき俺が殺したはずの博麗 霊夢がいた

「霊…夢？お前はさつき俺が殺したはずじゃ？」

俺は呆然としながら質問するが返ってきた返事は俺の頭への拳骨だった

「へふっ!？」

「何言ってるのよ、友達とかなり同じだけの他人も見分けられなくなったのかしら、紀斗」

俺は目の前の霊夢に拳骨をくらった頭をさすりながら霊夢の顔を見上げる

「まったく、ならこれを見れば思い出すかしら」

そう言うのと霊夢は俺もよく知っているガイアメモリを取り出す

『JOKER』

霊夢は右腕の生体コネクタにジョーカーメモリを挿す、すると霊夢の巫女服が黒くなり霊夢は黒巫女になった

その姿を見て俺の脳内にここに飛ばされる前の記憶が全て入ってきてそれがフラッ

シユバックされていく

「…ああ、ようやく思い出したよ。すまねえ、霊夢、まさかダチを見分けられなくなるなんて」

「まあ、いいわ。それより紀斗、あんたさっき何しようとしてたかわかってるの?」

俺はうつむき自分が何をしようとしていたかを話す

「…自殺…しようとしてた。この世界の紫達を殺したっていう重圧に負けて自暴自棄になつてた」

「確かにあたしも今の惨状を見ると気分が悪いわ、別世界とはいえ自分や自分の知り合いの死体ばかりなんだからね」

「……」

「でもね、これであんたが死んだとしても何の意味も無いわよ。少なくとも元のアンドロイドの世界の仲間達は1人も喜ばない」

「だけど…俺がこの世界のこいつらを殺したって事実が消えない。」

「…」

「紀斗…」

「なんだよ」

俺は霊夢に名前を呼ばれると何かと思ひ顔をあげると霊夢は拳を振り上げた状態に

なっていた

「歯あ、くいしばんなさい！」

「がっ!？」

俺は霊夢に顔面を殴られバウンドし地面に転がる

霊夢は怒りの表情で転がった俺の胸ぐらをつかむ

「ぐっ、何すんだ！」

「紀斗、あんたさつきまでのこととはいえ過去にとらわれすぎよ。死んだ人は蘇らない！あんたがここでいつまでもぐちぐち言ってたって何の解決にもならないのよ！だつたら次出来ることを！あんたの本当にやるべきことを見つけてなさいよ！」

霊夢はそう怒鳴ると表情を和らげ温和な表情になり掴んでいた胸ぐらを離す

「それに、あんたには帰るべき場所とそこで待つてる人がいるでしょ」

俺はその言葉を聞くと自分のポケットに手を入れ小さめのロケットペンダントを取り出し開く

そこには笑っている永琳や永遠亭のメンバーが写っている写真があった、このロケットペンダントは俺が御守りとしていつも持っている物だ

（そうだ、永琳に言ったじゃねえか俺は…絶対帰るって。もうあんな思いさせねえって…）

俺はそれを見て一度目を閉じロケットペンダントを閉じポケットにしまつて立ち上がる。目を開いて霊夢の方を見る。

「悪い霊夢、おかげで目え覚めたわ。」

「やつとあんたらしい顔と目になったわね、やっぱりあんたにはうじうじしてるのなんて似合わないわ」

霊夢は安心したような顔でそう言う

紀斗の目はもうさつきまでの虚ろな目ではなく今はやる気に満ちた熱い目だった

「あといい事教えてあげるわ。今いるこの世界は恐らく完全な世界じゃない、私がこの幻覚変メモリを通して私の意識をこの世界に持つてきた時世界の壁、とでも言うのかしらね。その世界を覆う壁のような物が普通の世界よりかなり薄かったのよ。しかもそんな世界が何十個もあつて一箇所に集まつてくつついてたの、まるで一つだとすぐ壊れてしまうかのように」

「なるほどな、つまりこの世界はMの野郎があのもメモリで擬似的に作りだした世界の一つってわけか」

「そ、つまりこの世界はあつてないような物よ。私達の手でも十分壊せるくらいだね」

「霊夢、お前それも少し早く言ってくれれば俺あそこまでネガティブになつてなかつたと思うんだが……」

「どうせあの状態じゃ言ってもあんた聞く耳持たなかつたわよ。その程度巫女の勘を使わなくてもわかるわ」

「うぐつ、まあそれはもういいか。とりあえずこの世界を抜けよう。霊夢、もう一回手かしてくれるか?」

「今更それを聞く? いいに決まつてるでしょ。ダチの頼みを聞くのに理由なんかいらな
いもの」

俺はその答えに嬉しさを感じながら「サンキューな」と返すとロストドライバーと霊夢と同じジョーカーメモリを出しロストドライバーを腰に装着する

「変身!」

『JOKER』

俺はジョーカーメモリだけで変身する黒い仮面ライダー、仮面ライダージョーカーに変身した

「いくぜ霊夢!」

「いつでもいいわよ!」

『GENOKUHEN MAXIMUM DRIVE』

俺は幻覚変メモリを腰のマキシマムスロットに挿しこむ、俺と霊夢は右手に紫色の炎のようなエネルギーを纏い空中に飛び上がり地面に向けて拳を振り上げる

「切符【ダブルジョーカーパンチ】！」

俺たち2人の紫のオーラを纏った拳が大地に当たりそこから地面が空がその世界自体に罅が入り砕けた

そしてその世界は真っ白な純白になり唯一あるのは隣接のしている世界に繋がっているであろう黒い穴が複数あるだけになり穴のある方向とは逆方向からこの純白の空間が壊れている

「霊夢、ほんとありがとう！お前が来てくれなかったら俺あのまま死んでたわ」

「ダチのピンチは放っておけないもの。さ、そろそろこの世界は完全に壊れるみたいだからさっさと行きなさい」

「ああ、今度会ったら魔理沙や早苗と一緒に俺のマツサージと料理を堪能させてやるよ」
「楽しみにしてるわ。またね、ダチ公」

「ああ、またな、ダチ公」

そう言うとうと霊夢の姿は薄れるように消えそこに残った幻憶変メモリは俺の手元に飛んでくる

俺は幻憶変メモリを懐にしまおうと一番近い穴に飛び込んだ

そして穴は閉じこの仮初めの世界は消えた

甲 side

俺は夕日が照らす遊園地の近くの海岸の砂浜で三奈と一緒に座って海を眺めていた
「今日は楽しかったね！」

「そうだな、本当楽しかったよ」

俺たちはめいっばい遊び楽しんだ、そして俺はそれで満足している筈なのに俺の心の中で何かやらなければいけないことを忘れてる、そんな感じがずっとしている

(俺、何を忘れてるんだっけ)

ピキ

そして俺達がそうやって海を眺めていると突然俺達の横の空間に罅が入った

「!?!」

「三奈!下がってろ!」

俺は三奈を後ろに下がらせ身構える

そしてその空間が割れ現れたのは

「ふいー、擬似世界とはいえやっぱり世界の壁を壊すのは骨が折れるぜ」

「仮面ライダー…:ジョーカー?」

俺はいきなり出てきた存在に啞然としてしまう

(いきなり空間が割れたと思ったら仮面ライダージョーカー!? 一体どうなってんだ!)

「お、甲!到着してすぐお前に会えるとはラッキーだな」

しかもその仮面ライダーは俺を知っているようで気さくに話しかけてきて俺はさらに混乱する

（こいつは俺を知っている？ だけど俺に仮面ライダーのコスプレする知り合いなんて…）

「あんた、俺のこと知ってるみたいだが誰なんだ一体」

「ああ、そういうやまだ変身解いてなかったからな」

そう言うときいつは腰のロストドライバーを外し変身が解かれる

そしてそいつの顔を見た瞬間俺の頭の中で現実世界での思い出ややっていたこと、それら全てが思い出される

「のり…と？ そうだ、俺はあの時あのイカレ野郎にメモリで何かされたと思ったたら…そこからここでの記憶になっちゃってるな」

「お前もか…じゃあ全員が同じようなことになっていると考えると考えていいな」

「ね、ねえ、その人誰なの？」

紀斗が考えこんでいると俺の後ろから三奈が不安げに質問してくる、改めて見るとにとりに本当そっくりだな

「こいつは紀斗、俺の親友だよ」

「海堂 紀斗だ、よろしく」

「あ、河白 三奈です。つてそういうことじゃなくて！さっきの姿とか空間割ってきたことの方を私は聞いてるの！」

「やっぱりそういうこと聞いてくるよな。ここは外界のタイプの世界みたいだし仕方ないか。甲もすっかり聞けよ、俺達の今の状況に関係する話だからな」

―青年説明中―

俺は驚愕していた、今紀斗から聞かされたことが本当となるとこの世界はMの野郎が生み出した擬似世界でその擬似世界がたくさん寄り集まった中の一つに俺達は囚われているってことかよ、にわかには信じられねえが紀斗のあの顔からしてまず本当のことを言っている、それより俺としての問題は…

「わけわかんないよ！私達が擬似世界の、作られた世界の住人だなんて！」

こつちの方だな

三奈はこの世界の住人だからこの世界が消えたら消えてしまう、しかし俺はここを出なければいけない

俺は真剣な顔をして三奈と向き合う

「三奈、聞いてくれ」

三奈「…何？」

「俺は、俺達は外の世界でどうしてもやらなきゃいけないことがある。ここから外の世

界に行くことはお前の気持ちも踏みにじる行為かもしれないねえ、でも俺は行かなきゃならねえんだ。だから…本當ごめん！」

俺は頭を下げ三奈に謝る、俺が今こいつにしてやるのはこれぐらいしかない

「…甲、顔上げて。」

俺は言われた通りに顔を上げる、すると三奈が近づいて来てはたかれるかと思つていると

予想していた痛みではなく甘酸っぱくて柔らかい感触が俺の唇と触れ合う

「!？」

「えへへ、これで許したげる」

俺は数秒フリーズしてしまい俺は意識が復活した途端顔が赤くなつてしまふ

「いいのかよ、本當にこんなんで許して。別に許さなくてもいいんだぞ／＼」

「許す本人である私が許すって言ってるんだからいいんだよ」

「それに…好きな人を憎みながら消えたくないじゃん」

そう言う三奈は泣きながら笑つていた

「こんな俺を好きになつてくれて本當ありがとうな、そんでごめん」

俺はそう言い残すと三奈に背を向け歩き出す

「もういいのか？」

「ああ、あんま長くいるとずつとこの夢を見ていたくなっちゃまうからな」
「そうか、ならあいつらもさつきと夢から覚まさせなきゃな」

紀斗は腰にダブルドライバーを着けると俺の腰にもダブルドライバーが現れる
「いくぜ、ダチ公」

紀斗は俺にサイクロンメモリを差し出しながら言う

「ああ、いくか！ダチ公！」

俺はサイクロンメモリを受け取りダブルドライバーに挿す

紀斗もジョーカーメモリを挿し俺達は拳を合わせる

「俺達がこんなんじや皆に示しがつかねえな！」

「おうよ！俺達が全員倒れたら誰が幻想郷守んだって話だぜ！」

「仮面ライダーの底力舐めんじやねえ!!」

俺達は拳を打ち合わせ気合を入れる

(なんだ今俺の中に甲の感情が、想いが入ってきたと同時に力が沸いてきた。ダブルドライバーのせいかな？だけどこれならあれも出せる！)

「変身！」

『CYCLONE』『JOKER』

「来い！エクストリーム！」

さらに紀斗はエクストリームメモリを出しそれが倒れる俺の身体を取り込みダブルドライバーに装着される

『EXTRME!』

ダブルの緑と黒のボディの真ん中から白いクリスタルサーバーが開かれ俺達はサイクロンジョーカーエクストリームになる

さらに俺達の周りに竜巻のような風が巻き起こりその風をエクストリームメモリのエクスタイフーンが吸収しダブルの身体にさらに変化が起きる

白かったクリスタルサーバーは黄金色に輝き背中からは風都の象徴である風都タワーを模した6枚の翼が出現し俺達は仮面ライダーダークダブルの最強フォーム、サイクロンジョーカーゴールドエクストリームに変身した

「驚いたな、まさかここまでなれるとは／お前まさかこれぶつつけ本番でやったのか？」

ソウルサイドの俺が喋るたびに片目が点滅する

「とにかくとばして行くぜ！／あいよー!」

俺達は上空に飛び世界の壁に向かって突き進むとガラスが割れるような音がして世界の壁を突き破る

俺はその世界を突き破っても三奈の笑顔が忘れられそうになかった

甲 side end

三人称 side

紀斗達は猛スピードで世界の壁を貫いてゆく

それらの世界でその姿を見た幻想郷のメンバー達は元の記憶を取り戻し合流する

皆心の片隅で幻想郷を護りたいと思いつながら

そしてその思いを持ったメンバーが合流する度に紀斗の中にその思いが集っていく

(俺の中に皆の思いが集まってくる、幻想郷を護りたい、自分達の世界を護りたいっていう思いが。その思いが集まる度に体の底から力が湧いてくる！)

そして最後の世界を突き破り最後のメンバー、霊夢が合流し霊夢の思いが紀斗の中に入った

その瞬間紀斗の中で錠や鎖の碎ける音がした

(！力が、今迄とは比べようがないくらい力が湧きあがってくる！)

紀斗達は吸い寄せられるように元の世界に接近し入っていく

財団 X Z支部地下実験場

Mは変身が解け意識を取り戻さないままの紀斗達がマスカレイド達に運ばれようとしている光景を楽しそうに見ていた

「ふふふっ♪実験体、それも上質なのがこんなにいっぱい。ああ、早く色々試してみたいなあ。特に海堂君は1人だけ孤独にさせる世界へ送ったからなく、ふふっどうなってるのかな♪」

その姿はまるで新しいゲームを買ってもらいどうプレイしようか楽しみにしている子供のよう、しかしその楽しみは予想してもあり得ないとしか言いようが無い形で壊される

いきなり天井をぶち破り金色のエネルギー波か何かで紀斗達幻想郷のメンバーを呑み込む、紀斗達の周りにいたマスカレイド達が全て吹き飛ばされその余波でMも吹き飛ばされそうになる

「一体何なんだ！僕の実験体達は無事なのか！」

「誰がてめえの実験体だって？」

「!?まさか：帰ってきたのかい、あの多元宇宙迷宮を!?馬鹿な！ありえない！」
「ありえねえことなんてありえねえんだよ。幻想郷の住人を舐めんじやねえ！」

紀斗はダブルドライバーを着け甲にサイクロンメモリを渡す

「ダブルに変身するつもりかい？他のライダーならまだしも僕のエンペラーメモリの効

果を忘れたのかい？」

「てめえとはメモリで決着を決めないといけない気がしてな。俺の新しい力、見せてやる」

『CYCLONE』『JOKER』

紀斗はサイクロンとジョーカーのメモリを挿しさらにエクストリームメモリを呼び出す

「エクストリームメモリ!?でもそれでも僕には届かないよ!」

紀斗は自分の右手に赤いUの文字が入ったメモリを出す

「これが俺の新しい力の1つだ!エクストリーム!」

『キイエー!』

『ULTIMATE!』

紀斗はアルティメットメモリを鳴らすと上空に投げる

するとアルティメットメモリはバラバラになりエクストリームメモリに赤い鎧のごとく装備される

『キュイエエエ!!』

「来い!エクストリーム!」

「変身!」

アルティメットメモリを装備したエクストリームメモリが甲の身体を吸収し紀斗のダブルドライバーに装着され紀斗はエクストリームメモリを展開する

『CYCLONE』『JOKER』『ULTIMATE EXTRME!』

紀斗と甲はサイクロンジョーカーエクストリームの両腕両足がエターナルのレッドフレアのような赤い装飾になり胸から肩に赤いルビーのような鎧、アルティメットアーマーを装備したサイクロンジョーカーアルティメットエクストリームに変身した

「さあ！最終ラウンドだ！」

第三十一幕 Mとの決着

「俺の罪は自分の慢心で仲間をピンチにし偽の世界とはいえ仲間を手にかけてしたこと／俺の罪は偽の世界で一時でも出来た彼女を泣かせたこと」

「俺たちは自分の罪を数えた／次はお前の番だ」

『さあ！お前の罪を数えろ！』

「罪ねえ、そんなもの数えるのも馬鹿らしいほどしてきたよ！その新しいメモリも痛めつけてたつぷりと研究させてもらうよ！」

『CRAZY』『EMPEROR』

Mはクレイジーとエンペラーのメモリを直挿しし再びクレイジーエンペラードーパントに変身する

「また全部狂わせてあげるよ！〔CRAZY WORLD〕！」

CEDはクレイジーワールドを発動させ地下実験場はどす黒い色に染まる

「まずは足からー！」

CEDはW CJUXの足の筋肉を狂わせるよう念じるがW CJUXは倒れる気配も無く悠然と立っている

その光景にCEDは困惑し狼狽する

「え…あれなんで？」

「悪いが今の俺たちにそいつはもう効かない／そんでそんなボーつとしてんならこつちからいくぜ！」

『オラア！』

「がつ!？」

W CJUXは助走をつけ戸惑い動きが鈍ったCEDを殴り飛ばす

「種明かししてやるよ。この赤い鎧、アルティメットアーマーは俺たちへの状態異常の効果全て打ち消す効果がある／つまりお前のクレイジーワールドは俺たちにはもう効かないってことだ」

「くっ！でもそれで守られるのは君たちだけ！他の子達には効くだろう！」

「んなの分かってるよ！／だからこうする！」

『PRISM』

W CJUXはクリスタルサーバーからとどころが赤い装飾になったプリズムピッカー、アルティメットプリズムピッカー（以下UPピッカー）を取り出し色が赤くなったプリズムメモリをプリズムソードに挿し刀身が赤くなったプリズムソードを引き抜き地面に刺す

『はあああああ!!』

するとどす黒い色だった空間はそこから元の白い床に戻っていく

「なっ?!?なんでクレイジーワールドが解けて?」

「プリズムビツカーには元々ドーパントの情報を地球のデータベースから得て無効化する能力があった／その能力がアルティメットメモリの効果で進化してプリズムソードを媒体にそのメモリの情報を書き換えることが出来るようになったんだよ」

「そしてその効果を使ってお前のクレイジーワールドの情報を無かったことに書き換えた／もうてめえのクレイジーワールドは完全に封じたぜ! M!」

「くっ!でも書き換えている間の隙を狙えば!」

そう言ってCEDは再びクレイジーワールドを開く、しかし

「無駄だ!その情報は既に収集済みだからな!」

クレイジーワールドは一瞬で消され元に戻ってしまう

「二度収集した情報なら一瞬で書き換えられる／それに収集した情報は永久に保存される」

「くそっ!ただどこクレイジーを封じこめても僕にはまだ他のメモリがある!」

そう言うときCEDはクレイジーメモリとエンペラーメモリを自分の身体から抜き人間の姿に戻るとロストドライバーを着けエンペラーメモリを鳴らす

『EMPEROR』

「皇帝の下に跪かせてあげるよ！変身！」

『EMPEROR』

Mはロストドライバーにエンペラーメモリを挿し乳白色の身体にCEDの時の黄色い目に冠とマント、杖を持った仮面ライダーエンペラーに変身した

「クレイジーが駄目なら他のメモリでやるまでさ！」

エンペラーは複数のメモリを取り出し杖に挿す

『CUTTER』『MISILE』『SWORD』『GUN』

『MAXIMUM DRIVE』

マキシマムドライブが発動するとエンペラーの後ろに『王〇財宝』のように大量の刃物やミサイル、剣、銃火器が現れW CJUXに照準を向ける

「おいおいどこの慢心王だよ／＼だけど宝具じゃないなら楽勝だな」

「発射！」

エンペラーは俺達に杖を向けるとエンペラーの後ろの武器が一斉に襲いかかってくる

俺達はビツカーシールドにサイクロンメモリと新しく出したオールドメモリを挿す

『CYCLONE』『OLD』

『MAXIMUM DRIVE』

『ビッカーオールドサイクロン!』

ビッカーシールドの中心から竜巻が放たれ飛んでくる武器や銃弾を吹き飛ばし錆させ風化させる

その竜巻はエンペラーの後ろにまだ残っていた銃火器も飲み込み同じように風化させる

「挿したメモリの特性を合成させたのか!？」

「その通り／これもパワーアップした力だ!」

「チッ!ならこれだ!」

エンペラーはさらに複数のメモリを取り出し杖に挿す

『ANGER』『SORROW』『ENMITY』『JEALOUSY』『HATRED』『CRAZY』『MAXIMUM DRIVE』

「怒り、悲しみ、恨み、嫉妬、憎悪、狂気、負の感情のメモリのエネルギーを収束した力を受けてみなよ!」

杖の先には軽自動車並みの大きさの漆黒の球体がバチバチと黒い電磁波のようなエネルギーを纏わせ浮いていた

「あれはちよつとやばいな／ああ、色んな負の感情を無理矢理詰め込んだようなもんだ。

当たりやタダじゃ済まなそうだ」

W CJUXはプリズムソードをビツカーシールドに戻し新しく2本のメモリを出す

「負の感情に飲まれて消えなよ!」【MIND EATER】!!」
『オオオオオオオ!』

エンペラーは漆黒の球体を放ち球体は地獄の亡者のような声を出しながら近づいてくる

「そっちが負の感情なら／＼こっちは風都をそういうのから守ってきた人達のメモリだ」
『CYCLONE』『JOKER』『ACCEL』『SKULL』

『MAXIMUM DRIVE』

W CJUXは風都を守ってきたライダー達のメモリをUPビツカーに挿しマキシマムドライブを発動させプリズムソードを引き抜く

プリズムソードの剣先には緑、紫、紅、黒のエネルギー球が纏われW CJUXは漆黒の球体に向かって走りだす

『オオオオオオオオ!!』

『はあああああ!!』

『ビツカーライダーチャージブレイク!』

『アアアアアアアアアアア!?!』

四色のエネルギーを纏った刃は漆黒の球体を斜めに斬り裂きさらにもう一閃、Xを描くように斬り裂かれた球体はW CJUXの後ろで耳をつんざくような悲鳴をあげ爆発した

「ぐっ!まさかMIND EATERまで破るとはね。こうなったら最後の手段だ。僕の切り札で決着をつけてあげるよ!」

「いいぜ、お前の切り札と俺達の切り札どっちが上か白黒決めようじゃねえか!」

「来い!僕のメモリ達!」

『ZONE MAXIMUM DRIVE』

エンペラーが杖をかかげゾーンメモリを腰のマキシマムスロットに挿しゾーンのマキシマムドライブを発動するとかなりの数のメモリが現れエンペラーの杖に挿さって

『ANGER』

『BATTLE』

『CRASY』

『DARKNESS』

『EMPEROR』

『VACUUM』
『UNION』
『TORTURE』
『SECRET』
『REPLICAR』
『QUARTER』
『PAIN』
『OXYGEN』
『NAIL』
『MISSILE』
『LABYRINTH』
『KEEN』
『JEALOUSY』
『INJECT』
『HATED』
『GUN』
『FOSSIL』

『WAR』

『EXPERIMENT』

『YOUNG』

『ZOMBIE』

『MAXIMUM DRIVE』

27本のメモリが挿さりマキシマムドライブが発動するとかかげた杖の先に直径1kmはある巨大なエネルギー球が現れる

「エンペラーの能力でメモリの力は倍増している。大道 勝巳の以前放った物の比じゃないよー!」

エンペラーはW CJUXに向かってエネルギー球を振り下ろす

「全て吹き飛ばせ!」[EMPEROR JUDGMENT]!!」

「やるぜ、甲／ああ、決めてやろうぜ紀斗」

W CJUXは飛び上がりアルティメットエクストリームメモリを一端閉じ再展開する

『ULTIMATE EXTREME MAXIMUM DRIVE』

W CJUXのアルティメットエクストリームメモリのエクスタイフーンから赤と緑の混じった竜巻のような風が発射されW CJUXはその竜巻に乗り両足の蹴りを

繰り出す

『アルティメットダブルエクストリーム!!』

エネルギー球とW CJUXの蹴りが激突しせめぎ合う

「エネルギーの奔流に吞まれてバラバラになっちゃいなよ!」

『負けるかああああ!!』

W CJUXの竜巻がさらに勢いを上げエネルギー球を貫通しようとするがエネルギー球の勢いは衰えずW CJUXを呑みこもうとする

「こうなったら!あれも使うぞ!／おうよ!ここで逆転しなきゃ俺達に未来はねえからな!」

W CJUXはプリズムメモリを出し腰のマキシマムスロットに挿す

『PRISM MAXIMUM DRIVE』

W CJUXの両足にさらに赤いエネルギーが纏われその両足を一度威力を溜めるように折りたたみ一気に蹴り放つ!

『はああああああああ!!』

エネルギー球はその勢いに押されついに消しとばされた

そしてキックはその勢いを衰えさせずエンペラーに直撃する

『これで!終わりだああああ!!』

「かつ!?僕は…まだ…完成して…いないのに」

杖に挿さっていたメモリは全て砕けエンペラーは吹き飛ぶ地下実験場の壁を突き破りさらに何枚もの壁を突き破っていきその奥で爆発が起こる

「やつとやられた借りを全部返させたぜ／それよか他の皆はどうなったか、確認しねえと。あのマッド野郎以外は全部任せちまったからよ」

「確認の必要ならないわよ?もう全部倒しちゃったもの」

「それも結構前にな、久々に無双出来て楽だったぜ」

B 霊夢を筆頭に他の皆も集まってくる、幸い全員目立った怪我などはないようだ

「よかった、なら一度俺達は変身を解くか／そうだな、俺もそろそろ自分の身体で動きた
ん」

『キイエー』

W C J U Xはダブルドライバーのアルティメットエクストリームメモリを閉じ外してからダブルドライバーも外す

W C J U Xは紀斗と甲に分かれそれぞれ自分の身体の調子を確認する

「よし、何の問題もないな、じゃあとつと奴らのボスを倒しに行くか!」

『おおー!!』

番外幕 初めてのクロス

時は少々廻り紀斗達が財団Xの侵入する出入り口を発見する数日前

紀斗は迷いの竹林前で新しくできた異世界の友人、天音 ユウの到着を銀のオーロラを出して待っていた

「やれやれ、確かに俺の能力でオーロラは出せるとは言ったがなるべく早く来てくれねえかな。これ維持し続けるの結構疲れるし」

そんな風に1人愚痴りながらたたずんでいると銀のオーロラから人影が見え始め1人の青年が現れる

「ようやく来たか、天音」

「ごめんごめん、こっちに来る前に ちよつときとりに襲われちまつてな」

かなり顔が整った青年、天音 ユウはバツが悪そうに頬をかきながら歩いてくる
「やれやれ、モテる男は辛いつてか？」

「自分だって彼女持ちで他の子にフラグ建ててる癖によく言うぜ」

「少なくとも俺は不特定多数の女性とは付き合わねえよ。俺は生涯で愛するのは1人だけだ、複数の女性を1度に愛せる程俺は器用じゃないんでな」

「はいはい、で、俺に教えることがあるって言うから来たけど一体何を教えてくれるんだ？」

天音は早く教えろといった雰囲気を出しながら紀斗に聞いてくる

「俺がお前に教えようと思ったことそれは戦い方だ」

「は？おいおい、紀斗。あんた俺が戦い方を知らないと言っても言いたいのか？」

「俺は今までのお前の戦闘を見せてもらったがはつきり言っただライダーの力をまったく活かせていない」

「なんだと」

紀斗の答えにイラツとした天音は少々ケンカ腰の話し方になる

「つまり紀斗、アンタは俺の戦い方になってないって言いたいのか？」

「ま、概ねそんなところだ」

天音は額に青筋を浮かべながらデイケイドライバーを装着する

「ならお手本を見してもらいましようか？あんたの1番得意なこいつでよお！」
「いいぜ、ただし俺の授業料はちと高いぜ」

紀斗もデイケイドライバーを出し装着し2人は同時にデイケイドのカードを挿入し
バックルを元に戻す

「変身！」

『KAMEN RIDE DECADE』

2人は仮面ライダーディケイドに変身しそれぞれライドブッカー ソードモードを構える

「おらっ！」

「ふんっ！」

天音がライドブッカーで上段から斬りかかり紀斗はそれをライドブッカーの剣の腹で受け止める

「そらそらそら！」

天音はライドブッカーで上段だけでなく下段中段、色んな角度から攻撃してくる

「剣さばきは中々だな。だがこれならどうだ？」

紀斗は一旦距離を取り二枚のカードを挿入する

『KAMEN RIDE AGITO』

『FORM RIDE AGITO STORM』

紀斗はディケイドアギトに変身しさらにアギト ストームフォームへと姿を変えス
トームフォームの武器、ストームハルバードを構える

「こういう長物が相手ならどうする！」

「くっ！」

紀斗は一気に天音に近づきストームハルバードで突きや袈裟斬りを放ってくる

天音はライドブツカーで応戦するがリーチの長さで思うように攻撃出来ず反撃できない
「ならこうするだけだ！」

『ATTACK RIDE BLAST』

天音はバックステップでストームハルバードのリーチの外に出てカードを挿入しライドブツカーをガンモードに変え複数の銃弾を撃ってくる

「その程度、幻想郷の住人なら簡単に避けられるぞ」

紀斗もよく鈴仙や輝夜、妹紅と弾幕ごっこや特訓をしているので直線で数もあまり多いとは言えない弾丸は当たらず紀斗は全て避け天音に走って近づいていく

「くそっ！ならこれだ！」

『KAMEN RIDE KABUTO』

「神速【クロックアップ】！」

『ATTACK RIDE CLOCK UP』

天音はディケイドカブトに変身しクロックアップを使い紀斗は一枚のスペルカードを出し発動する

そしてその瞬間紀斗と天音だけが世界がスローになったかのようなスピードで行動

出来るようになる

「な！なんで紀斗がクロックアップについてこれんだよ！しかもアギトの状態で！」

「お前がカブトになった瞬間クロックアップすることは目に見えていたからな。俺のスペカで対応させてもらった」

紀斗はストームハルバードで少し狼狽えている天音に連続で突きを繰り返す天音はなんとかそれをソードモードに戻したライドブツカーで対処する

「お前はディケイドだとクロックアップに頼る癖があるからな。もし相手にマスキドライダーやワーム、クロックアップが使える連中だったりクロックアップが使えない状況になったらどうする気だ！」

紀斗はストームハルバードでかち上げるように下から斬り上げ天音はライドブツカーの腹で受けるがライドブツカーがはじき飛ばされる

「ぐっ、ならファイズアクセルとか他の高速系のフォームで」

「甘え！」

「ぐおっ!？」

紀斗は天音の腹に左脚の前蹴りをくらし天音は後ろに転がり紀斗は天音の首にストームハルバードを突きつける

『CLOCK OVER』

その音声と共に2人のクロックアップは解け2人のスピードは元に戻り体感する世界は元のスピードに戻る

「チエックメイトだ、剣さばき以外は赤点だな」

「くっ！紀斗のそのスペカさえなけりや！」

「このスペカが無くても俺にもクロックアップのカードはあるし他にもいくつか手はある。ブレイドのメタル、クウガのペガサス、ウィザードのドリルで土に潜るなんてのもある」

「それにお前が今までの戦闘でほとんど勝ってこれたのはコズミックやガイアメモリみたいな力の強いアイテムや魔理沙や霊夢達と共に複数で戦っていたからだ」

「確かに俺たちはほとんど四人で戦ってたけど俺がフランと戦った時はしつかりとやれてただろう！」

「ああ、オリジナルのメモリでの戦い方は確かに評価できる。だがガイアのメモリだけはまだまだだな」

「あのメモリの特性はルーレットによるライダーの力の使役、確かにいい目が出りや強力だが所詮は運試し、どんな目が出るかわからないならどの目が出ても対処出来る方法を考えてなけりやいけない。現にお前この間の妖夢との戦いで響鬼 紅が出た時に戸惑って攻撃受けただろ」

「うっ！」

凶星をつかれた天音は少し体を縮こませる

「だが俺が1番言いたいのには、デイケイドでの戦闘だ。デイケイドの本来の長所は他のライダーになることで常に自分の優位な状況にする万能性だ。なお前が今までのデイケイドでの戦闘で使ったのはカブト、クロックアップ、ブラスト、ファイナルアタックライド、たったこれだけだ。しかも激情態の時はキレたせいでカードを使わずに特攻、これならプティラで突っ込んだ方がよかったぞ」

「てめえ！あの時の俺の怒りがわからねえくせに好き勝手言ってるじゃねえぞ！魔理沙が傷つけられた時の！大事な人を傷つけられた時の怒りが！」

天音は俺の言葉に激昂し俺の胸ぐらを掴みかかってくる

「そんなもん……」

紀斗は胸ぐらを掴まれながら頭をゆっくりとのけぞらせ

「わかってるに決まってるんだろが!!」

勢いよく天音の顔に頭突きをした

天音はいきなりくらった頭突きに怯み紀斗の胸ぐらを離し少しよろける

「っく！何しやがるこの石頭！」

「天音、お前俺に大事な人を傷つけられた時の怒りがわからないつつたな。んなわけ

あるか、俺にだってそんなもんくらい分かるわ。以前俺が財団Xに捕まってムネモシユネで作られた俺の偽の人格が永琳の心を破壊しようとした時があった。自分の手で自分の最も愛しい人を傷つける、そんな禁忌を俺は犯しそうになったんだ。その時は俺もムネモシユネの鎖に縛られながら怒りと絶対にさせないって思いでいっぱいになったよ」

「……」

「ま、何が言いたかったっ—とその思いを知ってるのはお前だけじゃないってことだ」
「……わかった」

俺の言葉に天音は小さいながらも了承の返事をする

「大事な人を傷つけられて怒るのは悪いことじゃない、むしろいいことだ。しかしそれで怒り冷静さを失えば相手の思うつぼだ。天音、お前の過去は知ってるが意識はそのまま相手をどう倒すかに向ける、冷静さを失って闇雲に突っ込めば今度はお前が魔理沙達を悲しませるんだからな」

「…善処する」

「ま、そう簡単に変えられるとは思ってない。お前にはそれなりの能力はあるんだ。今のお前は戦い方を見直すことがさらに強くなることへの一歩だからな。そこを忘れないでくれ」

紀斗はそう言うのと竹林の方へ歩きだす

「おい何やってんだ？早く行こうぜ」

「え？行くつてどこに？」

「永遠亭に俺特製の料理を用意してあるんだ、もう教えたかったことは教えたからな。早くしねえとせつかく作った料理が冷めちまう」

「はあ、展開が急すぎない？説教したと思つたら次は飯つて……」

「細けえこたあいんだよ！とにかく行こうぜ！」

天音がため息をつき俺はそれを笑いながら天音の背中を叩いて永遠亭に向かおうとする

「ちよつと待ったあー！」

「ん？」

いきなり後ろから呼び止められ2人は後ろを向くとそこにはギニ〇ー特選隊のようなポーズをとっている眼鏡をかけた白衣の男5人がいた

「……」

「俺は情熱の赤！Xレッド！」

「知的の青！Xブルー！」

「笑顔の黄色！Xイエロー！」

「癒しの緑！Xグリーン！」

「漆黒の黒！Xブラック！」

『我ら！財団戦隊！Xレンジャー！』

「……全員白衣じゃねーか!!」

2人がすごい冷めた目で見てるといきなり5人は名乗りを上げるが全員白衣で似たような格好なのでどれがどの色だかわからない、どうやら財団Xも入社試験の面接のレベルが落ちてきているようだ

「ふっ、馬鹿め！眼鏡のふちの色でわかるだろう！」

「わかるか!!」

無駄に細かいところを紹介してくるレッドについてつっこんでしまう2人だった

「まあそんなことはどうでもいい！今回の我らの任務はそこにいる異世界の少年が持っているアストロスイッチ！」

「原点の物とは違い人体に差し込めるアストロスイッチ、実に興味深い」

「つーわけでそのアストロスイッチとついでにその坊やもさらつちまおうってわけよ、
ト」

「そ〜ゆ〜わけだからさ〜、容赦はしないよ〜」

「おお、俺の左腕が疼く。そのアストロスイッチを手に入れろと疼いているぞ」

全員濃いキャラをしている5人は懐からスイッチを取り出し押す、すると5人はそれぞれの色を強調したようなゾディアーツに変身した

「Xレッド！赤のオリオンゾディアーツ！」

「Xブルー、青のピクシスゾディアーツ。」

「Xイエロー！若干黄色のハウンドゾディアーツ！」

「Xグリーン、緑のカメレオンゾディアーツ。」

「Xブラック、黒のペルセウスゾディアーツ！」

『さあ！大人しくアストロスイッチを渡し我々に着いてきてもらおうか！』

5体は再び決めポーズのようなものをとり叫ぶ

「はあ、以前倒したNを落としたのはわかるがなんで財団Xはこんな奴らを採用したんだかな」

「能力面だけで人格とかは気にしてないからじゃない？」

「なるほど、そりゃありえるな」

紀斗と天音はそんなことを話しながらそれぞれ腰にデイケイドライバーとダブルドライバーを装着する

「まあとりあえず……」

「料理が冷める前にぶっ飛ばすか！」

「変身！」

『KAMEN RIDE DECADE』

『MIDNIGHT! CARNIVAL!』

「さあ！ 踊って遊んで行進だ！ ーお前の罪を数えろ！」

「最初に言っておく！ 俺たちはかゝなり！ 強い！」

紀斗は再びデイケイドに天音はダブルの色違い、ダブル ミッドナイトカーニヴァルに変身しそれぞれ決めゼリフを言う。とミッドナイトカーニヴァルのミッドナイトメモリの効果により辺りは真夜中のような暗闇に包まれる

「俺があいつらの動きを止めるから紀斗！ その間攻撃頼む！」

「了解したぜ」

「さあ僕様ちゃんの世界に酔いな！」

『MIDNIGHT CARNIVAL MAXIMUM DRIVE』

「幻覚『カーニヴァルメリーゴウランド』!!」

天音が右手のステッキ、パレードを振ると真夜中のような暗闇が5人を包みこむ

5人は気がつく。とカーニバルの開催されている真つ只中にいた

周りには陽気な音楽が流れ大勢の人間が派手な格好で踊っている

「なんなんだ(っ)は!？」

「見たところカーニバルや祭りだとは思いますが…」

「しっかし全員派手なもん着てるねえ、ヒビ」

「うー、うるさいの苦手」

「俺は漆黒の闇に生きる者、こんな場所は似合わない」

5人は話しあっているところの女性の女性が踊りながら近づいてくる

「あなた達も突っ立ってないで踊りましょうよ！」

「ちよつちよつと！離してくれよ！」

そういつてハウンドゾディアーツの腕を掴み引つ張つていこうとする

そして気づけば5人はいつの間にか大勢の踊っている人達に囲まれていた

「踊ろう?」

その中の一人がそう言うとその言葉を皮切りに他の取り囲んでいた人達全員が同じ言葉を口にしていく

「踊ろう?」「踊ろう?」「踊ろう?」「踊ろう?」「踊ろう?」「踊ろう?」「踊ろう?」「踊ろう?」

「うう?」「踊ろう?」

「な、なんなんだよこいつら！」

「ねえ」

「なんだよ!お前もは…な…せ」

ハウンドゾディアーツは自分の腕を掴んでいる女性を見て言葉が途切れてしまう

「あなた達も、一緒に踊りマしょウ？」

「う、うわあああああ!!？」

腕を掴んでいる女性の身体は肉が腐りグジュグジュと蛆が湧き出し肉が腐り落ち骨もむき出しになっているゾンビのような身体になっていた

よく見ると周りを取り囲んでいる人間達もどんどん肉が腐り落ちゾンビの身体になっっている

「踊ろう?」「踊ろウよ」

『永遠にみんなで』

「くそっ!離せ化け物!」

ハウンドゾディアーツはなんとか掴んでいた女性のゾンビを引き剥がし他の4人と一箇所に固まる

「こうなったら!ブラック!頼んだ!」

「任せろ、くらえ!永遠に覚めぬ夢への瞳(エターナルスリープアイ)!」

ペルセウスゾディアーツは左手のメデューサの瞳から石化のレーザーを放ちゾンビ達を石化していく

「おらおらおらあ!!」

「驚かされたお返しだあ！」

「邪魔だよ」

「吹っ飛びなさい！」

オリオンゾディアーツは光弾を次々と発射しハウンドゾディアーツは針状のエネルギーを飛ばす、カメレオンゾディアーツは舌でゾンビを吹き飛ばしピクシスゾディアーツはゾンビを飛ばし他のゾンビに当てていく

次第にゾンビ達の数は少なくなりついに0になるとその空間にヒビが入り割れていく

「お、もうあの空間を出てくるとはやるな」

「だけど準備をするには充分な時間だったぜ」

5人は気がつくくと元の場所に立っておりさつきまでの空間は影も形もない

しかし目の前にはギガランチャーとギガントを構えた紀斗と天音がいた

「おはようそしておやすみだ」

「遠慮はいらねえ、存分にくらつとけ！」

紀斗と天音は5人に向かってギガランチャーとギガントを連続で発射する

「くっ！総員撃ち落とせ！」

『おう！』

オリオンゾディアーツは光弾でハウンドゾディアーツは針状のエネルギーでペルセウスゾディアーツは左手の石化光線それぞれ飛んできたミサイルと砲弾を撃ち落とす。撃ち漏らしはピクシスゾディアーツが誘導して自分達に当たらないようにする。

「チツ、意外とやるな。天音、あいつらばらけさせるから1人頼むぜ」

「オツケー、任された」

『ATTACK RIDE ILLUSION』

紀斗は4人に分身し5対5でそれぞれ対峙する

紀斗A（本体）VSオリオンゾディアーツ

「うおおお！粉砕してくれるわ！」

「パワーにはパワーだな」

『KAMEN RIDE KIVA』

『FORM RIDE KIVA DOGGA』

紀斗はキバ ドツガフォームに変身しオリオンゾディアーツの棍棒とドツガハンマーが激突する

「ぬおおお！粉砕！粉砕！粉砕いいいい！」

「やかましい！」

オリオンゾディアーツは連続で棍棒を上段から叩きつけ紀斗はそれをドツガハン

マーでアッパーのように打ち返す

（こいつ以前香霖堂で戦ったオリオンゾディアーツより強いな、変身者が違うだけでゾディアーツもここまで変わるもんなのか）

「砕け散れえ！」

「危ね!？」

オリオンゾディアーツは至近距離で光弾を発射し紀斗はギリギリ横に転がって避ける

「くそっ！これでもくらいやがれ！」

『FORM RIDE KIVA BASSYA』

「ぬううう!？」

紀斗はバツシャーフォームにフォームチェンジするとバツシャーマグナムを連射しオリオンゾディアーツはその攻撃によるめく

その隙を見逃さず紀斗はオリオンゾディアーツに向かって飛び蹴りをくらわせオリオンゾディアーツはそのまま他の戦闘が行われているちようど真ん中辺りまで吹き飛ばす

「ぐうう…」

「次で決めてやる」

紀斗BVSピクシスゾディアーツ

「飛び道具は無駄だから近接でいかしてもらおうぜ」

「出来れば飛び道具で来たほうがこちらとしては楽でいいんですけどねえ」

「そんなお願いきくわけねえだろ！」

『KAMEN RIDE BRAD E』

紀斗Bはデイケイドブレイドに変身するとブレイラウザーで斬りかかりピクシスゾディアーツは両腕のダウンジングホーンでブレイラウザーを受け流す

「まったく、ここは何も無いせいで本当に戦いづらいですね！」

「そつちから来たくせによく言うぜ！」

ピクシスゾディアーツはダウンジングホーンをトンファーのように使い攻撃してくるが紀斗Bはブレイラウザーでその攻撃を弾く

「その厄介なダウンジングは斬らせてもらおうぜ！」

『ATTACK RIDE MACH』

「速っ!?!ぐおおお!?!」

紀斗Bはマツハを使い高速移動でピクシスゾディアーツの両腕のダウンジングホーンを斬り落としピクシスゾディアーツは唯一の武器とも言えるダウンジングホーンを斬られてしまったこととその痛みで狼狽え動きが止まる

「もう一発！」

『ATTACK RIDE BEAT』

「おら吹っ飛べ！」

「ぐわあああ!？」

紀斗Bはさらにビートを使い強化された右腕でピクシスゾディアーツをちようどオリオンゾディアーツが吹き飛ばされてきた方向に殴り飛ばす

「おっしや、次で決めるぜ！」

紀斗C対ハウンドゾディアーツ

「さつきはよくもやってくれたな！」

「やらなきややられるんだから当たり前だろ！」

とす
ハウンドゾディアーツは鎖を飛ばし紀斗Cはライドブツカー ガンモードで撃ち落とす

「犬つころには狼が変身したやつでやってやるよ」

『KAMEN RIDE FAIZ』

「誰が犬つころだ！ 獵犬なめんな！」

紀斗Cはデイケイドファイズに変身するとライドブツカーをソードモードにし袈裟斬りをくらわせようとするがハウンドゾディアーツは鎖でライドブツカーの刃を受け

止め押し返す

「おっと、中々のパワーじゃねえか犬ところ」

「犬ところじゃねえつつつてんだろ！分身だか本体だかどつちでもいいがズタズタに引き裂いてやる！」

「お前が俺に追いつけるかな？」

紀斗Cはそう言うかとカードを一枚出しデイケイドライバーに挿入する

『FORM RIDE FAIZ ACCEL』

「アクセルフォームか！」

「ご名答、10秒間だけ可愛がってやるよ。」

紀斗Cはファイズアクセルフォームにフォームチェンジすると左腕のファイズアクセルのスタータースイッチを押す

ハウンドゾディアーツが高速になるのを阻止しようと針状のエネルギーを飛ばしてきたがもう遅い

『START UP』

その音声が鳴ると同時に紀斗Cは通常の1000倍の速度で動けるようになり飛びかかってきたハウンドゾディアーツのボディを連続で殴る！殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る！

「が!? ががががががががが!?」

「おらもういつちよう!」

「あがあ!」

そしてラストに回し蹴りを顔面にくらわすとハウンドゾディアーツは他の戦闘しているメンバーとのちようど中間地点まで吹っ飛ぶ

『TIME OUT』

『REFORMATIION』

そして音声が鳴るとファイズアクセルフォームは元のファイズに戻る

「さて、とつとと済ませて帰らしてもらおうぜ」

紀斗D VS カメレオンゾディアーツ

「僕を見つけられるかな」

カメレオンゾディアーツはそう言うといきなり姿を透明にしどこにいるのかわからなくする

「こういう場合の対処法を俺が知らないとでも?」

『KAMEN RIDE RYUKI』

『ATTACK RIDE STRIKEVENT』

紀斗Dはデイケイド龍騎に変身するとストライクベントを発動し右手にドラッグク

ローを装備し上に飛び上がる

「何しようとしてるんだ〜?」

カメレオンゾディアーツは透明なまま飛び上がった紀斗Dを見上げる

紀斗Dは頭を下にすると地上に向かってドラグクローを勢いよく突き出す

「黒焦げにしてやるよ!」

ドラグクローから火炎放射が放たれ炎は地面に当たると炎は円状に広がっていく

「あちゃ!?あちゃちゃちゃちゃ!?」

すると一箇所炎が宙を浮いている紀斗Dは火炎放射を止め着地するとその炎が浮いている場所に向かって飛び蹴りをかます

「見いつけた!!」

「あだあ!」

紀斗Dの飛び蹴りをくらったカメレオンゾディアーツは透明化が解け転がる

『ATTACK RIDE SWORDVENT』

「まだまだいくぜ!」

「痛い嫌いだ〜!」

紀斗Dはストライクベントを解除しソードベントを発動させドラグセイバーを装備し斬りかかるがカメレオンゾディアーツは舌を伸ばしドラグセイバーの刃に巻きつけ

る

「へっへーん、これでその剣は使えないだろう。」

「ああ、でも問題ねえよ！」

「へ？」

紀斗Dはドラグセイバーに巻きついて舌を掴むと思いつき引つ張りながら回転しカメレオンゾディアーツはそれに引つ張られて遠心力で宙に浮いてしまう

「と！止めてくれ〜!?!目が回る〜!?!」

「まだまだだ！もつと速く回るぜ！」

「あ〜〜〜!?!」

紀斗Dはさらに回転を速くしカメレオンゾディアーツは完全に目を回している

「は、離してくれ〜！」

「OK！離してやるよ！」

カメレオンゾディアーツはハンマー投げのハンマーのように飛んでいきちようど転がってきていたオリオンゾディアーツとぶつかりその場で倒れこむ

「おつとと、回し過ぎて俺もふらつくな。ま、次で決めりや問題ないな」

天音VSペルセウスゾディアーツ

「貴様もこの俺の永遠に覚めぬ夢への瞳（エターナルスリープアイ）の餌食にしてやろ

う」

「おいおい、俺の相手は中二病ってmjky（マジかよ）」

そんなことを言いながら天音はカーニヴァルのメモリを別のメモリと挿し変える

『MIDNIGHT!』『BRAVE!』

持っていたパレードは勇者の剣のような両刃剣ブレイヴィードになり天音はそれを両手で持ち斬りかかるがペルセウスゾディアーツは大剣、オラクルでその攻撃を受けはじき返す

「こんなものか？異世界の戦士よ」

「そんなわけないだろ！」

天音はそう言うのと後ろの闇に手を伸ばすすると闇が天音の手に収まりブレイヴィードの形になる

「今度は2刀流だ！さばききれるか？」

「俺をあまり甘く見ない方がいいぞ」

天音は2つのブレイヴィードを連続で振るうがペルセウスゾディアーツはそれを危なげなくオラクルで防ぎ突きを放つと天音は突きをバックステップで避ける

「貴様はこの俺の漆黒の剣（ダークネスブレード）の敵ではない」

「さて、それはどうか？」

そう言うのと天音は消えるように闇に包まれその姿が見えなくなりペルセウスゾディ
アーツも闇に包まれ視界が足元以外全て闇に覆われる

(消えたか…しかしそんなものはいつもグリーンとの特訓で経験済みだ)

ペルセウスゾディアーツはいつもカメレオンゾディアーツとの特訓で透明になった
相手の対処方法として目を閉じ耳をすます

「……そこだ」

ペルセウスゾディアーツは気配を感じオラクルを振るうと金属音がし黒いブレイ
ヴィードが地面に落ち霧散する

「剣だけか」

(しかし足音すら無いのは妙だ…、この闇の効果か?)

ペルセウスゾディアーツは再び耳をすませ集中する

「そこだー」

ペルセウスゾディアーツは再び気配を感じとりオラクルを振るうときつきと同じよ
うに金属音がして剣だけが落ちるが同時にペルセウスゾディアーツの左肩に斬り裂か
れたような痛みが走る

「ぐう!? 剣を自由に二本以上操っているのか!」

ペルセウスゾディアーツがそう声を発した瞬間今度は腹に斬り裂かれた痛みが走る

「ぐあっ!?!」

「真夜中はお静かに、あんまり大きい声を出すとご近所さんが怒っちゃうよ?」

全方向から天音の音が聞こえ、ペルセウスゾディアーツは困惑しながらも身構える

(なるほど、一定以上の音量を出せば斬られるというわけか、めんどくさい能力だ)

「だけど早く紀斗の飯も食いたいからねー、すぐ終わらしてあげるよ」

「なに?」

(舐めているのか、このクソガキは!。しかしこういう時こそチャンスだ。焦るな、俺)

ペルセウスゾディアーツは天音の言葉に苛立ちを覚えるが声には出さず集中する

(……来た!)

ペルセウスゾディアーツは剣が足元を狙っているのを感じとりその攻撃をオラクル

を叩きつけ止める

「がっ!?!」

しかしそれと同時に顔面に天音の回し蹴りをくらい後ろに吹っ飛ぶ

「残念、剣は囷でした♪」

するとペルセウスゾディアーツを包んでいた闇は晴れ、天音は現れると肩にブレイ

ヴィードを担ぐと馬鹿にするようにそんなセリフを言う

「ペルセウスゾディアーツも中心に吹っ飛ばされ5人全員が一箇所にまとめられた
「一気に決めるぞお前ら！」

「「「おう！」」」

「バツシャーフォームから元のキバフォームに戻った紀斗Aが呼びかけると天音を含んだ紀斗B、C、Dも応える

「紀斗達は全員絵柄の違うFARRのカードを出しデイケイドライバーに挿入し天音もマキシマムドライブを発動する

『『『FINAL ATTACK RIDE』』』』

『KI KI KI KIVA』

『B B B BRADDE』

『FA FA FA FAIZ』

『RY RY RY RYUKI』

『MIDNIGHT!』『BRAVE!』『MAXIMUM DRIVE』

「デイケイドキバの足のカテナが外れ足に魔皇力が溜まりデイケイドブレイドはブレイドが装備されデイケイド龍騎の後ろにはドラグレッタが現れる

「天音のブレイヴィードには漆黒の闇が立ち上り不気味な雰囲気醸し出す

「「たああああああ!!」」(ヴェー……イ!!)

「闇勇者『ダークネスブレイブ』!」

『財団Xに栄光あれえええええ!』

4種類のライダーキックと漆黒の斬撃が5人に炸裂し5人は爆発しそこには倒れた元の白衣の男5人と5個のゾディアーツスイッチだけが残った

「さて、お前からこいつら処理しといてもらえるか? 早く行かねえと料理がかなりつまみ食いされてる可能性があるからな」

「「OKだ、任せろ。」」

紀斗は分身達に白衣の男達の処理を任せるとマシンディケイダーとハードボイルダーを出すとマシンディケイダーに乗る

「天音! 早く乗れ! とつとと行かねえと俺たちの飯が無くなっちゃう!」

「それは勘弁願いたいなあ!」

天音もハードボイルダーに乗り2人は永遠亭に向かった

幸い料理は冷めきつてはおらず全て無事だった

そしてその後紀斗達は永遠亭メンバーやいつの間にか来た妹紅や萃香も思いつきり騒ぎ楽しんだ

数時間後

宴も終わり紀斗は再び天音の元の世界に通じるオーロラを出す

「最初はともかく宴は楽しかったよ、料理ごちそうさま」

「おう、お粗末様。ちゃんと俺が言ったこと覚えとけよ。また忘れてたら言いにくからな」

「出来れば説教は勘弁してほしいなあ」

「それじゃ、またな」

「ああ、また」

天音は手を振るとオーロラに入り姿を消した

俺はそれを見届けるとオーロラを消し溜息をつく

「はあ、明日からまた探索に行かなきゃな」

第三十二幕 分かれ道 　　↳その1↳

紀斗達は地下実験場の出入り口のすぐ近くにあった階段を登り一つ上の階に来たが
 続きの階段は無く壁にはB1Fと書かれている

そして通路に出ると通路は3つに分かれておりそれぞれの通路の先は見えない

「この階は3つのグループに分かれて探索した方がいいわね」

紫はそう言うときスキマから紙を出して3つのグループの枠を書きその中にメンバ
 の名前を書いていく

グループA 正面の道

紀斗, レミリア, フラン, 美鈴, てゐ, 影狼, 衣玖, 天子, 幽香, 聖, パルスィ, 勇
 儀

グループB 右通路

霊夢, 咲夜, 萃香, チルノ, ルーミア, リグル, ミスティア, 早苗, 藍, 妹紅, 慧音,
 紫, 大妖精

グループC 左通路

魔理沙, パチュリー, アリス, 甲, にとり, 雛, 豊聡耳神子, 布都, 屠自古, 文, 鈴

仙，妖夢

この組み合わせに早苗と咲夜は若干不服そうな顔をするがしぶしぶ了承した
「ちよつと待つてくれ、別れる前に全員に渡しておきたいものがある」

紀斗はそう言うともまず16枚のカードを出す

「龍騎系のライダーのパワーアップアイテムのサバイブのカードだ、やばくなったら使つてくれ」

紀斗は龍騎系のライダーの変身者達にサバイブのカードを渡すとレミリアが話しかけてきた

「ねえ、私のデッキにもいつの間にかサバイブのカードはあつたけどこれ、絵が違うわよ？」

そう、紀斗が渡したサバイブのカードはレミリアと美鈴、フラン、衣玖、妖夢だけは不死鳥の翼ではなく胴体が描かれ背景は金色の炎のようなものが揺らめいている

「このサバイブは特殊だ、俺の能力が生みだしたさらにもう一つ上のサバイブ【進化】。こいつは普通のサバイブの状態からでしかフォームチェンジ出来ないからな」

次に俺が出したのはイクサライザーともう一つ白と黒を基調としイクサライザーと同じようなボタンが付いた剣、それを早苗に渡す

「イクサライザーと、この剣は？」

「そいつはイクサの新しいパワーアップアイテム、ジャツジメントカリバーだ。フォームチェンジの仕方はライジングになるのと同じでパスワードは461096だ」

「おお！イクサにも新たな強化フォームですか！胸が高鳴りますね！」

霊夢には複数のコアメダルを、カブト系ライダーの変身者達にはそれぞれハイパーゼクターを、甲と雛には新たな強化ICチップを、藍にはディエンドのケータツチコンプリートカード、魔理沙にはビーストハイパー、アリスにはチェンジウイザードリングの色違いを数種と新しいウイザードリング、パチュリーにはインフィニティリングを渡す

「それぞれかなりの力を持ったフォームになれるアイテムだ、奴らに奪われたらかなりめんどくさいことになるから注意してくれよ。あと大妖精、ちよつとこつち来てくれ」

「はい、一体何ですか？」

紀斗は大妖精を呼び他の皆には見せないように残る最後のデツキとサバイブ【進化】を渡す

「最後の龍騎系のデツキだ。お前にだけは自衛の手段が無いからな、念のため渡しておく」

「皆に隠れて渡す必要って…」

「チルノあたりが自分は最強だから大ちゃんも守れるから必要ないとか言つて渡せなく

なりそうだからな。まあ、紫さんと一緒にいれば問題ないとは思うがな」

紀斗は皆に向き直ると自分のグループに戻り大妖精も紫のすぐ近くに行く

「それじゃあそれぞれ健闘を祈るわ。散会！」

紫の言葉でそれぞれグループは自分達の行く通路を進んでいく

グループB

霊夢達は右側の通路を探索しているがたくさんある部屋はほぼすべてがここに寝泊まりしていたであろう職員の部屋でまだこれといった収穫は得られていない

「しけてるわね、ろくなもんありやしないわ」

「霊夢さん、冷蔵庫ばかり漁ってないで他の場所も探してくださいよ」

「別にいいじゃない、腹が減っては戦はできぬって言うでしょ」

「それはそうですけど…」

B 霊夢は職員の部屋の冷蔵庫を漁りI 早苗は注意するがまったく聞いてくれない
そこへ能力で小さく分裂した萃香の一人が入ってきて2人を呼ぶ

「霊夢、早苗、奥に他のとは違う扉を見つけたぞ」

「ならさっさと行きましよ、行くわよ早苗！」

「待つてくださいよ霊夢さん！」

B 霊夢とI 早苗はミニ萃香に案内され通路の奥へ進むと他の扉より大きく頑丈そう

な扉があり周りには他のグループBのメンバーも揃っている

「これがその扉？」

「ええ、これでこの通路でのメンバーは全員揃ったわね。それじゃ開けるわよ」

紫はそう言うのと扉を開ける

しかし中は電気がついておらずまったく中の様子は見えない

「よく来たねえ、幻想郷の美少女達！」

その声が部屋に響くと同時に部屋の明かりが点くとそこには一人の白衣の男が立っていた

「ようこそ、僕の管理するB1格納庫へ。歓迎するよ」

「あんたがここを管理してるならなんか私達に有利な情報を持つてるはずね。ぶっ飛ばされたくなかったらとっとと情報を吐きなさい」

B霊夢は指を鳴らしながら研究員を脅すが研究員は臆した様子も無く笑っている
「ククク、ぶっ飛ばされたくなかったら、か。流星は博麗の巫女、威勢がいいねえ」

「その威勢、実力に見あってるかどうか、確かめてやるよ」

研究員はそう言うのとポケットからデッキを取り出す

「！ そのデッキ、原作には存在しなかった物ですね！」

「原作？何の話か知らないがこいつはあの海堂から搾り取ったアイテムの一つのデッキ

を元に未契約のデツキを作り出したのさ」

I 早苗は研究員が取り出したデツキのマークを見てオリジナルの物だとわかるが研究員はI早苗の発言に首をかしげながら説明する

「そして俺は運がよかった。ちょうど復活したこいつを見つけ契約出来たんだからな。来な！デイスパイダーリボーン！」

研究員がそう叫ぶと天井からでかい蜘蛛の下半身に人型の上半身がくつついているデイスパイダーリボーンが落ちてきた

『ギシイイイイ!!』

「デイスパイダーリボーン!?なんて奴と契約してんですか!?!」

「はっはっは！僕の相棒はなかなか迫力があるだろう！それじゃ僕も、変身！」

研究員はデツキをかざすとベルトが腰に装着されデツキを挿入し変身する

研究員はシザースのような黄土色に蜘蛛のような顔、左手に蜘蛛の顔を模したバイザー、スパイダーバイザーを装備した仮面ライダーに変身した

「仮面ライダーネクア、俺の縄張りに入ったことを後悔させてやる。お前らも出てこい！」

ネクアが格納庫の奥の方に向かって呼ぶとあちこちから蜘蛛型のモンスターや怪人が出てくる

ズ・グムン・バ、レスパイダー、ミスパイダー、ソロスパイダー、スパイダーオルフェノク、スパイダーアンデッド、タランチュラアンデッド、ツチグモ、ツチグモの童子と姫、ヨロイツチグモ、カエングモ、アラクネワーム、ニグリティア、フラバス、ルボア、タランテスワーム、パープラ、プラキペルマワーム、オーランタム、ビリデイス、スパイダーファンガイア、スパイダードーパント、名だたる蜘蛛の平成怪人達が揃い踏みである

「B1格納庫、別名蜘蛛の間。楽しんでいくといい！行け！お前達！」

『ギシヤアアアアアアア!!』

「うおー！蜘蛛がいっぱいだー！」

「僕的能力でも操れないからあくまで虫に近い形をした怪人つてことだね」

「蜘蛛ねえ、屋台でたまに巣を作るからあまり好きじゃないのよね」

「虫なら叩き潰してやろうかねえ」

「いつもなら見逃してあげる蜘蛛だけど、今日は一匹残らず駆除してあげるわ」

「タランチュラアンデッド、嶋さんの自我は完全にはないようですね。ラウズカードはありませんがとにかく無力化はさせてもらいます！」

「こいつらも教育が必要なようだな」

「全部焼き払っちゃおうか」

「蜘蛛の巣はメイドにとつての排除対象、さあ、掃除の時間よ」

「私も主人の目の前で蜘蛛の巣をそのままにはしておけないな」

「期待してるわよ、藍」

「チルノちゃん達フアイトー！」

各々が戦闘態勢に入り戦闘が開始される

『STRIKE VENT』『SWORD VENT』『カポーン ドリルアーム』『K
AMEN RIDE BRADDE』『KAMEN RIDE RANGEL』

「ヴェーイ!!」 「俺は最強だー!!」

グループBのメンバーはそれぞれ自分の武器を装備しD藍はブレイドとレンゲルを
召喚してスパイダーアンデッドとタランチュラアンデッドと戦わせる

『SWORD VENT』

「ククク、じっくり痛ぶってくってやるよ」

ネクアは蜘蛛の脚を模した双刀、アラクサーベルを交差させるように構えB霊夢に斬
りかかる

ドリルアームとアラクサーベルが火花を散らしながら連続でぶつかり合う

「はっはっはー！おらおらどうしたこんなもんかー！」

「あんた！さつきと！キャラが！違うわよ！」

「戦闘になるとキャラが変わるんだよー！血気盛んな蜘蛛の雄ってやつよー！」

霊夢はセルメダルを挿入して装備を増やそうとするがネクアはそんな暇を与えずにアラクサーベルで攻撃してくる

「蜘蛛の気性が荒いのは雌の方でしょ！」

霊夢はなんとかアラクサーベルの連撃をはじき返しセルメダルを2枚挿入しレバーを回転させる

『カポーン カポーン クレーンアーム ショベルアーム』

B 霊夢はドリルアームの他にクレーンアームとショベルアームを装備しネクアに殴りかかるがネクアはアラクサーベルを連結させ薙刀状にしショベルアームをいなして後ろに下がりカードをスパイダーバイザーの口の部分から出る糸に引っ掛けカードが挿入される

『STRIKE VENT』

「博識じゃないか、巫女さんも。ご褒美にこれでもくらいな！」

ネクアの左手にディスプレイパイダーの顔を模した手甲を装備し口の部分から連続で弾を発射する

「こんなもの！って何これ、蜘蛛の糸!?気持ち悪！」

B 霊夢はドリルアームではじき返そうとするが弾に触れた瞬間弾ははじけドリル

アームにくつつきドリルアーム、クレーンアームが使えなくなる

「くつついて伸ばせないし回りもしない!？」

「蜘蛛の糸の強度と粘着力を舐めちやいけねえぜ！」

ネクアは右手のアラクサーベルと左手のアラククローによる斬撃と粘着弾でB霊夢を追い詰めていく

（くつつ！糸のせいで装備を外せない上にこの連続攻撃！このままじゃ負ける！）

「オラオラア！最初の威勢はどうしたよお！つて熱つ!？」

「きゃあ!？」

ネクアとB霊夢がたたかっている場所に巨大化したG萃香と戦っているカエングモの炎弾の流れ弾が襲いかかり2人は少し離れた場所に吹き飛ば

「いつつ、！糸が溶けてる、この糸は熱に弱いのね。」

「霊夢！大丈夫かい！」

「ええ！むしろ都合だったわ！」

糸が溶けることに気づいた霊夢はすぐに装備を解除しメダルを取り出す

「くそつ！カエングモの野郎のせいで拘束が溶けちまったか！まあいい、バースに炎熱系の装備はねえからな。俺の勝ち揺るがねえ！」

「ええそうね、確かにこの階に来る前の私ならやられてたわ。だけど新しいメダルを入

れられる今なら負ける気はしないわ！」

そう言つてB霊夢は紀斗に渡されたメダルの中の一枚、龍騎の紋章が描かれたメダル、龍騎メダルをバースドライバーに挿入しレバーを回転させる

『カポーン リュウキアーム』

B霊夢の右腕にドラグクローによく似たしかしドラグクローよりも倍以上の大きさのリュウキアームを装備する

「そんなこけおどしでビビるか！」

「こけおどしかどうか！自分で確かめなさい！」

ネクアはアラククローを連射しながら突っ込んでくるがB霊夢はリュウキアームを振り払うように動かすとリュウキアームの口から炎が吹き出て粘着弾とネクアの体を燃やす

「あつちいいいい!!あつつ!!あつつ!!熱いいいい!!」

「どうこけおどしじゃないのがわかったでしょう？」

ネクアは地面に体を転がし体の炎を消してから周りを見るが他の怪人達も劣勢なのがほとんどだ

「くっそーこつなつたら…メモリの奴らに借り作るの嫌だったからあんまやりたくなかったが仕方ねえ！てめえら！あのメモリ使え！」

ネクアがそう叫ぶと怪人達はメモリを取り出し自分達に挿し何体かはツチグモ達3体に挿す

『GRONGI』『ORPHENOCH』『ANDEAD』『MAKAMOU』『WORM』
『FANGIRE』

『グギヤアアア!!』

メモリを挿した怪人達はさつきよりも禍々しい姿になり荒々しく吼える

「なんですかこいつら! さつきよりもパワーが増してる!？」

「はっはっは! それらのメモリにはその怪人の種族の記憶が入っている! 人間に挿せばその種族の特徴を手に入れるだけだが、その種族に挿せば力は倍以上に跳ね上がる!」

ネクアのその言葉に同調するように徐々に幻想郷メンバーは押され始める

「くっ! クロックアップの速さまで上がってる!」

「味方も増やすとしよう!」

『KAMEN RIDE KABTO』『KAMEN RIDE KICKHOPPE』
『R』

「俺は天の道を行き総てを司る男。」「今、誰か俺を笑ったか?」

アラクネワーム達はクロックアップの速さも上がりSルーミアやグリグルも苦戦を強いられD藍は新たにカプトとキックホッパーを召喚する

「それにしても厄介な糸だ、周りに罨のように張り巡らしてある」
「何度燃やしてもすぐに張られるからきりがないよ！」

F 妹紅とS 慧音は周りに張られた蜘蛛の巣を燃やしたり切り刻んだりしながらズ・グムン・バヤツチグモの童子、姫達と戦っているがすぐにまた蜘蛛の巣は張られ思っただうな動きが取れない

「あー！もう邪魔ー！あたいが片付けてやるー！」

『FINAL VENT』

「チルノちゃん!? 今下手に動いたら！」

「あたいはさいきよーだから大丈夫！」

T チルノはついに我慢が出来なくなりデストバイザーにファイナルベントのカードを入れる、大妖精はチルノを止めようとするがT チルノは聞く耳を持たずデストクローを構える

「ガアアアアア!?」

近くに出現した鏡から出てきたデストワイルダーはソロスパイダーの体を掴みT チルノの方向へ引きずりT チルノはデストクローをソロスパイダーに突きたてそのまま持ち上げる

「とりゃあああああ！」

「ギャアアアアアア!?!」

ソロスパイダーは爆発しTチルノは仮面の下でもわかりやすいドヤ顔をくりだす

「ふふん、楽勝ね」

「チルノちゃん危ない!」

「へ? うわっ!?!」

「ガアッ!?!」

隙だらけになったチルノとデストワイルダーは後ろからミスパイダー、レスパイダー、スパイダーファンガイア達に糸で拘束されて動けなくなる

「ガーリッククッククック、隙だらけで助かったぜ、氷精ちゃん♪」

「くうっ! ほどけー!」

「グウッ!」

「ほどけと言われてほどく馬鹿はいないぜ。おらっ!」

「ぐっ!?!」

スパイダーファンガイアは糸で縛られ倒れているTチルノを踏みつけさらにTチルノの脇腹を蹴る

「デストワイルダーも同じように縛られミスパイダーとレスパイダーが痛ぶっている

「チルノちゃん!」

「大妖精！今近づいたらあなたもやられるわよ！」

「でもチルノちゃんが！」

大妖精はスキマから出ようとするが紫に止められる、他のライダー達も自分達の相手が邪魔をして救出にいけない

このままではチルノは殺されてしまう、その思いが大妖精を焦らせ紀斗に渡された
デツキの存在も忘れさせる

「大ちゃん……こつちに、来ちゃ駄目……。あたいなら大丈夫……だから」

「チルノちゃん！」

「おーおー、泣かせるねえ、眩しい友情だねえ。でもおれは痛ぶるのをやめる気ないんで
！」

「ぐあつ?!」

Tチルノは弱々しい声で大丈夫だと言うがまったくそんな様子は見られない、大妖精は涙を流しながらチルノの名を叫ぶ、紫も今の状況では怪人には効かない弾幕もチルノを盾替りに使うことが目に見えているしチルノの下にスキマを開いてもチルノが落下する前に掴んでしまうだろう

大妖精は悔しくて唇を噛みしめる、自分の目の前で友達が傷つけられているのに何も出来ないことに、自分に戦える力がないことに

そして大妖精は自分の服を握りしめるとポケットからデツキが落ちる

「これは…」

それは紀斗が別れる前に渡してくれた物、自分が危なくなったら使えと言われていた自衛の為に渡されたオーデインのデツキ、大妖精はそれを拾うと涙を拭いデツキを自分の目の前に掲げる

「今助けに行くよ、チルノちゃん。変身！」

大妖精は腰に装着されたベルトにデツキを挿入し金色の不死鳥を模した仮面ライダー、仮面ライダーオーデインに変身した

「大妖精!?あなたそのデツキは！」

「すいません紫さん、ちよつと行つてきます」

オーデインに変身した大妖精（以下〇大妖精）は瞬間移動でスキマからいなくなりスパイダーファンガイアの真後ろに移動する

「チルノちゃんを！虐めるなあ!!」

「へ？へぶらつ!？」

〇大妖精は渾身の力でスパイダーファンガイアを殴り飛ばす

殴り飛ばされたスパイダーファンガイアはデストワイルダーを痛ぶっていたレスパイダー、ミスパイダーにぶつかり転がる

『SWORD VENT』

○大妖精はオーデインの契約モンスター、ゴルドフェニックスのウイング部分を模したゴルドセイバーを召喚しTチルノとデストワイルダーを縛っていた糸を斬る

「大…ちゃん?」

「チルノちゃん、待ってて。すぐチルノちゃんを虐めた奴らを倒すからね?」

「え?」

○大妖精はそう言うのと呆然とするTチルノにおいてゴルドバイザーにカードを入れる

『FINAL VENT』

○大妖精の後ろに契約モンスター、ゴルドフェニックスが現れ○大妖精の体が宙に浮く

ゴルドフェニックスは○大妖精の身体を掴み金色のオーラを発しながら猛スピードでスパイダーファンガイア達に突撃する

「え、ちよつ!?!まっ!?!」

「死ねええええ!!」

『ぎゃああああああ!?!』

○大妖精のエターナルカオスをくらった3体は爆発し○大妖精はTチルノのそばに

戻る

「チルノちゃん大丈夫!?!動ける!?!」

「大丈夫だよ、大ちゃん。それより!何その金色ライダー!あたいより目立ってずるい!」

「ええ〜…」

Tチルノの言葉にO大妖精はたじろぎTチルノはよろよろと立ち上がりサバイブ【吹雪】のカードを取り出す

「デスト!ちよつとふらつくけどまだいくよ!」

Tチルノに呼ばれたデストワイルダーはコクリと頷く

Tチルノの持っていたデストバイザーは全体的に大きくなり戦斧槍の姿になりデストバイザーツヴァイとなる

『SURVIVE』

Tチルノはデストバイザーツヴァイにサバイブ【吹雪】のカードを入れるとTチルノの周りに吹雪が舞い白銀の身体の所々に金色の線が入り胸には白虎の顔の模様が現れる、フェイスの側頭部は刺々しさが増し脚の装甲も強化されたタイガ サバイブになった

デストワイルダーの姿も変わりゴツかった身体はスマートになり二足歩行から四足

歩行へ、顔の牙も大きくなり白いサーベルタイガーのような姿、デストパニツシャーへと姿を変える

「グオオオオオオ!!」

デストパニツシャーは荒々しく吼え先程の名誉挽回をしようとしている

「大ちゃん!金と銀!2人で目立ってやる!」

「うん!やろう、チルノちゃん!」

タイガサバイブになったチルノ(以下TSチルノ)とO大妖精は互いに武器を構え狩る獲物を定める

「大ちゃん、あの黒くてでかいクモにしよ」

「なんで?」

「大きいから目立つし強そうだから!」

「わかった!」

TSチルノは走りO大妖精は地面をスライドするようにヨロイツチグモに近づいていく

この二人の危険度が跳ね上がったのを本能で感じとったのか他のメンバーを相手にしていた怪人達が二人を狙いにくる

「ボボデボソグ!」

「データには無いサブイブ！興味深いがリスクが高すぎるからな！死んでもらうぜ！」

「コロス！」

「…」

ズ・グモン・バ、スパイダードーパント、スパイダーアンデッド、タランチュラアンデッドが二人に襲いかかるが二人は怯むことなくバイザーにカードを入れる

『FREEZE VENT』『BRAST VENT』

○大妖精のフリーズベントで4体の動きは止まりそこへデストパニツシャーの口から放たれた絶対零度のビームが4体の身体を本当に凍りつかせる

「邪魔!!」

二人は自分達のバイザーで凍った4体を叩き割るズ・グモン・バとスパイダードーパントはそのまま砕け散ったがアンデッドの二体はまだ息がある

「この二体は私が始末しておく！お前達は先へ行け！」

「ありがとうございます！」

「ありがとう！」

『ATACK RIDE BRAST』

「さて他のメンバーも手助けしないとな」

D 藍はブラストでアンデッド二体を消し飛ばし別のメンバーのところへ行く

TSチルノとO大妖精はツチグモ達のすぐ近くまで近づきカードを入れる

『FINAL VENET』

デストパニツシャーはバイクモードとなりTSチルノはそれにまたがり走り出しO大妖精はリターンベントで復活させたファイナルベントを再び使う

「おっと、これは小さくなった方が良さそうだね」

デストパニツシャー バイクモードから吹雪の竜巻を放ち三体の巨大クモを凍らせる

G萃香はその竜巻が味方の攻撃だとわかると元の大きさに戻り少し離れておく

「くっつらえー！！」

「はあああああ！！」

TSチルノのアイスエイジブレイクとO大妖精のエターナルカオスが凍った三体の巨大クモを貫き巨大クモ達は砕け散る

「予定とは違ったけど他の二体も倒しちゃうなんてさすがあたい達！」

「やったねチルノちゃん！さ、次も行こう！」

「うん！」

その時I早苗，O咲夜と自分達の相手がチルノと大妖精に倒されたおかげで援護に来たF妹紅とS慧音はタランテスワーム三体に苦戦していた

クロックアップに対抗できるのは今の状態では咲夜だけ

他の三人はガードベントなどで防御したりクロックアップが切れた瞬間を狙撃などしているが決定打が決められない

「こうなつたら！これを使いますか！」

I 早苗は腰に着けたジャツジメントカリバーを構え紀斗に教えてもらった番号を押しEnterボタンを押す

『サ・イ・バ・ン カ・イ・テ・イ』

ライジングイクサの身体の色はフアングジョーカーのように白と黒になりジャツジメントカリバーともう一つ裁判長が持っている木槌、ガベルを模したハンマー、イクサガベルを持つ

「さあ、裁判の時間です！」

「なんか映姫殿を思い出すフォームだな」

「だがクロックアップに対抗できるのか？」

「お任せください！縛鎖【容疑者確保】！」

ジャツジメントイクサに変身した早苗（以下J I 早苗）は地面をイクサガベルで叩く、すると地面から何十もの鎖が現れ周りを囲みその中の十数本が囲まれた中を罠のように張られる

「ギャツ!?」

「グゲツ!?」

「グッ!?」

「容疑者確保、完了。さあ、貴方方の罪を数えてあげましょう」

張られた鎖に触れたタランテスワーム三体はクロックアップをしていたにもかかわらず鎖に縛られ床に転がる

その目の前にJ I 早苗は歩いていきジャツジメントカリバーとイクサガベルを構える

するとJ I 早苗の後ろに巨大な天秤が地中から現れ片方の皿には白もう片方には黒と描かれている

「まず一つ目、貴方達は自分が擬態した人間を殺した」

J I 早苗がそう言うのと黒と描かれた皿に一つの黒い重りが乗せられる、それと同時にジャツジメントカリバーの刀身が3分の1黒く染まる

「二つ、ゲーム気分で連れ去った人間達を殺した。」

もう一つ黒の皿に黒い重りが乗せられそれと連動してジャツジメントカリバーが3分の2黒く染まる

「そして三つ!私を含め私の仲間を傷つけた!」

三つ目の黒い重りが乗せられると同時にジャツジメントカリバーの刀身が全て黒く染まり暗く光る

「判決、有罪！地獄で悔い改めなさい！有罪【死刑執行】！」

「「グギヤアアアアアアア！」」

J I 早苗は黒く染まったジャツジメントカリバーで三体を斬り裂く、するとタランテスワーム達から人魂のような物が飛び出し天秤に吸い込まれタランテスワーム達は爆発した

「これにて閉廷！」

その言葉と共に囲んでいた鎖と天秤は地中に潜り消えた

「あら、そっちは終わったの？」

「あ、咲夜さん。はい、こっちの三体は倒しました。私1人で！」

(うぜえ……)

そこへO 咲夜が戻り現状をJ I 早苗は胸を張って答える

「そ、そう。他の三体のワームも今リグル達と始末したところよ。後は」

「ええ、あのクモライダーだけですね」

件のクモライダーことネクアは今だ霊夢と戦っていた

『GUARD VENT』

「くそつたれが！くらいやがれ！」

「そんな攻撃いくらやつても無駄よ！」

ネクアはデイスパイダーリボンの胸部を模したアーマー、アラクアーマーを装備し展開するとそこから毒針を発射するがリュウキアームの炎で全て焼き払われる

「くそがああ！」

『FINAL VENT』

デイスパイダーリボンが近くの鏡から現れ周りに蜘蛛の巣をめちやくちやに張る

ネクアは飛び上がると蜘蛛の巣をトランポリンのように自分を飛ばすそれをめちやくちやに張られた蜘蛛の巣で繰り返すように飛びそれを繰り返すたびにそのスピードは速くなっていく

「さあ！どの方向から俺という名の弾丸が来るかわかるか！博麗の巫女お！」

「……」

B 霊夢は何も言わずに3枚のメダルを挿入しレバーを回す

「死ねえ！」

『カポーン カポーン カポーン シャチヘッド ウナギアーム タコレッグ シャウ
タアーマー』

ネクアがB 霊夢に激突する瞬間その音声が届いたがもう遅い、ネクアはB 霊夢の身

体を貫いた、しかし

「手応えが…無い?」

ネクアはすり抜けるようにB霊夢の身体を貫いた、その違和感の正体を見る為に振り向くとそこには先ほどとは違い全身青い装甲に包まれたオーズ シャウタコンボのよ
うな姿のB霊夢がいた

「残念ね、物理攻撃なら液状化してしまえば問題無い。私の考えは見事に当たってたわ」
「シャウタの液状化!?まさかオーズのコンボまで使えるのか!?!」

「そう、そしてあんたはもう終わりよ」

B霊夢は2枚のセルメダルを挿入しレバーを回す

『カポーン カポーン シャウタフィニツシュ!』

「はあ!」

「ぬお!」

「ギイツ!」

B霊夢は腕のウナギアームのオーズの物より機械的なウナギウィップを伸ばしネク
アとデイスパイダーリポーンを捕まえ引き寄せながら電気を流す

「がああああつ!?!」

「ギイイイイイ!?!」

そしてB霊夢は飛び上がり捕まえたネクアとデイスパイダーリボーンに足を向けるとタコレッグが巨大な水色のドリルとなる（ギガドリルの水色ver）

それが高速で回転しネクアとデイスパイダーリボーンに迫る

「水激槍【シャウタファイニツシュ】！」

「くそがああああああ!?!」

「ギシヤアアアアアア!」

1人と1体は爆発しそこにはB霊夢と壊れた蜘蛛のデッキだけが残った

「ふー、蜘蛛掃除完了♪」

第三十三幕 分かれ道くその2く

グループC

左側の通路を進むグループCのメンバー達は一つの巨大な機械的なドアの前に立っていた

この通路には他に扉も気になるような物も無くここまでまつすぐ来たというわけだ
「まったく、調べる部屋どころか物すら無いなんてつまらない通路だぜ」

「文句言わないの、そのおかげで私達は無駄に体力を消耗しないでいるんだから」

何の面白みも無い通路にB魔理沙は文句を言いSアリスがそれを注意する

「それじゃ行くぜ」

B魔理沙が一步踏み出すとドアはウィーンという音を発しながらひとりでに開く

「うお?!? ドアが勝手に開いたぜ!?!」

「あー、そういうや幻想郷は自動ドアがうちにくらいしかなかったか」

「そういうやそうだったね」

妖怪の山のメンバー以外は自動ドアに驚き甲とにとりは自分達の家くらいにしか自動ドアが無かったのを今更ながら思い出す

そしてB魔理沙達は部屋に入るがその部屋はどうかやら指令室か何かのようでないモニターやコンピューターが並んでいるが人影は見当たらない

「コンピューターが多いな、この地図や情報も入ってるか？」

「中々良さそうだから調べ終えたらバラして持って帰ろうか」

「それもいいな、俺の能力で修理も簡単だし」

甲にとりは既にコンピューターに夢中で情報を調べようとしている

キイイイインキイイイイン

『!?』

しかしいきなりかん高い音が聞こえ近くの何も映っていなかった画面からバズス
ティンガー ホーネットが飛び出し右手の針でにとりを狙う

「そんな攻撃くらうか！」

『GUARD VENT』

にとりは右手に装着している河童の皿を模したバイザー、カッパバイザーにカードを
挿入すると河童の甲羅を模した盾、カッパシールドがにとりの左手に装備されにとりは
カッパシールドでホーネットの針を防ぐ

「ギイ！」

「この私の新しい力！仮面ライダー幻浄（げんじょう）の力！とくと見せてあげるよ！」

今更だが幻浄の外見の説明をしよう

幻浄は黄緑色の身体に背中や身体のあちこちに甲羅を模した鎧が装備され右手には河童の皿を模したカツパバイザーを装備している

にとりこと幻浄（以外Gにとり）が臨戦態勢にはいると上からパチパチパチも拍手が聞こえてくる

そしてホーネット以外の全員が上を見上げるとそこには黄色と黒の蜂を模したライダーが天井に蝙蝠のようにぶら下がって拍手をしていた

「ご機嫌麗しゅう、幻想郷の方々！こんな所からと私のペットの挨拶を許していただきたい」

そのライダーはそう言うのと天井を離れ地面に足をつけるとデッキを外す

デッキを外した人としての姿はにこやかな笑顔を浮かべた爽やかそうな青年の研究員だった

「お前達も出てきていいぞ」

青年がそう言うのと先程のバズスティンガー ホーネットと同じように2人の人間が出てくる、1人は大柄で乱暴そうな男、もう1人は落ち着いた感じの女性

「おいおい、不意打ちで1人潰すんじゃないのかよ泉東」

「炎木、純一だって成功確率は低いって最初に言ってたでしょ。あんまりうるさく言わ

ないの」

「炎木、美和、今の攻撃は彼女達の実力を図るためだけのものだ。ここからは存分に暴れるぞ」

「おう！」「ええ」

「変身！」「」

三人は会話を済ませると自分達のデツキをかざしベルトに挿入する

炎木はイノシシの紋章の入ったデツキを、美和はイカの紋章が入ったデツキを、泉東は蜂の紋章が入ったデツキを挿入し変身した

炎木は赤い身体に胸にイノシシの顔が彫られ顔の口近くには鋭い牙が二本ありイノシシの顔を模した盾の形をしたバイザー、ボアバイザーを持った仮面ライダーに

美和は青い女性型の身体に後頭部にはイカの脚のような髪、そして左手にイカの形をした手甲型のバイザー、クラークンバイザーを装備した仮面ライダーに

泉東は黄色と黒を基調とした身体に背中には薄い蜂の羽根を持ち右手にザビーゼクターのように装備された蜂型のバイザー、ステインガーバイザーをつけた仮面ライダーに

「仮面ライダーラッシュャー！全員跳ね飛ばす！」

「仮面ライダーキヤトル、じっくり絞め殺してあげるわ」

「仮面ライダーバズビー、試してあげよう、お前達の力を」

「おめえらも出てこい！」

ラッシャーがそう叫ぶと部屋の床や天井、ミラーワールドから大量の怪人達が出てくる

メ・バチス・バ、ビーロード・アピス・ウエスパとメリトウス、ビーアンデッド、オクビ、そしてバズビーの契約モンスターであるバズステインガー ホーネット、ワスプ、ビー、フロスト、ブルームという蜂の怪人達

ゴ・ジイノ・ダ、ワイルドボアオルフェノク、ボアアンデッド、ウオートホッグファングア、そしてラッシャーの契約モンスターであるワイルドボーダーとシールドボーダーというイノシシの怪人達

メ・ギイガ・ギ、スクイツドオルフェノク、スキッドアンデッド、イカジャガーヤミーそしてキャトルの契約モンスターであるバクラーケンとウイスクラーケンというイカの怪人達

それらが甲やB魔理沙達の前に立ちはだかる

「こりやまた豪勢な歓迎だな」

「3人のライダーに大量の怪人達か、相手にとって不足は無いぜ！」

「とつとと片付けてここの情報を得るに限るわね」

「賛成ね、しかも1人だけなんか暑苦しいし」

「私の幻浄で冷ましてやるさ！」

「ふはははは！我と太子様の手にかかれれば此奴らなどすぐに片付けられるわ！」

「そんなこと言ってるおとすぐにやられるぞ」

「その通り、慢心はすぐに身を滅ぼす。気をしっかりしめていくぞ」

「なんか敵にあそこまでにこやかな笑顔されると君悪いですね」

「あやや、カメラで撮ってみましたけど本当ににこやか過ぎる笑顔ですね」

「どこか狂気じみた笑顔と感ずるのは私だけでしょうか…」

「さあ、開戦だ」

「やっちまえお前らああ!!」

『ウオオオオオ!!』

泉東の言葉と共に怪人達はB魔理沙達に襲いかかってくる

「上等だ！特殊弾ごちそうしてやるよ！」

『SHOOT VENT』

『『STRIKE VENT』』

甲とG雖は自分達の脚に装備されているスコープオンを連射しZ鈴仙はギガランチャーを、GにとりとR妖夢は自分達の契約モンスター顔の形をした手甲を装備しG

にとりは水流をR妖夢は黒炎を放つ

『GUARD VENT』

「効くかそんなもん！」

しかしそれらの攻撃をラッシャーはシールドボーダーを模した盾、ボアシールドで防ぎ、他のイノシシ型の怪人達も持ち前の武器や頑丈さで無力化している

「R部隊は前線で相手をねじ伏せろ！B部隊、C部隊はR部隊の後方で飛び道具や中距離武器で支援だ！」

「了解♪」

『SHOOT VENT』『SWING VENT』

バズビーはバズステインガー ビーの弓を装備し矢を放ちキャトルはイカの触手を模した鞭で近づいてきた者から攻撃しようと身構える

イカや蜂の怪人達も爆発性の墨や毒針を放ち甲達を防戦一方にしていく

「まずはあの陣形をなんとかしないとイケないわね、高速移動が出来るメンバーは相手を攪乱してちょうだい！」

「了解です！」

『ACCEL VENT』

「狙いはあの蜂野郎でいいな！」

「我にお任せを！」

「なら私はあのイカ女を相手するでしょう。」

『『『CLOCK UP』』』

○文はアクセルペントを使いK神子、K屠自古、H布都の3人はクロックアップでイノシシ型の怪人達を通りすぎながらゼクトクナイガン アックスモードやスラッシュダガーで攻撃しその後方にあるバズビーやキャトル達を斬りつけ連携を乱していく
「くっ!?クロックアップとアクセルペントか!炎木!美和!フォーメーションC!」

「了解!」

『SMOG VENT』『STAMP VENT』

「ハアッ!」

キャトルとラッシュャーはそれぞれのバイザーにカードを入れる

するとバクラーケンとウイスクラーケンは墨の煙幕を張り周りは何も見えなくなる

「煙幕か!」

「ぬおおお!?!何も見えん!?!何も見えんぞ!?!」

「落ち着け馬鹿布都!慌てれば敵の思うつぼだ!」

高速で移動していた4人は煙幕のせいで迂闊に動けなくなってしまう

「おうらっつと!」「フン!」

さらにラッシャーはワイルドボーダー、シールドボーダーと背中合わせになり3人同時に地面を思いきり踏みつける

「うわわわわ!?!」

「カードを使ったとはいえなんて踏みつけだよ!立ってらんねえぞ!?!」

踏みつけにより起きた揺れでフロア内のほぼ全員が立てなくなり行動が出来なくなる

『『CLOCK OVER』』』

さらに4人共クロックアップとアクセルベントの効果が切れてしまい元のスピードに戻ってしまう

「くっ!煙幕ならこれで!」

『ハリケーン プリーズ』

『フー!フー!フー!フー!、フー!フー!』

Wパチュリーは揺れで膝をついてしまうがハリケーンスタイルになり風で煙幕を晴らす。K神子達が動き出す前にバズビー達に見つかってしまった

「見つけたぞ」

「なっ!?!ぐわっ!?!」

「うっ!?!」

「くうっ!？」

空中からオオクビに乗ったバズビーや飛んでいる蜂の怪人達が針や矢を飛ばしキヤトルがクラーケンウィップで叩きつける

『FINAL VENT』

「4人まとめて終わらせてあげるわ♪」

「ギャオオオオ!!」

キヤトルがファイナルベントのカードを挿入するとウイスクラーケンとバクラーケンが合体し巨大な槍を持ったイカ、キングクラーケンになる

キングクラーケンは持っている槍を中心に脚を螺旋状にかため回り始めそのままK神子達に向かって突撃する

「さあくらいなさい!マリンラッシュユ!」

『きやあああああ!?!』

○文は能力で風でバリアを張るがスピードを少し緩めただけでキングクラーケンのマリンラッシュユをほぼ確実にくらってしまい4人の変身も解けて気絶してしまう

「クロックアップも目標物を見失ったり動きが止まれば脅威ではない。今のうちに厄介なその4人を完全に始末しろ!」

「させません!」

「ドラブ！4人を助けてください！」

『SHOOT VENT』『ADVENT』

「キアアアアア！」

泉東の言葉で4人の近くに寄ってくる怪人達をZ鈴仙はギガキャノンとギガランチャードで牽制しR妖夢が召喚したドラグブラッカーが空中の怪人達の攻撃を黒炎や尾で防ぐ

その間にR妖夢達は4人を後方に下げGにとりは一枚のカードを取り出しカッパバイザーに挿入する

『RECOVER VENT』

するとカッパバイザーから緑色の光が溢れそれが豊聡耳神子達にかかると4人の傷は瞬く間に消えていく

「これで大体の傷は消えた筈だよ。それにしても向こうも何も考えてないわけじゃないか…。こりやこつちも本気出さないといけないかね」

「そうですね、まだまだ上がいるのにこんなところで立ち止まってる訳には行きませんからね」

Gにとり、Z鈴仙、R妖夢はサバイブ【清流】【怒涛】【漆黒】のカードを取り出し、甲とG雖は腕に新しく付けられたスイッチを押す、Wパチュリー、B魔理沙、Sアリスは

インフィニティリング、ハイパーリング、新しい銀色に光るリングをつける

Gにとりのカツパバイザーはカツパの皿のパーツが所々に付いた近未来的なレーザー銃、カツパバイザーツバイに、Z鈴仙のマグナバイザーはガトリング銃2丁を合体させたような（リユウタロスの持つているシャボン玉製造機のシャボン玉が出るところがガトリングになってる感じです）マグナバイザーツバイに、R妖夢のブラックドラグバイザーはドラグバイザーツバイを禍々しくしたブラックドラグバイザーツバイになりそれぞれサバイブのカードを入れる

『SURVIVE』

Gにとりは緑と金の中国風の鎧を纏った幻浄サバイブに、Z鈴仙は胸や額に金色の牛の角を付け緑色のアーマーを装備したゾルダサバイブに、R妖夢は龍騎サバイブを黒くしより禍々しくさらに刺々しくしたりユウガサバイブに変身した

『Kシステム起動 MK―2へのシフトチェンジ問題なし、MK―2へのシフトチェンジ完了』

甲とG雛は元々銀色だった部分が金色になり額の角がクウガの角のようになったG
6 MK―2とG3―X MK―2になる

『インフィニティー プリーズ』『ヒースイフーダー ボーザバビュードゴーン！』『ハイパー！GO！ハイッハイッハイッ！ハイパーッ！』『ステイール ナウ』『ガアンギンゴ

ン ドツドツゴーン!」

W パチュリーとB 魔理沙はワイザード インフィニティースタイルとビーストハイパーに変身しS アリスは仮面の色が白銀にしているコートの中には仮面と同じ色の寶石が付き片手には鋼の槌『ステイールパウンド』を装備した白い魔法使い スタイルスタイルに変身する

「チツ、データには無かったサバイブか! インフィニティとビーストハイパー以外は全てデータ外! 総員気を引き締めていけ!」

「姿が変わったからなんだってんだ! まとめてぶつ飛ばしてやらあ!」

ラッシャーはS アリス達魔法使い組に向かってワイルドボアオルフェノク、ウオートホッグファンガイアと共に突進していく

「あんたの暑苦しいのはもう十分よ!」

「まったくね、ああいう手合いは苦手なのよ」

「私はあんまり嫌いじゃないぜ、ああいうの」

「それはあんたも同じだから!」

「ごちゃごちゃ言ってるじゃねえ!」

「あんたもうるさい!」

ラッシャーのボアバイザーとS アリスのステイールパウンドがぶつかり合い拮抗す

る

「今の私達にそんな直線的な攻撃が通るわけないぜ！」

「その通りよ！」

「ぐおお!？」

「がふあつ!？」

B 魔理沙のミラージユマグナムが火を吹きワイルドボアオルフェノクを吹き飛ばしWパチュリーのアックスカリバーが ソードモードがウオートホッグファンガイアを斬り裂いていく

『TUSK VENT』『DASH VENT』

「オラオラオラオラア!!」

ラッシャーは二枚のカードを挿入するとタスクベントでワイルドボウダーの牙のような鎧が装備されさらにダッシュベントでアクセルベント程ではないがスピードを上げる

「分かり易い攻撃ね、これでもくらいなさい！」

『バリアー ナウ』『バリアー ナウ』『バリアー ナウ』

「ふんっ!がっ!?!ごげっ!?!」

S アリスはラッシャーの目の前に地中から出した鋼の壁を出現させるがラッシャー

はそれを突き破る勢いだった、しかしラッシャーの腹の部分と顔にさらに飛び出てきた鋼の壁2枚がラッシャーの身体を上を吹き飛ばす

「決めてあげるわ！」

『イエス！スマッシュ！アンダースタンド！』

Sアリスの持つステイルパウンドに地中から飛び出した鋼が纏わり巨大な槌となりラッシャーを叩き潰そうとする

「そう簡単にやられてたまるか！」

『FINAL VENT』

ラッシャーの隣にワイルドボードとシールドボードが現れ合体し巨大な赤と青のイノシシ、クラッシュボードとなる

クラッシュボードはステイルパウンドに向け飛び上がり鼻先にボアバイザーを突き出したラッシャーが飛び乗りガイのファイナルベントのように突き進んでいく

「たあああああああ!!」

「ぬりやあああああ!!」

2人のぶつかり合いはしばらく拮抗していたが徐々にステイルパウンドが押されていく

「くっ！」

(今のままじゃ…負ける!)

「諦めるのは早いぜアリス!」

「私のライバルならそんなところで諦めてんじやないわよ!」

「え!?!」

『チョーイイネ!キックストライク!サイコー!』

『GO!キックストライク!』

気づけばB魔理沙とWパチュリーが近くまで来ていた

2人が相手していた2体はいつの間にかボロボロの状態でラッシャーの真下に倒れていた

2人は飛び上がりキックストライクのリングを使いスタイルパウンドにキックス
トライクを当て威力を上乗せする

「潰れろー!!」

「くっそおお!!」

「ブモオオオオオオ!?!」

「ぎやああああ!?!」

ラッシャーのファイナルベントは完全に押され下に倒れていた2体ごとラッシャー
とクラッシュブーダーは爆発しそこには壊れたデッキと3人の魔法使いだけが残って

いた

「邪魔だ雑魚共おお!!」

「ほらほら全て吹き飛ばしてあげるわ!」

甲とG雛はGX―08オルトロスとGX―05ケルベロスをして乱射し怪人達を吹き飛ばしている

「ぐおおお!!」

「ビブバ、ゴンソロポー!」(効くか、そんなものー!)

しかしゴ・ジイノ・ダとボアアンデッドが頑丈な身体で銃弾を受けながらも突進してくる

「うわつと!?!」

「危ないわね!」

2人が突進を避けると2体は後ろの壁にぶつかると

壁は粉碎され周りには瓦礫が飛び散る

「ま、ちようどいい具合に瓦礫も出してくれたしいいか」

「確かにそうですね」

2人は散らばったバスケットボールくらいの瓦礫を掴むと瓦礫は黒く染まった球体になる

「プレゼントだ！」

「ぎゅー」

甲がその球体をボアアンデッドにその球体を投げると球体は爆発しボアアンデッドを吹き飛ばす

「がああ?!」

「ダブザンザド!?」(爆弾だ?!)

「なんて言ってるか知らねーが、これがKシステムの効果だ」

「KシステムのKはクウガのKよ。クウガの手にした物を自分の武器に変換する能力を再現したのよ」

「火薬が入ってる物しか出来ねえがな」

「全員吹き飛ばしてやらあ！」

「消えてちょうだい♪」

甲とG雛は爆弾とGZ弾を組み合わせそれぞれケルベロスに一つとオルトロスに二つセットする

「フアイヤー!!」

『ギャアアアアアア!?!』

3発のGZ弾改が発射されその爆発で怪人達は爆発した

2人はワイヤーで死なないボアアンデッドとビーアンデッドを縛り見張っておく

「死になささい河童！」

「嫌なこつた！」

キャトルはクラーケンウィップでGSにとりを攻撃するがGSにとりはカツパバイザーツバイで撃つて弾き返す

『ADVENT』

「やつちやえゴジョウ！」

「パッー!!」

「ぐっ!?!」

GSにとりは契約モンスター、サガツパの強化されたサゴジョーを呼び出す（イメー
ジはデジモンのサゴモン、片手には沙悟浄の宝杖を持っている）

サゴジョーはウイスクラーケン達と持っている宝杖、沙宝娥を使い打ち合う

『DIVE VENT』

「ほいっと」

「えっ!?!地中に潜った!?!」

GSにとりはカードを挿入するとウイザードがドルフィンリングを使った時のようにザブンと地中に潜る

「ほいつ！ほいつ！ほいほいほいつと！」

「くつ！はつ！くそつちよこまかと！」

GSにとりはモグラ叩きのモグラのようにあちこちから上半身を出し一発撃つてはまた潜るを繰り返しキヤトルを翻弄する

「ああもうイライラするわね！こうなったら床ごと地獄へ送ってあげるわ！」

『RETURN VENT』

キヤトルはリターンベントを使うと先程使ったファイナルベントのカードが復活しそのままファイナルベントのカードを挿入する

『FINAL VENT』

「地獄へ落ちるがいいわ！マリンラッシュユ！」

キヤトルはキングクラーケンの上に乗る部屋天井からそのままマリンラッシュユを発動する

「ファイナルベントにはファイナルベントだ！河童の力を舐めんじやないよ！」

『FINAL VENT』

「カツパーーー!!」

サゴジョーが床に沙宝哦を突き刺すと床を突き破り巨大な鉄砲水が噴き出すと共にまるで暴走族のようなバイク、サゴジョーバイクモードになりそのまま鉄砲水の水流に

乗る

GSにとりは空中で一回転しサゴジョーバイクモードに飛び乗る

「激流【登竜突破】！」

「な!?!押し負けてるの!?!私達の方が!?!」

GSにとりの登竜突破はマリソラツシユを押し上げていき遂には上に乗っていたキヤトルごと貫通した

「ごめん…純…」

キヤトルとキンググラーケンが爆発し壊れたデッキが落ちてくる

そしてGSにとりは誇らしい顔でそれを回収しておく

「ソロでの初勝利！ひゃっほう！」

バズビーは5体のバズステインガー達とRS妖夢、ZS鈴仙と対峙していた

バズステインガー達は3体がバズビーの護衛、残り2体が攻撃するという作戦で2人を手こずらせている

バズステインガー達は3体が回転することで発生させるバリアで生半可な攻撃では突破出来ない

「あの3体が邪魔ですね、なんとかあの3体を倒せばいいんですが…」

「ならこれでも使ってみますか」

そうやってRS妖夢が取り出したのはストレンジベントのカード

「なるほど、一か八かの賭けですか。面白そうですね」

「ええ、いきますよ！」

『STRANGE VENT』

『CHAIN VENT』

「何っ!？」

『ギイツ!？』

5体のバズステインガーとバズビーを空中から現れた鎖が縛り動けなくさせる
「賭けはこちらの有利に進みましたね、それじゃ今のうちに殺っちゃいますか♪」

「そうですね、とつとと殺っちゃいましょう」

2人はそれぞれカードを出すがバズビーは近くにいたバズステインガー ビーに何かをさせていた

『TRICK VENT』

「!？」

いきなりバズビーの分身が5体現れRS妖夢とZS鈴仙の邪魔をしながら本人とバズステインガー達を助けだす

「まさかモンスターに口でカードを入れさせるとは…」

「くっ、状況はさらにキツくなりましたよ、これ」

「やれやれ、どうなるかと思ったが助かった。すぐさまファイナルベントのカードを入れなかったことを後悔させてやろう」

「こちらも数には数です！」

『TRICK VENT』

RS妖夢もバズビーと同じ人数まで分身し戦い始める

「私もやるわよ！」

『SHOOT VENT』

『LASER VENT』

ZS鈴仙は左肩にギガキャノンより一回りでかなくなったテラキャノンを装備しでかい砲弾を撃ちマグナビザーツバイからも2本の太いレーザーを撃ちだす

「ぐおっ!？」

「うわあ!？」

その攻撃に分身は2人消され他の分身やバズスティンガーもたじろぐ

(あの火力は厄介過ぎるな、しかしこちらは火力不足。なら決めてしまうか)

「早めに決めてやろう！」

『FINAL VENT』

「ならこちらも！」

「必殺技で勝負です！」

『FINAL VENT』

3人はそれぞれのバイザーにファイナルベントのカードを入れる

バズビーの周りにいたバズステインガー達は5体で合体し巨大蜂、クインステインガーになる

バズビーはステインガーバイザーをかかげるような体制になりクインステインガーの尻の針に足で掴まるとクインステインガーは回転しそのままナイトの飛翔斬のように突っ込んでくる

ZS鈴仙の隣にはマグナギガが一回りでかい装甲バイクになったようなモンスター、マグナテラが現れZS鈴仙はそれに乗る

RS妖夢の方は黒いドラグランザー、ドラグブランザーがバイクになったドラグブランザー バイクモードに乗り黒炎を纏いながら突っ込む

ZS鈴仙はマグナテラのキャノンやガトリング、レーザー砲全ての照準をバズビーに合わせ一斉放火をした

「死刺突！」

「一斉放火【エンドオブコズミック】！」

「黒炎「ドラゴンファイヤーストーム」！」

「おりやああああああ!!」

「く、くそおおお!!」

R S妖夢のドラゴンファイヤーストームとバズビーの死刺突がぶつかるが死刺突は貫かれ後ろのクインステインガーもエンドオブコズミックで跡形も無くなり壊れたデッキだけが床に落ちた

「撃退完了ですね」

「ええ、他の皆も終わったようですね」

G Sにとりはその後バズビーとラツシャーのデッキも回収しなんとか無事だったコンピュータでここの情報を少しでも得ようとするがほとんどのデータは消されていった

しかしこの場所のデータだけが残っていた

「こりやあ驚いたな…」

「うん、まさかここが奴らのアジトの本拠地ですら無かったとはね」

第三十四幕 分かれ道 〳その3〳

グループA

グループAのメンバーは真ん中の通路を進んでいくが通路の途中には部屋は無く下へと続く階段だけがあった

そしてその階段を下がっていくとそこはまるで地下鉄のホームのような場所だった、止まっている電車はガチガチに武装された装甲列車で先頭車両の先端なんてゼロライナーのような巨大なドリルだ

「なんだここは、地下鉄のホームか？」

紀斗は辺りをキョロキョロと見回し昔乗ったことがある地下鉄を思い出ししながら観察する

「これ、列車よね？紫が出したことのあるやつよりすごいゴツいんだけど……」

「お兄ちゃん、なんかあれカッコいいね！」

「まあ確かに男のロマンも詰まってそうなフォルムをしているしな。甲とにとりが見たらさらに魔改造しそうだ」

「なかなか面白そうな乗り物ね！」

「総領嬢様、変なボタンとかあっても押さないでくださいね」

「やれやれ、こんなところでそんな呑気にしてられるあんた達の精神が妬ましいわ…」

紀斗達が列車の外装を調べているとプシューという音と共に装甲列車の外殻の1部が開くとドアが現れそのドアが開くと中から見覚えのある男が2人とその部下である白衣の集団が列車から出てくる

片方はゾディアーツ研究を主とした幹部、Z

そしてもう片方の男は…

「おやおや、元氣そうですね、紀斗君。そしていつかの兎ちゃんと狼ちゃんも」

「久しぶりだね、紀斗君」

「てめえは!？」

「あいつは!？」

紀斗とV影狼は片方の男の姿を見て驚く

その男は紀斗を幻想郷で最初に激怒させ紀斗に最初に殺された男、神中 竜次

「まだ、洗脳は解けて無いんだね…」

「てめえ竜次、やつぱりゾンビになつてやがったか」

睨む紀斗とそれを悲しそうに見る竜次を見てOフランはV影狼に小声で聞く

「ねえ、あのウザそうなイケメンって誰？お兄ちゃんという関係なの？」

「あいつも財団Xのメンバーで以前私もあいつの取り巻きにやられそうになってね。その時紀斗に助けてもらって私もあまり知らないけど印象としては自分達を絶対だと考えて他の他人の意見は全く聞かないって感じだね」

「何それ、最悪じゃん」

「いいのは顔だけってことね、つまらなそうな人間」

V 影狼の説明を聞いてOフランはドン引きしNレミアはくだらない物を見る目で竜次を見る

「そんであいつは紀斗が最初に殺した人間さ、あいつを殺した後にお師匠様に慰めてもらってから紀斗は覚悟を決めてたけどね」

「じゃあなんで1度死んだ人間が生きてるんだい？どこぞのキョンシーみたいに血色も悪い様には見えないし…」

I てゐの言葉にH勇儀が疑問を言う

「NEVER、財団Xが以前手に入れた技術の一つだ。死人の身体を科学技術で改造し復活させる、おそらくそれであの野郎は生き返ったんだらうよ」

「さすが紀斗君、正解ですよ。その通り彼はNEVERとして蘇りました。さらに…新しい力も与えてね」

Zがそう言うのと竜次はトランクから12個あるホロスコープスイッチの一つとメ

メモリを取り出しメモリをスイッチに挿す

『!?』

『UNION』

すると残りのホロスコープスイッチが浮かび上がり竜次の持っているスイッチと一つになっていく

そして12個全てのスイッチが合体するとホロスコープスイッチは一回り大きくなりスイッチ部分には12星座全てのマークが描かれている

「これが僕の新しい力だ！」

竜次は合体したスイッチを押すと竜次は自身の何倍もの大きさのコズミックエナジーに包まれそれが晴れるとそこにはホロスコープをごちゃ混ぜにしたような巨大なゾディアーツがいた

『ガアアアアアア!!』

「おいおい、マジか、以前のプトティラドーパント並じゃねえかよ……」

竜次が変身したゾディアーツ、ホロスコープスキメラゾディアーツ（以下HKZ）はまさに異形の怪獣という風貌だった

大きさは以前のプトティラドーパント並の大きさで下半身はスコピオン・ノヴァ、胴体はキャンサー、6本ある腕はキャンサー、リブラ、ピスケス、タウラス、アリエス、

サジタリウスの巨大化した腕でそれぞれの武器も持っている、背中にはヴァルゴの翼にカプリコーンのギターも装備している、顔はレオになっていて腰にはジェミニの赤と青のカードを装備している

「この力で君の洗脳を解いてあげるよ、紀斗君」

巨大化したせいで野太くなつた声でHKZはそう言うが紀斗はうんざりした顔で言い返す

「結局お前は何も学習してないらしいな、もうお前の戯言は聞き飽きた。今度こそ本当に地獄に送ってやるよ。変身」

『KAMEN RIDE DECADE』

紀斗はディケイドに変身するとさらにケータツチを取り出す

『KUUGA, AGITO, RYUKI, FAIZ, BRADDE, HIBIKI, KABUTO, DENRO, KIVA FINAL KAMEN RIDE DECADE』

紀斗はケータツチのライダーズクレストを順に押し最後にディケイドのマークを押してディケイドライダーのバックルを横に付け替えバックルのあつた場所にケータツチを付ける

すると肩から胸にかけて9枚のライダーカードを貼り付け額のディケイドクラウンにはディケイドのカードを貼り付けたディケイド コンプリートフォームに変身した

「かたをつけてやるよ、英雄気どりの馬鹿野郎！」

「私達も加勢に行きましようか」

「おっと、そうはいきませんよ、お嬢さん方」

紀斗の加勢に入ろうとするNレミリア達の前にZが立ちふさがりその後ろに大勢の白衣の集団が整列している

「貴方方の相手は私達です」

そう言うとZはスイッチを取り出しオピワークスゾディアーツに変身し後ろの白衣の集団もメモリやスイッチ使って変身したりワームやオルフェノク、アンデッドの姿になり戦闘態勢に入る

「仕方ないわね、蹴散らしてあげるわ！」

紀斗 VS HKZ

『ATTACK RIDE REKKA DAIZANTOU』

「どりゃあー！」

「くっ!? だけどそのなら問題無いね！」

紀斗は烈火大斬刀でアリエスの腕を斬り裂くがすぐに両肩のアクエリアスの壺から水が湧き出て斬り裂かれた腕は元に戻る

(やっぱりあのアクエリアスの壺が厄介だな…、まずはあそこを壊さないと話にならねえ)

「今度はこつちからだ！裁きの矢をくらえ！」

H K Zはサジタリウスの腕の弓の弦を同じ段のアリエスの腕が引き何十もの巨大な炎の矢を発射する

「邪魔だ！」

『FAIZ KAMEN RIDE BLASTER』

紀斗はファイズのマークを押すと紀斗の隣にファイズ ブラスターフォームが現れ紀斗と同じ動きをする

『FINAL ATTACK RIDE F A F A F A F A I Z』

紀斗はファイナルアタックライドのカードを挿入するとファイズ ブラスターフォームと共にフォトンバスターを放ち炎の矢を全て撃ち落としH K Zの肩に当てようとするがH K Zはピスキエスの腕から水流弾、キャンサーの腕から泡の光線、口から咆哮を放ちフォトンバスターを相殺する

「君の実力はそんなものかい紀斗君？」

「見下してんじゃねえ！」

『HIBIKI KAMEN RIDE ARMS』

『FINAL ATTACK RIDE HI HI HI HIBIKI』

今度は装甲響鬼と両肩の壺を狙って横一線に巨大な炎の刃で斬りつけるがHKZは1番上の腕であるキャンサーの左腕とピスケスの右腕にでガードする

「ぐあつ!?!ふふふ、惜しかったけどまだまだだよ」

「くそっ!」

右肩の壺はピスケスの腕ごと斬り裂けたが左肩の壺はキャンサーの腕に守られ無事だった

しかもキャンサーの腕は焦げ目がついただけでまだまだ余裕そうだ

首も斬れはしたがすぐに左肩の壺から湧き出た水でくつつき全ての傷が治ってしまった

（あの壺さえ壊せば勝機は幾らでも湧いてくるがキャンサーの部分の防御力が高すぎる…、こうなったらあれを使うしかないか）

紀斗はそんな思考を巡らせながら新しいコンプリートカードを出していた

一方Nレミアア達の方はオピウクスゾディアーツ達に苦戦を強いられていた

『SWORD VENT』

「くたばりなさい!」

「ぐあああああ!?!」

A天子がアビスセイバーでマグマドーパントを斬り裂き倒す

しかしオピウクスゾディアーツの蛇が近くに寄ってきて口から紫色の光を吐き出し倒れて爆発したマグマドーパントに浴びせると巻き戻しのようになりマグマドーパントは蘇り再びA天子に襲いかかる

「ああもう！いくら倒してもきりがない！」

「落ちていくください、総領嬢様！ヤケになれば相手の思うつぼです！」

「ふっふっふ、蛇遣座は神話の中で死者をも蘇らせたアスクレーピオスの星座。倒されてすぐの怪人なら幾らでも蘇り出来るんですよ」

「ならあんたさえ倒せばいいんですよ！」

「妹様！無闇に突っ込んだじゃ駄目です！」

Oフランはベノサーベル片手にR美鈴の制止の声も聞かずにオピウクスゾディアーツに突っ込む

「潰れる！」

「せつかちな子だ、そんな生き急ぐと人生損してしまうよ」

「へ？がつ!？」

オピウクスゾディアーツはため息をつきながら身体から蛇を伸ばしOフランに巻きつけるとOフランに噛みつかせる

「ぐっ、ああ……ああ……」

「フラン!？」

○フランは数秒苦しむが急に力が抜け動かなくなる

Nレミリアの声も聞こえていないようだ

「そろそろいいですかね」

オピワークスゾディアーツは○フランの身体を離すと○フランはうつむいたまま動かない

「フラン、大丈夫?」

「……………」

Nレミリアは○フランに声をかけるが○フランはうつむいたまま何も言わない

周りの怪人達はそんな状況をクスクスと笑いをこらえていて攻撃をしてこないがあざ笑っているような感じだ

「フラがつ!？」

いきなり○フランは顔を上げるとNレミリアにベノサーベルで攻撃してきた

「お嬢様?! 妹様、一体何を!」

「……………」

しかし○フランの返事は無くいつもと違う紅く光る目でこちらを見据えている

「彼女を私に突っ込ませたのは悪手でしたね、蛇遣いが蛇に手を噛まれるわけがないでしょう」

「まさか!?!」

「ええ、彼女は今私の操り人形ですよ」

オピウークスゾディアーツは愉快そうにNレミアアを嘲る

「さあ、見てください愛する姉妹同士の殺し合いを!」

「とんだ外道ね、あんたも」

「褒め言葉ですよ、私にとっては」

場面は変わり再び紀斗とHKZの戦い

紀斗はケータツチを取り外すもコンプリートカードを抜き新しく出したコンプリートカードを入れマークを押ししていく

『KUGA, AGITO, RYUKI, FAIZ, BRADDE, HIBIKI, KAB
UTO, DENIO, KIVA, W, OOO, FOURZE, WIZARD』
『FINAL KAMEN RIDE DECADE』

ディケイドの貼り付けているライダー達のカードにさらにダブル、オーズ、フォーゼ、ウィザードが加わりライドブッカードが黒と白を主とした色合いだったのが金と銀に変わる

「これが仮面ライダーディケイド パーフエクトコンプリートフォームだ」

その姿にH K Zは一瞬気圧されるがそれを隠すように叫ぶ

「カードが増えて武器の色が変わったくらいで勝てると思うなよ！眠れ！」

H K Zはアリエスの腕のコツペリウスとタウラスの腕のグアンナを紀斗へ向け眠らせるオーラと魂を抜くオーラを放つ

「遅いぞ」

『ATTACK RIDE HYPER CLOCK UP』

紀斗はバックルにカードを入れるとハイパークロックアップを発動する

瞬間紀斗以外の世界の全てがほぼ止まっているような感覚に襲われる

しかし1mmずつくらいでオーラなども移動はしているので時が流れているには変わらない

紀斗はオーラを避けて通るとH K Zの尻尾を掴み背負い投げの要領で投げ空中に滞空している間に肩を何度も斬りつけるが破壊まではいかない

「ぐああああ!？」

そしてハイパークロックアップは解け世界は元のスピードに戻る

そして同時にH K Zは地面に落ち肩の壺は湧き出た水で修復される

「思ったよりも硬いなあの壺、やっぱり必殺技くらいの威力がないと駄目か」

「よくもやってくれたね紀斗君、本気でいくよ!」

「んなもん最初から来いってんだよ!」

H K Zは飛び起きるとジェミニの赤と青のカードを投げつけさらに口からの波動、ピスケスの水流弾、キャンサーの泡の光線、サジタリウスの炎の矢を放ってくる

「邪魔だ!」

『W FULL KAMEN RIDE ULTIMATE XTREME』

紀斗がケータツチのダブルのマークとFと描かれたマークを押すと紀斗の隣にダブル サイクロンジョーカーアルティメットエクストリームが現れる

『FINAL ATTACK RIDE DADA DAW』

「たあああああ!!」

紀斗はカードを挿入し発動するとダブル CJUXは赤と緑のオーラを纏ったUPリズムソードを構え紀斗は同じ色のオーラを纏ったライドブッカーを構え同時に上段からの袈裟斬りを放つと巨大な赤と緑の2本の斬撃が放たれ全てのH K Zの攻撃が破壊されH K Zの身体も胴体が三つに分かれるが壺を破壊出来なかったせいでまた治つてしまう

「ぐつああ…」

(なんだこの威力は!? さっきまでとは桁違いじゃないか!?)

いくら回復してもダメージはある、さっきまでのコンプリートフォームでの攻撃とあまり威力は変わらないだろうと油断していたHKZは回復してはいるが残ったダメージに苦しんでいた

「壺を外したか…、次は塵も残さねえ」

「ッ!?!」

紀斗が放った殺気によってHKZは怯み一步後ずさつてしまふ

紀斗はそんなHKZを睨みながらケータツチの全てのライダーのマークを押す

『KUGA, AGITO, RYUKI, FAIZ, BRADY, HIBIKI, KAMETO, DENRO, KIVA, WOOO, FOURZE, WIZARD KAME
N RIDE ALL RIDERS』

紀斗の後ろにデイクイドと鎧武を除く全ての平成主人公のライダーの最強フォームが現れ紀斗はカードをバツクルに挿入する

『FINAL ATTACK RIDE ALL R R RIDERS』

「はあっ!」

紀斗とライダー達は飛び上がり一回転すると全員ライダーキックの体制に入りHKZへと1人1人が巨大なオーラを纏いながら突き進んでいく

「来るな!来るな!僕は!僕は英雄なんだあ!!」

H K Zはジュエミニの分身爆弾を生み出すと圧縮しそれを紀斗達に向けて他の腕の攻撃と共に撃ちだす

「もうお前の戯言は聞き飽きた！地獄へ！落ちろおおおお！！」

「う、うわあああああああ！！」

紀斗達のライダーキックはH K Zの攻撃を突き破り14発のライダーキック全てがH K Zの身体を貫きH K Zは爆発した

「がっはっ!!」

H K Zがいた場所には巨大なクレーターが出来その中心で竜次は倒れていた

しかしその身体は粒子化し始めていた、それを見て竜次は驚き狼狽える

「え!? な、なんだよこれ！僕の身体が消えて！聞いてない！聞いてないぞこんなの!!」

「無様だな、英雄気取り」

「の、紀斗君！助けてくれ！僕は消えたくない!」

紀斗はそんな竜次に近づき竜次は紀斗の足元にすがりつき助けをこう

「知るか!」

「ぐあっ!!」

紀斗は竜次を蹴り飛ばし睨みつける

「そうなったのはてめえの責任だろうが！他人に聞かされたことを鵜呑みにして迷惑を

かける相手の言い分なんて聞きやしなかったお前自身の責任だ！今更助けをこいたつて誰もてめえを助けやしないんだよ」

「そ、そんな…」

紀斗の言葉に同調するように竜次の身体の粒子化も激しくなる

「嫌だ！僕は消えたくない！僕は…！」

「もう二度と会いたくねえな、あんな奴とは。あばよ、財団Xの操り人形」

竜次の身体は完全に消滅し紀斗はレミリア達の援護に向かう

第三十五幕 分かれ道 〳その4〵

Nレミリアは操られたOフランとそれぞれの得物で打ち合っていた、いや、正確にはOフランからの攻撃をNレミリアが受け止めいなしているという状況だ

「ああもう！いい加減正気に戻りなさいよフラン！」

「……………」

しかしいくらNレミリアが呼びかけても答えはかえってこない、Oフランは自我のこもっていない赤く光る目でNレミリアを獲物として見て攻撃を仕掛けてくるだけだ

他のメンバーも倒してもすぐ復活してくる怪人達が足止めしていて2人の元には行けない

「はっはっは！いいですねえ、その屈辱的だという表情！さあ、フランさん！やってしまいなさい！」

『UNITE VENT』

Oフランはベノバイザーにユナイトベントのカードを挿入しジェノサイダーを召喚する

「シャアアア！シャア？」

現れたジェノサイダーは目の前の相手を見るがそれは自分の契約者であるフランの姉、レミリアの変身したナイトでジェノサイダーは困惑の声を出す

しかもOフランは明らかに正気ではない状態でジェノサイダーは周りを見渡すと一体だけこちらを愉快そうに見ている怪人がいるのに気づく

「シャアアアアア!!」

「ジェノサイダー!そいつに闇雲に向かっていつちやダメよ!」

「やれやれ、ペットが飼い主を助けるために奮闘ですか。まるで三流のシナリオですね、くだらない」

ジェノサイダーはオピウクスゾディアーツに向かって突進していきNレミリアが静止の声をかけるが自分の主を助けようとする思いで聞こえていない

「私を守りなさい、フラン」

「……………」

「シャツ!?!」

オピウクスゾディアーツに突進していくジェノサイダーの前にOフランがベノサーベルを構え立ちふさがる

フランの行動にジェノサイダーは止まり迷ってしまふ

フランを突き飛ばすべきか否か、その一瞬の迷いが命取りだった

「捕まえましたよ、ジェノサイダー君」

「シヤツ!? シャアアア!!」

ジェノサイダーの死角から忍び寄っていたオピウークスゾディアーツの蛇にジェノサイダーは縛られ身動きが取れなくなってしまった

「ジェノサイダー!」

『TRICK VENT』

Nレミアアは8人に分身しジェノサイダーの救出、Oフランの拘束、オピウークスゾディアーツの相手と2:3:3で分かれる

それぞれのグループはジェノサイダーに巻きつく蛇を切り裂こうとしたりOフランを取り押さえようとしているしかしオピウークスゾディアーツの相手をしているグループはかなりの苦戦を強いられている

「卑怯者のくせに中々やるわね!」

「仮にもこの幹部ですからね、サバイブにもなっていないナイト3体程度さばけなくては務まりませんよ」

「言ってくれるわ!」

Nレミアアは全員がウイングランサーを装備しそのうちの1人はウイングウォールを装備しているが3人分の剣撃をオピウークスゾディアーツは硬質化させた蛇を剣の

ように使いいなしている

「しかしそれでも私自身が体を動かすのはあまり好きじゃないんですね。だから……これでもくらいなさい！」

「なっ!? 毒ガス!？」

オピウクスゾディアーツは身体に纏っている蛇と硬質化させた蛇の口から紫色のガスを吐き出させる

それを吸ってしまったNレミリア達は身体に力が入らなくなり地面に倒れてしまふ

「安心してください、ただの即効性の麻痺毒ですよ。あなたへのトドメはあなたの妹さんに刺してもらいますからねえ」

「ほんつ…と、腐ってるわね、あんた」

「ふっふっふ、お褒め頂き光栄ですねえ」

オピウクスゾディアーツはNレミリアからの罵倒も気にせずNレミリアに手を触れようとすると真横から飛んできた火球を顔面にくらい転がる

「お嬢様達にこれ以上手出しするなこの外道！」

「美鈴…」

火球を放ったのはドラグクローを装備したR美鈴だった

彼女が相手していたスネークオルフェノクは倒れ気絶しているようだった

「気を纏った拳で気絶させました、紅魔館の名にかけてこれ以上お嬢様達を傷つけさせはしません！」

「門番風情がやってくれますねえ！あなたも私の毒の餌食に『ATTACK RIDE PYROKINESIS』なつがあああ!？」

R美鈴の攻撃に怒るオピワークスゾディアーツの身体が鳴り響いた電子音声と共に突如燃え上がる

「ぐわあああ!?!」「あちい!?!何で急に火が!?!」「誰か火を消してくれえええ!?!」

身体が突如燃え上がったのはオピワークスゾディアーツだけではなく他の怪人達も全員同じ状態だった

そしてフランを除くグループAのメンバー達が全員呆然としているとゆっくりとした足音と共に殺気を放ちながら紀斗が現れた

「Z、てめえ俺の妹分と仲間達に何してんだ?」

紀斗の声は静かながらもはつきりとした怒気を孕んでいた

実力者揃いであるその場所にいた全員が一瞬とはいえ恐怖を感じるほどまでに

「はあ、はあ、くっ!不意打ちとはやってくれますねえ!君といいそのこの門番といいその程度しか出来ないということですくあつ!?!」

「黙れ、俺の仲間を…馬鹿にすんじゃねえ!」

「ぐおお!?!」

紀斗は喋っていたオピウークスゾディアーツの首を掴み持ち上げると地面に叩きつける

オピウークスゾディアーツは地面をバウンドし転がると紀斗を憤怒の表情で睨みつける

「少しおとなしくしてろ」

『ATTACK RIDE BIND』『ATTACK RIDE BIO』

「ぬおっ!?!鎖と蔦!?!くっこのていど!」

紀斗が2枚カードを挿入するとオピウークスゾディアーツの周りの地面に魔法陣と蔦が現れ魔法陣から出てきた鎖と蔦がオピウークスゾディアーツを地面に縛りつける

「さて、今解毒してやるからな、レミアア、フラン」

「でも紀斗、あなたそういう薬持ってるの?」

紀斗はレミアア達の方を向くといつも通りの声で話しかけるがレミアアは自分達の毒に対する解毒剤の有無を聞く

「安心しろ、そういうのに適したカードがあるから」

『ATTACK RIDE DOLPHI』

紀斗がカードを挿入すると紀斗の右肩にビーストのドルフイマントが装備されドル

フィマントから青い光を放ちNレミリアとOフランにかける

「麻痺が治った!？」

「…あれ？私何してたんだけ？てゆうーかお姉様なんで私を拘束してるの？」

「シヤアアアア！」

「ジエノサイダー？私いつユナイトベント使ったっけ？」

ドルフィマントの効果によりNレミリアの麻痺は解けOフランの洗脳毒も解毒され元に戻りそのことにジエノサイダーは歓喜の声をあげる

「調子に乗るなよこのド低脳共がああ!! 貴様ら全員ぶち殺し確定だあ!!」

「化けの皮が剥がれたな、地の性格を出しやがった」

オピウークスゾディアーツは鎖と鳶を引きちぎり怒り狂った表情で紀斗達を睨みつける、さらにさつきまでの丁寧な口調は完全に無くなり乱暴な口調になっていた

「いくら死のうが復活はまだ出来るんだよお！蘇れてめえら！」

オピウークスゾディアーツは再び紫色の光を放ちやられたばかりの怪人達を復活させる、しかし復活させた怪人達の士気は明らかに低く疲れきっている

いくら復活したとはいえ痛みはあるし体力も無限ではない何度も何度も復活させられたせいで怪人達も疲労がピークにきているのだ

「チッ！その程度でへばってんじゃねえよ！」

「す、すいません」

その部下達の様子にオピウークスゾディアーツは苛立ち部下達を見下す

「使えねえ奴らだ！こうなったら俺自身で皆殺しにしてやる！超お新星い！」

オピウークスゾディアーツの身体の星座が輝きオピウークスゾディアーツの身体が巨大化していき空中に浮かぶと元のオピウークスゾディアーツの上半身を中心に巨大な蛇の頭を8つ持つオピウークス・ノヴァとなる

「こつちもでか物になりやがったか、めんどくせえ」

「てめえらから食いてえが先にこつちだ！」

「へ？乙様何をsバクン

『!?!』

オピウークス・ノヴァはいきなり近くにいた自分の部下を8つの蛇のうちの1体に食わせた、その行動にオピウークス・ノヴァ以外全員が驚愕する

「仲間を…食いやがった!?!」

「ふん、薄味だな。ふん！」

オピウークス・ノヴァの部下を食った蛇は口から何かを吐き出す

吐き出されたものは蛇だった、オピウークス・ノヴァの蛇と同じくらい巨大な大きさの大蛇だった

「シャアアアア！」

「まさかこいつ…」

「ハハハハハハ！そう！俺は取り込んだ生物を自分の蛇に変えられるんだよお！これならへばつてて使えねえ部下共でも有効活用出来るつてもんだらお？」

「まさかここまで腐つてるとはね」

「人として許せませんね」

「とにかくあいつにこれ以上食わせるわけにはいかねえ！あいつの蛇から片付けるぞ！」

『えええ！（はい！）（うん！）（あいよ！）』

紀斗達はオピウクス・ノヴァの蛇を1体につき1〜2人で攻撃しこれ以上蛇を増やさせないように妨害する

『ATTACK RIDE TRIGGER FULL BURST』『STRIKE
VENT』

「オラア！」「たあ！」「邪魔よでか蛇！」

紀斗やR美鈴、A天子はトリガーフルバーストやストライクベントによる火球や水流を放ち逃げ遅れている怪人を食べようとしている蛇を攻撃し怯ませる

「邪魔くせえなあ！うぜえんだよおおおお！！」

『シヤアアアアアアアア!!』

オピウクス・ノヴァが苛立ち叫ぶと8つの蛇は全員頭を上げ全ての口から紫色のガスを吐き出す

「全員俺の周りに集まれ！」

『ATTACK RIDE METAL TWISTER』

紀斗はメタルシャフトを装備しグループAのメンバーを自分の周りに集める

「伏せてろよ、お前ら！はああああ!!」

紀斗は旋風を纏ったメタルシャフトを上に掲げ両手で回転させる、すると旋風は竜巻となり近くまでできていた毒ガスを吹き飛ばしていく

そして毒ガスが晴れると周りは毒ガスで死にそうになっている怪人だらけでオピウクス・ノヴァは身体から細い蛇を何十本も伸ばしどんどん自分の大蛇の口に入れていき新しい大蛇を生み出していた

「ひやはははは！致死性の猛毒だ！怪人なら少しの時間は耐えられるからな！充分食う時間はあつたぜ！」

紀斗達の周りには今も増え続けている多数の大蛇、目の前には自分の部下を喰らいながら高笑いしているオピウクス・ノヴァ、戦況はかなり悪いが紀斗は冷静だった

「全員、俺が最初渡したアイテムを使ってくれ。一気にぶつとばすぞ」

「大丈夫なのそれ？相手に自分達からカード見せるようなもんじやない」

「問題無い、そう短時間で強化フォームに対策はとれないしなにより俺の仲間を弄んだあの野郎は完膚無きまでにぶちのめきないと気が済まねえ」

「ふふふ、いいわねその案。私は乗るわ、やられっぱなしはムカつくもの」

「確かにね、やるならパーっと派手にやった方が面白いしね！」

俺の出した案にNレミアは多少不安を覚えるが俺の意見を聞くとD幽香やH勇儀を皮切りに全員が賛成する

そして紀斗以外のメンバー達はそれぞれ自分達の強化アイテムを取り出す

『SSURVIVE』

「響鬼！装甲！」

『HYPER CAST OFF』『CHANGE HYPER BEETLE』『CHANGE HYPER HOPPER』『CHANGE HYPER WASP』

Nレミア、R美鈴、Oフランは以前変身したサバイブに、R衣玖は弓のような形状になったエビルバイザーツヴァイを持ち金色の装飾が装備されたライア サバイブに、A天子はメガロドンを模したバズーカ砲型のバイザー、アビスバイザーツヴァイを持ちより鋭角的なフォルムになり身体が一回り大きくなったアビス サバイブに、V影狼は自力で動くことのできる自立駆動型のカメレオン型バイザー、バイオバイザーツヴァイ

を肩に乗せ肩や胸にカメレオンの顔を模した意匠が装備されたベルデ サバイブに、I
てゐは右膝に分厚くなり刺々しさを増したガゼルバイザーツヴァイを装備し胸にギガ
セールを模した意匠が装備され頭や両肩の角が大きくなったインペラー サバイブに
変身した

H勇儀は紀斗が出しておいたディスクアニマル達を身に纏い装甲響鬼に、D幽香はカ
プト ハイパーフォームの装甲を赤の部分黒くしたカプト ハイパーフォームの垂
種のようなダークカプト ハイパーフォームに、Kパルスイは両手足にアンカージャツ
キが装備され下半身は装甲が少し展開されたような緑色、上半身は同じように装甲が少
し展開されたような銀色、そして顔はダブルのように半分が銀色もう半分が緑色のキツ
クパンチホツパー ハイパーフォームに、Z聖はザビーゼクターがでかくなり手甲と一
体化し肩のアーマーもでかくなりそこから一對の黄色い薄い羽が生えたザビー ハイ
パーフォームに変身した

「もう一段階、上げていくわよ！」

NSレミア、RS美鈴、OSフラン、RS衣玖は紀斗に渡されていたもう一枚のカ
ド、アドバンスサバイブ【進化】を取り出す

するとそれぞれのバイザーが風、炎、毒、電気に包まれさらに形を変える

ダークバイザー ツヴァイは漆黒の槍に、ドラグバイザー ツヴァイは赤い青竜刀

に、ベノバイザー ツヴァイはあまり刃は鋭くない叩きつけることに特化した紫色の大剣、エビルバイザーは先にドリルのついた赤みがかったピンク色の螺旋槍に形を変えそれぞれ柄についたカードの差込口へアドバンスサバイブのカードを入れる

『『ADVANCE SURVIVE』』』

4人の姿は変わり自分達の契約モンスターを模したアーマーを身につけていく

ナイト アドバンスサバイブは頭にダーククレイダーを模した金色と黒の仮面が装備され両腕にはダーククレイダーの翼を模した刃が、サバイブの時に蒼色だった場所は漆黒の黒になり仮面の下の瞳が一瞬蒼く光る

龍騎 アドバンスサバイブは頭にドラグランザーを模した兜が装備され両腕にはキョウリユウジヤールのデイノスクランダーのように右手にドラグランザーの上顎、左手にはドラグランザーの下顎を模した手甲が装備される

王蛇 アドバンスサバイブは右肩に赤い角がはえ右腕の装甲が全て銀色に左腕の装甲は全て赤みがかったピンクに、頭にはベノヴァイパーを模した仮面を装備し両脇腹部分にはベノヴァイパーの頭部横のブレードを模した鎧が装備される

ライア アドバンスサバイブは頭にエグゾダイバーを模した兜を装備し両肩にはエグゾダイバーのヒレを模した鎧が装備される

「あたしもいくよー！」

AH勇儀は装甲声刃（アームドセイバー）の柄の底に一枚のカラフルな色の鼓を取り付ける

「響神 降誕！」

AH勇儀の声が響くと同時に装甲響鬼の背中に雷神のような太鼓が装備され肩や膝に雲を模した装甲が追加される

「響神 装甲響鬼（きょうしん アームズ響鬼）、さあ、祭囃子といこうか！」

A天子S VS 巨大蛇，s A

「ほらほらー！こんなもんなのかしら！」

「ジャアアアア！」

A天子Sはアビスバイザーツヴァイによる水流弾を連発し数匹の巨大蛇達を吹き飛ばしていく

「シヤアア！」

「無駄無駄あ！」

『GUARD VENT』

巨大蛇達は毒液を吐くがA天子Sはアビスバイザーツヴァイの砲身の横の部分を開きそこにカードを挿入しアビスメガロの左右の胸ビレを合体させた盾、アビスシールドで召喚し毒液を防ぐ

『ADVENT』

「ノシヤアアアア!!」

「ジャアツ!」

A天子Sの後ろに出現した鏡からアビソドンよりさらに一回り大きい20mほどの大きさのメガロドン型のミラーモンスター、アビソメガロが現れ巨大蛇の胴体を噛みちぎり爆発させる

「さあ、ぶつちぎっていくわよ!」

『FINAL VENT』

アビソメガロは高さ5mほどの巨大なモンスターバイクとなりA天子Sがその上に飛び乗る

するとアビソメガロ バイクモードの目の前の地面から巨大な波が現れ巨大蛇達を呑み込んでいく

そしてA天子Sは波に吞まれ一箇所にかためられた巨大蛇達を全て踏み潰し蛇達は爆発した

「粉碎!玉砕!大っ喝采!フハハハハハ!!」

V影狼S vs 巨大蛇, s B

『TONGUE VENT』『SWORD VENT』

「そりやそりやそりやそりやあー！」

V影狼Sは両肩と胸のカメレオンの口の部分からカメレオンの舌を模したロープを伸ばし巨大蛇の首に巻きつけ巨人を相手にする調査兵団のような動きで翻弄しカメレオンの舌のようなレイピア、バイドレイピアで巨大蛇達を斬り裂きダメージを与えていく

『ジャアアアア!!』

「おっと、一氣にきたね」

『CLEAR VENT』

巨大蛇達はV影狼Sを取り囲みV影狼Sに向かって飛びかかる

その時V影狼Sの肩にとまっていたバイオバイザーツヴァイが舌を伸ばしデツキのカードを一枚抜き呑みこむ

するとクリアーイベントが発動しV影狼Sの姿は透明になり巨大蛇達は一瞬戸惑うがすぐに通常の視力からピット機関に切り替える

しかしそこにもうV影狼Sはおらず巨大蛇達は辺りを見回すとV影狼Sは巨大蛇の1体の背中に貼りついているのを見つける

「おっと、見つかったか。だがもう遅いよ」

『FINAL VENT』

バイオバイザーツヴァイがファイナルベントのカードを呑みこむとV影狼Sは蛇の背中から飛び退くとその隣にいきなり4足歩行の鎧を纏ったようなカメレオン、バイオアサシンが姿を現し飛び上がるとバイクモードになる

V影狼Sはバイオアサシンに乗ると乗った瞬間巨大蛇達はV影狼Sをバイオアサシンごと見失う

そこにいたはずなのに一瞬で姿が消えピット機関に切り替えても感知できない

「どこ見てるんだい？私はどこっちだよ」

「ジャ、ガアッ!？」

V影狼Sの声と共に1体の蛇が何かに貫かれ巨大な穴があき爆発する

1体、また1体とどんどん蛇達は貫かれついに最後の1体となった

「ジャアアアアア!!」

「そう暴れるなって」

「ジャッ!？」

蛇はめちやくちやに暴れどこから来るV影狼Sを追い払おうとするがまたV影狼Sの声が聞こえた瞬間身体が何かに締め付けられ動けなくなる

すると自分の身体を締め付けているものとその先の天井にいるV影狼Sの姿が見え始める

V 影狼Sが乗っているバイオアサシン バイクモードの口やボディーから何本もの舌や尻尾が伸びそれが蛇の身体を拘束していた

「さあフィニッシュだ！」

V 影狼Sはバイオアサシン バイクモードの天井から尻尾や舌を引き戻しながら蛇を頭から貫き最後の蛇も爆発した

「ジャ…アツ…!?!」

「ただのどかい蛇なんで相手になりやしないよ」

I てゐS vs 巨大蛇, sC

『SPEAR VENT』『SHOOT VENT』

「邪魔だよ、でか蛇！」

「ジャアアア！」

I てゐSはキングゼールの頭部を模した槍、ガゼルスピアーと同じくきんゼールの頭部を模した手甲と一体化した銃、ガゼルガンナー（ガゼルス탑の銃ver）を装備し武器と体術で巨大蛇達を牽制していた

そして蛇達がちょうど一箇所に集まった瞬間新たにガゼルバイザーツヴァイにカードを挿入する

『FALL VENT』

「落とし穴にはご注意を♪」

『ジャアアアアア!?!』

いきなり蛇達の真下の地面が落とし穴となり蛇達は全員その中に落ちる

「落とし穴はあたしの得意技うさ♪さっそく決めてあげるうさー!」

『FINAL VENT』

蛇達が落ちた穴の周りを取り囲むように機関銃やバズーカなどの銃火器を持ったレイヨウ型モンスター達が現れ蛇達に一齐放火を浴びせる

「総員撃てろ!」

『ジャアアア!?!』

蛇達は銃撃で倒されはしないがかなりのダメージを負い穴を這い上がれなくなる

そしてレイヨウ型モンスター達は全員持っていた銃火器を装備したバイクモードになり他のレイヨウ型モンスターより一回り大きく2本の二股の槍を装備しているキングゼールはその槍を突き出すようなバイクモードになりIてゐるSが乗り穴に他のレイヨウ型バイクと共に突っ込む

蛇達はレイヨウ型バイクの猛攻に為す術もなく蹂躪されさらにダメージを与えられていく

「うっさー!」

『ジャアアアア!?!』

I てるSの乗ったキングゼール バイクモードは衝撃波を纏い一本の槍とかし蛇達を1体残らず貫き爆発させた

「気分爽快うさ!」

K P パルスイ&D H 幽香&Z H 聖 v s 巨大蛇 s D

K P パルスイ、D H 幽香、Z H 聖は元はワームだったクロックアップを使える蛇達の相手をしていた

「高速移動する蛇つてのもなんか変な感じね」

「せめて苦しまないよう一撃で仕留めてあげましょう」

「面白くないこと言うわね、虐めた方が楽しいのに」

「その考え方は理解しかねますね。他者を痛ぶって喜ぶなど」

「別に理解してもらわなくて結構よ。私は私のやりたい用にやるだけだから」

（なんでこの2人味方同士で火花散らしあってるんだろ…）

「ジャアアアア!」

「まあまずはこのでか物達を片づけましょう。話はそれからよ」

「ええ、その点に関しては同意しましょう」

（あ、ちゃんと共闘はするんだ）

『『HYPER CLOCK UP』』

3人はベルトのスイッチを作動させハイパークロックアップを使う

するとクロックアップを使っている蛇達すらほぼ止まっているような速度にまで加
速する

「ふふふ、思う存分痛ぶってあげるわ」

DH幽香は1体の蛇を蹴り上げるとさらに蹴りや拳を叩き込んでいき他の蛇をもそのラツシュに巻き込んでいき巻き込まれた蛇達は全員何をされているのかわからないという顔で飛ばれていった

「そんな姿でまだ生きているのは拷問のようでしょう。すぐに楽にしてあげます。いざ、南無三ー！」

『HYPER STING』

「ハイパースティング！」

ZH聖は1体の蛇に強化ザビーゼクターを思いきり突き刺すと強化ザビーゼクターからドリル状のエネルギー波が飛び出しその蛇と直線上にいた他の蛇達の身体を一瞬で挟り取っていき爆発した

「来世ではどうか幸せになってください」

「他2人のせいで私のキャラが薄れてる気がするわ、妬ましい。こいつらで気を紛らわ

せましょ」

『HYPER JUMP』

KPパルスィはホッパーゼクターのゼクターレバーを傾けると通常のライダージャンプよりも更に高く飛び上がりもう3回ゼクターレバーを動かす

『HYPER RIDER KICK』『HYPER RIDER PUNCH』

「ハイパーライダーダンス！」

KPパルスィは蛇の頭にキックをかますと同時に脚のアンカージャッキが作動し蛇は地面に叩きつけられ爆発するがKPパルスィはキックの反動でさらに空中に浮き今度は別の蛇の頭に拳を叩きつける、すると同じようにアンカージャッキが作動しその蛇も先程の蛇と同じようにやられる

KPパルスィは同じことを連続で繰り返しその姿は空中を踊りながら跳ねているようだった

KH勇儀 vs 巨大蛇 s E

「さあ！盛り上がっていくよ！まずは雷！」

KH勇儀は背中に装備された1番右の太鼓、雷鼓を叩くするとKH勇儀の目の前に巨大魔化魍に取り付けた時と同じくらいの大きさの基本カラーが緑色の音撃鼓が現れそれと同じ物がKH勇儀の周りにいる全ての蛇に付けられる

「音撃打 雷孤招来！」

『ジャアアアアア!?!』

KH勇儀が音撃棒で目の前の音撃鼓を叩くと音撃鼓を付けられた蛇達全員の身体に超高压の電流が流れほとんどの蛇が倒れる

「お次は風だ！」

KH勇儀は右から二番目の太鼓、嵐鼓を叩くと緑色の音撃鼓が青に変わる

「音撃打 疾風乱舞！」

今度はKH勇儀を中心に竜巻が吹き荒れ蛇達を吹き飛ばしていく

「それもういつちよ！」

KH勇儀は嵐鼓と雷鼓を連続で叩くと音撃鼓は半分が緑、もう半分が青になり竜巻に雷が混ざっていく

「音撃打 疾風迅雷！」

吹きすすぶ竜巻の中で雷が轟き蛇達はどんどん絶命し爆発していき最後の一匹も爆発するとKH勇儀は叩くのを辞め額の汗を拭う

「ふー、いい汗かいたー」

紀斗, NレミアAS, OフランAS, R美鈴AS, R衣玖AS vs オピウーク

ス・ノヴァ

「オリジナルフォームがなんだってんだ！全員ぶち殺して俺様の人形にしてやるよ！パラライズミスト！」

オピウークス・ノヴァは八つの蛇の口から黄色の霧を吹き出す

「邪魔な霧ね、消し去ってあげるわ」

？「いいえ、レミリア様のお手を煩わせる必要はありません」

『!?!』

NレミリアASがカードを取り出しダークバイザーネクストにカードを挿しこもうとするといきなりNレミリアASの前にダーククレイダーを模した鎧の女性が現れ紀斗を除いた三人の前にも自分達の契約モンスターを模した鎧を見にまとった者たちが現れる

「この程度の障害、私の力だけで充分です。ハアツ！」

「なっ!?!俺様のパラライズミストを剣の一振りで!?!」

ダーククレイダーの鎧の女性は持っていた剣に風を纏わせるとその剣を振り竜巻を起こして霧を消し飛ばした

「あなた達まさか…」

「ええ、私達はレミリア様達の契約モンスターです。」

メイド口調で話す黒と青と金色の西洋鎧のダーククレイダー

「やつとまともに話せるな、主」

「レッダー、あなた龍なのに西洋鎧なんですか…」

「くいつくとこそそこか!？」

ツッコミ属性持ちらしい赤と銀の西洋鎧のドラグランザー

「お嬢！先程は敵に操られたお嬢をお救い出来なくてすいやせんした！」

「ごめんなさいね、私達がついていながらあんな攻撃通しちゃって」

「俺も、守れなかった…」

「別にその気持ちだけでも嬉しいから気にしなくていいよ！」

ヤクザ口調の紫と金の鎧のベノヴァイパー、メズールのような口調の赤みがかったピ
ンクの女性型の西洋鎧のエグゾダイバー、ガメルのような口調の銀と黒の重装鎧のグラ
ンドゲラス

「主人、とつとこの下衆を叩き潰そう。こいつの行いには虫唾が走る」

「ええ、まったくですね。エビル」

こちらは男性型で忠義の厚そうなエグゾダイバー

「はっ！いくらモンスター共が人型になったところで知ったことかよ！死ぬや！」

オピウクス・ノヴァは蛇の口から今度は紫色の巨大な光線を放つ

「頼んだよ、ゲラス！」

『SHIELD VENT』

「任せろ！」

OフランASはベノバイザーネクストにカードを挿しこむとグランドグラスが前に出て半透明の防壁を張る

オピワークス・ノヴァの光線をは全て防がれ霧散する

「なっ!?!私の攻撃が全て防がれた!?!」

「フラン、俺が守る！」

「さあ、反撃開始だ！」

『SWING VENT』

OフランASとR衣玖ASはエグソウィップを装備すると2人のエグソダイバーもそれぞれ鞭を取り出しオピワークス・ノヴァの蛇の半数を縛る

「さあ！」

「痺れなさい！」

「ぐおおおおお!?!」

鞭から高圧電流が流れオピワークス・ノヴァはその電撃に苦しむ

「かつあつ…!?!」

オピワークス・ノヴァは電撃で痺れ空中に浮いていたのが地に落ちる

「さて、そろそろ決めましょうか」

『FINAL VENT』

R衣玖ASはエビルバイザーネクストにファイナルベントのカードを挿しこむ

するとエビルバイザーネクストのドリルが回転し始めR衣玖ASは投合の体制に入る

「スパイラル…：ピアース!!」

「主人、手伝うぞ！はあっ！」

R衣玖ASはエビルバイザーネクストを全力で投合しエグソダイバーはそれに鞭を回転させながら螺旋状に纏わせる

それはアークグレンラガンのドリル並の大きさのドリル状エネルギーとなりオピウクス・ノヴァを消しとばそうとする

「くっ!?!ぬおおお！」

しかしオピウクス・ノヴァは麻痺しながらも力を振り絞り横に飛び右の蛇二匹しか消しとばせなかった

「くっ、外しましたか」

「ぐっ!?!早く麻痺直しを…」

「そんな暇」

「与えるわけないでしょ？」

『FINAL VENT』『FINAL VENT』

「お嬢に手を出したこと地獄で後悔させてやるよ！」

「さあ、一思いに散りなさい」

OフランASはベノバイザーネクストを真上にかかけるとベノヴァイパーも同じように自分の尾を横した剣を上にかかげる

すると二つの剣は毒々しいエネルギーに包まれていきその大きさは天井をも貫いた

NレミアASとダークレイダーも同じようにダークバイザーネクストと蝙蝠を模した剣を上にかかげると青い風のエネルギーがOフランAS達の紫色のエネルギーと同じくらいの大きさまで巨大化する

「二ヴェノムストームスラッシュ!!」

「っ!?」ゴクン

オピワークス・ノヴァは4本の巨大なエネルギーに呑み込まれそうになるがギリギリ麻痺直しを作りだしそれを飲み麻痺の取れた身体でなんとか避けるが残っていた6本の蛇のうち4本がエネルギーに呑み込まれ跡形もなくなった

「はあー、はあー、くそっ!くそっ!くそっ!くそっ!くそっ!くそっ!くそっ!くそっ!くそっ!くそっ!この俺が!俺様が!てめえらなんぞにここまでこけにされるとはな!いつか!いつか絶対にめえら

全員殺してやる！」

『FINAL ATTACK RIDE RYU RYU RYU RYUKI』

「てめえなんぞに仲間をやらせるわけねーだろ、屑野郎。美鈴、ドラグランザー、やるぜ」

「ええ、お嬢様達を傷つけたこいつは絶対許しません」

「主に同意だ、こいつは人として越えてはいけない一線を越えた。ここで始末する！」

「ほざけえ！クソカス共があ!!」

紀斗とR美鈴AS、ドラグランザーは飛び上がるとライダーキックの体制に入り灼熱のエネルギーに包まれオピウクス・ノヴァに向かって突き進んでいく

「うおおおらああああああああ!!」

「無、駄、だああああああああ!!」

オピウクス・ノヴァは残った2本の蛇の口から紫色の光線を放つが3人の一体となったライダーキックにどんどん押し戻されていきライダーキックはまったく威力の弱まる気配は無い

「「はああああああああ!!」」

「ちく、しようがあああああ!!?」

オピウクス・ノヴァはライダーキックに蛇も本体であるオピウクスゾディアーツの上半身も貫かれ爆発した

「やりましたね！これで幹部2人目撃破ですよ！」

R 美鈴AS達はオピワークス・ノヴァを倒したことに喜ぶが紀斗は一つの違和感に気づく

「おい待て、Zの野郎の身体とスイッチが無いぞ！」

「なっ!？」

「確かに見当たらないわね」

「逃げられた…ということでしょうか」

「恐らくな、倒れる瞬間に瞬間移動を使ったんだろう」

「チツ、それじゃあここらを洗いざらい探しますか？紀斗の旦那」

(旦那?) 「いや、とりあえずこの戦闘は終わったみたいだからデンデンセンサー達を放っておいて俺たちは体力を回復しよう。流星にこのままの体力じゃ他の幹部達に勝てるかわからないしな」

「それじゃ、まずは他のグループの到着も待ちましょうか」

第三十六幕 装甲列車

装甲列車内

乙達との戦いから2時間後、俺達は他のグループと連絡を取り合い乙達と戦った地下鉄のホームのような場所で合流すると甲とにとりがさらにミサイルやらドリルやらを装備させたり魔改造していた装甲列車に乗り本当の財団X 乙支部に向かっていた

幸い列車の中には誰もおらずチルノ達は大妖精以外は列車の中を探検すると言って列車内を散策しにとりと甲は列車の運転をしており音声はそっちに繋がるようになっていたが他のメンバーは全員変身を解き広いホールのようになっていた場所できつろいでいる

「それじゃあそれぞれのグループの調査報告といきましょうか」

紫の言葉にその場にいる全員が頷きまず俺が立ち上がる

「それじゃあまずは俺たちグループAから…」

俺たちグループAが報告したのは

乙を戦闘によって倒したことによっての一時無力化とこの列車の説明の二つをグループBは

あの建物の居住区と今はもぬけの殻だったということとその奥にあった倉庫にいた敵の撃破とそこにあつたこれから幻想郷に送られるであつただろうメモリやスイッチ、様々な実験道具の破壊

グループCは

制御室の敵の撃破とそこにあつた情報、情報はあの建物とこの列車のルートのものしか無かつたらしいがあゝの建物は浜名湖の地下で40年以上前に廃棄された空間があつたのでそこを利用したらしい、そして列車のルートは浜名湖から複雑な地下線路を通り黒部ダムofすぐ近くのビルに繋がっているらしい

(40年以上前に浜名湖で廃棄されたつて…元ゲルシヨッカー日本支部の本部じゃないよな)

俺がそんなことを考えてるうちに報告会は終わり、紫の能力で所々でワープさせ体力を回復させるための時間も合わせ本来なら2日はかかる時間を半日程度にまで短縮する

到着30分ぐらいになったら放送するということまでそれぞれは各自好きにしているという事になったから俺も気になっていた列車内の探索を始める

宿泊区間

ここは普通の戦闘員とか研究者の宿泊する部屋の区間らしいが…2人1部屋でそこ

らへんのホテルよりも上質な部屋つてなんだよ。ベッドふかふかだし、いつの間にか美鈴寝てるし、こんな部屋が2階もあるから100部屋以上：しかも幹部とかの部屋は昔テレビで見たようなスイートルームのような部屋だ、金かけすぎだろ：

酒場

何故列車内に酒場があるんだ！しかも酒は種類も数もかなり充実してるし！バーテンドーはロボがやってるみたいだがこの列車旅行用の列車じゃないよな、物資をあの建物に運ぶ列車だよな

あ、萃香と勇儀さんが来ちゃったよ、ここの酒全滅するなこりや：何本か持ってこ

図書館

図書館まであったよこの列車、もう完全に娯楽列車だよこれ、しかも本の量も紅魔館の大図書館よりは少ないものかなりの量の本が置いてある

どうやらメンバーの8割はここにいてみたいだ、次の所に行くか

調理場

「チルノちゃん、どこー？」

「ここにもいないのかー」

「本当どこに行つたんだろ」

「もうあらかたの部屋は探したのにね」

かなり広い調理場に行くと大妖精、ルーミア、リグル、ミスティアの四人が何かを探しているようだった

「お前らなんか探してるのか？」

「あ、紀斗さん、チルノちゃん見てませんか？途中ではぐれちゃって」

「いや、見てないな。ん？」

俺は調理場の一面を占領している巨大な冷蔵庫を見ると少しだけ扉が開いていることに気づく、気になって扉を開いてみるとそこには…

「あたいつたら…さいきよくね…zzzz」

「……何故ここで寝てるんだチルノ」

冷蔵庫で身体を丸めて呑気に寝ているチルノがいた

しかも無意識に身体から冷気を出しているのか冷蔵庫が普通の温度よりもさらに冷たく感じる

「こらチルノ起きろ！お前そこで寝てると食材がだめになっちゃう！」

「ふえ？」

俺はチルノの首根っこを掴み冷蔵庫から引きずりだし冷蔵庫の扉を閉める

「あ！チルノちゃん！そんなとこにいたの！」

「心配したのだー」

「冷蔵庫に入ってるなんてチルノちゃんらしいけど……」

「料理を作る方としては冷蔵庫をさらに冷たくするのはやめてほしいな」

『グギルルルル』

『……………』

チルノを発見したことにより4人はホツとした瞬間ルーミアのお腹から物凄い音になる

「ホツとしたらお腹すいちゃった／＼／」

「ははは、任せろ！ 腹が減っては戦は出来ぬ、まだまだ戦闘は続くだろうし料理作ってるよ。嬉しいことに食材はかなりあるし調理場の設備もかなりいいからな」

俺はそう言うところルーミア達を調理場の外に出してから材料を取り出し調理に取り掛かる

「腹すかしてる分美味いもん作ってやらねえとな！」

ー10分後ー

「おーい、お前ら料理出来たぞー」

「はーいー！」

「ルーミアちゃん反応が速すぎるよ!？」

俺がドアを開けルーミア達を呼ぶとルーミアだけファイズのアクセルフォームのご

とき速さで反応し走り寄ってきた

(あれは駆け寄ってくるなんてスピードじゃねえ…)

俺はテーブルに座った5人の前はかなり大きいリブローステークを置く

5人、特にルーミアは目を輝かせじゅうじゅうという香ばしい匂いを漂わせるステークを見つめる

「おかわりはそれなりにあるからな、それじゃ召し上がれ」

『いただきます!』

俺は美味しそうに食べる5人を見て他のメンバー達の食事作り始める

「おかわり!」

「早えなルーミア!」

…他のメンバーの分を作るにはもう少しかかりそうだ

ーそれからしばらく経ってー

「あー、食べた食べた」

「満足なのだー」

「ルーミアちゃんは食べ過ぎだけどね…」

「まさか1人で20人前も食べるなんてね」

「紀斗さん大丈夫ー?」

「ははは…、まさかここまでやるとはな。大食い組の胃袋を侮っていたぜ、ここに幽々子や芳香がいたら俺はやられていた」

ようやくルーミアの腹を満足させた俺はかなり体力を持ってかれたが俺はなんとか他のメンバー全員分の食事作り終えワゴン数台に乗せそれを大妖精達に手伝つてもらいながら持つていく

そして俺は図書館にいたメンバー全員に食事を出すと酒場で飲んでいた勇儀と萃香に豚の丸焼きを渡し（酒は既に八割型無くなっていた）寝ていた美鈴の枕元にはサンドイッチを入れたバスケットを置いてきた

その後俺はルーミア達と別れ美鈴のところにおいてきた物と同じ中身のバスケットを運転室に持つていく

運転室

「おーい、飯持つてきたぜー」

「お、悪いいな紀斗。そこ置いといてくれ」

「おう」

俺はバスケットを甲とにとりの座っている操縦席の真ん中に置き運転室を見渡す

運転室はそれなりに広く目の前の画面には3つの大きな画面がありどこぞの螺旋力で動くロボットの操縦席のようによく見える

エネルギーはメモリを使用しているらしく10本のエンジンメモリが操縦桿のそばに挿さっていて他にも様々なスイッチが付いている

俺はその後運転室を後にし皆が食べ終わった食器を回収していき調理場の食器洗浄機に入れる

(いつも手洗いだからかなり助かるなこれは)

俺はその後自分自身に回復力増加のツボを押し体力を回復させるために宿泊区間の部屋の一つのベッドに入る、最強フォームの連続使用や2人の幹部との戦いもあったせいでベッドに入った俺はすぐに眠ってしまった

数時間後

『あと30分で奴らの本拠地に着くよ、各自準備しておいて』

俺はにとりが言っていた30分前にかける放送で目を覚ました

「んん、よく寝た。体力もだいぶ回復したし問題無いな」

俺は大きく伸びをし部屋を出て最初のホールのような部屋に行く

運転室ににいるにとりと甲以外は全員その部屋に揃っており皆ピリピリとした雰囲気放っている(約何名かは寝てたり騒いでたり緊張感がないが)

『敵の基地のホームが見えてきたよ、ただ少し問題がある』

少しするとまたにとりから放送が入る、もうすぐ到着のようだが同時によくない知ら

せもあるようだ

『ホームが敵怪人でいっぱいだよ、しかも全員ゴツくてパワーありそうなの』

「おそらくこの列車を私達が奪取したのがばれてたんでしようね。それでこの列車にも対抗できそうなパワータイプの怪人達を総動員させたって感じかしら」

にとりの報告に対して紫が推測して話す

「だけど大量の怪人達といきなりバトルも中々面倒よ。ドアを開けた瞬間列車を奪われる可能性もあるし」

『ふっふっふ、ならこの私と甲が改造を施した列車の出番ということだね』

霊夢の言葉にとりが怪しげな笑いとともにこの列車で迎撃するという案を出す

「あれだけの数の怪人達を倒せるほどの武装を積んでるのか？確かに元々武装はされたみたいだが改造ついても1時間半しかやってなかっただろ」

『甘いな紀斗、そりや普通の奴の改造なら何十日もかかるだろうよ。だけどこいつは幻想郷一の科学力を持つ河童のにとりと俺が改造したんだぜ？1時間半もありやお釣りがくるほどの魔改造してやったぜ！』

「なんだそりや…」

『とにかく！ここはこの列車に任せてもらおうか！』

甲はそう言うのとホールの天井から巨大な画面が現れそこに列車の前方の様子が映し

出される

そこにはホームらしきところに溢れんばかりの怪人達が待ち構えていてそこから目の前の線路に何体か飛び出してきた

飛び出してきたのはエレファントオルフェノク 突進態、牛鬼、ライノセラスファンガイア、エレファントアンデッドの4体で列車の動きを止めようとしているようだ

「おいおい、そんなとこにいて大丈夫か？そこはもうこの列車の射程範囲内だぜ？」

甲が操縦桿の近くの黄色いボタンを押すと列車の先端のドリルの先が開き

「超電磁砲…発射あー！」

レールガン

超電磁砲が発射された

「へ？ぎやあああああああ!!？」

「ぐわあああああああ!!？」

「ブモオオオオオ!!？」

「!？」

4体は超電磁砲の餌食となりエレファントアンデッド以外は爆発する

「バースのセルバーストを元にした超電磁砲だ。しかも弾丸にはセルメダルを使ってるからな、普通の超電磁砲より威力は上だぜ！」

そのまま列車はエレファントアンデッドを轢き飛ばすとホームらしき場所で停車する

怪人達は列車の出入り口の場所を知っているのかその場所に重点的に集まり戦闘態勢をとっている

「さーて……っからがこの改造列車の本領発揮だよ！」

にとりはそう言うと言と操縦桿の近くに挿さっていた10本のエンジンメモリを全て抜き新たにメモリを挿していく

「今までは動力のためのエンジンメモリしか使ってたみたんだけど今回は武装用のメモリにも適応させてあるからね！ さあ！ ショウタイムだ！」

『ROCKET』『MISSILE』『BOMB』『AMMUNITION』『WEAPON』『LASER』『CANNON』『IRON』『BURST』『DESTRUCTION』

メモリの音声が鳴ると同時に列車の様々なところからミサイル、大砲、レーザー砲、銃火器が現れ怪人達に照準を向ける

「全装備、撃てい！」

甲にとりは同時に紅い大きなボタンを押すと列車の全ての武装が火を噴いた

ミサイルが、レーザーが、鉄の塊が、銃弾が、爆弾が、その武装に驚き固まっていた怪人達を有無を言わさず蹂躪していく

そしてその一斉放火が終わった時にはホームには満身創痍で倒れているアンデッド数体と砕けたメモリとスイッチとその使用者達以外何も残らなかった

『……………』

この光景には味方である俺たちも空いた口が塞がらなかつた

「まさか、ここまでの威力があつたとはね…」

「あの数を一掃しやがつた…」

あの紫や幽香でさえ亜然としてしまっている、あの重量級ばかりの耐久力もかなりある怪人達が瞬く間に消し炭にされたのだから無理も無い

「くっ…まさか俺たちが全滅するなんて…こうなつたらあいつらを使うしかないか」

倒れていた一人の研究員が血反吐を吐きながらそんなことをつぶやき懐から一つのスイッチを取り出し押す

すると列車の目の前にあつた壁が開き中から巨大な怪物達が現れた

エラスモテリウムオルフェノク、巨大魔化魍のオトロシ、バケガニ、カマイタチ、フアンガイアのエネルギー集合体のサバト、オトシブミヤミー、巨大ピラニアヤミーが続々と出てくる

「ははははは！ さっきの超電磁砲と武装だけじゃせいづら全員は倒せないぞ！ やつちまえお前ら！」

「グギャアアアア！」

「ブオオオオオオオ!!」

「今度はでかい奴らが相手かい…」

『流石にこれはやばいだろ！俺が外に出て相手をしてくる！』

「いや！その必要は無いぜ紀斗。この列車、ゲンライナーに任せておけ」

『ゲンライナー？』

「今名付けた！とここでそのためにより衣玖さん少し運転室に来てもらうぜ？」

『は、はい』

「来ましたけど私は一体何をすれば？」

「お、じゃあこのドリルを ガシャン！ 今ちようど出てきたこの円の中心の窪みには

めてひねってくれるかい？」

「わかりました」

（これで一体何が出るのかしら）

にとりに言われた通り衣玖は床から出てきた緑色に点滅するように発光する円状の盤の窪みにドリルを挿しこみ車のキーのようにひねる

するとそのドリルを中心に盤は黄緑色のエネルギーを螺旋状に満たしていき盤が全

て黄緑色のエネルギーで一杯になると全ての車両に変化が起きる全ての部屋の出入り口はシャッターでしまり部屋がいきなり動き始める

列車は5車両だが全ての連結が外れ4号車と5号車が垂直に立って1番下の部分が開き脚になる

2号車と3号車はちょうど半分くらいのところで関節のようになり先から手が出現する

1号車の先頭車両は先端のドリルが外れ横に肥大化し胴体となりさらに両肩の部分に盾のようなシールドプレートが現れそこに腕の形となった2号車3号車が合体し4号車5号車も脚として1号車と合体する

仕上げに1号車の1番上からグレンラガンのような顔が現れ1号車の先端のドリルが右腕の拳の上に装備され完成した

「完成！ゲンライオー！」

『ええー！！！』

これには敵である研究員達も味方である俺たちも全員驚いた、まさか変形するとは誰も考えていなかったためキャラ崩壊のごとく幽香や紫も叫んでいた

『おい甲！お前らたった1時間半で一体この列車をどこまで改造したんだ！？螺旋力で変形なんてもう改造つてレベルじゃないぞ！』

「はっはっはあ！俺たちの科学力は世界一い！この列車、ゲンライナーは俺たちの手によって進化したんだあ！」

「ついでにメモリチェンジだ！今のメモリじゃエネルギーが足りないからね！」

にとりは一〇本のメモリを全て抜き新たに違うメモリを挿す

『DRILL』×10

瞬間ゲンライナーの目がカツ！と輝きファイティングポーズをとる

「ゴオオオオオ!!」

「ブオオオオオ!!」

エラスモテリウムオルフェノクはゲンライナーに毒針を発射しながらオトロシと共に突っ込んでくる

「効くかよそんなもん！」

ゲンライナーは毒針を右腕で弾き左腕でエラスモテリウムオルフェノクにアッパーをくらわせ浮き上がらせる

「衣玖さんそのレバー思いつきり掴んで！」

「は、はい！」

にとりに言われた通り衣玖はいつの間にか自分の横に設置されていた二本のレバーの取っ手を全力で握り螺旋力を注入する

その瞬間ドリルの挿さった盤のゲージは再び満タンになりゲンライオーの右腕のドリルが巨大化し回転する

「ドリルスマツシヤアア!!」

操縦を一任されている甲の動きに連動しゲンライオーは浮かび上がり無防備な状態のエラスモテリウムオルフェノクの脇腹を右腕のドリルで殴ると同時に貫きそのままその横にいたオトロシも貫き勢いでゲンライオーは身体を回転させ二体の身体を貫いた状態で自分の後方に投げ飛ばす

「ゴオ…!?!」

「ブオオツ!?!」

二体は爆発しゲンライオーはまだ残っている他の怪物達に向き合う

「ギヤアアアアア!!」

「グオオオオオオオ!!」

「キシヤアアアア!!」

カマイタチ以外の怪物達はサブトは光球、バケガニは溶解砲、ピラニアヤミーは光線を放ちオトシブミヤミーは単体で突っ込んでくる

「一気に決めるか!衣玖さん気合入れて頼む!」

「わかりました!」

衣玖がさらに螺旋力を注入し盤は薄かった黄緑色のゲージが濃い光り輝く緑のエネルギーで満たされる

するとゲンライオーの右腕のドリルがさらに巨大化しゲンライオーの身体と同じくらいの大きさになり途轍もない速度で回転する

ゲンライオーはそのドリルを突き出し脚の裏のブースターでドリルと一直線になりながら突き進みドリルと共に自身の身体も回転させる

「ゲンライオオオオ」

巨大なドリルと化したゲンライオーはオトシブミヤミーの身体を貫き他三体の攻撃も弾き飛ばす

「ギガア、ドリルウウウ」

三体はゲンライオーを叩き落とそうと迫るが一秒も拮抗せずに貫かれ爆発する

「ブレイクウウウウ!!」

最後のカマイタチは自身を回転させ竜巻のようになるとゲンライオーと激突し拮抗する

「グッ!?グ…グウ」

しかしすぐにカマイタチは押され始めゲンライオーの回転する勢いは上がっていく

「うおおおおお!!」

「グッ……グギャアアア!？」

ゲンライオーは竜巻となったカマイタチも貫きカマイタチは爆発した

その後ゲンライオーはゲンライナーに戻ると全員中から出てひとまずアンデッドを封印、研究員達は縄で縛り拘束した

しかしそんな状況の中操縦室にいた3人以外は全員げっそりした顔をしていた
なぜなら途中の戦闘までは大丈夫だったのだが最後のギガドリルブレイク、あれは自身の身体も回転させる技だったのでホールにいた紫以外の全員ずつと固定された近くの手すりなどに掴まりながら回転する部屋で耐えていたからである

(もう絶対操縦室以外あのロボに乗らない)

3人と紫以外は全員そんなことを考えていたそうだ

ちなみにこの後ゲンライナーはスキマの中に収納された

第三十七幕 Z支部突入

俺たちはあのホームから上に続く階段を登ると巨大な倉庫のような場所に出た、そこでかいシャッターの隣のドアで外に出ると白い大きなビルが目の前にそびえ立っていた

「二階は誰もいないみたい、もぬけの殻よ」

紫はスキマを通して目の前のビルの一階の様子を見てその状況を伝える

他の階も調べてもらおうと一階以外がかなり広い5階まである中で2〜4階は既に戦闘態勢を整えているらしい

4人いる幹部の中で残っているのは情報ではOとGの2人のみ、その2人も恐らく2〜4階のどこかにいるんだろう

俺たちはとりあえずスキマを通って不意打ちをするグループと正面突破していくグループの二つに分かれる

グループといっても不意打ちをするグループのメンバーは影狼、藍、カメレオンのリングを渡したアリス、にとり、紫という少数でうまく身を隠せる術を持っているメンバーだ

他のメンバーは1階から乗り込み出会う敵を倒していくといシンプルなもの

俺たちは早速その作戦を執行した

紫の情報だと2階の敵はオルフェノクが主らしいので俺はファイズドライバールを出し腰に巻く

俺はファイズフォンの5のボタンを3回押しEnterを押す

『STANDING BY』

「変身」

『COMPLETE』

俺はファイズフォンをファイズドライバールに取り付け仮面ライダーファイズに変身し既に変身し終えた他のメンバー達と共に2階への階段を駆け上がる

2階に上がると既に何体か青白い炎をあげながら倒れているオルフェノクが数体いた、下には悲鳴なども聞こえなかったから声を出す暇も無く始末されたんだろう

俺達はそのまま進んでいくと他の部屋のドアより一回りでかいドアの部屋にたどり

着く

「ぐああっ!?!」

「うおっ!?!」

「ぐげっ!?!」

いきなりドアと一緒に一体のオルフェノクが吹き飛んできて俺は驚くと同時にそのドアごとオルフェノクを回し蹴りで横に吹き飛ばす

「なんだってんだよ、ったく」

「お、ようやく来たね。待ってたよ、海堂 紀斗君」

「あちゃー、紀斗達もう来ちゃったか」

「やっぱ幹部を不意打ちで倒すのは無理があつたね」

「お前ら!」

部屋の中には数十体のオルフェノクに囲まれたD藍達と奥の方に回転椅子に「Dea
th Note」のLのように乗りながらポテチを食べている眠そうな目をした長髪の
黒髪の男がいた

「会うのは始めてだね、僕はO知ってるだろうけどこのZ支部のオルフェノク部の研究
を一任されてる。そこの子たちは後ろから僕のこと殺しにきたから初手だけ防いで部
下達任せたんだ」

Oは眠そうな口調でポテチを食べながら自分のことと状況を話す

「でも僕の今から言う条件をクリアしたらその子達を今の状況から解放してあげてもい
いよ」

「何?」

「僕と1対1で戦うこと、だけどその前にこいつらを倒せたらただけだね」

『変身』×10

『STANDING BY』×10 『COMPLETE』×10

D 藍達を囲んでいたオルフェノク達の中から10体がそれぞれ2人ずつファイズ、カイザ、デルタ、サイガ、オーガに変身し紀斗達の前に立ちふさがる

「…わかった、俺が相手をする」

「大丈夫なんでしょうね、紀斗」

「勝算はあるのか？」

その条件に乗った俺をB霊夢や甲が心配して聞いてくる

「一か八かつてのもあるがああ状況は危ないからな。それに、わざわざ相手もあんな条件出してくれてんだ、乗らない手はないだろ？」

「そりやそうだが…」

「ま、あつちのファイズやオーガには負ける心配はねーから安心しろ」

俺はそう言うと一緒に一本のφを模した剣の柄を出しファイズフォンをその柄の窪みに差し込みその柄のボタンを9・9・5と押しEnterを押す

『STANDING BY』

『AWAKENING』

その瞬間ファイズの姿は一瞬赤と銀を主としたブラスターフォームになり徐々に銀の装甲が丸みを帯びていたのが鋭角状になり両足にバイクのマフラーのようなパーツが装備され柄から片刃のエネルギー刃が現れる

「仮面ライダーファイズ ラディカルブラスターフォーム、見せてやる、世界を縮める速さをなあ！」

「ファイア！」

『BURST MODE』

『READY』『EXCEED CHARGE』

『REFORMATION』

『START UP』

デルタはデルタフォンをバーストモードにしカイザはカイザスラッシュを、サイガはサイガスラッシュ、オーガはオーガストラッシュを放とうとする

ファイズはアクセルフォームへもフォームチェンジしカウントを始める

「遅えな…」

紀斗は剣の柄、ラディカルエッジのボタンを8・8・3と押す

『ENGINE START』

その音声と共にファイズの脚のマフラーから蒸気のような煙が出てエンジン音がなる

それを見たカイザ達は次の瞬間紀斗を見失った

「ど、どこに消えた!？」

「がつ!？」 「ぬああ!？」

いつの間にか紀斗はオーガ達の後ろにいてその足元には青い炎を出しながら倒れたファイズ アクセルフォームが2人

「いつ!いつの間に!？」

「構わん!やつてしまえ!」

カイザの1人を皮切りに他のライダー達も襲いかかってくる

「足りない!足りないぞお!」

「なっ!?!ぐああ!？」

紀斗はその瞬間既にそこにはおらず既にカイザ達の腕を蹴り上げ手放された武器を破壊していた

「お前らに足りない物それは情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さそして何よりも…速さが足りない!」

『ぐわああああ!?!』

紀斗は早口で台詞を言い切りながら8人を斬り捨て8人はベルトを残し瞬く間に灰になった

「さ、次はお前だ、O！」

「……」パリツ

紀斗はラディカルエッジの切っ先をOに向けそう言い放ちOはポテチを食べ終え椅子から降りる

「ふふふ、ふふふふふ、あーはっはっはー！」

『!?!』

Oはいきなり狂ったように笑い始め紀斗達を見る、その目は先程までの眠そうな目ではなくまるで狩りの前の獣のような目だった、Oは口角をニタリと曲げ懐から白銀と緑色の携帯を取り出す

「いいねえ、やつば戦う奴ならあいつら瞬殺できるくらいじゃなきゃ面白くねえ！久々に滾ってきたぜー！」

「おいおい、戦鬪狂かよ。さっきまでと全然キャラ違うじゃねえか」

「んなこと知るかよ！俺は刺激が欲しいのよ！生きるか死ぬかの戦鬪の刺激がな！」

そう言つてOは机の下から激辛チップスの袋を開けガツガツと食いつくす

「燃えてきたあ！俺の最高傑作のベルトでぶち殺してやるよ！変身！」

Oは携帯のボタンを5・2・0と押しEnterを押す

『STANDING BY』

『COMPLETE』

Oの身体に緑色のフォトンストリームが纏われ白銀のボディが姿を現す

その身体はギリシャ文字の υ と ε を合わせたようなデザインの仮面ライダーで手には2本の刀型ツールを持っている

「仮面ライダーイpsilon、さあ、お楽しみ時間だ！」

第三十八幕 VS イプシロン

「さあとつとと始めようぜ、サシのバトルをよお！」

「いいぜ、こっちのエンジンもまだまだ温まってないからな、アクセル全開でいくぜー」
それなりに広いOの研究室で紀斗のラディカルエッジとO、イプシロンの2振りの刀、エプシロンとユプシロンがぶつかり合い火花を散らす

「まさかこの速さについてこれるとはな！」

「イプシロンはパワーばっかでスピードを意識しなかったオーガの上位版！パワーはそのまんまでスピードを超上げたんだよ！」

2人はつばぜり合いと凄まじい勢いの剣撃のラッシュを繰り返して1度離れ距離をとると睨み合う

「おかげでスピードはゆうにファイズアクセルを超えた。てめえの腑えぐり出してやんよー！」

「やれるもんならやってみやがれ！その前に俺がお前の性根ごとたたつ斬ってやるよー！」

『EXCEED CHARGE』

両者は自分の得物の E n t e r ボタンを押しフォトンブラッドの出力を上げる

2人は腰を落とし武器を構え目の前の敵の隙を伺う

「死ねあー！」

「やなこつたー！」

イブシロンよりコンマ一秒速く動き出し紀斗はイブシロンが上から振り下ろしてきたエブシロンとユブシロンをラディカルエッジで防ぎ左足の回し蹴りでイブシロンの脇腹を蹴り横に吹き飛ばす

「てえな！やってくれんじゃねえか！」

「脚技も強化されてんだ舐めんじゃねえ！」

紀斗はラディカルエッジのボタンを1・0・3と押し右脚に取り付ける

「マシンガンエッジ！」

紀斗はアクセルトライアルのマシンガンスパイクより更に速く右脚で空気を蹴りまくるとラディカルエッジから連動して紅いドリル状のフォトンブラッドが射出される

さらに空気を蹴ったことにより生み出されるマッハを超える空気弾も合わさりフォトンブラッドの超高速弾幕と見えない空気弾の弾幕がイブシロンに先程のラディカルブラスタアの速度を超える速さで襲いかかる

「いいねえ！そのくらいしてもらわなきゃ楽しくねえ！」

イプシロンはエプシロンとユプシロンを無茶苦茶に超高速で振るい真空波を生み出しながらフォトンブラッドの弾丸と空気弾を斬り裂いていく

「お返しだあ！フォトンインパクト！」

イプシロンはエプシロンとユプシロンを連続で床に叩きつけ緑色の衝撃波が連続で床の表面を砕きながら紀斗に迫る

「んなもん当たるかよ！」ブルルン！

紀斗はラディカルエツジを脚から外し脚のマフラーを鳴らすと超高速で駆け抜け衝撃波の間をすり抜けていく

「オララララララララ！！」

「チイツ！やるじゃねえの！」

紀斗はイプシロンに高速ラッシュの蹴りを放つがその脚は赤熱し高温を放つ

その蹴りをイプシロンは双刀でその蹴りの連撃を防いだりいなしたりしていくが数発胴体に入りその数発だけでもイプシロンの装甲に焦げ目がつく

「ようやくエンジンも温まってきたぜ！燃えてこうぜえ！」

「はっはっは！同感だ！こうでなくっちゃバトルは面白くねえ！熱いバトルは好物だ

！」

イブシロンはミツシヨンメモリーをエプシロンとユプシロンにセットする

するとエプシロンは白刃のところ緑色のフォトンブラッドが流れるアローンのキリバチのような鋸に、ユプシロンは上が緑色のVの形になっている刺股のような杖になる

「こつからはこつちも本気だ！あつさり終わらないでくれよ！」

「上等だ！そつちこそその台詞がフラグにならねえよう祈つてな！」

「それじゃ先ずは、ふんっ！」

「なっ!？」

イブシロンはユプシロンを自分の身体に突き刺す、するとユプシロンはイブシロンの身体に沈み込むように同化していきイブシロンの身体は緑色のフォトンブラッドが流れていたところは黒くなり白銀と黒の身体は黒だった場所が緑色になり黄色かった目は紅くなる

「仮面ライダーイブシロン レージュフォーム、俺の戦闘への欲望満たしてくれよ？」

「まさか自分の武器の片方を取り込んで強化フォームになるとはな、だが面白い！」

イブシロンはエプシロンを振り下ろし紀斗はラディカルエッジでそれを受け止め拮抗する

「そうだろう！俺の自信作だ！使用者にも負担はくるがそれを見越しても充分の！」

「くっ!」

イプシロンは更に力を入れ徐々にラディカルエッジが押し込まれていく

「力が得られる!」

「ぐおっ!」

紀斗はギリギリラディカルエッジでエプシロンの刃をそらしエプシロンはそのまま床を砕き一階までの穴が空く

「いくらスピード重視とはいえまさか力負けするとはな」

「スピードも、負けちゃねえぜ?」

「がはっ!?!俺が遅い?俺がスロウリー!?!冗談じゃねええがっ!?!」

紀斗が体制を整える前にイプシロンは紀斗の腹にボディブローをかまし顔面に膝蹴りをくらわせる

「ところがこれが現実だ!ラア!」

「ぐああ!?!」

イプシロンは追い打ちをかけるように紀斗に回し蹴りをくらわせ反対側の壁に激突する

「紀斗さん!」

早苗が吹き飛ばされた紀斗の方を見て叫び近寄ろうとする

「来んじゃねえ！早苗！」

「え……」

紀斗は大声で早苗が来るのを制止させる

「こいつは俺とOの1対1の漢の勝負だ、いくらお前らでもこの勝負に横槍を入れるのは許さねえ。」

紀斗はそう言うのと立ち上がりこちらにゆっくり近づいてくるイブシロンを睨む

（だがあのスピードは予想外だな、こつちがデイケイドでのカブトのクロックアップくらしいの速さなら向こうはオリジナルのカブトのクロックアップくらしいの速さってことか……。かなり厄介だが、ここで負けるわけにはいかねえからな。気合い入れていくしかないか）

「どうした黙りこくって？さっきまでの威勢はどうしたよ」

「うるせえ、どうやってお前をぶちのめそうか作戦建ててたところだよ」

「そう、かよ！」

イブシロンは紀斗にエプシロンを斜めから振り下ろし斬り裂こうとする

「ふっ！」

「チッ、上に逃げたか」

紀斗はエプシロンが迫る瞬間上に跳びラディカルエッジのボタンを5・5・3・2と

押す

その瞬間紀斗の身体は紅いフォトンブラッドに包まれ両脚のマフラーからけたたましいエンジン音と共に煙が吹き出てくる

「ラディカルクリムゾンスマッシュユ！」

「必殺技か面白い！」

対してイプシロンはユプシロンの方のミッションメモリをエプシロンにセットする
するとエプシロンの刀身は巨大化し巨大な緑色の鋸と化す

「喰いつくせ！レージュストラッシュユ！」

紀斗のラディカルクリムゾンスマッシュユとイプシロンのレージュストラッシュユがぶつかり合い紅と緑のフォトンブラッドがせめぎ合う

「うおおおおお！」

「らああああああ！」

拮抗する両者だったが徐々にその拮抗は崩れ片方のフォトンブラッドがもう片方のフォトンブラッドに押し流される

「ぐあああ!?!くつ！」

「パワーはやっぱり俺の方が上だったみてえだな、紀斗お！」

せめぎ合いを制したのはイプシロン、紀斗はその場に膝をつき息を荒げている

(こうなったらあれを使うしかないか……)

紀斗は立ち上がるとラディカルエッジのボタンを2・1・0・6と押す

『NITRO ENGINE START UP』

その瞬間紀斗の両肩の装甲が外れ脚と同じようなマフラーが装備され胸の装甲が開き胸の中心には紅いフォトンストリームがありファイズアクセルのようになる

ブン！ブン！ブウウウウン！

けたたましいエンジン音を鳴らしながら紀斗はイブシロンを睨む

「見せてやるよ、この姿での俺の本気の走りを」

「まだ強化を隠し持ってやがったのか、だが今度こそ叩き潰してやる！」

『EXCEED CHARGE』

イブシロンは再びレージュストラッシュを発動し紀斗を叩き潰そうとする

「死ねえ！レージュストラッシュ！」

紀斗はラディカルエッジを右脚に付けEnterボタンを押す

『NITRO TURBO LEADY GO！』

瞬間紀斗の身体が熱く赤熱し紀斗以外の全てが時が止まったように動かなくなる

だが完全に止まっているわけではないこれはカッシスワームのフリーズと同じスピードになっている状態だ

「うおおおおお!!」

紀斗は瞬間連続でレージュストラッシュを側面からラディカルクリムゾンスマッシュで砕いていき完全に粉碎する

さらにイプシロンの身体を同じように何度も何度もラディカルクリムゾンスマッシュで貫いていく

『TIME OUT ENGINE STOP』

その音声と共に紀斗は元のラディカルブラスターフォームに戻りスピードも元に戻る

「くっ!はあ、はあ」

しかしその息は荒く膝をつき辛そうにしている

「お、俺のレージュストラッシュが!?!が?!が?!がああああああああ!?!」

紀斗以外の目にはレージュストラッシュとイプシロンの周りに紅いフトンブラツドの円錐状のエネルギーが20以上現れそれがレージュストラッシュを砕いていきイプシロンの身体を貫いていったように見えた

「がっ、ああ…」

そしてイプシロンは仰向けに倒れ変身は解除されOの姿に戻るがその姿は青白い炎をあげながら灰化が始まっている

「賭けは俺の勝ちだな、O、うちのメンバーを解放してもらおうぞ」

「…うん、いいよ約束だから…ね。君たち…解放して…あげて」

Oの言葉と共にD藍達の周りからオルフェノク達は退きD藍達は他のメンバー達の元に戻る

「ねえ、紀…斗君、僕の最後のお願い…きいて…くれ…るかな？」

「…言ってみろ」

「その…ポテチ、食べさせて…くれない、かな？あの世じゃあ…もう…食べれ…ない、だろう…から…ね…」

紀斗は近くの机に置いてあった風の開いてないポテチを開けるとOに手渡す

Oは震える手でそれを受け取ると一枚口に入れる

パリ

「やつ…ぱ、うまいなあ、コン…ソメ…の…りと、君…楽しかった…よ、あり…が…とう…」

Oは一枚食べると紀斗にお礼を言い完全に灰となって消えた

紀斗達はそれを見届けると奥の方にいるオルフェノク達の方を向く

「お前らも俺達と戦うか？容赦はしないが」

紀斗の言葉にオルフェノク達は人間態に戻りその中の一人が前に出る

「いや…Ｏ様に自分が負けたら戦わなくていいと言われていた。自分が負けた相手ではお前達じゃ勝てないからとな。先に進め、俺達はＯ様の最後の指示に従うだけだ」

「…わかった」

紀斗は変身を解きふらふらと歩きながらそのままオルフェノク達の後ろのドアへと歩いていく

それに他のメンバー達も戸惑いながら紀斗と共にドアの方へと向かい、早苗が紀斗に肩を貸す

「おい、紀斗本当にこいつら信じていいのか？それに大丈夫かよふらふらだぞお前」

「こいつらの目は嘘は言っていないしそれに最後の指示を聞くのがこいつらなりのＯへの忠誠なんだろうさ」

「あと俺がふらふらなのは最後にニトロラディカル使ったせいだな、あれ結構身体に負荷がくるんだ」

「ニトロ？お前機械じゃあるまいしニトロなんて積んでないだろ」

「ニトロっていうのは例えみてえなもんだ。自動車とかでニトロを燃料に使うと車体にかなり負荷がかかるがスピードはかなり出るだろ。それと同じだ、ま、こっちはフォトンブラッドを最大出力の限界も越えさせて使ったわけだがな」

「じゃあ紀斗さんの身体は今…」

「ああ、かなりきてるな。はは、参ったな、まだ幹部も一人残ってるっていうのにな」
紀斗は自嘲するように苦笑い他のメンバー達は心配そうに紀斗を見ながらその部屋を出る

そして紀斗達が出て行った瞬間オルフェノク達はOだった灰の周りで涙を流し自分達の上司が亡くなったことを嘆く

悔し涙を流し紀斗達に復讐したい者もいるが血が出るほど自分の掌を握りしめ涙を流しながらOの最後の命令を全うする

紀斗達は部屋の外にも聞こえてくるその嘆きを聞きながら次の階へと向かう

番外幕 Part 2 誤解と異世界と闘い

星空町 とある公園

ここは紀斗達の世界とは別の世界の星空町という町、その町のとある公園でこの世界の財団Xの幹部の一人、スイッチ部隊のリーダー、長谷部 創護（はせべ そうご）は研究の合間の休憩としてここまで散歩に来ていた

「さて、そろそろ基地の方に戻るとするか」

長谷部は公園の出入り口の方へ足を進めようとした瞬間目の前に銀色のオーロラが現れる

「んなっ!？」

「くそっ!この距離じゃ逃げられねえ!」

長谷部は踵を返しそのオーロラから逃れようとするがオーロラはそれを許さずそのまま長谷部を呑み込み消えた

紀斗達の世界 幻想郷 魔法の森

場所というか世界は変わり紀斗達の世界の幻想郷の魔法の森、ここの少し入ったところにあの銀のオーロラが現れ吸い込まれた長谷部がよろけながら現れる

「つとと、何処の世界だここ？今の持ち物だと元の世界にも帰れないし狂治になんとかしてもらえないか。面倒ごとには巻き込まれなきゃいいが……」

そんなことを呟きながら長谷部は周りを見渡すとちやうどこの辺りの見回りに来ていたG6に変身した甲と目が合う

「……………」

（赤いG3—X？ただ色塗っただけか？いや少しだがG3—Xと違う場所があるし改良したのか）

（見かけない顔だな、目つきが悪くて服装は白衣だが財団の人物じゃない可能性もあるし一応聞いてみるか）

両者はそんなことを考え先に甲が口火を切る

「おい、そのあんた、そんな格好してるがまさか財団Xの人間か？」

「ん？ああ、そうだけど？」

「よしそこ動かすなぶっ飛ばしてやる」

長谷部の返事に甲は即座に脚のスコープオンを両手に持つ

（しまったー!?つい反射的に答えちゃったけどどちらの部隊はともかく財団Xはライダー達に恨み買うようなことばっかしてるじゃねーか!?言った側から面倒ごとだよ!）

「ちよつと待て！俺はここの幻想郷を狙ってる財団Xのメンバーじゃな」これ以上幻想

郷に手エ出される前にぶっ潰す！」うおおおお!!」

甲は長谷部の台詞の途中で甲はスコープピオンを撃ちながら叫ぶ

(聞く耳持つてねー!?)

長谷部は近くの木の後ろに隠れるとメテオドライバーの天球を蒼くし銀色の部分を白にしたアキレスドライバーとメテオスイッチの上半分を白くしたアキレススイッチを取り出しアキレスドライバーを腰に巻きアキレススイッチをアキレスドライバーに挿す

「こんなところで死ぬわけにはいかなからな！変身！」

『Achilles・Ready?』

長谷部はドライバーのエンターレバーを下ろすと天球が回りメテオと同じように長谷部は古代ギリシャやローマの甲冑のような頭部に騎士のようなボディに刃のような籠手を両腕に装備した白と赤を基調とした仮面ライダー、仮面ライダーアキレスに変身した

「変身したっ!?!メテオと同じタイプのライダーか！」

「あんまり無意味な戦闘はしたくないが仕方ない。仮面ライダーアキレス、星座の力、受けてみな」

アキレスは柄の両端に円錐状の槍がついたアキレスジャベリンを装備し甲に向かっ

て突撃する

甲はスコープオンを連射し牽制しようとするがアキレスは銃弾を避けたりアキレスジャベリンで弾いたりしてどんどん近づいてくる

「チツ、なんて反射神経してんだよ！」

甲はスコープオンを脚に付け左肩の部分からGK-06ユニコーン改、背中からGS-07ゴーレムを取り出しユニコーン改のレーザーブレードを展開しアキレスに斬りかかる

「オラア！」

「おっと」

アキレスはその攻撃をアキレスジャベリンで受け止めいなすと同時に反対側の槍で甲の頭を狙うが甲はゴーレムでその攻撃を防ぐ

甲はユニコーン改の突きを繰り出すがアキレスはアキレスジャベリンを回転させユニコーン改を弾きユニコーン改は甲の手から離れてしまう

「くっ！おりゃ！」

「うおっ!？」

甲は腰のGB-09グレムリンをアキレスの足元に投げつけ爆発させる

その爆風を利用し甲は一旦距離を取る、ゴーレムを自分の前に出していたことで甲自

身へのダメージは無い

甲はそのままスコピーオンとGX-08オルトロスを装備し構える

(今ので少しでもダメージくらってたらいいが…)

「つたく、びつくりしたな」

「!?まさか無傷とはな」

爆煙が晴れるとそこには無傷のアキレスがいた、甲はそのことに驚くがすぐスコピーオンとオルトロスを連射し始める

それと同時にアキレスの両腕の籠手、アキレスイージスからエネルギー状のソードビットが現れ銃弾を弾いたり斬ったりしていく

「なっ!?!」

「やれやれ、あまり熱くなるなよ。俺は別にここの幻想郷を狙ってる財団Xのメンバーじゃ「こうなったらGZ弾を使うしかないか!」話聞けよこの野郎」

甲は完全に頭に血が上ってるのかアキレスの言葉に耳をかさずオルトロスに2発のGZ弾をセットする

「こいつでぶっ飛びやがれ!」

「人の話を聞かない奴は嫌われるぞ!」

対するアキレスもあの弾はさすがにくらいたくないと考えアキレスジャベリンの柄

の真ん中にあるスイッチソケットにアキレススイッチを挿しこむ

「G Z弾、発射あ！」

『Javelin・Limit Brake!!』

「ライトニングバースト！」

甲の撃った2発のG Z弾とアキレスの投げた雷の槍と化したアキレスジャベリンがぶつかり合い爆発が起きる

しかしライトニングバーストは止まらず少し威力は落ちたもののそのまま甲に向かって突き進む

「ぐはっ!？」

甲はギリギリゴレムを自分の目の前にやり身体に直撃することは免れたがそのまま甲は吹き飛ばされ後方にあつた木を何本もへし折りその先にあつた岩にぶつかりようやく止まった

「やばっ、やりすぎたか？」

アキレスはさすがに威力が強すぎたかと心配し甲に駆け寄る、近づくと甲は完全に気絶しているが大した怪我はしていないようだ

「よかった、骨折とかはしていないみたいだな」

「おい！お前甲に何してる！」

そこへ新たにきつきの爆発を見て甲の身が心配になった紀斗が駆けつけた

「お前が甲をそんなにしたのか？」

「いや、確かに俺がやったんだがこれには事情が…」

声に怒気を孕ませながら聞く紀斗にアキレスは実際自分が甲を倒してしまったので少々ばつが悪そうに事情を話そうとする、普段の紀斗ならここでちゃんと事情を聞き平和に解決しただろうしかし

「お前がやったんなら、仇は取らせてもらおう」

「へ？」

紀斗は仲間やダチ、大切な人が傷つけられるのを見るとキレてしまう性格、相手がいつもの財団Xのメンバーならまだしも今回は裏目に出ってしまった

紀斗はフォーゼドライバーを腰に巻くとトランススイッチを押す

『THREE TWO ONE』

「変身！」

カウントダウンが終わると同時にエンターレバーを押し紀斗は仮面ライダーフォーゼに変身する

「最初から最強フォームだ、容赦はしねえ！」

紀斗はコズミックスイッチによく似た全体が黒く所々に星を散りばめたようなス

イッチを出し○の所のロケットスイッチと取り替え押す

『ENDLESS COSMIC ON』

フォーゼの姿は変わり一瞬コズミックステイツなるがその姿は徐々に黒くなり青かった部分は黒くなりメテオフュージョンステイツのように所々に星を散りばめたようになり、黒の部分は白に、銀色の部分は光沢を放つ青色になり黒いバリズンソードを持ったフォーゼ エンドレスコズミックステイツに変身した

「無限の宇宙を絆で繋ぐ！仮面ライダーフォーゼ エンドレスコズミックステイツ、タイマンはらしてもらうぞー！」

「フォーゼのオリジナルフォームか、にしてもここは話を聞かない奴ばかりなのかー！」

紀斗はダークバリズンソードで斬りかかりアキレスはアキレスジャベリンでその攻撃を受け止める

『HAND HAND ON』『STEALTH』『CHAINSAW』

紀斗は△のスイッチをハンドに変えステルスとチェンソーを重ねがけで発動する

「ぐおっ!？」

透明になった先がチェンソーモジュールになっているハンドモジュールが後ろからアキレスの背中を切り裂き仰け反った所を紀斗はアキレスの腹に前蹴りをくらわせさらに□と△のスイッチをランチャーとガトリングに変える

『LAUNCHER LAUNCHER ON』『GATLING GATLING O
N』

『FREEZE』『STAMPER ERCC』

「これでもくらいな！」

「くらうかよ！」

紀斗はランチャーとガトリングを放つがソードビット達がミサイルや弾丸を防ぐがミサイルを防いだビットは凍りつく

「重ねがけは二つ以上できてどのスイッチでもOKってわけか、単純ながら面倒さい能力だな」

「お褒めの預かり光栄だなあ！」

『CHAIN ARRAY』

紀斗はチェーンアレイをダークバリズンソードに挿しダークバリズンソードの刃はエネルギーで出来たチェーンアレイとなりアキレスに迫る

ソードビットがその攻撃をガードしようとするがいきなり何発もの弾丸に撃たれたように弾かれる

「さっきのガトリングにスタンパーが重ねられてたか！くっ！」

「ズ」名答！

チエーンアレイをアキレスはアキレスジャベリンでギリギリいなし横に転がる

「これは少しやばいな、筋肉痛になるからあんまり使いたくないがしょうがない」

アキレスは全体がコズミックスイッチに似た全体が銀色のスイッチ、アキレス・オー
デインスイッチを取り出しアキレスドライバーに挿しスイッチを押す

『AchillesOdin・Ready?』

『Go!AchillesOdin!!』

するとアキレスの背中に戦闘機のような翼が装着されライダースーツは銀色になり
額に大きなV字アンテナが現れた仮面ライダーアキレスオーデインになる

「強化フォームか…」

「仮面ライダーアキレスオーデイン、お前らの誤解、神の名を持つて止めてやるよ」

アキレスオーデインは機械的な銀色の大剣オーデインブレードを装備し紀斗のダー
クバリズンソードとつばぜり合う

「ぐうっ!」

(パワーも上がってやがるな、ならこれだ!)

『ROCKET ON』

「オラア!」

「うおっ!?!」

紀斗はロケットスイッチをダークバリズンソードに挿すとダークバリズンソードはロケットの推進力でオーディンブレードを押し返し紀斗は体制が不安定になったアキレスオーディンを何度も斬りつける

「いい攻撃だが、痛くもかゆくもねえな」

「なっ!?!今の攻撃を無傷だと!?!」

「お返しだ!」

「ぐほっ!?!」

しかしアキレスオーディンは何度も斬りつけられたにもかかわらず全くの無傷、その事実に驚き隙が出来た紀斗の腹にアキレスオーディンは容赦ないボディープローをくらわせ紀斗は後ろに転がる

「くっ、ならこいつならどうだ!」

『N MAGNET ON』

紀斗はバックステップで15mくらい距離を取るとNマグネットスイッチをダークバリズンソードに挿す

するとダークバリズンソードの刃から赤いレーザーが放たれアキレスオーディンに当たる

「効かないな」

「おいおい嘘だろ…」

しかしアキレスオーデインはレーザーを一步も動かさず平然と受けている

「くそつたれがあー！」

『ROCKET ON』

『DRILL ON』『SPIKE FIRE』

『LIMIT BRAKE』

紀斗はダークバリズンソードに再びロケットスイッチを挿し△のスイッチをドリルに変えさらにスパイクとファイヤーを重ねがけし表面に炎を纏った棘だらけの掘削機のようになったドリルをロケットの推進力を使いアキレスオーデインにぶつける、アキレスオーデインはその攻撃を胸で受け止めながら余裕そうな雰囲気を出す

ドリルはアキレスオーデインの身体を貫こうと必死に回転するが全く効果が出ない

「効かねえ、よー！」

「うわっ!？」

それどころかアキレスオーデインは身体に力を入れドリルを弾き飛ばした

「ぐう、こうなったらヤケクソだ！」

『GATLING ON』

「オラオラオラアー！」

紀斗はヤケになりダークバリズンソードにガトリングスイッチを挿しエネルギー弾を連射しまくる

「!?ぐおお!?」

「!?」

そのエネルギー弾が数弾当たった時今まで平然とそれ以上の攻撃を受けても平然としていたアキレスオーデインが確かに今、今までの攻撃より威力の低い攻撃で仰け反りダメージを受けた

しかしアキレスオーデインはすぐにバックステップでそのエネルギー弾を避け距離が開くとさらに当たってもさつきと同じように平然としていた

（あの弾はNマグネットのレーザーと同じようなエネルギー弾、実弾じゃないと効かないってのは無さそうだ、そして距離を取られた後はまた効かなくなつた……。となると無効化の条件は距離! だけどNマグネットのレーザーを放った距離は確か15mくらい、となると効くのはそれよりさらに近く近づきすぎない距離か）

紀斗は何度も驚いたおかげで冷静になつた頭でアキレスオーデインの攻撃に対しての不可解な防御力について考える

ちなみに紀斗はこれを考えながらアキレスオーデインと斬り合っている

（一旦距離を取らないとジリ貧か…）

『ROCKET ON』

「ふんっ！」

「うおっ!？」

紀斗は再びロケットを使うと上に飛びアキレスオーデインと距離を取ろうとする

「距離を取ろうと思ってただろ、残念、俺も飛べるんだよ」

「チツ、飛行能力付きだったか！」

『AREO ON』『SMOKE』

「そう簡単にやられるか！」

しかしアキレスオーデインは紀斗のロケットよりもさらに速いスピードで飛び紀斗に追いつきオーデインブレードで叩き落とそうとする

だが紀斗はエアロにスモークを重ねがけしまずアキレスオーデインの方へエアロモジュールを向け空気を吸いこみそれに一瞬アキレスオーデインは体制を崩す

そして今度は重ねがけしたスモークの煙幕と同時に圧縮した空気を一気に吐き出す

「うおわ!?!目くらましか！」

「その通り！」

紀斗は一旦地上に戻るとアキレスオーデインとの距離を目測で測り×のスイッチをネットに変える

『NET ON』『EREC』

「そうらっ！」

「何！うわっあばばばば!?」

「電撃付きのネットだ、痺れな！」

紀斗はネットでアキレスオーデインを捕まえると重ねがけしたエレキの効果で電撃がアキレスオーデインを襲う

「くっそ！一旦離れるか近寄らねえと…！」

『WINDH ON』『FIRE』

「悪いがそうはさせねえ！」

「おい待てそれって！」

「火炎付きワイヤーくらいやがれ！」

「ぐうううう！」

電撃のネットの上からさらに先端からワイヤーにかけて炎を纏ったウインチがアキレスオーデインに巻きつきアキレスオーデインの身体を焼く

「こっとなつたら…」

「なっ!?くそっ！」

『WHEEL ON』

アキレスオーデインは縛られダメージを与えられながら紀斗の方へ低空飛行で突っ込んでいき紀斗はホイールモジュールで近づかれ過ぎないようにしようとするがスピードが違いすぎた

「おおおおおおお!!」

「がつ?!がああああ?!」

アキレスオーデインは無理矢理音速の域にまでスピードを上げ紀斗が引きずられる羽目になる

「くう、ブレーキいい!」

「ぬああああがつ?!」

アキレスオーデインは近くのちよつとした崖の麓手前で止まると紀斗はそのまま慣性の法則により崖に突っ込み腰まで埋まった

「この距離ならもうこいつも効かねえな、ふん!」

「く〜!!」ジタバタ

アキレスオーデインは近距離に入ったので無効化が発動し効かなくなったネットとウインチを引き剥がし崖からなんとか這い出した紀斗を見る

「ぶはっ!てめえよくもやってくれやがったな!」

「それはこっちの台詞だ!あんなドSな攻撃しやがって!」

紀斗とアキレスオーデインは睨み合い再び激突しようとした時数発のドリルミサイルが2人を襲う

「ぬおっ!!」

「なんだ!?!」

2人がミサイルの飛んできた方向を向くと何体かの怪人とモールアンデッド、そして明らかに焦っている白衣の男が1人

「おい、フオーゼ」

「なんだ?」

「ちよつとあそこの奴らシめないか?今の攻撃に少しイラツときた」

「お前あいつらの仲間じゃないのか?」

「あんな奴ら知らないし俺はこの世界の財団Xじゃない」

「それどつちにしろお前財団Xメンバーってことだよな…」

「まあ今はそんなことどうでもいい。とにかくあのふざけた奴らぶつ飛ばすぞ」

「賛成だ!」

2人は頷き合い怪人達の方へ駆け出し怪人達は1人焦る白衣の男を置いて2人に襲いかかる

白衣の男 s i d e

俺は鷲井 伸彦（わしい のぶひこ）、このA班の隊長を任せられている、が俺は今かなり後悔している

何故ならうちの隊の十数人はいる怪人達が為す術もなくなつた2人の仮面ライダーにぶちのめされているからだ

最初あの2人が戦っていて初めて見る白いライダーがいてZ様に報告したら全滅してでもデータを取れと言われあの2人はガチバトルしてるみたいだからどちらかが倒れたら漁夫の利を狙って隠れてたのうちの隊の怪人共はアンデッドやグロンギ、アンノウンで構成されてるが言うことを全く聞きやしないせいがあるうことかまだ戦闘を続けようとしている2人に攻撃を仕掛けやがった

案の定2人の仮面ライダーはうちの隊の奴らと戦うことになり今に至る…

「ふつとべー！」

『HAMMER ON』『CHAIN ARAY SPIKE』

『ぎやあああああ!?!』

海堂の方は左手から伸びた鎖の先に付いてる棘付きハンマーで周りの隊員達を吹き飛ばしてるし…

「誤解されてイライラしてた分ここで発散してやるよ！」

「うわあああ！なんだこいつ攻撃が効かなぐほお!?!」

「ダ、ダグベ…ブバア!？」

あつちの白いライダーは銀色のメカメカしいカッコいい大剣で隊員達を薙ぎ払って
るし…

「ふう、後はその白衣だけか」

「みたいだな」

気がつくとも十数人の隊員達は全てやられアンデッドだった隊員も全て封印されてい
た

「くそーもう俺一人しか残ってねえのかよー」

俺はヤケクソになりながらスイッチを押し鷲座のゾディアーツ、アクイラゾディア
ーツに変身する

「こうなったらもうヤケだあ!」

俺は低空飛行で突っ込みながら羽手裏剣と装備している矢を放つ

「ふん!」「オラア!」

たが羽手裏剣と矢はあいつらの持つ剣の一振りの風圧で全て弾き飛ばされ無力化さ
れる

「ちつくしよがああああ!!」

俺は自分の身体に風を纏わせながら回転し一本の矢のように2人目掛けて突っ込む

『フアーン フアーン LIMITBRAKE』

『MeteorEnd・LimitBrake!!』

俺はその機械的な音声を最後に途轍もない痛みを感じると意識を失った

鷺井side end

三人称side

最後、紀斗はエンドレスコズミックスイッチをダークバリズンソードへ挿しアキレスオーデインはオーデインブレードにアキレスオーデインスイッチを挿し2人の剣のリミットブレイクを同時に受けアクイラゾディアーツは爆発し気絶した鷺井が倒れる

「さて、じゃあさっきの…」

「続きといくか」

「待つてくださいデス！」

「待つて紀斗！」

そして再び2人が戦おうとする直前紀斗達の前に2つの影が飛び出てくる

「狂治!?!」「甲!?!」

それは甲と紀斗達もつい最近知り合った異世界の財団Xの天才児、狂治だった

「え?甲はわかるが何で狂治がここに?」

「実は俺の早とちりで襲っちまったがこの人が以前狂治が言つてた長谷部さんなんだよ

…

「へ？マジで」

「マジだ」

「マジデス」

「マジだぞ」

紀斗は確かに以前狂治の口から家族のような存在である者達の名前は聞いていてその中に長谷部という名も存在した

次の瞬間紀斗の行動は速かった、甲の頭を長谷部の方へ向かせ自分の頭と同時に地面に押さえつける

「ほんつとーに申し訳ございませんっ!!」

「ぼうびわべございばべん…」

紀斗は地面に頭をつけども整ったフォームのDO☆GE☆ZAをしついでに甲も紀斗に頭を地面に押さえつけられながら言葉になっていない謝罪の言葉を言う

「ああ、誤解が解けたならいいよ。それより狂治はどうやって俺の場所を特定したんだ？」

「それはデスね、父さんの白衣にこっそり発信機取り付けておいたんデスよ」

「その反応が急に消えたから驚いたデスよ。周りの世界の中からその発信機の信号を

やっと見つけてディメンションメモリでここまで来たと思ったたら甲さんがボロボロの状態で倒れてるんデスから。」

「いやー、ボロボロのところをヒールメモリで治してもらった時は本当助かったよ」

「でも甲さんの話を聞けば結局この騒ぎの元凶は人の話を聞かずに襲いかかった甲さんなんデスけどね…」

「うっ、本当ごめんなさい」

甲は再び罪悪感で頭を下げていると鷺井がうめき声をあげながら体を起こしていた

「ううっ、ここは…確か俺はあの2人にやられたんだったな…」

「目が覚めたようだな」

「うっ、海堂…紀斗…」

変身を解いていない紀斗は鷺井の前に立つ

「ここいつはどうする？捕まえていてもどうせシークレットメモリの効果で情報は何も引き出せないが」

「こ、殺すなら殺せ！どうせこのまま戻ってもまた捨て駒にされるだけだ！それならいつそここで死んだ方がマシだ！」

「なら…」

紀斗はその言葉で鷺井の首にダークバリスンソードを突きつける

「ちよつと待つてくれ紀斗」

「…なんだ長谷部、狂治に見せたくないなら別の場所でするが？」

「いや、そいつうちの財団Xにスカウトしていいか？」

「は？」「え？」「マジでか？」

紀斗、鷺井、甲は3人とも長谷部の提案に鷺きの声を上げ紀斗はダークバリズンソードを下ろす

「俺は別にいいが、こいつ自身が決めることでもあるしな」

「…俺がそつちの財団に行つてもどうせ待遇は変わらないだろ」

「ちなみにこつちの財団Xでの待遇はこんな風です」

疑いかけける鷺井に狂治はiPaOによく似た機械を取り出しその画面を見せる、その画面をスライドさせ変える度に鷺井から鷺きの声上がる

「で、うちに来るか？」

「よろしくお願ひします!!」

鷺井は先程の紀斗に負けず劣らずの素晴らしいDOG☆GE☆ZAを繰り出しながら涙を流していた

「ようやく、無責任な鬼畜上司や不良みたいな部下達から解放される…」

どうやら彼も職場でかなり苦労していたようだ

「はあ、やれやれ疲れたな、いつつつ!？」

「アキレスオーデインになったせいデスね、また全身筋肉痛頑張って耐えてくださいデス」

長谷部はアキレスオーデインの変身を解くと全身が筋肉痛で身体が悲鳴を上げる

「それなら迷惑かけた詫びに俺が治そうか？」

「出来るのか？ いてて」

「ああ、ちよつとこれに寝てくれ」

紀斗は変身を解くと能力でマッサージ屋にある固めのベッド（北岡さんの行きつけのマッサージ屋の物）を出し肩を貸しながら長谷部をそこにうつ伏せに寝かせる

「それじゃ、すぐ終わるからな。ふっ!」

ドッ!ドッ!ドッ!ドッ!ドッ!ドッ!

「おお!？」

紀斗は長谷部の背中の7箇所を勢いよく押し長谷部はその衝撃に驚き一瞬で身体が脱力する

「終わったぜ、もう大丈夫のはずだ」

「ほ、本当だ、さっきの筋肉痛が嘘みたいだ。しかも身体も軽くなったように感じる」

「今回は筋肉痛を治すツボ、疲労回復のツボ、回復力増進のツボを押しだからな。あと、

この前永琳が作ってくれた筋肉痛に効く薬、これもやるよ」

長谷部はベッドから起き上がると先程までの痛みによる動きにくさは完全に無くなり軽くなった身体を動かす

紀斗は押ししたツボの説明をするとポケットから薬のカプセルを出し長谷部に渡す

「それじゃ俺達は元の世界に帰るわ。ツボ押しありがとうな」

「また会いましょうデス！」

「海堂さん今まですいませんでした！」

「本当今回はごめんな！今度は俺の料理もご馳走するからよ！」

「今度からちゃんど人の話は聞くようにするぜ！またなんか手伝えることがあったら呼んでくれよー！」

『Dimension Maximam Drive』

長谷部達はそのまま狂治のデイメンションメモリのマキシマムドライブで自分達の世界へ帰っていった

「さて甲、てめえはよくも人騒がせなことしてくれたな」

「いや、俺さつき謝ったじゃん？それに財団Xっていったらつい、な？」

「問答無用！笑いのツボ！」ドッ！

「ぎゃああああ!?!あつはつはつはつはつ!?!」

紀斗達と異世界の財団X幹部、長谷部との出会いはこうして幕を閉じた

第三十九幕 VS G

「おい紀斗、お前その状態じゃGや暗道とも戦えないだろ。少しは回復しろ」

「そう…だな。仕方ない、こいつを…使うか。スキルコピー【立神の特異体質】」

紀斗はレオゾディアーツの変身者、立神 吼の特異体質をコピーしアクエリアスのスイッチを取り出し押す

すると紀斗の姿は女性的なフォルムの水瓶座のホロスコープス、アクエリアスゾディアーツになりその両肩から湧き出した水が紀斗の身体を包み少しすると消えた

「これで傷は外部も内部も全て回復したな」

紀斗は不意打ち組のメンバーにも同じように水を纏わせ傷を癒し変身を解く

一同はそのまま上の階に上がると放送がかかる

『海堂、それからその他、今お前達の目の前にある通路を真っ直ぐ進んだ部屋に來い。その部屋に俺はいる、そして上の階への階段もこの部屋を通らなけりや無いぜ？他の通路はもう潰しちまったからな。それじゃ待つてるぜ』

Gの放送が終わると紀斗達は話し合い言っていたことが本当かどうかを紫が他の通路の先をスキマで見たが瓦礫で埋もれていて本当に潰されているようだ

一同は仕方なくGに言われた通りに真つ直ぐ進みでかい鉄製のドアの前にたどり着きドアを開けるとそこには椅子でふんぞり返っているGと大量のヤミーがいた

「待つてたぜえ、海堂お。お前とのバトルが楽しみでこんなにヤミー量産しちゃったよ」

「これ全部お前が作ったのかよ……」

「銀や紫のメダルの効果でな、俺自身やそこらの物から生み出したのさ。俺の中のメダルの効果でキメラっぽいのか生まれちゃったがな」

確かにGの言う通り周りにいるヤミー達は全員昆虫、ネコ科、水棲生物、重量系、鳥、幻獣、恐竜、爬虫類、甲殻類それらの特徴を最低二つは持っているものばかりだ

「そういうえばお前以外の研究員の姿を見ねえがどうしたんだ？」

「あ？なんだ敵の心配か？お優しいね、俺の部下共ならここにやもう誰もいねえよ。全員の支部に俺のコネで無理矢理移した。わざわざあいつらが戦いで死ぬ必要はねえからな、俺の戦力はこの俺の欲望から生まれたヤミー共だけで充分だ。」

Gはそう言うとその姿を真木博士のような恐竜グリードへと変える

「さあ、死合おうじゃねえか海堂。俺の欲望とお前らの絆、どっちが上か白黒つけるぞ
！」

「上等だ、てめえとの因縁もここでけりをつけてやるよ。変身！」

紀斗はオーズドライバーを腰に巻き新しいメダルをオーズドライバーに入れオース

キャナーで読み込む

『ニーズヘツグ！ファープニル！オウリュウ！』

ニーズファア！オーウ！』

目の色は緑で頭部は口を開けた遊○王のレッドアイズのようになっていてライアの
ように後頭部から蛇の尾が髪のように垂れていて、両腕は銀色で爬虫類の鱗が纏われて
いて胴体は紫色になっている、下半身は金色のドラゴンの脚を模した脚鎧と竜の尾を装
備している、オーラングサークルは1番上は口を開けた大蛇、真ん中は毒の息を吐く龍、
1番下は鉱石の前に佇む竜の姿だ

紀斗はドラゴン系のコンボ、オーズ ニーズファオウコンボへと変身した

「新しいメダルか、食いごたえがありそうだな！」

「てめえなんぞにもう食わせるメダルはねえよ！」

Gはまず紀斗達に紫色の火炎弾を放つが紀斗はその火炎弾に真っ向から突っ込み顔
を包みこむようになっていた竜の口、ニーズヘッドが立体的に浮かび上がると巨大化し
その火炎弾を

・
・
・

食 べ た

「味としては悪くねえな、中々いける」

「く…食った!? 恐竜グリードの状態の俺の炎を食っただと!？」

全員がその事実には驚き硬直しているなか紀斗は軽い調子で味のほどを確かめていた
 「ニーズヘッグって大蛇を知ってるか? ニーズヘッグは北歐神話で世界樹の根を齧り死者の腐肉を食らう大食らいの蛇、これはそいつの特徴を受け継いでいる、食えるものならなんでも食う! 普通食えない物でも食らって自分の栄養にする。それがこのメダルの力だ」

「ふざけた力持ちやがったな! お前ら一斉にやっちゃまえ!」

『オオオオオオオオ!!』

周りのヤミー達が電撃や水流などの遠距離攻撃を紀斗とその後ろのメンバー達全員に向けて放つ

紀斗以外は全員対処しようとするが紀斗がそれを手で制し自分に任せると合図する

「おおおおお! らあ!」

紀斗は片足を大きく上げ力強く床を踏みつけると同時に脚の脚鎧、オウリュウアーマーが光る

するとメンバー全員を取り囲むように床から黄金の鉱石の壁が現れ全ての攻撃を防

ぐ

「な!？」

「黄竜は土の属性そして黄金を意味する。この黄金の壁はあらゆる物を通さない、ついでに」

紀斗はもう一度同じように足を踏み鳴らしオウリユウアーマーを光らせると今度はヤミー達の真下から鋭く尖った黄金の鉱石が飛び出しヤミー達を貫く

「ぐはあ!?!」「うがつ!?!」「ぎやあ!?!」

「殺傷力も抜群だ」

「くそっ!ハチャメチャなメダル作りやがつたなホント!」

Gは黒の甲殻類のグリードの姿になると右腕のハサミに雷を纏わせ紀斗に攻撃する
しかし

「その程度かよ?」

「なっ!?!」

紀斗はその攻撃を両腕の銀色の鱗状の鎧ファープニルアーマーで受け止めるがファープニルアーマーには傷一つついていない

「ファープニルは鋼の鱗を持った竜、その程度の攻撃じゃあ傷一つつかねえよ!」

「がつ!?!」

紀斗はハサミを弾くと両腕のファープニルアーマーからアームファングのような銀色の刃、ファープニルスラッシャーが展開しファープニルスラッシャーでGの硬い甲殻

を斬り裂く

「お前ら、ここは俺に任せて先に行け」

「お前紀斗！〇の時もお前1人でやったつてのにまた1人でやる気か！しかも今回は1対1じゃなくて向こうもまだかなりの数がいるんだぞ！」

「だからだ、俺の新しいメダルは多対1に特化してるうえに見境が無い。お前らまで巻き添えにしちまうわけにはいかないからな」

「だけど紀斗さん！」

「いいから行け！奴らはいつまでも待つてはくれないんだからな」

紀斗はヤミーやG達を囲むように金の鉱石の壁を出し向こうのドアまでの道を作る

「お前らは4階を頼む、ここは…俺1人でやらしてくれ」

「…死んだら三途の川に乗り込んででも殴り飛ばすからな」

「馬鹿言え、永琳残して死ねるかよ」

甲達は紀斗を残しドアに向かって走っていく

「戦え！」

「殺したいい！」

何体もの鳥系の特徴を持ったヤミーが上空に飛び甲達に襲いかかろうとする

「させるかよ！ポイズンブレスマシンガン！」

紀斗はフアーブニルのマークを紫色に光らせると紀斗は両手の間に紫色のエネルギー球を生成しそこから小さい紫色の弾丸を連続で射出する

「ぎゃあ!」「ぐおっ!?!」「うげあ!?!」

弾丸はヤミーに当たった瞬間ガス状になりヤミーを包む

包まれたヤミーは苦しうにもがくがすぐに抜け出してしまふ

「チツ、やっぱヤミーに毒は効かないか。だが、時間稼ぎには充分!」

「あんまり調子に乗るなよ海堂おおお!」

Gはアングの姿になると連続で火炎弾を発射し紀斗は自分を覆うように金の鉱石の壁を出しそれを防ぐ

(全員部屋から出たな…)

紀斗は甲達が部屋を出たのを確認すると新しいメダルを取り出す

「これでようやくこのメダルも使えるな…」

「なんだ?他にも新しいメダル持ってやがったのか」

「ああ、ただこいつは周りに味方がいちゃ巻き込んでしまうからな。ようやくお披露目だ」

紀斗はドラゴン系メダルを取り出し新しく出したメダルを入れオースキャナーで読

み込む

『アラシ!フブキ!ジシン!アーブ!アブ!シン!』

頭部は風と雷を模したアラシヘッドになり胴体は氷の結晶のシールド、フブキアーマーを装備したフブキアームに、脚部はゴツイ岩のような脚鎧、ジシンアーマーを装備したジシンレッグに背中には風神雷神の絵が描かれた巨大な扇、基本カラーは白の天災系コンボ、アブシンコンボに変身した

「自然の恐ろしさを見せてやるよ」

「上等、そんな現象ごと食いつくしてやる」

「ならくらいな！嵐よ！吹き荒れな！」

紀斗が手に巨大な扇を持つとそれを乱暴に振り回す

すると室内に黒い雨雲が現れ風が吹き荒れ始め雷がなり嵐となる

「天候変化、嵐」

「くっ！この程度の嵐がどうした！おら！」

Gは吹き荒れる嵐をうっとおしく思いながら姿をメズールに変え嵐でも問題なく撃てる水流弾とカザリの竜巻ウヴァの電撃を同時に放つ

「嵐暴飛龍（らんぼうひりゆう）！」

しかし紀斗は嵐扇を振るい風と水と雷の龍を作りだし相殺させさらに同じ龍を何体も生み出す

「くそっ！邪魔くせえな！だが紀斗！自然の力がこんな程度なら拍子抜けもいとこだ

ぜっ」

「安心しろよ、舞台はちょうど整ったところだ。ふん！」

紀斗は脚を踏みならすとジシンアーマーが茶色に輝き部屋全体が震度7のような揺れを起こしGやヤミー達はその場から動けなくなる

「うおおお!!」

「さらに災害には二次災害が付き物だ」パチン

紀斗が指を鳴らした瞬間壁から土砂が現れヤミー達を呑み込んでいく

「うわああああ!!」「ぐえっ!!」

「このアブシンコンボの能力の一つ起こした災害に関係した自然現象をその場で引き起こすことができる」

「くそつたれな能力使いやがるなまったく!こっちの能力もくらいやがれ!」

Gはショツカークグリードの姿になると紀斗にエネルギー弾を放つ

「おおっと!大震災にはまだ二次災害があるぜ」

しかしエネルギー弾は紀斗に届くことは無かった

紀斗の足元から急に部屋の天井まで届くような巨大な津波が発生しエネルギー弾を呑み込んだからだ

「このビッグウェーブを止められるか!」

「クソが！」

Gは恐竜グリードの姿になると冷気を発し津波を一瞬で凍らせる
「この高さなら充分か」

紀斗はそう呟くと両腕を上への雷雲にかかげ冷気を放つ

すると先程まで豪雨だった雨は止み代わりに巨大な雷が猛スピードで降ってきた

「今度は馬鹿でかい雷かよ！めんどくせえもんばつか使いやがる！」

「降ってくるのは雷だけじゃないぜ、嵐暴飛龍！」

紀斗は再び嵐扇を振るい風や雷、氷の龍を放ちG達を襲わせる

龍や隕石並みのスピードで落ちてくる雷がヤミー達を襲いどンドンセルメダルへと
変えていく中Gはあえてイラつき怒りを殺意に変えその欲望を貯めていた、確実に相手
を倒すために

「もういつちよ揺れてくぜえ！」

「!?また地震か！」

紀斗は再び地震を起こすがその次に起きたのは先程のような土砂崩れではなく

「完全に埋まりな！氷土墓地！」

「雪崩だど!?!」

360。全ての方角からの雪崩、場に雹という名の氷を加えたせいで地震で起こる二

次災害に付け加えられた災害がG達を襲い紀斗以外を生き埋めにする

しかしいきなり雪の中から火柱が立ちそこからアングの姿になったGが現れる
「いい具合に怒りが溜まったよ、今度こそぶち殺すぞガキい！」 チャリン

Gは激昂しながら額にセルメダルを入れヤミーを作りだす

出てきたヤミーは恐竜の中で最も有名な恐竜、ティラノサウルスのヤミー、人間のよ
うな顔はあるがその顔はデーボモンスターの怒りの仮面のような表情をしている

「うううう、殺す！殺す！海堂紀斗を殺すうううう！」

「俺の怒りによる殺意を今の最大限まで高めて作ったヤミーだ！やっちまえティラノヤ
ミー！」

「殺すうううう！」

「上等！かかってこいや！」

ティラノヤミーはおお振りに殴りかかってくるのを紀斗は一瞬で作った氷の盾で防
ぎ前蹴りをくらわせる

すると蹴った瞬間ジンシンアーマーが光り振動しティラノヤミーが壁まで吹き飛ば

「ぐ、うううう」

「ジンシンアーマーは何も地震起こすだけの脚鎧じゃねえんだよ。自動で震脚を起こして
追加ダメージを与える効果も持つてる、それを使えば」

瞬間紀斗がその場から消えGとテイラノヤミーは困惑する

「目に見えないスピードで動くことも出来る」

「ぐがあ!？」

気づけば紀斗はテイラノヤミーの目の前にいてテイラノヤミーのむき出しの腹に拳をめり込ませていた

「ふっ」

「ぐう!」

「なっ!」

しかしこんな状況でGはニヤリと笑いテイラノヤミーは紀斗の腕を掴む、そしてその瞬間紀斗が殴った場所が爆発した

「ぐあっ!？」

「どうだ海堂?俺の怒りの爆発はよ」

「くっ!爆発能力か」

「その通りこのヤミーは傷つけられた部分を爆発させられるんだよ傷つけられた怒りを原動力にしてな」

Gは笑いながらそう言うのと紀斗に火炎弾を放つ

紀斗は冷気を放ち火炎弾を無効化するが横からきたテイラノヤミーに殴られ殴られ

た部分が爆発する

「ぐおお!」

「殴った場所でも爆発可能なんだよ!そしてお前を傷つけなければ傷つける分だけ俺にセルメダルが溜まるお前を殺したらどれだけのメダルが溜まるだろうな!」

「はっ、そう簡単に殺されてたまるかよ」

(この爆発威力がかなりありやがる…、一発でG6のGZ弾並みの威力か)

紀斗はまったく応えていないような口調でGに言い返すが心の中では焦り冷や汗を流していた

仮面ライダーの必殺技級の爆発を何度でも使えるヤミーと全てのグリードの力が使えるG、いくら新しいメダルの力が強くても戦況としてはあまりよろしくない状況だ

紀斗は新しいメダルを手の中に出現させコンボチェンジする

(このコンボは多対一にはあまり向かないから数を減らしておいて正解だったな)

『軍艦!戦闘機!戦車!』

『グーン!グーン!グンセンシャ!』

紀斗はタジャドルの時のタカヘッドのように顔の側方に赤と鉛色の金属的な装甲が広がり両肩には軍艦の砲台、背中にはジェット機のような翼とミサイル、脚には戦車のキヤタピラと砲身が付いた鉛色の兵器コンボ、グンセンシャコンボへと姿を変える

「仮面ライダーオーズ グンセンシャコンボ、対艦巨砲は嫌いかい？」

「今度は近代兵器か！面白え！」

「コロスウ！」

Gは防御力が高い爬虫類系グリードの姿へと変化しティラノヤミーと共に突っ込んでくる

「ぶっ放してくぜ！」

「ガア!？」

「くっ！」

紀斗は両肩と両脚の砲身から砲弾を撃ちティラノヤミーはまともに顔面に砲弾をくらいいGは両腕の亀の甲羅で後ろに吹き飛ばされながらも防御する

「ウガア！」

「うおっ!?!目くらましか！」

ティラノヤミーは地面を殴り爆発させると辺りは爆発により巻き上げられた雪と粉塵でほぼ何も見えなくなる

「ウ〜ウガア！」

「おいおいでかいな」

ティラノヤミーは中から機材や色々な物が出ている巨大な雪玉を紀斗に投げつけ

斗は雪玉に照準を合わせ両肩の砲台で爆破する

「ガア！」

「来ると思つてたよトカゲ野郎！」

爆破した雪玉の上空からティラノヤミーが拳を振り上げ殴りかかってくるが予測していた紀斗は腰の辺りからミサイルを4発出現させティラノヤミーに向かって発射する

「ガアア!？」

「決めるぜー！」

ミサイルが全弾命中したティラノヤミーは身体から煙を出しながら雪の上に落ちフラフラと立ち上がる

紀斗はそんな状態のティラノヤミーを見ながらオースキャナーでメダルをスキャンする

『スキヤニングチャージ!』

すると両肩の砲台は神奈子の御柱並の太さのキャノンとなり背中の翼の両端と両脚の砲身も同じ物となり胸のオーリングサークルが輝くと同時に開き中からブレストキャノンよりさらにでかい砲身が出てきて全ての砲門がティラノヤミーをロックオンする

「せい、やあああああああ!!」

「ガ、ガアアアアアアアアア!？」

全ての砲門から魔理沙のファイナルスパーク並の超ド級のレーザーが放たれティラノヤミーはその光に呑み込まれセルメダルを撒き散らしながら爆散した

「…Gがない?」

紀斗はティラノヤミーが爆散したのを見た後砲身が元に戻ると同時に周りを見渡すがGの姿が見当たらない

「一体どこに…」

この部屋は既に紀斗のアブシンコンボによつて起きた雪崩で部屋の下半分は丸ごと雪に埋まつてしまつていて隠れるところなんて無いに等しい

そんな状態でいるとしたら

「下か…」

『(名答!)』

紀斗が呟いた瞬間紀斗の真下の雪の中からメズール暴走体のウナギのような頭が突き出てくる

紀斗はそれを横に飛ぶことで避け体制を立て直す

『ティラノヤミーはあんまメダルを稼げなかつたがまあいい、充分時間は稼げたからな』

！」

その声と共に雪が持ち上がり巨大な異形となったGが姿を現す

昆虫のような鋭い牙が生えている頭、猫科の物と思われる脚、片腕は黒い甲殻を纏ったカニのような鋏、もう片方の腕はゴリラのような太い灰色の腕、胴体は重量生物系の逞しい身体に重ねがけするように茶色の爬虫類の鱗が隙間なく覆っている、ティラノサウルスのような尾が生え背中には鳥系の赤い大きな一対の翼とそれぞれメズール暴走体のウナギのような頭が付いた8本の触手が生えている

「雪の下のセルメダルを回収してやがったのか！」

『その通り！倒されたヤミー共のメダルはさっき回収出来なかったからな！戦っている間に溜まったメダルをティラノヤミーに時間稼ぎさせておいてその間に取り込んだのさ、こんな風にな！』

そう言うとGはティラノヤミーだったメダルを吸い込み吸収する、するとほぼむき出しだったゴリラのような腕が胴体と同じように茶色の鱗で覆われていく

『さあ、第二ラウンドといこうぜ海堂』

「望むところだ怪物野郎」

Gは8本の触手のウナギの口から水流を発射し口からは電撃をさらに紀斗への重力を倍以上にする

「うっ！ おお おお おお！」

紀斗は両肩の砲台から砲弾を連射し両脚のキヤタピラをバースのキヤタピラレックのようにし無理矢理猛スピードでGに向かって突き進んで行く

『はっはっは！ 効かねえなあ、その程度じゃよお！』

しかしGの身体にいくら砲弾が当たってもダメージは皆無、硬い鱗に覆われた身体には焦げ目一つついていない

「チツ、さすが爬虫類系の鱗、防御力は随一か」

『そんなぼーつとしていいのかい！』

ダメージが皆無という事実を確認したため出来た紀斗にできてしまった一瞬の間、Gはそれを見逃さず8本の電撃を纏った水流が紀斗に命中した

「効く、かあああああああ！」

紀斗はキヤタピラで自分を高速回転させ水流を弾き返す

そしてその身体には普通なら変身解除される程の攻撃を受けていたにも関わらず傷一つ無い

『そつちも中々の防御力じゃねえか、人のこと言えねえぞ？』

「兵器が硬さで生き物に負けてられるかよ。」

（だがこのままだとジリ貧だ、仕方ない、あれを使うか）

紀斗は再びドラゴン系メダルを取り出すと兵器系メダルと入れ替えコンボチェンジする

『ニーズヘッグ！ファープニル！オウリュウ！』

ニーズファ！オーウ！』

『スキヤニングチャージ！』

さらに紀斗はニーズファオウコンボにコンボチェンジした瞬間スキヤニングチャージを発動する

ドクン

その心音のような音と共に紀斗の身体が変化し始める

身体全体が巨大化し姿形が本物のドラゴンの姿になっていきGと同じくらいの大きさにまで巨大化する

首から上はレッドアイズに似ているが胴体は銀色の刺々しい鱗に覆われ紫色の翼を生やしている、下半身は金色で分厚い金の鎧のような鱗が覆っている

「ガアアアアアアアア!!」

『お前、なんだその姿…。本物のドラゴンになるなんて、ありえねえだろ』

Gは呆然と竜へと姿を変え吼える紀斗を見て呟く

「グ、ウウウ、ハア、ハア、自我ガあんマリもたネエな。コリヤ」

紀斗は必死に本能に食い尽くされそうになりながらも自我をギリギリで保ちGを睨む

『そんな状態で意識が残ってやがるとはな、相変わらずタフな奴だぜ』

「う、ルセえよ。こうでモシなキヤてめエは倒せネエからな…」

『ははははは！面白え！面白えよ海堂！さあ、存分に殺りあおうぜ！』

「グルアアアアアアアアア！」

ニーズファアオウ ドラゴンスキヤニング（以下NDS）となった紀斗の拳とGのゴリラのような拳がぶつかり合う

NDSは紫の炎を吐くとGは口から電撃をさらに8本の触手がNDSの身体に巻きつく

炎と電撃は拮抗するが触手がNDSの身体を締めつけそれによってNDSの炎は電撃に徐々に押され始める

「グウウウウ！ガアウ！」

『なっ?! 面白いやなんでも食う悪食竜だったなその頭は！』

NDSは炎を吐くのをやめ逆に飛んできた電撃を飲み込み吸収していく

さらに身体からその電撃を発し巻きついてきた触手を通じてGにダメージを与える

「ガアアアアア！」

『ぐあっ!?くそつたれがあ!』

NDSの脚が輝くと同時に壁から金の槍が飛び出しGの両翼を刺し貫く

「ガア!ガア!グルアアアアアアア!」

『おら!おら!おらああああああ!!』

NDSの拳とGの拳と鋏が連続でぶつかり合い何発かは両者の身体に入る

その拳によりGの胴体の鱗は何枚か剥がれ落ちるがNDSの鋼のような鱗は傷一つつかずむしろGの拳や鋏がダメージを受けている

『チィ!胴体は硬すぎるな!なら他の場所を狙うだけだ!』

Gは両腕でNDSの両腕を掴み背中の触手がNDSの首や下半身に噛みつこうと迫る

下半身は金の鱗に覆われた部分は硬く噛みつけないが動きを抑制するために絡みつき首には4本のウナギの頭が噛みつきNDSは苦しそうな声を出す

「ギヤアアアアア!」

『はっはっは!苦しそうだなあ海堂!もっと強く噛みついてやるよ!』

Gは苦しそうな声を出すNDSを見てさらにウナギの頭の噛みつく力を強める

「グ、ウウウウ、ガア!」

『ぐう!?やりやがったなてめえ!』

NDSは嘸みついていて触手の中間にまで一瞬で首を伸ばし4本の触手全てを食いちぎり一飲みにした

GはNDSの掴んでいた両腕を離すと拳でNDSの顔面を殴る

NDSも負けじとGの顔面にアッパーをくらわせ仰け反らせてボディーブローを叩き込む

『がっ!?!らあ!おらあ!』

『ギャウ!?!ギャツ!?!グオオオ!』

2体の戦いは最早ただの殴り合いとかしていた、しかしそのパンチ一発がビル1つが軽く崩壊するほどの威力を有している、片方が殴る度に周りに衝撃波が飛び部屋を荒らす

そんな激しい殴り合いの中2体の異形は笑っていた、片方は虫のような頭の口を三日月のように歪めもう片方は口角を少し上げその目には獰猛な野獣のような光を宿しながらも楽しんでいるような喜びの光も浮かべている

『はっはっはっはっは!面白え!面白えな海堂お!』

『グルアアアアアアアア!!』

そんな2体の身体は当然のことながらどんどんボロボロになっていく、Gの身体は傷口からセルメダルがボロボロとこぼれ落ちNDSの身体からも血のように紅いエネルギー

ギーが煙のように傷口から嘔き出している

だが2体はそんな傷も痛みもどこ吹く風と狂ったように相手を殴り続け笑みを浮かべる

しかしそんな激しい殴り合いがいつまでも続くわけは無く終わりは近づいてくる

『ハア、ハア、ハア、ハア』

「フウ、フウ、フウ、フウ」

両者共に息を荒げ立っているのもフラフラの状態になっている、しかしその目に闘志は消えず今だギラギラと輝いている

『ハア、ハア、おい海堂、楽しかったがそろそろ終いにしようぜ。次の一発に互いの全力をかけてよお』

「グルル」

Gの言葉にNDSも了承するように頷く

『おおおおおおおおお!!』

『スキヤニングチャージ!』

「グルアアアアアアアアアアア!!」

Gは全てのメダルの属性を己の剛腕に纏わせNDSは自身の腹の部分に埋め込まれているメダルをオースキヤナーが自動でスキャンし右拳に炎を灯す

『かいどおおおおお!!』

「グオオオオオオオ!!」

ゴツ!

両者の拳は真つ直ぐにお互いの顔面に叩き込まれクロスカウンターのような状態になり数秒両者はそのまま固まったように動かなくなる

ドオン

先に動いたNDSは片膝をつき元の人間と同じ大きさのニーズファオウコンボの姿へと戻ってしまう

そしてGは…

『どうやら、俺の負けみたいだな…』

「ああ、俺の勝ちだ…」

Gの身体はまるで砂がこぼれ落ちるようにメダルとなり崩れていく

そしてその真下には大の字で仰向けに倒れた人間の姿のGがいた

紀斗はその近くに近づいていき変身を解く

「まさか、お前とこんな熱いバトルやれるとは思ってなかったぜ、海堂」

「俺もだよ、お前がこんな熱血野郎だなんて知らなかったな」

「ははは、ま、とにかく楽しかったぜ。あり…がと…な…あば…よ…」パキン

「…ああ、あばよ、G」

Gの身体はセルメダルとなりコアメダルも全て砕け散った

紀斗はそれを見届けると部屋の出口のあつた方を向き歩きだそうとする

しかし…

「あれ？」

ばかり

連戦とさらに理性をほとんど失いながらの戦闘、それにより元からかなりきていた紀斗の体へのダメージはレッドゾーンを振り切り紀斗は雪の上に倒れていた

「おい！動け！動いてくれよ！俺の身体！まだ！まだ倒さなきやいけない奴がいるんだよ！こんなところで倒れてるわけにやいかないんだよ！」

紀斗は必死に自分の身体を叱咤し立ち上がるうとするが身体は応えてくれずまったく動かない

「くそ！くそ！くそ！ちく…！しょう…」

そのうち紀斗は力尽きついに叫ぶことさえ出来なくなり意識を失った

第四十幕 助っ人

時は甲達が紀斗を残し部屋を出た時まで遡る

甲達は部屋を出た後そのまま目の前の通路を走り上の階を目指していた

「紀斗さん、大丈夫でしょうか…」

「あいつの強さを信じるしかないだろ、それより俺たちが今やるべきことはあいつが俺たちに追いついた時なるべくあいつにこれ以上負担をかけないように敵を減らすことだ」

不安そうに後方を見るI早苗を甲は己にも言い聞かせるがごとく自分達のやるべきことを言う

「そうよ、ここに到達してからまだ私達は戦闘すらしていない。あいつにばかり無茶させるわけにはいかなからね」

「…そうですよね、うん、私も紀斗さんの為にも頑張ります!」

「そういう紫、次の階はどんな風になってるんだ?」

B 霊夢は甲の言葉に同意するように言いI早苗も自分にやる気を入れB魔理沙は紫に次の階の情報を聞く

「次の階、何気にかなりヤバイわね。今までの階みたいにも一人だけが途轍もない強さを持つてるわけじゃないけどかなりの強さを持つてるのが大勢いるわ」

「それって例えばどんなのがいますか？」

紫の情報にI早苗は詳しく知ろうと質問する

「以前紀斗に読ませてもらった資料集に載ってたラスボスや幹部がうじゃうじゃいたわね、ン・ダクバ・ゼバとかバットファンガイアとか」

「なんですかそれ…かなりヤバイじゃないですか」

「ヤバイで済めばいいがな、そのラスボスレベルがうじゃうじゃいるならこっちも最初から本気でいくしかないだろ」

紫の情報に能力やステータスを知っているI早苗は呆然とし甲は気を引き締めるように言う

そしてそんなことを話しているうちに階段も登りきり、その先には黒い扉がかなりのプレッシャーを放ちながら自分を開く者を待っていた

「じゃ、開けるわよ」

B霊夢はそう言う勢いよく扉を開ける

そしてB霊夢達の目に飛び込んできた光景ははつきり言って現実では起きてほしくなかった光景だった

幻想郷のメンバー達の目の前には怪人の大群、しかもそのほとんどがボスや幹部級という悪夢のような光景だ

グロンギのゴ集団にン・ダクバ・ゼバとン・ガミオ・ゼダ、アンノウンのバツファロードに水、地、風のエルロード、オルフェノクのホースオルフェノク、スパイダーオルフェノク、ロブスターオルフェノク、センチピードオルフェノク、ドラゴンオルフェノク、クロコダイルオルフェノク、ローズオルフェノク、アークオルフェノク、全てのアンデッドとトライアルシリーズ、ケルベロスⅡ、ジョーカー、アルビノジョーカー、魔化魍のオロチ、牛鬼、ノツゴ、ロクロクビ、乱れ童子、スーパー姫、スーパー童子、ワームのフィロキセラワーム、スコルピオワーム、ウカワーム、グリラスワーム、カツシスワームのグラディウス1体とクリペウス2体、イマジンのアルビノレオイマジン、デスイマジン、ネガタロス、アリゲーターイマジン、ゴーストイマジン、マンティスイマジン、ファンガイアのライオンファンガイア、スワローテイルファンガイア、パールシエルファンガイア、バットファンガイア、ビートルファンガイア、レジェンドルガのマミールレジェンドルガ、メドゥーサレジェンドルガ、マンドレイクレジェンドルガ、ガーゴイルレジェンドルガ、大シヨツカーのスーパリアポロガイスト、ドラス、シュバリアン、十面鬼ユム・キミル、イカデビル、ガラガラランダ、ジャーク將軍、ジェネラルシャドウ、シャドームーン、アルティメットD、カニレーザー

にテラー、タブー、スミロドン、クレイドール、エクストリーム、ナスカR、ジーン、ユートピア、ケツアルコアトルス、ウエザー、コマンダー、アイズ、ズー、ゼロ、エターナルのメモリのドーパント、完全体グリードのウヴァ、カザリ、メズール、ガメル、ロストアंक、ギル、シヨツカーグリード、ゾディアーツのホロスコープスとヘラクレスゾディアーツ

総数160体もの怪人達が幻想郷のメンバーをまるで獲物を見つけた肉食獣のようにギラギラした目で見てくる

更に天井から巨大なモニターが現れそこに暗道の姿が映される

『やあ、幻想郷の諸君、紀斗君はいないようだがGのところにおいてきたようだね』
「既に知ってることをわざわざ言うてくるなんて趣味が悪いわね」

暗道はわざとらしい口調で紀斗のことを言うと悪人らしい笑みを浮かべ紫は口元を扇子で隠し画面の暗道を睨みつける

『どうかね、この怪人の軍団は？ほとんどが紀斗君から搾り出した者達で最初は手を焼かせられたが今ではすっかり従順な私の部下だよ』

確かに普通のラスボスレベルの怪人達なら既にB霊夢達を襲っていてもおかしくない、それが今日の前の怪人達は目をギラギラと輝かせながらもまるで待てをかけられた犬のようにジツとしている

『さらに、こんな実験もしてみたんですよ』パチン

暗道が指を鳴らすと怪人達はメモリを取り出し自分達の身体に挿す

『GURONGI』『UNKNOWN』『ORPHENOCH』『UNDEAD』『MAKAMOU』『WORM』『IMAGINE』『FANGAIA』『DAI SHOCKER』『GREED』『ZODIARTS』

それぞれの種族のメモリを自分達の身体に挿すとその身体は元より攻撃的になり目が怪しく赤く光る

『その種族などの記憶を内包したメモリを挿すことで大幅に個体値が上がるんだよ。例えばワームならクロックアップが通常の倍以上のスピードに、魔化魍なら清めの音への耐久力が上がったりとね。さらに』

今度はドーパント達が強化アダプターを取り出し自分達のメモリを少し排出するとセツトした

『TELLER/TABOO/SMILODON/NASCA/CLAYDOLLE
XTREME/GENE/UTOPIA/WEATHER/QUETZALCOATL
US/COMMANDER/ETERNAL/EYE'S/ZOO/ZEROU
P GRATE』

『ウオオオオオオオ』

すると全てのドーパント達は強化体となり雄叫びをあげる

『強化アダプターの量産にも成功してね、君達がどこまで耐えられるか楽しみだ。さあ、私のセットしたショーを楽しんでくれたまえ』

暗道が言い終わると同時に怪人達は臨戦態勢をとり今か今かと幻想郷のメンバー達の準備が終わるのを待っている

「まったく、厄介なことしてくれたわね。いくわよ皆!」

『ええ! (おう!) (はい!)』

『SURVIVE』×16 『ラ・イ・ジ・ン・グ』 『HYPER CASTOFF CH
ANGE HYPER BEETLE/WASP/STAG BEETLE/DRA
GON FLY/SCORPION/HOPPER』

『インフィニティー プリーズ』 『ヒースイフドー ボーザバビユードゴーン!』 『ハイ
パー! GO! ハイッハイッハイッ! ハイパーッ!』 『ステイール ナウ』 『ガアンギンゴ
ン ドッドツゴーン!』 『響鬼 装甲!』

『G4 RYUGA ORGA GLAVE KABUKI CAUCASUS AR
C SKULL FINAL KAMEN RIDE DIEND』

『『Kシステム起動 MK-2へのシフトチェンジ問題なし、MK-2へのシフトチェ
ンジ完了』』

『ADVANCE SURVIVE』×4 「響神 降誕！」

幻想郷のメンバーも全員最強フォームへと姿を変え構える

『さあお前達、殺れ』

『ウオオオオオオオオ!!』

怪人達が濁流のごとく襲いかかり幻想郷のメンバー達も自分の得物を構え迎え討つ

「戦況的には全員が強化形態になつてもかなり不味いわね…。あの人達を呼んでおく必要がありそうね」

そんな中紫は1人スキマに入り助けを呼ぶ準備をし始める

時と場所は変わりGの研究室

半分以上が雪に埋もれたこの部屋で紀斗は力の使い過ぎで気絶していた

そこへ銀色のオーロラが出現し蒼いマフラーをした青髪の青年、始音 カイトと水色の髪の少女、別世界の仮面幻想郷のにとりの2人組が現れる

「つーかなり酷いな、寒さで凍傷にもなりかけてる。回復頼めるか?」

「任せなよ、新しく作ったアヴァロンメモリに癒せぬ傷など無い!」

カイトが紀斗の状態を診るとにとりに回復を頼みにとりはスカートからマキシマムスロットがついたベルトと豪華な西洋剣の鞘のようなAと描かれたメモリを取り出しベルトを巻きマキシマムスロットにメモリを挿す

『Avalon Maximam Drive』

その音声と共ににとりの両手から光が溢れ出て光が紀斗を包み込むと紀斗の身体の傷は瞬く間にふさがり正常な状態になる

「んっ……んっは」

「気がついたか、紀斗」

「カイト？それにそのベルトから察するにカイト達のところのにとりも、なんでここに？」

「さっきお前のところの紫さんからSOSが来てな。」

「それであたし達はあるたの様子を確認するのもかねてこっちへ来たってわけさ」

紀斗はすぐに目を覚ましカイトとにとりがいることに驚くがカイト達の説明で納得するが途中のSOSという言葉に反応する

「SOSってことはあいつら今やばいってことか!?急いで加勢に行かねえと！」

「落ち着け、あっちにも俺たち以外の助っ人がちゃんと行ってる」

「そう、頼りがいのある奴らがね」

場所は再び4階ホール

紫は今の戦況を見て先程複数の別世界の自分や他世界の英雄に送ったSOSで早く誰か来てくれないかと切に願っていた

（まだ倒せたのはゴ・ジイノ・ダ、バツファローロード、ノツゴ、ゴーストイマジン、ネガタロスの5体だけ。しかもこちらでまともには戦えてるのはアドバンスサバイブの4人と響神装甲響鬼の勇儀だけ、戦況は最悪過ぎるわね）

まだ倒せた怪人の数は片手で数えるほど、しかしこちらの戦力のほとんどはかなりのダメージを負っている

しかも強化ジーンダーパントがアンデッド達を同カテゴリーを4体纏めて合体させアンデッドの数は4分の1まで減ったがその分質がかなりの強さへと上がっている

強化ジーンダーパントを倒そうとしても他の怪人達が立ちはだかり中々倒せないまま相手の戦力は強化されこのままでは全滅する可能性も少なくなない

（今の私じゃ瀕死者を救出したり少しの足止めしか出来ない…）

紫は今の自分の無力さを呪う、必死に戦っている自分の式や霊夢達の力になれない今の自分を

（何が妖怪の賢者よ、少しの手助けしか出来ないんじや聞いて呆れるわ…。）

そんな紫の雰囲気をB霊夢は得意の勘で察したのか紫が中から見ているスキマの近くにリュウキアームで怪人達を牽制しながら素早く行き紫にだけ聞こえるように話しかける

「なににしみつたれた雰囲気出してんのよ、紫」

「霊夢：何やってるの、敵はまだまだいるわよ」

「そんなの分かってるわよ。それより、いっつもなに考えてるかわかんないけど余裕そうにしてるあんたがこの世の終わりみたいな雰囲気出しているとこっちの士気まで下がんのよ。だからあんたはいつも通り、余裕たつぷりの表情で信用できない笑みでも浮かべてなさい」

「ツ…、まさか霊夢に喝を入れられるなんてね…。ふふ、そうね、藍や貴方達が戦ってるのに私が一人諦めてる場合じゃないわね！」

紫はいつもより力強く微笑むとそれを見たB霊夢は仮面の下で安心したように微笑みユウキアームから火炎弾を放つ

「戦闘中に談笑とは余裕ですねえ」

そこへ強化ウエザードーパントが雨による水流で火炎弾を相殺させながら近づいてくる

「くっ！」

『カポーン ブレイドアーム カポーン ファイズレッグ』

B霊夢はブレイドとファイズのメダルをバースドライバーに装填し左手にブレイドのブレイラウザーを模した剣を右脚にはファイズのファイズポインターを模した脚甲を装備する

「このー！」

「届きませんよ、そんな物では」

B 霊夢はブレイドアームで斬りかかるが強化ウエザードーパントは自分の周りに風の厚い層を作りウエザードーパントまで刃が届かない

「ならこれならどう!」

「おっと、危ないですねえ」

「ぐう!?!」

B 霊夢は今度はファイズレッグで蹴りを繰り出すと円錐状のフォトンブラッドを打ち出す。強化ウエザードーパントは手から雷を纏った竜巻を生み出しフォトンブラッドを打ち消しB 霊夢を吹き飛ばす

「これで終わりにしてあげましょう」

「うっ…」

「霊夢!」

強化ウエザードーパントは右手を上げると手のひらに雷、風、雹を融合させた巨大な玉を作りあげB 霊夢に向かって投げる。B 霊夢は今までのダメージと今さっきのダメージで回避行動が取れず紫もB 霊夢をスキマの中に入れようとするが間に合わない

(メダルの装填も間に合わない! やられる!)

B 霊夢はもう駄目かと目をつむる、しかしそれと同時にここにはいない筈の声が聞こえた

「諦めるのはまだ早いデスよ」

『Zero Maxima Drive』

「ライダーキック!」

その声と共にこの幻想郷の住人ではないライダーのキックが強化ウエザードーパンの攻撃を消し飛ばした

「なっ!?何者です!」

現れたのは顔は少しウルトラマンに似ている銀と黒の仮面ライダー、神無月 狂治が変身した仮面ライダーZEROだった

「紀斗さんの仲間に手出しはさせません!仮面ライダーZERO!吹っ飛ばさせて貰うデス!」

「異世界の仮面ライダー!いいでしょう、あなたから消し飛ばしてあげますよ!」

「大丈夫か?」

「あんたは?」

「ただのお人好しの研究者さ」

B 霊夢のそばに以前紀斗と戦ったアキレス オーデインが現れB 霊夢の怪我の具合を確認する

「長谷部創護ね、助っ人、感謝するわ」

「気にすんなって、ダチの仲間のピンチに駆けつけるのは当然だ。それに、ここの財団Xは一度ぶつ飛ばしときたかったからな」

「言ってくれるな、代わりに俺達がお前を血祭りにあげてやろう」

「！」

長谷部達の前に更に強化ホロスコープス達と強化ヘラクレスが現れる

それに対してB 霊夢が立ち上がり戦闘態勢をとろうとするが長谷部はそれを手で制し前に出る

「まあ、ここは俺に任せな。スイッチ部隊リーダーの力、見せてやるよ」

別の場所ではR I 早苗と強化エターナルドーパント、強化ゼロドーパント、強化ズードーパントが戦っていた

「ああもう当たってください！」

「やなことった！誰が当たるかよ！」

「幾ら撃つても無駄だぜ！」

「まずそんな動きで私達に当たるかな？」

R I 早苗はイクサライザーを撃ちまくるが強化エターナルドーパントと強化ズードーパントは身体能力で避け強化ゼロドーパントは両手のチェーンで弾丸を弾き飛ばす

「そらよー！」

「くっ!?力が!？」

強化ゼロドーパントは両手のチェーンでR I 早苗の身体を縛り更に自身の能力でR I 早苗のエネルギーがゼロにされ膝が地についてしまう

「終わりだー！」

「死になさいー！」

そこへ強化エターナルドーパントと右手を蛇に変えた強化ズードーパントが襲いかかる

(助けてください、紀斗さん！)

R I 早苗は目をつむり祈る、そしてその瞬間奇跡が起きたのか強化エターナルドーパント達の隣に銀色のオーロラが現れそこから何者かが飛び蹴りの体制のまま飛び出し強化エターナルドーパント達を蹴り飛ばした

「たあああああー！」

「ぐほっ!？」

「ぬあっ!？」

「へ？」

「大丈夫ですか？こっちの私」

『久しぶりだな、この世界の早苗』

そこにいたのはエターナルメモリを持った早苗だった

「そのメモリ、幻憶変の世界の私ですか？」

「その通り、霊夢さん達は来ませんが私達が助っ人に来ました！」

『おい早苗、俺と変われ。こんな奴がエターナルメモリを使っているのは俺のプライドが許さん』

「わかりました、大道さんお願いします」

するとエターナルメモリの中の大道克己の意識と早苗の意識が交代し早苗の髪に一部青のメッシュが入る

そして腰に赤い所が緑色になったロストドライバー、ミラクルロストドライバーを装着する

『E t e r n a l』

「変身」

『Eternal』

D早苗はエターナルメモリを鳴らしミラクルロストドライバーに挿す

するとD早苗は黒いローブを纏った白の巫女装束にEを横倒しにしたような銀のティアラを付け両腕には奇跡を表す緑色のグリーンフレアを宿したライダー少女 エターナルに変身した

「さあ踊るぞ、死神のパーティータイムだ」

さらに同時刻幻想郷のメンバー達が入ってきた扉とは逆方向の扉の近くから銀のオーロラが現れそこから一人の男が現れる

「む、乱戦状態だな。敵は…ほとんどが原点のラスボスや幹部の強化体か」

「貴様何者だ！どこから忍びこんだのだ！」

「忍びこんだとは人聞きが悪いな、俺はオーロラでここに来たが忍んで入った覚えは無
ごぞ」

「あ、それはすまないのだ。つてそうじゃなくて貴様は何者なのだ！」

強化スーパリアポロガイストはその男、天海地 帝を問いただと帝は金、銀、青を
基調としたベルト、ディカイザードライバーを取り出し腰に装着する

「俺は言うなれば通りすがりの帝王と言ったところだな。まあ、お前達の敵だ。変身」

『Kamen Ride Dekaiser』

帝は透き通った純白のマントを纏い金と銀の装甲のD系ライダーの帝王、仮面ライダーディカイザーに変身する

「あの忌々しいディケイドと同じタイプのライダーか、帝王が相手ならこちらも王を呼ぶとするのだ。来い！シャドームーン！アークオルフェノク！バットファンガイア！グリード達！」

強化スーパリアポロガイストが叫ぶとそれぞれ王の肩書きを持つ怪人達がディカイザーの前に現れる

「いいだろう、本当の帝王の戦いを見せてやる」

また別の場所ではSS慧音とFS妹紅が強化カニレーザーと強化イカデビル、強化ガラランダに苦戦を強いられていた

「カニの仮面ライダーの実力は所詮その程度か！焼け焦げるがいい！」

「くそっ！」

『GUARD VENT』

カニレーザーのレーザー攻撃にSS慧音はフォートレスキャンサーの甲羅を模したギガアーマーのような盾を左腕に装備しレーザーを防ぐ

（くっ！防御力は問題無いが攻め手にかける、このままではジリ貧だ、妹紅の方もかなりキツイだろうしどうすれば…）

「慧音、こつちも結構ヤバいけど何かいい案あるか？」

「すまないな妹紅、今のところ何も浮かんでないしこつちもかなりジリ貧だ」

背中合わせになるSS慧音とFS妹紅は互いに息を荒げたまま自分の敵を睨む

「ガラガラガラ！その程度で我らを倒すとは片腹痛いわ！」

「捕まえた後はたつぷり実験してやるわ、蓬萊人など中々お目にかかれる物では無いからな」

そう言つて強化イカデビル達にはじり寄つて来る、そんな時いきなり強化イカデビルと強化ガラガラランダの背中を背後から誰かが斬りつけ2体は膝をつく

「ぐあ!？」

「ぬう!？」

「女の子相手に実験とかなんとかちよつと物騒すぎるんじゃないか？そんなんじゃないか？モテないぜ？」

そこには歪曲した刃のような武器を片手に持ったウルトラマンゼロにブレイドの顔と胸のシンボルを取り除いたverのアーマーを装着したような仮面ライダーがいた

「むう、貴様何者だ！」

「俺はソロ！またの名を、仮面ライダーゼロだ！」

少し離れた場所ではン・ダグバ・ゼバ率いるグロンギの集団と甲、GK雛、GSにと

りが戦っていた

甲達はなんとか銃撃や武器で応戦しているガン・ダグバ・ゼバの金縛りや超自然発火により苦戦を強いられている

「どうしたの？その程度じゃつまらないよ？」

「くそ、チート野郎め……」

「ガビサレロ（諦めろ）」

「ゴラエラデザダグバビザバワン（お前らではダグバには敵わん）」

3人は追い詰められていきなり3人とダグバ達の間で銀のオーロラが2つ出現しそこから2人の人影が現れ先頭近くにいたゴ・ブウロ・グとゴ・ベミウ・ギを蹴り飛ばす

「俺達もそのゲゲルに入れてもらおうか？」

「またダグバがいるのか、俺ってなんかダグバに呪われてるのか？」

片方は別世界の孤高の英雄、門矢 遊星、もう1人は謎の男にライダーの能力をもらった橘 翔太郎

遊星は腰にクウガのアークルを出現させ橘は周りが金色に縁どられているジョーカーメモリとロストドライバーを出す

「変身！」

『Rising Joker』

遊星はクウガ アルティメットフォームへ橘はジョーカーの紫の部分が金色になった仮面ライダーライジングジョーカーへ変身した

「究極の闇…この状態の僕をどこまで笑顔にしてくれるのかな？」

「とりあえず、笑顔でいらなくなるほどまで叩きのめす」

「お、そりゃいい案だな。まあ俺の相手はこっちのガミオ共だがな」

「言ってくれる…ジョーカーの亜種ごときが」

また別のところでは

「へっへっ、僕様ちゃんも助っ人に来たよー!」

天音 ユウが大声でそんなセリフをいいながら銀のオーロラを通ると目の前にはカテゴリー3の4体を融合させたアンデッドの顔があった

「へ？」

「グガアアアアア!!」

「のわああああ!!」

カテゴリー3アンデッドは天音の顔にチョップを繰り返そうとするが天音はなんとか横に転がって避け距離を取ろうと走りですがカテゴリー3アンデッドも走って追いかけてきて距離が開くどころか縮まってきている

「なんでミーだけ敵の目の前ええええええ!?」

「グオオオオオ!!」

「こつち来んなツギハギやろー!」

そんな様子を甲は

(あいつ何やってんだ?)

と呆れのこもった目で見たり

第四十一幕 助っ人活躍 〳その1〳

「これは……」

にとりのゾーンメモリを使い4階の部屋にカイト達とやってきた紀斗は繰り広げられている戦闘に声をもらす

部屋は100を越える数の怪人達と仲間達やカイトが先程言っていた助っ人に来てくれているメンバー達が戦っていた

「紀斗！無事だったのね」

紫が紀斗達に気づきそのそばにスキマで現れる

その言葉に気づいた幻想郷の面々はそれぞれ目の前の敵から目を離してはいないが不安だった紀斗の安否が紀斗が無事に合流したことで内心安堵していた

「ああ、カイト達に助けられてな。それよりこいつら、俺が捕まった時に俺から出された奴らだな」

「ええ、そのようよ。今助っ人の人として呼んだ人達のおかげで戦況も盛り返してきたところね、」

「とりあえず俺達も加勢に行くとするか」

「ああ、そうだな。かつ!？」

突然天井から丸い穴が現れそこから鎖が出てくるとカイト達が視認するよりも速く紀斗に巻きつき紀斗を上へと連れ去る

「! 紀斗!」

「この!」

カイトは跳び上がってエクスイカリバーで鎖を斬ろうとするが鎖がエクスイカリバーを避け紫がスキマで紀斗を掴もうとしてもそれより速く鎖は紀斗を引き上げていく
 (くそっ!硬くて千切れやしねえ!こうなったらせめてこれだけでも!)

紀斗は引き上げられながら手の中に二枚のカードと金色の小さなクワガタを出し放る

「紫さん!そのカードとクワガタを大妖精とリグルに!」

「紀斗!」

そのまま紀斗は天井の穴に吸い込まれ穴は閉じてしまった

「紫さん!スキマで上の階へは!？」

「駄目、クレイジーメモリで能力でも上へは行けなくなってるわ!」

カイトは紫にスキマが使えるどうか聞くが5階へのスキマは使えない

「グルル」

「ガア！」

さらにカイト達の前に融合アンデッドが何体も現れる

『I0、J、Q、K、Aとジョーカー、アルビノジョーカー、ケルベロスII、エルロード達、アルティメットDは始音　カイトを狙え、7、8、9はそれぞれ始音　カイトの攪乱をしろ』

「あのカテゴリ2のアンデッドが司令塔みたいだね」

ヒューマンアンデッドの頭脳を持つカテゴリ2アンデッドが他の怪人達に指示を出し規格外であるカイトに何体もの怪人を差し向けていた

「くそー邪魔だ！」

「グルアー！」

カイトはエクスイカリバーを振るうがカテゴリ7アンデッドは身体をトリロバイトの硬化化で吹き飛ばされるだけに終わりさらにカテゴリ9アンデッドがスキッドアンデッドの煙幕を張りカイト達の視界を奪う

さらにそこへエルロードやアンデッド達の念動力や光線などの中距離攻撃が放たれる

「変身！」

『Kamen Ride Decade』

『Kamen Ride Diend』

バース

「仮面符【欲望誕生・デュロア】変身！」

『カッターウイング』

カイトはデイケイドのマゼンタカラーをコバルトブルーに、白い部分が白銀に、複眼が赤く変化し、胴体の上半分装甲が色以外デイエンドと同じものに、カイトのコートのような装甲を付け、カイトのおなじみの蒼いマフラーをしている。デイカイトへと変身しにとりは胸に両足両手両膝両肘背中に、水色のカプセルが内蔵された装甲を付け、その下に青いライダーズーツを纏い、さらに顔にバースの仮面型の、青い光を放つU字型のバイザーを付けた姿のライダー少女、バース・デュロアに変身しカッターウイングで上空へと逃げる

「数には数だ！」

『Kamen Ride Brade King』

『Kamen Ride Challenge Wild』

デイカイトはブレイド キングフォームとワイルドカリスを召喚しデイエンドライバーとエクスイカリバーを構えながら敵陣に突っ込んでいく

カテゴリー7アンデッドは蔓を伸ばしカテゴリー8アンデッドは角から磁力を発しカテゴリー9は2体に分身し挟み撃ちにしようとする

カイトはそれをディエンドライバーでカテゴリー8アンデッドを撃ち怯ませ蔓をエクスイカリバーで切り裂きその部分から凍らせブレイドとカリスがカテゴリー9アンデッド2体を相手取る

カテゴリー7アンデッドは凍った蔓を千切ると殴りかかりカテゴリー8アンデッドも突進してくる

さらにそこへ再び他の怪人達の攻撃がカイトに迫っていく

『ミサイルアーム』

『ガトリングレッグ』

『ルナトリガーアーム』

その攻撃を上空からにとりの爆撃と同じようにカッターウイングで上空へと移動したB霊夢の右手の黄色と青の銃型アームからの弾幕射撃が撃ち落とし妨害する

「はあ!!」

「グガッ!」

「カッ…!」

ディカイトはエクスイカリバーでカテゴリー8アンデッドを斬りさき液状化して避

けようとしたカテゴリー7アンデッドは液化化した瞬間エクスイカリバーの刃に触れ一瞬で凍り粉碎された

カテゴリー9アンデッドもブレイドとカリスに倒されカテゴリー2アンデッドは忌々しげにデイカイトを睨みながら次の指示を出す

『10とアルティメットDは時間停止を使いながら接近戦、JとKはバリアを破られない距離で迎え撃ち他は後衛で3体の援護だ!』

怪人達はカテゴリー2アンデッドに指示された陣形になるとデイカイトやにとり達に攻撃する

「こつちにも時止めを使える奴はいるんだよ!」

『Touhou Ride Sakuya』

『Hero Ride Joutarou』

デイカイトがディエンドライバーに2枚のカードを装填し放つとナイフを構える咲夜とスタープラチナを出現させた空条 承太郎が現れる

「いくぜ、オイ!」

「誰から刺されたいのかしら?」

「シヤア!」

「君達とはどのくらいまで遊べるかな?」

アルティメットDの拳とエクスイカリバーがぶつかり合った瞬間カテゴリー10ア
ンデッド、咲夜、承太郎は停止した時間の中にいた

カテゴリー10アンデッドはカメレオンアンデッドの能力で姿を消し承太郎に殴り
かかる

それに対し承太郎は目をつむり咲夜はそんな承太郎を見ながらナイフやスペルカー
ドの準備をしている

次の瞬間カテゴリー10アンデッドの拳が承太郎の顔面に届こうするスタープラチ
ナの拳がカテゴリー10アンデッドの顔面に入り吹き飛ばす

「オラァー！」

「シヤゲバ!？」

カテゴリー10アンデッドは地面をバウンドし倒れそこへ咲夜がスペルカードを発
動させる

「幻符【殺人ドール】」

「シヤ、シヤァー！」

咲夜の周りから放たれるナイフをカテゴリー10アンデッドは弾幕が効かない身体
で煩わしそうにナイフを払っていく

そんな隙だらけになったカテゴリー10アンデッドの真後ろからスタープラチナが

「この距離ならバリアは張れないだろう？」

「オラア！」

「ヴェイ！」

「うわああああ!?!」

その真後ろから時を止めて接近していたブレイドと承太郎が背後から2体に攻撃し2体は前に倒れる

『Final Attack Ride De De Dekaito』

「まずは7体、デイメンションシユート！」

『ぐわああああああ!?!』

倒れていたカテグリーJとK、そして盾となる2体がいなくなったアルティメットDはデイカイトのデイメンションシユートに呑み込まれ跡形もなく消し飛んだ

「とつととそこを通させてもらうぞ！怪人共！」

場所は変わり狂治 VS 強化ウエザードーパント

「先程の攻撃を消したことは評価しますが気に入りませんねえ、その自信満々な態度、ぶち壊してあげますよ」

「それはこっちの台詞デス！たあ！」

ZEROはウエザーに蹴りを放つがウエザーは風を纏って後ろに跳びその攻撃を避

ける

「！ふっ！」

そこへ何発もの光弾と重力弾が放たれZEROは咄嗟に後ろに下がる

「あら、避けられちゃったわ」

「残念ね」

「おや、あなた方もご参加ですか」

ウエザーの後ろには強化されたテラー、タブー、ナスカR、スミロドン、クレイドー

ルエクストリームがいた

「ミュージアムの幹部メモリデスか…」

「遊んであげるわ、坊や」

そう言うのとタブードーパントは先程と同じ光弾を何発もZEROに向けて放つ

「舐めてると痛い目見ますよ？」

『Element』

狂治は光弾を避けるとEと描かれたメモリを取り出しZERODライバーの左側に挿す

するとZEROは右肩が赤、左肩が青、右腕が緑、左腕が水色、左足が茶色、右足が黄色、腰が黒色で各自に白いラインがあり、胸は八色（赤・青・黄・緑・茶色・黒・白・

水色)のカラーがある仮面ライダーZERO・ゼロエレメントへとフォームチェンジする

「お返しデス！」

ZERO ZE(ゼロエレメント)は右手に持つ8色の輝く水晶玉が付いた杖、エレメントスタッフを振るいそれぞれ属性の違う光弾を放つ

タブードーパントは数発光弾で撃ち落とすが撃ち落とすと同時にZERO ZEの光弾が風や火などのその属性の衝撃を放ちタブードーパントもダメージをくらう

「くっ！面倒ね！」

「自然相手なら私も混ざりましょうかねえ」

そこへ再びウエザードーパントが参戦し風や吹雪で衝撃波を相殺する

「面白そうなメモリですねえ、実に興味深い」

「いくら欲しがってもあげませんよ！」

『Element FullMaxiamDrive』

ZERO ZEは上空に8つのさっきの光弾よりも大きいエネルギー弾を出現させ隕石のようにウエザーとタブードーパントに落とす

「エレメントメテオレイン！」

「フルマキシマム…！面白いですね迎え撃ちましょう！」

「こつちも負けてられないのよー」

ウエザーは先程霊夢に放ったよりも密度を増したウエザーボールを、タブードーパントは大量の亡者のような顔が浮かびあがり怨嗟の声を放っている特大の光弾複数出しをそれぞれエレメントメテオレインに向かって放つ

しかしウエザーとタブードーパントの攻撃はあっさりと破られ2体は8つのエネルギー弾に蹂躪される

「キヤアアアアアア!?」

「まさか……ここまでとは……やはり、面白いですねえ、メモ……りは……」

2体はそのまま爆発しZEROは残りのドーパント達の方へ向く

「さあどんだんかかってこいデスー」

アキレスオーディン VS ホロスコープス&ヘラクレスゾディアーツ

「グルアア!!」

「ふん!」

「とりやあ!」

「効かねえなあ!」

レオとヘラクレス、タウラスが爪と棍棒、タイラントと杖、グアンナをアキレスオーディンに振り下ろすがアキレスオーディンはそれらをオーディンブレードで受け止め

弾き返す

その少し後方からアクエリアスのネクタル、ヴァルゴの光弾、サジタリウスの炎矢、キャンサーの泡、ピスケスの水流弾、カプリコーンの音弾、リブラとスコープピオンの光線、アリエスの光弾、ジェミニの爆発する赤いカード、リウンケウスがアキレスオーディンに向かって放たれる

「遅いな！」

それらの攻撃をアキレスオーディンは上に飛んで避けそこからサジタリウス達に向かって突進しすれ違いざまに全員オーディンブレードで斬りつける

「くっ、やはり強い……」

「中距離からの攻撃もここまで易々と避けられてしまつては打つ手が無いな」

「ならば使うしかないか」

サジタリウスのその言葉にホロスコープスは全員頷き叫ぶ

『超お新星!!』

ホロスコープス達は全員超新星を使いその姿を変えていく

スコープピオンはデイスパイダーロボンの蠍番のようなスコープピオンノヴァに、キャンサーは巨大な蟹の姿のキャンサーノヴァに、レオは巨大な白い獅子のレオノヴァに、タウラスは巨大な牛の姿のタウラスノヴァに、リブラはその目を赤く輝かせラプラスの

瞳を発動させる、アリエスはマントを収納し角の形状が変わったアリエスノヴァに、サジタリウスはスマートになった赤い身体のスジタリウスノヴァに、ピスケスは巨大な黄金の鎧を纏った魚の姿のピスケスノヴァに、カプリコーンはウルクが少し大きくなり角が捻れたような形になったカプリコーンノヴァに、アクエリアスはネクタルが2本に増え水瓶が脊髄のある場所に一つ増えたアクエリアスノヴァに、ジェミニは自分の分身を生み出しヴァルゴは翼が白から黒へと変わる

「ホロスコープス全員の超新星か、面白え、やってやるよ」

「うおおおおー！」

「グルアアアア!!」

タウラスノヴァとレオノヴァがアキレスオーデインに突進しヴァルゴノヴァの光弾とアリエスノヴァのオーラが迫る

「うおおらー！」

「うああ!？」

アキレスオーデインは突進してきたタウラスの角を掴むと振り回し同じように突進してきたレオノヴァにぶつけ光弾やオーラの盾代わりにする

「ぐああ!？」

「おらー！」

「うわああああ!!」

そのままアキレスオーデインはタウラスノヴァを振り回しながらレオノヴァごと一回転し背後から迫っていたサジタリウスノヴァの矢やカプリコーンノヴァの音撃を防ぎキャンサーノヴァとスコープオンノヴァに投げつける

「ん?」

「がああああああ!!」

しかしアキレスオーデインの真下の床から水に潜るように潜んでいたピスケスノヴァが襲いかかりアキレスオーデインを呑み込もうとする

それをアキレスオーデインは上に飛んで回避するがそこへピスケスノヴァは水流弾を放ちさらにサジタリウスノヴァのかなりの数の矢も迫る

「しやらくせえ!」

『Homura Limit Brake』

アキレスオーデインはアキレスドライブの天球を左に回し腕にエネルギーが溜まり炎を纏う

「ホムラストライク!」

アキレスオーデインはホムラストライクを発動させたまま水流弾や大量の矢に向かって突っ込みそれらを蹴散らすとそのままタウラスノヴァを回復させたアクエリア

スノヴァに向かって突進する

「させん！」

「そう簡単にこっちの無限エリクサー役はやらせないよ！」

アクエリアスノヴァの目の前にスコープィオンノヴァ、キャンサーノヴァ、タウラスノヴァ、レオノヴァが立ちはだかり止めようとする

「邪魔だあああ！」

しかし高速で飛行し勢いのついたホムラストライクはその巨大な4体全ての身体を貫きアクエリアスノヴァの脊椎部分をその場所の壺ごと貫きさらに一瞬でその拳を引き抜くと同時にオーディンブレードで両肩の壺ごとアクエリアスノヴァを斬り裂く

「がっ…!？」

「アキレスオーディンとかけて度数96%のスピリタスとときます…その心は…強、過ぎる…でしよう…」

「グガア…」

「そんな…」

「さて、まだまだいくぜ」

エターナル早苗&RI早苗 vs エターナル、ゼロ、ズードーパント

「シヤア！」

「いのー！」

エターナルドーパントはメモリ停止のオーラを纏った拳で殴りかかりゼロドーパントは両手のチェーンを伸ばしズーが左腕を蛇に変え伸ばして攻撃してくる

「甘いな」

エターナル早苗はエターナルドーパントの拳をしゃがんで避けるとエターナルエツジでエターナルドーパントの腹を切り裂き一回転すると迫ってくる蛇とチェーンを全て斬り裂く

「くらいなさいー！」

「ぐわあ!？」

「があ!？」

「ぶはっ!？」

さらにそこへR1早苗の援護射撃が放たれ3体は地面へ転がる

「やはりエターナルを使うには弱すぎる。ハズレ中のハズレだな、こいつは、あの加頭とかいう奴の方がまだ使えてたぞ」

「な……んだと……俺が……俺がハズレだと……ふざけるなああああ!!」

エターナル早苗の表に出ている克己の言葉にエターナルドーパントは激昂し先程と同じオーラを拳に纏わせながら突進してくる

「お前にエターナルの本当の力を見せてやろう」

『E t e r n a l M a x i m a m D r i v e』

エターナル早苗はマキシマムスロットにエターナルメモリを挿し脚に緑色の炎を纏い飛び上がる体制に入る

「やらせるかあ！」

「らあ！」

「それはこっちの台詞です！」

「ぐはあ!？」

エターナル早苗の妨害をしようとしたゼロドーパントとズードーパントはR I 早苗の放った弾丸により再び吹き飛ばされ地面に這いつくばる

「お前も地獄を楽しんでこい、永遠『エターナルストライク』！」

「がっあああああああ!？」

エターナル早苗の緑色の炎を纏ったキック、エターナルストライクがエターナルドーパントに直撃しエターナルドーパントは叫びながら爆発した

「ふん、そっちの2体も地獄へ案内してやろう」

デイカイザー vs スーパーアポロガイスト& e t c

「これでもくらうのだ！」

「遅いな」

スーパーアポロガイストはスーパーマグナムショットを放つがデイクイザーはそれをゆつくりと歩みながらキングブツカー ソードモードで弾く

「死ねえ！」

「八つ裂きにしてやるのだ！」

シャドームーンとスーパーアポロガイストはサタンサーベルとスーパーアポロフルーレを構え斬りかかってくる

『ATTACK—RIDE SLASH』

デイクイザーはスラッシュのカードを装填するとキングブツカーの刀身が分身するほどのスピードで2体の剣ごとシャドームーンとスーパーアポロガイストを斬り裂く

「がはっ!？」

「は、速過ぎる、のだ…」

そのまま2体は倒れ爆発するがデイクイザーは気にもとめずにそのまま歩き続ける
「あなたにも良き終末を迎えさせてあげましょう」

恐竜グリードのその言葉と共に全てのグリード達がデイクイザーに遠距離攻撃を放つ

「貴様らごとくときで俺に終末を迎えさせるだど？笑わせるな！」

『ATTACK—RIDE BRAST』

デイカイザーはキングブツカーをガンモードに変えると黄金の光弾が無数に放たれ
グリード達の攻撃をかき消す

『FINAL—ATTACK—RIDE DE・DE・DE・DEKAI SER』

「デイメンションバースト！」

デイカイザーの構えるキングブツカーの目の前に20枚のカード型エネルギーが現
れデイカイザーが引き金を引くとそこからエネルギー弾が発射されそれがカードを突
き抜けていく、グリード達はカード型エネルギーを攻撃するがまったく破れない

エネルギー弾はカード型エネルギーを突き抜ける度に大きくなり20枚目のカード
を突き抜けると同時にグリード達を呑み込み爆発した

『うわあああああ!?!』

「弱くて話にならないな、つまらん」

第四十二幕 助つ人活躍くその二く

紫は紀斗が落としていったカードとクワガタをリグルと大妖精にスキマを使って渡しに行く

○大妖精はTSチルノと共にアイズドールパントとコマンダードールパントをジーンドールパントが融合させたコマンダードールパントとデスマジン、アルビノレオイマジンと戦っていた

コマンダードールパントは周りに歯車が付いた目玉をまるで統率のとれた軍隊のように展開させその目玉一つ一つからミサイルが発射されさらに顔の真ん中に巨大な一つ目がある仮面兵士も大量に生み出され周りの目玉と仮面兵士の目玉がリンクしているせいで○大妖精の瞬間移動は見切られなんとか他のカードで応戦しているがデスマジンとアルビノレオイマジンが邪魔をしよう思うように一掃できない

「ああもう！邪魔邪魔邪魔ー！」

TSチルノは周りの目玉や仮面兵士達をデストバイザーツヴァイをめちやくちやに振り回し斬り裂くがその隙をついてデスマジンが鎌で後ろから斬りかかるのを○大妖精が瞬間移動でTSチルノの背後に移動しゴルトセイバーで鎌を防ぐ

「チルノちゃん落ち着いて！熱くなったら向こうの思うツボだよ！」

「ありがと大ちゃん！でもまだデスト達呼んじや駄目なの？」

「うん、今デストさんやフェニを呼んだら出てきた瞬間を袋叩きにされちゃう。」

「ならこれなら使えるかしら？」

「!?!」

いきなりO大妖精とTSチルノの後ろにスキマが出現しそこからさつき紀斗から渡された2枚のカードを持った紫が現れ2人は驚く

「ゆ、紫さん!?!それでそのカードは？」

「さつき紀斗から渡されたのよ、あなたに渡してくれって」

そう言つて紫はO大妖精にカード、サバイブ【烈火】とし風【を渡す

「これは、レミリアさんと美鈴さんのと同じカード…」

O大妖精はカードを受け取ると自身のゴルトバイザーを見る、

大妖精自身、途中で気づいてからずつと気になっていたゴルトバイザーのいつも使っている場所とは違うもう二つのカードのロットの意味、それがわかった気がした

そしてO大妖精は二枚のサバイブのカードをゴルトバイザーに装填した

『SURVIVE』

するとO大妖精の姿は変わり右手の籠手が蒼く左手の籠手が紅く変化しその背中に

は片方の6枚が蒼のオーラを、もう片方の6枚が紅のオーラを纏った計12枚の蒼と紅のオーラを纏った黄金の翼が現れる

強化された、いや、真の姿へと戻ったオーデイン・真へと姿を変えた

OS大妖精は空中に浮かび上がると自分を中心に球体の形に黄金の羽を展開する、その羽一枚一枚が蒼や紅のオーラを宿しかなりのエネルギーを持っていることがわかる

コマンダーアイズドーパントは厄介なことをされる前にと仮面兵士や目玉からのミサイル攻撃で襲わせるが羽は一種のバリアのようになっておりOS大妖精には少しも届かない

「邪魔です」

OS大妖精が手を振るうと羽が全方向に射出され全ての仮面兵士と目玉を破壊する

「なっ!?!」

「あれだけの数を一瞬で…」

「大ちゃんすげー!」

『SWORD VENT』

OS大妖精は翼と同じように紅や蒼のオーラを纏ったゴルトセイバー・真を装備しただけだ呆然としていたアルビノレイマジンに向かってゆっくりと歩いていく

「ハッ、い、いくら目玉や仮面兵士を倒したところで所詮奴らは数が多いだけの雑魚!」

「対1なら負けん！」

そう言うアルビノレオイマジンは雄叫びをあげながらOS大妖精に右腕を振り上げ襲いかかる

しかし次の瞬間には振り下ろされる筈の右腕は右肩から斬り裂かれ床に落ちた

「な、な、なんだこれはああ!?!」

「1対1なら、なんですか?」

「く、くそおおおお!」

余裕そうにつぶやくOS大妖精にアルビノレオイマジンはヤケクソに残った左腕で殴りかかろうとするが次の瞬間には既に細切れにされ砂となり消えた

そしてOS大妖精は次にデスイマジンの方を向きデスイマジンはOS大妖精を恐れたのか一歩後退する

「逃げてても無駄ですよ?」

OS大妖精はゴルトセイバー・真の柄を組み合わせると一つの弓になり一枚の羽が弓の弦となり更にもう一枚の羽が光輝く矢に姿を変える

「ふっ!」

OS大妖精はデスイマジンに狙いを定め矢を放った、その矢は形を変え不死鳥の姿となりデスイマジンへと突き進む

デスイマジンには鎌を振るい竜巻を起こすが不死鳥に触れた瞬間霧散しまったく効果がなくデスイマジンは逃げようとするが不死鳥はそれを許さず背中からその胸を貫いた

「か…あつ…」

「次はあなたです、歯車目玉さん」

「まさかここまでは…予想外ですね。正直面倒ですが、死んでください！」

コマンダーアイズドープアントは自分の両脇に構える他の目玉より一回り大きい歯車付きの目玉から極太のレーザーをOS大妖精に向けて放つ

『GUARD VENT』

しかしそのレーザーはOS大妖精のゴルトシールド・真によって阻まれさらに当たったレーザーのエネルギ์がゴルトシールド・真の目の前で収束されるとコマンダーアイズドープアントに向かって放たれた

「馬鹿な!？」

まさかレーザーを返されるとは思っていなかったコマンダーアイズドープアントはなんとか避けるが片方の目玉がレーザーに呑み込まれ爆発する

『FINAL VENT』

OS大妖精の後ろから通常より一回り大きくなり目が紅と蒼のオッドアイ、胸に金と

紅と蒼の宝玉を付けたゴルトフェニックス・真が現れOS大妖精と共に上空に浮かび上がる。OS大妖精はゴルトセイバー・真の弓から先ほどより太い不死鳥の矢を放つとゴルトフェニックスが両翼と胸の宝玉と口から黄金の光線を放ち不死鳥の矢と一体となり巨大な一羽の不死鳥となりコマンダーアイズドーパントに激突した

「ぐわあああああ!?!」

「大ちゃんカッケー!」

「えへへ、ありがとうチルノちゃん。さ、他の人達の援護に行こう?」

「うん!」

2人は他のメンバーの援護に行き紫もリグルにアイテムを渡しに行く

カプト系ライダーズ VS ワーム's

DH幽香達とワーム達の戦いはワーム達の一方的な展開だった、メモリの力により上がったクロックアップの速さはハイパークロックアップと同程度のスピードとなりフリーズを使うカッシスワームのスピードはハイパークロックアップでも目視出来ないほどにまでなっている

そのためあの幽香や聖ですらボロボロになり肩で息をしている

「弱い!弱いなあ、ライダーの諸君!」

「その程度ならとつとと餌になることを勧めるよ」

「くっ、速すぎる…」

カッススワーム クリペウスの一体がGHリグルに右腕の剣で刺そうとする

「ぐわっ!？」

そこへいきなりガタツクゼクターより一回り小さい金色のクワガタが飛んできてカッススワーム クリペウスの顔面に突進をくらわせる

「なんだこのゼクターは!?!こんなものデータに無いぞ!」

「これは…」

クワガタはGHリグルの目の前に飛んでいきアゴをキシキシと鳴らす

「僕に、力を借してくれるの?」

クワガタはコクリと頷く

GHリグルはクワガタ、デイメンションゼクターを見据え立ち上がる

「来い!デイメンションゼクター!」

デイメンションゼクターはGHリグルのハイパーゼクターに向かって飛ぶとハイパーゼクターがGHリグルを離れデイメンションゼクターの方に同じように飛ぶ

するとデイメンションゼクターが様々なパーツに分かれハイパーゼクターに装備されていく、ハイパーゼクターはコーカサスオオカブトのような姿となり所々に金の装甲を身につけたデイメンションハイパーゼクターとなりGHリグルの腰に再び装着され

る

「デイメンションキャストオフ」

『DIMENSION CASTOFF』

『CHANGE DIMENSION HYPER STAG BEETLE』

G Hリグルの姿は変わり大きく開いていた頭部のガタックホーンがギラファノコギリクワガタのようになり青と金の色の場所が逆になったガタック デイメンションハイパーフォームとなった（以下G D Hリグル）

「デイメンションクロックアップ」

『DIMENSION CLOCKUP』

G D Hリグルがデイメンションハイパーゼクターのボタンを押すとハイパークロックアップを使っていたD H幽香達やワーム達、強化フリーズを使っていたカッシスワーム達さえ止まっていた

そしてG D Hリグル以外の全てが止まったと同時に部屋に
ガタキリバの分身の
数を遙かに上回る数の

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

無数のリグルが現れた

ほとんどの最初からいたリグルと同じデイメンションハイパーフォームだが中にはウヴァのようになっている怪人少女やメモリを使ってドーパントとなっているもの、スイツチを使ってゾディアーツ化している者もいる

「デイメンションクロックアップは次元の壁すら越え様々なパラレルワールドの自分を呼び出す、それも全員デイメンションクロックアップの速度でね。ま、聞こえてないか……。それじゃ皆やるよ！」

『うん！（えええ！）（ああ）』

『DIMENSION RIDER POWER！』

『1 2 3 RIDER KICK』

全てのGDHリグル達はデイメンションハイパーゼクターの角を下ろしガタツクゼクターでライダーキックの発動準備をし他のリグル達も自分達の身体に力を溜めキックの体制になる

『多次元【アンリミテッドライダーキック】！』

全てのリグル達が一斉に飛び上がり全てのワームや近くにいた怪人達に光輝くエネルギーや雷などを纏ったキックを放つ

『DIMENSION CLOCK OVER』

その音と共に時間は元の速さに戻り最初からいたリグル以外のリグル達は姿を消す

「へ？いきなり何が？」

「いきなり爆発したぞ?! 自爆か?!」

「いえ、恐らくリグルがやったのでしよう。ハイパークロックアップですら捉えきれないほどのスピードで」

ほとんどの者が呆然とする中幽香や豊聡耳神子、聖の実力者達はあの強力なワーム達を一蹴したGDHリグルを見ていた

仮面ライダーゼロ vs カニレーザー&イカデビル&ガラガンダ

「イカア！」

「ガラア！」

「おらー！」

イカデビルとガラガンダは触手と右腕を伸ばしゼロを絡めとろうとするがゼロはゼロスラッガーで斬り裂き輪切りにする

「イカと蛇の輪切りいっちょ上がり！」

「おのれ！イカ爆弾！」

「焼け焦げろ！」

今度はイカデビルは隕石を放ちカニレーザーも目からレーザーを放つ

「効かないね！」

ゼロは自分の目の前にバリア、ウルトラゼロディフェンサーを張り攻撃を全て防ぐ
ゼロは攻撃を防ぎきるとゼロスラッガーを胸のカラータイマーに装着しそこから光
線が放たれる

「ゼロツインシュート！」

「なっ!?!ゲソーーー!?!」

「ガラアーーー!?!」

「ガニーーー!?!」

3体はゼロツインシュートに吞まれ爆発しゼロは次の相手を探す

「さて、次はどいつだ？」

天音 vs カテゴリー3 アンデッド

『APOLLO』『BRAVE』

「追いかけられたお返しだ！」

「グル!?!」

天音はダブル アポロブレイブとなりアポロの炎熱を纏うブレイブイードを持ちカ
テゴリー3 アンデッドに斬りかかる

「グルルア！」

「おわつと!?!」

カテゴリー3 アンデッドは顔のドリルミサイルを三つ飛ばし対抗し天音はギリギリミサイルを避ける

「やってくれるじゃん!」

「グル!?!」

仰け反った勢いで天音はバク転をしカテゴリー3 アンデッドの顎を蹴り上げる

『BRAVE MAXIMUM DRIVE』

「太陽剣【プロミネンスブレイブ】!」

600度の炎熱を纏った炎の剣で天音は体制を崩したままのカテゴリー3 アンデッドを逆袈裟斬りで斬りさく

「グルアアアアア!?!」

「いっちょあがり♪」

翔太郎 vs ン・ガミオ・ゼダ&ゴ集団

「おらあ!」

「グウ!?!」

翔太郎はヒットアンドアウェイ戦法で Gronk 達の攻撃を避けながら応戦している

「ぬう、面倒な奴だ!俺一人で片づけるか、ぬん!」

ン・ガミオ・ゼダはそう言うのと周りのゴ集団全員を黒煙に変え吸収し更にパワーアップした

「1人に集中したか、多対1よりやりやすく助かるぜ」

「ぬかせ、貴様もすぐにあの世に送ってやる」

ン・ガミオ・ゼダの拳が翔太郎はなんとかいなしながら蹴りやパンチを放つがパワーアップしたン・ガミオ・ゼダの身体にはあまり効いていない

「くそ！かてえな！」

「その程度か！」

「ぐあっ!？」

ン・ガミオ・ゼダの拳が翔太郎の胸にはいり翔太郎は少し吹き飛ばがなんとか体制を立て直す

「長期戦は不利だな、こいつで一気に決めるか」

『CRASH MAXIMUM DRIVE』

翔太郎はマキシマムスロットにクラッシュメモリを入れると跳び上がりキックの体制に入る

「クラッシュライダーキック！」

「その程度！ぬっうおお!？俺の腕が!？」

翔太郎は足に茶色のエネルギーを纏ったキックを放ちン・ガミオ・ゼダは胸の前でクラッシュライダークィックを受け止めるが受け止めた瞬間ン・ガミオ・ゼダの腕にヒビが入り砕け散る

「そのまま砕けな！」

「お、おのれえええええ!?」

クラッシュライダークィックは勢いを衰えさせずン・ガミオ・ゼダを蹴り抜きン・ガミオ・ゼダは爆発した

遊星 vs ン・ダグバ・ゼバ

「ハア！」

「フーン！」

クウガ アルティメットフォームに変身した遊星とン・ダグバ・ゼバは原点のクウガとン・ダグバ・ゼバと同じように殴りあっていた

両者共に何発もの拳をくらい身体にいくつもの傷が出来ている

「ふふふ、楽しいね。さあ、もっと楽しもうよ」

「こっちは楽しくなんかねえよ！レンゲルラウザー！」

遊星はレンゲルラウザーを召喚すると手に持った瞬間レンゲルラウザーは黒いライジングドラゴンロッドへと姿を変える

「たあ！」

「ぐっ！あのクウガが使わなかった武器変化だね！」

遊星はライジングドラゴンロッドでん・ダグバ・ゼバを突きん・ダグバ・ゼバは怯む

「まず一本！」

「ぐほっ!？」

ライジングドラゴンロッドが再び突き出されそれがん・ダグバ・ゼバの胸に刺さる

「リボルゲイン！ガルルセイバー！」

「ゴはあ!？」

遊星はリボルゲインとガルルセイバーを召喚すると二本の剣は二本の黒いライジン

グタイタンソードとなりん・ダグバ・ゼバの胸に更に突き刺さる

「は、ははは、僕が…はははははははははは！」

ライジングドラゴンロッドと二本のライジンググタイタンソードを突き刺されたん・ダ

グバ・ゼバはさすがに耐えきれず笑いながら爆発した

「やれやれ、相変わらず面倒な相手だったな」

第四十三幕 神喰狼の食事

最上階 支部長室

支部長室の床に一部空いている穴、そこに部屋の奥の方で座っている暗道の手のひらの上の魔法陣から出た鎖が穴から下の階へと伸びかなりの速さで引き上げられている

「ぐっ!?!」

鎖の先には紀斗が縛られ床より上に引き上げられたと同時に床の穴は塞がり紀斗は床に叩きつけられる

「やあ、手荒な招待で申し訳ないね海堂君」

「てめえ、暗道!」

暗道は薄く見下すような笑みを浮かべ紀斗は縛られたまま暗道を睨みつける

「覚えていてくれて嬉しいよ、まあ、そういきりたたずにこいつらの相手をしてくれないか?」

部屋の奥から出てきたのはワイズマンを筆頭としたウイザード本編や映画に出てきた人型、巨大なタイプを合わせた全てのファントム達総勢35体だった

「君から以前絞り出させてもらったファントム達だ。今となっては私の言うことを聞く

だけの人形だがね」

「そう言いながら暗道は紀斗を縛っていた鎖を解く

「…鎖を解くなんてどういうつもりだ」

「なに、抵抗できない君をただ黜るのも面白みに欠けると思っただのね。ちよつとしたサービスだよ」

「ならこの鎖を解いたこと後悔させてやるよクソ野郎」

『ドライバー オン プリーズ』

『シャバドウビタツチヘンシーン シャバドウビタツチヘンシーン』

紀斗は立ち上がると腰にウィザードライバーを出現させ左手にインフィニティーウィザードリングを付けウィザードドライバーにかざす

『インフィニティー！ プリーズ』

『ヒースイフドー！ ボーザバビュードゴーン！』

「ここでお前を倒す、絶対にだ！」

「ふふふ、やってみるといい。さあ行けお前達！」

『……………』

紀斗はウィザード インフィニティースタイルに変身しアックスカリバーを構え暗道はフロントム達を突撃させる

「ふっーらあー！」

紀斗はアックスカリバー アックスモードで高速移動をしながら人型ファントム達をすれ違い様に斬りつけていく

ファントム達は斬りつけられても一言の声も発さずまるで生ける屍を相手にしているような感じだ

「つたくー！こんな人形にされてるんじや敵ながら同情するぜ！」

『チヨーイイネー！サンダー サイコー』

紀斗は右手のサンダーウィザードリングをかざすと緑色の魔法陣が現れそこから雷撃が飛び出しファントム達に襲いかかる

『グレイブニル カモン』

「おっと、危ない危ない。せっかくの魔力を塵にかえしてもらっては困りますよ」

暗道は右手のリングを自分の腰のパームオーサー（白い魔法使いドライバーの縁部分が銀色）にかざすと暗道の目の前に魔法陣が現れそこからさつきと同じ鎖が何本も現れフェニックス以外の人型ファントム達を引き寄せ雷撃はフェニックスだけに決まりフェニックスは爆発するがすぐに復活する

「…復活するフェニックスだけは見殺しか、反吐の出る戦わせ方だな」

「なに、私は効率重視なだけさ。それにしても、ふむ、やはり普通の奴ら程度では時間稼

ぎでやられてしまうのが目に見えてしまうな。仕方ない、フェニックス、海棠君を足止めしている」

そう言うのと暗道は姿を暗い銀色の狼型のファントム、フェンリルへと変え引き寄せたファントムの中から1体、ミノタウロスをグレイプニルで縛り自分の目の前に運ぶ

「何する気だ!」

「……」

「くそ!邪魔だ!」

紀斗は暗道の行動を阻止しようとするがフェニックスが立ち塞がり妨害する

「それでは、いただきます」

「ツ!」

グシャツゴキツバキツグチュ　ゴクンツ

暗道は口を人を簡単に丸呑み出来るくらいまで開くとグレイプニルを操りそのままミノタウロスを頭から食べた

紀斗はその光景を驚愕の目で見て一瞬言葉を失う

「ふむ、牛系はどうも角が喉の奥に引っかかってしょうがないな今度からは先に角を折ってから呑むか」

「てめえ、オーガと同じような食って能力を得るタイプのファントムだったのか……」

「確かに私とオーガはたまに大食い競争で競い合うような仲ではあったが、私とあいつの能力は少し違うな。むしろ私の能力の方が劣化版だと言っている。まずあいつは死んだファントムでも魂ごと喰らうが私は相手の肉体が無ければ喰らえない、それに私が喰らって得られるのは魔力のみ。あいつのように能力までは得られない」

「それにしちゃあ随分とファントムを喰うのにこだわるじゃねえか」

「なに、私はただ喰らった相手の魔力分自分の魔力の最大値を上げられるだけだがね。さ、私は食事の続きをしましょう」

「させるか！」

『ジ・オリジン プリーズ』

「フェニックス」

再び他のファントムを喰らおうとする暗道に向かって紀斗はエクスポロージョンによる爆発を放つがフェニックスが盾となり暗道へのダメージが防がれフェニックスはまた死亡し復活する

紀斗が何度も暗道の食事を邪魔しようとするがフェニックスが邪魔をしそれを突破してもグレイプニルが邪魔で暗道のところまで届かない、バインドやディフェンドで邪魔をするがすぐに破られブリザードで氷漬けにしてもグレイプニルでフェニックスを殺されすぐに復活し力を入れ過ぎたり威力が強過ぎて斬殺刺殺焼殺圧殺撲殺銃殺殴殺

蹴殺様々な方法でフェニックスを殺してしまった、しかもフェニックスの復活するスピードもどんどん速くなっていて最早一瞬で復活するほどまでになっている

そしてそのまま暗道の食事は続けられ

「ふう、これでフェニックス以外は喰えたな」

ついにフェニックス以外の全てのファントムが暗道に喰われ暗道、フェンリルの魔力が目に見えて上がっているのがわかる

「後はそのフェニックスだけだな、いい具合に何度も殺してくれたおかげで魔力も中々高まっているようだ」

フェンリルはフェニックスを見て舌なめずりをするとグレイプニルを伸ばしてくる

「クソー！」

『バインド プリーズ』

紀斗はバインドでグレイプニルを縛るが一瞬しか持たずバインドは壊される、アックスカリバーで斬りつけるがまったく壊れずグレイプニルのうちの一本が紀斗の攻撃をくぐり抜けフェニックスの身体に巻きついた

「しまっ!?!」

「さあ、メインデッシュだ」

フェンリルは自分の目の前にまでフェニックスを運ぶと自分を中心にグレイプニル

でドーム状のシエルターを作る

「閉じこもるんじゃねえ!」

『ハイタワーチ! シャイニングストライク!』

「出て、こいやあ!」

『キ・ラ・キ・ラ! キ・ラ・キ・ラア!』

紀斗はアックスカリバーのハンドオーサーをタッチしアックスカリバーを巨大化させ飛び上がりドラゴンシャイニングをグレイプニルのシエルターにくらわせる

「ぐっ! 堅えッ…」

しかしグレイプニルのシエルターはアックスカリバーの刃をまったく通さず火花が散るだけだった

シエルターの中からはフェニックスを喰らう音だけが響きもう一度ドラゴンシャイニングを放とうとした瞬間グレイプニルのシエルターが解け中からフェンリルが出てくる、しかしその姿は先ほどより禍々しい姿となり両肩にはシオルダーファングのような刃もある

「待たせたね、君が何度も殺してくれたおかげであるフェニックスの味はかなり美味しかったよ」

(最悪だな、逃げるにしてもフォールのリングはいくらやってもエラー、あのグレイプニ

ルの硬さはかなりのものだ……」

「やっつけてくれるぜ、クソ狼が……」

フェンリルの薄笑いの言葉に今の状況の悪さは理解する紀斗は苦虫を噛み潰したような顔でフェンリルを睨む

「これでようやく、準備は整った……」

「準備だと?」

「その通り、私の力を更に上げる為の準備がね」

『ドライバーオン カモン』

フェンリルは両手にリングをはめると右手のリングを腰のハンドオーサーにかざすと低い地獄の亡者のような音声と共に白い魔法使いドライバーに酷似したベルトが現れる

「まさか!」

「君からいただいたベルトを基に作りあげさせたものだよ、変身」

『モルフ カモン』

フェンリルの目の前にフェンリルと同じ色の魔方陣が現れその魔方陣がフェンリルを通り過ぎるとフェンリルの姿は変わりヘルムの上部分は狼のようでそこから下は白金の原石を模したゴツゴツとした顔に目元まで二本の線が入った顔、身体の服装は白い

魔法使いの姿に似ているがマントは前には来ないで後ろにたなびいている
「仮面ライダー ウォーロック、さあ、世界を喰らい尽くしてやろう」

第四十四幕 魔術師の仮面ライダー

「仮面ライダー ウオーロック、さあ、世界を喰らい尽くしてやろう」

「ウオーロック…魔術師か…、上等だ、てめえをぶっ倒して俺達の世界を護る！」

紀斗はアックスカリバーを構えウオーロックに斬りかかる

それに対してウオーロックはゆっくりとした動作で左手のリングをベルトにかざす

『グレイプニル カモン』

ウオーロックの目の前に二つの小さな魔方陣が現れウオーロックはそれに両手を突っ込むとウオーロックの両手首にはグレイプニルの付いた鉄のプレスレットが装備され両手を振るうとグレイプニルが伸び剣のようにまっすぐな形になりアックスカリバーを受け止める

「そんなものかい？」

「くっ！この！」

「はあ！」

「うあっ!？」

ウオーロックはグレイプニルでアックスカリバーを弾き返すと両手のグレイプニル

を伸ばし紀斗に迫る

「捕獲しろ、グレイプニル」

「捕まるかよ！」

迫る二本のグレイプニルを紀斗はアックスカリバーで何度も弾くが次第に推されていく、

紀斗はこの状況の拮抗は自分にとつて不利と感じると二本のグレイプニルを一気に弾くと高速移動で逃れようとする、

しかしグレイプニルはその速さにも着いていき紀斗に迫っていく

「くそ！この速さに着いてこれるのかよ！」

「グレイプニルの効果には絶対捕縛も含まれていてね、どこまでもターゲットを追い続けるのさ。例えば相手がクロックアップやインビジブルを使つたとしても追いつく速さでね」

そのうちグレイプニルの一本が紀斗の足に絡みつき紀斗のスピードが下げられたと同時に紀斗の身体にもう一本が絡みつく

「うわ!？」

「ふん！」

「がっ!？」

ウオーロックは紀斗を縛ったまま振り回し紀斗は床や壁に叩きつけられる

「さて、そろそろ私の魔術を見せてあげましょうか」

そう言うとうオーロックは紀斗を勢いよく投げ捨て新しいリングを右手に付ける

「ウィザードや白い魔法使いの魔法は肉体の強化や変化、もしくは自然の力を身に纏ったり現象を発動させる物が多い。それに対して私の魔術は」

『マグマ カモン』

ウオーロックの右隣に赤い巨大な魔方陣が現れそこから巨大なマグマの右腕が現れる

「自然の物その物を操る物が多い」

「！」

ウオーロックがそう言った瞬間マグマの右腕は紀斗に殴りかかり紀斗は左に飛んでその拳を避ける

「マグマなら冷やすだけだ！」

『チョーイイネ！ ブリザード サイコー！』

紀斗の目の前に現れた青い魔方陣から吹雪が放たれマグマの拳は急激に冷やされ岩となりズズウンという重い音と共に床に落ちる

「マグマが冷やされ岩となるなら岩は風化し砂となる」

『サンド カモン』

岩の拳の上に黄色の魔方陣が現れ岩の拳を通り抜けると岩の拳は砂となって崩れ落ち数百もの砂の拳となり紀斗に襲いかかった

『チョーイイネ！グラヴィティ サイコー！』

それを紀斗はグラヴィティで押しつぶすが数が多すぎるせいでまだ半分以上の砂の拳が紀斗に迫ってきている

「凍ってる！」

『チョーイイネ！ブリザード サイコー！』

一部の砂の拳は凍りつき動きを止めるがそれでもまだ最初の7割は残っていてはつきり言つて焼け石に水だ

「くっ！いくら斬つてもきりがねえ！」

アックスカリバーで斬つても元が砂のためすぐに元に戻つてしまい意味が無い、そして紀斗は砂の拳に囲まれ砂の拳達は球状になり紀斗を閉じ込め宙に浮いた

「実に呆気ないな、もう少し善戦してくれると思つたんだが…。このまま圧縮して殺してしまおうか」

ウォーロックは残念そうな声でそう言うと言つて手を砂球に向けるが中から紀斗が叫ぶ

「勝手に…人の限界を決めてんじゃねえ！」

『フォール プリーズ』

(あの新しいリングはまだ何故か使えねえ、なら今ある最強のリングでやってやる!)

その音声と共に砂球の底に穴が開きそこから紀斗が飛び出しフィニッシュストライクワイザードリングをワイザードライバーにかざす

『チヨイイネ! フィニッシュストライク サイコー!』

紀斗はインフィニティースタイルから黄金のワイザードラゴンのパーツを装備した仮面ライダーワイザード インフィニティードラゴンゴールドへと変身しドラゴウイングで空に浮かびながらウオーロックを見据える

「俺のシヨウタイムはこれからだ。幕切れなんてまだまだ早え!」

「そうこなくては面白くない!」

紀斗はウオーロックに向かって突っ込みウオーロックは砂の拳を一つに纏め先程のマグマの拳と同じ大きさで紀斗に迫る

「邪魔だあああ!」

砂の拳は紀斗のドラゴヘルクローによって切り裂かれると同時にドラゴスカルからの灼熱の火炎で塵となりウオーロックに迫るがウオーロックはすぐさま新しいリングをかざす

『バイト カモン』

「ウルフズバイトー！」

ウオーロツクの右拳に龍騎のストライクベントの狼verのようなオーラが纏われ、紀斗のドラゴヘルクローとぶつかり合い狼の口がドラゴヘルクローの先端に噛みつき砕こうとする

「おおおおおー！」

「軽いなあー！」

「があ?！」

右手のドラゴヘルクローがバラバラに噛み砕かれ紀斗は一旦上空に飛び距離をとる

「くそ…なんて顎だよありゃあ」

「フェンリルの顎は例え神だろうが食いちぎる、そのくらいの爪じゃあ話にならんよ」

ウオーロツクは右手の狼にバリバリとドラゴヘルクローを食わせ紀斗に向かって跳

躍する

「どれも片方も食わせてもらおうとしよう」

「させるかよ！ブリザード！サンダー！グラヴィティ！」

『チヨォーイイネ！ブリザード』

『チヨォーイイネ！サンダー』

『チヨォーイイネ！グラヴィティ』

『サイコー!』』』

紀斗は胸のドラゴスカルから火炎を放ち更にリングを手にはめれないため直接言った魔法の三つを一気に放ちウオーロックを撃ち落そうとするがウオーロックは左手のグレイプニルを伸ばし火炎、電撃、吹雪を貫き重力もぐにやりと曲がつて避けそのまま紀斗を拘束する

「しまっ!」

「いただきます」

「ぐあああっ!」

ウオーロックは拘束した紀斗をグレイプニルで引き寄せアツパーのように左手のドラゴヘルクローを食らい紀斗の両手は爪が無くなった手甲だけとなる

「中々質の高い魔力だ、さて今度はその翼か、尾か、はたまたドラゴンの頭か…、どれから食べましょうかねえ」

「つ…ざげんな!」

「ぬ!」

紀斗は唯一縛られていないドラゴテイルによる突きをウオーロックにくらわせウオーロックは吹っ飛ばされ油断していたところの不意打ちだったせいかわせいかグレイプニルも解ける

紀斗はドラゴウイングで再び空中に逃げ体制を立て直す

「こいつでも…くらいやがれ！ホーリー！」

『ホーリー プリーズ』

紀斗は胸のドラゴスカルから光輝く魔力のエネルギー弾を放ちウオーロックはそれを見て仮面の下で舌なめずりをする

「これはまた…旨そうな魔力弾ですねえ」

『アブソープション カモン』

ウオーロックがホーリーの魔力弾に向けて手を向けると手のひらに黒い魔方陣が現れ黒いイバラが出現し魔力弾とぶつかり合う

しかし二つは拮抗せず明らかに魔力弾の勢いが弱くなりイバラの勢いが増している

「俺の方が…負けている!？」

「そのまま呑み込まれてください！」

「くっ！」

「逃がしませんよ！」

「なっ!?!うあ!?!」

そのままイバラは勢いを上げ魔力弾を呑み込み紀斗は逃げようとしたがイバラに身体中を縛られ十字架にくくりつけられたイエスのような状態にされる、するといきなり

紀斗の身体にイバラが食い込みその激痛と共に魔力を絞りとられる感覚を紀斗は味わう

「ぐあああああああ!?!」

「アブソープションは吸収の魔術、魔力による攻撃や相手に直接触れさせないと効果は無いが相手の魔力を残っている限り吸い尽くす…。やはり上質な魔力は美味い、満たされる感じがある」

「ぐううブリザード!サンダー!」

『チヨォーイイネ!ブリザード』

『チヨォーイイネ!サンダー』

「おっと、させないよ」

『カース カモン』

『サイクラー…』

「なっ!?!がああああああ!?!」

紀斗はブリザードとサンダーを発動させようとしたがウォロツクは新たに出したリングを使うと紫色の魔方陣から立体的な呪文のような物が何本も現れそれがベルトにまとわりつくとうイザードライバーは機能が止まり黙ってしまった、

紀斗はそのまま魔法も使えず身動きも取れない状態で激痛を味わいながらイバラに

魔力を吸われ続けついに変身を維持出来なくなり変身が解けてしまう

「ふむ、このくらいは残しておいてあげようか」

「がっ!?!はあ、はあ」

ウオーロツクが魔力を吸収するのをやめると先程までの痛みで紀斗は息を荒げ喋ることも出来ない

「さて、海棠君、力の差はわかっただろう?おとなしく我々の仲間になるなら、これ以上手荒な真似はしない。もちろん君の仲間達にもだ。だが：まだ逆らうというのなら、君や仲間達は我々の人形になってもらう。その決断を君の大切な仲間達の目の前でやってもらおう」

ウオーロツクはそう言つて指を鳴らすと部屋の中央に巨大なモニターが現れそこに4階で戦っている幻想郷のメンバーや助っ人に来てくれた者達の姿が映され向こうもこちらの様子を覗いているようで紀斗のボロボロの姿を見て啞然としている者もいる

『紀斗!お前!』

「悪いい…、ちよつとドジっちゃまった」

甲はボロボロになった親友の姿を見て暗道への怒りに歯を噛み締め紀斗は弱々しい声で謝罪と共に画面に顔を向ける

「会話の途中で悪いが失礼するよ。海棠君には彼自身を含めた君達の運命を決めてもら

う、私の下につくか、人形となるか……。さあ！決めたまえ！海堂君！」

ウォーロックは会話を無理矢理やめさせ先程紀斗に言った問いを他のメンバーに苛立たせるようなゆつくりとした口調で説明し紀斗に回答を求める

「皆、俺は今さつき確かにここいつにここまで痛めつけられた……。魔力もほとんど空で体力もほとんど残ってねえ、はつきり言つて今の俺の状態でこの狼野郎に勝つには絶望的だ」

紀斗はうつむきながら弱気な言葉を吐きその言葉にウォーロックは仮面の下でニヤニヤとした下卑た笑みを浮かべ4階にいるメンバーにはその言葉に怒り青筋を立てている者もいる

「お前ら、悪いな……」

「俺と……」

「地獄まで相乗りしてくれるか？」

その言葉の意味を紀斗の仲間達は一瞬で理解した、そして返す言葉はその時点で既に決まっていた

『当たり前だ！（です！）（よ！）』

その返事に紀斗は薄く微笑み高らかに叫ぶ

「仮面ライダーを司る奴が！この程度で諦めるわけがねえだろ！俺は最後まで足掻き続ける！俺達の！明日の為に！」

その言葉は束縛されてなお力強く信念がこもっていた！ウォーロックが無意識のうちに気圧され半歩下がってしまっただけで！

「やっぱそうこなくつちや紀斗君らしくないよね〜」

「もし部下になるとか言ったら上の階丸ごと消し飛ばしてたよ」

「カイトがそれを言うとか冗談に聞こえないからやめてくれ…」

「え？本気だったけど？」

「え？」

「え？」

「だけど俺達が無助に行かなくていいのかあれ？」

「心配ないだろう、今のあいつからは強いエネルギーを感じられるからな」

「そうデス！紀斗さんはこういう時に本領を発揮するんデス！」

「まあこの程度で死んだら興ざめもいとこだがな」

『大道さんそれは言い過ぎじゃないですか？』

助っ人に来てくれたメンバー達も安心したような目で画面を見て周りの怪人達を

屠っていく

「それが君の選択か……。実に！実に残念だ！この絶望的な状況で淡い希望を抱いて死ぬ！」

『カモオン！アブソリユートゼロ！ゴートウーヘエル！』

ウォーロックは絶対零度のリングをベルトにかざすと5階のフロアが丸ごと魔方陣に包まれウォーロック以外の全て凍りつき紀斗もアブソープシヨンのイバラごと氷づけとなる

「下の階の君の仲間達を始末したら今度こそ君には人形になってもらおう。私の命令だけを忠実に聞く人形にね」

そう言つてウォーロックは紀斗から視線を外し下の階へ向かおうとする、その時

ピシッ

「?!」

本来聞こえる筈の無い音が聞こえ足を止め振り返る、完璧に全身を部屋ごと凍らせ常人なら意識が完全に無くなっているような状態、しかも魔力もほとんど吸い上げ身体もかなり痛めつけた筈、なのに紀斗を閉じ込めている氷にヒビが入っている

「馬鹿な……。ありえない、ありえないぞ！そんな状態で！何故まだ抵抗できる!?何故その氷に傷が出来るううう!?!」

氷のヒビが大きくなる度に紀斗のポケットから何か光が点滅していた

「う、おおおおおおおおお!!」

氷が完全に砕け紀斗は叫ぶ、そしてそれに呼応するかのごとくポケットから光つていた物が飛び出す、それはあの永遠亭のメンバーで撮った写真を入れていたロケットペンダントだった、それが光を放ち紀斗の目の前に浮かんでいた

「これは…今ならいけるか!」

紀斗は今まで使うことの出来なかった指輪を自分の目の前に出現させるとそれはペンダントと一つとなり暖かい光を放つ

「その指輪はなんだ!不確定要素は!速やかに消す!」

『バイト カモン』

ウォーロックは右手に狼の頭を纏い新しい指輪を喰らおうとする、しかし指輪はバリアのような物で護られ逆に吹き飛ばされてしまった

「なっ?!私の牙が効かない!?!」

指輪のバリアのような物は広がると紀斗の身体を包み込む、するとイバラも呪文の束縛も消え去り紀斗の身体の傷や魔力が回復していく

「感じる…あいつらの希望を、想いを」

紀斗は指輪を手にとり左手にはめる

「変身」

『シャバドウビタツチヘンシーン シャバドウビタツチヘンシーン』

『インファイニティイイ ホオオプ！プリーズ』

『ホープホープ ホオオプ！』

紀斗はインファイニティースタイルの顔の意匠がドラゴンを模したものとなり右肩に赤、左肩に青、右膝に緑、左膝に黄色の魔法石の装甲を装備し胸の装甲も中心はインファイニティースタイルと同じダイアモンドのような宝石だがその両隣の宝石は右側は赤と緑、左側は青と黄色になっている無限の希望、仮面ライダーウィザード インファイニティーホープスタイルへと姿を変えた

「さあ、反撃開始だ」

クライマックスなシヨウタイムが始まる

第四十五幕 無限の希望

「反撃？ そんな物させるわけがないだろう！」

『マグマ カモン』『サンド カモン』

「回復したのならもう一度叩きのめすのみ！」

ウオーロックは一発の攻撃力の高いマグマの拳と数で攻めてくる数百の砂の拳が紀斗に放つ

『ストリーム プリーズ』

「はあ！」

それに対して紀斗は先程まで持っていないかった、いや存在すらしていないかったリングを使いマスタースパークすら超える大きさの水流弾を放ちマグマと砂の拳ごとウオーロックを吹き飛ばす

「ぐああ!? な、なんだその魔法は！ そんな魔法はデータに無いぞ！」

ウオーロックは原点のウィザードや他の魔法使い達も使ったことのない魔法を見て驚愕した、データでは海堂 紀斗は新しいフォームにはなるためのアイテムなどを出しても新しい攻撃用スイッチやそういった物は出していなかった、そのせいもあってか

ウォーロックは無意識のうちに今までの攻撃がパワーアップするだけでもしくは別の能力が増えるだけと考えていた、しかし無意識のうちにそんな考えをしていたせいか反応が遅れ予想以上の未知の攻撃をモロにくらってしまった

「そうだろうな、今の魔法は俺が願ひ生みだした指輪による魔法だったからな」

「願ひ…生みだした、だと？魔法石も無しに魔法を…」

「その通り、このインフィニティーホープは俺が望んだ現象を発動することが出来る指輪を生みだす。そしてその力は希望の数だけ強くなる！」

『チヨロイイネー！ムソウテンセイ サイコー！』

紀斗は霊夢の姿が彫られた指輪をかざすと紀斗の周りに8つの陰陽玉が現れその一つ一つから膨大な数の札の形の魔力弾を放つ

「！グレイプニル！」

ウォーロックは両手首のグレイプニルを伸ばし自分を中心に鎖のドームを作り夢想天生を防ごうとする

「そんな守りで霊夢の傍若無人を防げるかよ」

「何?!札がグレイプニルをすり抜けてきただど!?!があ!?!」

しかし札はグレイプニルのドームの壁をすり抜けウォーロックに迫ってきていた、ウォーロックは必死に避けるが狭いドームの中で全弾避けられる筈もなく何発も当

たつてしまいドームのせい以外からどんな軌道で札が来るかわからないためドームを解除しようとするがそれよりも速く札がウオーロックを襲う

「くっ！防げないのなら！」

『サンド カモン』

「撃ち落とすだけのこと！」

なんとか札の弾幕を避けたりくったりししながらグレイプニルのドームを解除したウオーロックは再び砂の拳達を紀斗と札に襲いかからせるがその両方が砂の拳をすり抜けた

「札はともかく奴の身体まで攻撃をすり抜けた!?!ぬああ!?!」

紀斗に攻撃が効かなかったことに驚愕したウオーロックは

動きを止めてしまい再び札に被弾してしまう

「霊夢の能力でありとあらゆるものから浮いたこの状態にはどんな攻撃も効かねえんだよ」

「とんだインチキ能力ですねえ！」

『ワイルド カモン』

ウオーロックは新しいリングをかざすと姿が人間のようなフォルムから狼のような四肢となり一瞬でその場から離れ弾幕を避けていく

「防げず攻撃も当たらない、ならその持続時間まで避け続けなければいいだけの話」

紀斗がいくら弾幕を放つてもウオーロックはそれを避け続け1分くらい経つたところで陰陽玉も消えると同時に指輪も砂になってしまった

「時間切れのようですね、さつきまでのお返しといきましようか!」

『アイアン』『エレキ』『ファイア』『ウインド』

『カモン』

ウオーロックは連続で四つのリングをかざすと銀の魔法陣から巨大な鉄の槍、それが目の前に現れた黄色の魔法陣を通ると電撃をおびさらに赤の魔法陣を通り火炎を緑の魔法陣を通り暴風を纏うと鉄の槍は炎と雷の竜巻を纏う一矢と化し紀斗へと迫る

「四元素で構成した魔術、並の魔法では防ぐことは無理ですよ?」

「なら、並の魔法じゃなけりやいんだろ!」

『チヨイイネ!ファイナルマスタースパーク サイコー!』

紀斗は今度は魔理沙の姿を彫ったリングを出しかざす、すると紀斗の目の前に八卦路の形の黄色の魔法陣が現れそこから普通のマスタースパークとは比べ物にならないくらい超極太の光線が放たれウオーロックの放った四元素で作った矢を一瞬で塵に帰しウオーロックを呑み込もうと迫る

「これはアブソープションでも無理ですね…」

ウオーロツクは忌々しそうに呟くとその場から跳躍し天井に腕を突き刺し部屋内の下半分を焦土に変えたファイナルマスタースパークから逃れる

「面倒な魔法ですね、指輪をつけられないようその両手を食いちぎってあげますよ！」
「逆にその顎引き裂いてやるよ！」

ウオーロツクは天井を蹴り弾丸のように紀斗へ突っ込み紀斗はレミリアとフランの二つの指輪をベルトにかざす

『チヨォーイイネ！スピア・ザ・グングニル』

『チヨォーイイネ！レーヴァテイン』

『サイコー！』

紀斗は右手に紅い槍、スピア・ザ・グングニルを左手にねじ曲がった炎を纏った棒、レーヴァテインを持ちウオーロツクを迎え討つ

「そんな遅い動きでは私の攻撃は防ぎきれませんよ！」

「ぐっ！」

ウオーロツクの狼の腕のラツシュを紀斗はスピア・ザ・グングニルとレーヴァテインでラツシュをいなしたりするがスピードが足りずおされている

「なら速くしてやるさ！」

『チヨォーイイネ！ヒジリ ビャクレン サイコー！』

紀斗は聖の姿が彫られた指輪をかざし身体にオーラを纏うと先程とは比べようのない速さでスピア・ザ・グングニルとレーヴァテインの連続突きを繰り出しウォーロックのラッシュと拮抗するどころか押し返している

「うっ！くっ！肉体強化の魔法を！」

「燃えなあ！」

「断る！」

『ハウリング カモン』

紀斗はレーヴァテインをウォーロックの身体に突き刺そうとするがウォーロックは直前に指輪をかざし魔術を発動させる

「ハウリングインパクト！アオオオオオン！！」

「ぐうう！」

ウォーロックはバックステップをしてレーヴァテインの突きをかわし遠吠えによる衝撃波で紀斗を吹き飛ばす

「音の衝撃波か、威力はあまりないが厄介だな」

「なら威力が強いのをまたプレゼントしよう」

『カモオン！アブソリュート ゼロ！ ゴートウーヘエル！』

「その程度の温度で俺を凍らせるかよ！」

ウォーロックはマスタースパーク並みの絶対零度の光線を放ち紀斗は妹紅とお空のリングをかぎす

『チヨォーイイネ！フジヤマヴォルケイノ サイコー！』

『チヨォーイイネ！ギガフレア サイコー！』

紀斗は背に赤い炎の翼を生やし赤い魔法陣からマスタースパークより太い核の熱線を放ち絶対零度の光線とぶつかり合う

しかし勢いは光線の方が強くギガフレアは押され気味になる

「どうしたあ？言っている割には威力が低いぞお！」

「ああ、一発だけじゃあそうだな。だから……こうする！」

紀斗は背中の中の炎の翼の火炎をギガフレアに全力で投げ込む

フジヤマヴォルケイノの火炎によつてギガフレアは火力を上げその中をレーヴァテインは元となった神話のレーヴァテインのように炎の剣となり突き進み光線を二つに裂いていく

「絶対零度の光線を裂いただとお!?!がっあああああ!?!」

レーヴァテインはそのままウォーロックの左肩を貫きウォーロックは悲鳴をあげる

「もう、いっちゃおおお！」

「グ、グレイプニル！奴の槍を捕らえ「遅え！」グアアアアア!?!」

紀斗はさらにスピア・ザ・グングニルを構え投郷した

ウオーロックはグレイプニルでスピア・ザ・グングニルを捕らえようとするがレーヴァテインによるダメージで遅れグレイプニルが動く前に右肩をスピア・ザ・グングニルに貫かれ再び悲鳴をあげる

「同じ北欧神話に出てきた剣と槍に貫かれた気分はどうだよ、暗道」

「やってくれる…、生け捕りはもうやめだ。肉片一つ残さず殺してやる。グレイプニル！」

ウオーロックは声色を低くし先程とは比べようのない殺気を放ちグレイプニルの名を呼ぶとグレイプニルはウオーロックの身体に巻きついていき鎖の鎧へと姿を変える

「ウオーロック　グレイプニルスタイル、さっきまでの私と同じとは思わないことだ」

ウオーロックは四肢にグレイプニルを纏い体にXを描くように両肩からグレイプニルを一本ずつ巻いたグレイプニルスタイルになると一瞬で紀斗の目の前から姿を消した

「なっ?! 魔術無しで消え「遅いぞ海堂!」がっは!?!」

いきなり紀斗のすぐ目の前に現れたウオーロックはボディーブローを紀斗の腹にあびせ紀斗は吹き飛ばされると壁に激突し身体がめり込む

「があっ!?!」

（まだ聖のリングの肉体強化の効果は続いているのにまったく奴の動きが見えなかった…、しかもパンチもきつきまでの比じゃねえし身体能力のステータスの上がり方が半端じゃない、くそ！）

「どうした？そんなものじゃないだろう、海堂」

紀斗は壁から抜け床に降りると同時に新しいリングを創造しかざす

『ハイパークロックアップ プリーズ』

紀斗はリングの効果でハイパークロックアップを使いその場から走り出したが本来動けない筈のウォーロックの首が動き紀斗の動きを捉えていた

「っ!?ハイパークロックアップにすら追いつくのかよ！」

ウォーロックはハイパークロックアップを使う前は流暢に喋っていたのが嘘のように無言で紀斗を追いかける

さすがに通常の速さより遅い程度の速さだがそれでも充分異常である

紀斗はフェニックスのカタストロフによく似た水晶と四元素の色で構成された剣、ホープカリバーを出しウォーロックに斬りかかる

ウォーロックは左手でその攻撃を受け止め逆に右腕でリアットを仕掛けるが紀斗は身を逸らして避けると同時に左足で蹴りを放つ、しかしウォーロックは少し動いた程度で少しも効いた様子はない

その間にハイパークロックアップは効果が切れ世界は元のスピードに戻る

「ふむ、いつの間にか動いているということはハイパークロックアップでも使ったようだな」

「知覚していない……？つてことは無意識に身体だけが動いていたということか」

「概ね正解と言っておこう、私はグレイプニルの能力で無理矢理身体を動かしているにすぎないからな」

（グレイプニルの能力は絶対捕縛……そしてそれを身にまとっているということ……）

「なるほどな、グレイプニル自体が獲物をどこまでも追う猟犬、それを使って相手を捕まえる為の馬鹿みたいなスピードを出せたってことか」

「理解が早いな、その通り。私はグレイプニルで自分の身体能力を限界異常にまで引き上げているのだよ。まあデメリットとして殆どの魔術は使えなくなるがね」

「ならそのグレイプニルを使えなくすればいいだけだろう！」

『コピー プリーズ』『ブレイク プリーズ』『シール プリーズ』

紀斗はホープカリバーを銃の形に変形させると柄のハンドオーサーにコピーのリングをあて2丁に増やし破壊と封印の能力のリングをかざし破壊の赤い弾丸と封印の紫色の弾丸をウォーロックに向かって連射する

「捕獲対象、弾丸」

ウオーロックがそう呟いた瞬間ウオーロックの両手が目に見えない程のスピードで動き弾丸を全て掴んで無効化していた

「その弾丸は触れただけで能力は発動する筈だ、その鎖、絶対捕縛以外にも能力があったのか……」

「ああ、そういえば言っていないかったな。グレイプニルはもう一つ、グレイプニルへのありとあらゆる効果の無効化という能力があったと」

「チツ、面倒な能力ばっか持ちやがって!」

「それはお互い様だろう!」

『チヨイイネ! ゲンソウフウビ サイコー!』

紀斗は文のリングをかざし背中から魔力で作った黒い天狗の翼を生やすと高速で飛びまわりながらウオーロックとホープカリバーを元の剣の形に戻し打ち合う

「遅い! 遅いぞお!」

「くっ! なら重ね掛けするだけだ!」

『マツハ プリーズ』『クロックアップ プリーズ』

速度で負け押されていた紀斗はブレイドのマツハの効果を持つリングとカブトのクロックアップの効果を持つリングを使いさらにスピードを上げウオーロックと同程度の速さとなり2本のホープカリバーで斬りつけたり打撃を加えるがグレイプニルの防

御力は高くダメージもあまりとおらないうえに傷一つつかない

「叩き斬る！」

『チョーイイネ！ ミライエイゴウザン サイコー！』

紀斗は妖夢のリングをかざし空中でホープカリバーを片方手放すともう片方のホープカリバーを刀の形に変え居合いの体制をとりウォーロックを遥かに上回る速度で肉薄し何十撃もの居合い斬りをあびせる

「ぐう!？」

さすがのグレイプニルの鎧でも衝撃は殺しきれずウォーロックは怯みさらにグレイプニルの鎧に小さくだが傷をつけた

「やつと傷がついたなあ！」

『チョーイイネ！ サンポヒツサツ サイコー！』

紀斗は間髪入れずに勇儀のリングをかざしホープカリバーを投げ捨て一歩踏み出すと床を踏みしめた瞬間クレーターができた紀斗の右拳がウォーロックの顔面を捉えウォーロックの身体が宙に浮きグレイプニルの傷が少し大きくなる

更にウォーロックが吹き飛ばされるよりも速く紀斗が二歩目を踏み空中で横向きの体制になってしまったウォーロックの脇腹に紀斗の左拳が振り下ろされる

ウォーロックの身体が軋み逆への字へと曲がりグレイプニルの傷が一箇所から全体

へと広がる

そして最後の三步目、紀斗はウォーロックの逆の脇腹を下から右のアップで殴り飛ばす

空中で激痛による苦悶の声をあげながらウォーロックの身体はへの字に曲がりグレイプニルの鎧は限界寸前にまでヒビ割れている

『チョーイイネ！チリュウテンリュウキヤク サイコー！』

「砕けやがれえええ!!」

美鈴のリングを使った紀斗は虹色のエネルギーを右脚に纏い全力の飛び蹴りを空中で身動きの取れないウォーロックに放ち、ウォーロックははせめて少しでも受けるダメージを下げようと腕をクロスさせその中心に紀斗の地龍天龍脚が決まる

「がっはあ!?!」

ウォーロックは蹴り飛ばされそのまま天井に激突しめり込む、そしてグレイプニル全体に広がっていたヒビは限界まで達しバキーンという音と共にウォーロックの纏っていたグレイプニルはバラバラに砕けウォーロックはグレイプニルスタイルから元の状態に戻りそれと同時に紀斗が使用した指輪達も砂になり床に落ちる

「やっと目障りだった鎖が壊れたな、暗道」

「ぐっ、よくも私のグレイプニルを…許さんぞ海堂お!!」

「元からてめえに許される気もねえし許す気もねえよ！」

ウォーロックは床に降りるとグレイプニルを壊され完全にキレたせいで魔力がオーラとなって殺意と共に漏れている、ウォーロックは異様な雰囲気を放つ全体が黒い狼が彫られた指輪を出すとかざし体制を低く構える

『カモオン！ラグナロクストライク！ゴートウーヘル!!!』

「私の最強の魔法であの世へ送ってやろう！」

それに対し紀斗は透き通るような水晶で出来たドラゴンの彫られた指輪を出しかざすと同じように体制を低くする

「その言葉、そっくりそのままお返しするぜ！」

『チョーイイネ！インフィニティーファイナルキックストライク！サイコオオオオオオオ!!!』

紀斗とウォーロックは同時に飛び上がり紀斗は光り輝く魔法陣をウォーロックは黒い光を放つ魔法陣が両者共に十五ずつ現れそれを脚に纏い2人のキックはぶつかり合った

「オオオオオオオオオオオ!!!」

「ハアアアアアアアア!!!」

2人の技の威力は互角で両者共に勢いは衰えず空中で拮抗している、しかしさつき紀

斗が使ったウィザードリングだった砂が突然光出し浮かび上がるとそれらは一つになりウィザードドラゴンの姿となる

砂のウィザードドラゴンは紀斗の脚に纏われるとその姿を変え光り輝くドラゴスカルになり紀斗のインフイニティーファイナルキックストライクの威力が増していく

「ば、馬鹿な!?!私が押されている!?!私の最強の魔術が破られるというのか!?!」

「俺が生みだしたリング達は俺達の希望そのもの!?!皆の希望が!?!俺の力になる!?!」

拮抗は次第に崩れウォーロックのラグナロクストライクが押されていく

「これが俺の!?!俺達の!?!希望の力だああああ!!」

「この私がこんな、ところでええええ!?!」

ラグナロクストライクは完全に破られウォーロックの身体にインフイニティーファイナルキックストライクが決まる、

ウォーロックは壁を突き破り外に吹き飛ばされ爆発した

それをウォーロックを吹き飛ばした穴から紀斗は確認して背を向け変身を解除し仲間達の元へ向かう

「帰ろう、俺達の世界に…」

第四十六幕 勝利の宴

財団X Z支部との戦いが終わり俺達は幻想郷に帰ってきた

ウオーロツクを倒した後俺は下の階で怪人軍団を殲滅させた皆と合流し紫さんのスキマで外に出てビルをスキマから出したゲンライオーの遠距離系メモリによるフルバーストで跡形も無く吹き飛ばし地下への入り口も埋めた

それからスキマで博麗神社に帰ってきて今に至る、朝にこっちを出たが今ではもう夕方だ

「それじゃ、本当なら今から宴の準備……と言いたるところだけどほぼ全員ダメージや疲労がひどいから宴自体は明日の夕方からにするわよ」

霊夢が代表で宴の予定を言うと天音が手を上げ質問する

「先生質問でーす。僕ちゃん達助っ人組は宴参加したいけど明日までどうしてりやいのー？」

「先生はそのワーハクタクよ、あんた達助っ人組はレミリアが紅魔館の余ってる部屋を借してくれるそうだからそこに泊まってちょうだい」

「ついでに元の世界へ戻った時、こっちの世界へ来た時の数分後に送ってあげるわ」

霊夢と紫さんがそう言うのと助っ人に来てくれたメンバーは納得したようで手を上げる者はいなくなる

「他に質問とかがある奴はいないわね、なら今日は解散！明日の宴を楽しみにしてなさいー。」

霊夢は周りを見渡しもう質問する者がいないのを確認するとパン！と勢いよく手を合わせ解散を告げた

「じゃあ幻憶変の私は守屋神社に泊まりませんか？色々まだ話したいこともありますし」

「いいんですか？ではお言葉に甘えて」

『「晩厄介になるぞ、こっちの早苗」』

「仮面幻想郷の私！一度あんたとは話がしたいと思つてなんだ！」

「つーわけで今日はうちに泊まってうちの発明への意見を聞かせてくれないか？」

「ふふふ、最初に言っておくけど私の評価基準は高いよ？」

「望むところだ（さ）！」

どうやら幻憶変の早苗は守屋神社へ仮面幻想郷のにとりはにとりと甲の家に泊まるみたいだ

「じゃあ紅魔館へ行く人達は小生が送りますヨ」

『DIMENSION MAXIMUM DRIVE』

狂治はデイメンションメモリを使い紅魔館のメンバーと男性陣だけになった助っ人メンバーを連れワープし他の面々も各々の家へ帰っていく

「私達も帰りましょうか」

「そうだね、紀斗がさつきからずっとお師匠様に会いたいわって顔に出てるし行くとしようか」

「俺そんなに顔に出てるか？」

「ものすごく出てます（るよ）」

参ったな、帰ってきてからずっと永琳のこと考えてたからか？まあ、とにかくこれでゆっくり永琳とイチャつけるか早く帰ろう、そういえば人里で頼んだあれはもう完成しただろうか

『テレポート ナウ』

俺はそんなことを考えながら白い魔法使いドライバーを出し腰に装着させテレポートワイザードリングを使い鈴仙、てると共に永遠亭の前までワープする

永遠亭前

「ただいま戻りました！」

鈴仙とてゐは永遠亭の前に着いた瞬間扉を勢いよく開け元氣良く帰宅の言葉を言う
その言葉に反応し周りの竹林から大量の兎達が顔を出し永遠亭の奥からドタドタと
いう音と共に永琳と輝夜が走ってくる

輝夜は鈴仙の身体にどこか怪我はないか慌てながら調べてゐは部下である兎達に一
斉に飛びつかれ埋れてしまい白いモコモコの何かとかがしている

「あはははは！くすぐつたいですよ姫様！」

「いいから黙って調べられなさい、部下を心配するのも上司の勤めなんだから」
「あー！お前ら暑いから離れろー！」

『うさー！』

俺はそんな光景を見て少し頬を緩ませると永琳と目が合い永琳は笑顔になる

「お帰りなさい、紀斗」

「ただいま、永琳」

ああ、本当にここを護れてよかった

俺達はその後永琳と輝夜が作っておいてくれた料理を食べ今回の戦いについて話し
俺が死にかけたこともばらされてしまい永琳に説教されながら治療を受けることに

なった

そして眠る時はたまには皆一緒に寝ようという意見が出ていない輝夜達と一緒に寝るらしいが気を使われたのかいつも通り俺と永琳は同じ布団で寝ることになり布団に入る

布団の中で抱きしめた永琳の体温はなんだか昨日よりも更に暖かく感じた気がした

翌日 PM 16:00

料理も用意した、荷物も持った、人里で頼んでおいたあれも無事完成していた、準備OKだな

「それじゃ皆行くぞ」

『レポート プリーズ』

今回は前回と違ってうちから持っていく料理も大量にあるため形を崩さない為にテレポートを使い永遠亭メンバーと荷物と共に移動する

博麗神社に着くとまだ人はほとんどいないがちらほら萃香や妖夢達宴の準備を手伝っている者もいる

「俺は準備を手伝ってくるから皆は場所取りとかを頼む」

「わかりました、場所は取ったらメールで教えますね」

俺は差し入れとして持ってきた分の料理を持つとその場を後にし博麗神社の台所へと向かう

「よお霊夢、手伝いに来たぜ」

「あ、紀斗ちようどよかったわ。宴用の料理妖怪の山や色んな所から食材はもらえたけど料理人が足りないのよ」

「OK、任された。じゃ、人手を更に増やすかな」

『デュープ ナウ』

紀斗は4人の分身を出すとそれぞれ動き始め宴の準備をし始める

そこから1時間、準備もあらかた終え日も落ちはじめてくると外の方も騒がしくなってきた

「もうほとんど集まったわね！そろそろ宴を始めるわよ！」

霊夢は賽銭箱の前に立ち手を鳴らすと皆の注目を集める

「それじゃ今回の宴の乾杯の音頭は今回の異変の1番のMVPである紀斗にやってもらおうわ」

「ブッ!?!」

俺はいきなり任された役に驚き飲んでいたお茶を吹いてしまう、そういう不意打ちは知らないっていうのに…

「あんまりこういうことは得意じゃないんだがなあ…」

指名されてしまったものはしょうがない、俺は霊夢の立っている賽銭箱の前まで酒の入った杯を持ち歩いてくと皆に注目されるなか声をあげる

「今回の半年以上かかった異変がようやく解決した！あの馬鹿共から幻想郷を守れたことを祝して、盛大に騒ぐぞー!!かんぱーい!!」

『かんぱーい!!』

俺は杯を持ち上げて叫ぶと皆同じように杯やコップを持ち上げ乾杯する
さあ、宴を楽しもう

同時刻 とある樹海

「ハア、ハア、おのれ…海堂 紀斗…」

紀斗に吹き飛ばされた暗道はこのどこかもわからない樹海で目を覚まし恨み言を呟きながらボロボロの身体を引きずって辺りを彷徨っていた

「ようやく見つけましたよ。と私は呼びかけます」

いきなり暗道は後ろから呼び止められ向くとそこには髪をツインテールにし瞳が蒼と金になっている仮面幻想郷の霊夢の妹、博麗 夢月、の裏人格が表に出ている博麗 裏月が立っていた

「！ 貴様…なるほど並行世界の博麗の巫女の妹か、いやその口調からしてその裏人格だな？」

「おや、初見で私か表かわかるとは一応観察力はあるようですね。と私は意外そうに返します」

「それで、私を始末しに来たのか？ わざわざこんなところかわからないところまで来るとはご苦労なことだな」

「ええ、なかなか上質な魔力を持っていると聞きましたから狩りに来ました。と私は舌なめずりをします」

『『シャバドウビ タッチ ヘンシーン シャバドウビ タッチ ヘンシーン』』

2人はドライバーを出現させ自分達の変身リングを取り出す

「グレイプニルが無いとはいえみすみす食われる気はない。変身」

「なら少しは私を楽しませてください、変身。と私は不敵に微笑みながら指輪をかざします」

『モルフ カモン』

『デス プリイズ』『シィ！シィ〜！シシ〜！』

暗道は仮面ライダーウオーロックへと裏月はハンドオーサーが付いている死神の鎌のようなフェンリルサイズを携え紫のローブのようなスーツに渦を描いた紫の宝石を

身につけ十字架のような形の紫の宝石に中心が瞳のように赤く染まった仮面の裏ウイザード デスタイルへと変身した

「あなたと同じフェンリルの名を持つこのフェンリルサイズであなたの命をいただきます。と私は宣言します」

「言つてくれる、小娘が」

『サンド カモン』『マグマ カモン』

ウオーロックは自分の後方に巨大なマグマの拳と大量の砂の拳を出現させ一斉に裏ウイザードへと殴りかからせる

「甘いですね、大福に蜂蜜と練乳と砂糖をかけるよりも甘いです。と私はフェンリルサイズで迎撃します」

裏ウイザードがフェンリルサイズを振り回すと砂とマグマの拳にフェンリルサイズの刃が触れた瞬間マグマと砂の拳はかき消えた

「くっ！やはり魔術でも殺されるか、厄介な奴め！」

『ワイルド カモン』

ウオーロックは自身の姿を獣に近くさせると猛スピードで近づきラッシュを仕掛けるが紀斗との戦闘で受けたダメージが大きく昨日のようなスピードやパワーが出せないせいで裏ウイザードにも簡単にさばかれてしまう

「そんなボロボロの状態で肉弾戦ですか、逃げた方が懸命だと思いますがね。まあ逃がすつもりはありませんが。と私はラツシユをさばきながらため息をはきます」

「ならこれならどうだ！」

『ハウリング カモン』『カース カモン』

「アオオオオオン!!」

ウオーロックはラツシユをやめ一旦後ろに下がると裏ウイザードに向かって咆哮しさらに呪術の文字が裏ウイザードのウイザードライバーへと迫る

「くっ！邪魔です！と私は変な文字を切り裂きます」

「チツ、反応速度も速いか。もう少し遅ければベルトごと封じられたんだが目論見が甘かったか」

裏ウイザードは咆哮で少し後ろに飛ばされながらもフェンリルサイズで呪術をかき消しウオーロックはそれを苦々しく見ながら次の戦略を考える

（魔力ももうすぐ底をつく…。遠、中距離の魔法はおそらく全てかき消される、かといって肉体強化系は今はこのワイルドとハウリング、そして私の最強の魔術であるラグナロクストライクのみ。これはほぼ詰みだな、グレイプニルさえあればまだなんとかしのげたかもしれないが無いものねだりをしてもしようがない。これにかけろしかないか）

「仕方ない、あまりギャンブルは好きじゃあないがこの一発に賭けてみるとしよう」

『カモオン！ラグナロクストライク！　ゴートウーヘル!!』

「面白そうですね、なら私ものつてあげますよ。と私はハンドオーサーにタッチします」
『ハーイタッチ！ダークゼロストライク!』

ウォーロックはラグナロクストライクの蹴りを放ち裏ウィザードは黒い波動を纏ったフェンリルサイズを巨大化させ横振りの一撃を放ちラグナロクストライクとぶつかり合う

拮抗は一瞬だった、なけなしの魔力で放った一撃がほぼ万全な状態の裏ウィザードの一撃に敵うはずも無くウォーロックは一瞬で斬り裂かれ黒い炎に包まれた

「あなたの負けです、暗道　戒地、いえフェンリルファントム。と私は勝ちほこります」
「かつあつ…!?や、はり、駄目だった…か…」

暗道は黒い炎に焼かれそこから裏ウィザードのフェンリルサイズに吸収されていく
「あつけないものだ…しよ、せん…私もいつ…たいの、ファン、トムに…すぎなかつた…と…いう、こと…か…」

そう言い残しウォーロックは完全に燃え尽きフェンリルサイズに吸収された

「むう、あんまり絶望してくれませんでしたね。味は甘かったりしょっぱかったり熱かったりピリツとしたりと珍味ですが少々物足りないです。と私は味の批評をします」
「まあとにかくご馳走様でした、とりあえずそろそろ帰るとしましょう。と私はこの場

を去ります」

『スキマ プリーズ』

裏月は変身を解くとスキマを開き元の世界に帰りスキマが閉じると同時に二つの人影が近くの木の影から姿を現す

「あーあ、ボスやられちゃったよ。生きてたらまだ利用できそうだったのにな」

「せつかくここまでサーチメモリで見つけてゾーンメモリで追いかけてきたというのに無駄になってしまいましたね。これからどうします？」

「んー、今まで集めたデータは全部持つてるからそこらへんの支部に売込みに行こうか。成果があげられてない支部なら一気に牛耳れそうでいいんだけどなあ」

「ならそういう支部を捜すとしましよう。私達個人の目的のためにも」

「そうだね、じゃあとりあえず町にでも行こうか」

『ZONE MAXIMUM DRIVE』

2人はそのまま姿を消しその場には戦闘の後だけが残された

場所は戻り博麗神社

「天音え！よくも俺の最後のアイスをおおお!!」

「ちよっ！ごめんって！てゆうかアイス一本でキレ過ぎい！」

「あーあー、やっちゃまったな。カイトのアイスを盗むなんて自殺志願者もいいとこだぜ」
「しかもあれ最後の一本だったんだろ？とりあえず遺影を用意しとくか」

『戦場で最も死にやすい奴は力量の差がわからない奴だ』
「為になる言葉ありがとうございます大道さん」

カイト、天音、幻憶変の早苗と克己さん、翔太郎、遊星の方ではどうやら天音がカイトの最後のアイス盗み食いしたらしい、まあカイトにとってアイスは死活問題だからボコボコにされても仕方ないか

「ちよっ！紀斗君見てないで助けて!？」

「自業自得だ、自力で抜け出せ」

「そんな殺生nギヤアアアア!？」

※どんなことをやられたのかはご想像にお任せします

／ピチューン／

「あ、ピチューった」

「とりあえずアイスをおいていくとするか、あの状態じゃカイトがアイス探してどっか行きそうだし」

俺はアंकが劇中で食べていたアイスを全種類出すと他の場所も見てみることにした

「だからそこは逆に考えるんだ、超特化型でもいいさって」

「な、なるほど！確かにそれならこいつの無駄なエネルギーも有効活用できる！」

「私達はいつもバランスタイプを作っていたから盲点だったね。まさに目から鱗だよ」

「なかなか面白いデスね、ならこれのここにこれを加えてみたらどうデス？」

「ほう、そこをそうするならここをこう組換えれば更に面白いことになるんじゃないか？」

ダブルにとりと甲、狂治、長谷部は来てからずつとああやって開発の話ばかりしているな、ダブルにとりと甲はうつつすらと目元に隈が見えるがまさか昨日からずつとやっているのか？

「だから誰彼構わず能力の発言した奴を招かず少し観察してから見所のある奴を招き入れた方がいいんじゃないか？」

「かといつてそんなすぐにはわかるものでもないでしょう、人一人がどんな人間だなんて1日や2日でわからないわよ」

「そこは簡易的な試験を設けるのが得策だろう。善人かどうかそこでわかるようなものをな」

「確かにそういう物はあつた方が悪人が入ってくる確率はかなり下がりますね」

「そういう物なら少しは思いつくが試すにしてもどうやって仕掛けるんだ？」

「それならスキマなどを使ってこうすれば」

「なるほどね、それなら楽にやれそうね」

帝は紫さんや聖、豊聡耳神子達と色々能力の発現した人間の判別などの方法などを話している

「うぷっ…もう無理…」

「はっはっは！ちよっとはいい線いったけど鬼に飲み比べで勝とうだなんて百年早いよ！」

「ほらほら！もつと飲める奴はいないのかい！」

「す、萃香様、勇儀様、勘弁してくださいよ。もう私達も飲めませんで」

「ほんと鬼ってなんであんな飲めるのよ…妬ましいわ、うぷ」

ソロは妖怪の山のメンバーとパルスィと共に勇儀、萃香の鬼コンビに酔いつぶされ吐く寸前にまでなっている

巻きこまれる前に逃げよ…

そんな風に辺りをぶらぶらしたり談笑したりしていると気づけばもう21時を過ぎ

ていた、そろそろいいかな…

俺はスタッグフォンを取り出すと永琳のスタッグフォンに電話をかける

『もしもし、紀斗、どうしたの?』

「永琳、悪いが今から博麗神社の裏に来てくれないか?」

『? わかったわ、でもちよつと待つてて今姫様が妹紅と飲み比べで吐くまで飲んじやつて介抱してるのよ』

「ああ、それを解決してからで構わないさ。待つてるよ」

俺はそこで電話を切りスタッグフォンをしまうと博麗神社の裏へと向かおうとする
と後ろから呼び止められた

「紀斗さん、ちよつといいですか?」

「早苗? まあ少しなら構わないぞ」

振り向くと早苗は何やら真剣な顔でこちらを見ており俺が身体もそちらに向けると
早苗は意を決した様に息を吐いて俺の顔を見つめる

「紀斗さん、私は…あなたのことが好きです!」

瞬間、時が止まった感じがした

俺は目を閉じ考える

早苗の気持ちは前々から気づいていた、いつかは決着をつけなきゃいけないのも…、

まさかこのタイミングでくるとは思っていなかったが、ある意味ではいいタイミングか
…

「早苗…」

「紀斗さんが永琳さんを愛してるのはわかってます。でも2人同時でもいいから…私も…愛して、くれませんか？」

「っ……………」

早苗の言葉に俺の精神が揺らぎかける

確かに2人共一緒に愛せば一時は幸せかもしれない、だが俺がいつまでも2人を同じくらい愛せるビジョンがわいてこない…

それはつまり俺が愛を注ぐ相手が偏ってしまうということだ。そうなってしまうては必ず幸せは崩れ去り3人共不幸になるだろう

それに、もしここで頷いてしまえば永琳を裏切るように俺は俺自身を一生許せなくなる
だから…

「悪い、早苗。俺はお前の気持ちには応えてやれない」

「っ……………」

「これは俺のエゴだ」

俺の我儘で早苗を苦しめるようなものだというのもわかってる

だがこれだけは譲るわけにはいかないんだ…

「俺は複数の女性を平等に愛せるような器用さもないしそれをやったら生涯をかけて愛すと誓った永琳への裏切りになってしまふ。だからすまない、俺はお前を愛することはできない…」

俺は頭を下げ早苗の反応を待つ

「やつぱり、そうですね…。紀斗さんは、そういうのが一番嫌いですもんね。お時間取らせちゃつてすみませんでした！それじゃ！」

そう言つて走り去つていった早苗の目には涙が見えた

「…ごめんな、早苗。恨むなら俺だけを恨んでくれ」

今の俺には早苗を追いかけていく資格なんてない…

早苗 side

私は紀斗さんに振られて誰にも今の私の姿を見られないように林の奥まで全速力で走つた

息が荒くなり涙で視界が歪む、そしてもう充分遠のいたかと思ひ立ち止まる
紀斗さん、幻想郷に来て私が初めて恋をした人…

初めは元々私が特撮なども好きだったことによる憧れだった

だけどあの人が幻想郷を護る為に戦っている姿や普段の大人っぽいけど明るく楽しそうな姿を見ているうちに憧れは恋情へと変わっていった

永琳さんと付き合っているというのは文さんの新聞で知り最初は驚いたが幻想郷なら常識にとらわれないからもしかしたら私も愛してもらえるかもしれないと思ったが現実は厳しかった。あの人はどこまでも一途で浮気とかそういうことが一番嫌いで私の思惑は幻想のように儚く砕け散った

「早苗」

「！」

後ろから声をかけられビクツと驚き振り返るとそこには神奈子様と諏訪子様が立っていた

「神奈子様…諏訪子様…」

「その様子じゃ、駄目だったみたいだね…」

「はい…やっぱり恋って難しいですね」

「まあ、そのうちまたいい出会いがあるさ。だから今は、我慢しないでいいんだよ」

「う…うわあああああん！わあああああん!!」

私は2人に思いきり抱きつきこの悲しみを吹き飛ばすように泣いた

「お前はまだ若いんだ、こういう苦い経験もして強くなりな」

「大丈夫、いつでも私達がついてるから」

「はい！うう、はい！ひっく」

乗り越えよう、この辛さも切なさもそうすればきつと強くなれる気がする
ただ今だけは私の大事な2人に甘えさせてもらおう

紀斗 side

俺は早苗の走り去っていつてしまった方向を罪悪感に押し潰されそうになりながら
見つめていたがそろそろ永琳も来てしまうかもしれないため博麗神社の裏へ急いだ

俺が博麗神社の裏に着くと数十秒くらいで反対側から永琳が来た

「ごめんなさい紀斗、待たせちゃったかしら？」

「いや、俺も来たところだから問題ない」

「ところでなんで私をここに呼んだの？」

「永琳に、渡したい物があるんだ…」

「渡したい物？」

俺は懐から小さな箱を取り出し開ける

中にはダイヤモンドの指輪があり数週間前に人里の宝石を取り扱っている店に頼ん

でおいた物だ

「永琳、俺と…結婚してくれ！」

俺は指輪を箱ごと永琳に差し出し精一杯のプロポーズをする

俺は永琳の反応を待つと永琳は指輪を手に取り少し瞳に涙を滲ませながら満面の笑みを見せてくれた

「不束者だけれど、よろしく、お願いします」

「っーーーー!!」

俺はその返事が嬉しすぎて永琳に抱きつき見つめ合うと唇を合わせた

やばい、今とんでもなく幸せだ…

第四十七幕 結婚式

宴の日から数日が経ち結婚式 当日

俺が永琳に告白した翌日には文々。新聞で俺と永琳が結婚するという記事がデカデカと書かれ幻想郷中に知れ渡つてしまい招待状を送る手間は省けたがその記事には俺の告白の言葉まで書いてあったので罰ゲームとして久しぶりの笑いのツボを押してやった

知れ渡つた後は大変だった、人里の人達からは祝いの言葉をかけられると同時に場所やどんな形式でやるのかを聞かれ終いにはもう永琳とはやったのか?と聞く奴まで現れる始末でその質問をしてきた馬鹿には文と同じ末路を味合わせてやった

その後紫さんの仕業だろうがいきなり依姫と豊姫が永遠亭に乗りこんできて自分達に一言も無しに結婚とはどういうことだ、と説教された。永琳が宥めてくれたおかげでなんとか怒りを抑えてはくれたがその代わり永琳と仕方ないから俺のも衣装などは自分達で用意すると言いこちらとしてもそれは助かるためお願いした

そして今はその用意された服を博麗神社でちよくちよく一緒に飲んでる菅二郎のおっさんに着させてもらっている、もちろん永琳とは別の部屋だ

「中々様になるじゃねえか、紀斗。馬子にも衣装つてやつだな！」

「馬子ねえ、まあバイクにならよく乗ってるけど」

「なんかこういう風に見てると息子でも見てるような気分だな」

「とんだ世話焼きな父親持つちまったもんだな俺も」

「はははははっ！言ってくれるじゃねえかこの野郎！」

俺の衣装は和風の結婚式ではポピュラーな黒紋付袴だが流石は月の代物、手触りや色などが普通の物とは圧倒的に違う一級品を超えた出来の代物だ、永琳の衣装はまだ見れていないがあちらも相当な物なんだろう。…それを着た永琳があまりに綺麗すぎて鼻血を出さないか心配だ

外は人里で親しくなった人達や妖怪達、助っ人組に兎の大群で博麗神社が今までにない賑わいを見せていた、人里の人達も仮面ライダーである俺や博麗の巫女である霊夢、少なくとも人間の味方をしてくれる魔理沙、妖夢、聖、神子達がいるから妖怪がいても気にせず来てくれたのだろう。まあ妖怪でもミスティアを筆頭に結婚式なのに何故か屋台を出してる奴までいるし今のところ問題はないだろう、結婚式を祭りか何かだと勘違いしてないか甚だ不安だが…

……早苗は、来てないみたいだな。当然か、わざわざ自分を振った男の結婚式になん

て来るわけないよな…

「紀斗さん、そろそろ時間になりますからこちらに来てください」

「ああ、わかった」

俺は豊姫に呼ばれ部屋を出ると一緒に永琳の控え室の前まで行きノックする

「永琳、入るぞ」

「ええ、いいわよ」

俺は許可をとり襖を開けるとそこには女神がいた…

「」

「紀斗? どうしたの?」

「ハッ! 悪い、永琳が綺麗すぎて見惚れてた」

「ふふっ、ありがと。そう言ってもらえると化粧してもらった甲斐があるわ」

永琳は純白の白無垢姿でいつもは三つ編みにしている髪はほつき顔には元々の美貌を引き立たせるように薄く化粧がしてある、その姿はまさに俺にとっては女神と同じで本当に彼女が自分と結婚してくれるのだと思うと嬉しくて涙が出そうだ

「それじゃあ行こうか」

「ええ、そうね」

俺達は並んで立つと豊姫が目の前に博麗神社の鳥居の目の前に繋げ俺と永琳は同時

にそこへ入る

『さあ！新郎新婦の登場です！拍手でお迎えくださいーい！』

文の司会の声と共に俺と永琳は博麗神社の鳥居の前に出ると神社の目の前まで続くレッドカーペットの周りで皆が拍手や激励で迎えてくれた

「おめでとー！」「幸せになれよー！」「そんな美人な嫁さんもらえて羨ましいぞー！」「末長く爆発しやがれ！」

「いいなー、あんないい人と一緒になれて」「憧れちゃうわよねー」

「お師匠様、すごい綺麗で嬉しそうですね」「そうね、やつと私達以外にも心の拠り所を見つけたんだものね。主として喜ばしいわ」「これからは桃色空間の発生する時間が更に増えそうだね」

俺と永琳はそんな激励を背にレッドカーペットを歩いていき神父役である霊夢の目の前で止まる

「誓いの言葉…海堂 紀斗、貴方はここにいて八意 永琳を病める時も、健やかなる時も、富める時も、貧しき時も妻として愛し、敬い、慈しむことを誓いますか？」

「誓います」

「八意 永琳、貴方はここにいて海堂 紀斗を病める時も、健やかなる時も、富める時も、貧しき時も夫として愛し、敬い、慈しむことを誓いますか？」

「誓います」

「それでは指輪の交換を」

霊夢に言われ俺は永琳の左手に指輪をはめ永琳は俺の左手に指輪をはめた

「では誓いのキスを」

俺は永琳へと身体を向け俺と永琳は向かい合うと永琳と見つめ合い言葉を交わす

「永琳、愛してるぞ」

「私もよ、紀斗」

俺と永琳は言葉を交わし終わると同時に顔を近づけ誓いの口づけをし先程よりも盛大な拍手が湧き上がった

そしてそのまま流れは宴会へと移り来てくれた皆の手元に酒の入った盃がまわされる

「皆、俺と永琳の結婚式に来てくれて本当にありがとう！乾杯！」

『乾杯！』

俺の言葉と共に皆一斉に盃を上げ中の酒を飲みほす

「はく、やっぱり慣れないことするもんじゃないわね。いつもより畏まってやったせいか肩がこつちやったわよ」

「靈夢があんな礼儀正しくやったのなんていつぶりだろうな、ほんと珍しいもんが見れたぜ」

「うっさいわね、まずうちの神社に人が来なさすぎるのが悪いのよ。だからもつと人を呼ぶためにあんたもお賽銭よこしなさい」

「相変わらず横暴すぎる理論だぜ……」

ようやく肩の力を抜くことができた靈夢を魔理沙はからかうがいつも通りの賽銭要求に苦笑いする

「1番天音！歌いまーす！」

「演奏は！」

「私達プリズムリバー三姉妹に！」

「任せてよ！」

「その次私ねー！」

「3番目は私です！」

「おいおい、歌うのが本職のボーカロイドの俺を忘れるなよ」

天音はどこからかマイクを持ってきて歌い始めそれに便乗するようにミスティアと響子、カイトもマイクの順番待ちをしプリズムリバー三姉妹がバックバンドを務める

「さあさあ、主役なんだから紀斗ももつと飲んで飲んで！」

「まだまだいけるはずだろう？」

「うう、お前ら…少しは手加減してくれ…」

そして主役である俺は勇儀と萃香の鬼コンビに早くも酔いつぶされそうになっていた

「お前らなあ、ヒック、普通の人間の俺が、ヒック、鬼の酒なんてそう何杯も飲めるわけヒック、ないらろお…」

「はっはっは！もう呂律も回らなくなってきたなんて、まだまだだねえ」

「紀斗、いいから少し休んでなさい。ほらあなた達はこれ以上紀斗に飲ませないの」

「わりい…えーりん」

酔って顔を真っ赤にした俺は水を一杯飲ませてもらうと頭の角隠しを取った永琳に膝枕してもらい酔いを覚まそうとする

「ちえー、なら他に誰かいい飲み相手はいないかね？」

「ならあの帝って奴はどうだい？酒も強そうだし」

「そうだね、それじゃさっそく行くとしようか！」

そう言うのと2人はさっさと帝の方へ走っていき周りにいた他の人達も空気を読んでくれたのか各々別の場所へ行きこの場が俺と永琳の2人つきりになった

「紀斗、大丈夫？いくら今日の主役が私達だからといってすすめられた酒を断るわけに

はいかないといつても限度があるわよ」

「ああ、でもこうやって久しぶりに永琳の膝枕を堪能できるから役得ではあるけどな」
「もう、紀斗ったら」

永琳は頬を薄く赤に染め愛おしそうに俺の顔を見つめながら俺の頭を撫でてくれ、俺は永琳の薄く赤に染まった顔を優しく撫でどちらからともなく口づけを交わす

そのまま数十分くらい過ぎすと俺は永琳に手洗いに行つてくると言い博麗神社の裏の林の目の前まで行くと一番近くの木に背を預け腕を組む

「来てくれるとは思ってなかったぞ、早苗」

「…気づいてたんですね、紀斗さん」

近くの木の陰から早苗の声が聞こえるが俺も振り返らず早苗も木の影から出てこようとはしない

俺達はそのまま顔を合わせないまま会話を続ける

「さつきチラツと林の方にお前の姿が見えたからな。あとは気配を頼りに来ただけだ」
「流石ですね、気配もなるべく消してたんですが」

「気配を消しても自然の中じゃ他の気配の中にぽっかりと穴があいた風になるからな。こういうところで隠れるな」

「気配は消すんじゃなく周りと同化させることだ」

「やっぱり敵いませんね…。少し様子を見てそのまま帰るつもりだったんですけど」

早苗の声には少しの後ろめたさみたいなものが感じられ暗い感じがする

「それで、なんで来てくれたんだ？普通数日前に自分を振った奴の結婚式になんて来ないだろう」

「普通はそうですね…。でも私はまだ少し諦めきれしていない自分の心に決着をつけたかったです。いつまでも恋に溺れて紀斗さんや諏訪子様達に迷惑かけたくなくて、それで今日の幸せそうな2人を見れば踏ん切りがつくと思つて来てみたくです」

「そうか…。で、どうだった？」

出来ればもう恋なんていう酒の酔いが覚めていてくれてればいいが、普通無理だろうな…

「…正直、永琳さんが羨ましくて嫉妬心も少し出ちゃいましたけど紀斗さんの幸せそうな顔を見たらそれも吹き飛んじやいました。私が入る隙間なんてないほどにお2人共ラブラブなんですから」

「悪かったな、見せつけちゃまって。まあでも…お前は強いよ、早苗」

「そんな、紀斗さんの方が私なんかより全然強いじゃないですか。戦いも、心も…」

「いや、俺の心は弱いさ。俺はきつと好きな人に振られたら仲間やダチに励まされたりしてもいつまでもそのことをひきずって立ち直れないだろうな。でも早苗はこうやつ

て前へ進もうとしてる、俺なんかよりずっと強い証拠だ」

「でもあのムネモシユネの鎖にヒビをいれるくらいは精神力を持つてるじゃ」「それは俺自身が護るべき人を傷つけようとしたからだ。俺は護るべき人や仲間がいたからここまでやれた。俺は、1人じゃ何もできない貧弱野郎だよ」

「……」

「こんな俺でもここまでやれたんだ。早苗、お前なら俺なんかよりもっといい人を見つげられるさ」

これは俺の本心だ、幻想郷にいる皆は実力もそうだが精神も強い。それに比べて俺はまだまだ未熟だしな

「なんで……」

「ん?」

「なんでそうやって自分を過小評価するんですか紀斗さんは!それじゃああなたを好きになった私や永琳さんを馬鹿にしてるのと同じですよ!」

「……」

「もつと自分を大きく見てください…。そんな風に言ったら私は紀斗さんが心配で離れられないじゃないですか」

早苗の言葉に俺は自分が誤った考えをしていたのに気づいた、早苗の言うとおりだ

「こんなんじゃ俺も人のことをとやかく言えないな…」

「そうだな、悪い。だがお前の心が強いってのは本当だ、お前が俺に自分を過小評価してほしくないのと同じように俺もお前に自信を持つてほしいんだからな」

「！…っはい！」

「それじゃ、俺はもう行くとする。早苗、ありがとうな」

「こちらこそ…：ありがとうございました、紀斗さん」

俺はそう言い残してその場を離れ永琳の所へと戻る

「あ、紀斗おかえりなさい。遅かったわね」

「ああ、ちよつと向こうで他の奴と話してたら長引いちまつてな」

「おいおい、嫁さんほつぽつて早速浮気か？」

「浮気なんざするかよ、そんなのをするくらいなら舌を噛みちぎるって何回言わせんだ？」

「本当永琳さん一筋ね、そこらへんの男共に紀斗さんの爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだわ」

周りにいた人里の人達や皆と騒ぎに騒ぎ夕方には人里の人達はさすがに帰りそのままお開きになった

その晩 永遠亭

「永琳、頼みたいことがある」

俺と永琳は寝巻き姿になり永琳の寝室で向かい合いながら俺は一種の賭けに出る

「何かしら紀斗？そんなにあらたまつて」

「永琳、俺を…不老不死にしてくれ」

俺は土下座をして永琳にこの願いを言う、その瞬間永琳の表情は先程までの穏やかなものから厳しいものへと変わる

「理由を…聞かせてもらえるかしら？」

その言葉には理由によつてはこの場で殺すという明確な殺意が含まれ一切の甘さも含まれてはいなかった

俺は永琳の目を強く見つめ返し強く言い放つ

「俺は能力を持つていてもただの人間であることには変わりない。だから今の状態なら寿命で死ぬならこの永遠亭で一番先に死ぬのは俺だろう、俺はそれで永琳、お前に悲しんでほしくないし嫁を残して死ぬなんてのは俺自身のプライドが許さない。もし断られたとしても俺はジョーカーやグリードになつても不老不死になるぞ」

「…それで私に永遠を生きる苦しみをあなたに与えろと言うの？」

「俺はお前がいてくれれば永遠だろうと耐えられる」

「だから永琳！俺に、蓬莱の薬をくれ！」

「……………」

俺は頭を勢い良く床につけ返答を待つ

「ハア、何を言っても無駄みたいね。どうします？姫様」

永琳がため息を吐きながらそう言うとう入口の襖が開き輝夜と鈴仙、てゐが出てくる
「別にいいんじゃないかしら、どうせ駄目って言っても他の方法で不老不死になれるみたいだし」

「どうか不老不死になれる方法をいくつも持つてる自体おかしいですけどね……」
「ま、いつかこうなるんじゃないかっていうのは予想してたし問題は無いでしょ」

3人の返答に永琳は呆れたような諦めたような表情になりため息を吐くと俺の方に
向き直る

「わかったわ、紀斗。あなたに蓬莱の薬をあげるわ」

「悪い、ありがとうな、俺の我儘をきいてくれて」

「まったく、こういう時は本当に頑固なんだから。薬を用意するから診察室で待っていて」
「わかった」

俺は立ち上がると永琳の指示通り診察室に移動しついでにとついでにきた輝夜達と永

琳が来るのを待った

「お待たせ、準備できたわ」

数分すると永琳がお盆にコップ一杯の水とカプセルの入った瓶を乗せて出てきた

「これが、蓬萊の薬か…」

「紀斗、思い直すなら今のうちよ」

「ここまできてやめるつもりは無いさ、何錠飲めばいいんだ？」

「3錠よ、それであなたの身体は作り変えられ不老不死となるわ。ただしその際には途轍もない激痛が襲ってくるから覚悟して」

俺は出された3錠のカプセルと水を持ち一気に口に含み水で流しこむ

「うっ!？」

その瞬間俺の身体に激痛が走りまるで内側から自分の身体を食い破られているような感覚を感じ俺は地面に倒れ苦しむ

「ぐっうあ、うあああああああああああ!？」

痛え痛え痛え痛え痛え痛え痛え痛え!?!まるで内臓を内側からシユレッダーにかけられてるみてえに痛え!?!ただ!?!永琳や鈴仙達が見てるなかでいつまでもこんな無様な姿!?!見せるわけにやあいかないよなあ…

「フー!?!フー!?!グウ!?!グッ!?!」

俺は自分の着物の袖を噛み歯を食いしばることで悲鳴を噛み殺し痛みに耐え続ける
鈴仙が心配そうな目で俺を見つめ輝夜とてゐは若干試すような目だ、そして永琳は真
剣な目だがこの痛みに耐えてくれるという信頼の意思がみえる、永琳や輝夜、妹紅も耐
えた痛みだ、永琳の夫である俺が耐えられないんじや話にならねえよなあ!!

その数時間後、夜明けと共に俺の身体は完全に人間をやめた

最終幕 エピローグ

財団Xとの戦いから2年の歳月が過ぎた

この2年で様々なことが起きた：

まず蓬萊人となった俺は身体は特に変わった所は無かったが髪が元の黒髪をベースに所々メツシユのように白くなり白と黒の虎縞模様の髪になった

異変もいくつか起きたが印象的なのはお面の付喪神、秦　こころが引き起こした心綺楼異変と天邪鬼である鬼人　正邪に利用された一寸法師の末裔の少名　針妙丸が引き起こした輝針城異変の2つだが、まあ、この2つの異変を語るのはまた今度にしよう

だが1番驚いたのはパチュリー、アリス、魔理沙、白蓮の四魔女がミラーモンスターを人化させる魔法を作りあげたことだろう

人化したミラーモンスター達は変身者達のところで仕事の手伝いなどをして一緒に住んでいるし普通に人が食べる物も食べられるようになったおかげで俺がエネルギーを与えにいく必要もなくなった

最初のうちは人里の人々に警戒されたりしていた節もあったが今ではもうすっかり受け入れられ問題なく生活している

そしてもつとも喜んだことといえは…

「紀斗ー、そろそろ行く時間よー!」

「ああ、すぐ行く」

「ほら永斗、パパにいつてらっしやいして」

「あうあー」

俺と永琳の間にこの子、永斗が産まれたことだ

「ああ、パパもお仕事行ってくるからなー、永斗ー」

俺は永斗の目線にまで顔を下げ永斗の頭に手をおく

やはりうちの息子はマジ可愛い! 親バカだど? 自覚済みだ! だがしょうがないだろう、うちの息子が可愛すぎるんだから!

「もう1年以上経つのに相変わらずのデレデレっぷりだね、ほんと」

『ほんと親バカ、永斗の将来心配』

「マグナもてるもそんなこと言っていないで荷物積むの手伝ってよ。1人で運ぶには重いんだから」

俺の様子を見て呆れるてるとプラカードで会話をするマグナギガの擬人体である緑髪の高いキレ目のイケメン、マグナ。そして2人を注意する鈴仙、もうこの構図も

うちでは日常である

「ちよつ！ちよつと待つてくださいいよ！俺を置いてかないでほしいっすよ！」

そこに紫髪の髪が上に向かって伸びているツンツン頭の少し痩せ型の青年が慌てて荷物を持つて出てくる

「寝坊するあんたが悪いんだよ、ゼル。置いていかれたくないならもうちよつと早く起きな」

そうてゐに言われる彼はてゐの契約モンスターであるギガゼールの擬人体、ゼルだ。彼は契約者がここに住んでるといふ理由から永遠亭に住んでいるが他のオメガゼールやマガゼール達は人里の長屋を借りてそこに住んでおりその近くに事務所を一軒建てゼルを筆頭に何でも屋をして生計を立てている

「んなこと言つたつてしょうがないじゃないスカ。姫様のゲームに夜明け近くまで付き合わされたんすよ…。おかげで眠いのなんのつて」

「言い訳無用、ほらさっさと行つた行つた」

てゐがゼルをサイドバツシャーのサイドカーに荷物と一緒に乗せると俺もサイドバツシャーに乗りマグナと鈴仙もライドベンダーに鈴仙が後ろに乗る形で乗りヘルメットをかぶる

「さて、それじゃあ行ってくるよ」

「ええ、行ってらっしゃい」

「あー」

「行ってきまーす（ツス）」

『行ってきます』

「いてらー」

俺たちはそのままバイクのエンジンをかけ走りだす

こんな日常がいつまで続くかわからない、またいきなり財団Xが攻めてくるようなことや異変が起きるなんてのは誰にも予測できない

だけど護ってみせよう、この他愛ない日常を

皆の笑顔のために：

東方masquerade 第1部 完！

同時刻 とある場所

真つ暗な部屋の中で一人の奇抜なシルクハットをかぶった男は気が狂ったように狂喜していた

「ふふふふふ、やった！ ついに見つけた！ これで僕の悲願にだいぶ近づいた。後はあれとコンタクトを取ればいいだけ……。楽しみにしてね紀斗君、僕の諦めは悪いんだ」
男はニヤリと口角を歪め笑い続けた、新しい狂宴を開く準備を進めながら

番外幕 その後の日常 〔紅魔館〕

吸血鬼であるレミリアが主の紅魔館、その従者である十六夜 咲夜の朝は早い

AM 5:00に起床しいつものメイド服に着替え身嗜みを一瞬で整える

そして隣の部屋でまだグースカと寝ている茶髪のボサボサ髪にしているイケメン、彼女の相棒であるサイコログことサイを叩き起こすのが彼女の朝の日課となっている

「ほらいつまで寝てるのよ。とつとと起きなさい」

「ふげっ!」

咲夜はノックもせずサイの部屋に入るとサイを蹴り飛ばしサイはベッドから落ちて顔から床にダイブしてしまう

「いつつ…相変わらず荒っぽいなあ、もうちよい優しく起こせねえのかよ」

「ちゃんと決められた時刻通りに起きないあんたが悪いのよ。こんな風に起こされたくないねばちゃんと時刻通りに起きなさい」

「へいへい、わかりましたよ。それじゃあ着替えるから部屋から出ててくれよ」

「もし二度寝したら…わかってるわね?」

「怖え怖え、大丈夫だしねーよ。数十秒で済ませる」

そう言われて咲夜は部屋の外で待っていると40秒ほどで着崩した執事服に着替えたサイが出てくる

「準備できたわね？それじゃさっさと行くわよ」

「へいへい、了解ですよ」

2人は掃除道具を片手に廊下や内装を約2時間ほど掃除すると次は妖精メイド達ばかりんと朝食の支度をしているか確認しに行く、まあ今まで一度もきちんと支度がされていたことは無いので実質咲夜が朝食の準備に取りかかるのと変わらないが

「はあ、わかっではいるけど頭が痛くなるわね。毎日のこの光景は」

案の定支度はまったく出来ておらず妖精メイド達はつまみ食いやおしやべりをしていてその光景に咲夜はもはや1日に必ず一回は吐いてるであろうため息を吐く

「俺以上に学習しないよなあ、この館の妖精達って…」

「これはもう朝の掃除をこの子達にやらせて最初から私が朝食の準備をすればいいのかしらね」

「いや、それはそれで面倒を起こしそうだからやめた方がいいと思うぜ」

俺は面倒ごととは嫌だぜ、とサイは言うど妖精メイド達を注意し場所をあげさせる

「それもそうね。それにドジをして周りを汚してないだけマシだと考えた方がいいわね」

トフェニックスことフェニとゼクター達が微笑ましそうに見ている

「やっぱりこういうのどかな日もいいものですね」

「ああ、昔はずつと殺るか殺られるかで休める時などほぼ無かったからな」

「そうですね、しかも私なんて主をコロコロ変えられてその全員が操り人形でしたし」
「俺も昔の主は自分の大切な奴から殺していったヤンデレだったからな、いつ俺まで殺られるか気が気じゃなかったぜ……。まあ、戦いとは関係ないところでコロつと逝っちゃまったがよ」

「お互い今はちゃんとした主でよかったですね」

「ああ、本当にな」

2人は再びチルノ達に目を向ける、純真な彼女達は今まで聞ばかり見ていた2人には眩しく見えていた

PM 5:00、レミリアやフランが活動し始める時刻である

レミリアの部屋では黒い長髪の切れ長の目をした女性が咲夜や妖精メイド達とは違う黒いメイド服姿でレミリアの身の回りの世話をしていた

「おはようございます、レミリア様。こちらが本日のお召し物です」

「おはよう、ウイン。今日は予定は特に無い筈よね？」

彼女はレミリアの相棒であるダークウイングことウイン、今はレミリアのお付きのみ

を仕事にしているがこの役職を手に入れる為に咲夜ととんでもないキャット、いやタイガーファイトをしていたのだ。ちなみにその時咲夜が血涙を流していたのは言うまでもない

「ええ、本日のご予定は特にはありません。あと2時間程で夕食が出来ますのでそれまでどうなさいますか？」

「そうね、パチエのところでも読もうかしら。ところで最近妙な視線を感じる機会が増えた気がするのだけれど何か知らない？」

「…いえ特には」

（あの変態女まだやってたのね、これはまたHANASIAIが必要なようね…）

ウインは目を細め咲夜への怒りを密かに燃え上がらせるがすぐに沈下させレミリアへ返答する

（レミリア様に心配をかけさせない為にもあの変態女ともレミリア様の前では争わないと決めただから！ここでボ口を出したら絶対あの女ネチネチ言ってくるし。冷静、冷静になるのよ。以前みたいに主を亡くすのはもうたくさん、そのためにもレミリア様へ迷惑をかけたくない。昔の私はあの主に何度も迷惑をかけていたんだから…）

「どうしたのウイン？急に黙りこんで」

「あ、いえすみません。少し考え事を…」

考えにふけっていたウインをレミリアは不思議そうに声をかけウインは慌てて返事を返す

「そう、悩みがあるならいつでも言ってみてね。あなたもこの紅魔館の一員なんだから」
「はい、レミリア様」

メイドは1人思いを潜める、自分の主の幸せのため

PM 8:00、夕食を食べ終え各々が自由に過ごす時間

フランは地下にある自分の部屋に繋がる遊び場という名の闘技場で自分のパートナーである3人と共にいた

ここは元はフランが閉じ込められていた時に拉致してきた人間を痛ぶっていた場所だが今では毎日のようにフランとパートナーである3人が模擬戦をしており、たまに他の紅魔館メンバーも混ざって一緒に訓練をするのだ

「それじゃあ今日は誰からやる?」

「俺は昨日最初だった」

フランの言葉に最初に答えたのは灰色のショートヘアの人懐っこそうな顔の青年、メタルグラスことグラス

「一昨日は私だったから今日はベノの番ね」

次に答えたのはピンクに近い赤色の髪をポニーテールにしている妖艶な雰囲気醸

し出す女性、エビルダイバーこと

エバー

「だな。お嬢、今日も手加減はしませんぜ？」

最後に答えたのは紫色のオールバックにした頬に十字の傷がある強面の男、ベノスネーカーことベノ

「もちろん！むしろ手加減なんてしたら楽しくないから怒るよ？」

「ふつ、さすがお嬢。それじゃあ始めましょうか」

「うん！変身！」

「来いや！ベノサーベル！」

フランはベノの言葉に頷くと王蛇に変身しベノは自分の尾を模した剣であるベノサーベルを出現させる

ちなみにこここのミラーモンスター達は擬人体ならソードベントやガードベントなど装備系の物なら出現させて装備できるのである

『SWORD VENT』

「いくよ、ベノ」

「負けませんぜ、お嬢」

フランもベノサーベルを召喚し2人のベノサーベルが激突する

これが今の紅魔館とチルノ達の日常である、さて、次はどこを見ようか

番外幕その2 その後の日常 ～人里～

白玉楼

ここではないいつも通り妖夢が台所で幽々子の為に大量の料理を作っている中、隣で甲斐しく出来た料理を幽々子の元へ運んでいるのはレッダーにそっくりだが目や肌以外が全て黒くレッダーと違って目は赤いドラグブラッカー、ことドラブだ

彼のここでの立ち場は妖夢の助手のようなもので基本は妖夢の仕事の補佐をしている

「ドラブ！次お願いします！」

「今日はこれあと何人前まで続きますかね？昨日は30人前程で満足してくれましたが……」

口調の碎けているレッダーとは真逆の敬語口調で話すドラブ、彼としてはこの昼食の後の訓練が楽しみで妙にソワソワしてるが

「おそらく今日の様子からして最低でも後10人前は食べるでしょう！きばっていきますよ！」

「了解しました、我が主」

同時刻 人里 寺子屋

キーンコーンコーンコーン

「ん、時間か。この時間の授業はここまで。さ、皆昼食にしよう」

『はい！』

チャイムが鳴り慧音が授業の終わりと共に昼食の時間を告げると子供達は元気よく返事し自分達の荷物から弁当を取り出す

「ボルも休憩していいぞ、一緒に昼にしよう」

「ん、わかった」

慧音は外で寺子屋の周りを掃除していたオレンジに近い色の金髪と緑色の目の青年、ボルキャンサーことボルにも呼びかけ間延びした返事をしたボルは掃除道具を一旦片付け寺子屋に入る

「わー！先生のお弁当今日は蟹のマークだあ！」

「そうだな、今日も本当によく作られているな、ボルが作ってくれた弁当は」

慧音が出した弁当はご飯の上に薄い卵焼きや海苔でシザースのマークが作られていておかずも旬の野菜やハンバーグなどで彩りも鮮やかだ

「今日のは自信作だよ、おいしそうでしょ？」

「ほんとボルさんって手先器用だね！」

「何かを作るのも面白いからね、それに料理は作るのも食べるのも好きだし」

「ボルも自分の弁当を取り出し食べようとする二人の来訪者が現れた」

「いよつす、あたしらも邪魔させてもらっていいかい？」

「すいません、勝手に邪魔して」

「妹紅、ブラン、人里に来てたのか」

入って来たのは藤原妹紅とそのパートナーであるブランウイングことブランだ

「ブランは透き通る様な白い髪の長髪で水色の瞳をした和服の女性でその手には荷物が色々入った風呂敷を持っている」

「ああ、ちよつと近くで狩った猪とかを売りにな」

「運ぶのに苦労したんですよ、わざわざ元の姿に戻って人里まで持ってきたんですから」

「この2人は普段は迷いの竹林の案内人兼護衛をして生計を建てているがあまり人が来ない時はこうして狩りや山菜狩りなどの獲物を人里で売って生活費を稼いでいるのだ、ちなみにこの2人に依頼することが凶暴な妖怪達が飛んでいる迷いの竹林上空を普通の人間が安全に渡れる数少ない手段でもある」

「それで余った分で作った弁当を食おうもあつたしちようど昼時の時間だから一緒に食おうと思つてな」

「とゆうわけで一緒に一緒にいいですか？」

「ああ、もちろん構わない。皆もいいか？」

「もちろん！」「一緒に食べよー」「2人のお弁当はどんななの？」

子供達も妹紅とブランの同席に賛同し2人のお弁当の中身を知りたがる

「あたしらの弁当はそこまで色気のあるやつじゃないけどな」

「私達のはほとんど栄養面重視ですしね」

そう言った彼女達の弁当はご飯の上一面に豪快に猪肉の生姜焼きが敷き詰められおかずの方は旬の山菜オンリーだがバランスのとれた弁当といえるだろう

「なかなか豪快な弁当だねー」

「男らしい弁当だな、これはまた」

「すげー！」「うませー！」

妹紅とブランの弁当は男の子達には好評だ、やはりご飯の上に敷き詰められた肉の香ばしい香りに釣られてしまうのだろう

「それじゃそろそろ待ちきれない子もいるみたいだから食べようかー」

「そうだな、じゃあ皆手を合わせて…」

『いただきます！』

人里 よろず屋 『礼備』

人里の長屋と隣接して繋がっているこの建物はてみの契約モンスターであるゼルと

その部下であるレイヨウ型モンスター達が住みこみで働いている

仕事は護衛に配達、人探しから子供の相手や臨時のバイトなどなんでもござれ、ただ最近退屈している妹と戦ってほしいなどの明らかに自分達では手に負えない依頼は流石に断っているあと人数は多すぎると邪魔になるのでシフト制にしている

「こんにちはー、依頼いいですかー?」

「はいはい、いいですよー!入って来ててくださいい!」

影の薄そうな青年が扉を開け尋ねると奥からこの頭であるゼルの了承の声が聞こえ青年は中へと入っていく

「それで、依頼の内容はなんですか?」

専用の椅子に座っているゼルは座ったまま入ってきた青年に依頼の内容を聞く

「あ、魔法の森に生えてるキノコを取ってきてほしいんですけど」

「なるほど、種類は?」

青年は懐からキノコの種類が書かれた紙を取り出しゼルの前の机に置く、ゼルはそれを見て依頼のレベルや依頼料を考える

「このくらいレベルなら500貫つてとこっすね。異論は無いつすか?」

「ありません」

「ならこの紙に依頼内容と名前を書いてくださいいっす、それでこの依頼は正式に受諾す

るっす」

「わかりました」

青年は紙に書き終わるとよろしくお願いしますと一言残し帰っていった

「それじゃ今日のシフトなら……んー、メガとオメガとネガで小隊組ませりや大丈夫そうっすね」

ゼルはメンバー達のシフト表を見ながらそう言うのとケータイを取り出し何名かのメアドに向けて依頼内容とメッセージを送る

すると長屋とよろず屋を繋ぐ扉からオメガゼールの擬人体が1人とメガゼールとネガゼールの擬人体が2人ずつ現れた

5人共容姿は様々で共通点があるとすれば元が同じ種族はその種族のイメージカラーの髪の色をしているということだけだろう

「今メールで送ったこの依頼を頼みたいんすけどいいっすね？」

「頭あ、問題ねえけどこのレベルならこんな人数はいらねえんじやねえか？」

「そんな文句言うならあんた抜けなさいよ、チームワークを乱したらあたし達の死ぬ確率が上がっちゃうんだから」

「んだとー！」

「まあまあ、ケンカはやめてくださいっす。でも人数が多いのは我慢してほしいっすよ、

何かイレギュラーが無いとも言いきれないから。そういう時の対処として人数は最低限より多い方がいいんすよ」

「…頭がそこまで言うなら」

1人のネガゼール(男)が不満そうな顔で抗議するがそれをもう片方のネガゼール(女性)が喧嘩腰に注意してしまい喧嘩に発展しそうになるがゼルがそれを止めネガゼール(男)もしぶしぶといった感じだが納得する

「それじゃ、行ってらっしゃいっすよー」

5人を見送ったゼルは手を振りながら見送るとため息を一つ吐く

「ふう、やっぱり上の立場は疲れるっすねー。ま、これはこれで楽しいからいいんすけど」

「すいません、依頼をお願いしたいんですが」

「はいはいどうぞ、奥へ入ってきてください。依頼内容はそこで聞きましょう」

ゼルは新しい依頼人を招きいれ今日も仕事に励む

人里は今日も平和である

番外幕その3　　博麗神社

博麗神社、ここには最近よく来る客が2人いた

「うう…魔理沙」

「どうしてあんな眼鏡を…うあ〜」

「あんた達最近毎日うちに来るけど来るならお賽銭でも払ってちょうだいよ。まったく、魔理沙を霖之助さんに取りられたからってやけ酒ばかり飲んで。うちは居酒屋じゃないのよ？」

その客とはアリスとパチュリー、実は先日魔理沙が霖之助に告白し紀斗の仲介もあつたがめでたく恋仲となれたのだ

しかしもともと魔理沙に片思いをしていたこの2人としては自分達の気持ちも知られることなく振られたと同じであり自暴自棄となったこの2人は連日ここでやけ酒を飲みながら愚痴を言いまくっているのである

「まあまあ、いいじゃん霊夢。あんまり他にも迷惑かけてないんだしさー」

一緒に酒を飲んでいた萃香が霊夢にそう言うが

「私に迷惑がかかってんのよ。あんただけでも片付けが大変な時があるのにそれが2人

も増えたんじゃないや。たまったんじゃないわ。それに仮にも神社なのにこんなに酒臭くつちや更にお賽銭も入らなくなりそうだし…」

「それが一番の本音だね、霊夢」

うんざりといった様子の霊夢の本音に萃香も呆れるしかなかった
すると部屋の襖が開き大人しそうな顔の銀髪の少年が入ってきた

「霊夢姉ちゃん、掃除終わったよ」

「あ、お疲れ様ラス。お茶飲む？」

この少年は萃香の契約モンスター。メタルガラスの擬人体であり愛称はラス、萃香と一緒に博麗神社に居候しているがはつきり言つて萃香よりよく働く

「うん！パチュリー姉ちゃんとアリス姉ちゃんはまたお酒飲んでるの？」

「あんたはあんな酔っ払い達の心配なんかしなくていいのよ。今お茶淹れてくるからここに座ってなさい」

そう言つて霊夢はラスを酔っ払い達（萃香含む）のいる部屋の隣の縁側へ移動させ座布団の上に座らせると5分もしないうちにお茶の入った2人分の湯のみと急須、お茶受けのせんべいを持ってきてラスの隣において自分も縁側へ腰かける

「霊夢、私らをほつといてラスとのんびり休憩とはどういふことだい？」

「昼間つから酒ばっか飲んでるあんた達よりちゃんと神社の仕事手伝つてくれるラス

と話してる方がよっぽど有意義だからよ」

萃香の文句も霊夢は軽く流し茶を啜る、それでふて腐れる萃香にラスはどうしていいかわからずあたふたしてしまっている

「ん？霊夢、なんか聞こえないかい？」

「なんかつて？」

「なんかこう…物が落ちてくる感じの音g

ズドオオオオオン!!

萃香のセリフの途中でかなりの墜落音と振動が周りに響き霊夢と萃香とラスは墜落音のした博麗神社の境内へ向かう

そしてそこにあつたのは境内の地面に半分程埋まった巨大な要石だった

「ありやく、これはまた派手に来たねえ」

「要石…つてことはあの馬鹿ね…」

「うう、せつかく掃除したのに…」

その光景に三者三様の反応をしラスは目の端に涙を浮かべ半泣き状態になっている、そんな反応をしていると要石から数人の人影が降りてきた

「霊夢！暇だから来てやったわよ！お茶の一つでも出してもらおうへぶんっ!!」

「よくもやつてくれたわね、この馬鹿天人。神社を壊すだけじゃなくラスまで泣かせる

なんてこれはもう万死に値するわ…」

降りてきたのは天子と衣玖そして彼女達のパートナーであるアビスラツシャーとアビスハンマー、エビルダイバーの擬人体の5人で降りた途端天子の顔には陰陽玉がヒツトした

「悪い、俺達も止めようとしたんだが…」

「力不足…止める失敗…謝罪」

「仕事を増やしてしまい申し訳ございません」

「この後始末は私達がするので…。あとこれはお詫びの品といっではなんです食べ物とお菓子の詰め合わせです」

他の四人は即座に霊夢達に土下座し先頭で頭を下げていた衣玖が詰め合わせを差し出し霊夢は早速それを受けとり中身を見て満足のいく中身だったのか笑みを浮かべ箱を閉じる

「しようがないわね、じゃあとつととそれを片付けて地面直して帰んなさい。あ、でもその前にもう一発」

「超エキサイティング!!?／／／」

霊夢は地面に倒れていた天子の腹にもう一発陰陽玉をシュートするとラスと手をつなぎ神社の中へ戻っていく

「さて、それじゃあ片づけに取りかかりるとしましょうか」

「そのためにはまずそこで悶えてる主犯を起こして動かさなければいけませんね」

衣玖達はひとまず要石を動かすために倒れながら満足そうな顔をしている天子を叩き起し

「え？なんでみんなで私を取り囲んでるの？え？その冷たい目は何なの？ちよつとゾクゾクするじゃない。いたつ、ちよつリンチ？リンチなの？」

叩き起し…

「あつすいませんすいません！我儘言つて皆を連れてきてすいません！だからもつと蹴ってください！／＼／＼」

叩きお…

「ああああつ！ありがとうございますうううつ！！／＼／＼」

…

「それじゃあ総領嬢様、要石をどかしてくださいますね？」

「は、はい／＼／＼」

傷だらけで顔を赤くした天子は要石を浮かすとそのまま近くに帰り用に待機させておく

「エビルは私と土を運ぶのを手伝ってください。スラッシャー、ハンマーは穴を埋める

作業をお願いします。総領娘様は邪魔になるのでそこらへんで寝転がっててください」
衣玖は既に用意してあったのかスコップや手押し車を要石の上から持ってきて手渡ししていく

「それじゃあとつとと片づけちゃいましょう！」

「「おー！」」

「衣玖、疲れたら言うてくださいいね。その時は私が両役こなしてみせますから」

紅色の後ろ髪をおさげにした凛々しい顔立ちの青年（家庭教師ヒットマンリボンの風の紅髪 ver）、エビルダイバーことエビルがスコップ片手に掘り出した土を手押し車に乗せ紳士的な笑みを浮かべながら衣玖を氣遣う

「別に大丈夫ですよ、これでも腕つぶしには少し自信があるんですから。それに彼氏を働かせて自分のはんびりくつろぐなんて私にはできませんよ」

そう、今の発言からわかる通りこの2人、戦闘でのパートナーでありながら男女としてのパートナーにもなっていたのである

「それでも本当ならあなたにはこういう土仕事をして汚れてほしくないんですから」

「私は別にあなたとならこういいう仕事も何の苦にもなりませんよ。さ、早くあの穴を埋

めて私達の家に帰りましょう」

「そうですね、こんな仕事は早く終わらせるにかぎりませう」

同時刻 博麗神社前では目つきの悪いエメラルド色のボサボサ頭の男と目元をザクのようなバイザーで隠した緑髪のショートヘアの男の2人が土をスコップで穴に入れ埋めたて作業を行っていた

「なあハンマー、中々追加の土が来ねえがああ2人まーた桃色空間展開してんのかね？」
目つきの悪い男、アビスラッシャーことスラッシャーがバイザーをつけた男、アビスハンマーことハンマーに世間話程度に話しかける

「85%の確立で…桃色空間発生中。効率ダウン…やめてほしい」

「つたく、相手がいる奴あいいよなあ。かといってうちのマスターはあんなだしよお」

「色気0…変態性75%…無理」

2人が揃って天子の方を向きため息を吐くと天子はその反応にイラッして2人に向かつて怒鳴る

「何よ！人のことを変態呼ばわりして！あんた達だつて人のこと言えないでしょ！スラッシャーはがさつだしハンマーはコミュ障でしょうが！」

「うぐ!?!」

「事実…言い返し…不可能…自分の心…10%の損傷」

2人も天子に痛いところを突かれ精神的ダメージをくらう

「おめえは変態の他にも問題点があんだろうが！今回みたいな我儘もそうだし人の言うこと聞かねえし！尻拭いさせられる俺達や衣玖の姐さんの身にもなりやがってんだ！」

「あんた達だつていちいち口うるさいのよ！私の母親かお前は！」

2人の間の空気は剣呑なものになり今にもバトルが始まりそうな一触即発状態になる

「あだっ!？」

「あふあん!？」

「喧嘩…効率性0…厄介事…排除」

そんな2人の雰囲気を感じとりこれ以上厄介事を増やされては困るからおとなしくしていてもらおうという考えに辿り着いたハンマーは不測の事態に対応できるようなつも持ち歩いている麻痺弾を自分の姿を模したシユモクザメ型の機関銃にセットし2人を撃つと2人は倒れ痺れて動けなくなる

「ハ、ハンマーあ…てめえ…」

「し、痺れるく／／／」

「喜んでんじゃねーよこの変態…」

「最悪の事態回避…これ最重要…作業再開」

自分のミツシヨンを遂行したまでといった様子のハンマーは倒れた2人を一瞥すると再び作業に戻り2人の言い合いをBGMに黙々と作業を進めるのだった

「この作業…本日終了…不可」

1人で穴を埋めるために土を入れ続けるその背中はどこか哀愁が漂っていたという

番外幕その4 　　く妖怪の山く

妖怪の山 にとりの家のラボ 開発ドック

妖怪の山内部でかなり規模がある河童達専用の地下ドック、幻想郷で唯一の近未来的空間であるここでは今日も新たな開発や改造が行われている

「おーいゴジョウ！そこにあるスパナ取ってくれ」

「あいよー」

今は鬼の戦艦を改造中でそれを甲とにとり、そして緑色の忍者服を纏い顔も目のところ以外は全て忍者服により覆われており唯一出ている目も御坂妹達のようなゴーグルを付けていて顔は全くわからない男、にとりのパートナーであるサガツパことゴジョウの3人でやっている（実質ほとんどやっているのは2人でゴジョウは補助だけだが）

「そーいや甲の旦那、守矢の方からの依頼の品は出来たのかい？」

「ああ、確か新しい組手用木人型ロボだったな。あれならもう完成して後は受け取りを待っただけだぜ」

ピンポン

『すいませーん、頼んでおいた物を受け取りに来ましたー』

そんな話をしてしていると来客用のインターホンが鳴り早苗が来たことを知らせる

「お、噂をすれば。悪いゴジョウ、そこに立てかけてある木でできた人型がさつき言った木人だ。そいつを早苗に渡してくれ。あともし早苗がそいつを重くて運べないようならこっちはいいから運んでやってくれ」

「りよーかいつとー!」

甲は壁に立てかけてある木でできたポーズ人形のような物を指差しゴジョウはそれを肩に担ぐと水に潜るように床に潜りそのまま玄関まで一瞬で移動する

「はいはい、おまちどうさん。こいつが依頼の品だぜ」

バシユンという音と共に自動ドアが開かれゴジョウは早苗の前に担いでいた木人を立てる

「あ、ありがとうございます。すいません、もうこれで五体目なのに」

実は早苗がこの木人を頼むのはこれが初めてでは無く既に試作機を含めた4体の木人が早苗の修行の犠牲となっているのだ

「まあうちの2人もあんたの意見を聞いて改良しがいがあるなんて言ってつから問題ないよ。むしろドンドン来いって感じだね」

笑ってそんなことを言うゴジョウに早苗はあははと苦笑いで返す

「で、嬢ちゃんはまだ強くなるのに拘ってんのかい?あれからもう2年も経ってるって

のによ」

いきなりゴジヨウの雰囲気我真剣なものとなり早苗はゴジヨウの問いに顔を俯かせ

「…はい、まだ今の私ではこうやって強くなろうとすることくらいしか気を紛らわすことができませんから」

「そうかい…まあ身体には気をつけなよ」

早苗の答えとその表情に今は何を言っても無駄と判断したゴジヨウは早苗の心配することしかできない

「そーいやこいつは運んで帰れるかい？普通の木人ならまだしもこいつは中身に金属をかなり使ってっから結構重いよ？」

「んーんくー！はあ、はあ、確かに前回の物より更に重くなってますね。私一人じゃ運ぶのは無理そうです。すみませんうちの神社まで運ぶの手伝ってくれませんか？」

「女の子の頼みを聞くのは紳士の嗜み、喜んでお受けするよ」

雰囲気元に戻したゴジヨウは執事のように一礼すると木人を再び肩に担ぐと早苗と並んで守矢神社まで歩を進めるのだった

天狗の里 文の家

「あやややく!?締め切りが!?締め切りが迫ってくるく!?」

「午前中をほぼ寝ていたからですよ。ほらあと数時間しかないのですからとつと書いてください」

文の家では文が×切間近の原稿を大急ぎで仕上げようとしていてその後ろで右目にモノクルをかけ銀髪にところどころ黒いメツシユが入った黒いスーツ姿の青年が片手に金色の懐中時計を持ちながら文に発破をかけている

「ならなんで起こしてくれなかつたのよ〜!」

「その方が面白そげフンゲフンいや、あまりにも気持ちよさそうに眠っていたもので」

「今面白そうって言おうとしたわよね!? 昨日私明日×切だから早く起こしてって言ったじゃないの!」

「あなたのその慌てふためいている姿が面白:面白いからに決まってるじゃないですか」

「最早訂正する気さえない!?!」

「ほら、手が止まってますよ。早く手を動かしてください」

「ちくしよおお! ロীগあなた後で覚えときなさいよおお!!」

このロীগと呼ばれる青年は文のパートナーであるサイコログであり今では記者と編集者という関係でもある。のだが如何せんロীগがドがつくほどのSなせいですっかり文にいじられ癖がついてしまいついでにツツコミもレベルアップしていた

「文一、今暇…じやなさそうね」

「はたてですか！今忙しいからまた今度にしてください！」

そんなところへ同じ記者仲間のツインテールの少女、姫海棠 はたてが訪ねてくるが、まったく相手にせずひたすら記事を書いている

「申し訳ありません、はたてさん。今先生は明日の記事を書くのに精一杯でして、緊急のご用で無ければまた後日にお願ひできませんか？」

「あ、は、はい。わかりました／＼／＼」

ローグははたての目の前まで行くとまるで助手のように丁寧に対応し男への耐性があまり無いはたては顔を赤くし文の家を後にした

「ほんと外面はいいわよねあんだ」

「ええ、私の素行が悪いとあなたの評判まで悪くなってしまいますからね。それだと私
が面白くありませんし、何より貴方を他の奴に傷つけられるのは気分が悪い」

「え、ちよつ何言つてんのよ／＼／＼」

呆れた風に文が言うところローグは文のあごを持ちあげ文の目線を自分に合わせると薄く笑いながら文の顔を見つめる

「そんなことよりいいんですか？メ切まであと2時間切りましたよ」

「ハッ!?そ、そうよ早く仕上げないと！」

文はローグの声に我に返ると再び机に向かい記事を書く作業に戻る

(ふふふ、本当に…貴方の反応は面白い。いつまでも私を退屈させないでくださいよ？
私の主人なら)

文の受難はまだまだ続くようである

番外幕その5 　　く迷いの竹林く

迷いの竹林で永遠亭とは少し離れたところにひっそりと佇む小さな一軒家、ここでは今泉 影狼とその相棒であるバイオグリーザことバイオが自給自足の生活をしている

「おいしい、バイオー、獲物がそっち行ったよー」

「りよーかいつとー！」

そこから約500m程離れた場所で2人は本日の狩りの獲物の牡鹿を追っていた

「キヤアアア」

「そうらー！」

「キヤツ!？」

肩まで伸ばした黄緑色の髪の毛のラスと同じくらいの姿の少年、バイオが自分の目を模したヨーヨー、バイオワインダーを牡鹿の首に巻きつけ絞め殺した

「いっちょあがりつと」

「これで数日は持ちそうだね。私がこいつの血抜きとかしとくからバイオは先に家で調理の準備しといてくれない？」

「えー、別にいいけどなんか注文ある？」

「んー、じゃあ洋食で！」

影狼はそう言うのと牡鹿の体を担ぎ少し離れた場所にある血抜き専用の場所に行ってしまう。血抜きを家の近くでやると血の匂いに誘われた妖怪や獣が家を襲う可能性があるからだ

「しよーがない、やつとかないと後が怖いしとつとやつとくかな」

そう呟いたバイオは竹林内を歩いていき本日の献立を考えながら自宅への帰路を歩くのだった

4 時間後

野菜やソースなどの添えつけ用以外の料理の準備を大体終えたバイオは1人、影狼の帰りを待ちながら椅子に座って数日前に人里の本屋で買った本を読んでいた

（ふーん、こういうトラップの仕掛け方もあるのか。これを応用すれば捕獲用の罠に出来るな。今度早速試してみようかな）

彼が読んでいるのは推理物だ、犯人が被害者を殺した仕掛けやからくり、それらを知り応用すればよりトリッキーに獲物を罠にはめることが出来る。それは狩猟、もとい生活の為でもあるが彼の元々の性格がいたずら好きなのも影響している。

彼は暇な時はよくてると新作の罠をはりその罠にかけるのが彼の趣味であり楽しみなのだ。因みに一番よく引つかかるのは鈴仙でその次に妹紅、たまに動物や野良妖怪も

引つかかる。紀斗や永琳だと発動した瞬間に避けられたり壊されたり防がれたり一度も罠にかかつてはくれない（永琳の場合は発動した瞬間に紀斗が全て防いでいる）
 「ただいまー、準備はできて……みたいだね。それじゃメインディッシュは任せな！ すぐ作るよ！」

本を読みながら次にはる罠を考えていると影狼が肩に解体した鹿肉を入れた袋を担いで帰ってきてすぐにキッチンで肉塊を2人分に切り残った分を袋に戻す

「それじゃこれは貯蔵庫の方に入れておくよ」

「ああ、よろしく！」

バイオは読んでいた本に葉を挟み閉じると肉の入った袋を担ぎ地下にある冷蔵庫の役目をしている貯蔵庫へ運んでいく

15分後

食欲を刺激する香ばしい匂いをさせるステーキがテーブルに置かれ先に作られていた野菜が皿を彩り更にそのステーキと野菜の上にバイオ特製の和風タレが豪快にかかけられ更に香ばしい匂いがその強さを増す

2人はそのステーキを見ながら舌舐めずりをすると席について手を合わせる

「いただきます」

2人はそう言った瞬間肉にかぶりつき幸せそうな声をあげる

「ん〜?? やっぱり鹿肉のステーキは絶品だねー、バイオの特製タレで味も更に引き立っているしもうサイコー??」

「お褒めの言葉ありがとう、でもまだまだ紀斗さんには届いてないんだから素直に喜べないんだよな〜…」

「ま、あいつはガキの頃から料理してたみたいだしこればかりは年季の差だね」

「はあ、まだまだ追いつけそうにないなあ」

（戦闘も料理も…恋した女性の扱いも…）

バイオはため息を吐きながら切り分けた肉を食べるのだった

番外幕 クリスマスコラボsp

今日は12月24日、世間でいうところのクリスマス イブだ

そんな日に俺は複数の異世界からある頼み事の為に友人達を自室に呼んでいた

「へー、もっとライダーグッズかなんかで埋め尽くされてると思ったのに案外綺麗にしてんのねー」

以前、財団Xのアジトに乗りこんだ時にMを倒すきっかけになった幻憶変の世界の霊夢

「とりあえずエロ本ないか探してみようぜ！」

ファンガイアと人間のハーフであり女たらしで戦闘狂の頭に赤いバンダナを巻いた青年、赤獅子 ダイヤ

「そんなことしてるとまた紀斗さんにしばかれますよ、ダイヤ」

一度全ての記憶を失い少し性格も変わった気がするがそれでも仲のいいダチとしてやってる青年、秋風 真央

「で、今回はなんで僕ちゃん達を呼んだんだい？紀斗君」

そしてもうけっこう顔なじみになってきているバカ天使、天音 ユウ
俺がこの四人を呼んだ理由の頼み事とは――

「「サンタのバイト？」」

「ああ、実は慧音と妹紅に寺子屋の子供達にサンタになってプレゼントを渡す仕事を頼まれたんだが皆自分達だけで祝いたかったり宴するって言って空いてる奴がいなくてな。それでお前らに頼もうと思ったわけだ」

「で、バイトっていうからにはちゃんとバイト代は出るのよね？ボランティアや少なすぎる金額なら承知しないわよ」

「安心しろ、やってもらう時間はせいぜい二、三時間だしバイト代は一人あたり10万だ。そしてその後うちでクリスマスパーティーの料理も出してやる」

「乗った！」

「霊夢さん決断早すぎですよ……」

そんなこんなで四人共バイトを引き受けてくれたがおもむろに天音が手を上げて質問してきた

「しつもん、プレゼントを渡すのはいいけどさ。その肝心のプレゼントはどうなってるの？ 適当に渡して男の子のところに着せ替え人形とかいったら悲惨だよ？」

「その点は問題無い。プレゼントは既に用意してあるがそのプレゼントを入れている箱

に細工がしてあるからな。これと併用して使うことでどの子にあげる物かわかるようになってんだ」

「それは……コンタクトレンズか？」

俺が取り出したのは一見何の変哲も無いとただのコンタクトレンズ。だがこれとはとりと甲が作りだしたこの日の為の特別装置だ

「まあ、これは付けてみればわかる。つーわけでダイヤ、目え見開け」

「いやちよつ待つてなんでコンタクト付けるだけなのに振りかぶつてんの？なんで他の皆は俺をがっちり押さえるの？なあ、おい待て話せばわか「さつきお前が俺の机の中を勝手に開けて漁ろうとしたことを俺は許さない」目があああああ!?!」

俺は思いっきりダイヤの右眼にコンタクトごと指を突き刺す。コンタクト自体は衝撃を加えても壊れないようちなつてるしダイヤ自身もすぐに復活するから特に問題は無いな。俺の永琳の写真コレクションを開けようとしたこいつが悪いんだ

「ちくしよう、右眼がヒリヒリする……」

「普通はヒリヒリじゃすまないけどな。無事コンタクトも付けられたことでこのプレゼン卜箱を見てくれ」

「んあ？なんだこれ？さつきまで白い箱だったのが薄く赤くなつてる」

「そう、それがこのコンタクトの力だ。こいつはインプットされてある情報に一致する

ものとその情報の一部が入ってるチップが含まれてる物に薄く色をつけて見せる。たったこれだけの能力だが今回はこれが役に立つ」

「? どゆこと?」

天音以外は納得したような顔をしたが天音は一人キョトンと顔をして理解してないようだ。まったくこいつは……

「紀斗、そのコンタクトに入れてる情報っていうのは子供達のなんでしょ?」

「そのとおり、まあ入ってるのは顔とか身長とかその程度の情報だがな。ここまで言やあ流石にわかるか天音?」

「うん、つまり紀斗君はロリコンゴペバア!」

おっといけね、つい勢いで天音の顔面に飛び膝蹴りしちゃった

「おおう、完全に壁に頭が刺さったぞ」

「まったく、面倒ね。今回は天音の所為だけど紀斗も手間増やさせないでよ」

「すまん、ついイライラしてな。ふんっ!」

俺は天音の片足を掴むと一気に引き抜くと天音が刺さっていた周りの壁までついてきた……俺の部屋が……

「あちゃー、完全に伸びてますねこれ。どうします?」

「ただ殴つてもあんま効果無さそうだしな。燃やすか?」

「いや、それだと火事の可能性があるからやめてくれ。こういう時はこれだ。スキルコピー」
「レディバグファンガイアの電撃能力」、らあつ！」

俺は両腕に高圧電流発生器官を持ったレディバグファンガイアの能力をコピーし一時的に両腕の中に高圧電流発生器官を創り出し白眼を向いて気絶している天音の腹に電撃を纏った突きをくりだす

「ビリツとキタアアア?！」

「お、起きた」

「あれ? 僕ちゃんは誰? ここはどこ?！」

「ほれ、ふざけてないでさっきの説明の続きすんぞ。このコンタクトに入れてる子供達の情報とその子供達一人につき一枚のチップが入ったプレゼント箱、これを使えば」

「その箱に付いた色と同じ色が付いている子供がその箱を渡す相手、ということですね。紀斗さん」

「Excellent! その通りだ真央、これは既に人数分送られてきてあるから後は付けるだけで問題ない。そして次に渡すのはこれだ」

そう言つて俺は部屋の隅に置いておいたダンボールを開け一着のサンタ服を出す

「服装は俺を除いた四人のうち二人にサンタ、もう二人にトナカイの格好をしよう。因みに格好的に霊夢がトナカイになるのはアウトだから実質サンタの格好をするのは

三人の中の一人だな」

「ちよつとちよつと紀斗君、霊夢はともかくなんで自分だけトナカイ回避してんのさ」

「ああ、そりゃあ俺はサンタ服じゃなくてこれを使うからな」

俺が懐から出したのはゾディアーツスイッチ、それもホロスコープスの物だ

「？ 怪人になってサンタのヒーローシヨでもやるのかい？」

「んなわけあるか、こいつの能力を使うんだよ」

そう言つて俺はダイヤ達にホロスコープススイッチのボタン部分の天秤座のマークを見せる

「なるほど、リブラか。なら納得だ」

「あれの変装は完璧だから化けるにはもってこいだものね」

「ああそつか、リブラの変装で本物のあれになるんだね！」

「怪人の力も使いようつてやつですな」

「とゆうわけだから俺はサンタ服もトナカイも着ない。お前ら3人のうち二人に犠牲になつてもらうぞで」

俺の言葉にダイヤと天音は齒噛みし真央も苦笑いを浮かべる

「こつなつたら……」

「あれで決めるしかないか」

「ですね」

3人は向き合うと握った拳を前に出し振りかぶる

『最初はグー！ジャンケンポイ！』

真央 パー

天音 グー

ダイヤ グー

「やった！」

「ナズエダアアアアアアアアアア!?!」

「くそおおお！」

結果は真央の一人勝ち、俺はダンボールの中に入っていた鎧武本編で城乃内と初瀬が着ていたトナカイの服を取り出す

「とゆうわけでトナカイ役は天音とダイヤに決定だ。安心しろ、防寒性はバッチリだから」

「そりや顔だけしか出てねえんだからそうだろうな！」

「この格好は魔理沙達に見せられないなあ……」

「黒歴史が増えずにすみました……」

トナカイの服を着せられた二人は地面に手をついて嘆き一人黒歴史が増えなかった

真央は安堵の溜息を吐く

「で、真央と霊夢の方はサンタ服も普通の物と脇巫女型サンタ服が二着ずつあるがどっちを着る？」

「普通のに決まっていますよ。でもちよつと妖夢にも着せてみたいので後でください」

「私は巫女服型でいいわ。そっちの方が使いやすそうだし」

「わかった。霊夢は隣の部屋で着替えてくれ。この二人が覗こうとしたらシバいとくら」

「そう、お願いね。もし本当に覗いてたら私が殺る分も残しといてね」

そう言うのと霊夢は巫女服型サンタ服を持ち襖を開け隣の部屋に入ると襖を閉める

霊夢の最後に残した言葉にこめられた殺気でビクツと震えたトナカイ二人は十中八九覗こうとしていたのだろう、顔を青くしている

「じゃあ今のうちに他の物も用意しておくか。真央、二人の見張り頼んだ」

「任せました」

「信用無いなー、僕達」

「そんな霊夢の着替えを覗くなんてするわけ無いだろ」

「お前ら声が震えてる上に今までの自分達の行動思い返してみろ。前科何犯だと思ってるんだお前ら」

そんな二人に冷たい視線を送り俺は真央に二人の見張りを頼むと今のうちにプレゼントや天音達の分のコンタクトなどを部屋に持ってきて不調の物が無いか最後の確認をする

少しすると霊夢も着替え終えて部屋に戻り指定された時間近くまで流れの説明や談笑などをして時間をつぶした

P M 7 : 0 0 寺子屋

ここでは今日、慧音、妹紅、ボル、ブランの四人で企画したクリスマス会を生徒達と共に楽しんでいた

そんな中、慧音はチラと時計と窓の外を確認すると合図である赤い光が点滅するのが見え子供達に呼びかける

「皆、今日のクリスマス会の為に呼んでおいたスペシャルゲストが到着してみたんだけど、外に出よう」

子供達がスペシャルゲストが誰なのか話しあいながら外に出るとそこにいたのは奇妙なセットの五人組だった

顔だけ出てるトナカイの服を着た男が二人、いつもの服装のサンタ ver を着ている霊夢に普通のサンタの服を着た男が一人、そして子供達が一番驚いたのは真ん中の大き

な袋を担いだ白い髭を生やした老人、以前見た本に描かれていた姿とそっくりのサンタクロースがニコニコと笑って立っていたのである

「ホッホッホー！良い子にしてたかな子供達？メリークリスマス！」

『ええええええええ！』

サンタクロースの姿を見た子供達は皆一様に驚きすぐにサンタに走り寄り本物か変装でないかなど騒ぎながら触って確かめる

「ホッホッホ、元気な子供達だ。あいたたたた、髭を引つ張らないでくれ、髭はデリケートなんだ」

「本物のひげだ……」

「付け髭とかでもないしこの人の顔も人里じゃ見たこと無いし」

「やっぱり本物なのかな？」

もちろんこれはリブラの能力で変装した俺だ。子供達は髭や人相から偽物かどうか確かめているが髭は本物の感触、人相は里の人物には当てはまらない。流石本編終盤まで生き残ったホロスコープスの能力だ、これなら誰かがボロを出さなければバレることはないだろう

「……からお前達、あまりサンタさんを困らせるんじゃない。サンタさんだって忙しい中来てくれたんだからな」

「いやいや、いいんだよ。それじゃ皆お待ちかねのプレゼントを配っていいこうか」
俺の言葉に子供達は一気に顔を輝かせ期待に満ちた目でこちらを見つめてくる

その反応に少し笑ってしまう俺達はそれぞれ袋を開くと手筈通りに子供達一人一人にプレゼントを渡していきBGM役の天音はクリスマスソングを歌う

「仮面ライダーの人形だー!」

「欲しかった服だー」

「やった!読みたかった本だ!」

子供達はプレゼントを開け中身を見て大はしやぎをしている。そんな姿を見たらこちらとしてもこの計画をやった甲斐があったというものだ

とこころで……

「お前はなんでブランをナンパしてるのかなトナカイBくん?」

「いやごめんちよつと魔がさしたただだからほんとは許してちゃんと真面目にやるからそれはかんべがあああ!」

さーて、ちゃんと仕事しない悪い子にはお仕置きしないとなー

「すげー!サンタがトナカイにカメラクルラッチかけてる!」

「あぎぎ、背骨が、背骨が折れる!?!」

「カウントー、ワーン、トゥー、スリー」

ほほう、カウントまでやってくれるとは最近の子はノリがいいな

B☆O☆K☆I!!

あ、力入れすぎて背骨折っちゃった

「ぐふう……」

「トナカイBダウン！ウイナー、サンタさん！」

「ホッホッホウ！まだまだトナカイには負けんよ！」

ダイヤをそこらへんに転がしておくとな音が新しい曲を歌うようだったが歌い始めた歌詞が明らかに失恋ソングだあの馬鹿……

「子供達の前ではちゃんとした曲を歌わんかああああ!!」

「いつかのメリークリスマスウウウ!!」

「今度はドロップキックだ！」

「ホッホオオオウ!!」

「グボオオオ!!」

「からの持ち上げてバックブリーカーだあああ！」

「ホウ！ホウ！ホッホオオオウ!!」

「グエ!?グア!?ゲボアア!!」

「トナカイAダウン！再びウイナー、サンタさん！」

「I, m winner!」

ふう、まったくこの二人は反省という言葉を知らないのか？仕事を増やしやがって……

こんな感じの問題も何回も起こったが無事俺達は子供達にプレゼントを分け終わり帰る時間になった

「皆、サンタさん達ももう次の場所に行く時間だそうだ。皆でお礼とお別れの言葉を言おうな」

『はい！』

『サンタさん、トナカイさんありがとう！さようなら！』

その言葉に俺達は笑みを湛えると大きく手を振って言葉を返す

「こちらこそ笑顔をありがとう！メリークリスマス！よい夢を！ホツホツホウ！」

俺は笑い声を響かせながらリブラの瞬間移動の闇で四人を包みその場から姿を消し永遠亭前まで翔ぶ

「あー、疲れた……」

俺はサンタの変装を解きリブラの姿に戻ってからスイッチを押し人間の姿に戻る
流石にずっとサンタのキャラを維持し続けるのは疲れるわ

「お疲れ様です。こういうのをやることってそうそう無いからいい経験にはなりませんがどやっぱり疲れますね」

「もー僕ちゃんも歌いすぎて喉痛くなってるよ」

「俺は紀斗に殺られた場所が痛むよ……」

「それはあんたの自業自得でしょ？それより私としてはお腹も減ったしそろそろ報酬の夕飯を……馳走になりたいんだけど」

「そうだな、料理自体は作ってあったからすぐに用意できるし夕飯にするか。とりあえずいつまでも寒空の下にいないで中に入るとしようぜ」

俺達は永遠亭の中に入り俺は四人を居間に待たせると俺は台所で用意してあった料理をヒートメモリの下位互換であるホットメモリを使い温め居間に持っていく

「お前ら、今回の報酬の飯だ！腹一杯食いやがれ！」

「イエエエエ!!」

「すごい、チキンの丸焼きにローストビーフ、パスタやカルパッチョまで……。本当にここまでこの出来のものを全部一人で作つたんですか？」

「ああ、まあ今回の材料費は永琳達に出さないのに永遠亭の方から出すわけにはいかなから自分の懐から出したけどな。おかげで財布の中が一気に冷えこんだよ」

「そんなことより紀斗！ハフハフこの料理タッパーで持ち帰ってももぐもぐいいかしら？」

「はいはい、OKだから食いながら喋るな。はしたねえぞ」

「もぐもぐもぐもぐ」

「やつぱり食べる方優先なんですわ……。あ、ちよつとダイヤさんそれ僕が狙ってた肉！」

「こういうのは早いもの勝ちなんだよ！つてああ!?天音俺の皿からチキン取ったな！」

「取っていいのは取られる覚悟のある奴だけだよダイヤくーん！」

「じゃあお前今の霊夢の皿から取ってこいよ！あの手塚ゾーンみたいに展開されてる霊夢の間合いからよー」

「やだよ！絶対あれ必殺の間合じゃん！入った瞬間俺が再起不能になるじゃん！」

「お前ら、食事中に遊ぶんじゃねえ！もう少し落ち着きつてもんを持ちやがれ！」

「タコス!!」

「ぐえっ!?!」

そんな明るい雰囲気のまま時間は過ぎ夕飯も食べ終えそろそろ解散するという時間になる

「今日は本当ありがとうな。これは今日の分の給料だ」

俺は四人にそれぞれ金の入った封筒を渡していく

「これだけ美味しい料理をご馳走してもらったうえにお持ち借りできてお金までもらえるなんてほんと今日の依頼は引き受けて正解だったわ」

「僕の方もサンタ服を二種類ももらえましたし面白かったですしね」

真央と霊夢は封筒を受けとると満足そうな笑みを見せ銀色のオーロラを通って帰ろうとするが天音とダイヤが俺に掴みかかってきた

「ちよつとちよつと紀斗君！納得いかない点が一つあるよ!？」

「あ？俺の料理が不味かったなんていう点だったらレポート50枚くらい書いて説明しろよ？」

「それはすごい美味かったよ！ご馳走様でした！ってそうじゃなくてなんで僕ちゃんとダイヤ君の封筒だけ厚さが違うのさ！」

「そうだぞ！中身確認したら一万円しか入ってねえじゃねえか！どういうことだ！」

俺はその二人の抗議に溜め息を吐く。この二人のせいで今日一体何回溜め息を吐いただろうか？いや、数えるだけ無駄だからこれを考えるのはよそう

「ダイヤ」

「え？」

「ブランや慧音を含む女性を仕事の途中でナンパした数」

「ま、まさか……」

「23回」

「天音、子供に聞かせるようなものではない歌を歌おうとした回数。15回」

「全部数えてました?」

「当たり前だ。誰がお前らの諸行を止めてたと思ってる?とゆうか普通バイトでそんな問題行為繰り返しまくったらクビだぞ。だがわざわざ世界渡って来てくれたから飯も出したしかなり減らしたが金も払った。これだけでもかなり譲歩したが……まだ、何か要求するか?」

「すいませんっしたあ!!」

「おーおー、すごい量の冷や汗流しながらかなりの勢いで土下座したな。頭が地面にめり込んでるぞ。まあ、謝った程度で罰が無いってのは無いんだけどな」

「あと行ってなかったがつぼみさん(ダイヤの彼女・ヤンデレ)にはこの情報は伝えておいたし天音の世界の魔理沙達には今日のトナカイ姿の写真を送っておいたからな」

「マ、マジっすか……」

「罪には罰をだ」

「あはは、あの二人らしいといえづらいなあ」

「英雄色を好むって言うけど見境なさ過ぎるのは問題ね」

俺らのその一連の流れを見ていた真央は苦笑いをし、霊夢は呆れると同時にダイヤに極寒の視線を浴びせている。まあ、彼女持ちでありながら他の女性をナンパしてた男に對しては正しい反応だな。

「はあ、今から帰るのが憂鬱だ」

「身から出た錆よ。ちゃんと受け入れて叱られてきなさい」

「また弄られるネタが増えちゃったよ。にしても紀斗君もあそこまで怒ることないと思うんだけどなあ」

「あれだけやられてまだ懲りてないんですね。それに今更ネタが増えてもあんまり現状変わらないからいいじゃないですか。ほんとあの時ジャンケンで勝って良かった……」

そのまま四人は銀色のオーロラを通って帰っていき俺も永遠亭の中へ戻ろうとする。とちようど宴に行っていた永琳や輝夜達が帰ってきた

「おかえり、いつもに比べたら早かったな」

「ええ、永琳と永斗があんたがいなくて寂しそうだったから早めに切り上げてきたのよ」
「ちよつと姫様！／＼／＼」

「うー」

「そうか、ごめんな永琳、永斗。せつかくのイブなのに一緒にいれなくて」

「紀斗が気にすることはないわ。あなたも子供達の為に動いてくれていたんだし」

永琳はそう言ってくれるがその目から少し寂しげな表情が見て取れた。よし

「永琳、明日空いてるか？」

「え？」

翌日 25日

周りもクリスマス色が占めている人里で俺と永琳は二人で歩いてた

永琳はいつもの服装ではなく赤の着物を着ていて俺も同じように紺色の着物を着て手をつないでいる

「久しぶりに二人つきりね」

「そうだな。最近は仕事や子育てでいつも他に誰かいたからな」

永斗には悪いが今回は鈴仙やマグナ達とお留守番してもらっている。今日と昨日の分明日思いつきりかまってやるから許せ、息子よ

俺達は人里の雑貨屋や甘味屋、色々な場所を回っていると次第に日も暮れてきて辺りも暗くなり家に飾られている電飾や灯りが人里を照らし始める。そんな時に視界に白い粒が映り上を見上げると雪が降り始めていた

「雪、か」

「ホワイトクリスマスね。柄じゃないけどロマンチックに感じるわ」

「ああ、そうだな。それに、永琳の姿を雪が映えさせてくれるから一段と綺麗だよ。惚

れ直すくらいに」

「あら、それじゃあさつきまでは私への恋心も冷めてたの？」

俺の言葉に永琳は頬を赤く染めながら皮肉っぽい質問をしてくる。この一年ですっかりこういうことへの耐性が付いたな。あの慌てふためいてた頃の可愛かった永琳が懐かしい。まあ、今も十分可愛いところがあるし問題は無いけど

「そんなことないさ。ただ今さつき俺の中の好感度の上限が振りきれたんだよ」

「ふふ、それなら安心したわ」

永琳が少し笑ってそう言うのと俺達はまた歩きだし人里の中央に設置された五m程のクリスマスツリー前に着いた

「クリスマスツリー……あの妖怪の賢者が持ってきたのかしら？」

「ああ、なんでも萃香に木の調達を、にとり達やこーりんに電飾や飾りを頼んで作つたらしいぜ。つと、それより永琳、ここでお前に渡す物があるんだ」

俺は懐から細長い箱を取り出し永琳に差し出す

永琳はそれを受け取ると少し期待するような顔をしながら箱を開ける

「水晶型のネックレス、中には星と月……綺麗ね。ありがとう、紀斗」

「気に入ってもらえたなら良かったよ。去年はあんまりいいクリスマスプレゼントを渡せなかったからな。今年こそはって準備しといたんだ」

「そうだったの。ねえ、これ、付けてもらえる？」

「おう」

俺は永琳の首の後ろに手を回しネックレスを付けるとそのまま永琳と見つめ合う

「永琳、メリークリスマス」

「ええ、メリークリスマス、紀斗」

俺達はそのまま顔を近づけ唇を重ねた。

こうしてまた一つ、俺の中の最高の思い出が増えた

交差幕 運命の切り札な半人半霊

青い空、白いタイル張りの地面、広がるビル街にスタジアム、普通なら親子連れやカップルなど様々な人が行き交いそうなその場所には俺以外に誰も居らず鳥や虫すらも見当たらない

そんなまるで世界の人間が全ていなくなってしまったような存在自体が歪な場所であれ俺は一人今回呼んだ人物を待っていた

「……来たか」

銀色のオーロラが俺の前に現れそこから緑色のベストとスカートを着た腰と背中に一振りずつ剣をさした銀髪ของセミロングの少女、仮面幻想郷の魂魄 妖夢が現れる

「今回のバトルフィールドにようこそ、仮面幻想郷の妖夢。戦えるのを今か今かと待っていたよ」

「私も貴方と戦えるのを楽しみにしていましたよ。しかし驚きました、まさか擬似的とないえ世界を作るなんて」

そう、ここは、いや、この俺と妖夢がいるこの世界は俺の世界に隣接した所に作った仮面ライダーに出てきた戦闘で使った場所だけで出来た世界だ。その為この世界には

生物は存在せずこの世界自体の寿命も数日のみと短い。言うなれば擬似世界と言えるこの世界ならそう簡単に壊れないうえに邪魔も入らない

「流石に世界自体を再現しながら創るのは骨が折れたよ。丸一日かかったうえに少しでも集中が途切れれば途中で崩れるんだから。精神力もかなり持つてかれたしな」

「普通模擬戦をする為だけに世界一つ創るなんてありえませんよ。そちらの世界のとりさんに戦闘出来るフィールドを作りだす機械でも作ってもらったらよかつたじゃないですか」

俺は妖夢の質問に苦笑いで答える

「いや、な、その、仮面幻想郷の戦士達つて他の世界の奴らと比べてレベルが違い過ぎるだろ？それこそそつちの世界のにとりが作ったフィールドくらいなきやすぐ壊れちゃうと思うつてこの世界を創つたんだ。もし壊して修理代請求されたら俺の小遣いが何ヶ月分もパーになつちまうし……」

ああ……とこちらを少し申し訳なさそうな視線で見る妖夢を尻目に俺は自分の手にエンジンブレードを出現させ肩に担ぐ

「まあ、世間話もそこそこに……。そろそろ始めようか」

「そうですね。私もそろそろ、暴れたくなつてきました」

妖夢も好戦的な笑みを見せ腰の楼観剣を抜き構える

俺もそれに応じる形でエンジンブレードをもう一本出し両手に一本ずつ持ち二刀流の構えをとる

俺達は動かさず睨み合い場は膠着する

……流石仮面幻想郷の妖夢だ、まったく隙が無い。今踏み込んだらその時点で俺の首が飛ぶな。まあ、隙が無いなら作るだけだ

俺は妖夢の真上にライジングタイタンソードを剣先が下を向いた状態で出す

重力に従い落ちてくるライジングタイタンソードに妖夢が気がついて楼観剣を上には振り上げた今！

「フッ！」

「甘い！」

俺は妖夢の腹に斬りかかったが妖夢はライジングタイタンソードを弾いた勢いのまま俺の脇腹を楼観剣で斬りつけようとする

俺はエンジンブレードを逆手に持つことで迫る楼観剣と自分の脇腹の間にエンジンブレードのを滑りこませ刃の直撃を避ける。更に刃とは反対方向に跳ぶことで衝撃を少しでも緩和させようとするが全ては殺しきれず2m程飛ばされた

『ENGINE ELECTRIC』

俺はエンジンブレード二本のカートリッジにエンジンメモリを出現させる形で挿し

込みエレクトリックを発動させエンジンブレードの刃に電気を纏わせる

俺は駆け出すと同時に左手のエンジンブレードを妖夢の足元に投げる。するとエンジンブレードに帯電していた電気が周りに放電し妖夢もその電撃に当たる。これで麻痺して少しでも動きが鈍ってくれたら御の字なんだが……

「今の私に電気で攻撃とは……限りなく悪手ですよそれは！二刀流【雷神剣】！」
「チツ！やっぱ駄目か！」

本来自分に雷撃を落とさせその電気を使つて楼観剣と白楼剣から雷撃波による攻撃をしてくる剣技、雷神剣。それを妖夢は俺のエレクトリックの電気を使つて出してきた

俺は俺に迫る二つの雷撃波の前に鉄骨を出現させそれを身代わりに一度距離を取る

俺は持っていたエンジンブレードを消すと次はロシユオの大剣と烈火大斬刀を両手に持ち烈火大斬刀に炎を纏わせると再び妖夢へと駆け出す

ロシユオの大剣による振り下ろしを妖夢は白楼剣で受け流し受け流され標的から躲されたロシユオの大剣は地面を割る。俺は即座に地面に刺さったロシユオの大剣を地面に刺さったまま妖夢へと叩きつけようする

妖夢は後ろに跳んで避けるがロシユオの大剣によつて抉られたコンクリートの瓦礫が砕けることで数を増やし妖夢へと飛んでいく

「剣技【桜花神速】」

妖夢は白楼剣を仕舞うと楼観剣に桜の花びらのような妖力を纏わせ楼観剣のみで高速の連撃を飛んできたコンクリートの塊を浴びせコンクリートの塊は一つ残らず塵となる

それと同時に妖夢の真後ろにヴァルゴ・ゾディアーツの能力でワープした俺はロシユオの大剣と烈火大斬刀で同時に妖夢へ突きを放つ

「神速カウンター！」

しかし妖夢は横に跳んで避け更にマルスに習ったという白楼剣による神速のカウンターでロシユオの大剣を斬り裂いてきた。完全に不意打ちだった筈なのに自信無くしそうだよちくししよう！

「やってくれるぜ！」

俺は柄だけになったロシユオの大剣を消し炎を纏った烈火大斬刀を全力で妖夢目掛けて振るう。それによって発生した太い炎の斬撃と熱風が妖夢へ迫るが妖夢は上へ飛ぶ。それと同時に楼観剣も抜くと両手の刀を上投げる。そして空中で錐揉み回転をしながらそれをキャッチ、その勢いで振り下ろしてきた

「二大・天・空！」

「うおらあああああ!!」

妖夢の二大・天・空と俺の烈火大斬刀がぶつかり合い火花が散る。くっそ！上からの

攻撃の分威力が高いとはいえ重すぎるだろこの一撃！だが、生身の女の子相手に力負けしたら、男が廃る！こん………！！

「ちくしょうがああああ!!」

「なっ!？」

バキン！

金属が折れる音がしたと思ったら俺の烈火大斬刀は木っ端微塵に砕け先程のロシユオの大剣と同じように柄だけになってしまった。だが妖夢は俺と離れた位置に吹き飛ばされ近くの電灯にぶつかってしまったようだ。どうやら俺が妖夢を吹き飛ばしたと同時に烈火大斬刀が砕けちまったみたいだな……

「くっ、なんて馬鹿力してるんですか。二大・天・空を真正面からましてや生身の状態の筋力で破るなんて」

「あー、蓬莱人の特性の不死の恩恵っていうのかな。筋トレや修行で切れた筋繊維がすぐ治っちゃうだろ？そして栄養を取ってればすぐに強く補強される、その繰り返しでたった二年でここまで力が強くなっちゃったんだよ。おかげで修行前に必ずプロテイン飲まなきゃならなくなったがな」

「そーいやこの前ガメルの完全態とも腕相撲して勝てたな、と俺が呟くと明らかに妖夢の口が引きつっていた。仮面幻想郷にも絶対同じことできる奴が複数いるだろうに

……解せぬ

「いや、私もあまり人のこと言えないっていうのは自覚してますけど貴方も大概人外染みてきましたよね」

「確かに蓬莱人になるって決めた時から自分が人間離れするのは予想してたけどな。まあ、うちの姫様も全然動かないのに金閣寺の一枚天井振り回すくらいの怪力は持つてるしこれくらい普通だろ」

（この人も大概思考がぶっ飛んでるなあ……）

「ま、俺も生身じゃ勝てそうにないからな。そろそろ変身させてもらうぜ。変身！」

『TURN UP』

俺はヘラクレスオオカブトの絵が描かれたスペードのAのラウズカードを入れたバックル、ブレイバックルを腰に着けるとバックルの横からカードが展開され俺の腰を一周するとベルトになる。そしてバックルのレバーを引くとバックルが回転しスペードのマークにひっくり返りそこからスペードのAと同じ絵が描かれた青い光の壁が現れそれを通り抜けると俺は西洋騎士を彷彿とさせるスペードとヘラクレスオオカブトをモチーフにした仮面ライダー、ブレイドに変身する

「目には目を、ブレイドにはブレイドをつてな。それと」

俺は更に幅が厚くなった特殊なラウズアブゾーバーを左腕に付けるとそこへ四枚のQのカードを入れていく

『Spade Queen, Dia Queen, Heart Queen, Club Queen, Four Absorb』

これで俺の身体はアンデッドと融合する準備ができた。このフォームを使う時はQ一枚じゃ足りないから面倒なんだ。続いて俺が出したのは四枚のKのカードとジョーカー、俺はそれを次々にラウズアブゾーバーに読み込ませていく

『Spade King, Dia King, Heart King, Club King, Joker』

『Revolution』

俺《ブレイド》の身体は黄金に光輝くブレイド キングフォームになると胸の青いスペードのマークに重なるようにダイヤ、クラブ、ハートそしてラウズカードのジョーカーのマークが現れそれが一つずつ俺の中に入ってくる毎に俺の身体は金色から黒へと変わっていく。ジョーカーのマークも入った時には俺の身体は完全に黒く染まり目だけはキングフォームの時と同じように赤く光っている。その姿もみるみるうちに変わっていき右腕からはジョーカーの禍々しい鎌が突き出て他の四肢も四角形の盾を模した黒い装甲に覆われ身体のアンデッドクレストはスペードのJ、Q、K以外がそれぞれ

れダイヤ、ハート、クラブのJ、Q、Kとジョーカーのマークへと変わる。顔の側頭部のアーマーは後ろに折れ曲がりその先は更に鋭くなっている

「……その姿は？」

「俺の新しい力の一つ、仮面ライダーブレイド レボリユーションフォームだ」

——トランプの中には大富豪というゲームがある。出されたカードの数字より高い数字のカードを出したり同じ数字を二〜三枚出したりして誰が先になるか競うというゲームだ。その中で同じカードを四枚、もしくはジョーカーを入れた5枚を出した場合の手を革命《revolution》と言う——

「このフォームは自分より実力が上の強者に対する叛逆、革命を起こす為の力だ。一人一人の王では敵わぬ敵を倒す為に四人の王とジョーカーの力が一つになった姿、それがこれだ」

「革命を起こそうとした輝針城異変を解決した貴方がその力を手に入れたというのなんだか皮肉ですね」

「言わないでくれ。自覚はしてるから」

「そちらがそこまでの力を使うなら、私も使わせてもらいますよ。仮面符【切り札の醒剣《ブレイド》】」

『ターンアップ』

妖夢は緑の服は蒼く染まって動きやすそうな銀の装甲が装備され、瞳は赤くなり髪は一部が蒼くなってブレイドの仮面のような形のアクセサリーが付けられたライダー少女 ブレイドへと変身し更にラウズアブゾーバーを装備しQとジョーカーのカードを取り出す

『アブソーブクイーン』

『ジョーカー』

妖夢はラウズアブゾーバーにジョーカーのカードを読み込ませると蒼いジョーカーアンデットともいうべき装甲が付けられ、右肩にスペードの紋章が、左肩にハートの紋章が、右膝にダイヤの紋章が、左膝にクラブの紋章が、ベルトはカリスの物が蒼く変化したものになって銀髪は黒く染まり、顔の右半分を砕けた仮面ライダーブレイドの仮面で隠れたジョーカーフォームへと姿を変えた

「さて、俺のフォームとそちらのフォーム、どちらの方が強いかな？」

「そんなこと、斬ってみればわかります」

「ふっ、そりゃ、そうだ！」

俺の黒いキングラウザーと妖夢のキングラウザーがぶつかり合い周りの物がその衝撃の余波で吹き飛ば

『ジェミニ』

『サンダー、トルネード、ファイヤ、ブリザード、エボリューション』

『フォーカード』

『スピード10、スピードジャック、スピードクイーン、スピードキング、スピードエース』

『ロイヤルストレートフラッシュ』

『四重奏【桜花王斬】』

『王剣【黄金妖々懺】』

一度距離を取ると妖夢はジェミニで二人に分身し片方は属性系のラウズカード四枚とエボリューションを入れたフォーカード、もう片方はスピード10とKのロイヤルストレートフラッシュを発動させてきやがった。おいおい、第二ラウンド最初からクライマックス過ぎるだろ

『Gemini』

俺も同様にジェミニを使い二人に分身すると片方の俺はブレイドのキングラウザーではなく1mはある巨大な銃(S・I・Cのギャレン キングフォームが持っている銃の黒いverです)ギャレンキングラウザーを持ちそれにラウズカードを入れていく

『Thunder, Tornado, Fire, Blizzard, Evolution』

『Four Card』

『Dialo, Dia Jack, Dia Queen, Dia King, Dia Ace』

『Royal Straight Flash』

俺は妖夢と同じフオーカードを、もう一人のギャレンキングラウザーを持った俺はダイヤのロイヤルストレートフラッシュを発動させる

俺と妖夢の四つの属性を纏わせたキングラウザーがぶつかり合う。それと同時にギャレンキングラウザーを持った俺の前にダイヤの10とAまでのカードの姿のエネルギーギアが、妖夢の目の前にはスペードの10とAまでのカードの姿のエネルギーギアが現れる。ギャレンキングラウザーの引き鉄を引くとギャレンキングラウザーの銃口からエネルギー弾が放たれカードの姿のエネルギーギアを通過する度大きくなっていく。妖夢もキングラウザーからエネルギー弾を放ちこちらと同じようにそれはカード状のエネルギーギアを通過する度大きくなっていく

「うおおおおお!!」

「ウエエエエエ!!」

「おらああああ!!」

「ウエイヤアアア!!」

二つの斬撃と二つのエネルギーはぶつかり合う。その衝撃は凄まじく地面はどんどん抉れていき周りの物なんて塵と化していく。そしてぶつかり合っていた中心点で爆発が起こり俺も妖夢も吹き飛ばされ分身が消える

そして二人のいる場所も変わりスタジアムから周りが木に囲まれた森の中となる

「くっ、場所が、変わった?」

「はあ、はあ、言つたろ。ここは戦闘に使われた場所を再現して繋ぎ合わせた世界。大きく移動すればまったく違う所に出るのさ」

「そうなんです、か!」

「ぬおっ!」

妖夢め、会話の途中でギャレンラウザーを撃ってくるとはな。咄嗟にワイルドカリスのワイルドスラッシャーで弾かなければ撃たれた隙に一瞬で詰め寄せられ斬られてたぜ

「やはり武器の質はキングラウザー以外も使える分そちらの方が上ですか」

「その分そつちは剣術やスピードがこつちより上なんだからお相子だろ?それに勝負は武器の質で決まるものじゃない」

「それもそうですね!」

今度は片手にブレイラウザー、もう片方の手にキングラウザーを持って斬りかかって

きたか。俺は黒いワイルドスラッシュャーを醒鎌モードのまま両手に持ち受けてたつ

「ウエイ！ウエイ！ウエエエイ!!」

「ふっ！はあっ！らあっ！」

鋭い連撃を繰り出してくるが俺も負けてはいられない。キングラウザーに比べ破壊力は劣るが小回りが利くワイルドスラッシュャーでブレイラウザーでの攻撃を防ぎキングラウザーでの攻撃をいなしていく

（おかしい……さつきより武器の扱いや鋭さが増している？さつきまでは全力を出していなかった？いや、さつきまでは確実に全力できていた筈です。ということはこの短時間で成長している？でもそれこそ異常だ、たった数分で我流の剣術から私の剣のスピードについてくる程になるなんてありえない）

「俺の技術が上がってることが不思議か？」

「っ！」

俺の一言に妖夢は後ろに跳び退き武器を構えたままこちらを睨んでいる

「そのフォームの力ですか？」

「ご名答、さつきも言った通りこのフォームは自分よりも強い相手に対し使うフォームだ。つまり相手よりも確実に強くなるフォーム、例えそれがパワーでもテクニクでもスピードでもな」

「なっ!? そんなの反則じゃないですか! こちらの世界のメンバーとも戦える程のチートですよそれ!」

俺の説明に妖夢も声をあげ驚く。けどどうまい話にはそれに値する程の代償が必要なのも世の常だ

「もちろんデメリットもある。それは相手が強ければ強い程自分のアンデッド化が早くなることだ。変身しただけでも毎秒アンデッド化が進むんだ。それが更に早くなる。本来なら三分と待たずにアンデッドになっちまうだろうよ」

「まさか、それを蓬莱人の特性で防いでいるんですか?」

「ああ、アンデッド化しているところから破壊して蓬莱人の身体として再生している。おかげで俺の身体はこのレボリユーションフォームの中で破壊と再生を繰り返してるんだ。痛いなんてレベルじゃねえよちくしょう」

このフォームの代償に妖夢も顔を少し青くする。こっちもこんな軽口たたいてるが痛みで叫びたくてしょうがない。アイアンメイデンなんて目じゃないレベルの拷問だよほんとこれ

「そこまでの代償を知っていて何故使ったんですか? 倒さなければいけない敵との戦闘ならまだしも命をかける必要のないこの模擬戦で」

「俺自身のつまらない意地だよ。キングフォームじゃあ俺が負けるのは目に見えてた。

だから勝つ為にこのフォームを使った。負けず嫌いなんだよ、俺は」

「はあ……貴方もあれですか。頭はいいけどバカつてやつですか。そんなんじや妻の永琳さんも心配するわけですよ」

「耳が痛いな。まあ、そろそろ俺も我慢がきかなくなりそうだ。勝負を終わらせるとしようか」

「わかりました。ならラストはこちらも全力で繰り出しますよ」

俺と妖夢は互いにキングラウザーを構えると五枚のカードを取り出しキングラウザーへ入れていく

『Spade King、Dia King、Club King、Heart King、Joker』

『Five Card』

『スペード10、スペードジャック、スペードクイーン、スペードキング、スペードエース』

『ロイヤルストレートフラッシュ』

「王剣【黄金妖々懺】！」

俺と妖夢の目の前に五つのカード状のエネルギーが現れる。妖夢の前に現れたのは先程と同じ金色のスペードの10とAのカード状のエネルギー。対して俺の前に現れ

たのは蒼のスペードのK、赤のダイヤのK、緑のクラブのK、ピンクのハートのK、黒のジョーカーのカード状のエネルギー

五枚目のカード同士の間は3m程度、どちらか攻撃を避けられるか当てられた方が負ける。スピードとテクニクの勝負、普通なら勝率は0に等しいがレボリューションフォームで底上げされている今なら50%くらいには上げられる！

俺と妖夢が動き出したのはほぼ同時！このタイミングなら！

「プラス・剣技【桜花閃々】！」

「っ!？」

五枚目を抜け互いのキングラウザーに力が溜まりきった瞬間妖夢は一瞬で俺の目の前まで移動し桜の花びらと共に抜刀するかのようキングラウザーを振るってきた。まずい！マツハを使っても間に合わない！

瞬間レボリューションフォームの能力が発動し俺の身体は妖夢の攻撃に反応できた。だが代償のアンデッド化のスピードが早まったことでさっきまでより倍近い痛みが身体中に走る。だがその程度のことだ俺は止まらない、止まるわけにはいかない。俺だつてまだまだ強くならなくちゃいけないんだ！今の俺の実力じゃあ護りたいものも護れねえから！だからこそ！この程度のレベルで満足してる暇はない！

無理やりスピードを上げ妖夢のキングラウザーにぶち当て俺のキングラウザーが唸

りを上げる。暗い虹色のオーラを纏う俺のキングラウザーは金色のオーラと桜の花びらのような妖夢の妖力を纏った妖夢のキングラウザーと衝突し拮抗する

「はああああああああ!!」

「うおおおおおおお!!」

確かに桜花閃々の勢いと妖力も追加されて先程よりもロイヤルストレートフラッシュの威力は増してる。だが!それでも!俺の方が、上だああああ!!

「おおおおらああああ!!」

「ぐっ!ああああ!!」

俺のファイブカードが妖夢のロイヤルストレートフラッシュを押し返し妖夢を吹き飛ばした。妖夢は近くの木にぶつかるとしても勢いは止まらず数本木を折り五本目程でようやく止まり変身が解けた

「はあ、はあ、がふっ!」

俺もベルトを外し変身を解くが吐血し地に膝をつく。やつぱかなりしんどいな、これからはもつと切羽詰まった時にだけ使おう。じやなきや俺の精神がもたない
「おーい、妖夢、だいじよぶか?」

フラフラとした千鳥足のような危ない足取りで妖夢の元まで歩き近くの木に寄りか

かりながら怪我の具合を聞く

「割とキツイですよ……。頭打ったせいか少しクラクラしますし」

「そりゃ悪かったな。待ってろ、すぐ回復させる。ふうっ！」

なけなしの精神力を使い戦闘や修行の後によくお世話になってるアクエリアスのホロスコープスイッチを出しスイッチを押すと両肩に水瓶が装備した水瓶座のホロスコープス、アクエリアスゾディアーツに変身する

そして両肩の水瓶から水が飛び出すとそれは妖夢の身体を包み込み身体中の怪我を一瞬で回復させる。そして次に俺自身も回復させ再生中だった臓器を回復させる。再生してる途中でも痛いものは痛いからな

「ふう、楽になりました。ありがとうございます」

「いやいや、元はと言えば俺がつけた傷だしな。それにあのまま帰したらそっちの幽々子さんやメタナイト達に微塵切りにされちゃうよ」

しばらく休み精神力を回復させた俺は仮面幻想郷へのオーロラを出現させ妖夢と別れの挨拶をする

「今回は俺の方でもいい経験だった。ありがとうよ」

「いえ、こちらこそ本気を出してもらってありがとうございます。やっぱり強者と斬り合ってこそつかめるものがありますからね！」

「ははは、お前もあまり俺のこと言えないくらい脳筋だな」

「みよん!？」

「ああ、それとこれは俺の作った料理の詰め合わせだ。幽々子さん達と食ってくれ」

「重箱十段分も……! ありがとうございます。きつと幽々子様も喜びますよ。それでは、本日はありがとうございます。また模擬戦しましょう。今度は負けませんよ」

「また、俺が勝ち越させてもらうさ。それじゃあな」

そうして妖夢は銀色のオーロラを通って仮面幻想郷へと帰っていった。そして俺も気を緩めると突然地面があちこち割れはじめ崩壊していく

「あー、あの戦闘でダメージ受けすぎてたか。ま、即興で作った割にはよく保った方だよ。なこの世界も。さて、完全に壊れる前にとつと帰るか」

俺もすぐに自分の世界へ通じるオーロラを出すとそれを通り崩壊する擬似世界を後にするのだった